ナホノブ　直信　立川金之介と稱す江戸の刀匠にして安政年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ナホノブ　直信　赤間鑄吉と稱す出羽米澤の刀匠にして嘉永年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ナホノブ　直信　備中の刀匠にして建武年間の人なり或は云ふ正和比の人にして青江に住すと（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ナホノブ　直信「カノシヨウエイ」

ナホノブ　尙信「カノナホノブ」

ナホノブ　直久　裝劍彫工なり柳川直政の門人其名世に高し江戸に住す（裝劍奇賞）

ナホヒサ　直久　長心子と號す伊勢山田の刀匠にして嘉永元治年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ナホヒサ　直久　備前の刀匠にして初代國眞の子なり暦仁年間の人或は云ふ二世國眞の子にして弘長文永年間の人なりと又云ふ直宗の流にして貞永比の人なりと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考）

ナホヒデ　直秀　庄司勝彌と稱す伊勢津藩の刀匠にして直勝の子安政元治年間の人江戸下谷に住すと（古今鍛冶銘早見出）

ナホヒデ　直秀　藤原姓大道と稱す本國美濃岐阜にして後丹後宮津に移る天正年間の人なり（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

二世直秀は寛永年間の人なり亦大阪に居ると云（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

三世直秀は攝津に住す延寶年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ナホヒト　シンソウ　直仁親王　東山天皇の子なり寶永七年八月特に親王に詔して一家を立てしめ宮邸の地を卜し閑院宮と稱す一品に叙せられ彈正尹に任じ三宮に准ぜらる後ち寶暦二年六月薨ず時に年五十なり謚して靈尼淨院と號す親王關白藤原基凞の女を納れて妃と爲す妃始子女王を生み外嬬寬義親王、典仁親王、榮子女王、寶子女王、幾子女王、倫子女王、鷹司輔平、八十子女王を生む（野史）

ナホヒロ　直廣　小林氏出羽米澤の刀匠にして元治年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ナホヒロ　直廣　或は同田貫宗廣と稱す豐後高田の刀匠にして嘉永年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ナホヒロ　直廣　藤原姓大和守と稱す新刀の作者にして年代住地詳ならず或は尾張の人なりと云（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ナホヒロ　直弘　直道の子にして江戸市ヶ谷鷹匠町に住す元治年間の刀匠なり（古今鍛冶銘早見出）

ナホヒロ　直弘　越後小谷の刀匠にして山口直吉の門人元治年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ナホフサ　直房　藤原姓大道と稱す但馬大掾に拜す美濃岐阜の刀匠にして後丹後出邊に住す寬永寬文年間の人なり（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ナホマサ　直正　攝津古刀の作者なり或は云ふ天正年間の人と（古今鍛冶銘早見出）

ナホマサ　直正　宮崎氏慶心齋と號す陸奥相馬氏の士にして中村に住す慶應元年正月從五位下越前守に拜す治刀の衛を庄司美濃介直胤に受く安政元治年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ナホマサ　直正　備前の刀匠にして康暦年間の人なり或は云ふ長船に住すと（古今鍛冶銘早見出）

ナホマサ　直正　檜善六と稱す伊勢小松の刀匠にして安政元治年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ナホマサ　直政「ヤナガハナホマサ」

ナホマサ　直道　後兼道と改む美濃岐阜氏三品左兵衛介と稱す因幡の刀匠にして初代直道六世の孫なり天明中濱部壽格の武藏江戸に移り住す始め難波介直格と稱し後ち攝津の刀匠三品貞右衛門直次の子なり攝津大阪に住す刀銘に菊一文字若くは藥草を鏤す云寬文年間の人なり（古今鍛冶備考）

ナホミチ　直道　源姓三品左兵衛と稱す本國山城伏見にして初代直道六世の孫なり天明中濱部壽格の門人となり武藏江戸に移り住す始め難波介直格と稱し寬政三年直道に改むと云（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ナホミチ　直道　三品左兵衛介と稱す因幡の刀匠にして文政元治年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ナホミチ　直道　攝津の刀匠三品貞右衛門直次の子なり攝津大阪に住す安政元治年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ナホミチ　直道　紀伊の刀匠文珠四郎三世の孫吉兵衛と稱す丹後守に拜す京都の刀匠二世丹波の第二子なり攝津大阪に居る安政元治年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ナホミツ　直光　金工なり入道して宗圓と云ふ奥州の人姓は石田氏文化五年七十六にて歿す

ナホミツ　直光　細田平二郎と稱す江戸の刀匠にして下谷に住す安政元治年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ナホミツ　直光　備前長船の刀匠にして應永年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ナホミツ　直光　備前長船の刀匠にして享德年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ナホミツ　尙光　備前長船の刀匠にして應永年間の人なり或は云ふ直宗の流にして應安比の人なりと（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ナホミツ　尙光　豐後高田の刀匠にして寬文年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ナホムネ　直宗　來氏山城の刀匠にして文明年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ナホムネ　直宗　大和の刀匠にして元亨年間の人なり或は云ふ應長比の人なり或は菅永と同人なりと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

ナホムネ　直宗　大和千手院派の刀匠にして應永年間の人なり或は云正長比の人と（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考）

ナホムネ　直宗　尾張名古屋の刀匠にして直道の子嘉永年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ナホムネ　直宗　松崎犀太と稱す出羽山形藩の刀匠にして江戸京橋に住す文政弘化年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ナホムネ　直宗　備前の刀匠にして一流の祖なり元暦年間の人なり或は云備前太夫直家の子にして建久比の人或は承安比の人又は嘉保比の人にして權頭に拜すと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考）

ナホムネ　直宗　亦尙宗に作る備前の刀匠にして直宗の末建武年間の人なり（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ナホムネ　直宗　豐前の刀匠にして應永年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ナホムネ　直宗　中四氏豐前中津藩の冶工にして天保弘化年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ナホムネ　尙宗　備前の刀匠直宗の末流直宗を看よ

ナホムラ　アキフサ　直村昭房　石州流の茶人なり朽木桐貞に仕ふ閑右衛門と稱し閑悅後に尙幼齋と號し一に暫時庵と曰ふ初め森勝見に從ひ後同藩の士近藤政房に學び茶式に通ず（古今茶人系譜）

ナホモト　直舊「ヨザキナホモト」

ナホモト　直元　下坂氏京都の刀匠にして天和年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ナホモリ　直守　古刀の作者にして石見の人なり或は云享德年間の人と（古今鍛冶銘早見出）

ナホモリ　直守　平姓豐後古刀の作者なり或は云ふ高田に住す天文年間の人と（古今鍛冶銘早見出）

ナホモリ　直盛　平姓豐後高田の刀匠にして文龜年間の人なり或は云盛忠の子にして天文比の人なりと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

ナホヤス　直安「イハマセイロ」

ナホユキ　直行「キノシタロシウ」

ナホユキ　直行　備後の刀匠にして五岡彌と稱す古刀の作者なり（古今鍛冶銘早見出）

ナホユキ　直行　鬼鏡氏大和守に拜す豐後の刀匠本行の二子にして尙行の養子元文寶暦年間の人なり晩年有徹と號す（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ナホユキ　直行　荒井貞五郎と稱し雲龍子と號す文政安政年間の刀匠なり（古今鍛冶銘早見出）

ナホユキ　直之　波揚皆吉と稱す信濃松本の刀匠にして嘉永元治年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ナホユキ　尙行　藤原姓豐後高田の刀匠にして紀行平の裔孫なり延寶中肥前唐津に移住す直行の養父なり（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ナホヨシ　直好「サノナホヨシ」

ナホヨシ　直吉　山口徹彌太と稱し泉心子と號す江戸の刀匠にして根津に住す嘉永中常陸に住す（古今鍛冶銘早見出）

ナホヨシ　直吉　富田兵衛尉と稱す丹後宮津の刀匠にして天文年間の人なり（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ナホヨシ　直吉　伯耆の刀匠にして成近の子なり永年間の人（古今鍛冶銘早見出）

ナホヨシ　直吉　備前の刀匠にして正元年間の人なり或は云直宗の流にして正嘉比の人なりと又云直久の子にして永仁比の人或は貞永比の人なりと（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考）

ナホヨシ　直義　山口胤彌と稱す三河學母の刀匠にして嘉永元治年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ナホヨシ　直能　山城の刀匠にして了戒と稱す永正年間の人なり或は云ふ了戒直能と稱し豐前豐後兩國に住す永正比の人なり又云豐後了戒派の刀匠にして能定の子應安比の人或は能眞の子にして應永年間の人なりと（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ナホヨシ　直美　稗田源七と稱す上總東金の刀匠にして文政嘉永年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ナホヨネ　直米　石見長濱の刀匠にして天文年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ナマヅエ　マタイチラウ　鯰江又市郎　元龜元年中の角力者なり同元年二月二十五日織田信長江州常樂寺に著し翌日より國中の角力者を聚めて其技を較せしむ又市郎之に與かり百濟寺鹿、同小鹿、宮居眼左衛門、青地與右衛門等と最も逢衝の名を得故中鯰江青地の二人は大小刀を賜はり出仕を命ぜらる（織田軍記）

ナミカハ　セイシヨ　並河誠所　儒者なり名は永字は宗永後ち尙永に改む誠所は其の號、五一郎と稱す儉齋の長子、天民の兄、天民と共に伊藤仁齋に學び掛川川越の城主に歷任す既にして去りて江戸に居り教授を以て業とす學安博を勉む經史老釋諸子より以て本邦の兵法和歌文武の諸技に至るまで究通せざるなし後權を豆州三島に構へて之に居り常に國朝未だ地誌あらざるを慨き友人關祖衡と相謀りて之を撰ず而して享保三年四月八日病歿するを以て志を果さず識者之を惜む時に年四十嘗て門人に語て曰く凡そ天祖衡河内史を草して死す誠所獨り此業を纖ぎ先づ五畿志を草す享保中官の許可を得て五畿内を歷廻し古蹟名境を探り出入六年にして奥地遐志中畿内の部六十一卷成る之を幕府に獻ず凡そ畿内禮典に獻する所の神祠陵墳の或は廢絶し或は淫名を受けて識るべからざるもの發明する所多し業後りて三島に歸る元文三年三月十日歿す年七十一著はす所前書の外に中臣祓旁訓あり多病にして嗣なし（事實文編）

ナミカハ　テンミン　並河天民　儒者なり名は亮字は簡亮、平安の人、儉齋の子、誠所の弟、少き時兄誠所と共に伊藤仁齋に學び齋く其の說を究む然れども其の仁義性情の說に於ては疑なき能はず是に於て奮然憤發日夜研究して孔孟の旨を得んと欲し是を應事接物の際に察し之を起居語默の時に觀る實地に就て商量し初めて其の解を得其の言に曰く四端の心は即ち仁義禮智、仁義禮智は即ち四端、四端の外更に仁義なし其の生と俱に生ずるよりして之を言へば即ち之を性と云ふ其の情實僞りなきよりして之を謂へば則ち之を情と云ふ其の思を以て職とするより之を言へば之を心と謂ふ其の實は一なり然るに學者必ず其の孰れか心たり孰れか性たり又た情たるを指示せんと欲するは何ぞ思はざるの甚だしきやと然れども終身仁齋の恩を遺れず伊藤仁齋歿するに及びて其の徒分れて二となる一は東涯に從ひ一は天民に隱す天民天寶開期果斷、志氣豪邁、居常經世の大體を講究し致治の要道を討論するに皆之を語孟尙書に原づき以て聖人の大業大法を發露す其の尙書を解くや曰く蔡氏の集傳七分を解得す王耕野の讀書管見は發明する所多し王魯齋の書疑は錯簡を考定して文理稍〻順妥を覺ゆ唯〻其の意を斟酌して以て之を國家に施すの法に至りては余竊かに諸君に讓らずと常に經濟を以て心とし每に聽し說吾猶人也、必也使し無し訴乎及び如有二用し我者吾其爲東周乎等の教語を稱して曰く是れ聖人才德の本領なりと奮然以て己が任とす晉て上疏して蝦夷地方を以て內國とせんと欲す而して享保三年四月八日病歿するを以て志を果さず識者之を惜む時に年四十嘗て門人に語て曰く凡そ天下の事皆名を以て實を責む故に名は愼しまざるべからず苦れ經典を講ずと雖も村夫子の稱を得るを欲せず若し名榜を揭げば吾れ天民と謂ふもの乎と故に門人私謚して天民と云ふ嘗て古學を好み問奚錄一篇を著はす又た兵書を好み能く軍機を云ふ後ち醫方を嗜み本草を窮め專ら仲景を宗とす勞ち百家の奇方妙劑に至るまで搜求せざるなし常に曰く我が邦の儒流は必らずしも恒祿なし宜しく醫を兼ぬべし自ら儒を以て自ら處らば衣食

政は給せずして終に其の志を固うする能はずと兼て儒學に通じ善く倭文を屬す著はす所天民遺言、松山唔語、かたそぎの記あり（野史、近世叢語、先哲叢談、皇國名醫傳、近代名畫集彙、著述目錄）

ナミカハ　モトヒロ　並河基廣　歌人なり青蓮院の宮の御内人なり通稱式部御杖の門に入りて修學し其風の奥旨を得て徒に授く天保十二年十一月二日歿す年九十二（鑒定便覽）

ナミカハ　ロザン　並河魯山　尾張の儒醫にして名は健字は德偕通稱自晦釣耕軒と號す父を芳庵といひ醫を以て名古屋藩に仕ふ魯山幼より儒に志し堀杏庵に學ぶ經史を博渉し藩洛の說を確信す易及び太極說に精し亦醫を善くす其名一時に嘖々たり陳元贇と唱酬す壯歲召されて藩の儒官となり眷顧甚だ渥し寶永七年十一月二十九日歿す年八十二（日本教育史資料）

ナミカヒ　浪貝　出雲の刀匠にして文龜年間の人なり清貞と同じ（古今鍛冶銘早見出）

ナミキ　ウマザウ　並木馬藏　陸軍歩兵少尉なり埼玉縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て後備役より召集せられ歩兵第三聯隊附として從軍中卅八年三月九日清國盛京省田義屯附近に於て戰死す戰功に依り勳七等功六級に叙せらる

ナミキ　ゴヘイ　並木五瓶　演劇作者なり大阪の人通稱は吾八並木正三の門人明和中江戸に下り始めて囘り舞臺の工風をなす文化五年二月二日江戸に歿す年六十三（作者小傳、浪華名家墓所集）

ナミキ　ゴヘイ　並木五瓶（二代目）　葛葉山人、萬壽亭、鳳凰軒等の別號あり元祿府旗下の士なり通稱は篠田金次初め並木宗六と號し後二代目五瓶を相續す文政二年七月二日歿す年五十二（作者小傳）

ナミキ　ゴヘイ　並木五瓶（三代目）　二代目の門人なり初並木惣六又た篠田金次と曰ふ江戸の人通稱因幡屋小半次後三代目五瓶を相續し安政三年七月歿す（作者小傳）

ナミキ　シャウゴラウ　並木正五郎　陸軍歩兵少尉なり千葉縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て近衛歩兵第四聯隊附として從軍中卅八年三月三日清國盛京省唐家屯東北方高地に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ナミキ　シャウザウ　並木正三　淨瑠璃作者なり通稱は和泉屋久太郎と稱す大阪道頓堀に住す父宇を書きたり來會者皆其の偉力に驚く同廿二年歿す年五十七（河鍋曉齋傳）

ナミキ　モトヒロ　並河基廣　歌人なり青蓮院の宮の御内人なり通稱式部御杖の門に入りて修學し其風の奥旨を得て徒に授く天保十二年十一月二日歿す年九十二（鑒定便覽）

ナミカハ　ソウスケ　並木宗輔　狂言作者なり市中庵と號し川柳又舍柳と曰ふ通稱は松屋宗介大阪の人四澤一鳳の門下なり享保の頃より佳作頻りに出で家聲日を逐ひて振ふ時に浪華に淨瑠璃座二座あり一を竹本と曰ひ一を豐竹と曰ふ近松竹田二氏は竹本にあり聲名藉く甚し一新曲出づるごとに喝采の聲市街に滿つ宗輔時に豐竹座にあり謂らく一人の知巧限りあり力を極めて之を爲すも以て人に越ゆるなけん衆智を聚め衆力を藉るにあらざれば以て情を盡すに足らずと乃ち同阪に返る寛延二年九月死す年五十七所作に聲氏將軍二代鑑、那須野與市西海硯、釜淵双巴、和泉國浮名溜池、一谷雙葉軍記等數十種あり（聲曲類纂、新評戲曲十種）

ナミキ　チョウスケ　並木丈助　狂言作者なり大阪の人にして宗輔の門に入り淨瑠璃及び歌舞伎狂言の作多し寛延二年三月十八日大阪市中に起りし三箇の事件を綴り廿日に外題を出し廿六日に初日を演ず題花名家墓所集）

ナミキ　ゴヘイ　並木五瓶（三代目）　葛葉山人、萬壽亭、鳳凰軒等の別號あり元祿府旗下の士なり通稱は篠田金次初め並木宗六と號し後二代目五瓶を相續す文政二年七月二日歿す年五十二（作者小傳）

ナミキ　ゴヘイ　並木五瓶（二代目）　葛葉山人、萬壽亭、鳳凰軒等の別號あり元祿府旗下の士なり通稱は篠田金次初め並木宗六と號し後二代目五瓶を相續す文政二年七月二日歿す年五十二（作者小傳）

ナミキ　ゴヘイ　並木五瓶　演劇作者なり大阪の人通稱は吾八並木正三の門人明和中江戸に下り始めて囘り舞臺の工風をなす文化五年二月二日江戸に歿す年六十三（作者小傳、浪華名家墓所集）

ナミキ　ゴヘイ　並木五瓶（二代目）　葛葉山人、萬壽亭、鳳凰軒等の別號あり元祿府旗下の士なり通稱は篠田金次初め並木宗六と號し後二代目五瓶を相續す文政二年七月二日歿す年五十二（作者小傳）

ナミキ　ゴヘイ　並木五瓶（三代目）　二代目の門人なり初並木惣六又た篠田金次と曰ふ江戸の人通稱因幡屋小半次後三代目五瓶を相續し安政三年七月歿す（作者小傳）

ナミキ　シャウゴラウ　並木正五郎　陸軍歩兵少尉なり千葉縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て近衛歩兵第四聯隊附として從軍中卅八年三月三日清國盛京省唐家屯東北方高地に於て戰死す戰功

ナミキ　シャウザウ　並木正三　淨瑠璃作者なり通稱は和泉屋久太郎と稱す大阪道頓堀に住す父宇を書きたり來會者皆其の偉力に驚く同廿二年歿す年五十七（河鍋曉齋傳）

ナミキ　ソウスケ　並木宗輔　狂言作者なり市中庵と號し川柳又舍柳と曰ふ通稱は松屋宗介大阪の人四澤一鳳の門下なり享保の頃より佳作頻りに出で家聲日を逐ひて振ふ時に浪華に淨瑠璃座二座あり一を竹本と曰ひ一を豐竹と曰ふ近松竹田二氏は竹本にあり聲名藉く甚し一新曲出づるごとに喝采の聲市街に滿つ宗輔時に豐竹座にあり謂らく一人の知巧限りあり力を極めて之を爲すも以て人に越ゆるなけん衆智を聚め衆力を藉るにあらざれば以て情を盡すに足らずと乃ち同阪に返る寛延二年九月死す年五十七所作に聲氏將軍二代鑑、那須野與市西海硯、釜淵双巴、和泉國浮名溜池、一谷雙葉軍記等數十種あり（聲曲類纂、新評戲曲十種）

ナミキ　チョウスケ　並木丈助　狂言作者なり大阪の人にして宗輔の門に入り淨瑠璃及び歌舞伎狂言の作多し寛延二年三月十八日大阪市中に起りし三箇の事件を綴り廿日に外題を出し廿六日に初日を演ず題花名家墓所集）

ナミコ　ゴヘイ　並木五瓶（三代目）　葛葉山人、萬壽亭、鳳凰軒等の別號あり元祿府旗下の士なり通稱は篠田金次初め並木宗六と號し後二代目五瓶を相續す文政二年七月二日歿す年五十二（作者小傳）

ナミコ　ゴヘイ　並木五瓶（二代目）　葛葉山人、萬壽亭、鳳凰軒等の別號あり元祿府旗下の士なり通稱は篠田金次初め並木宗六と號し後二代目五瓶を相續す文政二年七月二日歿す年五十二（作者小傳）

ナミキ　ゴヘイ　並木五瓶　演劇作者なり大阪の人通稱は吾八並木正三の門人明和中江戸に下り始めて囘り舞臺の工風をなす文化五年二月二日江戸に歿す年六十三（作者小傳、浪華名家墓所集）

ナミキ　ゴヘイ　並木五瓶（二代目）　葛葉山人、萬壽亭、鳳凰軒等の別號あり元祿府旗下の士なり通稱は篠田金次初め並木宗六と號し後二代目五瓶を相續す文政二年七月二日歿す年五十二（作者小傳）

ナミキ　ゴヘイ　並木五瓶（三代目）　二代目の門人なり初並木惣六又た篠田金次と曰ふ江戸の人通稱因幡屋小半次後三代目五瓶を相續し安政三年七月歿す（作者小傳）

ナミキ　シャウゴラウ　並木正五郎　陸軍歩兵少尉なり千葉縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て近衛歩兵第四聯隊附として從軍中卅八年三月三日清國盛京省唐家屯東北方高地に於て戰死す戰功

ナミキ　ザウ　並木宗輔　狂言作者なり通稱は和泉屋久太郎と稱す大阪道頓堀に住す父宇を書きたり來會者皆其の偉力に驚く同廿二年歿す年五十七（河鍋曉齋傳）

ナミキ　シャウザウ　並木正三　淨瑠璃作者なり通稱は和泉屋久太郎と稱す大阪道頓堀に住す父宇を書きたり來會者皆其の偉力に驚く同廿二年歿す年五十七（河鍋曉齋傳）

ナミキ　モトヒロ　並河基廣　歌人なり青蓮院の宮の御内人なり通稱式部御杖の門に入りて修學し其風の奥旨を得て徒に授く天保十二年十一月二日歿す年九十二（鑒定便覽）

ナミカハ　ロザン　並河魯山　尾張の儒醫にして名は健字は德偕通稱自晦釣耕軒と號す父を芳庵といひ醫を以て名古屋藩に仕ふ魯山幼より儒に志し堀杏庵に學ぶ經史を博渉し藩洛の說を確信す易及び太極說に精し亦醫を善くす其名一時に嘖々たり陳元贇と唱酬す壯歲召されて藩の儒官となり眷顧甚だ渥し寶永七年十一月二十九日歿す年八十二（日本教育史資料）

ナミカヒ　浪貝　出雲の刀匠にして文龜年間の人なり清貞と同じ（古今鍛冶銘早見出）

ナミキ　ウマザウ　並木馬藏　陸軍歩兵少尉なり埼玉縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て後備役より召集せられ歩兵第三聯隊附として從軍中卅八年三月九日清國盛京省田義屯附近に於て戰死す戰功に依り勳七等功六級に叙せらる

ナミキ　ゴヘイ　並木五瓶　演劇作者なり大阪の人通稱は吾八並木正三の門人明和中江戸に下り始めて囘り舞臺の工風をなす文化五年二月二日江戸に歿す年六十三（作者小傳、浪華名家墓所集）

ナミキ　ゴヘイ　並木五瓶（二代目）　葛葉山人、萬壽亭、鳳凰軒等の別號あり元祿府旗下の士なり通稱は篠田金次初め並木宗六と號し後二代目五瓶を相續す文政二年七月二日歿す年五十二（作者小傳）

ナミキ　ゴヘイ　並木五瓶（三代目）　二代目の門人なり初並木惣六又た篠田金次と曰ふ江戸の人通稱因幡屋小半次後三代目五瓶を相續し安政三年七月歿す（作者小傳）

ナミキ　シャウゴラウ　並木正五郎　陸軍歩兵少尉なり千葉縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て近衛歩兵第四聯隊附として從軍中卅八年三月三日清國盛京省唐家屯東北方高地に於て戰死す戰功

ナミキ　ゴヘイ　並木五瓶　演劇作者なり大阪の人通稱は吾八並木正三の門人明和中江戸に下り始めて囘り舞臺の工風をなす文化五年二月二日江戸に歿す年六十三（作者小傳、浪華名家墓所集）

ナミキ　ゴヘイ　並木五瓶（二代目）　葛葉山人、萬壽亭、鳳凰軒等の別號あり元祿府旗下の士なり通稱は篠田金次初め並木宗六と號し後二代目五瓶を相續す文政二年七月二日歿す年五十二（作者小傳）

ナミキ　ゴヘイ　並木五瓶（三代目）　二代目の門人なり初並木惣六又た篠田金次と曰ふ江戸の人通稱因幡屋小半次後三代目五瓶を相續し安政三年七月歿す（作者小傳）

ナミキ　シャウゴラウ　並木正五郎　陸軍歩兵少尉なり千葉縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て近衛歩兵第四聯隊附として從軍中卅八年三月三日清國盛京省唐家屯東北方高地に於て戰死す戰功

ナミキ　ゴヘイ　並木五瓶　演劇作者なり大阪の人通稱は吾八並木正三の門人明和中江戸に下り始めて囘り舞臺の工風をなす文化五年二月二日江戸に歿す年六十三（作者小傳、浪華名家墓所集）

ナミキ　ゴヘイ　並木五瓶（二代目）　葛葉山人、萬壽亭、鳳凰軒等の別號あり元祿府旗下の士なり通稱は篠田金次初め並木宗六と號し後二代目五瓶を相續す文政二年七月二日歿す年五十二（作者小傳）

ナミキ　ゴヘイ　並木五瓶（三代目）　二代目の門人なり初並木惣六又た篠田金次と曰ふ江戸の人通稱因幡屋小半次後三代目五瓶を相續し安政三年七月歿す（作者小傳）

ナミキ　シャウゴラウ　並木正五郎　陸軍歩兵少尉なり千葉縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て近衛歩兵第四聯隊附として從軍中卅八年三月三日清國盛京省唐家屯東北方高地に於て戰死す戰功

ナミキ　ゴヘイ　並木五瓶　演劇作者なり大阪の人通稱は吾八並木正三の門人明和中江戸に下り始めて囘り舞臺の工風をなす文化五年二月二日江戸に歿す年六十三（作者小傳、浪華名家墓所集）

ナミキ　ゴヘイ　並木五瓶（二代目）　葛葉山人、萬壽亭、鳳凰軒等の別號あり元祿府旗下の士なり通稱は篠田金次初め並木宗六と號し後二代目五瓶を相續す文政二年七月二日歿す年五十二（作者小傳）

ナミキ　ゴヘイ　並木五瓶（三代目）　二代目の門人なり初並木惣六又た篠田金次と曰ふ江戸の人通稱因幡屋小半次後三代目五瓶を相續し安政三年七月歿す（作者小傳）

ナミキ　シャウゴラウ　並木正五郎　陸軍歩兵少尉なり千葉縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て近衛歩兵第四聯隊附として從軍中卅八年三月三日清國盛京省唐家屯東北方高地に於て戰死す戰功

ナミキ　ゴヘイ　並木五瓶　演劇作者なり大阪の人通稱は吾八並木正三の門人明和中江戸に下り始めて囘り舞臺の工風をなす文化五年二月二日江戸に歿す年六十三（作者小傳、浪華名家墓所集）

ナミキ　ゴヘイ　並木五瓶（二代目）　葛葉山人、萬壽亭、鳳凰軒等の別號あり元祿府旗下の士なり通稱は篠田金次初め並木宗六と號し後二代目五瓶を相續す文政二年七月二日歿す年五十二（作者小傳）

ナミキ　ゴヘイ　並木五瓶（三代目）　二代目の門人なり初並木惣六又た篠田金次と曰ふ江戸の人通稱因幡屋小半次後三代目五瓶を相續し安政三年七月歿す（作者小傳）

ナミキ　シャウゴラウ　並木正五郎　陸軍歩兵少尉なり千葉縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て近衛歩兵第四聯隊附として從軍中卅八年三月三日清國盛京省唐家屯東北方高地に於て戰死す戰功

ナミキ　ゴヘイ　並木五瓶　演劇作者なり大阪の人通稱は吾八並木正三の門人明和中江戸に下り始めて囘り舞臺の工風をなす文化五年二月二日江戸に歿す年六十三（作者小傳、浪華名家墓所集）

ナミキ　ゴヘイ　並木五瓶（二代目）　葛葉山人、萬壽亭、鳳凰軒等の別號あり元祿府旗下の士なり通稱は篠田金次初め並木宗六と號し後二代目五瓶を相續す文政二年七月二日歿す年五十二（作者小傳）

ナミキ　ゴヘイ　並木五瓶（三代目）　二代目の門人なり初並木惣六又た篠田金次と曰ふ江戸の人通稱因幡屋小半次後三代目五瓶を相續し安政三年七月歿す（作者小傳）

ナミキ　シャウゴラウ　並木正五郎　陸軍歩兵少尉なり千葉縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て近衛歩兵第四聯隊附として從軍中卅八年三月三日清國盛京省唐家屯東北方高地に於て戰死す戰功

ナミノ　トウスケ　浪野東助　剛力にして白等種々の重量なる物を扛げ又これを足にて支へ或は背或は腹に戚せて其の惟力を現はし衆庶の喝采を得たり人呼びて力持の東助といひ又本町に住せしもの本町の東助ともいふ東助風雅の志ありて頗る書畫を嗜む明治廿一年六月二日兩國中村樓に於て書畫會を催し席上にて大筆を使に繁結し兩手これを持ち書畫小集の文宇を書きたり來會者皆其の偉力に驚く同廿二年歿す年五十七（河鍋曉齋傳）

ナミノミヤ　ナムアン　比宮「ショウメイキン」

ナムアン　南無庵「ランカウ」

ナムアン　南無庵「コジマブンキ」「サウキウ」

ナンエイ　南無庵「ランゲワイ」

ケンソウ　南英謙宗　禪僧なり甚は藤原、薩州の人八歲に及びて洛の相國寺大岳祟公に投じて下髮し年滿ちて具戒を受け十九にして遊方す初め錫を魯卓の天龍寺に挂け文字禪を學ぶ次に台山に登りて教乘を習ひ感ずる所あり越前の龍澤寺に到り梅山和尚に參す又薩に歸りて石屋梁公に見ゆ感な契はず後ち傑堂禪師化を越後の耕雲寺に開くと聞き往て謁す依止すること十三年疑團氷解し印可を蒙る後辭し去て備州の牛頭山に抵り庵を立て一種月と稱す應永三十四年傑堂入滅す顯窟其の席を補す會ゝ事有り寺の田莊皆居民に勃奪せられ殿堂稱ゝ凋弊す故に窟引き退く宗之を聞くに忍びず到りて寺務を董す田園舊に復し堂宇重れて興る既にして窟奥に到り秘澤寺に居る顯窟龍谷寺に移り速行して宗其の席を補す衆に莅むこと殆んど二十年應正乙亥羽州の太守藤淳氏玉泉寺を以て之を致して其の廢を起さしむ居ること三年疊く其の舊に復す稱して中興と爲す房州の太守其風を聞き其だ歸仰し會津に天寧寺を建て之を聘す辭すれども聞かず勉强して之れに赴く筑前の刺史請ひて作州の四來寺を主らしむ道る能はずして往く又備中の常照越後の洞窟檀越皆な宗を請ひて第一世となす到る處法道大に振ふ後ち自ら種月寺を營み退居す寛正元年五月十九日寂す年七十四（洞上聯燈錄）

ナンカ　ナンカ　南珂「コダマナンカ」　江戸の俳人なり氏は松角、通稱周藏、荷涼庵と號す初め鶴見片山寸長の門人なり巢鴨に住す御家人なり安永五年三月二十二日歿す木郷丸山本妙寺に葬る（俳諧年表）

ナンカイ　南海「ギヲンナンカイ」

ナンガイ　南涯「ハヤサキガンセン」

ナンガイ　南涯「ヨシマスナンガイ」

ナンガイ　南涯「ヲカダナンガイ」

ナンガイ　南陵「イハキナンガイ」

ナンカウ　南皐「キノウヘナンカウ」

ナンガフ　南江「ソウゲン」

ゲンイチラウ　南合源一郎　海軍少尉なり東京府出身にして明治二十七八年日清戰役に於て軍艦富士分隊士として出征中廿八年七月廿五日病に罹り同八月十七日東京に於て死去す

ナンカウシ　南江子「ミタニソウチン」二代

ナンガク　南岳「ワタナベナンガク」

ナンキヨク　南極壽星　禪僧なり相州星氏の子なり印を吾寶和尚に受け遊化して常州に抵り鄧山の幽窟に入り慮を立て一錫晦を意となす山尾の邑主小野崎玄峰居士星の道風を聞き山に入りて面言し頗る其意に愜へり因りて新に蘭若を創して之に住せしむ星即ち山を天童と號し院を大雄と名く四方の學徒來り歸す文明七年相州の最乘寺に住す期年にして天童に歸る延德二年庚戌七月九日滅を唱ふ（洞上聯燈錄）

ナングウ　タイシウ　南宮大湫　江戸の儒者なり名は岳字は喬卿、大湫は其の號、又た積翠樓と號す通稱彌六、尾州の人、父仲八（名は勝字は子克）尾藩の老職竹腰氏に仕へ劍技を以て名あり大湫幼にして孤なり舅氏に鞠はる多病を以て肯へて仕へず中西淡淵に從ひて學ぶ淡淵之を器とす大湫原と井上氏、竹腰氏の祿を辭するに及びて京都の一貴紳に遊仕し氏を南宮と改む幾くもなく去りて伊勢の桑名及び松坂に往き醫居徒に授く從ひ遊ぶもの甚だ衆し大湫常に同門紀平洲と情交極めて密、平洲夙に江戸に遊び雒を下して教授す屢ゝ書を寄せて東游を勸む大湫是に於て江戸に來り徒を聚て教授す業を請ふもの大に進む恒に窮を愍み施を好む書生の質しきものに衣食を給し一意勤學せしむ初め大湫の江戸に來るや諸侯其の名を聞き聘召するもの多し而れども心に屑しとせざる所ありて意を仕途に絕ち號して烟波釣叟と曰ふ安永七年三月三日歿す年五十一著はす所論語師說述機、孝經指解補註、今文尚書定本纂、學庸旨考、大學定本、禹貢地理指掌圖考、春秋三傳、批考小爾雅、歷代備荒考、守成編、勸學編、積翠閑言、芸窻放言、漁翁放言、病餘瑣言、講餘獨覽あり（先哲叢談）

ナングウ　ランセン　南宮藍川　尾張侯の儒官なり名は齡、初名は壽、字は大年、藍川又龍湫と號し大助と稱す江戸の人、大湫の子、年十四父を亡ひ紀平洲に育せらる能く家學を繼述す後ち尾張侯に仕へて侍讀となる寛政辛亥正月廿七日歿す年二十七（先哲叢談、尾張名家誌）

ナンクン　南薰「アヲキグンガイ」

ナンクワ　南華「ハルキナンクワ」

ナンクワウバウ　テンカイ　南光坊天海「ジゴイン」

ナンケ　ワク　南郭「ハツトリナンクワク」

ナンケ　南家「フジハラムチマロ」の子孫を南家と稱す以て北家と分つ

ナンケイ　南谿「ミヤガハナンケイ」

ナンケイ　南溪「ニシムラナンケイ」

ナンケイ　南溪「ナゴシナンケイ」

ナンケウ　南橋「イシヰナンケウ」

ナンケウ　南軒「フルイチナンケン」

ナンコ　南湖「ホリナンコ」

ナンコク　南湖「ハルキナンコ」

ナンコク　南谷　書僧なり名は照什、八幻庵堂印堂と號す洛四六孫王大通寺の中興たり書體一家をなして頗る風致あり元文元年十月十三日年七十四にして寂す生涯關東に往くこと數十度皆六孫王廟を再立せんと欲してなり（鑒定便覽）

ナンコクワ　南國華「ナンブケイシュン」

ナンコシ　南湖子「シムラバンザウ」

ナンサウ　南窓「クワクテイ」

ナンサウジュ　南草壽「ナンブサウジュ」

ナンザン　南山「ナンブナンザン」

ナンザン　南山「ナカガハナンザン」

ナンザン　南山「オクムラリヤウチク」

ナンザン　南山「アサクラカゲヒラ」

ナンザン　南山「オクダサンカク」

ナンザン　南山「ウチダゲキ」

ナンザン　南山「テウナンザン」

ナンザン　南山「ナガハラナンザン」

ナンザン　南山「アラキメイモン」

ナンシウ　南宗「シウシン」

ナンシウ　南洲「キクチナンシウ」

ナンシウ　南洲「サイガウタカモリ」

ナンジュ　南壽慎終　石州の人禪僧なり初め覺體に參ず依付すること久しうして旨に契ふあり雒參して因州に抵り堅く韜晦す學徒多く其の風を慕ひ來り歸す郡主某氏讓傳寺を創し迎へて之を主らしむ圓雲席を虛するに及びて之を補す居ること兩歲復た讓傳に歸り爲に終る（洞上聯燈錄）

ナンス　ヰシ　南水子「ミタニソウチン」三世

ナンゼン　南禪「タイシヤウ」

ナンセンサイ　南仙齋「キクヲカセンリヤウ」

ナンセンシ　南川子「ミタニソウチン」初代

ナンセンセウ　南仙笑「ツマンド」

ナンソウ　南總「ハヤシシュンサイ」

ナンソウヨウ　南窓翁「クワクテイ」

ナンダイ　南臺　江戸の俳人なり氏は旗窪、通稱宗十郎、白花園と號す長谷川馬光の門人なり御鳥見見習を勤む文化十四年十二月二十四日歿す年三十一淺草今戸慶養寺に葬る法號南寨院圧曾自休居士（俳諧年表、俳諧人物便覽）

ナンダイ　南臺「キノウヘナンダイ」

ナンタウ　南濤「スヤマナンタウ」

ナンダウ　南堂「リヤウカイ」

ナンダカ　ユンマン　南陀伽紫蘭「クボシ歌師なり通稱小林重郎左衛門綾繁初め正繁と號す又戲吠歌林又冒寨綾繁又屈冒道場の號あり父は小林重郎左衛門貞鄂代々武州青梅郷の里老にして又縞布を鬻ぐを以て產業とす登て江戸の豪商三井氏其の累代修好篤實を以て處するに因り之れを支店に准じ家號及び暖帷章

を興して蓄財好を表す故に家號を越後屋と稱す綾繁幼にして三井氏に依る聰敏强記諸般の會計を合算するや衆所なし後家に歸り父の業を襲ひ里老となり又た結布を鬻ぐ傍ら俳諧和歌を好み太田南畝の門人となる願る其の名高し性疾書走筆毫も書損なし同門の高弟も三舍を避けたりしと云ふ文化十年癸酉本居百名の勸奬により一日九十三首を詠ず同年十一月北川眞顏其門人燕翠園へ同十一年甲戌四月一日一日千首を詠じたり文政年間に至り些しく家勢衰へたりと雖ども吏務を恪勤し果斷滯なし天保年間事故ありて里正小澤彌左衛門頻年江戸に在留す當時郷里及び聯合三十一村百般の事務綾繁之れを管理す十二年八月二日病て家に歿す中ヶ根布村天寧寺先塋の地に葬る一代の詠歌集は久曾加津良と表題し今家に藏す其の他諸學書二卷雪梅縣物語五卷あり綾繁一男一女あり男は幼にして三井氏に仕へたりしが父に先立て歿す並木氏の男を養ひ女夫として家を繼がしむ小林源吾と稱し醫を業とす傍ら正風遠州流の挿花を巧にして陽月窖一桂と稱すその門に遊ぶもの數人あり

ナンチク　ナンチキンノ　南竹「イチウラナンチク」　ミヤエンホウシンワウ　南池院宮「シヤウ

ナンテイ　南汀「キクチナンテイ」

ナンテイ　サタラウ　南條佐太郎　陸軍砲兵中尉なり和歌山縣出身にして明治三十七八年日露戰役に際し徒步砲兵第二聯隊附として從軍中三十八年九月二十九日清國盛京省山頭堡にて病に罹り同十月二十三日鐵嶺兵站病院に於て死去す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ナンデウ　ソウカン　南條宗鑑　醫者なり伯耆の人少壯にして京都に遊び又た丹波に之き名醫如意庵に就きて學ぶ後ち越前の人一栢に從ひて疑義を質し撮要集若干卷を著はす衞遂に世に顯はる子なし從子宗虎を養ひて嗣とす宗虎又た一鳴と稱す亦た醫を善くす豐臣氏辟して醫官となし朝に請ひて法眼に叙す

（皇國名醫傳）

ナンデウ　ミツアキラ　南條光明　中務大輔と稱す筑後南條の城主なり天正の初年大友龍造寺の戰に食邑を失ひ京師に奔り關白秀吉に仕ふ秀吉征薩の日食邑を復するを得たり慶長庚子の亂石田三成に黨して大津城を攻む軍敗れて邑を除かる（野史）

ナンデウ　モトツグ　南條元續　伯耆の人なり父宗勝豐後守と稱す羽衣石の城主たり尼子氏に屬す天文九年十月市男隊萩より宮市に轉じ正定寺に屯す金助伍長と錢る元治元年六月國司信濃脫藩士鎭撫の爲め上京す金助之に從ひ嵯峨の天龍寺に屯す七月十八日入京遊にして戰起る進て中立賣に陣し巨砲を發す苦戰し後小銃を操て進擊し敵數人を斃す遂に流丸に中りて死す年僅に十九（甲子殉難士傳）

ナンパク　ダイキチ　南白「エトウシンペイ」

ナンバ　難波大吉　陸軍步兵中尉なり岡山縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て步兵第四十聯隊附として從軍中三十七年七月三十一日清國盛京省太平嶺附近戰鬪の際負傷同八月一日范家堡子第三野戰病院に於て死去す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ナンバ　ムネアキ　難波宗明　陸軍大尉なり東京府出身にして明治十年西南役に於て近衞步兵第一聯隊附として從軍し三月廿六日肥後國山本郡木留に於て戰死す

ナンバ　ムネカツ　難波宗勝　姓は藤原氏、權大納言飛鳥井雄庸の第二子にして初名を雅宣と云ふ從三位難波宗富の後を繼ぎ左近衞少將に任ぜられ正五位下に叙せられ慶長十四年宗勝伴を結びて宮女を姦淫し事發覺して伊豆に竄せらる十七年赦に遇ひて京師に歸り名を雅胤と更め權大納言正二位に進む慶安四年從一位を以て薨ず年六十六子宗種をして家を繼がしめて考す（野史）

ナンバ　ムネキ　難波宗城　性は藤原氏、正二位權大納言宗建の子なり父に繼ぎ叙爵せられて官權大納言に至る享和三年年八十に進し杖を聽さると云ふ（野史）

ナンバ　ムネタケ　難波宗建　姓は藤原、

の小木刀を携て立つ吉田三尺の大刀を拉て縱橫奮鬪す一藤齋神出鬼沒飛鳥の如く吉田の背に出て其肩を打つ吉田憤激の中に在て之を屠ともせず猶鬪ふて敵の刀を打墮す柳生但馬、小野次郎右衞門、大久保彦左衞門等檢證して終に吉田の敗とす

ナンバウ　キンスケ　南坊「ケイシユザ」

ナンバ　難波金助　諱は好勝萩城の人なり父久三年藩市男隊を編成するや入りて勉勵武を講ず十月市男隊萩より宮市に轉じ正定寺に屯す金助伍長と錢る元治元年六月國司信濃脫藩士鎭撫の爲め上京す金助之に從ひ嵯峨の天龍寺に屯す七月十八日入京遊にして戰起る進て中立賣に陣し巨砲を發す苦戰し後小銃を操て進擊し敵數人を斃す遂に流丸に中りて死す年僅に十九（甲子殉難士傳）

ナンバク　ダイキチ　難波大吉　陸軍步兵中尉なり岡山縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て步兵第四十聯隊附として從軍中三十七年七月三十一日清國盛京省太平嶺附近戰鬪の際負傷同八月一日范家堡子第三野戰病院に於て死去す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ナンバ　ムネアキ　難波宗明　陸軍大尉なり東京府出身にして明治十年西南役に於て近衞步兵第一聯隊附として從軍し三月廿六日肥後國山本郡木留に於て戰死す

ナンバ　ムネカツ　難波宗勝　姓は藤原氏、權大納言飛鳥井雄庸の第二子にして初名を雅宣と云ふ從三位難波宗富の後を繼ぎ左近衞少將に任ぜられ正五位下に叙せられ慶長十四年宗勝伴を結びて宮女を姦淫し事發覺して伊豆に竄せらる十七年赦に遇ひて京師に歸り名を雅胤と更め權大納言正二位に進む慶安四年從一位を以て薨ず年六十六子宗種をして家を繼がしめて考す（野史）

ナンバ　ムネキ　難波宗城　性は藤原氏、正二位權大納言宗建の子なり父に繼ぎ叙爵せられて官權大納言に至る享和三年年八十に進し杖を聽さると云ふ（野史）

從三位宗尚の子なり父老す宗建家を繼ぎ歷任して權大納言正二位に至り明和五年薨ず時に年七十二難波氏世々歌鞠の法を傳へ宗建に至りて其の法頗る妙を得たり享保中宗建宿直に當りて禁裏に在り衆其の鞠を揚げて紫震殿を超えしめんと請ふ時に公卿皆な言ふ宗建の術絕妙なりと雖も恐くは紫震殿の屋棟を超ゆる能はざるべしと宗建謂らく殿棟の高さ十五間豈に容易ならんやと乃ち衆に謂て曰く蹴を加ふるを得ば即ち試みんと皆な之れを諾す是に於て宗建力を極めて一蹋す其の鞠飛びて屋を超え小御所の中庭に落つと云ふ宗建又た水練の術を善くす一日參議愛宕通晴と與に小艇を仙院の庭池に泛ぶ舟師誤りて棹を小嶼に觸れ宗建通晴並に水に陷る時に宗建躬を翻して出て僅かに裳を濕せし耳而して通晴は沈沒し僅かに溺死を免るを得たり法晶其の術を賞す宗建曰く懸崖巖窟と雖も僅かに拯を著れば即ち陷溺すべからざるなりと宗建日錄あり世に傳はると云ふ子宗城（野史）

ナンバ　ムネナガ　難波宗長（フヂハラマサツネ」の傳を見よ）

ナンビン　南濱「カウノジヨサイ」

ナンビン　南濱「カガハナンビン」

ナンブ　カゲハル　南部景春　富山侯の文學なり字は國華、南山の長子、聰慧絕倫、詩及び書畫を善くす年十三父に從て江戸に來る嘗て東台山に登りて五言古詩二百句を賦す其の詩人口に膾炙す年十八にして父を喪ひ哀毀禮に過ぐ母に事ふる甚だ孝、兩弟を友愛し慟然大志あり博く經史百家に通ず富山侯寵遇甚だ渥し乃ち祿を增して二百石を賜ふ職を季ずる三年にして母を喪ふ次弟亦亡す景春悲哀に堪へず遂に享保二年四月病を以て歿す年僅に廿三季弟亦月を踰て亡す南部氏遂に絕ゆ（近世叢語、先哲叢談後編、鑑定便覽）

ナンブ　サウジユ　南部草壽　京都の儒者なり字は子壽蹤沈野と號す山城の人、其先は越後長尾氏の族、平安に講說す學博く行修り醇儒を以て稱せらる寛文十二年長崎奉行牛込勝登の徵に應じて長崎に遊ぶ是の時に當りて邑中大に學に嚮ひ始めて聖廟を邑の立山に建て鄕學を設け塾の草壽學政を料理し此に教授すること殆んど八年職を辭して京に歸る富山侯聘して文學と文章藝術を講ず其の後ち數ふ典故に通ず元祿元年歿す著書に職原抄支流あり義子南山嗣ぐ（近世叢語、先哲叢談後編）

ナンブ　トシナホ　南部利直　信直の子也文祿四年十二月從五位下に叙し信濃守と稱す慶長五年命を受て最上義光に屬す是秋加賀の舊城主多田忠親伊達政宗に誘はれて亂を起す（忠親は大將軍賴朝の伊東祐親の女に通じて生む所の忠親の裔なり和賀の領主たり主馬と稱す天正十八年城邑を失ひ伊達政宗に遷る）政宗贅食火藥を以て之を助け九月夜急に北信愛入道朴齋を花卷城に襲ひ克たずして岩崎に入る六年正月利直擊て之を救ふ利直齋を岩崎に伐つ政宗之を救ふ利直擊て之を却す四月城遂に陷る忠親出て、大森に逃る已にして左衞門戰を制し狀を具して幕府に上申す利直亦之を訴ふ政宗懼れて忠親を殺す慶長十七年秀忠利直を私第に饗す寬永三年八月從四位下に叙す九年八月卒す年二十七法名年溪清公、南宗院と號す（野史）

ナンブ　トシヤス　南部利恭　舊奥州南部藩主なり明治元年十月陸前國白石城附近十三萬石の地を賜はる二年六月白石藩知事に任ぜられ七月盛岡縣知事に轉ず三年六月版籍を奉還し解職となる同八月內番參入仰付られ十七年七月伯爵を授けられ三十五年六年四十九病革まるに及び特旨を以て位一級を進め從二位に叙せらる

ナンブ　トシヨシ　南部利敬　利直九世の孫なり小字信敬慶二郎と稱す天明四年父利正の後を嗣て南部城に居る寬政八年冬從四位下に叙し九藩大夫と稱す文化元年從四位下に叙す四年晉西亞人蝦夷地エトロフを侵す利敬命を受け擊て之を卻く明年十一月領邑を增し尋で侍從に任ず支庶亦た榮ふ本支相傳て世々侯たり（野史）

ナンブ　ナガツグ　南部長繼　通稱を四郎といひ實繼の子にして南部光行の曾孫なり世々甲州波木井に居る元亨二年安藤蟯勢奥州に叛く北條高時足立時光を遣はしてこれを征し克たず是より先長繼因徒を立山に建て鄕學を設け塾の草壽學政を料理し此に教授すること殆んど八年職を辭して京に歸る富山侯聘して南濱「カウノジヨサイ」

ナンブ　カゲハル　南部景春　富山侯の儒官なり字は國華、南山の長子、聰慧絕倫、詩及び書畫を善くす年十三父に從て江戸に來る嘗て東台山に登りて五言古詩二百句を賦す其の詩人口に膾炙す年十八にして父を喪ひ哀毀禮に過ぐ母に事ふる甚だ孝、兩弟を友愛し慟然大志あり博く經史百家に通ず富山侯寵遇甚だ渥し乃ち祿を增して二百石を賜ふ職を季ずる三年にして母を喪ふ次弟亦亡す景春悲哀に堪へず遂に享保二年四月病を以て歿す年僅に廿三季弟亦月を踰て亡す南部氏遂に絕ゆ（近世叢語、先哲叢談後編、鑑定便覽）

ナンブ　サウジユ　南部草壽　京都の儒者なり字は子壽蹤沈野と號す山城の人、其先は越後長尾氏の族、平安に講說す學博く行修り醇儒を以て稱せらる寬文十二年長崎奉行牛込勝登の徵に應じて長崎に遊ぶ是の時に當りて邑中大に學に嚮ひ始めて聖廟を邑の立山に建て鄕學を設け塾の草壽學政を料理し此に教授すること殆んど八年職を辭して京に歸る富山侯聘して文學と文章藝術を講ず其の後ち數ふ典故に通ず元祿元年歿す著書に職原抄支流あり義子南山嗣ぐ（近世叢語、先哲叢談後編）

ナンブ　トシナホ　南部利直　信直の子也文祿四年十二月從五位下に叙し信濃守と稱す慶長五年命を受て最上義光に屬す是秋加賀の舊城主多田忠親伊達政宗に誘はれて亂を起す（忠親は大將軍賴朝の伊東祐親の女に通じて生む所の忠親の裔なり和賀の領主たり主馬と稱す天正十八年城邑を失ひ伊達政宗に遷る）政宗贅食火藥を以て之を助け九月夜急に北信愛入道朴齋を花卷城に襲ひ克たずして岩崎に入る六年正月利直擊て之を救ふ利直齋を岩崎に伐つ政宗之を救ふ利直擊て之を却す四月城遂に陷る忠親出て、大森に逃る已にして左衞門戰を制し狀を具して幕府に上申す利直亦之を訴ふ政宗懼れて忠親を殺す慶長十七年秀忠利直を私第に饗す寬永三年八月從四位下に叙す九年八月卒す年二十七法名年溪清公、南宗院と號す（野史）

ナンブ　トシヤス　南部利恭　舊奥州南部藩主なり明治元年十月陸前國白石城附近十三萬石の地を賜はる二年六月白石藩知事に任ぜられ七月盛岡縣知事に轉ず三年六月版籍を奉還し解職となる同八月內番參入仰付られ十七年七月伯爵を授けられ三十五年六年四十九病革まるに及び特旨を以て位一級を進め從二位に叙せらる

ナンブ　トシヨシ　南部利敬　利直九世の孫なり小字信敬慶二郎と稱す天明四年父利正の後を嗣て南部城に居る寬政八年冬從四位下に叙し九藩大夫と稱す文化元年從四位下に叙す四年晉西亞人蝦夷地エトロフを侵す利敬命を受け擊て之を卻く明年十一月領邑を增し尋で侍從に任ず支庶亦た榮ふ本支相傳て世々侯たり（野史）

ナンブ　ナガツグ　南部長繼　通稱を四郎といひ實繼の子にして南部光行の曾孫なり世々甲州波木井に居る元亨二年安藤蟯勢奥州に叛く北條高時足立時光を遣はしてこれを征し克たず是より先長繼因徒を立山に建て鄕學を設け塾の草壽學政を料理し此に教授すること殆んど八年職を辭して京に歸る富山侯聘して文學と文章藝術を講ず其の後ち數ふ典故に通ず元祿元年歿す著書に職原抄支流あり義子南山嗣ぐ（近世叢語、先哲叢談後編）

ナンブ　トシナホ　南部利直　信直の子也文祿四年十二月從五位下に叙し信濃守と稱す慶長五年命を受て最上義光に屬す是秋加賀の舊城主多田忠親伊達政宗に誘はれて亂を起す（忠親は大將軍賴朝の伊東祐親の女に通じて生む所の忠親の裔なり和賀の領主たり主馬と稱す天正十八年城邑を失ひ伊達政宗に遷る）政宗贅食火藥を以て之を助け九月夜急に北信愛入道朴齋を花卷城に襲ひ克たずして岩崎に入る六年正月利直擊て之を救ふ利直齋を岩崎に伐つ政宗之を救ふ利直擊て之を却す四月城遂に陷る忠親出て、大森に逃る已にして左衞門戰を制し狀を具して幕府に上申す利直亦之を訴ふ政宗懼れて忠親を殺す慶長十七年秀忠利直を私第に饗す寬永三年八月從四位下に叙す九年八月卒す年二十七法名年溪清公、南宗院と號す（野史）

ナンブ　トシヤス　南部利恭　舊奥州南部藩主なり明治元年十月陸前國白石城附近十三萬石の地を賜はる二年六月白石藩知事に任ぜられ七月盛岡縣知事に轉ず三年六月版籍を奉還し解職となる同八月內番參入仰付られ十七年七月伯爵を授けられ三十五年六年四十九病革まるに及び特旨を以て位一級を進め從二位に叙せらる

ナンブ　トシヨシ　南部利敬　利直九世の孫なり小字信敬慶二郎と稱す天明四年父利正の後を嗣て南部城に居る寬政八年冬從四位下に叙し九藩大夫と稱す文化元年從四位下に叙す四年晉西亞人蝦夷地エトロフを侵す利敬命を受け擊て之を卻く明年十一月領邑を增し尋で侍從に任ず支庶亦た榮ふ本支相傳て世々侯たり（野史）

ナンブ　ナガツグ　南部長繼　通稱を四郎といひ實繼の子にして南部光行の曾孫なり世々甲州波木井に居る元亨二年安藤蟯勢奥州に叛く北條高時足立時光を遣はしてこれを征し克たず是より先長繼因徒を立山に建て鄕學を設け塾の草壽學政を料理し此に教授すること殆んど八年職を辭して京に歸る富山侯聘して文學と文章藝術を講ず其の後ち數ふ典故に通ず元祿元年歿す著書に職原抄支流あり義子南山嗣ぐ（近世叢語、先哲叢談後編）

ナンブ　トシナホ　南部利直　信直の子也文祿四年十二月從五位下に叙し信濃守と稱す慶長五年命を受て最上義光に屬す是秋加賀の舊城主多田忠親伊達政宗に誘はれて亂を起す（忠親は大將軍賴朝の伊東祐親の女に通じて生む所の忠親の裔なり和賀の領主たり主馬と稱す天正十八年城邑を失ひ伊達政宗に遷る）政宗贅食火藥を以て之を助け九月夜急に北信愛入道朴齋を花卷城に襲ひ克たずして岩崎に入る六年正月利直擊て之を救ふ利直齋を岩崎に伐つ政宗之を救ふ利直擊て之を却す四月城遂に陷る忠親出て、大森に逃る已にして左衞門戰を制し狀を具して幕府に上申す利直亦之を訴ふ政宗懼れて忠親を殺す慶長十七年秀忠利直を私第に饗す寬永三年八月從四位下に叙す九年八月卒す年二十七法名年溪清公、南宗院と號す（野史）

ナンブ　トシヤス　南部利恭　舊奥州南部藩主なり明治元年十月陸前國白石城附近十三萬石の地を賜はる二年六月白石藩知事に任ぜられ七月盛岡縣知事に轉ず三年六月版籍を奉還し解職となる同八月內番參入仰付られ十七年七月伯爵を授けられ三十五年六年四十九病革まるに及び特旨を以て位一級を進め從二位に叙せらる

ナンブ　トシヨシ　南部利敬　利直九世の孫なり小字信敬慶二郎と稱す天明四年父利正の後を嗣て南部城に居る寬政八年冬從四位下に叙し九藩大夫と稱す文化元年從四位下に叙す四年晉西亞人蝦夷地エトロフを侵す利敬命を受け擊て之を卻く明年十一月領邑を增し尋で侍從に任ず支庶亦た榮ふ本支相傳て世々侯たり（野史）

ナンブ　ノブナホ　南部信直　陸奥の人なり姓は源氏、新羅三郎義光に出て双鶴を以て旗號となす父を高信と云ふ宗信の弟なり安信の子晴政天に宗家絕す支庶東朝政南宗政北信愛等諸老臣と議し信直を立つ初の名は彥三郎、後大膳大夫と稱す初め諸老臣の嗣を議するや或は九戶政實の弟實親を立てんと欲する者あり信愛可かず是に於て實親信直を嫉み之を殺さんとす事顯て誅殺せらる政實宗族に附て謝す信直之を敎すの謀を以て斯波氏を亡し斯波六十六郷を取る高信卒するに及び信直弟政信なして津輕郡代たらしむ其の相、相惡み大浦爲信大光寺左衞門左を讒す政信左衞門を伐つ克たず信直自ら赴き伐たんとす左衞門逃れて秋田實季と議し夜安藤氏を襲ひて堯勢及び族將數人を獲殲名大に著る長繼の子貞繼天す因りて同族師行に女を配して嗣となす（南部五世傳）

ナンブ　ナンザン　南部南山（南部自ら修して南とす）富山侯の儒官なり名は景衡字は思聰、南山は其號又た環翠園と號す通稱昌輔、肥前長崎の人草壽の養子たり本氏は小野、父昌碩醫を業とす昌碩死して南山尙ほ幼なり母乃ち再嫁す卒に怙恃を失ふ父の友小林謙貞其の孤立を憫みて之を其の家に養ふ南山學を好みて儁異、邑醫角長有に就て軒岐の書を學ばしむ南山之を屑とせず好みて經史を讀む國人黃公潭、杭人謝叔且に從ひて歌詩を學ぶ二子之を奇賞す寬文壬子南部草壽深く之を器とし養て子とす是に於て南山乃ち南部氏を冒す草壽長崎に在るとなんど八年にして京師に還る因りて南山をして尙ほ長崎に在留して筑後の安東百庵に從學せしむ富山侯草壽を聘して學を掌らしめ祿百五十石を賜ふ南山後江戸に來り木下順庵に師事し遂に同門十才子の巨擘となる草壽沒して後南山其祿を襲ふ南山博覽洽聞最も史學に長ず嘗て環翠園に長崎通事を聘して諸家の史を評論す其書未だ全く稿を成さずと雖も蒐羅詳博、考證精核、邦人の企て及び難き所ありと云ふ兼て詩文を善くす年五十一の時自ら多病にして勵長からざるを知り自ら其の詩文を刪定し題して喚起漫草と云ふ正德三年三月七日越中に死す年五十五（近世叢語、先哲叢談後編、鑑定便覽、諸家人物誌）

ナンブ　ノブナホ　南部信直　陸奥の人なり姓は源氏、新羅三郎義光に出て双鶴を以て旗號となす父を高信と云ふ宗信の弟なり安信の子晴政天に宗家絕す支庶東朝政南宗政北信愛等諸老臣と議し信直を立つ初の名は彥三郎、後大膳大夫と稱す初め諸老臣の嗣を議するや或は九戶政實の弟實親を立てんと欲する者あり信愛可かず是に於て實親信直を嫉み之を殺さんとす事顯て誅殺せらる政實宗族に附て謝す信直之を敎すの謀を以て斯波氏を亡し斯波六十六郷を取る高信卒するに及び信直弟政信なして津輕郡代たらしむ其の相、相惡み大浦爲信大光寺左衞門左を讒す政信左衞門を伐つ克たず信直自ら赴き伐たんとす左衞門逃れて秋田實季

に遷る天正十六年政信遽かに墓死す人爲信を疑ふ爲信僅にして武能く士民を撫す初左衛門の北内城に奔るや城主に勸め秋田に叛かしむ信直悅び九月比内城を取り左衛門を貸し秋田と相惡む爲信間權れ援を秋田に乞ふ天正十八年兵を起し波岡を攻む信直政實に命じ之を救はしむ政實病を以て辭す往返の間城陷る爲信勢益〻盛なり是の春關白秀吉小田原を征す信直未た識らず會〻京師の賈人清藏來り說き使を發し禮を致さしむ信直清藏を還し驢馬を獻じ且叛者あり自ら到る能はざるを告ぐ八月信直懲き謁す佩刀及び漢織の繻を賜ふ信直爲信を訴ふ前田利家爲信既に三日前朱亨を賜ふと告ぐ信直愧ち政實の事を以て聞す乃ち暇を賜ひ國に歸る羽柴秀次淺野長政等部邑を巡撫す淺野重吉なして鳥屋礒を守らしむ其他の諸砦皆目代を置て歸る未だ幾くならず土寇蜂起し鳥屋礒を合圍す重吉力を竭して拒守す十一月信直兵を率ひ之を援け大に土寇を敗り重吉を携へ歸る天正十九年之を檜川に寘く政實之を憐り兵を舉て重吉を擊んとす重吉信愛の邸に遊る三月政實終に兵を舉ぐ信直の屬下往々叛て之に應じ政實の兵威日々に張り信直日々に減ず信愛重吉等と謀り利家に懇り援を秀吉に乞ふ秀吉許諾す政實退て城に據り征討使の到るを待ち火を縱て自殺せんと欲す秀吉秀次を元帥とし家康を副將とし六月途を發す八月穴田井根曾利二塞を拔き兵を合して政實を福岡に圍む九月政實終に降を乞ふ之を禁錮す文祿元年信直那古耶の行營に從ふ慶長四年十月卒す年五十四、法名江山心公(野史)

ナンブ ノブマサ 南部信政 通稱三郎政長の子なり建武二年北畠顯家に從ひて足利尊氏を討ち屬〻戰功あり翌年顯家東下するや信政また從ふ興國六年建知院右近藏人に任じ幾もなくして卒す

ナンブ ノブミツ 南部信光 幼名力寿丸信政の子なり信政早く死するを以て正平五年八月祖政長の後を襲ひ大炊介又薩摩守に任ぜらる二十二年神大和守の叛くや信光四澤光廣、三上富親、福士家隆等を率ゐて神城を攻めて之れを拔く南朝其の殊功を賞す文中元年朝髮して聖光といふ永和二年卒す(南部五世傳)

ナンブ ヒサシ 南部壽 陸軍歩兵大尉なり宮城縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て曬備して信長の子なり茂時北條高時に從ひ鎌倉に戰死す子信長蒔鳴して死す政行の子政長南部師行の後を承けて南朝に仕ふ足利尊氏これを招降すれども一世遽かに背くべからず大人の如きは自ら足利氏に致して家聖を興すべしと沙金七十兩を出だして其賞に供す政行大に悅び義故を招集して足利氏に投じ戰功あり遂に南部の舊封を興すを得たり南部氏再び興る(南部五世傳)

ナンブ マサユキ 南部政行 茂時の孫に役より召集せられ第二師團歩兵第四聯隊附として從軍中三十七年十月十一日清國盛京省三城子山戰爭の際負傷同十三日黃堡第二師團第二野戰病院に於て死去す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ナンブ マサナガ 南部政長 六郎と稱す遠江守政行の四子なり幼より雄偉なり師行これを奇として子となす元弘三年新田義貞の義兵を擧ぐるや政長を招く政長部下を率ゐて赴き武州の堀金に至り義貞に謁す得たり北條時行の亂を起すや餘黨の陸奥にある者並び起る國司北畠顯家政長に命じてこれを剿定せしむ延元二年師行に從つて曾我貞光を津輕に討ち奮戰功あり三年貞光平賀郡岩楯に據る政長これを攻む既にして後醍醐帝屬じ南朝日に衰ふ足利尊氏因て政長を招き降らしめんとす書を以てすること再三、政長肯ぜずしてこれを却く奥國元年貞光の黨奥津輕大光寺城に據る政長越後五郎成田顯時と往いて遂に外城を拔く貞光及び淺利清遠來り援く相持し攻め遂に外城を拔く貞光及び淺利清遠來り援く相持して雌雄を決せず竟に國を解いて還る三年六月曾我師助の命を受け族貞光と大舉して來り攻む堅年に至り尊氏の命を受け族貞光と大舉して來り攻む堅年に至り て敵兵愈〻加ふ政長躬ら戰を執り門を開いて出て縱横奮擊師助を斬る敵兵遂に潰ゆ後村上帝其功を賞し刀及び甲冑を賜ふ正平十五年八月卒す三子あり長信政次政持三を信助といふ(南部五世傳)

ナンブ マサミツ 南部政光 通稱四郎後彈正少弱又薩摩守たり信政の子にして信光の弟たり初め七戸城に居る天授二年信光卒す子長經幼なるを以て政光を立てゝ嗣となす是より先き政光兄信光と南朝に勤王して功あり明德三年南北講和するに至り宗家南部守行降を足利氏に勸む政光固く義を執つて肯ぜず守行其節を感歎し將軍義滿に請つて奥州所領の地を全うせしめ甲州の舊邑を收め信光の子をして出で仕へしめんとす義滿これを許す明德四年政光族を擧りて甲州に輸して奥に入り信光の子政長を立てゝ自ら七戸に老す歲を經て卒す(南部五世傳)

ナンブ マサモチ 南部政持 政長の二子なり左馬介と稱す父兄と南朝に仕へて忠勤を盡くす功を以て甲州倉見山を賜ふ(南部五世傳)

ナンブ マサユキ 南部政行 茂時の孫にして信長の子なり茂時北條高時に從ひ鎌倉に戰死す子政行の子政長南部師行の後を承けて南朝に仕ふ足利尊氏これを招降すれども一世遽かに背くべからず政行に說いて曰く我家朝恩に浴すること二世遽かに背くべからず大人の如きは自ら足利氏に致して家聖を興すべしと沙金七十兩を出だして其賞に供す政行大に悅び義故を招集して足利氏に投じ戰功あり遂に南部の舊封を興すを得たり南部氏再び興る(南部五世傳)

ナンブ ミツユキ 南部光行 南部藩の始祖なり新羅三郎義光五世の孫加賀美遠光の子なり文治五年源頼朝奥州征討の軍に從ひて功あり因つて陸奥國糠部五郡を賜はる光行乃ち三戸城を築きて此に居り一族子弟を甲斐より移して封内各地に置けり爾來北門の藩鎭として七百年來の基をなせり(巖手縣志)

ナンブ モロユキ 南部師行 通稱又次郎政行の次男なり出でゝ同族長繼の家を繼ぐ建武元年北畠顯家陸奥の國司に任ぜらるゝや師行國代となりて之に從ひ始めて城を糠部八戸に築きて居る顯家親して曰く是れ本州を鎮平するに根本の城なりと因て根城と號す遂に根城傍近の地を賜ひて采邑となす國ま鹿角郡の地頭に闕あり又併せて之を賜ふ是に於て師行諸郡を巡視し以て盜賊を逮捕し滯冤を濟ぐ部内大に治まる二年顯家四上するや師行父子をして留守せしむ是時津輕平賀郡に曾我貞光あり足利氏に屬して勢強大なりしかば師行成田泰長と謀り延元元年同郡藤崎平内の二城に入る貞光安藤家季と來り攻む師行迎へ戰ひてこれを破る三年正月顯家に從つて鎌倉に赴き會〻今川心省三浦義高と阿宇賀川に戰ひて大に之を破り進んで泉州阿部野に從ひ高師直と會戰し顯家敗死し師行また力戰して死す從死者凡百八人(南部五世傳)

ナンブ リシヤウ 南部利祥 陸軍騎兵中尉伯爵なり嘗奥州盛岡藩主南部利恭の長子にして水戸烈公齊昭の孫に當れり學習院在學中品行方正學績優等なり以て東宮の御附に選ばれ後東宮御學問所を設けらるゝに及び共に退學して御附となる夫より陸軍士官學校に入り三十六年六月騎兵少尉に任ぜられ俊秀の名高し三十七年日露戰役起るに及び近衛騎兵聯隊附として從

軍し戰地にて中尉に進みしが三十八年三月奉天附近の大會戰に奏興し遂に同四日井口嶺に於て戰死を遂〻年二十四戰功に依り勳六等功五級に叙せらる性淡泊灑洒にして好簡軍人たるの素質を有せり其將に家を辭して外征の途に上らんとするや舊藩臣等宴を催して別を惜しむ中尉之に告別の辭を述べて曰く「乃祖南部利直は剛勇無双關ヶ原に於ける勇戰の狀は史上に赫灼たり而かも利直の麾陣は二十三歲なりしと聞く余遠祖と初陣の年齡を同じふするからは之れに劣ら ぬ働きをなして遠祖の名を辱かしめざるべし勇は遠く乃祖に及ばざるべしと雖も意氣は即ち存す期する所一死のみ」と而して戰地に於て司令部附に任ぜられんとしたるを切に長官に請ふて戰線に立ちたりと云ふ

ナンブ ロクラウ 南部六郎 細川清氏の家人にして剛勇の士なり清氏黑田の勢と相ひ合し朝倉高景と京師に戰ひ敗れて退く高景進躍す六郎獨り返戰して敵二十餘騎と戰ひ十二三騎を斬りて死す(本朝武功正傳)

ナンペイ 南屏「ザカウジナンペイ」
ナンポ 南畝「オホタナンポ」
ナンポ 南甫「キクガハキウエイ」
ナンポ 南甫「ヲカヤスナンポ」
ナンポ 南甫「イハモトコンクワン」
ナンポ 南浦「ブンシ」
ナンホウ 南豐「トウナンホウ」
ナンボク 南北「ツルヤナンボク」
ナンボク 南北「トウザイアンナンボク」
ナンポク セウメイ 南浦紹明「ダイオウ」
ナンミヤウキン 南明院「アサヒノカタ」
ナンメイ 南溟「カメヰダウサイ」
ナンメイ 南溟「ハルキナンメイ」
ナンメイ 南溟「イリエナンメイ」
ナンヤウ 南野「カツラヒロヤス」
ナンヤウ 南洋「カガハケイヨ」
ナンヤウ 南陽「ヤマモトナンヤウ」
ナンヤウ 南陽「ニヰダナンヤウ」
ナンヤウ 南陽「キクチナンヤウ」
ナンライ 南雷「セキナンライ」

ナムラ ジャウハク 苗村常伯 一に丈伯と云ふ近江八幡の醫なり通稱は道益名は常伯三友又介洞と號す世々醫を業とす儒を伊藤仁齋に學ぶ寛延元年十月廿三日歿す年七十五、家訓往來頭書、貞永式目頭書、理窟物語、女重寶記等の著あり(諸家著述目錄、皇國名醫傳)

ナムラ タイザウ 名村泰藏 天保十一年十一月一日を以て長崎に生る姓は北村幼名を元儲と稱す長じて元四郎と改む後名村家を襲ぐに及んで更に其姓名を改めたり養父は和蘭通詞なりしかば泰藏亦蘭語を學ぶ後和蘭語より英語に入り更に獨佛の二語を學び慶應二年佛國巴里に於て萬國博覽會の開設せらるゝに徳川民部大輔に隨行し親しく彼地の文物を視察し帰朝の所多かりき明治二年佛學局助教を申付けられ五年司法刑江藤新平理事官となりその歐洲巡遊に際し隨行を仰付けられ六年十一月司法權大書記官に任ぜらる同年十一月歸朝す八年正七位に叙し醫譯課長に任ぜらる九月別局刑法草案取調委員仰付けられ十二年十月法草案審査委員仰付けられ十三年三月太政官少書記官に兼任し十四年十月司法權大書記官に任ぜらる同年十一月海上裁判所取調委員を命ぜられ參事院員外議官任ぜらる十五年六月勳五等に叙し瑞光旭日章を授けらる同十二月司法大書記官に任じ內閣委員仰付けられ十九年一月大審院檢事長に補し勅任官二等に叙ぜられ二十六年三月免ぜらる同九月高等官一等に叙ぜられ尋で退職し從三位に叙ぜらる二十七年一月貴族院議員に勅任ぜらる在官四十年勤勉と忠實とを以て始終し其大審院檢事長時代に於ては加波山事件大阪騷動事件の審理に當り大に其技倆を現はしたり又夙に製鐵業造船業の必要を認め政府當局に建議して實獻する所尠からず明治初年法律取調の任を帶びて佛國に到り碩學ボアソナードと相識り覓に之を政府の顧問として傳入れ相扶けて刑法治罪法の編纂を大成し早く佛國法律の輸入を爲したるも泰藏の力に依る退職後は株式會社東京瓦地活版製造所の社長として實業界の爲めに盡瘁せり四十年九月六日病を以て逝く年六十八病革まるに及び特旨を以て位一級を進め正三位に叙せられ計音天聽に達するや祭葬料を賜ひ勅使を其邸に遣はして幣帛を下賜せらる小石川傳通院に葬る

ナンリウキン 南龍院「トクガハヨリノブ」
ナンリウヨウ 南陵「アラキダオキマサ」
ナンリウヨウ 南梁「チヤウバイダワイ」
ナンレイ 南嶺「スズキナンレイ」
ナンレイシ 南嶺子「タダヨシトシ」
ナンロウ 南樓「セキキネイ」
ナンヰノ オトド 南院大臣「フヂハラミチタカ」
ナンヰン コクシ 南院國師「ソエン」
ナンヰン シンワウ 南院親王「コレタダシンワウ」
ナヤ セイタラウ 那谷清太郎 陸軍歩兵大尉なり石川縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て歩兵第八聯隊附として從軍中三十七年九月二日遼陽附近に於て戰死す戰功に依り勳五等功五級に叙せらる
ナラエンヰンノ カタカヒンワウ ミヤ 那羅延院宮「チ
ナラザキ カウジフラウ 楢崎剛十郎 譯は義綱長州藩主の一族なる毛利隱岐の家人なり文久三年の九月井手孫太郎と共に密に九州に下り鎭西諸藩の形勢を探査して歸る後奇兵隊に入る明治元年夏京都に上る者多く剛十郎も同じく之に赴きしに七月十九日の變起り事敗れて一旦藩に歸りしが幾もなく室蘭海邊に於て第二奇兵隊を編成するに及び剛十郎其書記役となる其後思ふ所ありて備中倉敷の陣營に行きしに立石孫一亦此に來り四月四日隊の兵士相會して議する所あるも議論合はず剛十郎怒て勵聲諸士を叱咤し漸く事無かりき然れども之が爲め痛く怒を買ひ壯士等の爲めに暗殺せらる年二十九明治三十五年十一月朝廷特に從五位を贈らる
ナラザキ ゴジラウ 楢崎小次郎 陸軍歩兵少佐なり愛媛縣出身にして明治三十七八年日露戰

役に於て後備役より召集せられ後備歩兵第六聯隊附として從軍中三十八年三月五日清國盛京省沙河堡東南方畑地に於て戰死す戰功五級に叙せらる

ナラザキ　ハチラウ　奈良崎八郎　放南と號す慶應元年十月を以て福岡城下に生る天資穎悟嗣藻に富み書を善くす夙に同郷頭山滿の感化を受けて圖南の志を起す明治二十一年上海に航し爾來清韓の地を往來して寧處なく二十六年東學黨の蠢起るや同志を率ゐ韓國全羅道に上陸し附近の要地を占領せり幾もなく博多に歸り福陵新報の通信記者として平壤に赴き東學黨の首領を煽動して其對清行動を益々激烈ならしめたり翌年日清開戰起るや同紙の戰地特派員となりて大島混成旅團に從ひて戰況を通信す同戰役後臺灣に渡り陸軍通譯の名を以て高島將軍の麾徒討伐軍に從ひ其職務に精勵したり三十七年日露戰役起るや横川神の志士と共に特別任務班に入りて横川班と前後して北京を出て爾來東清鐵道に沿へる東蒙古の各地に在り滿蒙の馬賊を糾合して中立地帶に於ける敵の行動を監視し得利寺の會戰遼陽の大戰に於て毎に敵を壓撲して殊功を奏せり然るに三十八年三月奉天大會戰の央に於て馬上某地點を視察しつゝありしに偶々其乘馬氷上に足を失したる爲め馬上より墜落し爲めに病を發したるか一旦癒えて再び軍務に奮拳せしも身心過勞の爲め遂に肺患に變し三十九年六月歸朝して東京に在りて療養せしも其効なく四十年五月二十日逝去の前約一月忘年盛下の變報到るや士論功賞の事あり八郎を以て勳六等に叙し旭光旭日章並に金四百圓を下賜せらる

ナラザキ　ヤヅエモン　奈良崎彌左衛門　茶人なり千利休に茶道を學びて能くせり（茶人系傳全集）

ナラザキ　ヤヤチラウ　楢崎彌八郎　諱は清義節庵と號す長藩士馬廻楢崎寛治の子なり萬延元年江戸に遊び勤王家大橋順蔵に學ぶ後ち京師に上り久坂義助等と王事に盡力す文久二年三月三條實美詔を奉じて關東に使するや彌八郎之に隨從し左右を離れず以て糊の路餬に答ふ翌年攘夷の詔下るに及びて國に歸り小郡三田尻海岸防禦の參謀と爲る九月右筆に擢でられ手廻組に入り機密に參與す元治元年蛤下の變報到るや彌八郎自ら皆を引き免職を請ふ允されず既にして驚議起り俄に職を免はれ山田亦介等と共に野山の獄に繫かれしか十二月十九日運果者と共に斬られる時に年二十八明治二十四年十二月朝廷其忠志を追賞して特に正四位を贈らる（甲子殉難士傳、殉難錄稿）

ナラ　サダトシ　奈良貞利　雪勝の子にして八郎左衛門と稱す幕府の畫繪師なり元祿二年幸阿彌系圖）

ナラ　シゲハル　奈良重治　金工なり俗稱を重兵衛と曰ふ江戸の人利永の門弟なり（裝劍奇賞）

ナラ　ジョウイ　奈良乘意　初め太七と稱す奈良善三の門人なり一に鷺堂永春と云ひ後ち杉浦仙右衛門と改む深川御屋敷に住す其の彫工鍛錬精到己に名人の域に至り奈良風の一派にて肉合彫と云へる創始せり之を其の師善三の技に比するに遙に精巧にして實に超凡の奇工と云ふべし其の鑒や直にして氣品を有せり四日殁す（裝劍奇賞、奈良系圖）

ナラ　ソウイウ　奈良宗有「ナラトシハル」
ナラ　ソウカン　奈良宗閑「ナラトシナガ」
ナラ　ソウテイ　奈良宗貞「ナラトシテル」
ナラ　ソウテイ　楢園「コデラキユキ」
ナラダタラウ　奈良太郎　美濃關の刀匠にして正應年間の人なり又兼永の子兼正及兼家の子兼常並に奈良太郎と稱す蓋し父祖兼永大和の奈良より來る故なりと云兼正兼常の項を看よ（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考）

ナラ　ツネカズ　奈良常和　金工なり俗稱を喜六と曰ふ江戸に住す彌五八の門弟なり其の名世に顯る（裝劍奇賞）

ナラ　テイ　奈良帝「ヘイゼウテンワウ」
ナラ　トキフサ　奈良辰房　金工なり金平と稱す彌五八の門人江戸に住す（裝劍奇賞）
ナラ　トキマサ　奈良辰政　金工なり忠左衛門と稱す利永の弟子にして江戸神田に住す（裝劍奇賞）

ナラ　トシテル　奈良利輝　金工奈良氏の祖なり小左衛門と稱す後周防と曰ふ寛永元年幕府に召さる或は云く其の初は漆工なりと剃髪の後ち宗貞と號す（金工便覽、裝劍奇賞）

ナラ　トシナガ　奈良利永　金工なり七郎左衛門と稱す江戸神田に住し願る裝刀の妙を得たり長子利光父の名を襲ひ宗閑と號す是れ亦た裝刀に巧みなり（裝劍奇賞）

ナラ　トシハル　奈良利治　金工なり通稱四郎兵衛と稱す利輝の子なり江戸に住す後薙髪して宗有といふ景色を彫るに長ず其の彫技清楚にして頗る氣象あり妙手の名一時世に顯はる（裝劍奇賞、古今金工便覽）

ナラ　トシヒサ　奈良利壽　金工なり俗稱を太兵衛と曰ふ江戸本所に住す住吉利永の門弟にして名人の評あり其の細工は家風にも非らず横谷風にもあらず草花鳥類尊甚しほらしく世競ひて一流と稱美す是より先き緣のこしきは二三分なるが流行して奈良風を擬する人多く其の類種々あれども皆な利壽の彫技に及ぶものなし然るに當時奈良彫のしほらしきものには必らず利壽の銘を彫するあるを見れども是れ燕石の玉に似たるの類にして下和氏の一顧に分るべし元文元年十二月十四日殁す年七十（裝劍奇賞、奈良系圖）

ナラ　ノブタカ　奈良陳孝　俗稱を伊八と云ひ江戸小傳馬町二丁目新道に住す頗る彫技に通ぜり（裝劍奇賞）

ナラノミヤニ　アメノシタ　シロシメステンワウ　平城宮御宇天皇「カウケンテンワウ」
ナラノミヤニ　アメノシタ　シロシメステンワウ　平城宮御宇天皇「シヤウムテンワウ」
ナラノミヤニ　アメノシタ　シロシメステンワウ　平城宮御宇天皇「ゲンメイテンワウ」

ナラバヤシ　イウセン　楢林由仙　良醫なり京師の人、家世々外科を以て名あり由仙人となり恬淡寡欲其の技を街はず且つ潔癖あり常に門戸を閉ぢ人來りて名を通ずれども肯へて開かず故を以て治を請

ふもの稀なり因て家常に貧し出るに僕從なく入るに奴婢なし中歳妻を喪ひ獨り二子と居る寛政中殁す年七十五（續近世叢語、續近世畸人傳）

ナラバラ　アヅマビト　楢原東人　神魂命五世の孫天道根命の後なり世々大和葛城上郡楢原村に家す因て氏とす天平七年正六位上を歴て外從五位下に叙せらる十八年從五位下に進み駿河守に任ぜらる勝寶二年部内麁原郡多胡浦に黄金を獲て之を獻じ勤臣の姓を賜ふ是年從五位上に叙せられ明年正五位下に進む五年大學頭に任ぜられ大學博士を兼ね東人少にして學を好み五經に該通し號して名儒と爲す又た和歌を善くするを以て知らる詠歌は載せて萬葉集に在り（萬葉集作者履歴）

ナラハラ　シノブ　奈良原忍　陸軍歩兵中佐なり薩藩士にして幼時父母を喪ひ伯父吉田清成の養育に依り人と成る明治二十七年日清戰役には歩兵大尉を以て威海衛攻撃に參加し殊功を奏し少佐に進む其後來領馬尻刺滯在を命ぜられ居ること三年三十六年歸朝して參謀本部附となる三十七年日露戰役起るや近衛歩兵第四聯隊大隊長として從軍し第一軍に屬して鴨綠江以來十數回の戰鬪に參加し勇名を現はせり三十八年三月奉天附近の大會戰に於て後松木堡子附近に戰ひ負傷し同四日候家屯南勾近衛師團第二野戰病院にて遂に死去す戰功に依り中佐に昇任し勳四等功四級に叙せらる

ナラハラ　ノブマサ　楢原陳政　外交官なり東京の人原と井上を賀す明治十年の頃官費を以て紙幣局幼年教場に入り在ること數年十五年時の清國公使何如璋の歸國に方り隨伴して如璋の郷里廣東省大埔縣に至り會曲園の塾に漢學を修むること八年餘業成りて歸朝し姓を楢原と改め二十三年八月英國公使館書記生となりて倫敦に遊び大學に入り學ぶこと三年學位を得て歸朝すること二十八年馬關談判の際譯官として之に參す三十二年十一月公使館二等書記官として四公使に從ひ北京に赴任す三十三年五月會北清拳匪の亂に於て北京公使館匪徒の包圍する所となるや義勇隊に加はり防禦に從事中七月十一日左脚下部を砲彈の爲めに傷けらる直に病院に送りて加療せしが同月二十四日遂に逝く

ナラヒ　ヒサナガ　奈良壽永　金工なり善三と稱す江戸神田於玉ヶ池に住す利永の門弟なり（裝劍奇賞）

ナラ　マサシゲ　奈良正重　裝劍彫工なり江戸八丁堀に住す俗稱を新太郎と云ふ奈良正親の弟子なり（裝劍奇賞）

ナラ　マサチカ　奈良正親　金工なり俗稱清六初め和泉と稱す正長の男江戸横山町三丁目に住す正長の歿後二三年は銘を正長とも銘す乘意は其の伯母聟なるを以て切り後ち又た正親と銘す乘意弟子分となる正長の弟子分となりしと云ふ其の彫技は父に及ばずと雖も亦た決して庸工と云ふべからず（裝劍奇賞）

ナラ　マサナガ　奈良正長　金工なり清六と稱す利永の門人江戸淺草城門内馬喰町四丁目に住す其の技精美にして力あり薄に蟠郷又た秋野の景など殊に佳なり其の彫琢は疎密を兼れて能く鍛錬せしとぞ（裝劍奇賞）

ナラ　マサノブ　奈良正敷　金工なり善六と稱す正永の弟子にして江戸兩國駒留橋に住し菊壽と號す初め正次と云ひ中ごろに至り正幸と改め後正敷と稱す又一に龜光とも銘す老後大阪に移り嶋龍を彫るに妙を得て一流を爲せり（裝劍奇賞）

ナラビガヨカノ　ウダイジン　双岡右大臣「キヨハラナツノ」

ナラ　モザエモン　奈良茂左衛門（二世）　奇人なり初の名は茂松、泰我と號す、世々深川黒江町に住す材木商なり姓は神田氏（三代は江戸靈岸島に住す）泰我四十萬兩の資産を父より受け驕奢なこのみ遊里芝居等に千金を費す吉原中むと聞て之れを愛す玉菊酒の淺草新堀永見寺に葬るそのひそむる菊よりも心しほらしく秋の夕べれ一の歌を詠じて之を弔す翌享保元年一周忌の追善に俳諧乾什なして淨るりの文句を作らしめ十寸見河丈、山彦源四郎を玉菊の墓に詣て「いと早くつて淨るりの文句を作らしめ十寸見河丈、山彦源四郎を玉菊の墓に詣て「いと早くつて曲譜を附せしめ水調子と名づけて謂らしむ今弦闌盆會に吉原遊廓燈籠を點ずるも此の時茂左が玉菊を弔ひ七月十一日左脚下部を砲彈の爲めに傷けらる直に病院に送りて加療せしが同月二十四日遂に逝く

ナラ　ヨシナリノ　イモウト　奈良義成妹　殊色あり性和歌を好み兼て書を善くす義成永祿中伏見に寓し四岡の人貞光久左衛門に歌を吹笛を學ぶこと累年久左妹女の美色あるに愛慕し懇請して以て妻となさんとす久左嘗て金氏を娶る方に之れを離別せんとす義成辭して曰く前妻を逐ひて以て我妹を配するは人倫の道に非ず請ふ辭せんと久左思慕益々切、義成竊に母と相議して妹を諭し婚を野村高勝に約す時に將軍足利義昭本國寺に在り三好黨急に起ちて本國寺を襲撃せしより始まる茂左衛門後上方に登り歸途病を得て享保十年九月三日三十一歳を以て殁す（或は曰く六十三）

ナラ　ヨシナリ　奈良義成　金工なり善三と稱す江戸淺草城門内馬喰町四丁目に住す其の技精美にして力あり薄に蟠郷又た秋野の景など殊に佳なり其の彫琢は疎密を兼れて能く鍛錬せしとぞ（裝劍奇賞）

ナラ　ヨシヒサ　奈良善久　金工なり善三の門人江戸淺草城門内馬喰町四丁目に住す其の技精美にして力あり薄に蟠郷又た秋野の景など殊に佳なり其の彫琢は疎密を兼れて能く鍛錬せしとぞ（裝劍奇賞）

ナラ　ヨシヒサ　奈良善永　金工なり善三と稱す江戸神田於玉ヶ池に住す利永の門弟なり（裝劍奇賞）

ナラ　ヨシヒサ　奈良善久　金工なり善三と稱す江戸淺草城門内馬喰町四丁目に住す其の技精美にして力あり薄に蟠郷又た秋野の景など殊に佳なり其の彫琢は疎密を兼れて能く鍛錬せしとぞ（裝劍奇賞）

ナラヤ　イチエモン　奈良屋市右衛門　江戸町年寄なり祖先は大館氏の族にして奈良に居る市右衛門家康に三州に仕へ從て江戸に出づ子孫世々町々支配を命ぜられ神田玉川兩上水の支配と關口小日向金杉諸村の代官を兼ね後草に町年寄となる慶長年中東海道及び中仙道に一里塚を築く市右衛門檜屋左衛門と共に命を受けて之を司どる子孫世々町年寄として年始及び上野芝廟御成の事ある毎に將軍の謁を賜ふを例とす（環齋記聞）

ナラヤ　イチエモン　奈良屋市右衛門　江戸町年寄なり祖先は大館氏の族にして奈良に居る市右衛門家康に三州に仕へ從て江戸に出づ子孫世々町々支配を命ぜられ神田玉川兩上水の支配と關口小日向金杉諸村の代官を兼ね後草に町年寄となる慶長年中東海道及び中仙道に一里塚を築く市右衛門檜屋左衛門と共に命を受けて之を司どる子孫世々町年寄として年始及び上野芝廟御成の事ある毎に將軍の謁を賜ふを例とす（環齋記聞）

ナラヤ　ヤスチカ　奈良安親　金工なり本姓を土屋と稱し俗稱彌五八後に東雨と號す江戸神田龍閑町に住す奈良氏政の弟子なり當時妙手と稱す其の風利壽に似て同かゝず譬へば光琳の梅を畫き千鳥を鮮するが如き他畫の梅又た千鳥に比すれば其の趣異なれども孰れの人が見ても梅と云ひ千鳥と見るが如く奇を好みて自然の妙域に至れり是に因て後年に至り贋造多く出たれども固と庸手の擬すべきものに非ざれば具眼の士は忽ちに其の眞贋を辨ずべし延享元年九月廿七日殁す年七十五（裝劍奇賞、奈良系圖）

ナラ　ユキカツ　奈良雪勝　八左衛門と稱し幕府の畫繪師なり延寶八年幸阿彌榮田等と共に德川家綱の廟に畫繪せり（幸阿彌系圖）

ナラ　ユキヨシ　奈良幸良　裝劍彫工なり奈良正敷の門人にして一に幸芳と銘す江戸淺草三軒町に住せり（裝劍奇賞）

呼ぶ義成騎を趨らし接戰して遂に之に死す久左伏見に到り妹女を審ひ去りて之を子舍に寓く妹女伴りて色を和らげて曰く妾聞く我夫越中左近と並びに陣歿すと今ま已に孤寡たり請ふ君少しく憐哀を垂れ願くは妾を鄉里に致し以て母氏の情を慰めよと乃ち書を作りて髮毛を裁し以て封緘して之を久左に託す久左人を遣はして之を伏見に送る母氏之を閲するに歇あり曰く「思河深淵瀨は早けれどきそふ水には名を流さめや」と狀を具して以て報ずるや母悲泣して使者の面前に自殺す使者驚き歸る久左大に悅び女に餙して戲狎し將に迫らんとす妹女奮起し久左の佩刀を拔て之を刺殺し自らも亦腹を剖て死す他日信長之を聞て曰く貞光は不義不仁誠めざる可らずと乃ち其妻孥を捕て磔殺す(野史)

ナラリ リゲン 奈良理玄 金工なり江戸に住し裝劍家を以て聞ゆ(裝劍奇賞)

ナラリ ヲノジラウ 奈良鉞次郎 陸軍少兵少佐なり岡山縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て後備步兵第九聯隊附として從軍中三十七年八月二十二日旅順要塞東鶏冠山に於て戰死す戰功に依り勳四等功五級に叙せらる

ナリアヒ オホエ 業合大枝 備前の古學者なり初め藤井高尚の門に入て修し後平田篤胤に從ひ古學を研究して大に進み時に稱せらる(鑒定便覽)

ナリイヘ 成家 備前長船の刀匠にして二世重吉の子なり廉安永和年間の人或は云三世安部重吉の子にして明德比の人なりと(古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考)

ナリイヘ 成家 備中古刀の鍛工なり或は云片山に居る弘長年間の人(古今鍛冶銘早見出)

ナリイヘ 成家 備中青江の刀匠にして業高の子なり弘安年間の人或は云安貞比の人或は家眞の子にして正嘉比の人なりと(古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考)

ナリカゲ 成景 備前長船の刀匠にして永和年間の人なり(古今鍛冶銘早見出)

ナリカゲ 業景 備前の刀匠にして元暦比の人なり或は云永萬比の人或は眞定の子にして廉和永久年間の人なりと(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考)

ナリカネ 成包 備前の刀匠にして高綱の子なり仁平比の人或は云高綱の三子にして寛喜貞永年間の人なりと(古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考)

ナリカネ 成包 備前吉岡一文字派の刀匠にして貞應年間の人なり(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考)

ナリカネ 成包 備前長船の刀匠にして貞治年間の人なり或は云文保比の人なりと(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考)

ナリクニ 成國 上野の刀匠にして天文年間の人なり(古今鍛冶銘早見出)

ナリクニ 成國 赤松氏播磨の刀匠にして刀銘に菊一を刻す新刀の作者なり(古今鍛冶銘早見出)

ナリコ ナイシンワウ 體子內親王 後堀河帝の第二女室町院の同母妹なり母は中納言藤原家行の女なり建長八年內親王となり三宮に准ぜられ院號を賜はりて神仙門院と云ふ弘長元年十二月尼となる法名妙智覺時に年三十二正安三年十二月二十七日薨ず年七十一(女院小傳、女院記)

ナリコ ナイシンワウ 成子內親王 中御門帝の女にして宮人源氏の生む所なり享保十四年八月生る齋宮と稱す元文二年五月幕府傳奏に敕を請て先帝公田の內一百石を以て成子の湯沐邑となす三年六月內親王に遷す明和三年三月二品に叙す八年十三歲菩提院と號し盧山寺に葬る(野史)

ナリコマヤ 成駒屋(ナカムラシクワン)

ナリサダ 成定 藤原鉄下阪氏常陸大目と稱す又常陸大掾と稱す越前鶴井の刀匠にして寛永年間の人

ナリシゲ 成重 上野の刀匠にして天文年間の人なり(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考)

ナリシゲ 成重 六兵衛と稱す出羽秋田の刀匠にして天文年間の人なり(古今鍛冶銘早見出)

ナリシゲ 成重 備前長船の刀匠にして明德應永年間の人なり或は云延文比の人と(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考)

ナリシゲ 成重 備前の刀匠にして高綱の子なり仁平比の人或は云高綱の三子にして寛喜貞永年間の人なりと(古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考)

ナリシゲ 成繁 藤原姓鶴前下阪派の刀匠にして貞享年間の人なり(古今鍛冶銘早見出)

ナリスケ 成助 備前長船の刀匠にして永和年間の人なり或は云文和比の人と(古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考)

ナリスケ シンホウシンワウ 成輔親王「ソンシンワウ」

ナリタ ウヂナガ 成田氏長 長泰の子なり忍城に居る始め長泰羽生を攻て拔ず氏長赴て之を圍み攻む敵兵力竭きて和を乞ふ永祿九年氏長泰を逐はんと欲す成らず長泰怒りて之を見ず十二年長泰相見るを敕し本丸に入らしむ氏長左馬助下總守と稱す天正十八年關白秀吉小田原を征す氏長弟泰高と小田原に在り忍城は山東七城の一にして古より未だ陷ちざる者なり氏長の女美にして勇、士卒を勵し固く禦ぐ六月石田三成等兵二萬を分ち來りて曰く城四邊泥沼づくを得ずと遠圍ひ巢ぬ或人井樓を構へ銃戰せんと曰ふ三成謂らく此城嶮にして糧食矢丸亦た盡きず水攻に如かずと乃ち人夫を募り堤を構ふ城中の農商出て〻土石を運び備饌を得て粮米に換へ城に送る糧因て乏しからず堤成る利根川を斷ち江原堤を塞ぐ時會〻旱り乃ち荒川を導き水を瀉ぐ水城壁を浸す城兵是より先只〻飲水の乾くに苦む是に至りて却て大に便を得十六日雨降り水漲り西堤忽ち壞れて水反つて敵陣に入る後漸〻落るに至るも道路淤泥進退に便ならず徒に遠く圍むのみ諸將終に拔く能はず氏長連歌を好み秀吉の書記と相識る秀吉之に諭し書を氏長に送り降を勸む氏長悅び諾す北條氏直氏長を召す往かず尋で秀吉城中に諭し廿七日守者城を致して去る元和二年十二月氏長卒す(野史)

ナリタ ウヂムネ 成田氏宗 長泰の二男にして左馬助と稱す見長邦蛋く死し子房長尙幼なるを以て代て家事を攝す初め小田原の陷るや氏長秀吉に內應ぜんとし事露れて果さず秀吉約に違ふを責め食邑を沒收す或人氏長の女の美を告ぐ秀吉召して之を寵す次年夏九戶の亂起る氏長の女父の爲めに請ひ鳥山城を授く氏長長邦之に居り邑一萬石を領す關原の役氏宗房長を扶けて太田原に屯す大阪冬夏の役軍に從ひて功あり二月暴に死す故あり采邑を沒收せらる房長慶〻哀訴す聽されず是に至て成田氏亡ぶ(野史)

ナリタカ 成高 備前の刀匠にして元暦比の人或は云嘉歷比の人紀藤次と稱すと又云高光の子にして承安治承年間の人或は延久比の人にして一名成實紀藤次と稱すと或は亦成室に作ると(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考)

ナリタカ 成高 豐後高田の刀匠にして天文年間の人なり(古今鍛冶銘早見出)

ナリタカ 業高 備中青江の刀匠にして知道の子なり寶治年間の人或は云則實の二子にして建保比の人又云正恒の流にして貞永比の人なりと(古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考)

ナリタカ 業高 備中松山の刀匠にして天文年間の人なり(古今鍛冶銘早見出)

ナリタカ コサブラウ 成田小三郎 醫者なり阪東の人初め院の雜色たり元弘の役に後醍醐帝の笠置に逃るゝや時に小三郎醫術を以て供奉す遂に從隱岐に往く帝の潛かに隱岐を出づるや小三郎往て名和長年に說きて義を唱へ王に勤めしむ恢復の業小三郎與りて力ありと云ふ(皇國名醫傳)

ナリタ サンザエモン 成田三左衛門 泉州の漆工なり後に飛騨に赴き國主金森重近の需めにより一の禽籠を作り黃漆を以て之を塗り大に賞せられ又高橋某が製せし守屋が洞の櫛笥の盆に螺技を施し大に賞せらる是れ即ち飛騨春慶の始めなりといふ元文年間三左衛門五世の孫成田正武といふ者あり亦螺技を善くし名手と稱せらる(工藝志料、漆工傳統記、塗師傳)

ナリタ シゲナリ 成田重成 又左衛門と稱し伯耆流拔刀術の名家なり片山久勝に從て其の宗を得(武術流祖錄)

ナリタダ 成忠 備前の刀匠にして建仁年間の人なり或は云丹藤次と稱す成高の門人にして文治比の人と(古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考)

ナリタダ 成忠 備前の刀匠にして貞應比の人なり(本朝鍛冶考)

ナリタダ 成忠 備前長船の刀匠にして建武年間の人なり(古今鍛冶銘早見出)

ナリタダ 成忠 備前長船の刀匠にして文明年間の人なり(古今鍛冶銘早見出)

ナリタダ ナガヤス 成田長泰 姓は藤原氏法性寺入道前關白太政大臣贈正一位道長の遠孫にして父を親泰と曰ふ長泰初の名は太郎五郎稱す上杉憲政に屬し天文五年九月碓氷嶺の役後小田原の北條氏と通じ上杉謙信に迫る天文二十二年謙信忍城を攻む城南池沼あり東西道狹く隍深く崖高く攻るに最も難し謙信親ら進む城兵櫓に上り銃を雖し謙信親ら進む城兵呼て曰く大將敵に背を示す何ぞ卑怯なるやと謙信轡を回し自ら矢石にて連發す中らず或人曰く猛勇此の如き者金彈に非れば益なしと則ち銃に得意の人を擇び三彈を放つ猶中らず城兵嘲を打ち鬨を揚げ呼て曰く英雄誠に敬す可し請ふ技を去れ謙信徐かに去る是夜字佐美定行謙信を諫めて曰く昔し八島の戰に義經弓を取り返す增尾某諫めて曰く一小器の爲に千鈞の軀を棄て矢石を犯して士卒と爭ふ是れ猪武者なりと謙信曰く生んと欲すれば死し死せんと欲すれば生く善く節を守る者は水に溺れず火に燒けずと明日越後の軍陣際に薄る北條氏の軍廠橋に入ると聞き謙信乃ち軍を收て還る長泰又聞き謙信に屬す永祿三年春謙信鶴岡の祠前に上杉氏を葬ひ謙信に屬す長泰憲政に屬し天文五年九月碓氷嶺の役後小田原の北條氏と通じ上杉謙信に迫る天文二十二年謙信忍城を攻む城南池沼あり東西道狹く隍深く崖高く攻るに最も難し謙信親ら進む城兵櫓に上り銃を雖し謙信親ら進む城兵呼て曰く大將敵に背を示す何ぞ卑怯なるやと謙信轡を回し自ら矢石にて連發す中らず或人曰く猛勇此の如き者金彈に非れば益なしと則ち銃に得意の人を擇び三彈を放つ猶中らず城兵嘲を打ち鬨を揚げ呼て曰く英雄誠に敬す可し請ふ技を去れ謙信徐かに去る是夜字佐美定行謙信を諫めて曰く昔し八島の戰に義經弓を取り返す增尾某諫めて曰く一小器の爲に千鈞の軀を棄て矢石を犯して士卒と爭ふ是れ猪武者なりと謙信曰く生んと欲すれば死し死せんと欲すれば生く善く節を守る者は水に溺れず火に燒けずと明日越後の軍陣際に薄る北條氏の軍廠橋に入ると聞き謙信乃ち軍を收て還る長泰又上杉氏を葬ひ謙信に屬す永祿三年春謙信鶴岡の祠前

ナリトミ　ヒャウゴ　成富兵庫　加藤清正の臣なり能く水利の術に通ず嘗て筑後に往還の道凡一里餘りを掘りて道を作り大河より水を取り田地十萬石ほどに漑き入る實に九州に類ひなき土工とす（經濟問答秘錄）

ナリナガ　シンワウ　成良親王　後醍醐帝の第七子にして母は宮人藤原廉子なり元弘元年上野太守となる足利直義之れに副たり出でゝ鎌倉を鎮す建武元年征夷大將軍に拜せらる二年北條時行兵を起して鎌倉を襲ふ成良直義と去りて三河に留る大江時古成良を奉じて京師に還る三年冬足利尊氏帝を華山に幽す光嚴院成良を廢して京師に幽す後ち恒良親王と俱に害に遇ふ（大日本史）

ナリノブ　ナリノリ　成信「ヒシダナリノブ」　成則　備前吉井の刀匠にして正中年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ナリノリ　成則　備前長船の刀匠にして後光の門人延文貞治年間の人なり或は云氏則の子なりと（本朝鍛冶考）

ナリノリ　成則　備前吉井の刀匠にして後出雲に移る應永年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ナリヒロ　成廣　山城堀川の刀匠にして國廣の門人なり元和年間の人（古今鍛冶銘早見出）

ナリヒロ　成弘　備前長船の刀匠にして永和年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ナリミツ　成光　備前長船の刀匠にして文和延文年間の人なり（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ナリミツ　成光　備前長船の刀匠にして文和延二世成光は長船に住す應永年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ナリミツ　成光　備前長船の刀匠にして長祿延德年間の人なり或は云明應永正年間の人と（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ナリムネ　成宗　備前福岡の刀匠にして則宗の子なり承元年間の人或は云則宗の二子にして文治建久年間の人後京六波羅に住す或は建暦比の人にして助宗の子又は建長比の人なりと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考）

ナリムネ　成宗　讃岐の刀匠にして亦播磨に住す永和年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ナリムネ　成宗　法華一文字と稱す天正年間の刀匠にして何れの國の人なるを詳にせず（古今鍛冶銘早見出）

ナリムネ　業宗　三河の刀匠にして眞守の子高篠三郎太夫と稱す元亨正中年間の人なり或は云弘安比の人と一說に讃岐の業宗と同人なるべしと云（本朝鍛冶考）

ナリムネ　業宗　三河中原の刀匠にして文明年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ナリムネ　業宗　讃岐の刀匠にして清房の弟なり承久年間の人或は云高篠三郎太夫と稱し尾越業宗と瓢銘す建保比の人なり又云文和比の人或は正治比の人にして高篠三郎太夫と稱す或は大治比の人なりと（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考）

ナリムネ　業宗　讃岐の刀匠にして景光の子文永比の人なり或は云國利の子にして康永比の人なりと（本朝鍛冶考）

ナリムネ　業宗　讃岐の刀匠にして亦播磨に住す永和比の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ナリモリ　成盛　備前の刀匠にして貞和年間の人なり或は云大宮の派なり或は云宗延の子にして乾元比の人なりと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

ナリワウ　生王　一名生卿安藝の刀匠にして安行の門人應永比の人なり（本朝鍛冶考）

ナルカハ　ハルアキラ　生川春明　國學者なり伊勢の國安濃津の人名は正香通稱は三良助、鳴鶴ぐな業とす幼より書籍を好み俳諧より川と號す藥を鬻ぐな業とす幼より書籍を好み俳諧より和歌に入りふかく言靈の奇を悟り同國山田の足代弘訓の弟子となり語學を修め旁ら西洋の語法を參へ考へ輯の響百卷を著す其の他開化文章論、皇國語學自在、言葉二路、和蘭活詞考、祖篇獲句條詞、俳人大系圖、俳諧古物語、近世女風俗考、同男風俗考、奇述職人考及び好問奇賞、好問漫錄等の著書多く世に行はれ其の正淡にして妄に人に交らず江戸に遊び山東京傳柳亭種彥等と友たり父清八世に在るや朝夕たゝ雌視に對するのみ四十二歲にして父に別れ子武助年僅に十五止むことを得ず家業を視る安政紀元妻松林氏を亡ひ明年家を武助に讓り剃髮して讀書に耽る春明又手工に巧みにして常に左手を以て木石を彫刻す文久中夙くも寫眞鏡の技術を學び明治の後は斯の技を以て產業の助けとしたりと云ふ二十三年八月七日八十七歲にして歿す伊勢津教圓寺に葬る

ナルコ　ナイシンワウ　トクキチ　成澤得吉「タツチモンキン」　陸軍歩兵大尉なり山形縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て第八師團歩兵第卅二聯隊附として從軍中廿八年三月一日清國盛京省月堡子附近戰鬪の際負傷同日黑溝臺戰地定立病院に於て死去す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ナルサハ　トヨジ　成澤豐治　陸軍歩兵中尉なり山形縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て豫備役より召集せられ第八師團歩兵第卅二聯隊附として從軍中卅八年一月廿八日清國盛京省蘇麻堡附近に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ナルシマ　カウザン　成島衡山　江戸の儒者なり字は叔飛名は勝雄初め峯雄と云ふ通稱仙藏龍洲の養子文化十二年七月六日歿す年六十八本所本法寺に葬る（江戸名家墓所一寛）

ナルシマ　キンカウ　成島錦江　德川幕府の應下なり名は鳳翔一の名は信通、字は歸德、又子陽錦江は其の號、又芙蓉道人と號す通稱道筑、成島氏倭訓鳴島に同じ故に假倚して鳴氏となす隆興白河に生る（一說に羽州山形に生ると）本姓平井氏、錦江幼にして父宣休に從て江戸に移住す十七歲成島道雪の嗣となる性學を好みて徂徠の說を悅ぶ乃ち其の徒と周旋して一時著稱あり成島氏幕府に仕て坊主たり錦江其職を躍ふ元文二年同男の班に進む享保の間禮記明律を侍講し寵遇日に厚し十三經二十一史を賜はる其の他恩賜の書甚だ多く乃ち藏書の庫を建て號して芙蓉樓と曰ふ其の正面芙蓉雪嶺に對する以て名り又和歌を善くす其の傳冷泉公より出づ相州酒匂川畔々漂流して憑を爲す官吏

之を治めて功なし田中丘隅と云ふ者あり武州川崎の人なり錦江一見して其の常人に非ざるを察し當路の有司に薦て酒勾を治せしむ果して績効あり乃ち隄防を其東西に築き名けて文命と云ふ碑を立て以て事を記す錦江丘隅に代りて文を作る寶暦十年九月十九日歿す年七十二本法寺に葬る著す所飛鳥山碑文、詩歌題詠、絕句解比屑、みその鷹卷のみふれあり（先哲叢談、事實文纂、近代名家著述目錄、諸家人物志、墨定便覽）

ナルシマ　チクサン　成島筑山　幕府の儒者なり名は良讓別號は稼堂、又た竹樹と云ふ字は儉卿初め恒吉後恒之助と稱す東岳の養子實は杉本宗春院の子幕府の奧儒者となり命を奉じて南山史、列國譜、後鑑（三百七十餘卷）紫史吟評等を著す嘉永七年三月七日歿す年五十二

ナルシマ　トウガク　成島東岳　幕府の儒者なり邦之助と稱し後ち圖書頭と改む名は司直、字は邦之、一に翠巖と號す忠八郎和鼎の孫にして仙藏勝雄（衡山と號す）の子なり幕府の奧儒者となり三百俵を食む幕命を以て東照宮の實記を編し又た改正三河後風土記、鴻齋三戰記、琉球錄話、晃山拾葉等の著書あり文久二年閏八月二日歿す年八十五

ナルシマ　リウシウ　成島龍洲　江戸の儒者なり名は和鼎忠八郎と稱す錦江の子なり文化五年五月四日歿す本所本法寺に葬る（江戸名家墓所一寛）

ナルシマ　リウホク　成島柳北　初の名は溫字は叔厲確堂と號す後避くる所ありて名を弘字を保民と改む稼堂の子天保丁酉二月甲子を以て生る因て甲子太郎と稱す家は江戸柳原の北に在り因て柳北と號す幼にして穎悟學を好み詩文を能くす年甫めて十八家を嗣ぎ家定及び家茂二公の侍講に陞補し奧儒者に除せられ布衣班に進む幕命を以て東岳が著す所の東照宮實記五百餘卷及び稼堂が著す所の後鑑三百七十五卷の訂正の事を總裁し黃金及び時衣を賜はる俸を增し選ばれて內班に入る柳北器識あり能く時務を知り夙に西洋の學術世に益あるを見て其の說を主張し言議動もすれば權官に忤る一日幕政陵夷して諸侯の因循なるを慨き戲詩を作りて之を嘲けり遂に是を以て罪を獲て職を免ぜらる因て家居して出でず洋學士を延き專ら英學を攻む弟子喜びず柳北笑ひて顧みず課を徙る毎に故を聘し酒を嗜み家事を以て意に介せず室人交々諫む意侮如たり慶應乙丑幕府兵制を警革し柳北を擢て騎兵頭と爲し騎兵奉行に遷り騎兵操練を掌る更に俸を增して二千石に至る柳北文藝豪放の間に成長すと雖ども亦た好く兵を談ず力を陸軍に用ひ要路に建白す議論慨切深く時弊に中る而して終に行はれず病を謝して去る將軍職を解く爾して來る同好の士或は之を求め乃ち驚ぎて大利を獲たり而して之を柳橋の妓菖に擲つ一夕にして盡く其の胸懷の酒落なるを光風霽月の如し蓋し天性なり柳北幕府の上士たりて事に當りて活潑の論あり而して一たび軒冕を脫してより終身仕へず一枝筆を以て海內を傾動し高議厚俸以て其節を枉げず識者之を高しとす其自ら謚して文靖と云ふ私に謝安に比するなり柳北は男女十有七人あり叔復墨水の艸廬を嗣ぐ餘は或は夭し或は人に適く著はす所明治新撰呉譜、古錢鑑識訓蒙、柳北詩鈔、溫泉記行、航西日乘、航薇日誌、戲著は乃ち新柳情譜、京猫一斑、柳橋新誌等あり（朝野新聞）

ナルセ　カネキチ　成瀨兼吉　海軍機關兵曹長なり神奈川縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て軍艦平遠に乘組み從軍中三十七年九月十八日旅順口附近旭灣沖に於て平遠沈沒の際戰死す戰功に依り勳六等功七級に叙せらる

ナルセガハ　ドザエモン　成瀨川土左衛門　享保中江戸の角力にして身體肥滿なり時人水死する者身體膨脹して成瀨川に似たるを見る毎に土左衛門に似たりと言ふ後終に溺死者を呼びて土左衛門といふ

ナルセ　キウザウ　成瀨久藏　陸軍歩兵少尉なり岐阜縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て歩兵第三十六聯隊附として從軍中三十七年十一月一日旅順要塞二龍山戰鬪の際負傷同日長眷庵第三野戰病院に於て死去す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ナルセ　タイイキ　成瀨大域　書家なり名は溫字は子直、又太郎と稱す遠州日坂の人、書法を祖述し奇境を涉り驚泉に浴し紀行十數種を著し飄然神來由る所を見ず十七年十一月三十日病て家に歿す年四十八本所小梅村本法寺に葬る識して文靖と曰ふ、柳北頑にして强、面の長さ三尺人稱して馬と云ふ人と接して壞府を設けず故を以て交道甚だ廣し其酒を飲むに聲鼓なければ樂まず柳北學程朱を宗とし間々獨得の見あり文は寰瓊園に似て甄別明晰にして銖兩を蓋へず柳北古錢を蒐むるを好み藏する所多し明治新撰呉譜に松葉莊藏と記す者是なり初め歐米に遊び西洋の古錢數千枚を齎して來る同好の士或は之を求め乃ち驚ぎて大利を獲たり而して之を柳橋の妓菖に擲つ一夕にして盡く其の胸懷の酒落なるを光風霽月の如し蓋し天性なり柳北幕府の上士たりて事に當りて活潑の論あり而して一たび軒冕を脫してより終身仕へず一枝筆を以て海內を傾動し高議厚俸以て其節を枉げず識者之を高しとす其自ら謚して文靖と云ふ私に謝安に比するなり柳北は男女十有七人あり叔復墨水の艸廬を嗣ぐ餘は或は夭し或は人に適く著はす所明治新撰呉譜、古錢鑑識訓蒙、柳北詩鈔、溫泉記行、航西日乘、航薇日誌、戲著は乃ち新柳情譜、京猫一斑、柳橋新誌等あり（朝野新聞）

ナルセ　カネキチ　成瀨兼吉　海軍機關兵曹長なり神奈川縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て軍艦平遠に乘組み從軍中三十七年九月十八日旅順口附近旭灣沖に於て平遠沈沒の際戰死す戰功に依り勳六等功七級に叙せらる

ナルセガハ　ドザエモン　成瀨川土左衛門　享保中江戸の角力にして身體肥滿なり時人水死する者身體膨脹して成瀨川に似たるを見る毎に土左衛門に似たりと言ふ後終に溺死者を呼びて土左衛門といふ

ナルセ　キウザウ　成瀨久藏　陸軍歩兵少尉なり岐阜縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て歩兵第三十六聯隊附として從軍中三十七年十一月一日旅順要塞二龍山戰鬪の際負傷同日長眷庵第三野戰病院に於て死去す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ナルセ　タイイキ　成瀨大域　書家なり名は溫字は子直、又太郎と稱す遠州日坂の人、書法を祖述し奇境を涉り驚泉に浴し紀行十數種を著し飄然神來由る所を見ず十七年十一月三十日病て家に歿す年四十

器なり時に翁の友人岩崎桂堂、賜硯歌を作りて之を贈る是より賜硯の二字を以て其堂に扁し書名も亦一世に高し貫人爭ふて其門に入る又交部省檢定する所の習字帖の字畫の誤謬を辨正する凡數十の多きに及ぶと云ふ明治三十五年二月五日歿す年七十六、駒込長源寺に葬る（師友雅談）

ナルセ　マサカズ　成瀨正一　參河の人なり其の先は藤原良基より出づ其の孫流落して參河成瀨郷に移住す祖國重德川信忠に仕ふ父正賴清康廣忠に歷仕す兄正義家康に仕て使番たり正一吉左衛門と稱す年三十三國を去りて甲州に住し室住虎定の部下に隸す次年九月川中島の戰に虎定戰死す敵馘して去る正一迫て其の敵を斬り虎定の首を反へし提げ歸る武田信玄徵して黑駒の地を與ふ是の歲德川氏令を下して參人の他邦に之くものを禁ず親族正一を招く正一甲人に放逐せらるゝを慮りて山東に赴く會〻里見北條の二氏國府臺に戰ふ正一乃ち依田肥前守に依て首功を建つ北條氏康采地を授けんと欲す辭して國に歸る元龜三年信玄遠州に寇して袋井に次す本多忠勝甲人と一言坂に戰ふ家康正一を遣はして忠勝を召し還す是の冬味方原の役甲兵七騎家康を狙擊す正一前みて其の先に進む者を斬り其馬を傷け隙を得て家康正一を以て家康を輦がしむ正一能く人の是の役見正義を識る故を以て每に麾下に在りて之を指揮す天正八年高天神を檢して塞を六處に築き正一を以て之を守らしむ壬午武田氏亡ぶ正一武田の士を憐れみ往て之を訪ふ鄉黨人なし其の門に匿して曰く宜く市川に來り正一を問ふべしと其の夜武田の隊長米倉忠繼等來り訪ふ正一請て家康に仕へしむ後根來の健歩百人を領し平岩親吉と甲州の制法を定む十八年北條氏亡ぶ正一先鋒となり鉢形城に入り北武州の制令を定置す功を以て采邑二千石を賜ひ七萬石の代官となる慶長庚子の亂秀忠に屬して旗幟横目となる軍平ぎて後伏見城を守る元和六年卒す年八十三子正成、正吉（野史）

ナルセ　マサナリ　成瀨正成　參河の人なり其の先は藤原良基より出づ其の孫流落して參河成瀨郷に移住す曾祖國重德川信忠に仕ふ祖正賴信忠の子清康及び清康の子廣忠に歷仕す伯父正義家康に仕て使番たり父正一吉左衛門と稱す正成初字は小吉、後隼人と稱す幼より家康に仕ふ天正十二年長湫の戰家康に從ひ一甲首を獲て之を獻ず時に年十七家康之を奇とし命じて麾下に居らしむ既にして家康の前軍利あらず正成出て戰はんとす其の園人馬あり以て足れりとすと正成怒て曰く死を長れて義を忘るゝは武に非ず惟當に進て敵を勵すべきのみと園人猶ほ攀を墜る正成益〻怒り刀背を以て之を擊つ家康望見して曰く是れ壯士の死所なり須らく其の志に從ふべしと園人乃ち攀を縋つ正成直に馳て陣を衝き奮戰敵を卻く後家康擢て隊將となし曰く隼人長久手の戰老將に愧ぢずと豐臣秀吉大阪に在り騎を習はしめ自ら千貫樓に登りて之を觀る驪馬に騎するものあり之を問へば曰く成瀨正成絲を問へば曰く二千石と秀吉曰く佳士なり若し我に仕へば五萬石に封ぜんと家康之を聞き正成に謂て曰く汝能く豐臣氏に仕へば富貴立ろに至らん我亦た之を悅ぶと正成滿涕して曰く是れ何の言ぞや臣不肖と雖も豈に絲を貪りて君を忘んや願くは自殺し以て臣心を明かさんと後家康群臣に謂て曰く正成以て三尺の孤を託す可しと慶長庚子の亂根來の隊百人を率て麾下の先鋒となる其の後堺浦の改所となる政治明整士人懷服す數年ならずして召し還され何の言ぞや臣不肖と雖も豈に絲を貪りて君を忘れ亦た腰脫なりと乃ち中營に歸る正成聲に應じて曰く太公の命か太公甲斐信玄に遇へば弟正一に謂て曰く汝能く地理を諳んず君の爲めに應に疾く馳すべしと使者馳せて尾張に至る者之に乘じて突擊す賊崩潰して死する者谷を塡む清高僅かに身を以て免る是に於て近國の將士數萬風を望みて來集す遂に源忠顯及び長年の子義高を遣して京師を收復せしむ帝長年を召して曰く顯ふに長じて高き者は危からんと乃ち今の名を賜ひ從四位下に叙し左衛門尉兼伯耆守に任ぜらる帝長年に謂て曰く朕の隱岐を出づる舟なくんば何を以て帝海を濟ふか卿なくんば何を以て賊を破らん而して地又た船上と名づく卿其れ舟を以て戰士と爲せと乃ち親から帆舟を衢て之を賜ふ又た文及び和歌を製して具さに風濤漂泊の狀を述べ以て長年の功を稱して曰く朕將に卿が忠を万世に垂示せんとす子孫正直以て國に報ゆるを忘るゝ勿れと帝京師の捷報を得て即ち闕に歸らんと欲し之を群臣に問ふ藤原光守之を非とす長年も亦た之を止む帝親から之れを筮す「師上六に遇ふ乃ち意を決して行な治め長年を以て劔を帶び侍衛せしむ建武元年功を以て因幡伯耆の守護と爲り尋で記錄所寄人となり雜訴決斷所に直し將士恩賞の事に預かる新田義貞の東征する長年楠正成等と留て京師を衛る延元元年足利尊氏京師を犯す長年二千餘人を以て勢多橋を扼す諸軍破れ車駕延曆寺に幸すと聞きて乃ち兵三百を以て京師に還る賊帆舟の徽號を認めて遮ぎり擊つ長年轉戰すること數十合死する者半ばに過ぐ遂に禁門に造る宮闕人なきを見て回顧流涕し遂に行きて行在に詣り請將と力を戮せて尊氏を擊ちと之れを走らし駕を護して旋る尊氏再び至るに及びて又た駕に延曆寺に從ふ尊氏の兵東阪を犯す長年臨扈義勛幕て衆あり後より至る帝驚きて以て賊と爲す乃ち長年の弟僧源盛及び大山寺の僧徒なり遂に山上の佛寺に御長年邑民を募て曰く我が倉穀を船上に出ぶ者は人ごとに錢五百を給せんと即日に五千餘石を致す乃ち其の家を火き百五十人を以て船上を守り木を伐りて槎に代ふ弟氏高松煙を以て布を蘇ひ近國屋材を撤して楯に代ふ弟氏高松煙を以て布を蘇ひ近國將士の旗幟を豎して疑兵を張る翌日佐々木清高佐々木昌綱と兵三千を以て來り攻む旗號を望み見て敢て進まず長年兵の驕きを以て命して曾な射手師に戰ふ正平七年足利義詮男山の行宮を犯す長重族人長氏に從ひて營中に在り敵來り薄る長氏戰死す自已して車駕圍を衝き賀名生に還る事愈なり主者神鏡の櫃を田中に委して去る長重乃ち馬より下り甲を脫ぎ櫃を負ひて走る敵追ひて射ること雨の如し長重僅に免れて還る櫃の板脆薄にして矢中る者十餘遂に洞ること能はず（大日本史）

ナワ　ナガトシ　名和長年　姓は源氏初の名は長高、又太郎と稱す伯耆名和の人なり村上の皇子具平親王の裔たるを以て又た村上氏と稱す父を行高と曰ふ長年名和の地頭たり人と爲り勇健にして善く射る資產饒富に宗族強盛なり國人なきを見て回顧流涕し三年後醍醐帝隱岐に在り衛士に忠欵を效す者多し帝因て問ふ近國に誰か大事を託すべき者ぞと皆な對ふるに長年を以てす長年の弟行氏亦た衛中に在り帝乃ち召見して奉迎せしむ行氏風に遭ひて發ると能はず帝先づ源忠顯と海に航して伯耆に至り成田小三郎を遣はして長年の家に至り旨を帶へしめて曰く朕隱岐より至り將に卿に依賴せんとす卿若し詔を奉ぜざれば速かに鎧倉に報ぜよと長年流涕して曰く天子託するに大事を以てす何ぞ敢て之れを辭ぜん見重乃ち馬より下り甲を脫ぎ櫃を負ひて來り攻むるとも吾能く射て之を洞さんと長年乃ち衆を率ゐて奉迎し帝を扶けて馬に上し船上に赴かんとす帝疲るゝと甚し明日を以て船上に幸せんと欲す長年進みて曰く此の地は賊境に密邇す今速かに進まざれば則ち臣等將に賊騎の爲に蹴陷せられん陛下も亦た自ら奮はざれば何を以てか海內を蕩平せんと帝乃ち進みて山海內を蕩平せんと帝乃ち進みて山上に幸せんと欲す長年進みて曰く此の地は賊境に密邇す今速かに進まざれば則ち臣等將に賊騎の爲に蹴陷せられん陛下も亦た自ら奮はざれば何を以てか海內を蕩平せんと帝驚きて以て賊と爲す四國より登る後に山上の佛寺に御長年邑民を募て曰く我が倉穀を船上に出ぶ者は人ごとに錢五百を給せんと即日に五千餘石を致す乃ち其の家を火き百五十人を以て船上を守り木を伐りて槎に代ふ弟氏高松煙を以て布を蘇ひ近國屋材を撤して楯に代ふ弟氏高松煙を以て布を蘇ひ近國將士の旗幟を豎して疑兵を張る翌日佐々木清高佐々木昌綱と兵三千を以て來り攻む旗號を望み見て敢て進まず長年兵の驕きを以て命して曾な射手師に戰ふ正平七年足利義詮男山の行宮を犯す長重族人長氏に從ひて營中に在り敵來り薄る長氏戰死す自已して車駕圍を衝き賀名生に還る事愈なり主者神鏡の櫃を田中に委して去る長重乃ち馬より下り甲を脫ぎ櫃を負ひて走る敵追ひて射ること雨の如し長重僅に免れて還る櫃の板脆薄にして矢中る者十餘遂に洞ること能はず（大日本史）

ナルセ　ヨシマサ　成瀨吉正　參州の人なり正成の弟、內藏助と稱す初字は勝吉、德川家康に仕て伏見に在り同僚と諍論して其の人を斬り逃走して小早川秀秋に仕へ又前田利常に隸す大阪冬の役利常吉正を住吉行營に遣はし軍事を問はしむ本多正純、安藤直次以て啓す家康使者の誰たるを問ふ對るに吉正を以てすと家康曰く他日軍事を問へば則ち必ず斯の者を以てすべしと命じて食を賜ふ十二月四日加賀の師に加はり眞田の郭を攻む吉正赤旗旄を執りて士卒を指麾す城上呼びて曰く赤熊の擧動絡灼たり願くは一箭を送らんと吉正騎を城際に進む城兵銃を發して吉正の左腋を射る騎より墜ちて死ぜず夏の役大野治房の部兵と槍を接し終に之を馘す後ち一萬二千石を食む（野史）

ナルトギヨフ　鳴門漁夫「ナカハセツカエシ」　**カクノスケ**　鳴海覺之助　陸軍歩兵中尉なり胄森縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て後備役より召集せられ後備歩兵第三十一聯隊附として從軍中卅八年三月五日清國盛京省溫盛堡に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ナルミ　ハツタラウ　鳴海初太郎　陸軍歩兵中尉なり胄森縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て肇備役より召集せられ第八師團歩兵第卅一聯隊附として從軍中三十八年一月廿七日清國盛京省黑溝臺附近に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ナワ　アキオキ　名和顯興　檢非違使義高の子なり實は基長の生む所從四位下に叙せられ檢非違使彈正大弼、伯耆守となる正平十三年族人を率て肥後に往き征西將軍懷良親王に從ひて勤王し肥後の八代城に居る（大日本史）

ナワ　スケミツ　名和高光　伯耆守長年の三子なり幼名は乙童丸船上の役に年十四衆に先ちて奮戰し敵を殺すこと頗る多し後醍醐帝引見して大悅び御する所の黃楊の櫛を賜ひ以て行賞の信となす後從六位上に叙せられ父と獨に延曆寺に從て戰死す（大日本史）

ナワ　ナガシゲ　名和長重　伯耆守長年の子なり太郎左衛門と稱す長年に從ひて義兵を擧げ京師に戰ふ正平七年足利義詮男山の行宮を犯す長重族人長氏に從ひて營中に在り敵來り薄る長氏戰死す自已して車駕圍を衝き賀名生に還る事愈なり主者神鏡の櫃を田中に委して去る長重乃ち馬より下り甲を脫ぎ櫃を負ひて走る敵追ひて射ること雨の如し長重僅に免れて還る櫃の板脆薄にして矢中る者十餘遂に洞ること能はず（大日本史）

ナワ　ナガトシ　名和長年　姓は源氏初の名は長高、又太郎と稱す伯耆名和の人なり村上の皇子具平親王の裔たるを以て又た村上氏と稱す父を行高と曰ふ長年名和の地頭たり人と爲り勇健にして善く射る資產饒富に宗族強盛なり國人なきを見て回顧流涕し三年後醍醐帝隱岐に在り衛士に忠欵を效す者多し帝因て問ふ近國に誰か大事を託すべき者ぞと皆な對ふるに長年を以てす長年の弟行氏亦た衛中に在り帝乃ち召見して奉迎せしむ行氏風に遭ひて發ると能はず帝先づ源忠顯と海に航して伯耆に至り成田小三郎を遣はして長年の家に至り旨を帶へしめて曰く朕隱岐より至り將に卿に依賴せんとす卿若し詔を奉ぜざれば速かに鎧倉に報ぜよと長年流涕して曰く天子託するに大事を以てす何ぞ敢て之れを辭ぜん見重乃ち馬より下り甲を脫ぎ櫃を負ひて來り攻むるとも吾能く射て之を洞さんと長年乃ち衆を率ゐて奉迎し帝を扶けて馬に上し船上に赴かんとす帝疲るゝと甚し明日を以て船上に幸せんと欲す長年進みて曰く此の地は賊境に密邇す今速かに進まざれば則ち臣等將に賊騎の爲に蹴陷せられん陛下も亦た自ら奮はざれば何を以てか海內を蕩平せんと帝驚きて以て賊と爲す四國より登る後に山上の佛寺に御長年邑民を募て曰く我が倉穀を船上に出ぶ者は人ごとに錢五百を給せんと即日に五千餘石を致す乃ち其の家を火き百五十人を以て船上を守り木を伐りて槎に代ふ弟氏高松煙を以て布を蘇ひ近國屋材を撤して楯に代ふ弟氏高松煙を以て布を蘇ひ近國將士の旗幟を豎して疑兵を張る翌日佐々木清高佐々木昌綱と兵三千を以て來り攻む旗號を望み見て敢て進まず長年兵の驕きを以て命して曾な射手師に戰ふ正平七年足利義詮男山の行宮を犯す長重族人長氏に從ひて營中に在り敵來り薄る長氏戰死す自已して車駕圍を衝き賀名生に還る事愈なり主者神鏡の櫃を田中に委して去る長重乃ち馬より下り甲を脫ぎ櫃を負ひて走る敵追ひて射ること雨の如し長重僅に免れて還る櫃の板脆薄にして矢中る者十餘遂に洞ること能はず（大日本史）

たり父正一吉左衛門と稱す正成初字は小吉、後隼人と稱す幼より家康に仕ふ天正十二年長湫の戰家康に從ひ一甲首を獲て之を獻ず時に年十七家康之を奇とし命じて麾下に居らしむ既にして家康の前軍利あらず正成出て戰はんとす其の園人馬あり以て足れりとすと正成怒て曰く死を長れて義を忘るゝは武に非ず惟當に進て敵を勵すべきのみと園人猶ほ攀を墜る正成益〻怒り刀背を以て之を擊つ家康望見して曰く是れ壯士の死所なり須らく其の志に從ふべしと園人乃ち攀を縋つ正成直に馳て陣を衝き奮戰敵を卻く後家康擢て隊將となし曰く隼人長久手の戰老將に愧ぢずと豐臣秀吉大阪に在り騎を習はしめ自ら千貫樓に登りて之を觀る驪馬に騎するものあり之を問へば曰く成瀨正成絲を問へば曰く二千石と秀吉曰く佳士なり若し我に仕へば五萬石に封ぜんと家康之を聞き正成に謂て曰く汝能く豐臣氏に仕へば富貴立ろに至らん我亦た之を悅ぶと正成滿涕して曰く是れ何の言ぞや臣不肖と雖も豈に絲を貪りて君を忘んや願くは自殺し以て臣心を明かさんと後家康群臣に謂て曰く正成以て三尺の孤を託す可しと慶長庚子の亂根來の隊百人を率て麾下の先鋒となる其の後堺浦の改所となる政治明整士人懷服す數年ならずして召し還され何の言ぞや臣不肖と雖も豈に絲を貪りて君を忘れ亦た腰脫なりと乃ち中營に歸る正成聲に應じて曰く太公の命か太公甲斐信玄に遇へば弟正一に謂て曰く汝能く地理を諳んず君の爲めに應に疾く馳すべしと使者馳せて尾張に至る者之に乘じて突擊す賊崩潰して死する者谷を塡む清高僅かに身を以て免る是に於て近國の將士數萬風を望みて來集す遂に源忠顯及び長年の子義高を遣して京師を收復せしむ帝長年を召して曰く顯ふに長じて高き者は危からんと乃ち今の名を賜ひ從四位下に叙し左衛門尉兼伯耆守に任ぜらる帝長年に謂て曰く朕の隱岐を出づる舟なくんば何を以て帝海を濟ふか卿なくんば何を以て賊を破らん而して地又た船上と名づく卿其れ舟を以て戰士と爲せと乃ち親から帆舟を衢て之を賜ふ又た文及び和歌を製して具さに風濤漂泊の狀を述べ以て長年の功を稱して曰く朕將に卿が忠を万世に垂示せんとす子孫正直以て國に報ゆるを忘るゝ勿れと帝京師の捷報を得て即ち闕に歸らんと欲し之を群臣に問ふ藤原光守之を非とす長年も亦た之を止む帝親から之れを筮す「師上六に遇ふ乃ち意を決して行な治め長年を以て劔を帶び侍衛せしむ建武元年功を以て因幡伯耆の守護と爲り尋で記錄所寄人となり雜訴決斷所に直し將士恩賞の事に預かる新田義貞の東征する長年楠正成等と留て京師を衛る延元元年足利尊氏京師を犯す長年二千餘人を以て勢多橋を扼す諸軍破れ車駕延曆寺に幸すと聞きて乃ち兵三百を以て京師に還る賊帆舟の徽號を認めて遮ぎり擊つ長年轉戰すること數十合死する者半ばに過ぐ遂に禁門に造る宮闕人なきを見て回顧流涕し遂に行きて行在に詣り請將と力を戮せて尊氏を擊ちと之れを走らし駕を護して旋る尊氏再び至るに及びて又た駕に延曆寺に從ふ尊氏の兵東阪を犯す長年臨扈義勛幕て衆あり後より至る帝驚きて以て賊と爲す乃ち長年の弟僧源盛及び大山寺の僧徒なり遂に山上の佛寺に御長年邑民を募て曰く我が倉穀を船上に出ぶ者は人ごとに錢五百を給せんと即日に五千餘石を致す乃ち其の家を火き百五十人を以て船上を守り木を伐りて槎に代ふ弟氏高松煙を以て布を蘇ひ近國屋材を撤して楯に代ふ弟氏高松煙を以て布を蘇ひ近國將士の旗幟を豎して疑兵を張る翌日佐々木清高佐々木昌綱と兵三千を以て來り攻む旗號を望み見て敢て進まず長年兵の驕きを以て命して曾な射手師に戰ふ正平七年足利義詮男山の行宮を犯す長重族人長氏に從ひて營中に在り敵來り薄る長氏戰死す自已して車駕圍を衝き賀名生に還る事愈なり主者神鏡の櫃を田中に委して去る長重乃ち馬より下り甲を脫ぎ櫃を負ひて走る敵追ひて射ること雨の如し長重僅に免れて還る櫃の板脆薄にして矢中る者十餘遂に洞ること能はず（大日本史）

びて諸將引還る長年後街の門を閉ち以て走路を絶ち從弟信貞等及び二百人と力鬪して死す明治十六年八月六日從三位を贈らる(大日本史)

ナワ モトナガ 名和基長 伯耆守長年の子なり孫三郎と稱す元弘中長年後醍醐帝を迎へて船上に赴く途にて基長に謂て曰く汝我が爲めに家に還りて家事を處分せよ基長曰く賊兵將に至らんとす兒奈何ぞ左右を離れん義に仗り節に殉ふは是れ兒が願ふ所家事は之を家衆に委れよ長年曰く否な吾れ賊徒なして我家を蹂躪せしむるを愧づ汝往け家衆能はざるなりと基長乃ち還りて其の家を火き母及び家人を以て船上に至る佐々木清高來り攻むるに及びて基長衆を率ゐ奮戰して之を走らす衆追擊す基長呼びて曰く彼尋で來降せん何ぞ窮追み須ひんと衆乃ち止む降る者果して多し而して醍治高貞未だ至らず長年基長をして之を擊たしむ高貞之を聞き懼れて來り降る基長後僧となりて高野山に居す(大日本史)

ナワ ヨシタカ 名和義高 伯耆守長年の子なり初め北條高時の軍に從ひ往て千劔破城を攻む長年義を舉ぐるに及び報を得て脫して抵る後醍醐帝召し見て大に悅ぶ義高父と駕に從ひて京師に赴き正五位上に叙せられ檢非違使となり尋で武者所に直す後從弟義重と源顯家に從ひて堺浦に戰死す時に年三十七(大日本史)

ナヲキ なをき 江戸の俳人なり姓氏詳ならず水穗亭と號す司馬可因の門人也初め龍龍舍と云ふ別に小司馬、毗平、莫殼若等の數號あり(俳諧人物便覽)

ニ之部

ニウヨン 柔遠 僧なり字は子踐、越中新川郡高柳明樂寺に住す故に柳溪と號す殁後謚して快樂院と稱す霽山の高弟なり眷々師說を服膺して其の闕たるを補ひ遺たるを拾ふ空華の學遐邇に振ふ寛政十年十二月朔日寂享年五十七(清流記談)

ニエフ 二葉 「ナカシマニエフ」

ニカイダウ サダキヨ シガヤサダキヨ 二階堂貞清「イ

ニカイダウ サダフヂ 二階堂貞藤 藤原行政の後なり才學を以て稱せらる檢非違使となり出羽守を兼ね薙髮して名を道蘊と改む北條高時廢立なり行はんと圖るに及びて貞藤顏を冒して曰く國權東移して殆んど百六十年威四海を服し桑梓世に傳ふ其の故は王室に致し德惠を庶民に布くを以てなり今天延位を拘へ僧徒を流す此を已に甚しとなす今復た太田康連法橋圓全等と共に貞永式目の制定に與る建長五年十二月八日卒す年七十三

ニカホ タカノブ 仁賀保擧誠(或は勝俊に作る) 姓は源氏、本族は大井、加賀美遠光の孫大井朝光の後、出羽由利郡の人なり由利郡は正平の末より一百餘年の間或は最上氏の領となり或は秋田の山北氏に屬して士卒困窮す應仁元年邑人太田道灌に怨へて守護十二人を請ひて之を鎮平す伯耆守大井友擧(或は大和守重擧に作る)仁賀保の城に居る大勝大夫大江義久矢島城に據る其の他赤尾津、子吉、岸田等の十氏は各〻分據す友擧の子擧政地名に因て始て族を仁賀保と稱す其の子擧久(或は明重に作る)大和守と稱す常に大江氏と相ひ抗す天正四年二月(或は四月に作る)擧久の臣菊池、上門、布施、小松等は其の遺孤二郎丸に奉じて後とす是の擧長(或は安重に作る)とす字を二郎と改む(或は大和守に作る)天正五年八月擧長兵を起して矢島を伐つ克たずして死す從父弟院内重擧其の後を繼ぎ宮内少輔(仁賀保家譜に擧長の子重擧大和守と稱し始て宮内と稱するに作る)と稱す十一年七月上門氷川矢島の兵を引き重擧を城内に試す重擧女あり男なし一族子吉兵部少輔の次男八郎嗣ぐ名を擧晴(或は重勝に作る)と曰ひ大和守と稱す天正十四年十月兵を起して矢島を攻む滿安邀へ擊つ擧晴之に死す赤尾津道俊の二男其後を繼ぐ之を擧誠とす兵庫頭と稱す陽に滿安の和睦し來だ幾ならずして矢島の兵擧誠の細作を捕て之を磔殺す擧誠憲り兵を率て武那本茂内に到る滿安亦た割石に陣して接戰す會〻仁賀保蹕林及び矢島遠江守、鮎川筑前守る正安元年四月一日五番引付頭となり同三年八月出家す法名道曉後ち道我と改む同四年八月二十二日卒す年五十七

ニカイダウ ユキマサ ユキモリ 二階堂行盛 藤原氏、信濃守行光の子なり建保六年左衛門尉より民部少丞となる承久三年從五位下に叙せられ信濃民部大夫と稱す元仁元年八月一日執權連署に補せらる後入道して法名を行然と云ふ久しく幕府に仕へて吏務に曉達す五年十二月八日卒す年七十三

ニカイダウ ユキアツ 二階堂行政「フヂハラユキマサ」

ニカイダウ ダウヨン 二階堂道蘊「ニ

ニカイダウ ユキアツ 二階堂行敦 備中守時藤の長男從五位上左衛門尉に叙任す貞藤入道道蘊の甥なり元弘四年二十七歳にして遁世し夢想國師の法系に從ひて京師に赴き正五位上左衛門尉に任じ同十一年從五位下に叙せられ同年十月十三日將軍家茂に謁し伏して事を冒ふ老中以下諸官其の側に列せり周に命じて與かり聞かしむ士人の冒ふ所小聲にして聽くを得ずして了る蓋し薩藩の士小松帶刀政權返上の事を將軍に勸めしなり薩藩復た召されて國家三藩の別泰西議院制度等を問はれ乃ち概梗を陳べて退く其の後前後召されて事を諮はるゝもの頗る多し是れより先佛帝拿破崙三世其の駐日本公使に命じ甘冒將軍家茂に說き軍資は可美眞手命の誤なるべし(若里記、日本記)

ニカイダウ ユキフヂ 二階堂行藤 弘安五年檢非違使左衛門尉に任じ同十一年從五位下に叙し正應元年出羽守に任じ同六年十月十九日執權連署となり永仁節として上洛す同六年二月二十八日越訴奉行となり正安元年四月二日評定衆に列し同三年八月出家す法名道曉後ち道我と改む同四年八月二十二日卒す年五十七

ニカイダウ ユキマサ シガヤサダキヨ 二階堂貞藤「イ

ニカイダウ ダウヨン 二階堂道蘊「ニ

ニカイダウ ユキアツ カイダウサダフヂ 二階堂行敦「フ

ニカイダウ シモフサノカミ 二階堂下總守「トンア」

ニカイダウ シンソウ 二階堂慎叟 幕府評定所の儒員なり名は平堪、江戸の人脫疑正要錄を著はす(諸家著述目錄)

ニカイダウ ユキモリ 二階堂行盛 藤原行政の後なり才學を以て稱せらる檢非違使となり出羽守を兼ね薙髮して名を道蘊と改む北條高時廢立なり行はんと圖るに及びて貞藤顏を冒して曰く國權東移して殆んど百六十年威四海を服し桑梓世に傳ふ其の故は王室に致し德惠を庶民に布くを以てなり今天延位を拘へ僧徒を流す此を已に甚しとなす今復た太田康連法橋圓全等と共に貞永式目の制定に與る建長五年十二月八日卒す年七十三

ニカイダウ ユキマサ ぞハラユキマサ 二階堂行政「フ

ニカイダウ ユキモリ 二階堂行盛 藤原氏、信濃守行光の子なり建保六年左衛門尉より民部少丞となる承久三年從五位下に叙せられ信濃民部大夫と稱す元仁元年八月一日執權連署に補せらる後入道して法名を行然と云ふ久しく幕府に仕へて吏務に曉達す太田康連法橋圓全等と共に貞永式目の制定に與る建長五年十二月八日卒す年七十三

等議して二氏を諭して成を行なはしむ十七年七月擧誠復た兵を起して滿安と戰ふ偶〻醍白豐臣秀吉征東の命ありて私鬪を禁ず十九年春子吉兵部少輔、鮎川筑前守又た滿安に說て厚意を謝せしむ滿安許り對て曰く吾今自ら往て以て厚意を謝せんと兵千餘を率て子吉城を攻む兵部人を遣し來りて援を仁賀保及芹田に乞はしむ擧誠遂兵二千を發して赴き援く到れば則ち城陷り餘焰天を掠む擧誠悔怨芹田伊讃守と俱に進み滿安と戰て敗る是より千戈鏗まず文祿元年七月矢島を攻む滿安徙りて荒倉城に據て防禦す死傷者多し乃ち夜に乘じ城を棄て將に去らんとす擧誠道尾す滿安辛うじて四馬音内茂道の許に遁る擧誠計を廻らし横手の城主小野寺義道に告て曰く滿安茂道と亂を謀り將に君を囑はんとすと義道怒り弟康道をして兵を率ゐ茂道に迫り滿安を伐ちしむ滿安兵到ると聞き自裁して以て茂道の異謀なきを明にす時に文祿二年十二月二十八日なり又た翌を以て盡く矢島の宿臣四十餘人を殺戮す滿安の臣矢島三右衛門、金子、安部、大瓦、普賢坊等滿安の遺女鶴子を挾て其の宗を復さんと欲す慶長五年普賢坊等滿安の遺女鶴子を挾て其の宗を復さんと欲す會〻畿甸軍事愈忙にして果さず將に國に歸らんとし仁賀保の領を過ぎ擧誠に途に遇ふ擧誠物色捕て之を殺す是の時に當りて會津(上杉景勝)の臣志田修理亮人を遣はして遺黨を招く三右衛門等悅て之に應じ舊好の士四百餘人を募りて兵を起す八月八森城を攻て之を拔く尋で上國敗聞至る駐守するもの四十餘人分て笹子赤館に據る擧誠赴き攻て悉く之を陷る上杉景勝の士下康久菅野城に據る擧誠等又攻て之を拔く七年往りて邑五千石を常陸武田に食む大阪の軍起るに及び淀城を守る天和九年十月秀忠茜邑仁賀保の田一萬石を賜ふ寛永元年二月卒す年六十四法名正山淨水、三男あり長を良俊(又晴誠に作る)と曰ひ藏人と稱す寛永三年父の遺邑を頒ち受て七千石を食む寛永八年卒す嗣なくして絕す次を誠政と曰ひ內膳と稱す二千石を食む次を誠次と曰ひ內記と稱す千石を食む子孫皆德川幕府に仕ふ(野史)

ニギハヤヒノ ミコト 饒速日命 本名天照國照彥天火明櫛玉饒速日尊と云ふ前の名は天火明命亦の名は天照國照彥天火明尊亦の名は膽杵磯丹杵穗尊亦の名は神饒速日命と云ふ天忍穗耳尊高皇產尊の女萬幡豐秋津師姬栲幡千々姬命を妃となし尊と遺を杵く進む一日朝興夜撤して退き周を召して佛語を講ぜしむ歎じて曰く政と學とは寔に兼れ行ふべからざるか孤今朝一句を詩ぜずと遂に諸學を廢す十月十三日將軍遷に周を二條城に召す至れば一士人あり將軍に大廣間に謁し伏して事を冒ふ老中以下諸官其の側に列せり周に命じて與かり聞かしむ士人の冒ふ所小聲にして聽くを得ずして了る蓋し薩藩の士小松帶刀政權返上の事を將軍に勸めしなり薩藩復た召されて國家三藩の別泰西議院制度等を問はれ乃ち概梗を陳べて退く其の後前後召されて事を諮はるゝもの頗る多し是れより先佛帝拿破崙三世其の駐日本公使に命じ甘冒將軍家茂に說き軍資は可美眞手命の誤なるべし(若里記、日本記)

ニケウアン 二橋庵「アキヤマホスヰ」

ニケウアン 二橋庵「アンドウサダトシ」

ニザウアン 二三「ドヒニザウ」

ニシ アマネ 西周 蘭學者なり石州津和野の人通稱初め緝太郎と云ひ後謙專と云ひ變を蕃ふるにおるなり名は時懋鹿城と號す一に甘瑛齋又天根と號す及びて倍亮と云ひ後改めて周助と云ふ維新の後周と改周の國音に取るなり藩醫時義の長子なり儒を好み又和闇の書を池田玄仲に學び英語を中濱萬次郎に受く文久元年菲書調所教授方となり二年內田恒次郎、榎本釜次郎、澤太郎左衛門、赤松大三郎、田口俊平、津田眞道等と和蘭に留學を命ぜられ九月十日闖の風帆船カリツプスに搭じて長崎を發し印度洋に船を轉じ十月十九日政廳の救助に依りテルナテ號に搭じ亞非利加を繞りて三年五月蘭國に至る居ること二年政治法律學の大概を修めて還る開成所教授手傳となり尋で正に進む已にして王政維新の際將軍京都に朝し莽に開港の勅許を請ふ許されず志士其の間に縱橫し物情騷然たり周と眞道とは京都に將軍に召され至れば則ち別に務なし唯〻志士の寓居に來詣する者ある毎に泰四の法制學術を語り閑を消す此の間曾て幕命を以て譯する所の萬國公法を大成す京都の人木村宗三郎德川昭武に謁て佛蘭西に赴くに及び其の英學塾を周に托す三年二月塾を繼ぐ徒弟に教授す來り學ぶ者益〻進む諸侯亦た來り訪ふもの多し尊

て將軍慶喜の佛語侍讀となり傍ら外交文書を譯す慶喜常に晨に朝し晡に退く了て佛語を學ぶ記性人に過ぎ善しむ歎じて曰く政と學とは寔に兼れ行ふべからざるか孤今朝一句を詩ぜずと遂に諸學を廢す十月十三日將軍遷に周を二條城に召す至れば一士人あり將軍に大廣間に謁し伏して事を冒ふ老中以下諸官其の側に列せり周に命じて與かり聞かしむ士人の冒ふ所小聲にして聽くを得ずして了る蓋し薩藩の士小松帶刀政權返上の事を將軍に勸めしなり薩藩復た召されて國家三藩の別泰西議院制度等を問はれ乃ち概梗を陳べて退く其の後前後召されて事を諮はるゝもの頗る多し是れより先佛帝拿破崙三世其の駐日本公使に命じ甘冒將軍家茂に說き軍資は可美眞手命の誤なるべし(若里記、日本記)

ニケウアン 二橋庵「アキヤマホスヰ」

ニケウアン 二橋庵「アンドウサダトシ」

ニザウアン 二三「ドヒニザウ」

ニシ アマネ 西周 蘭學者なり石州津和野の人通稱初め緝太郎と云ひ後謙專と云ひ變を蕃ふるにおるなり名は時懋鹿城と號す一に甘瑛齋又天根と號す及びて倍亮と云ひ後改めて周助と云ふ維新の後周と改周の國音に取るなり藩醫時義の長子なり儒を好み又和闇の書を池田玄仲に學び英語を中濱萬次郎に受く文久元年菲書調所教授方となり二年內田恒次郎、榎本釜次郎、澤太郎左衛門、赤松大三郎、田口俊平、津田眞道等と和蘭に留學を命ぜられ九月十日闖の風帆船カリツプスに搭じて長崎を發し印度洋に船を轉じ十月十九日政廳の救助に依りテルナテ號に搭じ亞非利加を繞りて三年五月蘭國に至る居ること二年政治法律學の大概を修めて還る開成所教授手傳となり尋で正に進む已にして王政維新の際將軍京都に朝し莽に開港の勅許を請ふ許されず志士其の間に縱橫し物情騷然たり周と眞道とは京都に將軍に召され至れば則ち別に務なし唯〻志士の寓居に來詣する者ある毎に泰四の法制學術を語り閑を消す此の間曾て幕命を以て譯する所の萬國公法を大成す京都の人木村宗三郎德川昭武に謁て佛蘭西に赴くに及び其の英學塾を周に托す三年二月塾を繼ぐ徒弟に教授す來り學ぶ者益〻進む諸侯亦た來り訪ふもの多し尊

は雖に臨みて苟も免るゝの誹を恐れてなり今德川氏の瓦解余一人の力之を圖すべきに非ずと終に辭す十月靜岡藩阿部邦之助(潛)沼津に兵學校を設く周大築尙志の薦に依り之が教頭となる二年冬郷に歸り脫藩の罪を藩主に謝す藩主延て藩學の制其外の事を諮ふ三年朝廷に召され兵部省に出仕し陸軍大丞に轉ず明治六年秩有禮明六社を設立するや周、西村茂樹、中村正直、箕作秋坪、箕作麟祥、福澤諭吉、杉亨二、加藤弘之、津田眞道等と明六雜誌上に學戯を研究す十二年學士會院長となる十五年元老院議官となり從四位勳三等に陞叙す十八年正四位に進み十九年從三位となり廿一年勳二等に進む廿三年貴族院議員に勅選せられ錦鷄間祗候に拜す二十四年議員を辭す二十七年五月正三位に陞り勳一等に叙し男爵を授けらる二十一日歿す年六十九著す所致知警覺、利學、論集、詩文稿等あり(四周傳)

ニシ イツアウ 西一鷗 小倉侯の醫員なり技術時輩に超出す性卓犖にして權貴に屈せず意に從て行ふ(近世叢話)

ニシウ デウカウ 二洲「ビトウニシウ」西內條綱 海軍大軍醫なり東京府出身にして明治三十七八年日露戰役に於て軍艦平遠軍醫長として從軍中三十七年九月十八日旅順口附近鳩灣沖に於て平遠沈沒の際戰死す戰功に依り勳五等功五級に叙せらる

ニシ カクエ 西確衛 陸軍歩兵少尉なり福島縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て警備役より召集せられ第二師團歩兵第二十九聯隊附として從軍中三十七年十月十一日清國盛京省三家子南方畑地に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ニシガハ イサブラウ 西川伊三郎(元祖)傷寒師なり大阪の人初め吉田氏曾て禁裏に召され技を演ず貧困あり望む所を問はる是より先傷寒師吉田家三郎三巴に一文字の紋章を賜はりし例あり人皆之を榮とす伊三郎乃ち請ふて冥菊に一文字の紋章を賜はり後改めて菊菱とす世々之が家紋とす又二條公の二の字を賜はり冠の字を加へて名を冠二と改む醫居の後西川伊三郎となる者先づ冠二の名を冒す例とす天明五年十一月十日大阪に歿す年六十二二世の時始めて江戸に下ると云ふ

ニシガハ イサブラウ 西川伊三郎(二世)傷寒師なり奥延と號す本名は藤野忠二郎初代伊三郎の門人となり二代目の號を繼ぐ弘化三年八月歿す年六十九(名人忌辰錄)

ニシガハ イサブラウ 西川伊三郎(五世)傷寒師なり初め吉田平吉と云ふ吉田陸奥大掾の實子なり四世伊三郎歿するや陸奥大掾自ら其の名を嗣ぐ明治六年正月十六日歿す年七十(名人忌辰錄)

ニシガハ カウザウ 西川耕藏 勤王家なり初の名は太七、太助又耕藏と更む傷寒と號す名は直純字は正義京都三條富小路書林北村太助の子なり梅田雲濱に師事し本姓西川と改め山中靜逸吉田玄蕃平野國臣等憂國の士と交る尊王攘夷の說を唱ふ文久元年捕へられて獄にある二年免されて家に在り元治元年幕府の詰ひ同志の囚を解かんとして所在の志士を捕ふ志士之を憤り會藩邸に會し之を謀る會する者長州藩士吉田稔麿杉山松助等十餘名なり偶々會藩の爲に誅せられ近藤勇等の襲來する所となり縛に就く翌慶應元年二月十一日殺さる年四十三明治元年朝廷その遺子に修身二人口を下賜せらる

ニシガハ キカク 西川季格 實は清水氏、儒を業として中江藤樹に學ぶ集義和書顯非の著あり(諸家著述目錄)

ニシガハ コククワ 西川國華 儒醫なり名は瑚字は子璉、國華は其の號元章と稱す江州の人儒を東皐の門に學び江戸に住し醫を吉田桃源に學び綾部侯に仕ふ平生詩豪を以て稱せらる遺詩三萬八千首に至る文政の初年歿す年七十餘著はす所上池秘錄、蓬蔗舍集あり(續諸家人物志、鑒定便覽)

ニシガハ シュンエン 西川葬園 詩人なり自ら修して李姓とす名は景義字は汝賀龍草廬の門人寶曆十年九月四日歿す年三十三

ニシガハ ジョケン 西川如見 長崎の醫官たり字は如見、求林齋と號す忠英は其の名なり長崎の人少にして天文の學を好み皓首に至り晩年江戸に徙され長崎の譯官となる九年九月二十四日卒す年七十七著す所四十二國人物圖說、庚書曆象俗解、天文義論、日本水土考、天文和歌注、町人藏、長崎夜話草、水土解辨、華夷通商考、萬物怪異辨斷等あり(諸家人物志)

ニシガハ スケタダ 西川祐尹 西川派の畫師なり祐信の子得祐齋と號す通稱は祐藏寶曆十二年歿す年五十七(名人忌辰錄)

ニシガハ スケノブ 西川祐信 西川派の浮世繪師なり京都の人初の名は祐助、左京と稱す自得齋又た文華堂の號あり畫を狩野永納に學ぶ遂に變じて浮世繪師となる最も長ずる所は春宵秘戲の圖、宮女の圖、俳優の圖なり山水鳥獸之に次ぐ寶曆元年歿す年七十四(名人忌辰錄に四年九月十一日年八十一となす)著す所畫本多し嘗て奉畫を畫て罪を蒙ると云ふ(燕石十種、扶桑畫人傳、鑒定便覽、畫乘要畧)

ニシガハ セイタイ 西川正體 儒家なり通稱は忠次郎克く家學を纘ぎて家書を訂正す嘗て天經或問を訓點し忠英の著せし天學名目抄を附して梓に上す(諸家人物志)

ニシガハ センザウ 西川扇藏(四世)芝居振付なり初め藤間勘兵衛の門人となり藤間勘助と云ふ下總船橋の人四川氏の久く絕たるを興し四川扇藏四世となる河原崎座の振付たり弘化二年三月二日歿す年四十九(花柳壽輔氏談)

ニシカハ タウゲン 西川桃源 大和五條驛の人なり名は懿字は士德、桃源は其の號、世々驛の甲頭たり桃源性學を嗜む業を荒井鳴門に受け其の高足となる又詩文を善くす讀者皆な以爲らく儼然たる士大夫と其の賤役に居るを聞くに及び驚嘆せざるなし甲頭の職たる盜を詰り罪を糾す勢ひ剌薄殘忍に流れざるを得ず桃源は則ち未だ嘗て聲色を以て物に加へず而して踉人自ら服す人以て溫厚の長者となす文政年中に歿す年三十八著はす所龍門民戀あり妻名は峰字は季容書畫を善くす(節齋遺稿)

ニシカハ ハジメ 西川甫 阿波の人初めて大阪に新聞紙を發行す元醫師たりしが芳川顯正小室信夫等と共に夙に王事に勤め岩倉具視の知遇を受け維新の際德島藩の少參事たり明治初年より大阪に移り堂島米界に出て礦野小右衛門と名を齊ふせり後大阪府會議員に擧げられ議長に推さる又大阪日報社を起して其社主となり大阪新聞の魁楚となれり後又大東日報に社主たりしが晩年京都に退隱す明治三十七年二月病歿年七十餘

ニシカハ フサキチ 西川房吉 陸軍歩兵少佐なり廣島縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て歩兵第十二聯隊附として從軍中三十七年八月廿二日旅順要塞東鶴冠山砲台前面附近に於て戰死す戰功に依り勳四等功五級に叙せらる

ニシガハ マサトラ 西河正虎 裝飾彫工なり江戸赤阪畔紫谷に住す鐔工の妙手なり(裝飾奇賞)

ニシ キイチ 西毅一 本姓は霜山氏久之助と稱す岡山の人なり幼にして茶坊主に召出され後森田節齋の學僕となりて業を修め節齋の門人西俊村の後を繼ぐ明治元年姫路藩征討に從事し後藩命を以て東京に遊學し田口文藏の門に入る其後上海に航せしが藩ほ其擅に航海せしを責めて賞を給せず歸國後幽閉せらる後宥されて藩校督事となり又權參事より參事に任じ從六位に叙せらる後六等判事に任ぜられ東京上等裁判所詰となりしが年辭職して郷に歸る十四年閑谷學校を復興し推されて其教頭となる二十三年帝國議會の開かるゝや選ばれて衆議院議員となり二十五年其職を辭し爾後專ら閑谷學校長として其の經營に努め德望あり三十七年二月二十六日岡校の別舍にて逝去す年六十

ニシキギ 錦木 江戸吉原玉屋の遊女なり性頗る義俠を好み深く俠客鯉左衛門に契る嘗て彌左衛門事を以て小菅多權兵衛と刄を仲の街に交ふ錦木之を聞て大に驚き馳せて之を支へんと欲す能はず乃ち稱號を投じ之を鉢尖に被懸し以て漸く之を收むる為得たり其の名都下に震ふ(本朝俠客傳)

ニシキ クルマル 錦久留丸 江戸の小說家なり文化文政時代の人又た一亭或は長亭五闌と號す其の著には國滿國丸等の畫を附す(小說家著述目錄)

ニシキ シカザウ 錦鹿藏 陸軍歩兵少尉なり三重縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て操備役より召集せられ近衛歩兵第四聯隊附として從軍中卅八年三月三日清國盛京省唐家屯東北方高地に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ニシ キチベエ 西吉兵衛 長崎の譯官なり明暦四年葡萄牙交の天文書を譯訳し肥前の儒醫向井元升をして筆記せしめ乾坤辨說と題し世に公にし又寛文九年諸國土產書を作る(日本博物學年表)

ニシキノコウジ ヨリノリ 錦小路頼德 長州脫走七卿の一なり字は一貫翠園と號す嘉永四年從五位下に叙し大和權介に任じ從四位下兼右馬頭に進む文久三年八月十八日の變に於て長州藩の禁衛を奪ふ事倉卒に出て復命ふる所なし長藩の兵乃ち頼德、實美、中納言三條實美以下七卿を擁して西奔し長州藩に入る翌日三條四季知、少將東久世通禧、侍從四條隆謌、修理大夫壬生基修、主水正澤宣嘉を奉じて難を國に避く追從するもの數十人時に癸亥八月十八日なり既にして黨議益々熾んに誣るに不逞を以てし遂に頼德等を貶して庶人となす頼德毫も沮む色なし實美及び長州侯父子と竊に天聽を回らし國威を復せんと圖る明年夏頼德嘔血を患ひ遂に四月二十四日を以て馬關に歿す年三十長州侯之を周防山口朝妻山に葬る王政維新に及び朝廷其の勳を錄して爵位を追贈す(墓碑)

ニシ ブンリウ 錦文流 實永中の人小說作者なり以て業とす所作の淨瑠璃頗る多し兼ねて俳諧を善くし錦項子と號す大阪の人(聲曲類纂)

ニシグチ マサダイフ 西口政太夫「タケモトマサダイフ」

ニシカネジラウ 錦見兼次郎 陸軍歩兵少尉なり愛知縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て第三師團歩兵第三十七聯隊附として從軍中三十七年十月十七日清國沙河附近に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ニシ キヤウ 西亨 陸軍歩兵大尉なり明治三十七八年日露戰役に於て第八師團歩兵第卅二聯隊附として從軍中卅八年三月七日清國盛京省楊士屯附近に於て戰死す戰功に依り勳五等功五級に叙せらる

ニシクボ トヨイチラウ 西久保豐一郎 陸軍歩兵少佐なり佐賀縣佐賀郡鍋島村の人明治二年十二月を以て生る二十四年七月士官學校を卒業し二十七八年日清戰役には歩兵少尉を以て第二軍に屬して出征し戰功に依り勳六等に叙せらる三十年大尉に進み三十七年日露戰役起るに際し某聯隊副官として鴨綠江方面に出征し細河沿の戰に負傷し全治後少佐に昇進し大隊長となりて再び戰陣に臨み沙河歪頭山占領の際また頭部に重傷を負ひ後送せられ仙臺病院にて療養し三十八年二月全癒退院し更に歩兵第五十聯隊附として樺太征討軍に從ひ七月十二日同島南部コルサコフ部ダリネエ四方高地にて戰死す年三十七戰功に依り勳四等功四級に叙せらる

ニシ ゲンポ 西玄甫 長崎の醫なり洋語を善くし和蘭大通事たり外科を好み歸化の洋醫野澤忠庵を師とす杉山忠惠と交り善し每に相切劘す寛文中事を以て江戸に往き忠惠を殿中に見る退きて嘆じて曰く丈夫當に此の如くなるべし何ぞ區々蠻奴の語を伴して身を終へんやと乃ち病と稱し職を辭し江戸に徒る幾何もなくして舉げられて醫たり侍醫に進み法眼に叙せらる(阜國名醫傳)

ニシ コガク 西鼓岳 肥前國多久邑の儒者にして名は贊、字は叔龔、又芳隣舍と號す忠能の四子なり幼にして穎敏氣慨あり初め邑學に入りて槃々草場佩川に受け略々經史に通じ遂に藩學に入り學大いに進む文政八年邑主多久氏江戸に遊學せしむ時に年二十三古賀侗庵の門に學び三年に亡て歸り邑學の助教兼監察に進む鼓岳最も詩に工にして著述芳隣舍詩鈔あり廣瀨淡窓曰く鎭西詩家三傑(淡窓草場佩川及び吉田平陽)の後居し幾もなくして宥恕せらる遠く鹿兒島侯の聘ありて其生徒を教授す老に至りて蠶蓑好奇の癖滅ぜず安政四年二月二日聲中の奇勝を討めんとし多難絕嶺に至り凍死す年五十五(日本教育史資料)

ニシゴリ ソウジャウ 錦織僧正「ギヤウクワン」

ニシゴリ　トシマサ　錦織俊政　判官代たり承久の役に錦織判官代と云へる者あり戰を奉じて王に勤め戰敗れて虜に就く俊政は蓋し其の後なり足助重範等と後醍醐帝に笠置に從ふ城將に陷らんとして將士崩潰す俊政奮ひて曰く詔を奉じて賊を討つ義當に死して報ふべし逃れて將に安くにか往かんとすると乃ち袒裼して力戰し矢竭き刀折れて遂に其の子及び衆十三人と腹を剖て死す（大日本史）

ニシゴリノオキナ　ニシゴリ　バンカウ　錦織翁「ムラタハルミ」錦織晩香　東奥の儒者なり名は徽宇は子和、庄藏と稱す中村藩に仕ふ晩香詩文鈔の著あり（漢學者著述目錄）

ニシザハ　イツブウ　西澤一風　豐竹座の狂言作者なり本名は山本治重、正本屋九右衛門と稱す大阪の書賈なり元祿寶永の間其業に從事し紀海音等と名を齊うす所作の淨瑠璃に傾城國姓爺、建仁寺供養、身替弓張月等數十種あり享保十六年五月歿す年六十七（聲曲類藁、戲曲小說通志）

ニシザハ　イツポウ　西澤一鳳　戲作者なり李叟と號す通稱は九郎右衛門又た理助、狂言堂又た綺語堂と號す嘉永五年十二月二十二日歿す年五十一（名人忌辰錄）

ニシザハ　グコウ　西澤愚公　名は周宇は子邦通稱權右衛門曦野と號し後愚公と改む寛政頃の人なり其生死の年月を詳にせず愚公少壯より學を好む鄉に師なし始め兒玉巖築に從ふ後細井平洲の門に入り篤學を以て重ぜらる愚公家世々農業の傍貿屋を營む家を繼ぐに及び思ふ所ありて其業を焚き每夜自ら當を負ひて債者に返與したり愚公後染屋を創め工四十餘人を用ふ或時一人惡疫を患ふ家人恐れて之を去らんとす愚公曰く彼貧困恐らくは藥を買ふ能はざらん且つ疾を吾家に受く吾之を遣るに忍ずと親ら之を看護せりといふ愚公孝友天至親戚の貧なるものは力を極めて之を賑ひ嫁娶死喪あれば皆賞して之に給す父の疫に遇ふや僵然として曰く誤て庸工に委せば何んぞ不孝を免れんと因て醫を學びよく其能否を辨ず研精の至り貧困にして治を請ふものあれば必ず往いて之を診し富家には辭して往かず愚公朝家人を率ゐて祠堂を拜し共に孝經を誦して後食ふを例とす嘗て父の難に當る高山彥九郎京都より歸るに及び愚公崇を其傍になし今古の嘉言善行を話りの歸途往いて之を弔す其喪に服して鄉里の子弟愚公に從つて學ぶもの多し愚公崇を其傍になし今古の嘉言善行を話ざるに感じ爾來親交を訂せり鄉里の子弟愚化家々安泰に里に驚聲なし篤々として開導す子弟風化家々安泰に里に驚聲なし

ニシザハ　ジンヤ　西澤甚彌　陸軍步兵中尉なり長野縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て第三師團步兵第三十三聯隊附として從軍中三十七年八月三十一日旅順要塞首山堡附近に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ニシザハ　ホウダウ　西澤鳳堂　戲作者なり名は眞麗九兵衛と稱す李叟の兄天保十一年歿す

ニシサンデウ　ウダイジン　西三條右臣「フヂハラヨシスケ」

ニシサンデウノ　オトド　西三條大臣「ミナモトヒカル」

ニシサンデウ　キンエダ　西三條公條「サンデウキンエダ」

ニシサンデウ　サネエダ　西三條實枝「サンデウサネエダ」

ニシサンデウ　サネタカ　西三條實隆「サンデウサネタカ」

ニシ　サンパク　西三博　京師の御醫なり長崎の人醫を壽昌院野間成大に學びて深奧を極め名聲遠近に傳播す寛文の初め朝廷の召に應じて京師に至り御醫に擢んでられ法眼に叙せらる（皇國名醫傳）

ニシジマ　トクイチ　西島得一　福島縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て二等機關士として陸軍借上船常陸丸に乘組み從軍中三十七年六月十五日玄海灘航行中敵艦の襲擊を受け戰死す

ニシジマ　ヤスシ　西島泰　陸軍步兵中尉なり福井縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て後備步兵第七聯隊附として從軍中三十八年三月八日清國盛京省大馬格山附近戰鬪の際負傷同ヵ日後備第一師團第四野戰病院に於て死去す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ニシジマ　ランケイ　西島蘭溪　名は長孫字は元齡蘭溪は其の號なり考名は準、柳谷と號す蘭溪本姓下條氏就て柳谷に學ぶ柳谷其の才を愛し養ひ以て子と爲し配するに其の從子女を以てす嘉永壬子十二月十五日四の窪の舊廬に歿す其の生安永九年庚子十二月二十八日を距る七十三門人私に諡して勤靈と曰ふ城南天德寺中長谷院先塋の次に葬る（墓碣銘）

ニシジマ　リウコク　西島柳谷　名は謙字は處平準造と稱す柳谷は其號なり江戸西の窪の人なり幼にして倜儻業を以て自から樹立せんと欲し圉巷に老ゆるを願はず父母其の贏弱を憂ひ痛く之を禁ず而して特に正五位を贈らる（殉難錄稿、甲子殉難士傳）

ニシジマ　カオタラウ　西島龜太郎　勤志士なり諱は輝秋熊本の藩士なり文久三年五月御扶助起り直五郎また奮鬪して亂刃の下に死す年二十五伏見大黑寺に葬る後諡して常明院西山智雲居士と云ふ明治二十四年廢藩の令下るに及び孤清藩知事に建議し富豪の餘田を購ひ之を士卒に頒與して漸次力食の道を謀らしむ其功少なりとせず是より世事を拋ち心を風月に寄せて一世を終ふ明治二十五年九月十五日病死す年六十京本所區龜戸長壽寺に葬る（拙居漫錄）

ニシジマ　ナホゴラウ　西田直五郎　勤王の志士なり鹿兒島藩士西田矢右衛門の子なり曾て中小姓を勤め江戸邸に在り夙に勤王の志を抱き機を見て事を爲さんとす適ま島津久光の京都に抵るを聞き橋口傳藏弟子丸龍助等と謀り潛に江戸邸を脫して共に大阪に赴き義黨に與し中の島旅店を出て伏見に至り文久二年二十三日闕白及び所司代邸を襲撃して奸吏を仆さして寺田屋に會す會ミ鎭使の來るあり遂に同志の四人と共に藩に歸り同十一月一日東京日本赤十字社病院に於て死去す戰功により勳六等功五級に叙せらる

ニシジマ　チョクヤウ　西田直養　豐前小倉の和學者なり筱舍と號し字は浩然庄三郎と稱す本居大平の門人なり神事考、古事記集解、萬葉長歌格、哥歌眼目、金石志、金石年表、四天王寺舊地損元考等の著あり文久三年五月長藩外國と交戰の際小倉藩勅を奉ぜず餞饌爲すなき憤り食を絕て死す年七十餘嗣を建て東紫神社と云ふ（諸家著述目錄）

ニシジマ　コセイ　西館孤清　名は平馬奥州津輕の藩士幼きより敏達懇悟近侍より累進して墨政となる文久三年京都在勤を命ぜられて諸務を辨ず長州兵禁闕を犯すや孤清藩士を指揮して近衛公を護し吉田女を以て之れに配す即ち元勳なり柳谷人と爲し從子默、終日物と競ふこと莫く寡未だ嘗て色に見はれず居恒百事皆儼嚴に規式あり風雨暮夜轍す出でず酒を嗜み微しく醺すれば即ち止む每旦夙に起き祠堂を拂拭し歲時祀祭懈らず又父母の忌辰に値へば即ち僧を請ふて經を誦せしむ七月二十二日病歿す年六十四（墨碣銘）

ニシン　シンペチ　西新八　陸軍步兵中尉なり山口縣出身にして臺灣守備步兵第一聯隊第七中隊附として土匪討伐中明治三十年三月二十九日同島小碓溪山中に於て戰死す

ニシン　ダウチ　西道智　國學者なり名は道智宗庵と稱す初醫を業とし後我邦の記傳を讀み厚く貴神に遇せらる遂に業を改めて典詁有職を講究す寛文中の人なり著す所古今集頭書、源氏物語綱目、徒然草金鎖、保元物語大全、平治物語大全、平家物語大抄、太平記大全、大系圖、本朝雜談抄等あり（續諸家人物志、鑒定便覽）

ニシダ　ジンタラウ　西田甚太郎　陸軍步兵少尉なり鹿兒島縣出身にして明治廿七八年日清戰役に於て第六師團後備步兵第十二聯第八中隊附として出征し廿八年七月廿七日臺灣島より歸航の際虎列刺病に感染し同八月四日小倉陸軍檢疫病院に於て死去す

ニシダ　ジロク　西田次六　陸軍騎兵大尉なり長野縣出身にして明治廿七八年日清戰役に於て大本營運輸通信長官部附として出征し廿八年一月廿八日大連灣にて病に罹り同十一月一日東京日本赤十字社病院に於て死去す戰功により勳六等功五級に叙せらる

ニシダ　チョクヤウ　西田直養　豐前小倉の和學者なり筱舍と號し字は浩然庄三郎と稱す本居大平の門人なり神事考、古事記集解、萬葉長歌格、哥歌眼目、金石志、金石年表、四天王寺舊地損元考等の著あり文久三年五月長藩外國と交戰の際小倉藩勅を奉ぜず餞饌爲すなき憤り食を絕て死す年七十餘嗣を建て東紫神社と云ふ（諸家著述目錄）

ニシダ　ムネカツ　西田宗勝　鹿兒島藩の和學者なり名は通稱は吳平江戸の人文化十一年歿す年五十九（墨定便覽、近世名家碑文集）

ニシナ　ノブモリ　仁科信盛　五郎と稱す武田信玄の四男なり幼にして仁科家を嗣ぐ武田氏の滅するや信盛兄勝頼の爲に高遠城を守る敵帥織田信忠僧を使はし謂はしめて曰く城を輸さば死を宥さんと信盛怒り僧の耳鼻を切て追ふ信忠曰く攻めんと大軍を率まり城陷る信盛死を決し小山田備中渡邊金太夫等一騎當千の精兵十八人を左右にし進みて縱橫死戰す時に信忠城墻に立ち桐樹に緣て指揮す信盛等一望し此敵遇すべからずと七八度も進み戰ひ多くの敵に障へられ竟に志を遂ゲ能はず敵の部將森長可小銃を連發す信盛摏禦衛盡き床頭に立ち屠腹腸を抓みて障子に竄ち死す小山田以下皆殉死す（諸雜言行錄）

ニシナ　ハクコク　仁科白谷　江戸の儒者なり名は幹字は礎宗、源藏と稱す備前の人老子解、莊子解、三備詩選、明浦詩集、白谷文集等の著あり弘化二

年歿す年七十餘嗣を建て東紫神社と云ふ（諸家著述目錄）

ニシナ　ムネカツ　西田宗勝　鹿兒島藩の和學者なり名は通稱は吳平江戸の人文化十一年歿す年五十九（墨定便覽、近世名家碑文集）

ニシナ　キンポ　仁科琴浦　儒者なり名は貞字は正夫琴浦と改む東備の人文化十一年五月歿す年五十九（墨定便覽、近世名家碑文集）

ニシナ　キンセン　仁科錦川　畫家なり名は盛字は不明通稱は吳平江戸の人山水花鳥を能くす（畫乘要略）

ニシナ　ノブモリ　仁科信盛　五郎と稱す武田信玄の四男なり幼にして仁科家を嗣ぐ武田氏の滅するや信盛兄勝頼の爲に高遠城を守る敵帥織田信忠僧を使はし謂はしめて曰く城を輸さば死を宥さんと信盛怒り僧の耳鼻を切て追ふ信忠曰く攻めんと大軍を率まり城陷る信盛死を決し小山田備中渡邊金太夫等一騎當千の精兵十八人を左右にし進みて縱橫死戰す時に信忠城墻に立ち桐樹に緣て指揮す信盛等一望し此敵遇すべからずと七八度も進み戰ひ多くの敵に障へられ竟に志を遂ゲ能はず敵の部將森長可小銃を連發す信盛摏禦衛盡き床頭に立ち屠腹腸を抓みて障子に竄ち死す小山田以下皆殉死す（諸雜言行錄）

ニシナ　ハクコク　仁科白谷　江戸の儒者なり名は幹字は礎宗、源藏と稱す備前の人老子解、莊子解、三備詩選、明浦詩集、白谷文集等の著あり弘化二

年五月殁す年五十五（近世名家碑文集、諸家著述目錄、名人忌辰錄）

ニシナ　マサシラウ　仁科眞佐四郎　陸軍歩兵少尉なり岡山縣出身にして臺灣守備歩兵第四聯隊附として同地に在りしが明治二十九年六月二十九日土匪討伐に際し雲林に於て戰死す

ニシナ　モリトホ　仁科盛遠　鎭守府將軍平貞盛の裔にして世々信濃に居る嘗て宿禱を以て兒を挙げて熊野に詣る適〻上皇熊野に幸して路に兒の清婉なるを見て之を愛し命じて四面となす盛遠大いに悅び從ひて京師に至り侍衛す北條義時怒りて曰く彼れ既に關東の恩を承く何ぞ恣まゝに仙洞に咫尺するこを得んやと乃ち其の邑を殺す上皇救して之を還さしむ又た娼艶薬の訴を以て義時に敕す義時並びに詔を奉ぜず上皇久しく憤を關東に含ふ是に至りて討伐の議遂に決す盛遠宮崎定範糟谷有久と北陸道を守る盛遠櫛波山に軍し有久志雄に軍して加賀越中の豪族林富樫野尻等を率ゐ北條朝時と戰ひ軍敗れて盛遠戰死す（大日本史）

ニシ　ナリノリ　西成度　靜岡縣士族にして天保六年六月に生る通稱吉十郎明治二年八月靜岡藩の權少參事に任ず同四年司法省六等出仕を命ぜられそれより司法省の諸官を歷て東京控訴院裁判巡視長を命ぜられ同十九年大審院刑事第一局長を命ぜられ勅任二等に拜す又控訴院長となり從四位に叙す同廿三年十月大審院長に補せらる同廿四年四月特旨を以て正三位に叙せらる是月病を以て逝去す慶應四年伏見の役や成度時に外國奉行支配組頭たり奉行以下幕士の京阪に在る者恐遽爭ふて去り復た止まる者なし成度徐に大阪城内の諸所を引拂ひ支配向廿七八名を率ゐ先づ外國人の退去したる後を見廻り兵庫港に至る順動丸の此の役に傷を負ひたる會津の藩士を載せたるが江戸に歸らんとするに會ひ之に便乘せんとを約す半ば人を乘せ了れば船已に發す成度泰然先を爭はず最も後に乘るを期す故に其乘り後れたる者と便船を待ち共に後れて江戸に歸りぬ

ニシナリ　ヘイキチ　西成昞吉　陸軍砲兵中佐なり大阪府東成郡喜連村の人士官學校卒業後直に第四師團野戰砲兵第四聯隊附となり久しく其職に在り明治二十七八年日清戰役に出征し三十年七月臺灣守備として渡臺し居ること二年功を以て勳五等に叙せらる後姫路第十師團に轉じ砲兵少佐に昇進し更に野戰砲兵第十二聯隊大隊長に補せらる卅七年日露の關係急を告ぐるに及び同聯隊附として率先出征し第一軍に屬して遼湖枝隊の梅澤部隊を救はんが爲め同月九日火蓮寨を發して急進し十日より十一日に亘る砲戰に於て痛く敵諸處に轉戰し殊功あり同年十月沙河の大會戰に於て本隊を率ひ十一日遂に敵彈の爲に胸部を貫通せられて死す年四十戰功に依り中佐に昇任し勳四等功四級に叙せらる

ニシナノウヱ　カジラウ　西海嘉次郎　カ小國嘉次郎といひ安政二年薩摩國高城郡高明治十年京都に赴き關取鯨波の弟子となり四ノ海と稱し累進關脇に至る東京に於て初めて東西合併の相撲を催すと聞き私に京都を脫して上京し高砂浦五郎の門に入りて翌十五年一月場所に幕尻にて入場し大關梅ヶ谷を破りてその名を揚ぐ十六年五月小結となり十八年一月大關に進む後一旦關脇となり十八年一月再び大關となり二十三年五月横綱に昇れり其後同部屋力士小錦横綱となるに及びて二十九年五月退きて翌年井筒と改名して檢査役に擧げられ以て晩年に至れり四十一年十一月三十日病歿す年五十四逆鉾駒ヶ嶽錦洋等皆門下たり本所區太平町法恩寺に葬る

ニシノ　オンカタ　西御方　伏見帝の宮人なり姓氏を詳にせず廣義門院に侍す伏見帝之れを挙し聖珍法親王を生む（大日本史）

ニシノ　ケイカウ　西野桂皐　儒者なり名は元俊（又曰く高俊）字は士明小字は文右衛門越中富山の人安永戊戌閏七月十二日殁す年四十六（藤定便覽、北海文抄）

ニシノ　ツネマツ　西野常松　陸軍歩兵少尉なり石川縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て隊附として從軍中三十八年八月十二日負傷同日紅石溝舍營病院に於て死去す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ニシノトウキン　シンアイ　西洞院信愛　舊公卿なり姓武を好み公卿中の三武人と稱せらる文久慶應の頃時勢に鑑み熟心武を講じ明治元年二月大阪行幸の砌同地に於て撰ばれて舊平戸藩主松浦詮と御前仕合をなさしむ信愛勝を得錦一卷を賜はる後自邸に私立演武館を開設して多くの門弟を養ふ後官幣大社松尾神社同平野大社宮司を經て鴨社の宮司となりしが三十二年四月職を辭して退隱す是より先き十七年七月子爵を授けられ又正三位に叙せらる三十七年六月六日肺病を以て逝く年六十一

ニシノトウキン　トキナ　西洞院時名　歌人なり寶暦十五年入道して風月と號す

ニシノミヤ　サダイジン　西宮左大臣「ミナモトタカアキ」

ニシノ　ヨシトシ　西野義威　水戸の正義派の士なり通稱信六元常州龜作の豪家にして文武に達し藩に擢でられ士となる幕府の軍來り襲ふに及び之に抗戰して囚へらるゝ後免されて蟄居を討ち又土浦の土賊を征す維新の後縣廳に出仕し權大屬に至り後辭して磐城に住し警法館長となり又實業團長となる殖產興業に盡力し人民悅服し將に四野神社を建てんとす義威固くこを停む二十七年十一月殁す年六十四（西野義之氏寄）

ニシノ　ヨシヲ　西野義郎　陸軍三等主計なり三重縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て從軍中三十七年七月七日清國盛京省李家屯にて病に罹り同十七日南瓦房店兵站病院に於て死去す

ニシノキンオムロ　西院御室「ダウハフシンワウ」

ニシハチデウ　ダジャウダイジン　西八條太政大臣「タヒラキヨモリ」

ニシバヤシ　ヒコイチ　西林彦一　陸軍歩兵大尉なり山口縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て第七師團歩兵第二十五聯隊附として從軍中七年十二月二十三日旅順渡邊山戰鬪の際負傷同二十六日太平溝第一師團第二野戰病院に於て死去す戰功に依り勳四等功五級に叙せらる

ニシハラ　キタラウ　西原慥太郎　島根

縣出身にして明治十年四南役に於て警部補を以て別働隊第三旅團附と爲り從軍し四月二十日肥後國益城郡御舟妙見山に於て負傷し同十一年二月二十日東京に於て死す

ニジフイツクワイマウシ　二十一回猛士「ヨシダショウイン」

ニシホ　インエツ　西保因悅　碁手なり島津家の臣にして本因坊道策の門人なり碁位五段に進む（因云碁話）

ニシ　マツジラウ　西松二郎　長崎の人明治十三年東京理科大學地質學科を卒業して理學士となり爾來東京大學助教高等師範學校駒場農林學校等に教鞭を執り卅五年五月三重縣松阪町なる縣立工業學校長となり久しく育英の事に從事せしが四十二年二月十六日病を以て任地に逝く年五十五資性温厚謹直なれども躁く滑稽文學に通じ放菲山人の名を以て洒落の想奇嬾の言を爲し世に知らる病危篤に臨み特旨を以て正六位に叙せらる

ニシマ　ニタラウ　似島仁太郎　陸軍歩兵中尉なり廠手縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て隊附として從軍中三十八年三月四日清國盛京省大榆樹堡に於て戰死す

ニシムラ　イウリン　西村有隣　元祿時代の和學者にして枝葉訓解の著あり（諸家著述目錄）

ニシムラ　カツザウ　西村勝三　舊野州佐野藩士西村平右衛門の三男にして壯時砲術を學ぶ安政年間より商工業に從事し爲に幕府の忌諱に觸れて獄に投ぜられたるとあり維新の際出て〻鐵砲商を營み明治四年更に製革業を興し其製造場を東京向島須崎村に創設し櫻組と稱す八年耐火煉瓦製造の業に從事し品川に其製造所を設立す後前者は櫻組株式會社後者は品川白煉瓦株式會社となりて大に斯業界を裨益するに至れり十五年中歐洲を漫遊し軍靴武具の製法を視察し歸朝後製革事業の進歩を圖ると共に軍靴の製造に意を用ひ櫻組を擴張して軍靴武具の製造に從ひ大に邦家に貢獻し政府亦之を賞して綠綬章を賜はり正六位勳六等に叙せらる中途一度擧げられて府會議員たりしとあるも志此に在らず幾もなくして之を辭し專心事業の發展に務めたり三十九年十二月多年實業に盡力せし功に依り特旨を以て勳五等に叙し瑞寶章を授けらる四十一年一月三十一日病を以て逝く年七十二

ニシムラ　キンレイ　西村金嶺　畫人也

ニシムラ　キクケイ　西村菊溪　京都の畫を中井藍江に學びて山水人物を能くす（扶桑畫人傳）

ニシムラ　クヘヱ　西村九兵衛　慶長年間の鍔工にして宗旦の釜師なり（西村道治記錄）

ニシムラ　シゲキ　西村茂樹　蘭學者なり下總佐倉藩の士初め名は鼎、字は重器、晚に治翁と號す文政十一年三月を以て江戸に生る幼にして文武の業を修め天保三年藩學に學び後儒學を安井息軒大槻盤溪に西洋兵學を佐久間象山に蘭學英學を手塚律藏に佛學を原坦山に學ぶ嘉永三年支藩佐野の重役となる時に年廿六これより佐野藩の執政たること十五年此の年六月北來合衆國の使節彼理來る八月老中阿部正弘に上書して宜しく開國すべきを論ず九月歐洲に渡航して深く修むる所あらんと欲し幕府への請願書を認めて其の進達方を藩老に乞ひしも肯かれず、慶應三年十月德川慶喜に上書して時事を論じ同十一月紀藩の幕府の親藩及び譜代諸侯の重臣を招きて問ふ所あるに會し翁は三策を述べて德川家のために計る所あり尋で十二月王政維新の大命下り翌明治元年岩倉輔相に上書して弭兵の事を勸めしも省ぜられず同二年集議院に上書して平民に佩刀を許すべきこと及び廢藩の急にすべからざることを論ず同三年佐倉藩大參事に任ず同四年三月印旛沼開鑿の計を畫し未だ手を下すに及ばずして廢藩の議已に決すと聞き更に乞ふて許さる廢藩縣に及び印旛縣權參事に任ず五年三月之を辭し五月出て〻東京に家塾を開き學生蕭陶の任に當る是れ翁が倫理道德を口授するの端緒なるべし六年時事に感ずる所あり貴族議院を起さんと木戸參議、山田少將、毛利、細川、池田、越前の諸侯と謀りしが事成らず八月彝有礎の發起にて東京に明六社を起し政府亦之を賞して綠綬章を賜はり正六位勳六等に叙せらる是れ本邦學會の嚆矢にして同志の士は實に福澤諭吉、西周、中村正直、加藤弘之、津田眞道、箕作秋坪の六氏と翁と彝氏となりき七年前參議後藤、副島、江藤、板垣諸氏の民選議院の建議を爲せりと聞き元老院に上書して其の言の必らず採用せられんことを請願す九年三月東京修身學社を起し國民道德の振興を謀る今の日本弘道會是なり十二年東京學士會院會員に選まる是より先同五年文部省五等出仕に補し大丞大書記官を歷て十九年二月宮中顧問官に任じ二十一年華族女學校長を兼ぬ教育上畫策する所尠からず宮中に入つては或は有栖川小松北白川伏見四親王殿下に毎月六回宛四書を講じ奉り或は明宮殿下の御教育御世話の命を奉じ民間に在つては國民道德心の興隆倫理思想の普及發達を圖り其の意見は凝つて日本道德論の一冊（二十年三月）となり當路者の意に忤ひて遂に物議を生ずるに至れり然れども翁は尙孜々として不撓不屈晚年に至つては益身を以て事に當り鞠躬如として國民公德の養成風俗の改善精神教育の開發奬勵に任じ淳々として其功の擧らんことを是れ勉む廿三年貴族院議員に勅選し廿五年辭し三十三年宮中顧問官を辭す三十四年四月文學博士を授けらる同三十五年病あり正三位勳四等に陞叙す八月十八日薨ず其の臨終に際し侍者に語つて曰く彝倫道德の擧らざる久し日本弘道會の事業道に止にして吾病を以て此世を去らんとすれども後世必ず聖賢の士の出て〻此の濁世を支除するなるべしと薨爾として暝す年七十五著はす所心學講義、德學講義、日本道德論、經濟要旨、四史年表、泰西史鑑、萬國史略、西國事物起原、婦女鑑、小學修身訓等あり

ニシムラ　シゲナガ　西村重長　浮世繪師なり俗稱孫三郎仙花堂と號し通油町に住す其の師詳ならざれどもよく鳥居風を畫く一枚畫多し或は云く初代鳥居清信の門人なりと今檪職人盡百人一首、繪本江戸土產を畫く寶暦六年六月二十七日殁す年六十餘（扶桑畫人傳、浮世繪類考別本）

ニシムラ　シチエモン　西村七右衛門　商業家なり信州の人横濱開港の際肥前屋と稱し丸七と云ひ材木及び雜貨を販賣し巨利を得たり其の頃佐賀藩の士人と交り藩の用達となる明治二年東京府知事北島時之助發起となり商社及び開墾會社を設立するに當り

三野村利左衛門と共に其の計畫をなす抑も商社設立の趣意は府下有力の商賈を集合して專ら外國貿易の道を開くにあり而して創立の際事々目的の如くなる能はざるのみならず後には社中竊に不平を抱く者ありて將に離散せんとするに至れり七右衛門以爲く離散を防ぐには米相場をなすに如くはなしと利左衛門と共に府廳に出て、知事に謀る知事北島時之助は謹嚴の人にして容易に可決せず百方論議して强て許可を得終に米相場を開くに至り一社これが爲めに離散せずがれども商社設立の大眼目たる外國貿易の道は依然として開くる所なく米相場愈々盛にして終に商社の名は米相場の所と思はしむるに至れり是皆二人の本意にあらざるなり又開墾會社設立の趣意は下總小金原の開墾をなすにありて專ら府下の貧民を移住せしむるを主とす七右衛門は頗る此の開墾に力を盡し終に自ら下總の八街に移住し名を改めて四村郡司といひ自ら耕転の業を勤め移住民を撫育し其の家益々富む明治廿二三年の頃殁せり年八十有餘七右衛門人となり謹略あり事々熟考して苟もせざるが如し其の商業をなすに當ては果斷にして雄辯を振ふ敢て當るものなし其の居深川にありしが常に商業に奔走し夜に入りて歸る其の途上を行く立ちて睡り醒めて又歩す時と立て一時間位に五六町を歩むとあり是其の一癖なり一夕一掬摸あり尾して來る七右衛門叱して曰く懶何者ぞ平伏して曰く余家翁の便中を狙ふこと既に三夕賢の乘ずべきなくして此に至るとて七右衛門一笑して懐中を探り金若干を與へ深く其の惡行を戒めしとぞ（虚心筆記）

ニシムラ　シフセン　西村楫川　播磨の儒者なり名は淑字は子興、道圓と稱す遊都稿、楫川詩文稿等の著あり（諸家著述目錄）

ニシムラ　シンザウ　西村晋三　陸軍歩兵中尉なり高知縣出身にして明治廿七八年日露戰役に歩兵第四十四聯隊附として從軍中廿七年十一月二十六日旅順要塞東雞冠山北砲臺に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ニシムラ　ステザウ　西村捨三　菖蒲根藩士なり弱冠にして出て、四村家を繼ぐ尊攘の論盛に起るや二十歳京都に出て藩命に依り身を書生に變じて各藩の形勢を視察し維新後各地を周遊し内務省に奉職し廣島縣知事千田良曉が宇品築港に蹉跎して進退窮せるに際し大臣の命を受けて實地を檢分し其將來有望なるとを看取して國庫の補助を與ふ可きを答申し遂に宇品築港を完成せしめたり其後沖繩長野大阪等の府縣知事となり治績あり後入りて農商務次官となり從三位勳二等に至る然るに大阪築港の計畫あるや大阪市民は之を聽して專務所長として築港事業を一任したるが其竣成を見る能はずして病に罹り職を辭して故山に病を養ひしが四十一年一月十七日殁す年六十五

ニシムラ　セイイチラウ　西村精一郎　京都府出身にして陸軍逓送船須磨浦丸に乘組み出征中廿七年轉士として陸軍逓送船須磨浦丸に乘組み出征中廿七年四月十一日韓國龍巖浦にて病に罹り同正月五日大連兵站病院に於て死去す

ニシムラ　セイキョウ　西村清狂　醫家なり六藝と號す又云く名は百拳字は子芳通稱鍾屋清兵衛尾州名古屋の人にして小景山水に長じ又狂醫を善くす（逸人畫史、屋張名家志二編）

ニシムラ　セイケイ　西村清溪　四條風の畫家なり越前敦賀の人儒を松村景文に學び花鳥を能くす（扶桑畫人傳、鑒定便覽）

ニシムラ　セイタラウ　西村清太郎　勤王の志士なり諱は則義長藩の士なり文久三年夏擢爽の勅諚下り長藩外船を砲擊するに方り清太郎亦其撰に入る後藩主の不興を蒙りしかど殊功を樹て、赦罪を許さる毛利氏は勤王を以て鳴る家なり幕府にして之を伐つは曲知るべんと欲し十月河上彌一等澤宣嘉を推して但馬に義兵を擧ぐるに會ひ乃ち之に加はり山口村に奮戰せしが戰利あちず終に諸士と共に居囚して死す年僅に十八明治三十五年十一月特旨を以て從五位を贈らる（殉難錄稿）

ニシムラ　ソウゼン　西村宗全　陶工なり俗稱善五郎其の祖父宗印奈良に住し土風呂及び巻日の神器を製するを以て業とす父宗禪の時泉州堺に移住せしが宗全に至り京都に來り土風呂を製し茶家小堀遠州細川三齋などに愛せられ多く茶器を製す元和九年に京都に歸り土風呂の作に妙を得て豐臣氏より天下一の稱を許さる（雍州府志、工藝遺芳、工藝錄）

ニシムラ　ダウジン　西村道仁　紹鷗時代の鑄工にして天下一道仁と稱す織田氏の釜師なり（四村道治記錄）

ニシムラ　タダツグ　西村忠次　丹後守と稱す四村流砲術の祖なり初め權之助と稱す射的に精し技を以て朝廷に召され丹後守に任ず（武術流祖錄）

ニシムラ　テツコツ　西村鐵骨　陸軍歩兵大尉なり東京府出身にして明治廿七八年日露戰役に於て近衛歩兵第一旅團司令部附として從軍中廿七年八月三十日清國盛京省孟家房四南高地に於て戰死す戰功に依り勳五等功五級に叙せらる

ニシムラ　テツジラウ　西村哲二郎　勤王の志士なり諱は正哲字は仲堅哲二郎、又太田二郎と稱せり但馬國八鹿村の人瑞亮が次男なり幼より同國養父郡宿南村の池田禎蔵に就きて儒學を修む人と爲り慷慨にして奇節あり同郷の志士北垣晋太郎近藤俊三郎等と深く交を結ぶ文久三年の春鎌田某と共に京都に在るや德川將軍京都諸侯を率ゐて賀茂石清水の行幸に供奉し攘夷を誓ふに會す哲二郎之を見て奮然志を起し竊に身を以て國に殉せんと期す同年十月平野次郎奚玉三平等澤宣嘉を擁して生野銀山に義兵を擧げんとす哲二郎亦其議に加はり竊に餘江某と都に上りて同志を募り父兵器七駄を得て鷹人田中正雄と共に之を守護して生野に至る然れども軍既に敗れしかど姓名を變じて因幡に走り更に京都の因州邸に匿る後下野宇都宮に行き藩老戸田某の家に假寓し江戸に徴行して長州藩邸に出入し又應々宾戸藩主の眷顧を受けたりと聞き馳せて之に赴きしかども事既に落着に及びし後なりしかど道を替へて伯耆に往き河田景與の家に匿る翌慶應元年春飄然として國に歸りしかど親戚故舊戚なる歸耕せんとを勸む哲二郎肯ぜず再び家を出て京都に上る其秋備前に行き權藤字都木諸人と諸處に逗留して具に幸蹟を嘗む翌二年の春幕府再び征長の軍を起し丶かど頓て北垣原の二士と與に海に航して讃岐に赴き高杉氏を訪ひ幾もなく歸りて周防に行き集義隊に加はり富田の建笑院に屯營す偶々事を以て隊長の怒に觸れしかど遂に死を決し七月二十七日遂に自刄して死す時に年二十三明治四十年五月朝廷其忠志を追賞して特に從五位を贈らる（殉難錄稿）

ニシムラ　トホサト　西村遠里　京都の和學者にして安政時代の人なり雨中問答の著あり（諸家著述目錄）

ニシムラ　ナンケイ　西村南溪　畫家なり名は正候字は三彊山水を善くす（鑑定便覽、畫乘要略）

ニシムラ　ナンテイ　西村楠亭　京都の畫人なり名は豫章、字は子風、圓山應擧に學びて圓山風の畫を能くす後ち一格を出せり天保五年六月二十日殁す年八十（扶桑畫人傳、畫乘要略、鑒定便覽）

ニシムラ　バイケイ　西村梅溪　畫師なり名は中和字は士達畫をもて法橋に叙せらる藤ゝ名所圖會及び繪本類を畫く紀州名所圖會、木曾街道名所圖會、都林泉名勝圖會、繪本年代記、義經勳功記、楠正行戰功圖會の類なり梅溪文學の才あり詩を善くす文政年中殁す（扶桑畫人傳、浮世繪類考別本）

ニシムラ　ヒコベエ　西村彦兵衛　京都の漆工なり名は宗忠其の製品は優雅にして風韻あり嘗て普賢菩薩の象に乘りたる圖を蝦色金蒔繪の額にして己が菩提所に掲げたるに人皆其の技の巧妙なるを賞し これより人其の名を呼ばずして象彦と稱す惜むべし此の額天明の火災に罹り烏有となる安永二年五月十四日殁す年五十四（工藝錄）

ニシムラ　ヒタチ　西村常陸　茶人なり石翁石室に茶禮を受けて能くす（茶人系傳各集）

ニシムラ　ミツヨシ　西村光義　裝飾師なり京都高倉竹屋町に住し笹屋源助と稱す大月光恒の門人にして巧手なり（裝飾奇賞）

ニシムラ　ミャクアン　西村藐庵　俳人なり吉原江戸町貳丁目の名主なり俗稱佐兵衛名は伊之字は宗光歌仙庵と號す年五十二淺草寺奥山に隱居し人丸堂を建て丶居る西院と號す近衛三藐院の流を學びて藐庵と名づく名筆なり茶は宗偏流、乾山の名をつぎ上京して法橋となる和歌は桂千もとを友として詠みき琵琶を勝氏に學ぶ七代目河東（東雲後沙洲）に河東節を習ふ古筆茶器の目利をよくす著書花街漫錄（其一畫、以一書）花街年中記花街起度雜記茶家印譜等あり嘉永六年十一月二十日殁す年七十淺草等覺寺に葬る法名釋藐庵宗光居士（閑談數刻）

ニシムラ　ヨシイチ　西村淑一　陸軍歩兵少佐なり兵庫縣篠山の人明治十二年六月陸軍教導團を卒業し十六年九月士官學校に入り卒業後十九年六月歩兵少尉に任ぜらる二十二年十一月中尉に進み歩兵第四聯隊大隊副官に補し二十七年十一月大尉に昇り士官學校副官となる三十五年十一月更に少佐に進み三十六年三月第六師團歩兵第四十八聯隊大隊長に補し三十七年三月露戰役起るに及び前職を以て出征し數回の戰鬪に參加せしが終に遂陽攻擊に臨み同年八月三十一日首山慶應の初齡して江戸に出て齋藤龍善の門に入つて劍を學び又平田鐵胤に從て國典を學ぶ竊かに勤王の志を抱く適ゝ幕府毛利氏を討つ謙之助憤りて云く毛利氏は勤王を以て鳴る家なり幕府にして之を伐つは曲知るべし諸浪士と志を協せ相其將滿、水原直允、竹内啓、金澤元輔、丸山久成等と三田の薩州邸に潛み謀る所あり幕府之を知り將に兵を向けんとす衆先を制するの策を取り謙之助及び啓は野州方面の擧兵の將に撰まれ慶應三年十一月廿五日江戸を出て捕吏の追跡を逃れて下野出流山の觀音堂に隱る軍議微發の爲め一隊を據本なる足利藩の陣屋に遣はし金を乞ふ陣屋の吏善野司陽はこれを諾し密かに幕府の兵を導て之れを圍む大に敗ス謙之助啓之を聞き往て善野を詰らんと欲し一卒を隨へて往く乍ち捕へらる謙之助刀を抽き敵十三人を殺して死す年二十三時に十二月十一日なり（殉難錄稿）

ニシヤマ　ケンノスケ　西山謙之助　勤王家なり名は尙義幼名秀次郎、後要人、後今名に改む美濃國可兒郡久々利村の人四山春成の次男なり幕府の旗下にして尾張藩の附屬なる千村平右衛門が家に仕ふ慶應の初齡して江戸に出て齋藤龍善の門に入つて劍を學び又平田鐵胤に從て國典を學ぶ竊かに勤王の志を抱く適ゝ幕府毛利氏を討つ謙之助憤りて云く毛利氏は勤王を以て鳴る家なり幕府にして之を伐つは曲知るべし諸浪士と志を協せ相其將滿、水原直允、竹内啓、金澤元輔、丸山久成等と三田の薩州邸に潛み謀る所あり幕府之を知り將に兵を向けんとす衆先を制するの策を取り謙之助及び啓は野州方面の擧兵の將に撰まれ慶應三年十一月廿五日江戸を出て捕吏の追跡を逃れて下野出流山の觀音堂に隱る軍議微發の爲め一隊を據本なる足利藩の陣屋に遣はし金を乞ふ陣屋の吏善野司陽はこれを諾し密かに幕府の兵を導て之れを圍む大に敗ス謙之助啓之を聞き往て善野を詰らんと欲し一卒を隨へて往く乍ち捕へらる謙之助刀を抽き敵十三人を殺して死す年二十三時に十二月十一日なり（殉難錄稿）

ニシヤマ　ケンポ　西山健甫（四山後ち自ら修して四と云ふ）對馬侯の儒者なり名は順泰、四山と號す健甫は其字、健助と稱す對馬の人本と阿比留氏、後四山に改む父順益醫を以て本州に仕ふ健甫家庭に學び軒岐の書を研精す然れども方技を屑とせず好み經史を讀む年十八九其名侯に聞ゆ侯辟して書記とす年二十八侯に請ひて江戸に遊び業を木下順庵に學び自ら學に志すの遲きを恨み勤苦書を讀み夜を以て日に繼ぐ居ること一年餘にして學術大に進む南部南山と木門二勉の名を得元祿元年十月三日江戸に殁す年三十一下谷坂本養玉院に葬る順庵哀惜爲めに碑銘を製す（近世叢語、先哲叢談後編、江戸墓所一覽、鑒定便覽）

ニシヤマ　セイジュ　西山盛壽　陸軍歩兵役に於て第一師團野戰砲兵第一聯隊第二大隊副官として出て征し廿八年二月廿四日奉天省太平山に於て戰死す

ニシヤマ　クワンエイ　西山完瑛　儒者なり名は謙字は子受謙一郎と稱す芳圃の男後藤松陰に從ひて儒を學ぶ又畫を父に受け明石侯に仕ふ明治三十年八月十二日殁す年六十四

ニシヤマ　ケンケツ　西山謙之助　勤王家なり名は尙義幼名秀次郎、後要人、後今名に改む美濃國可兒郡久々利村の人四山春成の次男なり幕府の旗下にして尾張藩の附屬なる千村平右衛門が家に仕ふ慶應の初齡して江戸に出て齋藤龍善の門に入つて劍を學び又平田鐵胤に從て國典を學ぶ竊かに勤王の志を抱く適ゝ幕府毛利氏を討つ謙之助憤りて云く毛利氏は勤王を以て鳴る家なり幕府にして之を伐つは曲知るべし諸浪士と志を協せ相其將滿、水原直允、竹内啓、金澤元輔、丸山久成等と三田の薩州邸に潛み謀る所あり幕府之を知り將に兵を向けんとす衆先を制するの策を取り謙之助及び啓は野州方面の擧兵の將に撰まれ慶應三年十一月廿五日江戸を出て捕吏の追跡を逃れて下野出流山の觀音堂に隱る軍議微發の爲め一隊を據本なる足利藩の陣屋に遣はし金を乞ふ陣屋の吏善野司陽はこれを諾し密かに幕府の兵を導て之れを圍む大に敗ス謙之助啓之を聞き往て善野を詰らんと欲し一卒を隨へて往く乍ち捕へらる謙之助刀を抽き敵十三人を殺して死す年二十三時に十二月十一日なり（殉難錄稿）

ニシヤマ　カメキチ　西山龜吉　陸軍砲兵中尉なり東京府の出身にして明治二十七八年日清戰

少佐なり山口縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て豫備役より召集せられ第五師團歩兵第廿一聯隊附として從軍中廿八年三月一日清國盛京省松樹咀子東北方高地戰鬪の際負傷同二日黄嶺子第十二師團第二野戰院病に於て死去す戰功に依り勳四等功五級に叙せらる

ニシヤマ　セツサイ　西山拙齋　備中の儒者なり初の名は忌義字は見利後ち名を正、字を士雅と改む拙齋は其號又た至樂居と號す備中鴨方邑の人、父恕玄醫を業とす拙齋幼にして學を好む年十六にして大阪に往き醫術を古林見宜に儒業を播人岡白駒に受く白駒歿して後外孫那波魯堂に學ぶ魯堂京都に徙居す拙齋之に從ふ又和歌を紀美領伴蔬園僧澄月等に學び諸名士と互ひに相往來す名京阪の間に顧はる魯堂始め藍園の學を奉ずず後に見る所ありて程子の說を攻む是に於て拙齋亦た悉く舊學を廢す學成り鄉に還りて宋學を唱ふ遠近群至僻里鬱として一都聚を爲す是の時松平越中守定信國務を攬り累りに文儒を召して學政を修整す拙齋聞より時學の浮靡に趨くを憎む乃ち博士柴栗山に書を致して異學を禁ぜんことを勸む會ゝ栗山幕旨を奉じ大學の諸生を集して一に林祭酒の家訓に背くを得ざらしむ是に於て群疑洶々浮言旁手、拙齋亦た頗る謗詈を招く然れども毫も顧慄ぜず播人赤松淦洲亦た栗山に寄せて其の偏僻を責む拙齋書を作りて其の非を反駁す適ゝ暑冒亦た稍ゝ息む拙齋異を排き道を衛るの志識者之を賞す勢人本居宣長連りに書を著はして堯舜周孔を誘る語本邦の列聖に及び隱然人心を煽動するの勢あり拙齋反慮歟を作り別錄一卷を附し以て其の妖妄を暴はす諸侯連りに聘すれども辭して應ぜず寛政十年十一月五日歿す年六十四拙齋人爲り方正敦厚初め越中侯の樞要に當るや人才に急なり一日柴栗山に問ふに儒中の學德俱に尊き者を以てす栗山拙齋を以て答ふ侯之を徵せんと欲す栗山曰く彼れ峻節移さず必ず徵に應ぜざらんと故を以て命を下さず拙齋歿するに及び栗山其の墓に題して備中の徵士西山某之碑と曰ふ古賀精里人に謂て曰く今世儒豪傑の資ありて學純正ならざる者は覆軒なり君子の德ありて學亦た純正なる者は拙齋なりと著はす所間窓瑣言、芳野紀行、課間閑話、松山遊紀、汗漫日記、拙齋詩文集、同和歌集、同詩鈔等あり長子憲(字は孝淑)出で、醫となる次孝恂(名は通)業を嗣ぎて教授す(續近世叢語、先哲叢談後編、事實文編、香亭雅談)

ニシヤマ　ソウイン　西山宗因　檀林派俳諧の祖なり名は豐一、通稱は二郎作肥後加藤氏の臣なり寛永九年主家事に遇ふて滅び宗因浪人となる其の武術に違ずるを以て諸家招聘するものありと雖も應ぜず狩野探幽が女を妻とし傍ら畫を善くす連歌俳諧を樂む連歌は里村昌叱に學び俳諧は松永貞德を宗とす然れども當世に叶はざるを知り別に一派の俳風を起す世にて俳諧の中興となす正保年間より浜花天滿に住し志吾冒すの毓に非ざるを知り義父に乞ひて以て本姓に復す然れども義父に事ふる故の如し義父歿するに及びて喪を終へ遂に前原氏を辭し長崎に遊び尊て又た京都に往く是の時强齋歿して其の姪小野鶴山望楠書院に居り以て强齋の業を繼ぐ寛保三年鶴山出でゝ小濱の教官となる是に於て成齋代りて教授を領す時に年四十二後姪景翼をして己に代らしめ自から播州今津に赴き弟子を教督すること十年計り會ゝ鶴山歿して景翼小濱の教官に聘せらる是に於て成齋復た望楠書院に還る時に年七十小濱侯景嘉年あり數ゝ手書を致して存問す稱して老先生と曰ふ成齋年老て精力衰へず經義を講解する篤く師說を信じて異冒を取らず靈し明和中より山崎門に學を奉ずるもの相ひ繼て死す故に之を奉崇するもの皆な成齋に依る稱して垂加の學統と曰ふ程朱の旨を闡發すること頗る多し當時理學を談ずるもの關東に於ては栗齋玉水を推し關西には久米訂齋及び成齋を推す之云ふ寛政九年閏七月四日歿す年九十六成齋潔居娶ずず故に姪景翼を養ひて子とす(續近世叢語、事實文編、續諸家人物志)

ニシヨリ　ボクザン　西依墨山　若州侯の儒官なり字は翼夫、名は景翼、丹右衛門と稱す墨山は其の號成齋の姪なり成齋子なし養ひて子とす若州侯に仕ふ家學に於て性理の說を發明すること多し寛政十年歿す即ち成齋歿するの明年なり年五十八、(諸學日知錄、墨山文集を著す(續近世叢語、諸家人物志)

ニシキ　マサマル　西居正丸　陸軍歩兵少尉なり福井縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て第九師團歩兵第十九聯隊附として從軍中廿八年三月

六日清國盛京省大石橋附近に於て戰死す戰功に依り勳六等功六級に叙せらる

ニシヨカ　クニノスケ　西岡邦之助　勤王の志士なり下野國足利郡大前村の人初め彦三郎と稱し後邦之助と改む少より幕府の旗下士居萬大夫に仕ふ病に托して暇を請ひ鄉里に歸り近鄉の少壯を集めて尊攘の事を勸說す元治元年水戸の田丸稻之衛門藤田小四郎等兵を擧ぐと聞き馳せて之に投じ屢ゝ勇名を矗かせり稻之衛門等が松平賴德を救はんとて那珂湊に赴くに際し邦之助昌木春雄と共に其部下の卒を率ゐ横濱の外國人を襲はんとて下總街道に出づ會ゝ古河藩の兵と遭遇し同年十月六日小堤村にて戰死す時に年四十(殉難錄稿)

ニシヨカ　サタラウ・西岡佐太郎　陸軍輜重兵少尉なり和歌山縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て豫備役より召集せられ第四師團補助輸卒隊附として從軍中三十八年一月二十五日清國盛京省柳樹屯にて病に罹り同二月十日同所兵站病院に於て死去す

ニシヨカ　ゼンスケ　西岡善助　三河の儒者にして吉田藩に仕ふ詩語假訓約覽等の著あり(漢學者著述目錄)

ニシヨカ　ソウジ　西岡總次　陸軍歩兵少尉なり兵庫縣出身にして明治廿七八年日露戰役に際し豫備役より召集せられ第十師團後備歩兵第十聯隊附として從軍中卅七年九月三日清國遼陽附近に於て戰死す

ニシヨカ　ソレガシ　西岡某　讃の西部の戶書なり政を善くするを以て其の名高し魯て大夫堀某請ひて之に觴して曰く今歲年飢て用足らず我諸大夫爲に旨を疾ます今ま子の勤を以て常賦闕なく公用濟ふことを得たり子亦た勞す請ふ子と一醉して以て勞を忘れんと言未だ畢らざるに左右鴨羹を捧げて出づ四岡席を避けて曰く若し燕好を以て之に一盃を賜はらば則ち某何の辭避する所あらん獨り賦を徵するの勞を以てすれば則ち敢てせず抑ゝ今歲誅求する所は則ち盡く百姓の某祝れば猶ほ百姓の膏と血とを見るがごとし安んぞ能く鴨を下らんやと推て之を斥けて歸る時に一富人あり綿花を推せんことを請ふ四岡曰く若し之を聽さば民必ずしも叛かんと府譚終に之を聽す封民果して群起し城市簿粉鑑して餘す所なし府城爲めに震ひ二隊將を遣はして旌戟森然將に兵威を以て之を驅退せんとす衆憤りて益ゝ激し沸聲雷を成し瓦石鎗芝空を蔽ひて下る勢ひ近く可らず是に於て四岡に命じて撫定せしむ四岡曰く某固と已に之を言ふ今ま如何んとも爲す可らず然りと雖も職を奉じて此に在り請ふ之に死せんと獨り家奴を率ゐて二燈を張り一奴をして槍を荷はしめ蹶然として之に赴く衆其の燈號を識り相呼びて曰く我翁々と街を分ちて伏し寂として聲を成さず四岡直ちに富人の堂に昇り色を勵まして曰く凡そ下情の窮號する所は當に里正に在りて之を撥更に戶數に執政に達すべし執政以て之が府公に以聞せん節次自ら道あり今ま其の道に由らず乃ち敢て暴揚蠟集し以て府公を擾す府公上に在り悖逆は大不敬能く語下に散去せば則ち善し稍ゝ遲疑せば我は一劍あり臂力の有ろ所を盡して一人だも生きて還らしめずと劍を扣へて睨す二萬人同聲一唯して爭ひ潰え街上寂として一人の留る者なし事遂に止む(事實文編)

ニシヨカ　ヤハチ　西岡彌八　陸軍歩兵中尉なり熊本縣出身にして明治廿七八年日露戰役に於て歩兵第四十六聯隊附として從軍中廿七年九月廿六日清國盛京省紅沙嶺に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ニシヨカ　キヨシ　西尾清　陸軍歩兵中尉なり鹿兒島縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て從軍中廿八年三月三日清國盛京省孤家子附近に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ニシヨカ　サダヤス　西尾定靜　歌人なり字は仲愈、芦庵に學ぶ享和元年五月廿七日歿す年六十二(平安墓所集)

ニシヨカ　シゲナガ　西尾重長　小左衛門と稱す吉田流の射術家なり吉田茂氏に學び其の蘊奧を究む德川秀忠家光に歷仕す元祿五年十二月二十六日歿す(武術流祖錄)

ニシヨカ　ヂウベエ　西尾重兵衛　石州流の茶人なり名は教安宗女と稱す渡邊立庵に學びて其の道を能くせり後ち剃髮して性隱と曰ふ實曆八年十二月歿す年六十一(茶人系傳全集、古今茶人系譜)

ニシヨ　フジマロ　西尾富滋麿　陸軍騎兵大尉なり東京府出身にして明治三十七八年日露戰役に於て第八師團騎兵第八聯隊附として從軍中廿八年一月四日清國盛京省四方臺方面敵情搜索の際戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ニシヨ　ミツノリ　西尾光敎　美濃の人なり姓は源氏、祖父光秀兵庫頭と稱す參河を去て美濃に移住し隣境を伐ち平げ曾根城に居治す子なし外孫信光を以て嗣となす信光は丹波の人粗井信光の子なり信光出雲守と稱す是を光敎の父と爲す光敎初字は小六耶揖斐に移住し族を西尾と稱す野口の邑三千貫を食み民家友國の波官と爲りて齋藤氏に屬す後ち友國と右府信長に隸す功を累れて二萬石を食み與二右衛門と改稱す信長の弑逆に遇ふや關白秀吉に仕へ豐後守と稱す秀吉薨じて後德川家康に親昵す又た近衛家と姻あり慶長庚子の秋家康の上杉氏を征するに迄びて光敎兵を以て發す奉行等書を寄せて招く從はず光敎嘗て敵の情を伺知竊かに妻孥を近衛家に托す是に於て奉行等平塚爲齋をして光敎の妻孥を收めしむ爲齋到る乃ち空邸のみ光敎大谷吉隆に垂井驛に遇ふ吉隆之を拘して謀を告げ命じて佐和山に適かしむ光敎伴りて之に從ひ宵に逃して小山の營に至り具さに之を言ふ家康喜びて曰く簡報其の略を聞くのみ今其の詳なるを獲たりと乃ち命じて先鋒に隸して四上せしむ吉隆其の己を欺くを悲り兵を發して光敎の邑を奪ふ又た孥を大阪に覓む而して得ず遂に其の邸を燔く光敎遠藤廣隆金藤可重と鄙上の城を攻む家康美濃に入るに及び光敎命を受けて水野勝成松平康長津輕爲信と大垣城を攻む九月十五日裂明安八郡須賀邑の人久瀨助兵衛潛かに光敎に謂ひて曰く三成等昨夕他に出づ孤城兵寡し請ふ之を攻めんと光敎悅び勝成と謀りて曾根を發し急に大垣を圍む諸部先を爭ふ光敎前門に乘り傳馬町口を破る士卒死傷する者多し備禦固し乃ち勝成謀て敵を誘ふ秋月種長等降を乞ひ熊谷直躋を斬り師を率ゐて牙城に薄る遂に之を拔く十一月美濃の田一萬石を加賜す大阪冬夏の役に從ひ首を獲ること七

級元和二年十一月卒す年七十三子教次信濃守と稱す慶長三年父に先て卒す初光教外孫某を養ふ次を氏教と云ふ字は主水賀と爲て東府に在り光教卒するに及て食邑五千石を頒ちて幕府に仕へしむ嘉教を以て嗣と爲す大野安八本巢加茂四郡の內貳萬五千石を食む叙爵して出雲守と稱す元和九年四月卒す嗣なくして絕ゆ（野史）

ニシヨ　ヨシツグ　西尾吉次　本名は義次參河の人姓は源氏吉良持廣の子なり持廣卒す吉次年猶幼なり四條の吉良義堯の子義安を以て持廣の嗣となす後義安東四條を併有して西尾の城に居り吉次を織田氏に送て質となす吉次初字は小左衛門右府信長に仕ふ天正十年夏信長弑に遇ふ吉次馳せて堺浦に赴き變を家康に告げて之に仕ふ十四年關白秀吉諱字及豐臣を賜ふ十八年武州原市の田五千石を賜ふ慶長四年從五位下に叙し隱岐守と稱す七年奚濃の田五千石を加賜す十一年八月伏見に卒す年七十七法名梵長養子忠永嗣ぐ子孫封邑を累れ併せて三萬五千石を食む橫須賀城に居り子孫侯籍に列す（野史）

ニスヰ　二水「ナガヤマトクフ」

ニセン　二川　俳人なり越中富山の人其の姓名を逸す世と醬俟に仕ふ性風流にして俳諧を善くし風に周遊の志あり嘗て書を上りて致仕を乞ふ侯其の才を惜みて免さず却て增秩の議あり二川之を聞き大に驚き滯かに髮を剃りて夜逃ぐ其の去るに臨みて俳句を壁に書して曰く「米吳れる人には逃げて花に鳥」と侯亦た其聯を實ぜず二川後ち鄕里に還り住むと云ふ

ニダイノキサキ　二代后「フヂハラマスコ」

ニタンシラウ　仁田四郎「ニツタタダツネ」　日　伯耆大原の刀匠重長の隱名なり或は云年代系譜詳ならず日光日乘の隱名ならんと（古今鍛冶備考、本朝鍛冶考）

ニチアウ　日奥　安國坊と號す西京の富商辻藤兵衛の男なり永祿八年六月八日生る十歲の時妙覺寺日典に從ひて天台の教義及び本宗別途の奧意を學び文祿元年秋日典に代りて妙覺寺に主たり同四年九月豐臣秀吉千僧供養の法會を修す本宗諸山亦た與かる特り派祖宗規を確守し之に應ぜず因つて不信施の受く可からざる理と成佛の道特り法華に在るの由を述べ之を秀吉に出す遂に同月二十五日妙覺寺を去つて丹波に赴く慶長五年五月對馬に謫せらる同十七年春德川家康の敎に遂ひ再び妙覺寺に住す元和九年十月十三日德川秀忠例に受施の九牌を賜ふ後久しく絕ゆ日奥寛永七年三月十日を以て寂す時に年六十六（諸宗祖師略傳）

ニチイン　日印　幼名摩詞一、摩詞一院と號す參河の人姓は源氏吉良持廣卒す吉次年猶幼なり父は安高母は某氏文後義安東四條を併有して西尾の城に居り吉次を織田氏に送て質となす吉次初字は小左衛門右府信長に仕ふ天正十年夏信長弑に遇ふ吉次馳せて堺浦に赴き變を家康に告げて之に仕ふ十四年關白秀吉諱字及豐臣を賜ふ十八年武州原市の田五千石を賜ふ慶長四年從五位下に叙し隱岐守と稱す七年奚濃の田五千石を加賜す十一年八月伏見に卒す年七十七法名梵長養子忠永嗣ぐ子孫封邑を累れ併せて三萬五千石を食む橫須賀城に居り子孫侯籍に列す（野史）

ニチイン　日胤　僧なり千葉常胤の第七子律師の法師承和比の人なり或は武保の子にして一日乘の孫延喜延長年間の人なり或は武保の子にして一日乘の孫延喜延長年間の人なり源義經帶車の太刀は此人の作なりと云又云弘仁比の人にして長江日乘と稱す一宮の法師なり故に刀銘或は一宮の二字を刻すと（本朝鍛冶考、古今鍛冶備考、古今鍛冶銘早見出）

ニチイン　日印　幼名摩詞一、摩詞一院と號す姓は朝倉氏越後國瀧原郡の人なり父は安高母は某氏文永元年に生る日印八歲にして同郡天台宗石瀨山青龍寺の徒弟となり御寶藏番一手に引受け其負を解へて油智觀に投ず摩訶止觀第一を聞て發悟す摩訶一日印と名づく時に永仁二年四月八日なり元應二年一庵を永仁に賜ふ庭池設け本勝寺と號す元亨元年本勝寺を日靜に付屬す庭池に亘る九年九月上京して岡千仞の塾に入り漢籍及び書道學を修め十三年十月京都に至りて比叡山本願寺知恩院學林にて俱舍唯識天台三大部を修む二十三年國敎論の蘊々を極むるや上京して正法治國論を草して日蓮宗富士派の國敎と爲る各宗より各僧を出し對論せしめ以て其優劣を決す可しとの意を述べ之を乙夜の覽に供せんとて宮內大臣に送出し事あり二十五年尙島小梅町常泉寺の住職となり三十五年管長候補者選擧の際に當選して大學頭となりしも性剛直人と相容れず爲めに管長に上る能はずして三十九年九月布敎の爲めに渡韓したるが遂に病に罹り四十年九月二十三日東京下澁谷羽根澤の寓居に寂す年五十四

ニチダツ　日脫　天性豪俊器幹あり一派禁侮と稱す平生好みて人の難に赴く水火を避けず相馬大作の二孤を救ふが如き蓋其の一なり大作縛に就き官法を以て首を梟す大作子あり龍と名ぐく姪あり諒一と名く皆な幼なり津輕氏物色して之を求むる甚だ急なり人の之を救ふ者なし大作縛に遇ふの前月清水某を訪ふ某亦た慄慑日脫と相善し是に於て寅夜二孤を拉し之を日脫に託す津輕氏又た更に嗔しむるに重利を以ても日脫に託す其の跡稍〻顯はる嗔〻日脫の豪俊を憚り敢て入らず日脫二孤に諭し强て披髮せしめ徒弟をして常陸某寺に護送せしむ居ること半年偵吏又た來り狙ふ報到る因て事に託して官に請ひ潛に二孤を己の幡に匿し之れを大石寺に託す寺は不二峰半腹萬山中に在り是れ不二派の本山なり二孤武弁に出づるを以て僧となるを屑しとせず日に木刀を揮ひ弓矢を携へ麋鹿を逐ひ父讐を復せんとするに似たり日脫數〻戒諭す遂に節を折て能く其の教を奉ず後日脫病に罹り自ら死期たるを知り一日信徒を招き硬飯を饌し爲に法華經を讀じ訣別合掌して瞑す年六十日脫戒を持すること最も嚴正にして縞素の喪する所と爲る幕府之に上人の號を賜ふ（譯故書餘）

ニチダツ　日脫　僧なり字は空雅、一圓院と號す加州の人姓は逸見氏日理法師に師事し飯高に遊學す登嵩に學を務めて倦ざると二十年學富み才發して雄名を振ひ山科の講主となり立本寺に住持す復た關東の請に依り延寶四年來りて祖山に主坐す八年詔勅を禀け京都に入り天顏を拜す之れ祖山賜詔の始めなり十一年秋瑞輪寺に病み九月廿二日化す年七十三（纂耙）

ニチヂ　日持　日蓮六老僧の第六なり駿州庵原郡松野郷の守護松野六郎政行が義子にして幼名を松千代といひ少時より深沈寡言尋常の兒童と異り八歲の折四書を誦し奇童と稱せられ初め岩本實相寺の學林に入る後戀山に昇り能登坊眞乘と呼ばれ日蓮の敎義を慕ひ其徒弟となり蓮華坊阿闍梨日持と改め專ら師の坊の傍にありて雜行し此の間種々の法難を共にし文永十一年日蓮身延へ退隱するに隨ひて常に其の傍にあり弘安六年日昭、日期、日興、日向、日頂と共に六老僧に選まる日蓮入滅後は其の自坊松野蓮永寺に退き永仁三年正月元日一天四海皆歸妙法の意を奉じて海外布敎を企て各地を巡歷し風波を治め漁民を救ひ津輕峠にて路傍の大石に題目を書し本國告別の印塔となす夫より石崎浦に至り物に假夷渡海の便宜を求め蛎崎甚平なる者法德に歸依し進んで案內者となり假夷海岸に小屋を造り土人ムシヤタ兄弟來りて敎化を受く鼓に四年間農事漁業殖民の基を開きムシヤタを案內として樺太を經て滿洲に渡り驪男の土人を敎化して遂に吳城の土と化すと云ふ

ニチヂウ　日重　僧なり一如と號す京都の人故ありて若州に遊び日重を此に生む甫めて六歲乃ち攜へ歸りて光山南泉坊に投ず資性敏捷學を好みて機辯響の如し一日嘗に赴く酒あり日重潛かに床下に窶つ榎家之を覩て日兒欲せざれば受る勿れ受けば即ち何ぞ窶るやと日重曰く法界に窶つる耳と適〻庚申會に入り碁を圍みて了々たり日重默して側に坐す人或は日重に謂て曰く子亦た碁を圍む乎何ぞ獨り窶々たると日重曰く吾復た將棋を知らずと後ち之が問ふ者あり日重語りて曰く但し碁を能くせずと言はゞ人將に言はんとす將棋を招き硬飯を饌し爲に法華經を讀じ訣別合掌して瞑す年六十日脫戒を持すること最も嚴正にして縞素の喪する所と爲る幕府之に上人の號を賜ふ（譯故書餘）

ニチダツ　日脫　僧なり字は空雅、一圓院と號す加州の人姓は逸見氏日理法師に師事し飯高に遊學す登嵩に學を務めて倦ざると二十年學富み才發して雄名を振ひ山科の講主となり立本寺に住持す復た關東の請に依り延寶四年來りて祖山に主坐す八年詔勅を禀け京都に入り天顏を拜す之れ祖山賜詔の始めなり十一年秋瑞輪寺に病み九月廿二日化す年七十三（纂耙）

ニチヂ　日持　日蓮六老僧の第六なり駿州庵原郡松野郷の守護松野六郎政行が義子にして幼名を松千代といひ少時より深沈寡言尋常の兒童と異り八歲の折四書を誦し奇童と稱せられ初め岩本實相寺の學林に入る後戀山に昇り能登坊眞乘と呼ばれ日蓮の敎義を慕ひ其徒弟となり蓮華坊阿闍梨日持と改め專ら師の坊の傍にありて雜行し此の間種々の法難を共にし文永十一年日蓮身延へ退隱するに隨ひて常に其の傍にあり弘安六年日昭、日期、日興、日向、日頂と共に六老僧に選まる日蓮入滅後は其の自坊松野蓮永寺に退き永仁三年正月元日一天四海皆歸妙法の意を奉じて海外布敎を企て各地を巡歷し風波を治め漁民を救ひ津輕峠にて路傍の大石に題目を書し本國告別の印塔となす夫より石崎浦に至り物に假夷渡海の便宜を求め蛎崎甚平なる者法德に歸依し進んで案內者となり假夷海岸に小屋を造り土人ムシヤタ兄弟來りて敎化を受く鼓に四年間農事漁業殖民の基を開きムシヤタを案內として樺太を經て滿洲に渡り驪男の土人を敎化して遂に吳城の土と化すと云ふ

ニチヂウ　日重　僧なり一如と號す京都の人故ありて若州に遊び日重を此に生む甫めて六歲乃ち攜へ歸りて光山南泉坊に投ず資性敏捷學を好みて機辯響の如し一日嘗に赴く酒あり日重潛かに床下に窶つ榎家之を覩て日兒欲せざれば受る勿れ受けば何ぞ窶るやと日重曰く法界に窶つる耳と適〻庚申會に入り碁を圍みて了々たり日重默して側に坐す人或は日重に謂て曰く子亦た碁を圍む乎何ぞ獨り窶々たると日重曰く吾復た將棋を知らずと後ち之が問ふ者あり日重語りて曰く但し碁を能くせずと言はゞ人將に言はんとす將棋を招き硬飯を饌し爲に法華經を讀じ訣別合掌して瞑す年六十日脫戒を持すること最も嚴正にして縞素の喪する所と爲る幕府之に上人の號を賜ふ（譯故書餘）

ニチヂウ　日重　僧なり字は正純、世姓小野氏、武州の人、幼にして郡の四光院日雄の室に入り朝染受戒學を好み寸陰を惜みて殆んど寢食を廢す十五歲に及び包を腰にして根山に上り論場に遊び遂に日玄賴玄二老に侍し飽くまで玄提に沐し天正の兵亂に遭ひ跡を高野山に逃る嘉聲藉〻鄕閭に覃ぶ武州の檀信相迎へて四光の席を董さしむ未だ幾ばくならずして席を退き長谷寺に遊び專擧僧正に隨ひて秘敎の蘊底を探り去りて智積院の玄宥僧正に謁して造詣益〻深し慶長十一年秋請を受け江戸の總持寺に住す擧性度弘偉にして沈默寡言恒に論鼓を擊ちて宗乘を贊揚す義鋒天逸辯才無礙なり時に智積宜僧正聞きて欽羨し擢て補處に充つ慶長十七年冬十一月智積に祝髮し明年の春東行す時に台命あり論鑑を城中に啓く率ゐる所の元壽秀算俊賀賴勢等皆一時の龍象なり問難峰起擧經を引き理に據り一一之を折す縱橫自在なり家康凡を撫し快と稱す諸侯士大夫滿坐耳を傾つ十九年の春重て駿府に徵され又講席を張るもの五次每に褒賞を蒙り更に承命して江戸に赴き秀忠に謁す乃ち營中に於て論鑑を鋪くこと五番恩榮備さに至る明年夏五日家康大阪の役あり凱歌雄旆を二條城に反へす三月萬機の暇叡岳高野南京の碩學を城中に招きて慶〻論席を設けて旗戰を揚げしむ擧も亦命を奉じ英稱を率ゐ論鑑を肆する者數個或は愚賜を承け別に封戶を增し永く淨厨の費を受く又智積の舊院となす大厦廣殿大衆を容るゝに足る元和三年秋八月勅を奉じ僧正に任ず寛永八年の冬城北の報恩寺に退隱し再び密印灌頂を受け諸尊の秘軌を傳ふ寛文中稻荷山愛染寺に住す初て赴くの日兩狐牛途に迎へ路を夾み列て前導す初め神照寺にありし時瑜伽を修習する十日散席に至りて數十狐あり庭に集る此に至て之を憶其の地を穿ちて獨鈷金剛杵を得たり智積の宥貞僧正に謁して根蔵の幽旨を探る寛文中神照寺に歸り灌頂壇を開き大に繒素を度す後ち退きて稻葉山の麓に隱る性修錄を好み歡喜天の密軌を行ふ凡二百六十五度四儀に兇を持し慢倦あるなし許可及傳法灌頂を受る者一百二十八人延寶二年十月五日逝く年七十六法臘五十六（纂東國高僧傳）

ニチヨ　日譽　京都智積院の住僧なり字は正純、世姓小野氏、武州の人、幼にして郡の四光院日雄の室に入り朝染受戒學を好み寸陰を惜みて殆んど寢食を廢す十五歲に及び包を腰にして根山に上り論場に遊び遂に日玄賴玄二老に侍し飽くまで玄提に沐し天正の兵亂に遭ひ跡を高野山に逃る嘉聲藉〻鄕閭に覃ぶ武州の檀信相迎へて四光の席を董さしむ未だ幾ばくならずして席を退き長谷寺に遊び專擧僧正に隨ひて秘敎の蘊底を探り去りて智積院の玄宥僧正に謁して造詣益〻深し慶長十一年秋請を受け江戸の總持寺に住す擧性度弘偉にして沈默寡言恒に論鼓を擊ちて宗乘を贊揚す義鋒天逸辯才無礙なり時に智積宜僧正聞きて欽羨し擢て補處に充つ慶長十七年冬十一月智積に祝髮し明年の春東行す時に台命あり論鑑を城中に啓く率ゐる所の元壽秀算俊賀賴勢等皆一時の龍象なり問難峰起擧經を引き理に據り一一之を折す縱橫自在なり家康凡を撫し快と稱す諸侯士大夫滿坐耳を傾つ十九年の春重て駿府に徵され又講席を張るもの五次每に褒賞を蒙り更に承命して江戸に赴き秀忠に謁す乃ち營中に於て論鑑を鋪くこと五番恩榮備さに至る明年夏五日家康大阪の役あり凱歌雄旆を二條城に反へす三月萬機の暇叡岳高野南京の碩學を城中に招きて慶〻論席を設けて旗戰を揚げしむ擧も亦命を奉じ英稱を率ゐ論鑑を肆する者數個或は愚賜を承け別に封戶を增し永く淨厨の費を受く又智積の舊院となす大厦廣殿大衆を容るゝに足る元和三年秋八月勅を奉じ僧正に任ず寛永八年の冬城北の報恩寺に退隱

ニチジョウ　日乘　備後一乘三原派の刀匠にして明應永年間の人なり或は云一乘の門人にして至德康應年間の人なり或は云一乘の弟なり法華三原と稱す後同名の者一人ありと（本朝鍛冶考、古今鍛冶備考）

ニチセウ　シヤウニン　日照上人　日蓮宗の僧なり安政元年六月十二日仙臺大町に生る家世々質屋を業とせり幼より學を好み明治七年出家して駿河國富士郡上野村大石寺なる日蓮宗富士派管長鈴木日響の徒弟となり御寶藏番一手に引受け其負を解へて油智觀に投ず摩訶止觀第一を聞て發悟す摩訶一日印と名づく時に永仁二年四月八日なり元應二年一庵を永仁に賜ふ庭池設け本勝寺と號す元亨元年本勝寺を日靜に付屬す庭池に亘る九年九月上京して岡千仞の塾に入り漢籍及び書道學を修め十三年十月京都に至りて比叡山本願寺知恩院學林にて俱舍唯識天台三大部を修む二十三年國敎論の蘊々を極むるや上京して正法治國論を草して日蓮宗富士派の國敎と爲る各宗より各僧を出し對論せしめ以て其優劣を決す可しとの意を述べ之を乙夜の覽に供せんとて宮內大臣に送出し事あり二十五年尙島小梅町常泉寺の住職となり三十五年管長候補者選擧の際に當選して大學頭となりしも性剛直人と相容れず爲めに管長に上る能はずして三十九年九月布敎の爲めに渡韓したるが遂に病に罹り四十年九月二十三日東京下澁谷羽根澤の寓居に寂す年五十四

ニチダツ　日脫　天性豪俊器幹あり一派禁侮と稱す平生好みて人の難に赴く水火を避けず相馬大作の二孤を救ふが如き蓋其の一なり大作縛に就き官法を以て首を梟す大作子あり龍と名ぐく姪あり諒一と名く皆な幼なり津輕氏物色して之を求むる甚だ急なり人の之を救ふ者なし大作縛に遇ふの前月清水某を訪ふ某亦た慄慑日脫と相善し是に於て寅夜二孤を拉し之を日脫に託す津輕氏又た更に嗔しむるに重利を以ても日脫に託す其の跡稍〻顯はる嗔〻日脫の豪俊を憚り敢て入らず日脫二孤に諭し强て披髮せしめ徒弟をして常陸某寺に護送せしむ居ること半年偵吏又た來り狙ふ報到る因て事に託して官に請ひ潛に二孤を己の幡に匿し之れを大石寺に託す寺は不二峰半腹萬山中に在り是れ不二派の本山なり二孤武弁に出づるを以て僧となるを屑しとせ

す十七年冬十一月廿日病なくして睡るが如く蛻す年八十五(續東國高僧傳)

ニチヨクアン　ニチラ　日羅　二直庵「ソガニチヨクアン」火葦北國造阿利斯登の子なり阿利斯登宣化帝の時使を海外に奉ず日羅初め百濟に居て官達率たり敏達帝十二年詔を下して曰く我先皇の世に嘗りて新羅官家に內するの國を滅す先皇任那を復せんと欲して果さずして崩ず朕先志を成さんと欲す聞く火の北國造阿利斯登の子達率日羅百濟に在り賢にして勇なりと朕斯の人を得て相共に之を圖らんと欲すと遂に紀國造押勝、吉備海部羽島を遣して之を召す百濟其材を愛して肯て還さず再び羽島を遣して之を召す羽島既に至る先づ日羅を視んと欲して潛かに其命に抵る日羅迎て手を執りて之を坐に延き私に語りて曰く僕竊かに聞く百濟は臣の天朝に至るを恐れ留めて還さずと是を以て國を奉ずることを肯てせず宜敕の日宜く威容を示して以て之を促せと羽島其の計に從ふ百濟已を得ず遂に愚率德爾、余怒可奴知、參官施師德率次干德、水手等若干人を以て護送せしめ來て吉備の兒島の屯倉に抵る朝廷大伴糠手子を遣して之を勞はしめ復た太夫等を以て之を難波館に慰勞せしむ日羅甲を被り馬に乘り門に抵りて下り徐ろに廳前に進み跪拜して曰く故火葦北國造刑部靫部阿利斯登の子臣達率日羅天皇の詔を奉じ恐懼來朝すと乃ち甲を解きて之を上る乃ち館を阿斗桑市に參み之に居らしめ其の欲する所に隨ふ糠手子、阿部目、物部贄子を遣して就て國政を問はしむ日羅奏して曰く夫れ天下を治むるの要は黎民を愛養するにあり何んぞ遽に兵を起して損失を取らん當今の計をなす宜く在朝の臣連二造よりして下、百姓に及ぶ迄家々給し人々足りて欠乏する所無らしむべし之を行ふこと三年兵食を足し民を使へば民水火を避けず悅びて國難の爲めに盡さん然後に多く船艦を造りて海津に列置し以て蕃客に觀せば其を聞て恐懼せしめ乃ち使に堪ゆる者を選みて百濟に遣し其の國王を召し若し來らざれば則ち其の大佐平王子等を召し彼を以て自ら敬畏の心を生ぜしめて後其の罪を問はんと又た奏して曰く百濟人謀りて將に船三百を以て筑紫の地を乞はんとす果して然らば則ち陽に之を與ふべし彼れ女人小子を率ゐて來り其の地を實さんこと必せり國家儲め兵を壹岐對馬に伏せ其の至るを俟ちて之を掩擊し反りて欺かるゝ勿れ又惡聲を要害に築き以て之を拒き備ふ可しと是に於て恩率參官將に歸らんとして竊かに德爾、余怒に謂りて曰く我聖の筑紫に至る比ひな計て汝等竊かに日羅を殺せ吾其に之を啓して高冑を授け恩率に及び棠後世に垂れ參官等遂に血鹿を發す日羅復た難波館に遷る德爾等詐て參官等を伺ひて將に之を刺さんとす日羅身に光あり焰の如し德爾等恐れて敢て發せず一夕其の光怒ち熄む因て之を刺殺す日羅甦て曰く是れ我が驅使す之を刺殺す日羅甦て曰く是れ我が驅使す奴隸の なす所にして新羅の使も亦京師に在り故に云爾、帝時新羅の使も亦京師に在り故に云爾、帝繇手子議して小郡四丘に收葬し妻子及び水手等を石川に移す糠手子議すらく彼を以て聚居せしむる恐らくは變を生ぜんと乃ち妻子を石川百濟村に水手等を石川大伴村に移し德爾等を下百濟阿田村に囚へて其の事を詰問す德爾等罪に服して冒ふ恩率參官の敎示に下す是に於て日羅の族を葦北に召し德爾等恐れて新羅の知る所に非るなりと冒ひて賜ひ其のなす所に任さむも葦北君等悉く之を殺し屍を彌寶島に投ず遂に日羅の喪を持して歸海の者相傳ふ恩率風に遭て覆滅し參官の船も亦た漂蕩し僅に免れ歸るを得たりと(大日本史)

ニチラウ　日朗　上人法華六老僧の第二なり上總の人にして日照の族なり小名は吉祥丸新羅三郎五世の孫平賀有國の子年十六日蓮に從て法華を學び大國阿闍梨と稱す文永八年師と共に執へられて土牢に入れられる元應元年正月二十一日池上に寂す年七十八下總平賀氏の人なり姓は桃井右馬頭尙儀の二男幼名長一麿といふ日隆至德二年十月十四日越中に生る十歲の時同國造成寺に入り本土寺の開基なり

ニチリウ　日隆　字は深圓精進院と號す越中の人なり姓は桃井氏清和帝の後裔桃井義鼎九代の孫なり頭尙儀の二男幼名長一麿といふ日隆至德二年十月十四日越中に生る十歲の時同國造成寺に入り本土寺の開基なり才にして和歌に精はし日蓮幼にして父を喪ひ甫めて六歲其の母日重師に從ひて出家せしむ日蓮初め到る日會日重爪を剪る乃ち日蓮みして爪を收めしむ日蓮拾ひ舉りて猶ほ左右に求む日重曰く兒何をか求むる日蓮曰く爪唯こ九つと日重笑て曰く足れり其一は吾れ前きに之れを剪るを日重之れを奇とし意を加へて教育す日蓮法華を習ひて未だ幾ならず入軸皆な誦徹し尊て台敎を學ぶ敏悟の名早とに都城に滿つ年十六自から法華を講ず聽者其の神悟に服す日重止觀を講ず門人密かに議して曰く止觀は淵奧豈に能く微旨に達せんや若かず堯順(日蓮字は堯順)に就て文句を聽かんにはと遂に日蓮に勸めて之を講ぜしむ日蓮此より入りては則ち止觀を聽き出でゝは則ち文句を講ず止觀記るの日文句半ばに過ぐ又た南都に往て俱舍及び律部を聽き瑜伽唯識の學を窮く己にして京都に返りて東山大藏に入る其の抄錄する所三十卷分ちて六部と爲す時に年二十八慶長四年始めて台敎大小諸部を講ず凡そ六年學者麕至す日蓮年三十三鳥延山に住す會ゝ常樂寺の日經師淨土宗と事あり德川家康日蓮を駿府に召す日蓮因て請ひて曰く願くは宗論を遂げんと家康大に瞋り乃ち議して死刑に當つ日蓮懼れず自ら碧服を着て且幕刑を待つ家康其の志操に感じ許して山に歸す日蓮身延を聲して大野に入り自ら一室を構ふ今の本遠寺なり是に於て學者彌ゝ多し元和元年家康日蓮に命じて再び身延に住せしむ居ること一年又た大野に返る寛永七年池上の日樹寂せらる幕府乃ち池上を以て日蓮に賜ふ日蓮固辭す聽かず居ること一年退きて鎌倉經谷に隱る寛永十九年病みて化す年七十一日蓮性慈敏寡者に逢へば脫して衣を與へ貧人を見れば之れに資を分つ然れども金錢の類は生來手に觸れず三時の梵行所謂五悔及び禮誦書寫等日に二十餘事を課し寒暑と雖も廢せず自ら法華一万部を讀み時々和歌を詠じて懷を遣る歌を善くする者皆な之れを稱す其の神する所の三大部記數十卷多く聞く所を錄す因て隨聞記と名づく板に刻するに及びて隨聞記と改む誦經の人音句二卷を著はす音句明かならざれば和訓隨びて差ふ乃ち謬和集三卷を作る其の抄出著述頗る多し幷びに世に行はる嘗て九條相國幸家日蓮に有馬溫泉に邂逅す因て日蓮を延きて法華を講ぜしむ慰河浪々幸家大に悅び乃ち日蓮の旅寓に臨みて親ら之れを謝す世之を榮となす(事實文編細流部)

ニツカ　日可　鷲谷山人と號す瑞光寺の僧にして深草元政の弟子なり書畫を善くす(書畫便覽)

ニツカイ　ニツカウ　日海「ホンインバウニツカイ」

ニツカウ　日向　日蓮六老僧の第四也姓は小林下總埴生郡の人佐度阿闍梨と稱す初め叡山に剃髮し後日蓮に依る日蓮佐渡に謫せらるゝに及び與項持三人と侍す師滅後安立院を立て又妙光寺の開山たり遂に身延山に遷住す正和三年九月三日寂す年六十三(本化別頭佛祖統紀十)

ニツカン　日乾　曾なり字は孝順寂照と號す姓は塚本氏父某は越前の人武男の士なり若州小濱に淪落し此に日乾を生む日乾幼にして鄕の長源寺の欽法師に養ふ乃ち母と共に京に入りて日重上人に仕へ偶ゝ父を喪ふ乃ち從ふ時に日乾年十三歲顯悟にして强記六年を涉りて三大部を究め遂に遊歷を事とし三井に寓して俱舍を學び南都に往きて瑜伽唯識律部等を習ふ日乾論議に巧みに講說を善くし六たび光山の大論議講師となり且つ百日を以て之を建築す其の出でゝ北陸地方に敎を布くや山を隔て雪を冒して同夜惰らず遂に病を得て歸り明治十九年二月に至りて終に起たず之を久遠寺に葬る日鑑人となり溫良謙讓にして學識宮贍詩歌を能くすと云ふ

ニツキ　日輝　僧なり幼名は駒三、薙髮して覺善と稱す堯山と改む又た優陀那と稱す姓は野口氏世ゝ加賀藩士たり金澤に住す中世越中に遷る父和平別に家を起して復た金澤に移住す母圓山氏三子を生む長子某日蓮宗を信ず早世す遺言を奉じて一子を度して僧となさんと欲す皆な肯んぜず會ゝ母身めるあり潛行して甲斐身延山に詣りて男子を產する所を訪ひて以て僧と爲さんとす十三月にして生る即ち日輝なり行寂と名く妙立寺日雅講ひて弟子となし佛儒の二學を修めしむ時に宗學衰替京都深草本妙日蠕に從ひて大に得る所あり去りて關東に赴き武總諸州を遇遊する各宗學匠に咨詢す愈ゝ邇する者なし乃ち決然歸鄕して室を立像寺の園に築き沈思潛究し遂に前世諸師の軌範を脫し祖師日蓮の深旨を發揮し書を著はして之を辨じ悉く儀則を更む學徒漸く加る同宗僧徒之を嫉み謗讒紛起し斥けて異派となし迫窮最甚し藩侯之を知り特に金若干を賜ひ其學行を賞す是より先日雅屢ゝ職を讓る固辭して從はず天保四年立像寺日靜老て病あり職を讓ること甚だ懇切、立像寺は巨剎にして妙立寺の右に班す義辭すること能はず遂に職を强ふ是より聲名益ゝ播き學生益ゝ加り東四各國至らざるの地なし在學する徒常に數十人他宗の僧徒亦た來學す藩の太夫歲に米三十包を賜給し助けて

ニチレン　日蓮　法華宗の開祖なり開院冬嗣の後裔にして後遠江村櫛に居る姓は三國父方左衞門重忠と云ふ母は清原氏日光胸上に耀くと夢みて孕み貞應元年二月十六日房州長狹郡敢川村の適所に生る年十二清澄山道善に事へて名を藥王麿呂と曰ふ年十八削髮受戒し眞言を學び又た禪律密法を修む初は是成坊と號し後蓮長と號す後更に日蓮と改む又吉田兼益に就て神道を學ぶ專ら法華經を修め建長九年四月二十八日旭日に對して七字の題目を唱へ始て法華一派の宗門を立つ道善大に怒りて山を逐ふ文應元年七月安國論一卷を著して伊豆の伊東崎に流す時に弘長元年五月十二日なり後三年赦されて鎌倉に歸り復た諸宗を排り頓學を批す時頼日蓮及び其弟子日朝を土牢に幽し文永八年九月十二日龍口に於て將に斬られんとす時頼の子相摸守時宗宥めて死一等を減じ十月十日佐渡に流す十年二月十四日赦還す五月甲州に赴き身延山を開く後武州池上宗仲寺に移る弘安五年十月十三日宗仲寺に寂す

ニチレンノ　ロク　ラウソウ　日蓮六老僧　日蓮の高足の弟子六人を云ふ玉澤の開基日照、池上の日期、大石寺の日興、身延の日向、眞間の日頂、貞松の日持なり

ニチワウ　日王　大和千手院派の刀匠にして奈良に住す正元比の人なり或は永仁比の人或は當麻の派なり或は月國と同人なりと(本朝鍛冶考、古今鍛冶備考)

ニチワウ　日王　大和千手院派の刀匠にして應永比の人重岡と號す(古今鍛冶備考)

ニチヨン　日遠　僧なり字は堯順白ら一道と號す姓は石井氏、京都の人、父名は了元、二兄あり皆な優才にして和歌に精はし日遠幼にして父を喪ひ甫めて六歲其の母日重師に從ひて出家せしむ日遠初め到る日會日重爪を剪る乃ち日遠みして爪を收めしむ日遠拾ひ舉りて猶ほ左右に求む日重曰く兒何をか求むる日遠曰く爪唯こ九つと日重笑て曰く足れり其一は吾れ前きに之れを剪るを日重之れを奇とし意を加へて教育す日遠法華を習ひて未だ幾ならず入軸皆な誦徹し尊て台敎を學ぶ敏悟の名早とに都城に滿つ年十六自から法華を講ずるに足らず是に由りて斯の學あり是に於て大に營構を作し廣く山林を附し日乾を招きて中興の祖と爲し之を蓮永寺と謂ふ繼で日遠みして補處せしめ九年松山を辭して能勢に還り既にして洛北鷹峯に於て自から一庵を構へ當照寺と名づく後成りて講聚す十二年月徵差あり幾ばくもなく本滿寺に寂す年七十七(事實文編)

ニツカン　日鑑　甲斐國身延山久遠寺の住職なり土佐の人、幼にして聰明夙に佛說を信じ遂に落髮して日蓮に歸す是より後ち勤勉怠らず年を經て學識名望一宗に冠たり因りて推されて身延山に入り大敎正に至る久遠寺屢ゝ火災に罹り新築漸く成れば即ち焚失す然れども日鑑常に屈せず敎を四方に布きて醵金を促がし以て之を建築す其の出でゝ北陸地方に敎を布くや山を隔て雪を冒して同夜惰らず遂に病を得て歸り明治十九年二月に至りて終に起たず之を久遠寺に葬る日鑑人となり溫良謙讓にして學識宮贍詩歌を能くすと云ふ

ニツキ　日輝　僧なり幼名は駒三、薙髮して覺善と稱す堯山と改む又た優陀那と稱す姓は野口氏世ゝ加賀藩士たり金澤に住す中世越中に遷る父和平別に家を起して復た金澤に移住す母圓山氏三子を生む長子某日蓮宗を信ず早世す遺言を奉じて一子を度して僧となさんと欲す皆な肯んぜず會ゝ母身めるあり潛行して甲斐身延山に詣りて男子を產する所を訪ひて以て僧と爲さんとす十三月にして生る即ち日輝なり行寂と名く妙立寺日雅講ひて弟子となし佛儒の二學を修めしむ時に宗學衰替京都深草本妙日蠕に從ひて大に得る所あり去りて關東に赴き武總諸州を遇遊する各宗學匠に咨詢す愈ゝ邇する者なし乃ち決然歸鄕して室を立像寺の園に築き沈思潛究し遂に前世諸師の軌範を脫し祖師日蓮の深旨を發揮し書を著はして之を辨じ悉く儀則を更む學徒漸く加る同宗僧徒之を嫉み謗讒紛起し斥けて異派となし迫窮最甚し藩侯之を知り特に金若干を賜ひ其學行を賞す是より先日雅屢ゝ職を讓る固辭して從はず天保四年立像寺日靜老て病あり職を讓ること甚だ懇切、立像寺は巨剎にして妙立寺の右に班す義辭すること能はず遂に職を强ふ是より聲名益ゝ播き學生益ゝ加り東四各國至らざるの地なし在學する徒常に數十人他宗の僧徒亦た來學す藩の太夫歲に米三十包を賜給し助けて

以て學資となす時に水戸檀林久く廢たる弘化四年日輝上檀林又た之を聘す日輝往て其の學を振起す是に於て海内の宗徒始めて學に向ひ仰望すること泰斗の如し後數年にして病に罹り安政六年二月二十三日化す年六十金澤十一屋村墓域に葬る後ち立像寺の域内に移葬す著書百餘卷ありと云ふ（日輝和尚行狀）

ニツキ　ハクト　仁木白圖　名古屋の俳人なり享和元年五月十四日歿す（俳家歿故年表）

ニツキ　ヨシタダ　仁木義尹　頼章の子なり中務少輔兵部大輔と爲り丹波守護に補せらる山名師義の小林重長か遣して丹波を略せしむるや義尹出でゝ和久に陣し急か將軍足利義詮に告ぐ義詮諸將を遣して之を助けしむ重長戰はずして退く（大日本史）

ニツキ　ヨシナガ　仁木義長　家國の子、頼章の弟なり二郎四郎と稱す越後守、右馬權頭、修理亮、右京大夫に歷任す足利尊氏の薨池武敏と多く其濱に戰ふや義長身を擅んでゝ力鬪し手づから數人を斬る是に由りて軍氣百倍し武敏敗走す義長及一色頼行追擊して肥後に至る武敏出奔す乃ち進みて内河義直を八代城に攻めて之を奔らす尊氏の京都から攻むるや義長及頼行留りて筑紫を鎮し尋で京都に還る尊氏の新田義宗等と金井原に相拒ぐや義長頼章が手下の兵三千を分ちて靈潭の間に伏す既にして尊氏敗走し新田義興等追寇す義長乃ち突起奮擊す義興等俄かに魚鱗陣を作る義長も亦た陣を整へて之に當る斬獲甚だ多し義興等敗走す尊氏兵を起してより義長歷〻戰功を立てゝ參河伊勢伊賀等四國の守護と爲り邑數百所を食む人となり兇殘にして賞罰意に任し驕恣特とに甚だし嘗て鶴ヶ岡に詣り人を社中に殺し又た男山の神人を戮ふ其の伊勢に在るや神戸三郡を豪占す祭主之を京都に訴ふ後光嚴院尊氏に命じ書を下して實め還さしむ義長祭主の己を訴ふるを怒り肆意に神路山五十鈴川に漁獵して嘗て意に介せず其の京都に在るや侵して細川清氏の宅地を奪ふ清氏怒りて相攻めんと欲す尊氏和解して止む又た參河の人星野行明の國に在りて擅まゝに清氏に屬せるを怒りて其の邑を沒し又た佐〻木氏頼の邑を奪ふ故を以て諸將之を惡む會〻足利義詮吉野を犯さんとし義長をして兵三千を率ゐて出でゝ四宮に陣せしむ畠山國清も亦た兵を率ゐて四上す素と義長を嫉む而して義長自ら功を專らにせんと欲し國清の兵盛なるを忌みて其の沮敗せんことを竊ひ國清の先鋒龍門山に戰ふと聞き掌を拍ちて笑ひて曰く汝の諸軍にして體を露はして國清京都に歸り陰かに謀る會〻官軍譽田城に戰ひて功あり足利直冬將に尊氏を攻めんとす山名時義を殺さんことを謀る會〻官軍譽田城に戰ひて功あり足利直冬將に尊氏を攻めんとす山名時義を攻む國清應援するに託して諸將と四天王寺に趨き返り義長を攻めんことを議す義長之を聞き義詮に說き曰く國清清氏兵を分ちて四天王寺より至ると是れ口を臣に藉りて亂を圖らんと欲するなり請ふ之が爲めに備へよと義詮曰く此れ讒言なり事若し實ならば我卿と之を誅せん誰か敢て抗する者ぞと義長大に喜び兵を籍して七千餘人を得謂て曰く國清十萬の兵爲れ〻ぞ此の精强に若くか得んや詮佐〻木高氏と謀りて遂去す是に於て衆情離沮して皆な逃れ去り留まる者僅に三百餘人軍稍〻近づく義長爲す所を知らず間道より伊勢に奔る石塔佐〻木土岐の諸將各處に陣を張りて將に來り攻めんとす義長伊勢に在りて兵三千餘人を擁す直に五百餘人を以て長野城に據る佐〻木氏頼土岐頼康來り攻む相持すること二年攻た義詮に降らんことを請ふ野に遣して歸順す二十年攻た義詮に降らんことを請ふ義詮其の舊功を思ひ罪を宥して京都に還へす後ち薙髮す天授二年死す（大日本史）

ニツキ　ヨリアキ　仁木頼章　二郎三郎と稱す其の先は足利義清に出づ義清の孫實國參河仁木に任す頼章周防伊賀守左京太夫兵部大輔に歷任す足利尊氏の兵を起すや頼章第義長と每れに軍に從ふ尊氏反するに及びて頼章新田義貞と矢矧驛に戰ひて尋で尊氏に從ひて官軍を竹下に破り遂に京都に入る尊氏筑紫に奔るに及び途より頼章を丹波に還す尊氏東下するに及ぶ頼章今川頼貞と但馬丹波の兵を率ひて入京し尊氏に從ひて官軍を篠村に破り遂に京都に入る尊氏東に攻む頼章上杉重能等と擊て之れを卻く新田義興の金崎に據るや頼章丹波、美作の兵を率ゐて攻む正平年中高師直に從ひて摂津に出り往きて之を攻む正平年中千を率ゐて出でゝ四宮に陣せしむ畠山國清も亦た兵を率ゐて四上す素と義長を嫉む而して義長自ら功を專らにせんと欲し國清の兵盛なるを忌みて其の沮敗せんことを竊ひ國清の先鋒龍門山に戰ふと聞き掌を拍ちて笑ひて曰く汝の諸軍にして體を露はして國清京都に歸り陰かに謀る會〻官軍譽田城に戰ひて功あり足利直冬將に尊氏を攻めんとす山名時義を殺さんことを謀る會〻官軍譽田城に戰ひて功あり足利直冬將に尊氏を攻めんとす山名時義を攻む國清應援するに託して諸將と四天王寺に趨き返り義長を攻めんことを議す義長之を聞き義詮に說き曰く國清清氏兵を分ちて四天王寺より至ると是れ口を臣に藉りて亂を圖らんと欲するなり請ふ之が爲めに備へよと義詮曰く此れ讒言なり事若し實ならば我卿と之を誅せん誰か敢て抗する者ぞと義長大に喜び兵を籍して七千餘人を得謂て曰く國清十萬の兵爲れ〻ぞ此の精强に若くか得んや詮佐〻木高氏と謀りて遂去す是に於て衆情離沮して皆な逃れ去り留まる者僅に三百餘人軍稍〻近づく義長爲す所を知らず間道より伊勢に奔る石塔佐〻木土岐の諸將各處に陣を張りて將に來り攻めんとす義長伊勢に在りて兵三千餘人を擁す直に五百餘人を以て長野城に據る佐〻木氏頼土岐頼康來り攻む相持すること二年攻た義詮に降らんことを請ふ野に遣して歸順す二十年攻た義詮に降らんことを請ふ義詮其の舊功を思ひ罪を宥して京都に還へす後ち薙髮す天授二年死す（大日本史）

ニツキ　ヨリアキ　仁木頼章　二郎三郎と稱す其の先は足利義清に出づ義清の孫實國參河仁木に任す頼章周防伊賀守左京太夫兵部大輔に歷任す足利尊氏の兵を起すや頼章第義長と每れに軍に從ふ尊氏反するに及びて頼章新田義貞と矢矧驛に戰ひて尋で尊氏に從ひて官軍を竹下に破り遂に京都に入る尊氏筑紫に奔るに及び途より頼章を丹波に還す尊氏東下するに及ぶ頼章今川頼貞と但馬丹波の兵を率ひて入京し尊氏に從ひて官軍を篠村に破り遂に京都に入る尊氏東に攻む頼章上杉重能等と擊て之れを卻く新田義興の金崎に據るや頼章丹波、美作の兵を率ゐて攻む正平年中高師直に從ひて摂津に出り往きて之を攻む正平年中千を率ゐて出でゝ四宮に陣せしむ畠山國清も亦た兵を率ゐて四上す素と義長を嫉む而して義長自ら功を專らにせんと欲し國清の兵盛なるを忌みて其の沮敗せんことを竊ひ國清の先鋒龍門山に戰ふと聞き掌を拍ちて笑ひて曰く汝の諸軍にして體を露はして國清京都に歸り陰かに謀る會〻官軍譽田城に戰ひて功あり足利直冬將に尊氏を攻めんとす山名時義を殺さんことを謀る會〻官軍譽田城に戰ひて功あり足利直冬將に尊氏を攻めんとす山名時義を攻む國清應援するに託して諸將と四天王寺に趨き返り義長を攻めんことを議す義長之を聞き義詮に說き曰く國清清氏兵を分ちて四天王寺より至ると是れ口を臣に藉りて亂を圖らんと欲するなり請ふ之が爲めに備へよと義詮曰く此れ讒言なり事若し實ならば我卿と之を誅せん誰か敢て抗する者ぞと義長大に喜び兵を籍して七千餘人を得謂て曰く國清十萬の兵爲れ〻ぞ此の精强に若くか得んや詮佐〻木高氏と謀りて遂去す是に於て衆情離沮して皆な逃れ去り留まる者僅に三百餘人軍稍〻近づく義長爲す所を知らず間道より伊勢に奔る石塔佐〻木土岐の諸將各處に陣を張りて將に來り攻めんとす義長伊勢に在りて兵三千餘人を擁す直に五百餘人を以て長野城に據る佐〻木氏頼土岐頼康來り攻む相持すること二年攻た義詮に降らんことを請ふ野に遣して歸順す二十年攻た義詮に降らんことを請ふ義詮其の舊功を思ひ罪を宥して京都に還へす後ち薙髮す天授二年死す（大日本史）

ニツキ　ヨリアキ　仁木頼章　二郎三郎と稱す其の先は足利義清に出づ義清の孫實國參河仁木に任す頼章周防伊賀守左京太夫兵部大輔に歷任す足利尊氏の兵を起すや頼章第義長と每れに軍に從ふ尊氏反するに及びて頼章新田義貞と矢矧驛に戰ひて尋で尊氏に從ひて官軍を篠村

ニツタ　サチュウジャウ「ニツタヨシサダ」　新田左中將

伊豆の人なり源頼朝に仕へて親近せらる謫永中範頼に從ひて平氏を西海に擊つ頼朝書を賜ひて鎧動す富士野に獵するに從ふ曾我祐成兄弟來り襲ふ忠常擊ちて祐成を斬る建仁二年比企能員北條氏を滅ぼさんと圖る北條時政忠常及天野遠景に命じ能員を誘致して之を斬らしむ能員の族一幡を擁して小御所に據る忠常又攻めて一幡を殺す已にして頼家密に忠常及び和田義盛に令して時政を誅せしむ會〻時政忠常を招て其の勞を賞す從者其の久しくして出でざるを怪しみ以爲らく事泄れて害に遇ふなりと家に歸りて之を告ぐ弟五郎及び六郎乃ち義時を政子の所に攻めて克たず火を縱ちて死す忠常途に轡を聞き馳せて之に赴く加藤景廉の爲めに殺さる（大日本史）

ニツタ　ヒコサブラウ　新田彦三郎　陸軍歩兵少尉なり北海道出身にして明治廿七年日露戰役に於て第七師團歩兵第廿七聯隊附として從軍中廿八年三月四日清國盛京省姚家屯戰鬪の際負傷し同五日第七師團第一野戰病院に於て死去す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ニツタ　フサキチ　新田房吉　陸軍歩兵少尉なり兵庫縣出身にして明治廿七八年日露戰役に際し後備役より召集せられ第四師團歩兵第三十七聯隊附として從軍中廿七年十月十四日清國盛京省林盛堡附近に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ニツタベ　シンワウ　タベシンワウ　新田部親王「ニヒタベシンワウ」

ニツタ　モチクニ　新田持國　岩松滿春の子なり旅本と岩松と稱す滿春の父泰家の後を繼ぎ又た從祖父直國の遺邑を併領し治部大輔と稱し入道して法泉と號す姪滿純を養て子とし其の家督を讓與し特に其父の食邑を分て貿子滿長を稱す早く死して嗣なし滿國の次男に予ふ滿長伊豫守と稱す早く死して嗣なし滿國の次男滿春（系圖に泰家二子とあり）其後を繼ぎて能登守と稱す持國を生む持國小字は土用安丸應永二十四年上杉禪秀の亂を作すや滿純入道天用、禪秀の女婿なるを以て之に黨して戰死し其子家純逃匿せり是故に法泉入道滿國持國をして滿純の後を繼がしめ右京大夫と稱せり家純の後を繼がんとす持國家督を家純に讓り自ら殊に家に建つ是時岩松新田分れて二派となる持家純の流を禮部家と稱す長祿二年九月足利政知に堀越に從ひ三年更めて左京大夫と稱し家純の流を京兆家と稱し家純の流を禮部家と稱す長祿二年九月足利政知に堀越に從ひ三年更めて左京大夫と稱す寛正二年四月持國竊に足利成氏に應じ族を新田と稱す寛正二年四月持國竊に足利成氏に應じむ能員の族一幡を擁して小御所に據る忠常又攻めて一幡を殺す已にして頼家密に忠常及び和田義盛に令して時政を誅せしむ會〻時政忠常を招て其の勞を賞す從者其の久しくして出でざるを怪しみ以爲らく事泄れて害に遇ふなりと家に歸りて之を告ぐ弟五郎及び六郎乃ち義時を政子の所に攻めて克たず火を縱ちて死す忠常途に轡を聞き馳せて之に赴く加藤景廉の爲めに殺さる（大日本史）

ニツタ　ヨシアキ　新田義顯　小太郎と稱す義貞の長子なり母れに從ひて征戰の間に在り父の功を以て越前の守護となる義貞の東征するや結城親光名和長年楠正成等の諸將と留りて京師を衛る後醍醐つ敵兵六萬之を迫ふ義顯力戰に三千餘人を以て後を斷つ敵兵之に扶け上ぜられ入りて紫宸殿庭に見ゆ帝親から臨みて之を慰む遂に駕に從ひ延暦寺に至る義興亦た兵三萬を起して之に應ずれども顯家の慌し遽留するあらんことを計り已れが軍を以て徑に鎌倉を取らんとす既にして顯家の軍至る遂に兵を合し攻めて鎌倉を拔き引きて興に俱に西す明年春青野原に戰ひて上杉憲顯を破る顯家薨ずるに及びて其の弟少將顯信に從ひて男山に據る王師敗績す奔りて吉野に詣る帝延見して其の才器を嘉し曰く父の家を興すべしと御前に加冠し今の名を賜ひ左兵衛佐を授け命じて北條時行と義良親王を助け往きて東國を略せしむ海に泛みて風に遇ひ諸軍相失す義興の船漂ひて武藏石濱に到る偽て東國に匿る正平七年春弟義宗從弟義治と兵を起して鎌倉を攻む尊氏子基氏を留めて鎌倉を守らしめ親らを率て金井原に逆戰す官軍擊て尊氏を走らす義宗追躡す義興義治と自旗一隊方さに退かんとするを望みて尊氏と爲し亦た之を追ふ遭〻降る者相屬し迎へて馬前に拜す二人行々親接を爲す士卒北ぐる者は從行の士卒は清父子よりも切なり寧ろ我非ず然れども彼を代らしむるに忍びず汝此意を諭し彼猶可かざれば則ち衆と偕に戰ずるの義を存せんと光氏再び說く淨慶聽かず光氏馬より下り甲を脫して曰く大將猶ほ衆に代り死して士を重んずるの義を

に火を放つ適〻大風起り府第延燒す衆勢に乘じて四面より攻圍す殺戮無數北條高時遂に葛西谷に逃れ族を擧げて自殺す師を出して之を追ふ至る凡そ十有五日にして鎌倉平らぐ乃ち使を馳せて捷を行在に奏す帝大に喜び遙に義貞に左馬助を授く建武元年入朝す從四位上に叙し左兵衛兼播磨守に任ぜられ上野播磨二國を管し京都に宿衛す帝方に足利尊氏を寵任して其の言を聽信す義貞尊氏と同宗雖て嫌に因て相讐はず尊氏固と異圖を蓄ふ心に義貞を憚りて每に之を除かんと謀る未だ發せず二年秋北條時行の兵鎌倉を襲ふ朝廷尊氏を遣して時行を討たしむ尊氏遂に鎌倉に據りて命を拒み悉く義貞族人の食邑關東に在る者を奪ひ抗表して兵を招く皆な義貞を誅するを以て辭と爲す義貞之を聞き亦た管內所有の足利氏の邑地を收め疏を奉りて其の逆狀を陳ず（文は大日本史七十二卷に出づ）書奏す公卿に下して議せしむ會〻護良親王の侍女鎌倉より歸りて狀を上り南海四海諸國も亦た尊氏の反書を逃むる數十通遂に詔を下して足利尊氏を討たしむ義貞大將軍節度使となり兵六萬七千餘人に將として諸將と道を分ちて京を發す尊氏兵を出して矢矧川に拒ぐ義貞水を遡けて陣し弓卒を出し射て賊を誘ふ賊果して川を濟りて來る官軍分番して戰ふ殺傷當に過ぐ即夜賊營に走る足利直義二萬餘人を帥て來援け手越河の東に陣す義貞義助等を以て河を涉りて之を擊たしむ斬獲算なし夜半義貞竊かに兵を遣して營に逼りて亂射せしむ賊衆驚き擾れ鎌倉に走り還る義貞連戰果捷賊を降すこと前後數萬人追みて伊豆府に入る尊氏窮蹙して爲す所を知らず既にして散兵復た集り三十萬と號す出て〻竹下、箱根の險を守る義助尊良親王に從ひて竹下を攻めて利あらず義貞足利直義と箱根に戰ひて幾んど之に克つ明旦尊良敗ると聞き軍を擧げて大に怖れ逃れ降りて暑〻蠢く義貞左右僅かに一百人許り營を棄て〻退き浮島原に至りて甲斐源氏の兵五百餘騎を擊ちて之を降す散兵稍〻集りて七千餘人を得天龍河に抵る會〻河水暴かに漲り士馬久た疲る依て淹留すること三日民夫を發し屋を撤して浮橋を作らしむ義貞東岸に留り衆の渡り訖はるを俟ちて乃ち渡る衆浮橋を撤せんと欲す義貞怒て曰く我新敗の餘猶ほ能く橋を作る況や勝つ者をや船を燒き橋を毀つは古人の以て戰を決する所なり然るに今若し此を以て賊を遏めば賊將さに吾が怯を笑はんとす吾深く之を愧つと乃ち士人をして鎌倉に走る義貞駕に屈して京に還る明日諸將を率ゐて兵庫に趨き擊ちて足利直義を豐島河原に破り又た細川和氏を瀬河に破る尊氏遂に海に浮び四に走る義貞振旅して還る功を以て左近衛中將に任ぜらる居ること一月山陰山陽十六國の軍事を管領し往きて之を討たしむ會〻疾發して進む能はず先づ江田行義大館氏明等二千餘人を播磨に遣す義貞病愈え尋て發す兵士會する者六萬餘人進みて赤松則村を白旗城に攻めんと謀る則村詐て降を請ふ義貞之を信じ驅せて朝廷を復す往復十餘日則村既に已に城備を完繕す乃ち慢言をなして朝廷を指斥す義貞怒りて合圍すること數重晝夜攻擊す意必らず取らんとを期す而して月を彌て下すを能はず乃ち弟義高德兵を熊山に擧げて之に應じ前後挾み攻めて之に克つ已にして尊氏大軍を將て海路より東上し直義陸軍を將て福山城を攻む守將大井田氏經敗走す義助之を義貞に告ぐ義貞義助をして攝津に退かしめ終に白旗の圍を解き退きて賀古河の西に駐る二日以て義助等の至るを俟つ義助等の軍至る乃ち俱に西りて兵庫に至る士卒逃亡して半ばに過ぐ朝廷乃ち楠正成を遣して與に俱に賊を拒がしむ義貞正成と會し朝議及び其の謀る所を問ひ且つ謂て曰く賊勢急張ぜり敗卒を驅りて之に當らんと欲て固より難し但し去年軍を關東に喪ひ以て興論を致し今又た敗を承け四に潰して未だ一城だも拔く能はず賊の大軍將に至らんとするを聞き遽然として引きて還る我竊かに之を恥づ是を以て命を委て〻一戰せんと欲す勝敗は鄙ふる所に非ずと正成曰く機を見て進み時を權りて退くは將の道なり紛々の論何ぞ惶に介するを爲さん義貞之が爲めに釋然たり終夜燕飲す明日尊氏等水陸數十萬至る旌旗空に翻り船艦海を蔽ふ義貞諸將を分部し自ら兵二萬五千に將として和田崎を守り策を以て諸軍に應ず賊の先鋒舟師を以て進みて經島に向ふ義助擊ちて之を殲す定禪舟軍を麾きて東す義貞義助等と岸に縁りて之を逐ふ尊氏の大艦數千艘和田崎に登り直義の步軍須磨より來る正成戰死す義貞西宮に至り宗禪の旗幟を望みて曰く是皆な賊の偏裨なり湊川より來るは尊氏兄弟是は此れ眞の賊なりと乃ち軍を回へして生田森を背にし殊死して戰ひ遂に敗らる賊追ふと急なり義貞自ら後拒と爲りて返戰す矢馬に中りて僵る乃ち路傍の塚上に立ちて副馬を待つ賊兵殲ひ至りて之を圍む義貞射て一人を斃す賊之が爲めに逡巡して近かず更らに鎗を發めて之を射る是の日義貞名甲浮金を振し兩手に鬼切鬼丸の二寶刀を揮ひて飛矢を截る且つ截り且つ避く輕捷神の如し小山田高家馳せ至りて乘る所の馬を以て之に授け步鬪して死す義貞頓て脫去するを得丹波路より京都に入る東駕倉皇として復た延曆寺に幸す尊氏入りて東寺に據り兵を三道より遣して行在を犯す義貞及び諸將東阪を守り公卿僧徒四阪を守る西阪險を恃みて備を設けず賊直に來り攻む僧兵擊て之を走らす數日にして又た來り攻む官軍戰ひて利あらず乃ち急に大講堂の鐘を擊ちて之を報ず義貞兵六千を率ゐ馳せて比叡山に上り高に乘じて之を衝く賊崩潰して爭ひ下り死者谷を塡む義貞因て大獄に屯し晨夜接戰すること十餘日賊軍果敗し兵卒四散す十餘日を經て稍〻集る官軍謂へらく賊兵猶ほ衆し擊つべしと宇都宮公綱等進みて東寺を攻む敗績す賊勢復た振ふ是に於て義貞諸將と道を分ちて進み攻む適〻叛者あり復た敗れて還る延曆寺書を興福寺に貽りて援を請ふ興福寺之を聽るす官軍復た振ふ賊大に困蹙す公卿義貞を促して進戰せしむ義貞乃ち諸將と日を刻して四面より進み攻めんとす期に至りて義貞宗族四十三人と入て辭す帝溫顏勞奬す義貞拜謝して出づ乃ち兵を分ちて三となし大宮猪熊四條より火を縱ち輒闘して前む賊兵之が爲めに披靡す遂に東寺に抵りて尊氏の營に薄る俄にして賊兵後ろより奄ひ至る義貞馳突して出づ賊復た雲合して之を圍むこと數重射て其の額に中つ血面を蔽ふ將士に令して馬首をして皆な西せしめ意を決して死に赴く初め官軍の行在を發する帝親ら臨みて御す所の紅袴を解き寸斷して以て將士に頒つ士皆な感激し笠號に綴して出づ是に至りて其の兵八百殊死奮激して圍を潰して入り義貞を擁して去る是の日諸路の兵皆な敗れ興福寺約に背きて至らず官軍追きて坂下を保つ尊氏尋で光明院を擁立す冬帝密かに尊氏の款を納れて將に京都に還らんとす藤原實世人を馳せて義貞に告ぐ義貞時に將校みな引見す之を聽き信ずして曰く此れ使者の妄誕のみと堀日貞滿先づ往て乘輿を背にし殊死して戰ひ遂に敗らる賊追ふと乃ち軍を回へして生田森を背にし殊死して戰ひ遂に敗らる賊追ふと急なり義貞自ら後拒と爲りて返戰す矢馬に中りて僵る乃ち路傍の塚上に立ちて副馬を待つ賊兵殲ひ至りて之を圍む義貞射て一人を斃す賊之が爲めに逡巡して近かず更らに鎗を發めて之を射る是の日義貞名甲浮金を振し兩手に鬼切鬼丸の二寶刀を揮ひて飛矢を截る且つ截り且つ避く輕捷神の如し小山田高家馳せ至りて乘る所の馬を以て之に授け步鬪して死す義貞頓て脫去するを得丹波路より京都に入る東駕倉皇として復た延曆寺に幸す尊氏入りて東寺に據り兵を三道より遣して行在を犯す義貞及び諸將東阪を守り公卿僧徒四阪を守る西阪險を恃みて備を設けず賊直に來り攻む僧兵擊て之を走らす數日にして又た來り攻む官軍戰ひて利あらず乃ち急に大講堂の鐘を擊ちて之を報ず義貞兵六千を率ゐ馳せて比叡山に上り高に乘じて之を衝く賊崩潰して爭ひ下り死者谷を塡む義貞因て大獄に屯し晨夜接戰すること十餘日賊軍果敗し兵卒四散す十餘日を經て稍〻集る官軍謂へらく賊兵猶ほ衆し擊つべしと宇都宮公綱等進みて東寺を攻む敗績す賊勢復た振ふ是に於て義貞諸將と道を分ちて進み攻む適〻叛者あり復た敗れて還る延曆寺書を興福寺に貽りて援を請ふ興福寺之を聽るす官軍復た振ふ賊大に困蹙す公卿義貞を促して進戰せしむ義貞乃ち諸將と日を刻して四面より進み攻めんとす期に至りて義貞宗族四十三人と入て辭す帝溫顏勞奬す義貞拜謝して出づ乃ち兵を分ちて三となし大宮猪熊四條より火を縱ち輒闘して前む賊兵之が爲めに披靡す遂に東寺に抵りて尊氏の營に薄る俄にして賊兵後ろより奄ひ至る義貞馳突して出づ賊復た雲合して之を圍むこと數重射て其の額に中つ血面を蔽ふ將士に令して馬首をして皆な西せしめ意を決して死に赴く初め官軍の行在を發する帝親ら臨みて御す所の紅袴を解き寸斷して以て將士に頒つ士皆な感激し笠號に綴して出づ是に至りて其の兵八百殊死奮激して圍を潰して入り義貞を擁して去る是の日諸路の兵皆な敗れ興福寺約に背きて至らず官軍追きて坂下を保つ尊氏尋で光明院を擁立す冬帝密かに尊氏の款を納れて將に京都に還らんとす藤原實世人を馳せて義貞に告ぐ義貞時に將校みな引見す之を聽き

信ずして曰く此れ使者の妄誕のみと堀日貞滿先づ往て乘輿を背にし殊死して戰ひ遂に敗らる賊追ふと乃ち軍を回へして生田森を背にし殊死して戰ひ遂に敗らる賊追ふと急なり義貞自ら後拒と爲りて返戰す矢馬に中りて僵る乃ち路傍の塚上に立ちて副馬を待つ賊兵殲ひ至りて之を圍む義貞射て一人を斃す賊之が爲めに逡巡して近かず更らに鎗を發めて之を射る是の日義貞名甲浮金を振し兩手に鬼切鬼丸の二寶刀を揮ひて飛矢を截る且つ截り且つ避く輕捷神の如し小山田高家馳せ至りて乘る所の馬を以て之に授け步鬪して死す義貞頓て脫去するを得丹波路より京都に入る東駕倉皇として復た延曆寺に幸す尊氏入りて東寺に據り兵を三道より遣して行在を犯す義貞及び諸將東阪を守り公卿僧徒四阪を守る西阪險を恃みて備を設けず賊直に來り攻む僧兵擊て之を走らす數日にして又た來り攻む官軍戰ひて利あらず乃ち急に大講堂の鐘を擊ちて之を報ず義貞兵六千を率ゐ馳せて比叡山に上り高に乘じて之を衝く賊崩潰して爭ひ下り死者谷を塡む義貞因て大獄に屯し晨夜接戰すること十餘日賊軍果敗し兵卒四散す十餘日を經て稍〻集る官軍謂へらく賊兵猶ほ衆し擊つべしと宇都宮公綱等進みて東寺を攻む敗績す賊勢復た振ふ是に於て義貞諸將と道を分ちて進み攻む適〻叛者あり復た敗れて還る延曆寺書を興福寺に貽りて援を請ふ興福寺之を聽るす官軍復た振ふ賊大に困蹙す公卿義貞を促して進戰せしむ義貞乃ち諸將と日を刻して四面より進み攻めんとす期に至りて義貞宗族四十三人と入て辭す帝溫顏勞奬す義貞拜謝して出づ乃ち兵を分ちて三となし大宮猪熊四條より火を縱ち輒闘して前む賊兵之が爲めに披靡す遂に東寺に抵りて尊氏の營に薄る俄にして賊兵後ろより奄ひ至る義貞馳突して出づ賊復た雲合して之を圍むこと數重射て其の額に中つ血面を蔽ふ將士に令して馬首をして皆な西せしめ意を決して死に赴く初め官軍の行在を發する帝親ら臨みて御す所の紅袴を解き寸斷して以て將士に頒つ士皆な感激し笠號に綴して出づ是に至りて其の兵八百殊死奮激して圍を潰して入り義貞を擁して去る是の日諸路の兵皆な敗れ興福寺約に背きて至らず官軍追きて坂下を保つ尊氏尋で光明院を擁立す冬帝密かに尊氏の款を納れて將に京都に還らんとす藤原實世人を馳せて義貞に告ぐ義貞時に將校みな引見す之を聽き使を發して蓋驀を招き三千餘人を得尊氏復た高經をして越前に入りて義貞と相拒がしむ加賀人敷地山岸等兵を起して義貞に應ず三年春義助出て營地を視る敵兵を出して之を掩ふ義助火を擧げて相報ず義貞三千餘人を引き之に赴く高經も亦た兵を出して來り拒ぐ河を夾みひ半ばに止て雩滑えて水盛んなり官軍流を亂りて進む戰ふ燒く敵脇願して三峰の僧徒敵の後ろに出て火を縱ちて府を燒く敵脇願して三峰の僧徒敵の後ろに出て火を縱ちて府に入る高經足羽に走り黑丸城に據る餘黨風を望みて崩潰する者三十餘藪北陸響震し四方に義軍復た起る夏義貞出て府に陣し藤原行實等を遣して高經を攻めしむ軍利あらず秋義貞將さに復た黑丸城を攻めんとして益〻戰具を治む時に次子義興源顯信と男山を保ち敵の爲めに圍まる帝手づから義貞に詔して兵を引きて赴き援はしむ義貞喜びて曰く古より源平の武臣勳を王室に著はす者未だ手詔を賜はるを聞かず今未我れ至榮を荷ふ安んぞ此の時に於て報効せざるを得んと廼ち牒を延曆寺に移して之と力を協はす義貞將さに發せんとして高經の移患を爲さんとを計り自ら三千餘人を以て越前に留りて之を麾し兵二萬を義助に付して先づ往き男山を救はしむ未だ至らずして男山守を失ふと聞き轍ち還る義貞乃ち河合に出で〻黑丸城を取らんと圖る高經惶恐して大に守備を修む平泉寺の僧徒又た叛す義貞夜夢に高經と足羽河に戰ふを見て覺て之を卜す曰く高經驚き走る且日以て告ぐ義貞曰く是れ大吉と齋藤道獻之を聞て私に言て曰く天下分爭は猶ほ三國の時のごとし而して臥龍死して蜀先づ亡ぶ況んや龍は陽物なり陰に及びて蟄す今方さに秋候にして水側に見はる是れ其の類を失す吾未だ其の吉たるを知らずと聞七月二日義貞日を刻して兵を率ゐて出づ將さに馬に上らんとす馬驚りて饑を療す後ほ乃ち每日馬を宰して將士の日食に充つ而して天漸く暖かに霧消えて路通ず敵日に城下に集りて十萬に至る義貞勢ひ安ふ可らざるを以て義助藤原實世と潛に城を踰えて柚山に趨り兵を聚めて以て敵を擣はんと圖る旬日にして僅かに五百餘人を得鎧馬且つ給ずず遷延して亦た旬日を過ごす敵遂に金崎城を陷れ太子牌に就き尊良親王を殺す義貞柚山に匿るゝと半歲間使を發して蓋驀を招き三千餘人を得尊氏復た高經をして越前に入りて義貞と相拒がしむ加賀人敷地山岸等兵を起して義貞に應ず三年春義助出て營地を視る敵兵を出して之を掩ふ義助火を擧げて相報ず義貞三千餘人を引き之に赴く高經も亦た兵を出して來り拒ぐ河を夾みひ半ばに止て雩滑えて水盛んなり官軍流を亂りて進む戰ふ燒く敵脇願して三峰の僧徒敵の後ろに出て火を縱ちて府を燒く敵脇願して三峰の僧徒敵の後ろに出て火を縱ちて府に入る高經足羽に走り黑丸城に據る餘黨風を望みて崩潰する者三十餘藪北陸響震し四方に義軍復た起る夏義貞出て府に陣し藤原行實等を遣して高經を攻めしむ軍利あらず秋義貞將さに復た黑丸城を攻めんとして益〻戰具を治む時に次子義興源顯信と男山を保ち敵の爲めに圍まる帝手づから義貞に詔して兵を引きて赴き援はしむ義貞喜びて曰く古より源平の武臣勳を王室に著はす者未だ手詔を賜はるを聞かず今未我れ至榮を荷ふ安んぞ此の時に於て報効せざるを得んと廼ち牒を延曆寺に移して之と力を協はす義貞將さに發せんとして高經の移患を爲さんとを計り自ら三千餘人を以て越前に留りて之を麾し兵二萬を義助に付して先づ往き男山を救はしむ未だ至らずして男山守を失ふと聞き轍ち還る義貞乃ち河合に出で〻黑丸城を取らんと圖る高經惶恐して大に守備を修む平泉寺の僧徒又た叛す義貞夜夢に高經と足羽河に戰ふを見て覺て之を卜す曰く高經驚き走る且日以て告ぐ義貞曰く是れ大吉と齋藤道獻之を聞て私に言て曰く天下分爭は猶ほ三國の時のごとし而して臥龍死して蜀先づ亡ぶ況んや龍は陽物なり陰に及びて蟄す今方さに秋候にして水側に見はる是れ其の類を失す吾未だ其の吉たるを知らずと聞七月二日義貞日を刻して兵を率ゐて出づ將さに馬に上らんとす馬驚りて饑を療す後ほ乃ち每日馬を宰して將士の日食に充つ而して天漸く暖かに霧消えて路通ず敵日に城下に集りて十萬に至る義貞勢ひ安ふ可らざるを以て義助藤原實世と潛に城を踰えて柚山に趨り兵を聚めて以て敵を擣はんと圖る旬日にして僅かに五百餘人を得鎧馬且つ給ずず遷延して亦た旬日を過ごす敵遂に金崎城を陷れ太子牌に就き尊良親王を殺す義貞柚山に匿るゝと半歲間使を發して蓋驀を招き三千餘人を得尊氏復た高經をして越前に入りて義貞と相拒がしむ加賀人敷地山岸等兵を起して義貞に應ず三年春義助出て營地を視る敵兵を出して之を掩ふ義助火を擧げて相報ず義貞三千餘人を引き之に赴く高經も亦た兵を出して來り拒ぐ河を夾みひ半ばに止て雩滑えて水盛んなり官軍流を亂りて進む戰ふ燒く敵脇願して三峰の僧徒敵の後ろに出て火を縱ちて府を燒く敵脇願して三峰の僧徒敵の後ろに出て火を縱ちて府に入る高經足羽に走り黑丸城に據る餘黨風を望みて崩潰する者三十餘藪北陸響震し四方に義軍復た起る夏義貞出て府に陣し藤原行實等を遣して高經を攻めしむ軍利あらず秋義貞將さに復た黑丸城を攻めんとして益〻戰具を治む時に次子義興源顯信と男山を保ち敵の爲めに圍まる帝手づから義貞に詔して兵を引きて赴き援はしむ義貞喜びて曰く古より源平の武臣勳を王室に著はす者未だ手詔を賜はるを聞かず今未我れ至榮を荷ふ安んぞ此の時に於て報効せざるを得んと廼ち牒を延曆寺に移して之と力を協はす義貞將さに發せんとして高經の移患を爲さんとを計り自ら三千餘人を以て越前に留りて之を麾し兵二萬を義助に付して先づ往き男山を救はしむ未だ至らずして男山守を失ふと聞き轍ち還る義貞乃ち河合に出で〻黑丸城を取らんと圖る高經惶恐して大に守備を修む平泉寺の僧徒又た叛す義貞夜夢に高經と足羽河に戰ふを見て覺て之を卜す曰く高經驚き走る且日以て告ぐ義貞曰く是れ大吉と齋藤道獻之を聞て私に言て曰く天下分爭は猶ほ三國の時のごとし而して臥龍死して蜀先づ亡ぶ況んや龍は陽物なり陰に及びて蟄す今方さに秋候にして水側に見はる是れ其の類を失す吾未だ其の吉たるを知らずと聞七月二日義貞日を刻して兵を率ゐて出づ將さに馬に上らんとす馬驚りて饑を療す後ほ乃ち每日馬を宰して將士の日食に充つ而して天漸く暖かに霧消えて路通ず敵日に城下に集りて十萬に至る義貞勢ひ安ふ可らざるを以て義助藤原實世と潛に城を踰えて柚山に趨り兵を聚めて以て敵を擣はんと圖る旬日にして僅かに五百餘人を得鎧馬且つ給ずず遷延して亦た旬日を過ごす敵遂に金崎城を陷れ太子牌に就き尊良親王を殺す義貞柚山に匿るゝと半歲間

亂射す我兵楯を持たず僅かに身を以て義貞を遮蔽するのみ從兵中野宗昌義貞を目して日く千鈞の弩は鼠息の爲めに機發せずと義貞曰く衆の寡を屢〻獨り免るゝは吾が意に非ずと馬に策して進む馬五矢を被りて倒中に顛る義貞起きんとす飛矢あり額に中る免る旬ならざるを知りて終に自ら刎れて死す年三十八宗昌及び結城親盛、金持重興等腹を割て之に殉し從者殲く子義顯、義興、義宗、明治九年十二月正三位を贈る（大日本史）

ニツタ　ヨシシゲ　新田義重　鎮守府將軍源義家の孫、式部丞義國の長子なり義國は上野新田郡に居す義重新田太郎と稱し又た新田冠者と稱す從五位下に叙せられ大炊助となり薨髮して名を上西と更む初め義國足利基綱の女を娶る事に坐して邑を失ふに及びて足利に屈居す後ち義重又た新田に居す時に足利氏秩父と隙あり（本書に曰く足利秩父井に名缺く蓋し足利俊綱秩父重能なり）秩父を襲ほんと欲し兵を率て古我杉に赴き援ふ義重に乞ふ義重五百騎を引き利根川に抵り長井渡に臨む敵豫しめ船舸を覆る軍潰るとを得ず義重曰く丈夫既に人に許す船無きを以て猶豫して進まず人をして敗衂を致さしめば何の面目ありて復た弓矢を操らんや寧ろ餞を長流に付して以て名を成さんのみと騎齊しく濟たり秩父を擊て之を破る源頼朝兵を伊豆に起す東國の將士未だ集らず義重は義家の孫を以て招く報ぜず兵を案めて寺尾城に據る頼朝鎌倉に奠居するに及て諸將爭ひて之に歸す乃ち安達盛長を遣して復た之を召す義重至る頼朝鎌倉に入るを許さず義重大に懼れ謝して曰く吾初め異志あるに非ず故を以て遲緩今に至ると盛長も亦た爲に分疏す頼朝釋して問はず義重に女あり初め頼朝の兄義平に嫁す義平の死後寡居す頼朝其の姿色あるを聞き書を通じて之を挑む從はず頼朝震はに其意を義重に告ぐ義重素と頼朝の要北條氏の郎忌するを知りて許さず遂に帥六郎に嫁す頼朝益〻怪ばず遂に疎斥せらる建仁二年卒す慶長十六年敕して鎮守府將軍を贈らる義重卒して未だ幾くならず頼家將に竄鞠せんとす其母北條氏工藤行光を以て之を止めしめて曰く新田上西は源氏の遺老將軍の領独なり卒後未だ二旬に迨ばずして遊戯を事とす恐らくは奥人の誘を致さんと頼家乃ち止む子義俊、義兼、義範、義季、經義、義光、義佐（大日本史）

ニツタ　ヨシズミ　新田義純　新田氏の遠裔にして世〻岩松萬次郎と稱し上野國新田郡に住し德川氏の祖家たるを以て旗下にあらず大に優遇せらる義純能書を嗜み狩野風を學びよく猶を書く或人これを請裝して家中に掛くるに豎且皆逸遁すこれより世評甚だ高く新田の猫と稱し書を乞ふ者門に塡つ（盧心筆記）

ニツタカ　ヨシタカ　新田義陸（一に義則に作る）姓は源氏、脇屋義助の孫、左衛門佐義作の子なり（大日本史に義則を以て左近衛少將新田義宗の子とせり）義陸初守は二郎建德三年正五位下に叙し相摸守に任ず義治伊豫に赴くの後猶駐て新田に居る天授元年十一月義陸深雪を凌ぎて奥州に赴き伊達行朝田村清包に倚頼して兵を起さんと欲す行朝等又た信夫の黨を起さんと欲す行朝等又た信夫の黨を募る二年正月義陸及行朝清包の黨卒を相馬顯胤に出す相馬顯胤小田治久兵を率ゐて御越嶽に拒ぎ戰ふ死傷相ひ當る其の夜義陸自から兵二百を率ゐて擊す顯胤潰え走る尋て義陸、顯胤を發して白川城に襲ふ二月義陸、伊達信夫の黨と相馬を發して白川領を侵略す田村清包、留後となり高志山に陣す結城親朝等の兵を率ゐて白川を發し小見原に屯して禦ぎ備ふ伊達宗朝等の兵一千餘田羽根伊中守を獲ゆ城に攻て之を拔き備中等を獲たり十四日黎明結城の兵を襲ふ事不意に發し士卒周章す敵兵機を得て競ひ擊つ義陸兵を千王堂森に伏せ急に起りて之を擊つ遂に戰に克ち猶ほ進みて白川に陣す是の時飛檄至りて南部下山の二氏伸達を襲ふと報ず又た或は謂ふ小田佐竹等大軍を起して來ると是を以て義陸、故國司保つ所の鷲山城を修す一井左京亮、堀口直元、世良田滿氏、島山彈正少弼、羽河原蔵人、田中兵庫介、舟田長門二郎等越後上野より來會して之れに據る六月義陸及び信夫重信等兵三千餘を率ゐ相馬顯胤と島轍嶽に戰ふ七月顯胤騎兵五千を率ゐ間道を經廻して來り擊つ義陸鉢岡に邀へ戰ひて敗る四年三月義陸、信夫重信と共に兵三千餘を率ゐて白川圃比郷に入り栗谷左近入道を攻めて之を獲五年三月伊達行朝、宗朝兵六千餘を率ゐ來り靈山城に會す義陸其の兵を併せて伊東洲瀬を踰え三日市棚倉を經て相馬に入る相馬顯胤騎兵七千餘を發して之を室原に邀ふ相馬の部下長谷六郎左衛門歸降す十二日戰ひ利あり十四日高志山を攻む二十七日の夜襲ひて遂に之を拔き將さに白川に入らんとす足利氏滿師を帥ゐて來り相馬を救ふと聞き軍を收めて還る九月義陸、桃井治部大輔大館氏忠等を以て白川驚塚城を攻めしめて之を陷れ進みて香草城を焚く六年二月獄て從四位下に叙し右近衛少將に任じ陸奥出羽の管領に補し歎して朝敵を征伐せしむ弘和元年三月結城親朝蘆名眞盛と共に騎兵二萬餘を併せて信夫郡を侵掠す義陸、伊達宗朝と共に出て〻淺香山に備ふ十七日の宵親朝鷲山城の虚なるを狙ひ兵を潛めて之を攻む義陸兵を率ゐて歸り擊て飯原野に敷き分ちて三隙となし親朝と接戰す義陸庶幾は縦横氏等の兵一千餘を截陸に伏せ其の戰酣なるに及び縦ちて之を擊たしむ親朝の軍敗走し死傷多し二年四月相馬顯胤、小田、佐竹と共に復た高志山の城を修築す義陸及信夫重信田村清包兵を率ゐ將に赴き擊たんとす小田、佐竹の兵出て〻久味田箱原に進む戰ふ義陸の兵單微遂に克つ能はずして還む元中三年春南部下山款を送りて歸降す是に於て義陸、新田貞方伊達行朝と共に謀略を廻らし將に鎌倉を襲はんとし若林九郎入道を上野に遣はす四年二月伊達信夫、下山、田村、岩城忠將、相馬行胤等靈山城に會す騎兵都て二萬七千餘義陸貞方を推して將帥となし師を白川に出す結城親朝之を聞き關を杜ぢ險を斷ちて警戒守備す三月師進みて白川關を攻む接戰四日未だ輸贏を決せず或人讒して曰く兵を殯ちて結城を壓し師を鎌倉に發せんと而して蘆名盛貞の應授するを聞き南部下山を以て結城に備へしめ師を反して下刀禰原に陣し蘆名の援兵と戰ふこと累日殺傷相當る會〻陣營多く邪疾を患ふ義陸、行朝、經氏等皆な疾み前もと能はずして師を還す五年拳義陸疾癒ゆ讒して將に師を鎗倉に發せんとせしに結城蘆名等去年の敗を雪がんとして出て〻安達原に屯す世良田滿氏、大江田左馬介、伊達師宗等の兵七千餘、伊達宗朝又兵二千餘を率ゐて來り俱に親朝の兵と戰て之れに克つ讒降する

者多し三月十一日義陸、貞方爲めに師を睿し進みて白川に至る而して小田、佐竹等軍を久保田に出すと聞き義陸兵を率ゐて之れと戰ひ勝を傷け騎より墜つ敵機に乘じて恢復を謀ると雖も神器北朝に帰は行り南延の亂統紛散し諸州の衆心貳を懷き南部、下山、岩城の驚皆な離散す唯〻伊達、信夫、田村のみ猶ほ志を變ぜずして俱に復擧を謀す應永三年二月小山若犬丸、旗を古河に擧げて官軍に應ず足利氏諸兵を遣して義陸及若犬丸を擊ち軍敗れて邵き走る四月田村清包、義陸及若犬丸を捉げて軍を白川に出す氏滿師を帥ゐて發するを聞き清包等皆散走す七年正月尹良親王居を上野に徙し遠人駿人多く從屬す富士白砂邊に抵りて敵と戰ひ利あらずして走る十年四月義陸相模國に潛匿して木賀秀澄の家に蟄す尋て秀澄志を變じて之を鎌倉に訴ふ足利滿雄、藤田重基を遣はし秀澄を誅して義陸を殺さしむ（並合記に云ふ應永十九年六月七日木賀彦六左衛門入道秀澄兵二十五人を率ゐ不意に起りて庶倉の第を襲ひ義陸を殺すと〻野史）

ニツタ　ヨシテル　新田義輝　陸軍歩兵少尉なり京都府出身にして明治三十七八年日露戰役に於て歩兵第五十二聯隊附として從軍中廿八年七月廿六日樺太ウエデルニコウスキー西方高地附近に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ニツタ　ヨシナリ　新田義成　父は義俊、太郎と稱す祖は義重上西と法名す義成は里見冠者と稱す平氏に屬して京都に在り頼朝兵を起すに及て來りて鎌倉に歸す頼朝之を嘉みし特に命じて近侍せしむ伊賀守となり從五位下に叙せらる文暦元年卒す義成將軍四世に歷事して甚だ寵遇せらる（大日本史）

ニツタ　ヨシハル　新田義治「ワキヤヨシハル」　**ニツタ　ヨシムネ　新田義宗**　左中將義貞の第三子なり兄義顯卒す乃ち立て嗣となる時に六歳武蔵守左兵衛佐に任じ昇殿を聽るさる後ち左兵衛少將に拜せらる兄義興從弟脇屋義治と久しく東國に匿て敵の隙を伺ふ正平七年巻足利義詮欲を吉野に送る帝陽はりて之れを許し由貞信阿を遣はし義宗等に敕して白川に至る而して小田、佐竹等軍を久保田に出すと聞き義陸兵を率ゐて之れと戰ひ勝を傷け騎より墜つ敵機に乘じて掩擊し我師敗績す後ち義陸貞方、靈山城に在り戰ふ敵と

ニデウ タメイヘ　ニデウ タメイヘ　二條爲家「フヂハラタメイヘ」

ニデウ タメウヂ　ニデウ タメウヂ　二條爲氏「フヂハラタメウヂ」

ニデウ タメシゲ　二條爲重　爲冬の子なり後小松帝の時從二位權中納言に至る和歌に名あり初め藤原爲遠後圓融院の勅を奉じて新後拾遺集を撰す未だ成らずして死す爲重復た勅を奉じて續て之を成す又た書畫に名あり応仁の亂に殺されて薨ず年五十二（續本朝書史、扶桑畫人傳、大日本史）

ニデウ タメヨ　ニデウ タメヨ　二條爲世「フヂハラタメヨ」

ニデウ ツナヒラ　二條綱平　姓は藤原氏、左大臣從一位關白に累進す享保十四年四月落飾して圓覺と號し十七年二月薨ず時に年六十一論して敬信院と號す子吉忠關ぎ子孫世々攝家に列すと云ふ（野史）

ニデウ トシナリ　ニデウ トシナリ　二條俊成「フヂハラトシナリ」

ニデウノ キサキ　二條后「フヂハラタカコ」

ニデウノ ニヨヰン　二條女院「シヤウシ」

ニデウノヰンノ サヌキ　二條院讃岐　歌人なり源頼政の孫にして仲綱の女なり二條天皇に仕ふ千歌集に載する「我袖は汐干に見えぬ沖の石の人こそしられ乾く間もなし」の歌秀逸なるを以て當時呼て沖の石の讃岐と云ふ（百人一首一夕話）

ニデウ テンワウ　二條天皇　諱は守仁後白河帝の太子なり母を藤原懿子と曰ふ後白河帝の譲を受けて位に即く時に藤原信頼寵を恃み大將たらんと欲して得ず信頼怒り乃ち源義朝と約し兵を擧げて闕に詣り二帝を別館に幽し自ら御床に坐し恣に威福をなす平重盛等之を討じ遂に信頼を誅す義朝敗死す帝近衛帝の皇后藤原多子を納れて后となす上皇之を止む帝聽かず此より兩宮和せず位にあること七年改元すること五位を太子順仁に讓り尊て崩ず齡二十三（大日本史）

ニデウ ハルヨシ　ニデウ ハルヨシ　二條晴良　尹房の子なり天文十七年左大臣を以て關白となり二條關白と號す

ニデウ マサツグ　ニデウ マサツグ　二條政嗣「フヂハラマサツグ」

ニデウ マサモト　二條政基　滿家の子なり左大臣に任じ文明八年五月關白となり三年にして辭す三后に准じ從一位に叙す慈眼院と號す

ニデウ ミチカネ　ニデウ ミチカネ　二條道兼「フヂハラミチカネ」

ニデウ ミチタカ　ニデウ ミチタカ　二條道隆「フヂハラミチタカ」

ニデウ ミチヒラ　ニデウ ミチヒラ　二條道平「フヂハラミチヒラ」

ニデウ ミツモト　ニデウ ミツモト　二條滿基　姓は藤原氏納言に累進す應永五年三月大將軍足利義滿登て滿基の祖父良基と疎親なるを以て辭字を授け名を滿基と更む是より相約して累世の恒例となす後ち左大臣從一位關白に至る應永十七年十二月薨ず時に歳二十八論して福照院と號す滿基嘗て京畿將道の歌人爭て之を訪ふと云ふ（野史）

ニデウ モチミチ　ニデウ モチミチ　二條持通「フヂハラモチミチ」

ニデウ モチモト　ニデウ モチモト　二條持基　後福照院と號す關白左大臣藤原良實より出づ良實始めて二條氏を稱す良實の玄孫良基後醍醐光嚴の二帝に歴仕し後醍醐南狩するや良基留りて北朝の四帝に累仕し太政大臣に關白に任ず良基の長子師良次子師嗣並に師嗣滿基を生む又其官職を襲ふ滿基は納言に累進す應永三十一年の季關白左大臣氏長者と爲る後花園帝立つや南朝遺臣に不遇なり人心動搖す時に帝尚幼にして未だ政事に體し能はず靖じ上下之に倚頼す持基攝政となり五歳の間禍を杜ぎ難を靖じ賢名あり持基因て永享四年八月を以て之に攝政を讓る而して榮持基の教化を蒙ひ則ち同年十月攝政に復し太政大臣たり帝年稍ゝ長ず則ち攝政を辭して再び關白となる文安二年十一月年五十六にして薨ず持基又書を能くす温柔謹案事體に趣練し釣軸に居る二十餘年大に補闕の功あり家世々圖書に富み俗間傳らるもの多し朝議決し難き事はまゝ其家に就きて訂を取ると云ふ（續日本史）

ニデウ モロタダ　ニデウ モロタダ　二條師忠　藤原氏攝政良實の二男なり弘安十年八月十一日關白となる時に左大臣たり正應二年四月十三日止む香圓院と號す子雖基嗣で又た攝政關白となる（紹運要略）

ニデウ モロツグ　ニデウ モロツグ　二條師嗣　後福光園關白良基の二男なり康暦元年八月二十五日關白氏長者となる時に左大臣從一位年二十四永德二年四月十一日止む後小松帝受禪ありて父良基攝政となりし故なり嘉慶二年六月十二日再び關白となる同日父良基攝政を改めて關白となり即日師嗣に讓補す翌日薨ず師嗣應永元年十一月六日關白を止め同四年三月九日三たび還補し同六年四月十九日辭職出家すと七年十一月二十二日薨ず年四十五後香圓院と號す（攝關補任次第、紹運要略）

ニデウ モロミチ　ニデウ モロミチ　二條師通「フヂハラモロミチ」

ニデウ ヤスミチ　ニデウ ヤスミチ　二條康道　姓は藤原氏、左大臣從一位關白氏長者尹房の曾孫なり慶長十八年十二月康道の元服を加ふるや德川家康其の家例に依りて諱字を授く後ち康道累官して左大臣從一位攝政に至る松永貞德の門に入り俳諧を善くす寛文六年薨ず明珠院と號す時に年六十康道職に在り聲譽あり孫綱平嗣ぐ世に傳ふ俳諧花の本の號は二條氏の特許に據るべき旨康道の皇室より許さるゝ所なり（野史）

ニヂウ ヨシザネ　ニヂウ ヨシザネ　二條良實「フヂハラヨシザネ」

ニデウ ヨシモト　ニデウ ヨシモト　二條良基　姓は藤原氏、關白左大臣道平の子なり嘉暦二年元服を加へて禁色を聽され從五位下に叙し權中納言に累遷す後醍醐天皇の四狩するや院に及び前任を以て光明、崇光、後光嚴、後圓融の四院に歴事し內大臣、左右大臣を歴て關白氏長者と爲り牛車兵仗近衛等を聽され太政大臣從一位に至る天授二年詔を受て三宮に准じ弘和二年四月攝政と爲り元中四年職を辭し五年四月復た攝政と爲り六月攝政を辭めて關白と爲り即日職を辭し尋て薨ず時に年六十九論して後鳥羽院と號す（論語雜記に後鳥羽光園院に作る）良基博く書籍に渉り文才あり且つ和歌を好みて其の奥に詣る家素より多く書記を蔵す又た諸家の秘書を借寫して之を庫に收め奇書薦籍の多く秘して世に傳らざるもの多く之を蔵す且つ其の祖先師輔以來累世攝政たるを以て家記亦た悉く收めて其の庫に在り是れを世に二條殿日次記と稱す因りて朝廷の儀式武家の禮法等人皆な其の家に就て質すと云ふ良基著す所御禊記、百寮訓要鈔、榊葉日記、小島口號、貞治御制記、諒闇記、大嘗會記、雲井御法、白鷹記、山鳥之慰、菟玖波集、魚鳥平家、小夜寢覺等の書あり良基又た常に近世和歌風體の古調を失へるを慨し頓阿を召して和歌の奥旨を論じ之を筆記して愚問賢註み著し以て後世の龜鑑と爲す良基好て庭園を修め頗る景致に富めり池を龍躍と曰ひ橋を綠楊と曰ふ又た御齋、藏春亭、洗暑、聽松の諸閣あり、觀魚臺、吉耀泉あり又た樒香、水明等の樓榭あり七子を生む長師良嗣ぐ（野史）

ニトベ ヂン　新渡戸傳　南部侯の臣なり寛政年中花卷に生る少より諸國を遍歴すかつて花卷城警備の事を痛論し忌まれて陸奥北郡に移さる一日三本木野を過ぎ之が開拓を志し數年にして良績を得たり安政二年同志百餘人と金を醵して田を闢き水利を講じ六戸川の上流を引きて溉漑に供せんと欲し岩石を鑿り寶を穿ち桔屈經營十年金を費すこと三萬四千圓にして荒蕪愈ゝ闢け移り住む者歳々增加すること明治九年車駕東巡に際し傳の別邸に休憩し給ひ祭祀料五十圓を賜ひて偉功を表彰せられたり（巖手縣志）

ニナガハ チカタカ　蜷川親孝　歌人なり親元の子新右衛門尉と稱す從五位下大和守に叙任し足利義晴に仕ふ或は云ふ蔵人頭貞增の三男なりと和歌を好みて善くす（鑒定便覽）

ニナガハ チカナガ　蜷川親長　親世の子にして姓は物部、宮道氏、山城の人なり其の遠祖親直始めて族を蜷川と稱す親直の八世を親當と云ふ足利義詮に仕て政所公役となり和歌を善くす親當の玄孫は即ち親長の父親世なり將軍義輝に仕て丹波の榻野、河內の蟠根寺等の邑を領す親長父に繼ぎて新右衛門と稱す足利氏亡びて親長食邑を失ひ土佐に漂泊して頗る年所を歴たり慶長庚子の亂長曾我部盛親石田三成に與するに以て國除せられ家康鈴木重好をして檢監と爲し土佐に赴きて國郡を收めしむ重好因て童好雪溪寺山に屯す國人又た來りて之を襲ふ親長及び子親滿蜷親の遺臣と相謀し將寇城を擊ち多く首級を獲遂に城邑を取ず親長亦た自ら大阪に赴きて家康に謁賜ほる後ち慶長十二年五月を以て死す親長和歌及び書を能くす子親滿嗣ぐ仕ふ（野史）

ニナガハ チカマサ　蜷川親當　新左衛門尉と稱す宮道氏蘇髮して公譜と號す和歌を修法名を道樣と號す親長の子孫世々幕府に仕ふ（野史）

ニナガハ チカタカ　蜷川親孝　歌人なり親元の子新右衛門尉と稱す從五位下大和守に叙任し足利義晴に仕ふ或は云ふ蔵人頭貞增の三男なりと和歌を好みて善くす（鑒定便覽）

ニナガハ チカナガ　蜷川親長　親世の子にして姓は物部、宮道氏、山城の人なり其の遠祖親直始めて族を蜷川と稱す親當と云ふ足利義詮に仕て政所公役となり和歌を善くす親當の玄孫は即ち親長の父親世なり將軍義輝に仕て丹波の榻野、河內の蟠根寺等の邑を領す親長父に繼ぎて新右衛門と稱す足利氏亡びて親長食邑を失ひ土佐に漂泊して頗る年所を歴たり慶長庚子の亂長曾我部盛親石田三成に與するに以て國除せられ家康鈴木重好をして檢監と爲し土佐に赴きて國郡を收めしむ重好因て童好雪溪寺山に屯す國人又た來りて之を襲ふ親長及び子親滿蜷親の遺臣と相謀し將寇城を擊ち多く首級を獲遂に城邑を取ず親長亦た自ら大阪に赴きて家康に謁賜ほる後ち慶長十二年五月を以て死す親長和歌及び書を能くす子親滿嗣ぐ仕ふ（野史）

ニナガハ チカマサ　蜷川親當　新左衛門尉と稱す宮道氏蘇髮して公譜と號す和歌を修法名を道樣と號す親長の子孫世々幕府に仕ふ（野史）

ニナガハ チカヤス　蜷川親俊　歌人なり親當の子新右衛門尉と稱す從五位下大和守に叙任し足利義晴に仕ふ或は云ふ蔵人頭貞增の三男なりと和歌を好みて善くす（鑒定便覽）

ニナブチ ウヂダイジン　ニナブチ ウヂダイジン　蜷淵大臣「フヂハラタマロ」

ニニギノミコト　ニニギノミコト　邇々藝尊「アメニギシクニキシアマツヒタカヒコホノニニギノミコト」

ニノミヤ イツキ　ニノミヤ イツキ　二宮五十槻　陸軍工兵大佐なり愛知縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て中佐を以て第十二師團工兵第十二大隊長として從軍中三十八年三月十日清國盛京省興隆甸に於て戰死す戰功に依り大佐に昇任し勳三等功四級に叙せらる

ニノミヤ キンスキ　二宮錦水　岩國藩の儒者にして名は子容初名尚敬德の子世々巖國侯に仕ふ初め蟠井昭陽の門に學び後江戸に遊び松崎慊堂に從ひ三年にして歸り藩の督學に擧げらる其學洛閩を主とすと雖も其之を傳守せず博く漢唐諸說に參す殊に三禮に長ず老を告ぐる後も大事ある毎に藩公必ず召して詢ふ明治七年六月廿五日歿す年七十（日本教育史資料）

ニノミヤ ジュ　二宮壽　陸軍砲兵少尉なり愛知縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て後備獨立野戰砲兵第二大隊附として從軍中三十八年四月二十三日清國盛京省後民屯にて病に罹り同五月六日奉天兵站病院に於て死去す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ニノミヤ ソントク　二宮尊德　相摸國足柄柏山の人なり金次郎と稱す尊德は其の名而して其の先は曾我氏に係れり尊德人となり沈毅にして大度あり幼にして濱世の志を抱き畫策する所每れに人の意表に出づ年甫めて十四其の恃を亡ひ十六其の怙を喪ふ時に一弟あり家貧にして自ら之を養ふ能はず乃ち出だして外氏に托し單身苦耕し僅かに舊廬を守る常に讀書習字の志あり之を傳して給するあるなし因て菜草の燈油を得るを計り空地に就きて菜種を播き春に至りて其の實子數升を收む乃ち携へて府城の市に往き錢貨に換へて以て書籍筆硯を購ひたりと云ふ尊德一日飯泉の里を過ぎて觀音大士を拜し一偈の跪坐して經を誦するを見る乃ち耳を傾け之を聽きて曰く異なる哉誦や鏈を施して之を復びせんことを請ふ僧爲めに期誦す尊德之を聞き恍然として悟るあり其の何經たるを問ふ僧曰く觀音經なりと尊德曰く吾嘗て僧の經を誦するを聽くに獨り聲音あるのみ未だ其の義の何たるを知らず而して今通曉する此の如きものあるは何ぞやと僧曰く是れ邦音を以て誦讀するに因れりと冒ひ訖りて見えず尊德嘆じて曰く人間の事業たる甚だ多しと雖も愈々賑はし困を濟ふを以て善の第一義となすと時に年十四なり後ち此の念を渝へざると終生一日の如しと云ふ居常朴素を守り衣は則ち綿衣だも重裘せず未だ嘗て襲を着くるをあらず食は則ち單汁單菜を守る而して其の室は疏

球壓を席くのみ邑に背て土功あり戶毎に丁夫を課す尊德時に其の徒の中に在り然れども年幼にして事に堪ふると能はず因りて自ら奮て曰く吾れ役に赴き毎に人を待ちて其の課を全うす是れ勞を衆に擔くなり酬ひざるべからず吾れ衆中に濫竽す而して幸に人之を容すと雖も獨り心に愧ぢざらんや抑々財は天より降らず顧ふに我が力の如何に在るのみ吾れ夜を以て草鞋を爲くらば或は酬ゆるに庶からんかと其の夜草鞋三ヵ得て明日之を携へて役に至り鞋の敝るゝを見て輙ち之に給與して曰く吾れ鞋を爲くるを學ぶと雖も其の能く趾に適するや否やを知らず幸に之を受けよと之を受くる者深く德と爲すと云ふ尊德是より苦窶酷暑と雖も夜課必ず三更に至らざるなり尊德平生獨り天と地とを信じ荒蕪を拓くを以て務となす又た孔子佛氏の言を好みて人をして之を誦せしめ心に會するあれば沈思反覆して晝夜措かず精思神に入りて遂に大に發明す嘗て謂ふ天地明信にして物々相應ずる響の聲に於けるが如く影の形に於けるが如し故に稻種を播すれば必ず稻を生じ蔘種を播すれば必ず蔘を生ずず是を推して以て之を驗するに凡そ天地間のもの皆な然らざるはなく唱ふれば必ず和し投ぐれば必ず報ひ萬物相仍り生じて息まず其の德たる亦た昭著ならずや是の故に善を種うれば善を產し惡を種うれば惡を產し種うる小なれば產すること大なり種うる大なれば產すること大なり種ゑざれば產せず未だ蔘を種えて稻を收むることあらざるなり未だ種うること小にして生ずることを大を見ざるなり其の事たる森嚴にして犯すべからず豈に明信ならずや但々其の稻と蔘とを生ずるや驟ち粒を生ずずして之れに先つに莖を以てす是れ何の故ぞや講明せざるべからざるなり國の國たる所以は惟れ粒のみ粒の外に物なし嘗て開く蝸牛角に國する者あり鬻民と曰ふと今大世界を觀るに亦粒上のものゝみ人の手は外に啓くべし獸の手は內に啓くべからず是れ何ぞや內に啓くものは推すものは人道なり啓くものは推す攫むものは禽獸なり推して之れを讓る故に地闢く氣化の妙獨り此に至るなり然れども獸の性たる單獨隈身故に專ら人は即ち君父あり民人あり家國あり曾復た身を隈るべけんや然り而して天祖の未だ大地に降らざるや人皆な攫み身を隈る獸と相伴し故に天孫以上幾億萬年戲澤茫々不藝不粒穴居木處而して草を茹ひ血を飲み其の禽獸に異なるもの幾と稀なり是れ他なし獸と道を同うすればなり喜し堯舜の民の爲めに敬を立つるは相讓り相養ふの道に過ぎず其の說く所數十萬言と雖も近く稼穡生植の事を引きて以て人に喻ふるに零鑒も蓋はざるなりと命じて報德の敎と曰ふ敎行の年凶荒に屬し諸州其の災を被むり死するもの甚だ多く慘狀言ふべからず此の災の將に來らんとする前に方り尊德天象を仰觀して大に惑ずる所あり鄙內を巡して稗を種ゑしむ田一段毎に種子四升を授け熟するを待ち貯へて以て之に備ふ又租稅若干を減じ民を巡して自ら取給せしむ嘗て新發の黨を貯へ積みて鉅萬に至り以て民に貸し別に錢糧若干を給し處分至らざる所なし是に於て凶荒の災來り死亡流離の間に於て獨り物井郷のみ鷄犬相報じて平日の如き有たりと云ふ丁酉二年に至り小田原方に食を缺き哭聲路に滿つ尊德報を得て藩邑を巡視し乃ち各處の金粟を收め飢民の食に就くもの四萬三百九十人三月に起りて五月に至る一餓莩なを見ずと云ふ嘗て人あり尊德の爲す所を疑ひ遂に以て侯に告ぐ侯晒て曰く幸に今天下治り下民上官に聽さて無爲たり若し亂離の時に當らば我が封疆の民心悉く尊德の德義に歸せんのみ豈に抗顏人主と稱するを得んやと以て尊德の侯に知信せらるゝの特異なるを知るべし平生尊德の事を陳ずる每に侯稱賞して輕まず曰く彼の爲す所老子の右に出づと侯嘗て碓府の金千石を捐ゝ以て尊德廣濟の費を助け以て其の敎法をして徧れく州國に行はれしめんと欲す幾もなくして侯世を捐つ識者之を惜むと云ふ野州に一邑あり靑木と曰ふ川副氏の采地に係れり其の邑墨を穿ちて以て田に瀝き一鄕粗りて以て命を爲す事を得ずして命ずる再三極めて懇切なり是に於て尊德已むを得ずして命を奉じ移りて物井郷舍に居る時に文政五年なり尊德既に徙りて夙夜其の部民を巡視し一戶を過ぐる每に輕々看過せず即ち室中の有無人の力むると力の巳に睡りに就きたるや否や搗藁の噪々たる紡車の聲を知らざるなく窮困の者は之を縷ぐに食を以て之を養ふ其の事たる森嚴にして犯すべからず豈に明信ならずや但々其の稻と蔘とを生ずるや驟ち粒を生ずずして之れに先つに莖を以てす是れ何の故ぞや講明せざるべからざるなり國の國たる所以は惟れ粒のみ粒の外に物なし嘗て開く蝸牛角に國する者あり鬻民と曰ふと今大世界を觀るに亦粒上のものゝみ人の手は外に啓くべし獸の手は內に啓くべからず是れ何ぞや內に啓くものは推すものは人道なり啓くものは推す攫むものは禽獸なり推して之れを讓る故に地闢く氣化の妙獨り此に至るなり然れども獸の性たる單獨隈身故に專ら人は即ち君父あり民人あり家國あり曾復た身を隈るべけんや然り而して天祖の未だ大

廢せば始めに於て止むるに如かざるなりと衆民曰く何等の辛苦あるも之に堪へん推ゝ先生の命ずる所に從はんと尊德曰く然らば則ち汝の字下苗ずる所能く我が爲めに之を刈るかと衆大に悅び詣且邑の男女老幼を悉くして從事し字下苗除已に盡く報じて曰く命を了へたりと尊德曰く我が爲めに運搬して門下に致さんかと衆乃ち之に從ふ尊德因りて數を查して賞を計り以て之に錢を與ふ而して其の多寡は其の勤惰に隨ひて一錢を差へずと云ふ既にして尊德衆に謂て曰く今吾の之を救に輸者は特に汝民に賜はんと欲するのみ是の茅以て汝の屋を新たにすべし宜しく負ひて邑に還るべしと遂に衆民の屋を齊しく新にすと云ふ是に於て衆民已に尊德の敎方の一端を喫し感泣して益を請ふ尊德數日を經て衆に謂て曰く我れ汝鄕の隴畝を見るに皆荒蕪ぜり汝等眞に能く力を盡さば我亦た一心事に茲に從はんと衆其の命ずる所に從ふを誓ふ是に於て尊德始て靑木に抵り國鄕を巡視し衆民を音勵して遂に堰堤を起す堅大比なし水渠に徧ひて亞り乾土皆な流ぐと云ふ天保十三年幕府尊德を召して封を賜ひ始めて吏籍に入る弘化元年是より先き日光廟社の祭田久しく荒蕪に屬するを以て幕府殊に尊德に命じ興復の策を獻ぜしむ尊德乃ち刻苦三年にして策書六十卷を撰み之を奉る遂に命あり日光の官舍に移りて其の事に任ず時に州縣の來りて敎を受くるもの其の門に相望み相馬侯國を擧げて尊德に聽き其の他小田原侯、下館侯、鳥山侯、谷田部侯の如き皆な其の臣を遣はして敎を受けしめ川副氏、字津氏、齋藤氏亦た敎を請ひ塾中常に慨然と云ふ蓋し尊德の民を喻すや至誠を推して以て開示し繦ぐに涕泣を以てす故に其の民感化せざるものなし其の民の爲めに法を立つるや務めて奢侈を省き衣物什器若くは婚女飾具の如き苟も財を費し產を妨ぐるものあれば皆な鬻きて以て錢貨に換へしめ因りて負債を償ひ或は生活の資に充てしむと云ふ尊德自から金錢を得るあるや之を私せず報德義金となし流通轉移して暫くも之を留めず遂に積みて萬有餘金に達すと云ふ後ち安政三年十月二十日病みて日光官舍に沒す時に年七十、子彌太郎嗣ぐ明治中小田原に嗣を建て二宮神社と云ふ明治二十四年十一月從四位を贈る（報德記、尊德小傳）

二ノミヤ　タウテイ　二宮桃亭　寬政年間の人にして醫を業とし江戶に住し傍ら沈金彫を善くす其の製は漆器に陰文を彫りて金宋を嵌入したるなり髹飾錄に鎗劃、注に細纖嵌色於文爲陰中陰者とあるこれなり支那の創製にして長崎の工人早く既にこれを傳ふ桃亭亦傳へて最も其の技に長じ逕刀精巧なり一說に拂亭は鼠の齧るもて刀に代へ刻せしと（工藝志料、蒔繪師傳）

二ノミヤ　ハルヒサ　二宮春久　土佐守毛利元敎に屬して武名あり（本朝名傳記）

二ノミヤ　ヒコマル　二宮彥丸　陸軍步兵中尉なり奈良縣出身にして明治廿七八年日露戰役に於て第七師團步兵第二十六聯隊附として從軍中廿七年十一月二十八日旅順要塞二〇三高地に於て戰死す戰功四級に叙せらる

二ノミヤ　アツヲ　丹羽篤男　陸軍工兵少佐なり石川縣出身にして明治廿七八年日露戰役に於て第五師團工兵第五大隊附として從軍中廿七年五月二十六日清國盛京省南山英家屯に於て戰死す戰功に依り勳四等功四級に叙せらる

二ハ　ウヂオト　丹羽氏音　氏信の後、氏定の曾孫なり家督して濃州岩村の城主となり和泉守と稱す元祿中氏音の家人山村瀧兵衛といふ者顏る材量あり恩遇衆に超ゆ稍ゝ主威を凌ぐ性吝にして專橫なり諸老宿臣皆彈指して之を憎み黨を樹て其の罪を懲へ將に之を戮せんとす物議騷擾す是に於て氏音瀧兵衛に諭して曰く汝罪なしと雖も一家擧げて罪を汝に歸す故に我汝を逐ふ宜く他に之きて身を立つべしと瀧兵衛乃ち憤ふ府署を辭し怨恨終に自ら以て寃となし諸士の罪を東府に訴へしめ因りて負債を償ひ檢覈して以て狀を得悉く皆鬻ぎて以て錢貨に換へしめ因りて負債を償ひ或は生活の資に充てしむと云ふ尊德自から金錢を得るあるや之を私せず報德義金となし流通轉移して暫くも之を留めず遂に積みて萬有餘金に達すと云ふ後ち安政三年十月二十日病みて日光官舍に沒す時に年七十、子彌太郎嗣ぐ明治中小田原に嗣を建て二宮神社と云ふ明治二十四年十一月從四位を贈る（報德記、尊德小傳）

二ノミヤ　タウテイ　二宮桃亭　寬政年間の人にして醫を業とし江戶に住し傍ら沈金彫を善くす其の製は漆器に陰文を彫りて金宋を嵌入したるなり髹飾錄に鎗劃、注に細纖嵌色於文爲陰中陰者とあるこれなり支那の創製にして長崎の工人早く既にこれを傳ふ桃亭亦傳へて最も其の技に長じ逕刀精巧なり一說に拂亭は鼠の齧るもて刀に代へ刻せしと（工藝志料、蒔繪師傳）

二ノミヤ　ハルヒサ　二宮春久　土佐守毛利元敎に屬して武名あり（本朝名傳記）

二ノミヤ　ヒコマル　二宮彥丸　陸軍步兵中尉なり奈良縣出身にして明治廿七八年日露戰役に於て第七師團步兵第二十六聯隊附として從軍中廿七年十一月二十八日旅順要塞二〇三高地に於て戰死す戰功四級に叙せらる

**二ハ

に於て豫備役より召集せられ第四師團歩兵第九聯隊附として從軍中廿八年三月七日清國盛京省小貨與堡に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

二八カガノカミ　丹羽加賀守　石州流の茶道を半寸庵幸琢に學びて能くせり（茶人系傳全集）

二八カゲン　丹羽嘉言　畫家なり彩甫、聚珍堂又蘇善齋と號す尾張名古屋の人群書に渉りて書畫を能くす京都に在りて大雅堂を友とし自ら明畫を學び頗る氣韻あり後ち舊里に歸り家を讓りて庵を川名山に結びて閑居し自ら謝庵と號す同山香積院雲叟和尚に參禪して清淨を旨とす天明六年三月十六日歿す年四十五（扶桑畫人傳）

二八ケイスケ　丹羽惠介　水戸藩士なり諱は久照惠介と稱す性武術を好み殊に槍術を能くす脉机廻より累進して奥右筆に至る安政中内勅の事あるや勅旨を奉じ君寃を雪がんとみ謀り元治元年甲子の雛柳原照煕と共に江戸に到り陳辯する所あり後松平輕穂に隨て水戸に赴き那珂湊に戰ふ事敗るゝに至り鳥井瀬兵衛等と共に赤沼の獄に下り十月十六日斬に處せらる年三十五（殉難餘稿）

二八シゲイ　丹羽思亭　儒者なり名は悳字は伯弘思亭と號す越後柴田の士、其先加入なり慶長中七世の祖長右衛門始て溝口侯に仕へ從ひて柴田に移る考諱は滿短は横山氏思亭幼より學を好み岐嶷夙成年甫て一章逆倅より郡屬更に擢られ郡廻に遷り口俸を加賜す藩主其孝且勤學を賞して金を賜ひ之を奬し命じて江戸に學ばしむ贄を松崎懐堂に執り學識益々進む既に歸りて官に復し公邑墨田使を兼ね俸一口を增す勒めて思亭に至り位下士に出でず故に從事する所府吏の間に在り在上者方さに之を用ふるに向ふ而して其好にあらず遂に散地を請て典府に遷る思亭人と爲り簡正にして親舊に厚く親姻之を仰ぐ父母の如し官に居る細大心を盡し敢て己を枉て苟も合はず經を治むる洛閩を宗とす而して旁ら訓詁を漢唐諸家に考へ亦之を六經に質す獨り甚だ釋氏を惡み骨て書を林檉宇に上り之を極論し并て佛氏論を進む檉宇極て之を稱す既に散地に居り將に論著する所あらんとす弘化丙午閏五月八日病て歿す年五十二思亭技藝多し詩歌琴書皆能く妙境に入る又た繪事を解し尤も文章を善くす嘗て鑒舶あり洋中に游奕す俟特に以て思亭に命じ之と筆語せしむ思亭知遇に感じ益々力を辭藻に肆にして外驍と爲す而して少しも顧みず性淡恬他の嗜好なし官事稍々閒なれば江山に放浪し富獄松嶺より凡東北の名勝足跡粗々即ち會意の境に逢ふ毎に輙ち寫して之に詩を題し又從て之を紀し裒然帙を成す他詩文十餘卷皆家に藏す（雲碣銘）

二八セイハク　丹羽正伯　醫者なり名は貞機正伯は其の字伊勢の人、山脇玄修を師とし旁ら韮河亮稻生宜義に就て學び尤も本草を好む宜義の門下出藍の名あり正伯性豪邁江戸に在り幕府命じて庶物類纂を編ふ思政親ら檜を揮ひて前鋒を奪ひ敵を交ふ思政直に奮進し九兵衛秀長等と諸卒を指揮して壓戰し思政親ら檜を揮ひて前鋒を奪ひ敵大いに敗走す思政北ぐるを逐ふ敵兵反して戰ふ思政車身にして前後六敵に當り援兵繼かずと雖ども力盡きて斃る時に年四十一（事實文編）

二八チヨザン　丹羽樗山　著作家なり享保時代大阪の人通稱十郎左衛門樗山又俟齋と號す田舍莊子田舍一休等の書世に行はる（名家著述目錄）

二八ツトム　丹羽勗　尾張の書家にして字は子勉通稱嘉六盤桓子と號す春日井郡四谷村の人なり幼にして穎異字を善くす鈴木期に學ぶ期其才を愛し教育最も至る期齡を殿にして生徒を待つ勗獨其親を奉じ之に事ふ寛政中名古屋藩始めて目記局を開いて歴代の事蹟を編纂す大冢伯書これが總裁たり勗を擧げて史書を寫さしむ職を守ること二十餘年右筆に遷る人となり恭謙貞慎學術文章時流に超絶して而かも書名の爲めに掩はる其書特に細楷に妙なり宮崎琦圃が遺墨を觀深く推服せしといふ天保十二年三月七日歿す年六十九（尾張人物志）

二八ナガクニ　丹羽長國　舊二本松藩主なり正三位子爵を授けらる明治三十七年一月十五日死去す年七十一青山墓地に葬る

二八ナガシゲ　丹羽長重　小字は鍋丸初め十二歲阪本に居る秀吉命じて右府信長の女に配せしむ天正十一年五郎左衛門と改め越前府中城に居る十三年四月父長秀卒す長重時に年十五佐々成政越中に在り織田信雄に應ず秀吉之を擊たんと欲す長重に命じ軍費を出さしむ時に嗣封未だ定らざる果月會々是命あり其臣成田孫八郎建藤して曰く先君織田氏に忠し志を竭して歿す朱章未だ下らず恐らくは創細あらん竊に謀りて兵を擧げ先志を繼がんと衆議決せず輙ち諧はずして止む議微しく泄る是に於て長重募に應じて發す部下律を犯す秀吉怒りて越前加賀二州を收め若挾の蓄封を予へ罪を稱し孫八郎を誅し長重の部下東正家村上義明溝口秀勝等を擲び俟藉に列す七月長重を加賀めて侍從に任ず冬大阪に兵起る忠政長重に從ひ兵に將として一面に當り鳴野口を攻めて功あり既にして和議起り兵罷む元和元年夏兵再び起る長重天王寺口に陣す既にして前隊鋒を交ふ忠政直に奮進し九兵衛秀長等と諸卒を指揮して壓戰し忠政親ら檜を揮ひて前み縱横驅突す敵大いに敗走す忠政北ぐるを逐ふ敵兵反して戰ふ忠政車身にして前後六敵に當り援兵繼かずと雖ども力盡きて斃る時に年四十一（事實文編）

十五年征西に從ひ日向に抵る部下或は法を犯す秀吉長重の封を奪ひ殊に加賀松任の田五万石を予ふ征明の役起る兵八百を率ゐ行營に從ふ文祿四年愛護に任ず慶長三年秀吉長秀の舊功を錄し長重の封を加賀小松城に轉じ十万石を食ましめ雖て加賀守に任じ長重功臣坂井典右衛門江口三郎右衛門に各一万石を頒つ四年冬飛語あり前田利長反すと家康征討せんとす長重之を聞き赴き請て曰く頃ろ聞く公加賀に事ありと然らば則ち臣が城邑彼と境を接す先鋒以て他に讓る可らず父長秀利長と姻あり今公の爲めに私を廢す武の常なりと強て先鋒を請ふ家康志を嘉みし吉光作の刀を賜ふ然も蜚説反間より起り發せずして止む慶長廢子の役起るに逮び利長人を遣はし來り謂て曰く我内府の命に應じ將に上國に赴かんとす卿若し謀を同うせば請ふ僧に發せん曰く我太閤の爲に父の封を奪はれ邑を遷す三年敢て恩惠あるに非ず內府に對し又親疎なし我未だ措置を辨ぜず若し卿の執事に因り越前を復するを得ば內府の爲に身を碎き勞力以て一面を擊たん利長曰く復封は內府の意なり我之を奈ともする能はず然りと雖も功を建てば則ち何ぞ宿憤を遂げざらんや我亦た力を極めて推挽せん長重大に悅び人を遣し松任に置ふ加入賞を求む家人諫て曰く我家有府公より以來一隙の將たり太閤の爲に封を減ぜらると雖も兩家共に親姻昆弟の國たり何ぞ實を忘ること之れ爲んと加入謂ふ去年飛語あり利長反すと長重姻にして寃を解かず邵て先鋒を請ふ强悍斯の如くんば大節に臨みて必ず危からんと隣遂に破る長重命じて澶墻を修め人を遣し竹藪を伐盡す初め長重封を小松に受くるや人其の遠謀に感ず小松城の地たるや御幸塚の阜に對して一段の低地なり安宅川の岸を距る七八町且つ泥地中に凸あり以て城地となす西北二面安宅川水岸に漂り截崖高く聳えて石壁の如し是み前門とす掛橋口是れなり東面及び巽隅を浅井と連り淺隍數十丈長重徙り治し更に孚城を築く地の高さ九尺以て水雖に備へ又た五層の天主櫓を造り以て嚴に備ふ大塊寺城主山口宗永來り謂て曰く利長大軍近境を掠略す諸城徵にして當るべからず願はくば俱に斯の城に據て防禦せん我當さに後門を保つべし長重曰く利長深く諸城の後援を慮り必ず急に攻め重の封を奪ひ殊に加賀松任の田五万石を予ふ征明の役起る兵八百を率ゐ行營に從ふ文祿四年愛護に任ず慶長三年秀吉長秀の舊功を錄し長重の封を加賀小松城に轉じ十万石を食ましめ雖て加賀守に任じ長重功臣坂井典右衛門江口三郎右衛門に各一万石を頒つ四年冬飛語あり前田利長反すと家康征討せんとす長重之を聞き赴き請て曰く頃ろ聞く公加賀に事ありと然らば則ち臣が城邑彼と境を接す先鋒以て他に讓る可らず父長秀利長と姻あり今公の爲めに私を廢す武の常なりと強て先鋒を請ふ家康志を嘉みし吉光作の刀を賜ふ然も蜚説反間より起り發せずして止む慶長廢子の役起るに逮び利長人を遣はし來り謂て曰く我内府の命に應じ將に上國に赴かんとす卿若し謀を同うせば請ふ僧に發せん曰く我太閤の爲に父の封を奪はれ邑を遷す三年敢て恩惠あるに非ず內府に對し又親疎なし我未だ措置を辨ぜず若し卿の執事に因り越前を復するを得ば內府の爲に身を碎き勞力以て一面を擊たん利長曰く復封は內府の意なり我之を奈ともする能はず然りと雖も功を建てば則ち何ぞ宿憤を遂げざらんや我亦た力を極めて推挽せん長重大に悅び人を遣し松任に置ふ加入賞を求む家人諫て曰く我家有府公より以來一隙の將たり太閤の爲に封を減ぜらると雖も兩家共に親姻昆弟の國たり何ぞ實を忘ること之れ爲んと加入謂ふ去年飛語あり利長反すと長重姻にして寃を解かず邵て先鋒を請ふ强悍斯の如くんば大節に臨みて必ず危からんと隣遂に破る長重命じて澶墻を修め人を遣し竹藪を伐盡す初め長重封を小松に受くるや人其の遠謀に感ず小松城の地たるや御幸塚の阜に對して一段の低地なり安宅川の岸を距る七八町且つ泥地中に凸あり以て城地となす西北二面安宅川水岸に漂り截崖高く聳えて石壁の如し是み前門とす掛橋口是れなり東面及び巽隅を浅井と連り淺隍數十丈長重徙り治し更に孚城を築く地の高さ九尺以て水雖に備へ又た五層の天主櫓を造り以て嚴に備ふ大塊寺城主山口宗永來り謂て曰く利長大軍近境を掠略す諸城徵にして當るべからず願はくば俱に斯の城に據て防禦せん我當さに後門を保つ

べし長重曰く利長深く諸城の後援を慮り必ず急に攻め重の封を奪ひ殊に加賀松任の田五万石を予ふ征明の役起る兵八百を率ゐ行營に從ふ文祿四年愛護に任ず慶長三年秀吉長秀の舊功を錄し長重の封を加賀小松城に轉じ十万石を食ましめ雖て加賀守に任じ長重功臣坂井典右衛門江口三郎右衛門に各一万石を頒つ四年冬飛語あり前田利長反すと家康征討せんとす長重之を聞き赴き請て曰く頃ろ聞く公加賀に事ありと然らば則ち臣が城邑彼と境を接す先鋒以て他に讓る可らず父長秀利長と姻あり今公の爲めに私を廢す武の常なりと強て先鋒を請ふ家康志を嘉みし吉光作の刀を賜ふ然も蜚説反間より起り發せずして止む慶長廢子の役起るに逮び利長人を遣はし來り謂て曰く我内府の命に應じ將に上國に赴かんとす卿若し謀を同うせば請ふ僧に發せん曰く我太閤の爲に父の封を奪はれ邑を遷す三年敢て恩惠あるに非ず內府に對し又親疎なし我未だ措置を辨ぜず若し卿の執事に因り越前を復するを得ば內府の爲に身を碎き勞力以て一面を擊たん利長曰く復封は內府の意なり我之を奈ともする能はず然りと雖も功を建てば則ち何ぞ宿憤を遂げざらんや我亦た力を極めて推挽せん長重大に悅び人を遣し松任に置ふ加入賞を求む家人諫て曰く我家有府公より以來一隙の將たり太閤の爲に封を減ぜらると雖も兩家共に親姻昆弟の國たり何ぞ實を忘ること之れ爲んと加入謂ふ去年飛語あり利長反すと長重姻にして寃を解かず邵て先鋒を請ふ强悍斯の如くんば大節に臨みて必ず危からんと隣遂に破る長重命じて澶墻を修め人を遣し竹藪を伐盡す初め長重封を小松に受くるや人其の遠謀に感ず小松城の地たるや御幸塚の阜に對して一段の低地なり安宅川の岸を距る七八町且つ泥地中に凸あり以て城地となす西北二面安宅川水岸に漂り截崖高く聳えて石壁の如し是み前門とす掛橋口是れなり東面及び巽隅を浅井と連り淺隍數十丈長重徙り治し更に孚城を築く地の高さ九尺以て水雖に備へ又た五層の天主櫓を造り以て嚴に備ふ大塊寺城主山口宗永來り謂て曰く利長大軍近境を掠略す諸城徵にして當るべからず願はくば俱に斯の城に據て防禦せん我當さに後門を保つ

へ以て敵の動止を窺はしめ又た兵を大呂に伏す利長の斥候と遇ふ矢丸迭に接す明日利長の部將横山長知等淺井山を下りて退く三郎右衛門望見して之を報じ古田五兵衛櫻木助左衛門等僅に十餘人城を出て銃を縱て進躍す長重三郎右衛門の報を聞き將に出でんとす十方院松雲尊を控へ諫て曰く江口深く敵中に入る恐らくは敗を取らん敵次々亂すを俟ち追尾せば利あらん長重聞かず鎧を揭げて馳驅し三郎右衛門と相遇ふ三郎乃ち兵二百を率ゐ敵軍を襲ひ淺井山に登り長重亦麾を揮て追驅す加軍福將太田雄宗等淺井畷の橋際に返戰す長重擊ち勵まして進み左右競ひ闘ふ利長退て三堂山に陣し之を望み將に師を進め掛橋口を攻めんとす或人之を長重に報ず長重曰く衆意城危きを以て念と爲さず則ち入て以て待つべし我は江口を窺てずと長重將に追躍せんとす與右衛門諫めて曰く大敵なり追ふ莫れと長重諾して俱に城に入る利長亦た長重の師を追むるを見て將に襲はんとす長重已に入る及ばずして澶む此の時に當りて家康の軍に會す乱平て後家康是非を糾問す長重陳謝して曰く臣初より公に背くの意あるに非ず臣の利長と戰ふは唯々私怨あるを以てのみ敢て公の仇を爲すに非ざるなりと然れども事猶ほ審らさるあるを以て將さに重刑に處せられんとす利長爲めに救謝す是に於て長重の封邑を没收す利長重江戸に往き芝濱に幽居し五郎左衛門と稱し每に幕府に近侍し慶長八年三月常陸古渡の田一萬石を賜ふ十九年冬大阪の役に從ふ夏の役首を獲る十四級元和五年一萬石を加賜す八年棚倉城に徙り栗邑五萬石を賜ふ寛永四年四月食邑を倍し白川城を賜ふ是の時藤堂高虎內旨を傳て曰く加藤嘉明封を倍し會津に移り彌亦た封を白川に轉ず是れ他なし浦生氏に代て奥州の鎮護と爲るなり善く嘉明を遇せよと長重急に城壁を修築し事成るに迨じて金澤領に入り火を本吉に縱ち老幼數百人を斬て還る利長大聖寺を拔き而して敵海路より能登に入ると聞き遽に師を回す先鋒山崎長德等四隊御幸塚に陣す長重望見して謂ふ利長我微勢を輕侮し途を城下に假りて一揖せず傍ら無人なりと部下或は謂ふ當る莫れと三郎右衛門曰く寇を誘て城下を過らしむ他日何の顧ありて人意を告て去る奥羽諸侯白川を過る每に必ず城に入り面を見るべき之を擊つに若かずと長重曰く善し乃ち坂井右衛門を以て隊伍を率ゐ暴雨を浸ぎ出で、街口に備へ以て敵の動止を窺はしめ又た兵を大呂に伏す利長の斥候と遇ふ矢丸迭に接す明日利長の部將横山長知等淺井山を下りて退く三郎右衛門望見して之を報じ古田五兵衛櫻木助左衛門等僅に十餘人城を出て銃を縱て進躍す長重三郎右衛門の報を聞き將に出でんとす十方院松雲尊を控へ諫て曰く江口深く敵中に入る恐らくは敗を取らん敵次々亂すを俟ち追尾せば利あらん長重聞かず鎧を揭げて馳驅し三郎右衛門と相遇ふ三郎乃ち兵二百を率ゐ敵軍を襲ひ淺井山に登り長重亦麾を揮て追驅す加軍福將太田雄宗等淺井畷の橋際に返戰す長重擊ち勵まして進み左右競ひ闘ふ利長退て三堂山に陣し之を望み將に師を進め掛橋口を攻めんとす或人之を長重に報ず長重曰く衆意城危きを以て念と爲さず則ち入て以て待つべし我は江口を窺てずと長重將に追躍せんとす與右衛門諫めて曰く大敵なり追ふ莫れと長重諾して俱に城に入る利長亦た長重の師を追むるを見て將に襲はんとす長重已に入る及ばずして澶む此の時に當りて家康の軍に會す乱平て後家康是非を糾問す長重陳謝して曰く臣初より公に背くの意あるに非ず臣の利長と戰ふは唯々私怨あるを以てのみ敢て公の仇を爲すに非ざるなりと然れども事猶ほ審らさるあるを以て將さに重刑に處せられんとす利長爲めに救謝す是に於て長重の封邑を没收す利長重江戸に往き芝濱に幽居し五郎左衛門と稱し每に幕府に近侍し慶長八年三月常陸古渡の田一萬石を賜ふ十九年冬大阪の役に從ふ夏の役首を獲る十四級元和五年一萬石を加賜す八年棚倉城に徙り栗邑五萬石を賜ふ寛永四年四月食邑を倍し白川城を賜ふ是の時藤堂高虎內旨を傳て曰く加藤嘉明封を倍し會津に移り彌亦た封を白川に轉ず是れ他なし浦生氏に代て奥州の鎮護と爲るなり善く嘉明を遇せよと長重急に城壁を修築し事成るに迨じて金澤領に入り火を本吉に縱ち老幼數百人を斬て還る利長大聖寺を拔き而して敵海路より能登に入ると聞き遽に師を回す先鋒山崎長德等四隊御幸塚に陣す長重望見して謂ふ利長我微勢を輕侮し途を城下に假りて一揖せず傍ら無人なりと部下或は謂ふ當る莫れと三郎右衛門曰く寇を誘て城下を過らしむ他日何の顧ありて人意を告て去る奥羽諸侯白川を過る每に必ず城に入り面を見るべき之を擊つに若かずと長重曰く善し乃ち坂井右衛門を以て隊伍を率ゐ暴雨を浸ぎ出で、街口に備

介奥羽の藩鎭たり我師數萬を率ゐ來らば奈何聊か念を勞する所あらんと答て曰く我れ兵寡しと雖も鄰が中軍を衝き擊て之を破らば轍すく城下を過るを得ずと或日政宗城下を過ぎ片倉景綱に謂て曰く斯城の如き鑿前居り殲さんと答て曰く否な江口三郎左衛門の城に在るあり日午に迄ばんと云ふ九年還て鑿請に任じ十四年三月薨ず年六十七子光重寛永十一年冬從五位下に叙し左京大夫と稱し封を謝ぎ二本松城に徙る(野史)

二八ナガヒデ　丹羽長秀　尾張の人なり姓は藤原氏、修理亮長政の二男、其の先は武州の兒玉黨なり中葉尾州に移り斯波氏に仕へ丹羽郡に居る長政の長子長忠蚤く死す次は乃ち長秀小字は萬千代天文十九年歳甫て十五織田信長に仕へ左右に給事す長ずるに及び擢られて隊長となり屢〻武功を樹つ信長兄信廣の女を以て之に要はす是を源光秀夫人となす長秀改て五郎左衛門と稱す元龜元年百々邸壘を守り佐和山を壓し信長の爲に磯野秀昌を誘し屢〻信を通ぜしむ叡山の趾に對陣するに當り江口三郎左衛門なして百々邸を守らしめ自ら騎五百を率ゐ將に坂本に赴かんとす土冠途に會し俱に擊ちて之を卻け馳て坂本に入る五月信長京都に入る長秀明智光秀と若狹を畧し武藤景久を石山城に攻む景久防戰す其の士村松主水固く諫し景久其の母を出し質となす長秀携へ歸り江川を過ぐ土冠復た起る路を阻す稻葉長通父子山寨に在り急を聞き出で〻冠を擊ち之を卻く首級千二百を京都に送る六月信長淺井長政を討ち長秀をして横山に備へしむ遂て信長横山を拔き進て佐和山城を圍み長秀及び市橋長勝河尻鎭吉に相代て横山城を守らしむ二年二月磯野秀昌出て降る信長佐和山城采邑五萬石を以て長秀に授け柴田勝家と並に信長の股肱となす世に一雙と稱す關白秀吉微賤なる時二人の雄武を嘉ひ族字を併せ請ひて羽柴と稱すと云ふ天正元年二月勝家尊と石山堅田を攻め首級を獲之を岐阜に送る四月信長竊かに長秀に謂て曰く室町殿必ず異謀あらん我れ之を聽し以て天下に命せんと欲す汝宜く軍艦を造り之が備をなすべしと三年五月信長に長篠に從ふ六月信長家人を薦擧して叙爵す是の時に當り國郡を統領する未だ甚だ多からず功に酬るの由なし故に四道諸州を徇へ大に功臣を封ぜんと欲し鎭四の著姓を取り功臣をして之を稱せしむ長秀に族惟任を稱せしめ姓を平氏と改む(家譜藩翰譜に或は天正二年十二月に作る)奏して越前守に任ず固辭して曰く五郎左衛門の稱、臣ば則ち終りを全うするを得ずと乃ち命じて急に舟を行り又た人を海津に驅せ兵を分て加援す又た書を遣り濤に於て足れりとす請ふ辭せんと信長弑に遇ふ後本氏に復す四年正月信長安土に城く長秀其の竣功の速なるを賞し驟馬古瓮を賜ふ四月内城を造り天守閣を起す十月成る其の廣大精密振古比なし信長慢び若狹十萬石を以て長秀を封じ小濱城に治せしむ國人來降し服さざる者は皆走る五年長濱城に入る六年四月光秀と與に荒木村重を討て吉城を攻め之を拔く七年十一月長秀及び瀧川一益蜂屋頼隆荒木村重の子旗雄撃百二十二人を捕へ(命を受けて盡く之れを尾崎七本松に磔殺す十五月織田信孝將と爲り南海を伐つ長秀及び頼隆中川清秀等師一萬を率ゐ軍艦を雛波に艤し風を峽て將さに發せんとす六月信長長秀に命じ一尚僧徒を伐たしむ長秀吉と謀り坂本城に徙り將に北軍を襲はんとし兵三千を分ち鹽津海津に伏す四月襲獄連寨既に危きを聞き巡視せんと欲し坂井興右衛門江口三郎右衛門等に猥酒を設けしめ舸に乘じ湖に浮ぶ途に銃響を聞き舟を岸に著けしむ興右衛門曰く何も驚に悖り期に違ふは武夫の爲ざる所之を犯せば則ち終りを全うするを得ずと乃ち命じて急に舟を行り又た人を海津に驅せ兵を分て加援す又た書を遣り濤に於て足れりとす請ふ辭せんと信長弑に遇ふ後本氏に復す四年正月信長安土に城く長秀其の竣功の速なるを賞し驟馬古瓮を賜ふ四月内城を造り天守閣を起す十月成る其の廣大精密振古比なし信長慢び若狹十萬石を以て長秀を封じ小濱城に治せしむ國人來降し服さざる者は皆走る五年長濱城に入る六年四月光秀と與に荒木村重を討て吉城を攻め之を拔く七年十一月長秀及び瀧川一益蜂屋頼隆荒木村重の子旗雄撃百二十二人を捕へ(命を受けて盡く之れを尾崎七本松に磔殺す十五月織田信孝將と爲り南海を伐つ長秀及び頼隆中川清秀等師一萬を率ゐ軍艦を雛波に艤し風を峽て將さに發せんとす六月信長長秀に命じ一尚僧徒を伐たしむ長秀吉と謀り坂本城に徙り將に北軍を襲はんとし兵三千を分ち鹽津海津に伏す四月襲獄連寨既に危きを聞き巡視せんと欲し坂井興右衛門江口三郎右衛門等に猥酒を設けしめ舸に乘じ湖に浮ぶ途に銃響を聞き舟を岸に著けしむ興右衛門曰く何も驚に悖り期に違ふは武夫の爲ざる所之を犯せば則ち終りを全うするを得ずと乃ち命じて急に舟を行り又た人を海津に驅せ兵を分て加援す又た書を遣り濤に於て足れりとす請ふ辭せんと信長弑に遇ふ後本氏に復す四年正月信長安土に城く長秀其の竣功の速なるを賞し驟馬古瓮を賜ふ四月内城を造り天守閣を起す十月成る其の廣大精密振古比なし信長慢び若狹十萬石を以て長秀を封じ小濱城に治せしむ國人來降し服さざる者は皆走る五年長濱城に入る六年四月光秀と與に荒木村重を討て吉城を攻め之を拔く七年十一月長秀及び瀧川一益蜂屋頼隆荒木村重の子旗雄撃百二十二人を捕へ(命を受けて盡く之れを尾崎七本松に磔殺す十五月織田信孝將と爲り南海を伐つ長秀及び頼隆中川清秀等師一萬を率ゐ軍艦を雛波に艤し風を峽て將さに發せんとす六月信長長秀に命じ一尚僧徒を伐たしむ長秀吉と謀り坂本城に徙り將に北軍を襲はんとし兵三千を分ち鹽津海津に伏す四月襲獄連寨既に危きを聞き巡視せんと

門守と稱す次は長次左近と稱す(野史、檀日本史)

二八バンクワン　丹羽盤桓　名は昌宇は子勤嘉六と稱す尾張の儒者にして天保辛丑歿す歷代事實の著あり(諸家著述目錄)

二八ミツシゲ　丹羽光重　長重の子なり左京大夫と稱し從五位下に叙せられ封を襲て二本松城に居る光重片桐貞昌に茶道を學び牛古鹿と號す石州流の茶人なり(茶人系傳全集、野史)

二八マサヲ　丹羽正雄　勤王家なり紫と江州馬淵村の人にして醫を業とし初め佐々肇と稱し〻が後京都に來り三條家諸大夫丹羽豐前守正康の養子と爲り三條實美殉に仕へて出雲守に任ぜらる主を輔翼して力を國事に盡し叡畫の功顧る多きに居る文久三年公に從ひ長州に入りまた事を以て阿波に使す元治元年春七殉寃罪歎訴の爲め京都に上り際奏野宮定功に依り奏する所あらんとせしに伏見に至り暮吏の爲めに捕へられ京都六角の獄に投ぜられその年七月二十日遂に斬らる時に年三十一明治二十四年十二月朝廷其忠死を憫み特に從四位を贈らる(甲子殉難士傳)

二八モウサイ　丹羽蒙齋　會津の士なり名は能教字は子實織之丞と稱し蒙齋は其の號、本姓は阪上、系阪上田村麿に出づ後尾州丹羽郡に住する者あり因て氏とす蒙齋五世の祖名は宗貞勤右衛門と稱す寛永中贄を會津藩に委す考名は能衛勘解由と稱す妣諏訪氏蒙齋生れて五歳恃を喪ひ十歳怙を喪ひ戟々皷するなけて外樣組付と爲る寛政九年家老組頭と爲る文化二年四月用人頭取を兼れ四年蝦夷地方洋警あり官會津藩及び仙臺藩に命じ軍を發して北陸を皮せしむ藩蒙齋に命じて諸隊を監せしむ五年正月會津軍を發す九月歸る賞卒隊伍進退整肅にして毫も遺策なし藩主其の功勞を賞し秩百石を加ふ十二月に至り官賞賜あり七年三月官會津藩及び白川藩に命じて邊海に備へしむ藩蒙齋に命じて邊海の要害を巡視せしむ六月再び用人頭取と爲り兼軍事奉行故の如し相州觀音崎を皮し專ら諸務を督す文政二年家老と爲り相州の備禦を免す官蒙齋の功を賞し物を賜ふ八年特旨を以て職を辭する數四允されず眷遇特に優に細務を減省し且つ命じて屑與議門に至るを許す文政十二年始めて致仕す其の久しく國事に勞するを以て秩百石を加へ嗣子に命じて大目付格と爲す蒙齋と異數なり天保十四年十二月朔卒す明和三年に生れ年を得ること七十八城東丈窪山に葬る紀記して退素齋社と號す(事實文編)

二八モモマル　丹羽桃丸　江戸の和學者にして多田義俊の門人也蜻蛉の道草、旅の釉日記等の著あり(漢學者著述目錄)

二八ヒオキ　シウヘイ　新興周平　書家なり本姓は牧氏名は世儀、夏吾と號す蒙所の門人寶暦十年七月十一日大阪に歿す(浪花名家墓所集、諸家人志)

二八ヒオキ　モウシヨ　新興蒙所　書家なり名は光鏡字は中連俗稱は文治、積小館と稱す肥前蓮池の人長じて本藩に仕へ浪花に住す一時に鳴る著す處に積小館書則、草書物志)

二八ヒジマ　ジヤウ　新島襄　上野國菁安中藩新島民治の長男にして天保十四年一月十四日東京神田小川町一橋外板倉藩邸の下にあり六歳にして習字を始め八歳にして書學を學ぶ此の頃より漢籍を修む十四歳にして藩の句讀師となる十六歳にして江戸海軍傳習所に入り杉田玄端に就て蘭學を始め好んで三角側量術を學ぶ十八歳に中玉島に到る此の時航海術を以て幕府より十五人扶持にて召し出さる辭して受けず二十一歳の時本宗板倉周防守の持船快風丸に托して沿海測量に從事し箱館に到り外人に就て英語を學ぶ元治元年六月十四日米國商船に搭じて支那沿岸の海港を經て米國に到るボストン府の紳商ハーザーの知る所となり中學より黑遷して アーモスト大學に到り更にアンドヴァア神學校に入りて神學を修めピーデーの學位を受く明治四年米國在學中岩倉全權大使に隨ひ歐洲諸國を遊歷し各國の教育文物制度國風民俗を觀察せり而して明治五年米國碧山州に於て基本成る明治七年十二月歸朝す八年十一月山本覺馬と結社し地を京都に卜し學舍を創立す是れ實に同志社の濫觴なり爾來同志社の事業著々擴張し同志社教育の名聲漸くにして世間に顯はれ遂に進んで同志社大學設立の計畫に着手するに至れり而して其の旨意書を頒布す時に明治十六年也十七年四月六日再び歐米漫遊の途に就く十八年十二月歸朝す漫遊中初めて心臓の大患に罹り此よりして身體漸く衰弱せり明治二十二年八月ゲーモスト大學よりエルエルデイの學位を贈與せらる明治七年歸朝前は重もに苦學研精を事とし歸朝後は民間に在りて專ら教育と傳道に全力を擧げ殊に十九年以來は同志社大學設立の爲めに其の病軀を顧ち盡力す明治二十三年一月相州大磯の客地に歿す年四十七

二八ヒジマ　ケンスケ　新島源介　陸軍少兵少尉なり東京市小石川區小日向臺町新島善元の三男にして明治卅五年帝國大學文科大學卒業して文學士となり尋で一年志願兵として歩兵第一聯隊に入營し滿期除隊後豫備少尉となる卅七八年日露戰役起るに及び召集せられて原隊に復し出征して旅順攻圍軍に加はる卅七年十月十日海鼠山攻擊に際し寺兒溝西北方高地の敵情監視中敵彈に中り二曲家屯第一師團第四野戰病院に收容して療養中同月二十日遂に死去す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

二八ヒタベ　シンウウ　新田部親王　天武帝の皇子母は皇夫人五百重娘なり文武帝の時親王となり二品に叙せらる養老三年詔あり舍人親王と皇太子を輔佐す聖武帝の時一品に進み議内大總官となる七年九月薨ず(大日本史)

二八ヒタベヒメ　新田部皇女　天武帝の妃なり天智帝の女、天武帝納れて妃となす舍人親王を生む文武帝三年九月薨ず(大日本史)

二八ハタ　エン　新畑延　陸軍歩兵少尉なり東京府出身にして明治二十七八年日清戰役に於て歩兵第七聯隊第五中隊附として出征中病に罹り廿八年二月七日海城舍營病院に於て死去す

二八ヒマツ　タダヨシ　新松忠義　和學者なり守柱翁と號す一名忠閲跡部光海の門人なり神風重波草、神風惡草等の著あり(和學者著述目錄)

二八ヒミ　ムニサイ　新兒無二齋　播磨の

人なり太郎左衛門と稱す擊劍を善くして天眞流に進す後ち塚原卜傳の門に入り大に其の術に熟達す是より先き足利將軍家の師範吉岡氏は扶桑第一兵衛者の號を幕府に受け義昭の時無二齋を營中に召し吉尚を優劣を決せしめ試合限るに三度を以てす無二齋三度の勝を得因て日下無雙兵法衛者の美號を鳴はる同門に佐々木巖流と云ふ者あり其の技を妬みて遂に之を殺す後無二齋の子宮本無三四巖流を斃して其の讎を報ず（實事譚）

ニヒロ　グンパチ　新納軍八　薩摩の人なり陸軍大尉となり鹿兒島に在任す私學校黨俄かに起て火藥を奪ふを見て大に驚き馳て大山綱良に告ぐ綱良日く予多事請ふ之を中島健彦に謀れと又健彦の所に至る其勢ひ說く可らざるを以て遂に能め歸る後西鄕隆盛等大軍を率て墳を出るの報頻に至る是に於て意を決し之に應じ川上親平等を召し共に集成館に在て日夜銃器彈丸を鑄造し以て熊本に致す數月にして鋒鏑皆盡く亦火工を率て入吉に入り尋で延岡宮崎に移る至る處兵卒を殺し人家貯ふる所の農具或は炊器を奪ひ皆之を鎔解して以て彈丸となす既にして戰益々利あらず諸將と共に城山に入り薩盛以下皆死するを見て終に自刃すと云ふ（西南勇士傳）

ニヒロ　タダモト　新納忠元　島津義久の臣なり武藏守と稱し後ち出齋と號す又爲舟と號する は義久の其の功を賞して賜ふ所なり島津時久の裔にして日向國新納の地を領す因て氏と爲す幼時太平記を讀み島津四郎降參の條に至り大に感ずる所あり更に武事に勵精す長じて義久義弘家久に仕へて甚だ功勳あり英武驍邁人に超え鬼武藏と稱せらる天正十五年秀吉海陸の兵を帥ひて島津氏を征するや忠元大口城に在り義久賞を獻じて和を請ふに當り忠元猶獨り孤城を死守して降らず義久苦諭すること再三に至りて初めて下る乃ち知學寺に投じ祝髮して出齋と號す往て秀吉に見ゆ秀吉大に其名節を愛し薙刀を賜ひ且つ酒を賜ふ忠元形容魁偉聲彌甚だ美なり酒を呑まんとする折り髭髯かに鳴る細川幽齋亦席上にあり嘗て忠元の雅懷を知る即ち詠じて曰く「口のあたりに鈴虫ぞ鳴く」忠元顧を擡げ靜かに髮を撫でゝ「頓髮をチンチロリンとひねりあげ」と高吟して酒を飲み終りしと云ふ忠元驍勇を以て著はると雖も性又書史を嗜み和歌を善くす鞍馬の間猶ほ古今集を懷にし大龜の光を讀みたりと傳ふ關原の敗後薩の軍氣沮喪したるに乘じ加藤清正等將に來り攻んとすと流言す忠元即ち俗謠を作りて若き男子等に謠はしめ先づ肥後勢の氣魄を奪ふと云ふ其謠に曰く「肥後の加藤が來るならば煙草着に玉會釋玉は何玉錆玉それでも聽かずに來るならば首に刀を引出物」墓は鎮祥雲寺の跡にあり法諡を誓翁良英庵主と云ふ安政六年三月朔忠元大明神の宣下あり（加藤雄吉氏寄）

ニフ　イヘタカ　壬生宇多麻呂　天足彦國押命の後にして大春日と祖を同くす天平九年遣新羅使叙し外從五位上に進み右京亮と爲る勝寶二年但馬守に任ぜられ六年玄蕃頭と爲る宇多磨呂和歌を善くして萬葉作者に列し秀歌頗る世に顯はる（萬葉集作者履歷）

ニフ　ウダマロ　壬生家陸「フヂハライヘ大判事となり天平神護元年正月從五位下に進み右京亮と爲る勝寶二年但馬守に任ぜられ六年玄蕃頭と爲る宇多磨呂和歌を善くして萬葉作者に列し秀歌頗る世に顯はる（萬葉集作者履歷）

ニフ　タダミネ　壬生忠岑　從五位下安綱の子なり和歌を善くす初め右近衛大將藤原定國の隨身と爲る定國晉て酒を被り醉に乘じて左大臣藤原時平に過ぎる夜已に深し時平怪み問ふ何處よりか返る忠岑烟霞を執りて階下に跪き歌を以て致辭して曰く「鶴の渡せる橋の霜の上を夜半に踏み分け事さらにこそ」と時平甚だ悅び設酒して徹明し忠岑に物を與ふ御書所に候し左近衛番長、右衛門府生、御厨子所預、攝津大目に累歷して和歌十躰を定む集あり世に傳はる後鳥羽帝の時侍臣に問ふに古今集の秀句を以てす藤原家隆藤原定家共に忠岑の「有明のつれなく見えし別より曉ばかり憂きものはなし」の歌を擧げ集中第一と爲す（大日本史）

ニフノカミ　丹生神　雨の神岡象女神なり大和國吉野郡丹生河上に祀る二十二社の內たり白鳳四年鎭座す

ニフ　ヨシカド　壬生良門　奥州の人、累代の控綱家にして駿馬獵犬以て友と爲し騎射敗漁以て樂と爲す沙門に空昭と云ふ者あり其門の爲めに知らる謂りて曰く人身は得難く天下の大事なり三途に出て難しして入り易し子盍ぞ放逸を棄て淨業を修めざると其門乃ち殺生を止め邪事を改めて金泥を以て法經を寫し又た佛像を造りて稽首供養す又た大誓を發して曰く我れ生前に妙經千部を金書せんと乃ち日に瞳筆を絕ち數十年を歷て泥經を寫み此の間奇瑞屢〻現はる臨終の時手を洗ひ口を漱て左右に告げて曰く天女數千伎樂を作し雲に乘りて至る我彼に伴れて梵摩天に昇ると言畢りて逝く（元亨釋書）

ニヘイ　センジュン　仁平宣旬　陸軍步兵中佐なり茨城縣眞壁郡河間村の人陸軍教導團より士官三月三十日禁中の歌合に會し忠見平兼盛に配す忠見歌ひて曰く「戀すてふ我名はまだき立にけり人知れずこそ思ひそめしか」と深く以て自ら負ふ兼盛歌ひて曰く「忍ぶれど色に出にけり我戀は物や思ふと人の問ふまで」と二首皆な秀絕藤原實賴判者と爲りて優劣を決すること能はず披講するに及び帝感ず兼盛の歌を咏じ終に兼盛を以て優れりと爲す忠見大に望みを失し遂に憂を以て死す集あり世に傳ほる（大日本史）

學校に進み風に清語を研究して萬一の變に應ずるの準備を爲す卒業後隊附を命ぜられしが日清の關係漸く急なるに及び參謀本部附となりて清國視察を命ぜらる明治二十七年日清戰役起るに及び一日歸朝せしが更に出征し威海衛方面に轉戰して功あり勳六等に叙せらる戰後再び清國內地の實査に從事せしが歲餘にして歸朝す三十七年日露戰役起るに及び步兵少佐を以て第二師團步兵第十六聯隊大隊長として出征し第一軍に屬して鴨綠江戰以來每に偉功を樹て殊に十月沙河の大會戰に於ては最も勇敢なる行動を爲し仁平大隊の名を聽せしが同月十三日楊城寨附近に於て遂に戰死を遂ぐ年四十四戰功に依り中佐に昇任し勳四等功三級に叙せらる

ニヘカハ　ミツノブ　牲川充信　狩野派の畫家なり樸同と號す大阪の人畫法を鵜澤探山に及び後ち一格の新意を出だす（扶桑畫人傳）

ニホンマツ　クニウウマル　二本松國王丸　義繼の子也姓は源氏、本族島山、遠江守義純の遠孫にして世々奥州に居る義繼の高祖滿泰始めて奥州二本松に城き焉に治す因て族稱とす父義繼伊達輝宗を殺して自殺す時に國王年僅に十二歲を迎へんと欲し遂隈川岸に至る敗卒來て變を告ぐ國王悲憤し將に水を踏て赴き戰はんとす芳川寬清擊て扣へ諫て城に歸る新井盛繼扶けて事を攝し人を馳せ急を佐竹會津に告げ本宮玉井滝川の三寨を毀ち悉く兵を二本松に聚め寬清、遊佐義之、本宮右衛門及氏江新兵衛等と步騎五千を以て防ぎ守る十月十五日政宗兵一萬三千を率ゐ來り圍む城兵出て戰ふ利あらず是の夜寒風暴起し霰雪連に降り兵馬凍困す政宗兵を小濱に退く國王尋で援を會津佐竹に乞ふ佐竹義重其孤なるを憐み自ら兵二萬を將ゐ來て須賀川に抵り中村砦を攻め之を取る十一月十日政宗又た來り杉田川に陣し以て二本松に迫る寬清出戰ふ利あらずして退く是の日義重亦た政宗と人取坂に戰ふ逃に勝敗あり既にして江戶重通里見義頼其國を侵す依て義重兵を將て去り天正十四年正月國王諸老臣と議し義繼の甲戰を爲し滝川城を屠り以て軍神を祀らんと欲し遊佐義之鹿子畑義總及び盛繼寬清等と二本松に陣し進て滝川に薄り連りに砲擊す會〻敵八町目に在る者來り援け又利あらずして歸る四月政宗復來り攻む國王援を佐竹會津白州須賀川に乞ふ義重族義久等を遣り來り救ふ政宗の兵之を須賀川に遮ふ義久の先鋒逢隈川を渉り義久河上に軍し迎へ擊たんと欲す政宗戰はずして去る是月に關み糧道を絕つ城中飢困す七月三日夜小政宗二本松を圍む糧道を絕つ城中飢困す七月三日夜小館忠興國王を扶け笠を破り潛に出て〻相馬義胤に依る元を見流涕して切に乞ふ實元之が懦を責て政宗に乞宥めんとす乞ふ輝宗曰く蠢く其の惡色を卷め殊に杉田川以南の王邑を與へ且長子を來澤に質せば其の請を聽かんと義繼實元に遷り復た請て曰く願くは南北の中一面地を得て義繼意を決し防守の策を謀す新莊盛繼進みて此に於て義繼意を決し防守の策を謀す新莊盛繼進みて曰く城や敵の圍を受けば進退便ならず徒に橫死せんよりも寧ろ計て彼父子一人を擒にし城に據て禦ぎ敵の來て和を乞ふに及び亦た計を廻し如し能はざれば則ち絲に死するに如かずと是に於て義繼後事を盛繼に託し是の月六日僅に三十人（永慶軍記に百十餘人に作る）と小濱に進き伊達成實に遷り敗あり既にして江戶重通里見義頼其國を侵す依て義重兵を將て去り天正十四年正月國王諸老臣と議し義繼の甲戰を爲し滝川城を屠り以て軍神を祀らんと欲し遊佐義之鹿子畑義總及び盛繼寬清等と二本松に陣し進て滝川に薄り連りに砲擊す會〻敵八町目に在る者來り援け又利あらずして歸る四月政宗復來り攻む國王援を佐竹他數人侍坐す行て輝宗左床に倚り高鼾政景及び伊達成實の見る輝宗左床に倚り高鼾政景及び伊達成實の義繼右床に倚り其の臣鹿子畑和泉守高田內膳大機中務側に

天台戒疏を講ず絲山の學徒菩薩戒を受くる者夥し海少年の時より千手尊を奉じ居る所必ず尊像を安ず生平日課稱名三萬返延享中寶松院に住す修道の間丹青を善くす最も佛畫に妙なり又篆書に工みにして能力精超なり服月十三日城市貴賤一機家屋を掃除す且より午に至る掃擊の聲雷霆車轟此日服部南郭諸門人を携て風塵を蹴社に避く海亦臺海書山等を延て相與に名理を談じ終日歡を罄くす毎に以て例となす名けて掃塵會と曰ふ寶松院に住する十餘年寶暦辛巳の夏徴恙あり竟に六月十七日を以て西に向ひ念佛安祥して化す氣息既に絶て念珠を摺ると止まず夜半乃ち歇む年六十六（高僧傳）

ニンカウ　任口　又寶譽上人と號す伏見四岸寺第三世の住僧なり元藤堂侯の支族なり北村季吟に從ひ俳諧を善くし官律師に至る句あり曰く「花すゝき誰にあかれて炭俵」（俳林小傳）

ニンカウ　仁數　高僧なり姓氏詳ならず初め如無僧都を師とし後宗圓和尚に從て學ぶ天性穎敏にして深く法相の旨に通じ槃て台教に渉る名望社中に重し延長五年雛壇會に講主となり應辯從答として迫らず以て問者を服す承平元年勅して法務を司らしむ三年庚子禮少僧都に任じ天暦二年大僧都に轉ず法務已校此二職に任ずること數を以て勾例となす數寵を二朝に蒙り名を千里に馳す明年六月廿二日徴しく疾ありて遂に起たず年七十五數常に城西の嵯峨野に居る世人稱して嵯峨僧都といふ其法を受くる者に一乘院の定僧都あり（本朝高僧傳）

ニンカウ　仁筱　天暦十一年醍醐寺座主に補すと東南院と號す在職三年八十五歳にして卒す

ニンカウ　忍向「ゲツセウ」

ニンカウ　テンワウ　仁孝天皇　諱は惠仁、光格帝の第三子なり母は東京極院藤原氏贈内大臣經遐の女文化六年立ちて皇太子となり同十四年三月踵を受く時に年十八先帝を尊びて太上皇と曰ふ天保十二年閏正月二十七日謚を上皇に奉りて光格天皇と曰ふ嘗て宇多帝謚法を停めしより幾んど六十世是に至りて之を復す弘化三年正月崩ず在位二十九年壽四十七、三月泉涌寺に葬る廟を弘化と云ふ（野史）

ニンカク　仁覺　天台の座主也一乘房と稱す右大臣藤原顯房の三男也慶範及明快の弟子寛治七年九月十一日座主に任ぜられ康和四年三月年五十八にして金蓮に祈りて生む幼より爽俊世緇に染まず五歳にして東大寺に入り教法を習ひ奉じて戒律に精はし嘗て深山を跋渉し屢々神人に遇ひ香を添へ水を換ふ暮年愛宕山は地藏龍樹の二菩薩衆生を化導するの地にして漢土の峨嵋五台に下らざるを聞き往きて之に居し晝夜妙經を讀み六時に爺饑す寒暑を忘れ飲食を廢し遂に獅子白象等の如き種々の勝相を感ず年百二十七にして終る（元亨釋書、東國高僧傳）

ニンキョウ　仁恭　石梁と號す元の台州の人一叢の僧侶なり天性英邁にして群倫を超出す石溪月釋師を禮して觀髮戒を受く既にして四方に周遊して普く諸知識に參じ後一山國師の輪下に侍して心印を承嗣す恭梵唄に長じ嘗て靈鷲に在て衆のために悅ばる正安元年一山に從て東渡し信濃の慈雲寺に住す擅越慈壽寺を創めて之を延く筑前の聖福寺洛の建仁寺に遷る到ところ向上の餌鉾を乘て禪客に接す後興聖庵に退居す又起て相模の壽福寺に住す建武甲戌の年十二月十八日を以て化す年六十九諡を慈照慧燈禪師と賜ふ（本朝高僧傳）

ニンケン　テンワウ　仁賢天皇　名は大脚字は島郎初め億計王と稱す（原註に曰く書紀の註に天皇又大爲と名くとあり顯宗紀註に億計王又稚島郎又大石尊と名くと云へり今按ずるに大石大爲共に讃て大脚の如し島郎とは亦恐くは別稱に非るなり）履中帝の孫、父を市邊押磐と曰ふ母は荑媛顯宗帝の兄なり年四十位に即く是より先き父市邊押磐雄略帝の爲に害せられ其臣日下部使主天皇及び弘計王を奉じ難を丹波の餘社に避く既にして又播磨の赤石に往く使主事の覺はるゝを恐れて自殺す其子吾田彦隨從して去らず二皇孫倶に姓名を變じて奴となり縮見の屯倉首忍海部細目の家に在り牛馬を牧養す清寧帝二年播磨國司來目部小楯事あり天に聞て郡に至る細目置酒して之を款待す弘計天皇に謂て曰く吾二人潛匿する已に久し今當に告るに實を以てすべし或は清拔せらるゝを得んと天皇猶ほ其禍を致さんを恐れ未だ許さず弘計慨然として曰く吾れ二人は皆な皇孫なり寧ろ自ら告て害を買ふも長く人の奴となりて困辱に終る能はずと因て相ひ抱持して泣く夜深く酒醒に席中の人互に起て歌舞す兄弟燭を取りて立待す細目曰く彼れ人を先にして己を後にす藥敬退讓君子の儀ありと小楯亦自ら絃を掩し二人に命じて起て舞はしむ相讓る良久し小楯顧りに之を促す是に於て弘計衣を整て起ち歌を作りて其の系を述ぶ小楯大に驚き席を離れて再拜し即ち郡民を發し營築して假に之に處き自ら驛傳に乘り京に詣りて以聞す清寧帝大に喜び小楯に節を持し赤石に至り之を迎へしむ既に播津に至る又侍臣を遣はし青蓋車を以て迎へて宮に入る遂に天皇を立て皇太子とし弘計を皇子とす清寧帝崩ずるに及び天皇位を弘計に讓りて肯て立たず弘計亦固辭して從はず是に於て天皇の姉飯豐青皇女忍海飯豐青尊と稱し朝に臨みて政を聽く未だ治め踰えずして崩ず乃ち天皇薨後を持し弘計に授けて曰く迎立を蒙るは咸な弟の明斷に出づるなりと弘計已を得ずして位に即く是を顯宗とす乃ち天皇を以て儲君とす顯宗帝崩ず天皇乃ち位に即く在位十一年にして崩ず壽五十一（水鏡神皇正統記等並に曰く年五十と）河内埴生坂本陵に葬る初め顯宗帝の位に即く深く雄略帝の父を殺すを怨み其陵を壞らんと欲す天皇諫めて曰く雄略天下に君臨し四海欣仰す我父は皇子と雖ども人臣なり尊卑分定る禮固より君上に黷すべからず且我が兄弟富貴を極むるを得るは清寧の恭恩を蒙るに賴る雄略は即ち其父なり陵を毀て怨を報ずるは豈に倒行逆施に非ずやと顯宗帝乃ち悟る（原註に曰く按ずるに古事記に載すらく顯宗帝人を遣はし雄略帝の陵を毀たしめんと欲す天皇自ら行くを請ふ帝之を許す天皇其の所に至り少しく陵側を擊り還りて奏すらく陵毀てりと帝其の速なるを怪しみて之を問ふ天皇對ふるに其の狀を以てす帝曰く其の仇を毀て先王の仇を報んと欲す然るに何ぞ此の如きやと天皇對て曰く大泊瀬天皇は父の仇と雖ども天子たり從兄なり仇を報ずと欲して其の陵を毀たは後世必ず之を誹謗せん然ども父の仇を報ぜざる可らず故に少しく陵側を擊ちて以て之を辱しむ亦以て後世に示すに

足るべしと帝之を善とす）天皇幼にして聰敏、仁惠謙恕、在位の間東其の官に稱ひ民其業を安んず五穀豐登戶口蕃殖す遠近清平海內仁に歸す（大日本史）

ニンコウ　仁浩　高僧なり無涯と號す出羽の人歸朝す肥前の淨土、相摸の東勝、洛の建仁寺に住して鄰香を鐵庵に報ゆ延文四年正月四日を以て永源庵に寂す年六十六塔を寶明といふ（本朝高僧傳）

ニンゴ　ホウシンワウ　仁悟法親王　後土御門帝の第三皇子なり母は宮人藤原氏、本名を仁尊と曰ひ圓滿院に居る明應七年六月剃髮して僧となる十月親王となり圓城寺長吏に補せられ平等院三山檢校を兼れ永正二年十二月僧正清智に從て灌頂す五年六月二品に叙す十二年閏二月薨ず十三年二月一品を贈らる（野史）

ニンサイ　忍齋「ミヤガハニンサイ」

ニンサイ　忍齋「ミヤシゲニンサイ」

ニンサン　仁山「アシカガタカウヂ」

ニンシウ　仁秀　僧なり豫州の人姓は物部氏、學業超邁なれども操行精からず大同三年三月寂す（元享釋書）

ニンジツ　仁實　第四十五世の天台座主なり大納言藤原公實の第二子保安四年十二月二十日座主となる時に年三十二、臘二十二、四十歳未滿の人座主となる初例なり後寂場坊法印又た二位座主と稱す治山七年にして天承元年六月八日入滅す年四十一（天台座主記）

ニンシャウ　忍性　僧なり姓は大伴氏、和州磯城島の人、歳十一にして信貴山に投じ十三にして誓ひて肉を食はず十七にして東大寺の戒壇に登る延應の間南京に四律匠あり圓淨、誘賢、覺盛、叡尊是れなり忍性叡尊に欲きて當聚の學を受け兼れて覺盛の持犯を聽く建長四年同學に謂て曰く今南畿の毗尼は我が尊丈に屬す東州未だ人あらず我れ未だ得ずと雖ども願る先度を欲するのみ是れ我の志なりと乃ち常州に往き清涼院に居て律學を闡く弘長の初年相州に入り清涼寺に止る北條時賴忍性の道譽を仰慕し光泉寺を創して居らしむ武州の刺史平長時忍性の律行を欽し極樂寺を改造して之を延く忍性乃ち移居して爐んに開遮を唱ふ東方の民靡然として風に偃す忍性戒講の餘暇興禍に切なり衆緣に募りて丈六の文殊太士を造くる今の殿若寺の像是なり寛元の初め王畿の癩人萬餘を集めて食を施し一日夜八齋齊戒（關は禁なり謂ふ心は殺盜淫等の八罪を禁閉し之をして犯さざらしむるなり奏曲は「大明法敎」に見ゆ）を授く蹔し母氏の冥福を薦むるが爲めなりと奈良阪に癩者あり手足糜戾して行屍に眼むや故を以て數日食せざるとあり時に忍性四大寺に在り之を憐みて曉に宅の阪に至り癩を負ひて鄙市に置き夕に負ひて舊舍に歸る此の如くすること數歲風雨寒暑と雖ども缺かず癩者臨終に謝ひて曰く我れ必ず又た此間に生れ師の役となりて師の德に酬ひん而かも面に一瘡を留めて信となさん人呼びて癩の後身となす忍性四天王寺に詣り豐聰太子墓に詣り此より處々に療病悲田の兩院を構ふ其桑谷の療病所二十歳の間靈ゆる者四萬六千八百人死する者一萬四百五十人已にして活する者五の四に臨えたり是の擧北條時宗之を發起し忍性之を補成す故に土州大忍の起所以て其の費に充つ永仁二年數を奉じて天王寺の主務を管し俸餘を棄て悲田敬田の二院を益す此の寺の大門外に衙門あり館木宏材歳久して朽頽す忍性新意を出し以て之を新にす高さ二丈五尺堅確にして螢滑なり國人目を拭ふ嘉元年六月病み七月十二日逝く年八十八十三所、塔婆二十基、大藏經一十四藏、諸州の河橋一百八十九所（元享釋書）

ニンジュアン　仁壽庵「キタヤマジュアン」

ニンシュウ　仁秀　高僧なり、姓は物部氏伊豫の人なり、慈訓僧正に從て學ぶ學業超越興福寺に住し能く法相の敎義を說く大同三年三月某日寂す其弟子常坐して臥せず口稱般舟三昧を行ふ一時財相を感見に願安一人を出す旁の同門に正義あり大和の藥師寺に住して華嚴を講ず敎賀常に席に盈てりといふ（本朝高僧傳）

ニンジョ　ホウシンワウ「ヒロアキシンワウ」

ニンジョ　ホウシンワウ「ジンジョホウシンワウ」

ニンセイ　仁清「ノノムラニンセイ」

ニンセイ　任清　石清水八幡の別當にして法印權大僧都たり仁平元年閏四月十四日寂す（本朝世紀）

ニンセン　仁泉「ユカンジンセン」

ニンソン　ホウシンワウ　仁尊法親王

ニンチョウ　忍徵　城州淨土宗法然院の住僧なり字は信阿、自ら旁翁と號す俗姓は二見氏江戶の人、正保二年正月八日生る年甫めて九歳宿緣萌動し浄りに出家を願ふ乃ち三緣山の直傳に依止す徵天資明敏强記明曆元年傳公を禮して剃度す萬治二年傳公化を示し徵哀慟道嘉乃ち其の像を圖し奉事すること在すが如し時に萬無玄和尚淨國寺に住し大に化風を揚ぐ徵往て玄公に依りて屢々提撕を蒙る又た林岡に從ひて敎範を琢磨す妙解神に入る一日慨然として曰く昔者宗祖圓光大師年十八に至りて皇國闇梨の席を辭し黑谷に隱棲して開解立行大に弘法の志を興す我亦た齡を同くし虛しく歲月を送る慚愧少からずと冬十月笈を負ひて遊方し相州江之島に遊び辨才天の石窟に入り一七日間勇猛精進す窟を出て錫を飛し江州竹生島に至る一百日を刻して精修練行す後ち城州八幡正法寺に寓す三たび寒暑を更へて書を讀み心を養ふ尋て良野栞女に見えて神道の要を究む泉州阿彌陀寺の僧含榮請じて補處に充つ乃ち錫を振ひて往く延寶四年十月泉州淨國寺に寓し自から誓ひて入齋戒を受け更に八誓願を發し別時念佛を修して曰く一に四方を恭敬して頂刻も忘れざらん二に堅く不語を持し氣息に隨ひて念佛せん三に期限を尅定して須臾も睡らず四に和那も世の五欲を念ずるを得ざらん五に萬德の洪名を愼みて詎略せざらん六に願行を具足して一心に念佛せん七に見佛の想に住して念々相續せん八に所見の境界善は轉み惡は變せんと乃ち時日を期約し常坐して臥せず口稱般舟三昧を行ふ一時財相を感見に願安一人を出す旁の同門に正義あり大和の藥師寺に住して華嚴を講ず敎賀常に席に盈てりと雖ども又た悲田敬田の兩院を益す此の寺の大門外に衙門あり館木宏材歳久して朽頽す忍性新意を出し以て之を新にす高さ二丈五尺堅確にして螢滑なり國人目を拭ふ嘉元年六月病み七月十二日逝く年八十八十三所、塔婆二十基、大藏經一十四藏、諸州の河橋一百八十九所（元享釋書）

ニンジュアン　仁壽庵「キタヤマジュアン」

ニンシュウ　仁秀　高僧なり、姓は物部氏伊豫の人なり、慈訓僧正に從て學ぶ學業超越興福寺に住し能く法相の敎義を說く大同三年三月某日寂す其弟子常坐して臥せず口稱般舟三昧を行ふ一時財相を感見に願安一人を出す旁の同門に正義あり大和の藥師寺に住して華嚴を講ず敎賀常に席に盈てりといふ（本朝高僧傳）

ニンジョ　ホウシンワウ「ヒロアキシンワウ」

ニンジョ　ホウシンワウ「ジンジョホウシンワウ」

ニンセイ　任助法親王

ニンセイ　任助法親王　後土御門帝の第三皇子なり母は宮人藤原氏、本名を仁尊と曰ひ圓滿院に居る明應七年六月剃髮して僧となる十月親王となり圓城寺長吏に補せられ平等院三山檢校を兼れ永正二年十二月僧正清智に從て灌頂す五年六月二品に叙す十二年閏二月薨ず十三年二月一品を贈らる（野史）

じ貴隆四衆法筵に列坐せり是に於て台密禪律の麤楚蕪觀、戒山、香雲、隆長、聽中、寶光等其の教義に歸し心を四方に慕にし法雷大に震ふ元祿六年齡年四十九稍〻接衆に倦む和州四光寺玄阿を擯んで之が補席と爲す退き て影嚮庵に處す道業益〻勵む英名彌々高し一條從三位輝子大夫人道德に歸服し屢〻法要を聞く大關近衛基熙亦た招請して道を聞く尾張大納言源光友遐かに道德を仰ぎ書を致して道を問ふ元祿十六年幕府命あり法然院を陞して官寺と成す仍りて莊田山林を賜ひ永く淨厨に充つ齡自ら江戸に至り恩賜を謝す將軍綱吉齡の名を聞く久し法要を聽かんと請ふ齡乃ち法を說く語簡にして理明なり綱吉益〻信服す綱吉の母阿玉方復た請じて其の演說する所を聽く信解彌〻深し幾はくならず辭して鄰谷に還る齡衆生の頑愚化し難きを憐み陰騭錄自知錄等を鏤梓して世間に流通す齡淨土門師と交誼尤も厚し淨公其著す所の光明大師傳纂註に題して曰く纂註細看大義彰、光明禪德又重光、乾坤眼密古今寧、樹起法門一鐵梁と寶永三年春二月學者十餘人を撰みて建仁寺の高麗版本を借り北藏の經本を對校して玄家の誤を改め闕漏を增補して七年四月に至り對校圓成す是に於て齡將に大藏對校錄一百卷を撰新せんとす適〻齡惑を示す即ち自ら起つあたはざるを知り之を後昆に囑す正德元年十一月十日頭北面西高聲に念佛し齡笑して敬する所あるが如し左手を側立して胸次に當て奄然として逝く年六十七法臘五十六著はす所光明大師傳纂註の外に吉水遺響餘論、普勸念佛、無盡燈錄等あり刻して流布す

（續東國高僧傳）

ニントク　テンワウ　仁德天皇　名は大鷦鷯、應神帝の第四子なり母は仲姬皇后、天皇の生るゝや木瓜ありて殿に入る是日大臣武內宿禰亦子を生む鷦鷯彥室に入る應神帝以て祥となし武內宿禰に謂て曰く今朕の子は大臣の子と日を同うして生れ雖て瑞祥あり其れ鳥名を取りて相易て子に名け以て後葉の契となさん因て天皇に名けて大鷦鷯と曰ふ四十年正月應神帝天皇及び大山守皇子に問て曰く汝等子を愛する乎對て曰く甚だ愛すと又た問ふ長と少と孰か之を愛すると大山守曰く長子に如かず帝素より少子菟道雅郎子を愛す立て太子となさんと欲す故に悅びず天皇其の意を揣り對て曰く長者は多く嗜慾を縱既に成人となる復た疾なし少子は未だ其成な知らず故に長を之を憎むと帝大に喜び天皇に讓りて之を輔けしむ帝崩じて皇太子位を天皇に讓りて之を菟道に避く天皇名分素より定まれるを以て聽かず會〻大山守皇子謀反す天皇其の計を知り密に皇太子に告げ兵を設けて之れが備をなし遂に之を殺す皇太子固より天皇が位を踐まんとを欲す故に相讓ること三年民歸する所を知らず天皇志を執ること益〻確し皇太子其の害ふ可らざるを知り遂に自殺す天皇大に驚き雖波より馳せて菟道に至り素服哀を發し甚だ慟哭す遂に天皇の位に即き難波に都す是を高津宮と曰ふ宮室壁せず梁椽飾らず務て節儉に從て民の時を奪はず四年二月群臣に詔して曰く朕高壁に登りて以て遠く望むに炊煙城中に起らず意ふに百姓既に貧く家に炊くものなからん朕聞く古聖王の世人々詠德の聲をなし家々康哉の歌あり今朕德光に臨む茲に三年頃聲作らず炊烟轉た疎なり即ち知る三穀登らず百姓窮乏するを憂內尙ほ給せざるものあり況んや畿外の諸國をや之を思ふに三月廿一日詔して曰く今より後三歲の間悉く調役を除き百姓の苦を息めんと是に於て衣食を節し務めて無爲を事とし宮垣頹るゝも造らず茅茨壞るゝも葺かず風雨時に順ひ五穀豐穰三年に百姓殷富歡聲路に盈つ後三年天皇高臺に登り炊烟の多く起るを見て皇后に謂て曰く朕既に富めり復何なか憂へん皇后曰く今富室朽壞して暴露を免れず何なか富と謂ふ天皇曰く天の君を立つる素と百姓の爲なり故に國百姓を以て本とす百姓貧なるは即て而して君貧しき者あらず（水鏡神皇正統記に並に日本紀に見ひたり）と然れども藤原時平の天皇を詠ずる歌其の詞此と相ひ近し恐らくは後人改易して以て天皇の御製と爲す歟）九月諸國請て曰く課役並に免して既に三年を經今百姓富饒道遺てたるを拾はず家に餘儲あり然るに宮殿朽壞甚庫充たず請ふ稅調を貢して以て宮室を修理せんと聽かず十年冬十月始て調役を徵して以て宮室を造る是に於て百姓老を扶け幼を携へ先を爭ふて來り赴き材を運び貢を負ひ日夜營作す未だ幾はくならず宮室悉く成る翌年四月詔して曰く朕今是の土を視るに郊澤曠遠、田圃乏少、河水橫溢、下流駛らず霖雨に値ふ每に海潮逆上行路舟を以てす其れ宜く流を疏し海に注ぎ以て田宅を全うすべしと十月堀を宮北に穿て海に通ず戰して堀江と曰ふ又た茨田堤を築き百濟川を防ぐ十二年十月大澤を山背栗隈縣に築て以て北河を防ぐ十三年十月和泉池を築て以て田に灌ぐ民其の利を被る十三年十月和泉池を作り精野堤を築く十四年大澤を感玖に繫り石河の水を引て上鈴鹿、下鈴鹿、上豐浦、下豐浦の郡原に灌ぎ田四萬餘頃を墾す八十七年正月十六日崩ず（古事記に曰く八十三年八月十五日崩ずと）百舌鳥野陵（延喜式に曰く百舌鳥耳原中陵と云ひ）に葬る天皇幼にして聰明容貌美麗壯年に及び寬仁慈惠心を政治に專らにす溝渠を通じ堤防を作り郊原を開墾す是た以て百姓業を樂しみ海內富庶稱して聖帝とす嘗て八田皇后と暑を高臺に避け菟餓野の鹿鳴を聞きて之を愛す一夕鹿鳴かず明日猪名縣佐伯部鹿を獻じて勝に供す天皇問ふ何れの處にか之を獲たると曰く之を菟餓野に得たりと天皇皇后に謂て曰く鹿を獲るの日と獲る所の地と を聞きに蓋し朕の愛する所の者なり獲る者心なしと雖ども朕忍びざるなり彼を以て皇宮に近かしむるを欲せずと乃ち命じて佐伯部を安曇の渚田に移す天皇の末年に及び妖氣稍〻動き或は叛者あり天皇賦を輕くし飲を薄くし德を布き惠を施す是を以て風化大に行はれ二十餘年天下復事なし（大日本史）

ニントク　ミヤ　仁和寺宮「カタギヤウホウシンワウ」

ニントク　ミヤ　仁和寺宮「シヤウジンホウシンワウ」

ニントク　ミヤ　仁和寺宮「カクダウホウシンワウ」

ニントク　ミヤ　仁和寺宮「シユカクホウシンワウ」

ニントク　ミヤ　仁和寺宮「ダウホウホウシンワウ」

ニントク　ミヤ　仁和寺宮「セイカクホウシンワウ」

ニントク　ミヤ　仁和寺宮「ジヨウテウ

ニントク　ミヤ　仁和寺宮「ダウシンホウシンワウ」

ニントク　ミヤ　仁和寺宮「シユジヨホウシンワウ」

ニントク　ミヤ　仁和寺宮「クワンリウホウシンワウ」

ニントク　ミヤ　仁和寺宮「ホウニンホウシンワウ」

ニントク　ミヤ　仁和寺宮「ホウシユホウシンワウ」

ニントク　ミヤ　仁和寺宮「ソンチヤウホウシンワウ」

ニントク　ミヤ　仁和寺宮「コウジヨホウシンワウ」

ニントク　ミヤ　仁和寺宮「カクシンホウシンワウ」

ニントク　ミヤ　仁和寺宮「カクシヤウホウシンワウ」

ニントク　ミヤ　仁和寺宮「クワンシヤウホウシンワウ」

ニントク　ミヤ　仁和寺宮「カクホウホウシンワウ」

ニントク　ミヤ　仁和寺宮「シヤウエホウシンワウ」

ニントク　ミヤ　仁和寺宮「シンニンホウシンワウ」

ニントク　ミヤ　仁和寺宮「アツザネシンワウ」

ニントク　ミヤ　仁和寺宮「ニンジヨホウシンワウ」

ニントク　ミヤ　仁和寺宮「ダウエンホウシンワウ」

ニントク　ミヤ　仁和寺宮「シンシヤウホウシンワウ」

ニントク　ミヤ　仁和寺宮「ジニンホウシンワウ」

ニントク　ミヤ　仁和寺宮「シヤウジヨ

ニントクセン　ソウジャウ　忍辱山僧正「クワンベン」

ニントウ　テンワウ　仁明天皇　名は正良、嵯峨帝の第二子なり母は檀林皇后橘氏と曰ふ淳和帝の譲を受け位に即く帝性寬敏にして學を好み書を善くし兼れて音樂に通じ射藝醫術亦略〻練習し獄を緩うし窮を賑はし天下大に治る位にあること十七年壽四十一深草山の陵に葬る故に又深草帝と稱す（大日本史）

ニントウ　ホウシンワウ　仁惠法親王　後忍蘆「トベキセイ」嵯峨第十四皇子母は讃圓法眼の女大僧正となり新熊野法住寺に住す双林寺宮と稱す

ニヨイ　如意　淳和帝の第四の妃なり丹州余佐郷の人、居るに常處なく山水の間に相半す十歲にして人間咽すれども未だ妃の面を見るものなし弘仁十三年帝儲宮に在る時靈夢を得て華使を項法寺に遣はし物色して妃を得たり妃宮に入る儀容端麗にして嬪御柔順なり帝之れを敬嘆す妃性慈仁にして肉味を盤撤し好みて檀施を行ふ沐浴せざれども體垢つくことなく天香自然にして薰染を用ひず如意輪の呪を持するを日課とす妃寵榮を專らにすと雖ども志は山林に在り適〻一七日如意供を修す第七の後夜持誦の時日を閉ぢ恬然として空中に妙音あり告げて曰く播州に寶山あり如意輪摩尼峰一に武庫と號す汝盍ぞ彼に居らざると妃怪しみ喜び夜宮女二人と潛かに室を出て〻播州に赴く橘親守後從たり南河の畔に到りて舟に乘らんと欲す舟人妃嬪の莊麗なるを見て怪しみ恐れて乾を艤せず逃れ去らんと欲す舟動かず已むことを得ずして之を載す明日南宮浦に着く妃舟より下りて南宮の神祠に至る神殿戶か啓て妃と晤語す而して二女見ることを得て餘は之を知らず又た廣田神祠に至る宛も南宮の如し次日山に入る廣田神師に抵りて又た美女と爲り形を現して曰く宜く道場を立つべしと妃大に喜びて梵宇を營構す合邸の官吏及び富民等期せずして自ら來りて財を傾むけ力を戮はす妃及び二女是に於て如意輪阿羅尼を誦して晝夜間斷なし妃宮を出て後ち帝之を尋ぬるに得ず便ち尙書右丞眞王に敕して嚴しく搜索を加ふ眞王山に入りて帝意を宣ぶ妃眞王に語りて曰く妾宮掖に侍して より風に山野を志す而して今ま幸ひに素情を遂ぐ豈に何ぞ贅螢に駕することなんや又た帝頃ごろ如意輪に歸す妾亦た此の地に此の法を修せば多く願情に乖かざるなりと眞王宮に還りて奏す帝憮然たり妃宮に在る時寵恩比ひなく此に過ると雖ども葬りに存問を賜ふ諸后妬忌を懷て山房を燒かんと謀る帝此の事を知り眞王に敕し伴りて山下の茆屋を燒かしむ后遙かに煙を見て以爲らく眞房を燒くと卒心乃ち止む今其の燒地を俗に燒寺と曰ふ八年十月妃自ら髮を截ち三分と爲し一を大悲の像に獻じ一を宮中に奉じ一を戒師空海に施し如意と法名す承和二年正月帝山中に幸す如意、御に對して演說す皇情大に悅ぶ三月二十日五更の時如意南方に向ひて跌坐し如意輪の呪を誦して化す年三十三（元亨釋書）

ニヨイツ　如一　大中大夫、和眞綱の女なり淳和帝の次妃如意に事ふ天長五年二月十八日妃と共に宮を出て〻如意峰に赴き髮を剃りて如一と法名し持誦甚だ勤む語は如意の傳に詳なり（元亨釋書）

ニヨイツ　如一　豐前慶澤山の住僧なり字は即非、支那國福州福清縣林氏の子也其の先は宋の虞齋先生の裔に出づ父諱は英母は方氏敕世大士に禱り孕むあり將に分娩せんとす夢に一朶の白蓮を授ると感じて生む如一幼にして穎敏書を習て輒ち誦す年甫て十三父を喪ふ一日目連救母の因緣を聞き嘆じて曰く身を立て名を揚ぐるは特に世間の孝のみ爲めで出世して徧く恩有を賞るに若かんや乎と遂に母と同じく素を茹ひ出塵の志を發し十五にして密雲和尙に黃檗に參ず後ち本縣龍山寺の四來瀛公に投して剃髮す時に年十八なり二十にして進具す崇禎十年隱元禪師の繼て黃檗に主たるに値て菩薩戒を受るを得たり一幼より母に事へて孝を以て聞ゆ其の母老ゆるを以て嶺を出るに忍びず受業師書山に隨ひて管て聲梵を習ふと二載一時游方す首め長慶石雨禪師に抵りて入路の要を問ふ雨示すに狗子無佛の話を以てす一單々に推究す三七日夜目睡を交へず心膂痛を發し茫として入る所なし屢〻啓發か蒙りて昏散稍〻退く夏滿ちて徧く朝宗、萬如、永覺、歷信の諸大宗匠に參ず至る所留りて請益し已まず歎て山庵を卜して一味に坐

夏す自ら謂らく歡喜の處を得たりと一の書簡あり一に諭して曰く師兄今誰にか依止せんと欲す荷も大機用を發するを要せば須からく黄檗に參じて始て此を得べしと是に於て一再び隱元禪師に參じ遂に大に悟了する所あり元命じて書記となす清暦順治四年母の病を聞き即ち王融城に皈寧す母喜びて曰く願くは子他日我を度すること當に日蓮の如くなるべしと明春母痢危篤なり翹て湯藥に侍し默して佛天に禱る自ら胃を刳て而して進む母の病び立ところに癒ゆ是の冬堂司に充つ七年臘月三十日後山火發して林木悉く燒く一衆と同じく之を救ふ適〻逆風燈を返して回避するに處なし遂に坑葬中に落ち舁て一關の活火となり頭面手足傷損すれども知らず僧智圓等後より來りて急に呼び一を扶けて引き出す一、機に當りて豁然大悟す明年正月丈室に侍す元命じて臨濟の三玄趙州狗子の二則を頌せしむ一聲に應じて頌出す其の語流るゝ如し元曰く今日汝を瞞するを得ず と夏鍋を雪峰の崇聖寺に移すも敢て師位を以て自から居らず愈〻自ら韜晦す頭陀を以て生となす九年春一月母疾無くして終る年八十、一復た喪に走る事畢りて後元の召書に接し將に海に航せんとし寧德縣に至り路通じ難きを以て天台に上り石梁を渡り徧く名山に遊び知識に見ゆると三十餘員各機語あり宋後再び姑蘇に返りて覺隱和尚を虞山に省覲す十四年二月東航して長崎に到る時に本朝の明暦三年なり王何、林魏の諸公請じて崇福寺に住せしむ寛文三年隱元を新黄檗に省す路豐前を經開善寺に客たり小倉侯接待法を問ひ拜送して別る既に檗山に上る元命じて竹林精舍に居らしむ冬末庵と兩坐に握ぐらる是の時元四海の禪流を攝す時に開戒に値ふ一之が教授師たり明年秋九月黄檗を辭し將に古雪峰に回らんとす舟豐前の界に次る小倉侯時に迎へて金栗園に館せしむ繼て福榮禪寺を立て請ひて開山第一祖となす住職四年大に化權を振ふ八年秋長崎洞公を擧げて補處となし自ら長崎崇福寺に退隱す十年秋微疾を示す明春二月疾再び發す五月六日親しく遺囑并に規條六則を書す二十日正午起坐香牛炷の間に泊然として逝す年五十六、法臘三十九、日本に寓する十五年、嗣法柏巖、節千、呆安等の五人を出だす著はす所全錄二十五卷并に佛祖道影贊あり尾州の東輪、豫州の千秋、播州の雪峰皆な之が開祖となる（高僧傳）

ニヨイエン　如惠　如意園「ノノヂチタカマサ」

ニヨキク　如寄　讀人なり櫻屋と號す又た一翁宗藝の號あり本明人、歸化して畫法を雪舟に學ぶ神農鏡傳及び彩色人丸の像を畫く又た畫中贊詩を題する者あり多くは明人なり（本朝畫史、扶桑畫人傳）

ニヨクワク　如蠖　高僧なり名は良雄字は浩然、別號穆如、俗氏橘口、薩摩川内縣城の人世々藩の望族たり如蠖幼より浮屠を喜み年甫て九歲自ら興全寺に投じて戒を受け祝髮す既に長じて頗る懸解あり又た臨池を好み童其昌を慕ふ嘗て其金剛經の眞蹟を得之を學びて得る所あり興全寺は洛の智積院の法藉に係る故に如蠖洛に在るを數年諸名緇と互に往來し暇あれば臨昌よりして米元章に遡り益〻得る所ありと云ふ文化丙寅出でゝ下毛出流山に住し鍋を留むること凡六年去りて四方に流寓す道を修むるの餘惟筆翰を以て娛とす性恬澹寡慾、敝衣非食敢て厭はず人と交る崖岸を設けず薩侯雅に之を重んじ室を作りて棲遲の處とせんと欲す然れども辭して受けず文化十二年上毛に遊び病みて逝く年七十（續近世叢語）

ニヨケイ　如圭　何れの人なるを知らず周文の畫法を學びて善く山水を畫けり（扶桑畫人傳）

ニヨゲン　如元　太山と號す筑紫の人なり其の氏を遺す雲巒にして僧となり筑紫を出で諸名宿に歷參し一語俄に悟背す山之を可とす法兄通幻の聖興寺を加州に闢くや元其の席を禮て住持す後ち能州の著遂あり（和讃考）

ニヨセツ　如雪（一に如拙に作る）有名の畫僧なり本と明人、應永中九州に來る後京都に出でゝ畫を明兆に學び終に妙手に至る尤山水人物花鳥に長ず其の畫く所宋の馬遠夏珪牧溪玉澗及び元の顏輝に似たり本邦古來畫を能くする者未だ能く宋元の風を學びたるものなし之を學びて大に其の法を得たるは如雪を以て始とす前に祥啓明兆ありて漢畫を唱ふと雖も佛畫を主とするのみ故に周文以後雪舟狩野の徒其の畫風を傳へて漢畫を稱するは皆如雪の賚なり故を以て巨勢春日土佐井に其の支派を除くの外後世本朝の畫人如雪の流を遡るゝものなし京都相國寺中亂芳軒に住す歿年及び年齡詳かならず（本朝畫史、扶桑畫人傳、扶桑畫工記）

ニヨゼヨウ　如是翁「ヨギノシヤウミンサイ」

ニヨゼヨウ　如是翁「ブンガン」

ニヨチク　如竹「ジヨチク」

ニヨヂユウヰン　ニフダウ　如住院入道「フヂハラミチアリ」

ニヨホウ　如寶　唐の僧なり鑑眞と俱に我邦に來る戒行潔白なり聖武帝之を貴び寵遇甚だ渥し延暦二十三年正月奏して律師を招提寺に開く弘仁五年正月化す（元亨釋書）

ニヨホウジユヰン　クワンパク　如法壽院關白「フヂハラマサツグ」

ニヨム　如無　中納言藤原山蔭の子見たりし時父四國の國司となる任滿ちて學家船に乘じて京に歸る其海上にあるや兒會〻魁に遊戲し誤りて水に落つ怒にして龜あり兒を負ひて出づ母抱きて之を擊ぐ長ずるに及び聰明絕倫父母相携て元興寺に到り明詮僧正に投じて其因緣を語く即ち爲に削髮して如無と名く學業忽ち通ず法相の秘奥を究む三會の講を歷て延喜十六年少僧都に任ず承平元年大僧都に轉ず延長六年法務を司る公卿の子弟にして僧綱の位に入りたるものは遍照以後無を以て始となす天慶元年八月十日寂す年七十二（本朝高僧傳）

ニヨライニ　如來尼　醫を善くす蚘蟲を治する以て聞ゆ藤原定宗の子病む尼之を療す蚘下りて癒ゆ（島國名醫傳）

ニヨエン　如圓　淳和帝の次妃（如意に仕へ後ち妃に如意峰に從髮を剃りて持誦甚だ勤む語は詳かに如意の傳に在り（元亨釋書）

ニラクケン　二樂軒「アスカヰマサヤス」

ニリウ　二柳　大阪の俳人なり桃居の門に入り鷺堂の號を繼ぐ又俳禪道人と號す享和元年十二月廿八日歿す

ニリウアン　タウキヨ　二柳庵桃居　大阪の俳人なり（或は曰く加賀の人）桃夭及び希因の門人三四坊又不二庵と號す享和三年三月二十八日歿す年八十（俳家歿故年表）

ニレ　カゲカズ　仁禮景一　海軍少佐なり薩士海軍中將子爵仁禮景範の長子にして夙に海軍軍人たらんと欲し明治十九年米國アナポリス海軍兵學校に入り卒業後歸朝して海軍小尉に任ぜられ二十七八年日清戰役には中尉を以て扶桑艦に乘組み戰役中大尉に進み後橫須賀海兵團の分隊長となり三十三年十一月少佐に昇任し後和瀨盛分隊長に補せらる三十七年日露戰役起るに及び前職を以て從軍中同年五月十五日旅順附近に於て初瀨敵の機械水雷に觸り沈沒の際戰死す戰功に依り勳四等功四級に叙せらる（海軍人名辭書、古今人物評論）

ニワウ　ヂウベエ　二王重兵衛　江戸麹町に住し俠客なり以て其の名都下に鳴る晩年に及て徒跣八兵衛が鰹庄三を殺すの事に坐して獄に下り後其の首に依りて放免せらる即日病みて暴かに死す（本朝俠客傳）

ニワウ　ニダイフ　二王（仁王）太夫　力士なり寛永中の人にして膂力測るべからず此時夢の市郎兵衛は以て鳴る其原秀郷に出づ昭遍嗣として城主となり天正の末佐竹氏と兵を構へて利あらず走りて上杉氏に依り氏を額田と改む昭遍丹青を好み尤も巧みに鵜を畫く今に至りて國人稱して額田の鳴き鵜と云ふ元和の末本國に歸り寛永七年歿す（常州古老の說、鑑定便覽、續本朝畫史）

ニワウ　二王　亦仁王に作る周防吉敷郡吉敷の人なり能く十三東の矢を射る瓊浦の役知盛命じて和田義盛を射せしむ中らずして從騎を斃す義經命じて浸利義遠を射せしむ親清の胸に當りて死す（平家物語）

ニヰ　チカキヨ　新井親清　紀四郎と稱す伊豫の人なり能く十三東の矢を射る瓊浦の役知盛命じて和田義盛を射せしむ中らずして從騎を斃す義經命じて浸利義遠を射せしむ親清の胸に當りて死す（平家物語）

ニヰノ　ザヌ　二位尼「タヒラトクコ」

ニヰノ　アマ　二位座主「ニンジツ」

ヌ之部

ヌカコ　糠子　欽明帝の妃なり春日臣抵臣の女、欽明帝二年三月宮に入り春日山田皇女、橘廐呂皇子を生む（大日本史）

ヌカダ　アキミチ　額田昭道　彦三郎と稱す常州額田の城主小野崎下野守篤通の子なり其先は藤原秀郷に出づ昭遍嗣として城主となり天正の末佐竹氏と兵を構へて利あらず走りて上杉氏に依り氏を額田と改む昭遍丹青を好み尤も巧みに鵜を畫く今に至りて國人稱して額田の鳴き鵜と云ふ元和の末本國に歸り寛永七年歿す（常州古老の說、鑑定便覽、續本朝畫史）

ヌカダ　イラヒメ　額田媛　一に鏡王女と曰ふ（鏡王の女とするは誤なるべし）大和平群郡大島嶺の傍に住す弘文帝の妃となりて嵩城皇子を生み後天武天皇の妃となりて十市皇女を生めり天智帝の齊明帝に從て伊豫に行くの日妃亦幸に從ひ終に天智帝に逃ぜり天智崩ずるの後再び天武と配す天武崩ずるの後幾くもなく薨ず詞藻あり萬葉集に其の歌多し（萬葉集）

ヌカタベノ　ミコ　額田部皇子「スウシユンテンワウ」

ヌキガハ　貫川　御靈社の女巫なり京極院（魃び遁走して奥州に到る女元と世情に薄く懸日寺の側に庵を結びて寡居す一日病を受けて氣絕す地藏菩薩形を現じて曰く人身受け難く佛教遭ひ難し一身精進して身命を惜しむ勿れと女聞き擧りて喜悲すと雖も即ち如藏と法名し心に地藏號を持す世地藏尼と稱す年八十餘端坐して滅す（元亨釋書）

ニヨサン　如珊　九峰と號す一に湖海と號す眞言禪師に歎て立旨に遊び初め越前永平寺に出世し後ち諸寺に歷主す丹州の太守菅沼氏の聘を上州に建つるに及び珊其の主となる居ること數載にして豫州全久寺に遁歸す（洞上聯燈錄）

ニヨジツ　如實「タヒラマサコ」

ニヨジツ　如實　詩僧なり京都普尊寺の住持たり享保五年七月廿四日寂す

ニヨシン　如信　慈信上人の子にして親鸞上人の嗣となる名は實忠號て畫を善くす正安二年月四日寂す年六十二（島國名畫拾遺）

ニヨシユン　如春　京都建仁寺の僧早識にして圓頂し徧く師席に遊び明悟を以て志となす後東明の宮に造る明命じて侍司に居らしむ淘汰年あり旨訣を受て正和中同志と海に航して支那に往き大に佛道を講ず後ち歸て法を建仁に開き又た移りて建長に據る（洞上聯燈錄）

ニヨゼ　如是「クワクテイ」

ニヨゼアン　如是庵「サイジユン」

ニヨゼクワン　如是觀　薩摩の僧にして出羽に住す宗學の餘國語に精しく文政九年和讃考の書を著せり其他志良傳八葉、嘉壽之可々奈曾、冠おさへ等の著あり

山帝中宮藤原皓子）の雜仕となる亀山帝位に在る時屢召して之を幸す一皇女を生む（大日本史）

ヌキナ　カイウン　貫名海雲　書家なり海屋の姪その養子となる後加藤と改む右近後與三郎と稱す明治初年の人

ヌキナ　カイヲク　貫名海屋　著名の書家なり名は愈字は子善又君茂、海屋は其の號、晩に痣翁と號す通稱は泰次郎阿波の人京都に住す儒を以て業とし傍ら書を嗜みて善く山水を畫けり所謂る文人畫にして雅朴な旨とす初め其舅某に從ひ狩野家著色の畫を學ぶ後錢穀が山水帖を見て大に喜び翻然其風を變ず其の名噴々たり近年其遺蹟賞翫するもの日に多し文久三年五月六日歿す年八十六（扶桑畫人傳）

ヌキナ　マスジラウ　貫名增次郎　陸軍歩兵中尉なり北海道出身にして明治三十七八年日露戰役に際し躍備役より召集せられ第七師團歩兵第二十六聯隊附として從軍中三十七年十一月廿日旅順要塞二〇三高地に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ヌク井　アラタ　温井新　陸軍歩兵大尉なり山形縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て第二師團歩兵第二十九聯隊附として從軍中廿七年八月二十六日清國遼京省荘子溝北方高地に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ヌケギ　フトクビ　抜氣太首　天平寶龜の間和歌を善くするを以て名あり詠歌は戰せて萬葉集に在り（萬葉集作者履歴）

ヌシモリ　主守　豐後了戒派の刀匠にして能定の子若くは門人なり應安比の人或は寛正比の人と云（本朝鍛冶考、古今鍛冶備考）

ヌナカクラ　フトタマシキノ　テンワウ　淳中倉太珠敷天皇「ビタツテンワウ」　淳名底仲媛　安寧帝の后なり一の名は淳名蹈鞴、事代主命の後、鴨王の女息石耳命、懿德帝、磯城津彦命を生む安寧帝三月立て、皇后と爲す（大日本史）

ヌノカミ　ケウイチ　布上堯一　海軍大軍醫なり佐賀縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て軍艦三笠に乘組み戰役に從事中廿八年九月十一日本艦の火災に際し彈藥庫爆發に因り死去す戰功に依り勳五等功五級に叙せらる

ヌバタニイリヒメ　淳葉田瓊入媛　垂仁帝の妃なり丹波道主王の女、日葉酢媛皇后の妹、垂仁帝狹穗姫皇后の言に因り十五年二月日葉酢媛皇后と共に召して宮に入れ妃と爲す鐸石別命、譽香足姫命を生む（大日本史）

ヌマ　コレン　沼古濂　大阪の漢學者なり名は進字は文進甘白と稱す觀花小說、活精錄等の著あり（諸家著述目錄）

ヌマジリ　リウガイ　沼尻龍涯　漢學者なり字は其章修平と號す常陸の人書を細井九皐に學び一家をなし習書論宜を著はす文化年間の人（虛心華記）

ヌマタ　カウセツ　沼田香雪　名は邦野秋田藩士沼田信挺の女なり文化四年四月横手城下に生る性慧敏にして學を好む幼にして詩を能くせり大筮天民横手を過り名を聞きて來り訪れ一詩を賦せしむ立ろに成る天民激賞已まず香雪の號を與ふ夫を迎へて後剪裁の傍猶學を廢せず奉公の心甚だ深く行爲往々男子を恥す勢復た振ふ來り屬する者多し景義勝に乘じて城に薄り之を攻る急なり城中内應をなす者あり書を矢に結び射て景義の將金子美濃に遺りて曰く我衆死を決して守戰す且援兵將に至らんとす君攻て城を下さんとせば恐くは曠日功を見ずして腹背敵を受けん急れ危道なり我水門を守る夜兵を潛めて來らば戰はずして降るべしと景義信ぜず美濃曰く人君に城を與ふ皇天之を與るなり君受けざれば却て不祥を被らん請ふ躊躇して時を失ふ勿れと景義曰く彼が言甚だ甘し必ず信ず可らず然れども敵樂を復せんと欲し機を得て爲さるは人傑に非ず戰は固と進て死するありて退きて生るなし子之を能くせば敢て從はざらんやと覺に門に薄る然れども皆戰殺し生還するものなし時に天正九年三月十四日なり（野史）

ヌマタ　カンスキ　沼田合翠　謠曲を以て名を知られる舊熊本藩士儒頭中老を經て家老職を勤め維新當時樂論を排して洋式樂練を採用し自ら其大隊長となれり維新前後京都に在りて勤王の爲めに盡力し藩の豪傑と交を結びたり明治十三年上京して宮内省主殿寮に奉職し十九年官を辭す爾來謠曲と釣魚圍碁とに隱れ殊に喜多流中興の撫護者として業人謠曲家の第一と稱せらるゝに至る四十一年一月三日病を以て歿す年七十四

ヌマタ　コショウ　沼田孤松　名は信挺字は勁直織部と稱し孤松は其號なり寛政三年正月出羽國横手町に生る性敏達浮花を好まず秋田藩藩校教授となる專ら經術を治め最も易學に精し中年遯世の志あり世事に關せず子弟教育を以て樂となす弟子數十百人あり老後酷だ詩を好み自らいふ余詩の富陸放翁に讓らずと孤松詩鈔世に行はる安政二年九月歿す年六十五

ヌマタ　ギラウ　沼田治郎　陸軍歩兵少佐なり德島縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て歩兵第十二聯隊附として從軍中廿七年八月八日清國盛京省大孤山に於て戰死す戰功に依り勳四等功七級に叙せらる

ヌマタ　ノブナリ　沼田信成　陸軍歩兵中尉なり福井縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て後備役より召集せられ後備第十師團歩兵第廿聯隊附として從軍中廿七年九月四日清國盛京省「チヤンチヤツイイ」にて病に罹り同廿一日潘家燈戰地定立病院に於て病死す

ヌマタ　ユキヨシ　沼田順義　字は道意樂

水堂と號す上野國群馬郡仲尾村の人なり其先邑を沼田に食む因て以て氏となす大國主命の遠裔なり故に姓を大三輪と稱す累世豪族たり父を興市と曰ふ順義功にして倚麗志氣超邁父之を奇とし教ふるに義方あり常に曰く汝宜しく名を成すべしと年甫めて十三軒岐の術を大熊松泉及び吉田平格に學ぶ年十五決然鄉を辭し熊本に赴き樂を村井椿壽に受けんと欲して大阪に抵る偶ま其殺せしを聞き更に甲斐に之き塵光寺某に就き儒術を學ひ尋で國費に入り又磯野公道に從ひ益ま醫術を究め年二十一業み駿州清水港に開き致る患ひ郡に歸り後ち武藏河越に移り醫然家を甃せり其人に接するや醋だ慈惠あり貧にして病む者あれば直に之に赴き竊に良藥を與へ（其報を受けず或は米錢を贈り或は器具を與ふ故に治を乞ふ者常に門に滿つ既にして聲となり尋で撿校に任じ江戸に來りて居を湯島に卜し三芳野城長と稱す天資羅し所夕倦まず明を失ふの後最も思を國家に盡し記性人に過ぎ一聞忘れず偶ゝ加茂眞淵の國意考及び本居宣長の直毘靈菖花等の書を讀み深く其道を罔ひ鬼を鏃ふるの衷しきを憤り乃ち級長戶の風を著し宣長を掊擊し國意考辯妄を作り眞淵を排斥す且言く二子論ずる所率れ其好む所に歸す聖を無みし道を無みし忌憚あるとなし其陋甚し辯ぜざるべけんやと其任ずる所此の如し逃齋深く其說に服し一書成る每に必ず其卷に序す嘘唏世上有眼の人多く聲にして聲目反つて能く鉅眼を具するの語あり名聲大に著はれ門徒日に進む貴豪俊髦爭ひ迎へて講を聞く撿校辭辯痛快其の說く所必ず考據あり識者之に感ず一日尾州侯の重臣竹腰某之を聰し和漢の書を講ぜしむ既にして曰く子目盲すと雖ども學和漢を兼ぬるは人の共に知る所なり請ふ我が爲めに兵書を講ぜよと撿校之を講じ一字を錯らず舉坐驚かざるなし平生神を敬し每歲村社の祭日に當れば必ず俎豆を陳し禮容を設け敬拜怠らず譬て姬路侯の聘に應じ河越を發し江戸に至る其往返驛に駕し門徒二人隨へり撿校曰く驛路神祠の在るあらば必ず我に告げよ我拜せんと欲すと一人悉く其所在を告ぐ撿校大に喜び驛を下り跪き拜す嘉永二年十二月十七日病歿す年五十八下谷正慶寺に葬る或は云く撿校級長戶の風を梓行するや實を川越の豪商横田某飯能の豪商金子某等に借り又貸金の實を諸方に借りて返さず債主に迫られて江戸に居る能はず或人の薦に依り上野宮の侍講たらんとす宮問ふ何をか尤も善くする曰く神儒佛皆之れを能くすと宮乃ち神書は何を以て講ずるやを問ふ答へて曰く舊事紀に據ると宮の用藤周防守問ふて曰く舊事紀は僞書なりと其の證を舉げて答書を求む答書未だ成らざるに負債の爲に江戸に亡して之く所を知らずと（醫人傳）

ヌマヅ　ジョウシャウ　沼津乘昌　狩野派の畫家なり藝法を狩野永德に學で後ち一浪と爲す花鳥を能くし多く屏風を畫く世々屏風を朝廷に調進し又卷日神社の御神寶師に定補せらる桃山御殿の百双の屏風を畫くと云ふ寛永十八年四月廿六日歿す洛の本能寺に葬る（平安墓所集、扶桑畫人傳）

ヌマヅ　ジョウテン　沼津乘天　狩野派の畫家なり乘昌の男畫法を狩野永德及び父に學べり（扶桑畫人傳）

ヌマナミ「バンコクワンジラウ」　ゴザエモン　ヨシヨ　沼野芳郎　陸軍歩兵少佐埼玉縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て第一師團歩兵第一聯隊附として從軍中三十七年十一月二十七日旅順要塞二〇三高地に於て戰死す戰功に依り勳五等功五級に叙せらる

ヌマノ　モリカズ　沼間守一　もと德川幕府の士なり舊稱は慎次郎弄花生又不二峰樓主人と號す天保十四卯年十二月二日を以て江戸に生る本姓は高梨出て、沼間氏を嗣ぐ幕府の季政夙とに洋學を修めんとす志を興し安政六年長崎に赴き英人某氏に就きて學ぶあり而して特に意を兵書に注げり數年の後江戸に歸り時の軍艦頭取矢田堀鴻に就きて海軍の業を修め軍艦に搭じて日本海を航す後ち陸軍に移り佛國陸軍士官に專にす守一歐洲より歸朝するや尾張藩鋼山の事あり拔を以て一躍叅役頭取に昇り續て歩兵頭並と爲り千五百餘人の歩兵に佛式の練兵を傳習す此時に當り天下紛擾し鎖港攘夷の議論四方に起り德川慶喜終に將軍の職を辭す戊辰正月伏見の敗報至るや幕臣の議論分て二となり一は歸順を可とし一は宣戰を主張す議論百出歸順する處を知らず守一固より宣戰說を執り陸軍會議に列して大阪城を據守し一時四兵の東下を妨げ其間新軍隊を募り進んで薩長を討滅するを易きを主張す然るに勝房州初めより歸順論を主張し慶喜之に同意するもの多し因て竊に以爲らく房州を放ち置かば到底宣戰の論行はるべからず論行はれずんば既に倒れんとする幕府を回復すべからずと自ら之を剿さんとして威らず此の時や傳習隊を引率して走らんとするも實力なく且つ走るにも便ならざれば已むを得ず隊中精銳最も爲すあるに足るの士官二十餘名を選み兄須藤時一郎と共に會津に向ひて脫走す既にして若松に至り會津藩主に謁し其の所志を陳べ一臂の力を添へんとを乞ふ藩主大に之を嘉みし留めて藩中の壯士を募り銃隊を制し之に兵事を傳習せしむ其後日光郡面の軍を監督せんとを委す此れより先き幕臣大鳥圭介竊に江戸を脫し東國に走る王師之を聞き日ならずして數千の兵を遣りて之を追擊す守一大鳥の軍に合し屢ゝ戰を士藩板垣退助の軍に接す後大鳥と議論合はず再び會津に至り遊擊隊の赴士に散兵隊の技を訓示すこれより先き守一が股肱の士官二十餘名概れ軍に死す因て慨然去て庄内に赴き其藩主の請に應じて兵事を傳習す幾くもなくして會津藩主王師に降り庄内藩主も亦次て降る守一憮然として大に嘆じ解じて榎本釜二郎の軍に合せんとす而して事遂に成らず空し王師の護送する所となり江戸に至るや俄然二豎の犯すところとなり徐に其精神を鬱亭に養ふ偶ま板垣退助使を鶴亭に遣て之を聘す以爲らく幕府の事終に爲すべからず榎本等も亦た北海に利あらず而して今轉ゝ病驛を離るゝも全癒の時を待たば大事已に去らん胸中他日の策を講じ斷然意を決して之に赴き兵事を士藩の兵士に教授す實に明治二年七月なり明治五年大藏省出仕に擧げられ幾くもなくして司法省に鄕ず同年命を奉じ歐米各國に航し大に悟る所あり爾後倡に意を法律學に專にす守一歐洲より歸朝するや尾張藩鋼山の事あり後徵されて元老院書記官となる初め歐米各國に遊ぶや深く言論の修めざるべからざるを悟り歸朝の後同志を募り嘰嘰社を下谷に設け演說討論の會を開く實に日本討論會の嚆矢なり是より先き政府新に廢藩置縣の令を

布くや住内藩之を奉ぜず置縣の名あるも廢藩の實なく百般の制度盡く舊に因り租稅の徵收禁止の命令一も行はれざりしに偶〻森藤右衛門あり縣政の苛酷を痛憤し進んで之を政府に哀訴す當時元老院尙ほ行政官吏の不法を彈劾するの權を有す是に於て守一を抽て此事を調査せしむ十二年東京府會議員同區會議員同商法議會所議員等聯合して東京府民の總代と稱し天皇陛下の臨幸を上野公園に請ふ守一其の議員等の權外にして且つ府民の名稱を濫用するを憤り侃々之を論逃す爾後江湖の風潮頓に一變し東四に南北に到る處として國會設立論を唱和せざるなきも政府依然動かず守一深く之を憂ひ自ら以爲らく五斗米の爲めに屈するの間は如何ともす能はずと同年九月斷然職を辭して民間に入り益〻力を曖鳴社に盡し各地方に於て第二十九曖鳴社を設立するに至り且つ是れより地方有志の請に應じ行て演說壇場に登り大に政治の思想を喚起せり同年十月神田區民の推す所となり府會議員に撰れ幾干もなく府會議長たり次で横濱毎日新聞社に社長となり該社を改革して本局を東京に移し東京横濱毎日新聞と改題し爾來入りては同社の社務を總理し出ては府會に改進黨に曖鳴社に其他公共の事業に盡力せり然るに腦病且つ肺疾を併發して遂に起たず二十三年三月十七日歿す年四十八

ヌリベノ　ミヤツコ　アニ　漆部造兄　用明天皇の朝漆部即漆工の首長たりし人なり（工藝志料）

ヌルユ　スエヨ　奴留湯末雄　陸軍歩兵少尉なり熊本縣出身にして明治廿七八年日露戰役に於て第六師團歩兵第二十四聯隊附として從軍中三十七年八月三十一日清國盛京省マエトウンに於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ヌレガミ　チャウゴラウ　濡髮長五郎　父を岩村長右衛門と曰ふ本は上野沼田の藩士なり故あり て漂流し山城八幡に退居し名を都倉與惣兵衛と改め手跡師範を以て業となす長五郎人と爲り强勇にして膂力人に過ぐ常に好みて角觝をなす父之を戒むれども聞かず遂に去りて關東荒石斧右衛門の養子となり名を荒石長五郎と稱す常に爭鬪を好み近村を横行す長五郎毎に爭鬪に臨みて紙を水に浸し之を頭に粘す是れ濡紙に双物の透ちぬと云ふ俗傳あるを以てなり故に人長五郎を呼びて濡紙と曰ふ後ち遂に之を以て名を濡髮と改め大阪に至りて諸所を橫行し服部惣右衛門を殺して刑せらる事は享保中に在り放駒長吉と爭鬪したるも亦た此の時代に在りと（實事譚）

ネ之部

ネイイチ　寧一「イチバツウセウ」
ネイイツサン　寧一山「イツネイ」
ネイカイ　寧海「ツカモトネイカイ」
ネイカイショ　寧處「ヨカダネイショ」

ネギシ　イウガ　根岸友我　江戸の俳人なり幕府に仕ふ名は眞英、權兵衛と稱す暫軒の男至德中大阪の官金出納事務を命ぜられ後小普請組に屬す享保十四年九月廿五日歿す年六十七谷中感應寺に葬る（江戸名家墓所一覽）

ネギシ　イウザン　根岸友山（ネギシタケカの傳にあり）

ネギシ　カイコク　根岸解谷　詩人なり自ら修して岸とす武州青梅の人又溪雲軒と號す名は典則枝に學び漢學を井野暇に學ぶ天保二年九月八日歿す年七十著す所溪雲軒和歌集嶺谷詩集道歌百人一首溪雲抄俳諧糸衣溪雲抄あり

ネギシ　ザンケン　根岸暫軒　江戸の俳人なり名は眞利長兵衛と稱す幕府の士なり正德四年三月三十日歿す谷中感應寺に葬る（江戸名家墓所一覽）

ネギシ　シゲアキ　根岸重明　獨心齋と號す天心獨名流劍法の祖なり初め八九郎と稱す伊藤平左衛門忠雄に從て劍を學ぶ天和二年八月十八日歿す年七十八紀伊の人（武術流祖錄）

ネギシ　タケカ　根岸武香　國學者なり武州大里郡胃山の豪家にして友山の子父の稱を嗣ぎ通稱伴七と云ふ平田篤胤の門に入り安藤野雁を聘し漢學は寧門靜軒を聘して家に居らしめ又劍を千葉周作に學び古印譜五卷武藏風土記稿等と交り風流に遊び印行する所皇國古印譜五卷武藏風土記稿等あり維新の際父と共に上京して國事に盡力し維新後貴族院議員となる明治三十五年十二月三日歿す年六十四

ネギシ　トカク　根岸兎角　微塵流の劍客にして諸國一羽の高弟也一羽の病篤に在るや兎角京に至りて江戸に奔り往て自ら一派を立て微塵流と稱し劍術を授け聲名頗る高し一羽の弟子岩間小熊之を惡み共に公衆の前に鬪ふ兎角敵する能はず大に愧ぢ後幾くもなく爲めに誘殺せらる（武術流祖錄、事實文編）

ネギシ　ヒゼンノカミ　根岸肥前守　名は鎭衛別號守臣元文二年を以て生まる父を安生定洪といふ定洪は相州津久井縣若柳村の人にして幕府の徒士安生定之の養子となり徒士より進みて其組頭となり遂に代官に任ぜらる二子あり長子直之は評定所留役藏奉行を經て後に船手頭となる二男は即ち鎭衛なり初め根岸衛規といへる者家祿百五十俵を食みし が多病にして中年歿す歿するに臨み遺言して鎭衛を嗣子となす鎭衛小普請より出て〻勘定役となり留役を兼れ幾ばくもなくして其の組頭となり淺明公日光參拜の事務を掌る其の後吟味役に移り既にして又佐渡奉行となり家祿二百俵を增し加へらる文恭公に至り勘定奉行に拜せられ肥前守に叙任し采邑五百石を賜ふ寛政十年町奉行に遷り職に在ること十八年其の訟へを聽く明斷にして公平世擧りて之を稱す官其の功勞を嘉し更に食邑を增して千石に至る初め勘定役たりし時より慮を憲賞を賜り此に至りて之を通計するに黃金二百六十枚に及ぶといふ文化十二年十月六日病て卒す年七十九麻生今井町善學寺に葬る男衛嚴嗣ぐ鎭衛人と爲り寛裕にして小事を屑とせず平生使ふ所の關吏の姓名だに一々記憶せざるが如し然れども能く下情に通じ撰擧決して其の器を誤らず人と語るに其整甚大每にいふ微言は謹愼に似たるも其の私情を訴へ誹謗をなすに嫌ひありと著す所耳囊あり（春亭手稿）

ネギシ　リャウウ　根岸凉宇　俳人なり通稱孫兵衛名は保固鑑左衛門の子其家巢代武州青梅の豪農にして兼て又里の名產青梅縞を鬻ぐを以て業とす常

に俳諧を好み建部涼岱の門に入り涼宇と號し吸露庵と稱す名聲頗る遠近に高く安永年間二條家の臺閣に趨し花の下の榮稱を賜はりたり當時關左の俳諧師未だ花の下の盛を以て宗匠たるものなし實に涼宇を以て嚆矢とす寛政六年十一月五日「曉の涙に別るゝ千鳥哉」の一句を殘し下世す法名尊涼弘宇居士と號し千ノ湖村宗建寺境內先塋の次に葬る門人及び遠近の風士道悼の吟詠を集め辭世の句に因り千鳥集と表題す其二條家より賜りし冠服及臺書は總て家寶と爲せしが天保年間類燒の際烏有に屬せり

ネゴトセンセイ　メスケ　寐言先生「ムチユウウ」　根來八九郎　劍客なり名に重明兄龜井忠雄と共に神子上忠明の門に入り一刀流の奧を究む丹羽長次に仕ふ致仕の後獨身齋と號す技を以て當時に鳴る

ネジメ　コレヤ　稱寢惟哉　陸軍騎兵少尉なり東京府出身にして明治三十七八年日露戰役に於て騎兵第二十聯隊附として從軍中三十八年九月三十日清國盛京省法庫門附近にて病に罹り三十九年五月二日遼陽第一關東陸軍病院分院に於て死去す

ネズミ　コゾウ　鼠小僧　名を次郎吉と曰ふ盜を以て其名高し江戸堺町に住し常に賭博を以て業とす故に人其の盜をなすを知らず人となり輕捷にして軀甚だ小なり是れ鼠小僧の名を得たる所以なり常に盜をなすに大小名の邸第に入り曾て農商の家に入らず最後に松平玄蕃頭邸に入りて（一說に一橋家）縛に就き天保三年八月十九日遂に刑に處せらる辭世の歌あり「天が下古き例しとし涙の身にぞ鼠と現はれにけり」と其の墓今尙ほ本所回向院に在り其の宣告文を擧ぐれば左の如し

町奉行榊原主計頭掛り
其名鼠小僧事
無宿入墨　次郎吉　三十六歳

此者儀十年以前未年以來所々武家屋敷廿八ヶ所度數三十二度塀を越え又は通用門より紛れ入り長局奧向へ忍び入り錠前を固辭明け或は土藏の戶を鋸にて挽切り金七百五十一兩一分錢七貫五百文程盜取捨候後武家屋敷へ遣入候得共不得盜候處被召捕數ヶ所にて盜致し候儀は押包み博奕數度致候旨申立右依科入墨の上追放相成候處入墨を消紛らし猶惡事不相止尙又武家屋敷七十一ヶ所度數九十度右同樣の手口にて長局奧向へ忍び入り金二千三百三十四兩二分錢三百七十二文銀四匁三分盜取り右體御仕置に相成候以後の盜ヶ所郡合九十九ヶ所度數百二十二度の內屋舗名前失念又は不覺金銀盜取らざるも有之凡そ金高三千百二十一兩二分錢九貫二百六十文銀四匁三分殘らず酒食遊興又は博奕を渡世同樣に致し在方所々へも持參不殘遣捨候始末不屬至極に付引廻の上於淺草獄門申付候（温故實錄、實事譚）

ネツウエモン　根津宇右衛門　其の名を逸す甲斐侯德川綱重に仕ふ綱重年方に壯にして飲酒度なし宇右衛門之を憂苦し諫言を進むる數回而して聽かれず遂に病を發して死す是より後ち綱重過飲する每に必ず障紙を隔てゝ禮服端坐するものあり衆之を以て其靈となす（一說に曰く一日宇右衛門綱重が盃を擧るを以て諫む綱重怒りて之を手刃す而して又酌むを手を捫て以て諫め止むるの狀を見る儼然として生けるが如し）是に於て綱重大に悔悟し遂に劇飲を止め後ち諸老有司と相議し宇右衛門の爲めに祠を谷中の別莊に建て有司に命じて歲時之を祭る後ち家宣の四城に入るに及び其の父の臣にして諫て死するを憫れみ將軍綱吉に請て更に其の祠を舊地に新にし法を山王祠に取り田園巫祝を置き恒祀に供奉す今の根津權現即ち是れなり（野史、續々島朝史略）

ネヅ　コジラウ　根津小次郎　上杉憲顯の部下なり勇敢を以て長尾彈正等と名を齊うす延元中上杉憲顯宗良親王を奉じて新田義宗等と足利尊氏を鎌倉に攻む小次郎彈正と俱に軍に從ひ並びに尊氏を刺さんと謀る彈正鬢を被り小次郎面に傷けて尊氏の軍に入る及ぶに幾なんとして尊氏の兵の爲めに覺られ事遂に成らずして退く語は長尾彈正の傳に在り（大日本史）

ネヅ　シラウエモン　根津四郎右衛門　此世俗に所謂黑船忠右衛門は是れなり本名は住吉屋四郎右衛門、根津は其綽名なり大阪北砲明前伏見屋敷に住し町奴を以て聞ゆ性驍勇にして義俠み好み膂力人に過ぐ嘗て獄門庄兵衛と爭ひ遂に決を腕力に訴ふ後期するに日を以てして新町樓に相會せんとな約し期に及びて各〻橋上に相會す庄兵衛乾兒を招て腰提懷中物を致し木履を脫て之を提げしむ四郎右衛門視て大に笑ひて曰く戰に臨みて逃計をなす何ぞ夫れ怯なる汝の如きは我敵に非ずと遂に顧みずして去る後ち人あり其間に入り彼此を和解し事遂に解くを得たり實曆中病みて死す年六十八梅田に葬むる（實事譚）

ネヅ　ツネヲ　禰津恒夫　陸軍歩兵少尉なり長野縣出身にして明治廿七八年日露戰役に於て第七師團歩兵第二十七聯隊附として從軍中廿七年十二月一日旅順要塞二〇三高地に於て戰死す

ネツノ　シロウベエ　熱之四郎兵衛　大阪の人仲衆を業とす生來强氣不敵にして貴人高位と雖も節に臨で恐れず顏を改め俠の風あり俠りて遂に名を當時に揚ぐと云ふ（早引人物故事）

ネノ中　ユキチカ　根井幸親　姓滋野、左衛門尉國親の子なり小彌太と稱す初め源義仲の兵を起すや平氏中原兼遠を召して之を貰む兼遠詐りて聲書を與へ捕へて義仲を送らんことを約して還る然れども誓に背く を欲せず義仲を以て幸親に託し時を視て動かさしむ幸親之を許し潛かに爲めに指畫して本國及び隣境の兵を募る來り附く者日々に多し養和元年城長茂の兵を橫田河に破る既にして本城盛來り擊つ義仲遂へ戰ふ幸親先鋒と爲りて之を越前水津に破る礪波の戰に兵二千に將として獨勒山に登り諸將と掩擊して大に敵を破り北ぐるを逐ひて加賀に抵る幸親二百五十騎に將として飛驒景高の五百騎に當り搏戰すること甚だ急なり兩軍死傷して殆んど盡く幸親射て景高の馬に中つ景高馬より墜つ幸親亦馬より下り短兵相接す景高刀折る幸親以爲らく人の尼に乘ずるは勇に非ずと乃ち刀を投じて相搏し遂に之を縛す義仲の法住寺殿を犯すや幸親射て圍難法親王を殺す東軍京都に入る子親忠と三百餘騎を率て宇治に向ひ戰ひ利あらずして退く東兵之を追ふ幸親且つ鬪ひ且つ卻く河口源三船越小二郎竝び進て幸親に迫る幸親左右の手を張りて之を邀ふ源三小二郎馬を進めて兩腋より之を抱く幸親二人を脅持し小二郎の

帶を授りて之を泥涼に投じて死せしむ源三敬に據りて勳かず幸親馬を併せて之を投殺す東兵群易して敢て進む者なし幸親乃ち散兵を收めて京都に還り義仲に六條河原に遇ひ東兵と大に戰ひて遂に陣に歿す（大日本史）

ネボケ　センセイ　寐惚先生「オホタナンボ」

然阿　名は其忠姓は藤原氏、石州の人、母は伴氏一個の貴女授くるに明鏡を以てすと夢みて孕むあり生れて纔度明敏十一歳にして三智法師の往生要集を誦ずるを聞き淨土を忻慕す十三にして雲州の信運に從て書を受け一時に八十行を誦す遂に之を異とす阿字を好みて懲まず博く經典を究む十六歳にして剃髮受戒し常に法華を誦し夢に不動明王を感ず十八にして大聖竹林寺の記を閱して懇喜交々至る是より專ら淨業を修む又圓信に値ひて台教を究め密藏源朝の二師に從て秘法を稟け佛心禪宗法相三論華嚴律等の妙旨に至る迄探討せざるなし貞永の初め多陀寺に寓し志を專にして念佛す嘉禎二年聖光の道化を聞き往て謁し問て曰く天台蓮宗の報土同じきや將た別なるや光曰く入門殊なりと雖も家に到る時は則ち一也と居ること二年懸解捷發して師授を待たず光人を得たりと喜ぶ三年の秋郷に還り名道を跡ず相陽悟眞寺に住して安樂集記、宗要鈔、群疑論記等五十餘卷を著はす弘安十年七月六日端坐佛して化す年八十九茶毘に會利あり衆彩異々見聞するもの嘆異せざる莫なし（東國高僧傳）

ネンゲサイ　イツセウ　拈華齋一笑（初世）「パンショウサイイツキョク」

ネンゲサイ　イツセウ　拈華齋一笑（二世）「庵松齋一晴の門人にして遠州流の生花家なり江戸に住す安政中の人、土屋たれ女三世を繼ぐ

ネンザイ　念西　フヂハラトキナガ

ネンサイ　念齋「ハラネンサイ」

ネンザン　年山「アンドウネンザン」

ネンレンシャ　シンア　拙運社信阿「イウカイ」

ネモト　シンヘイ　根本新平　勤王の志士なり諱は義信水戸藩士なり萬延元年林以德等と共に鹿兒島藩邸に投じたために罪を得て禁錮せらるゝこと數年文久二年赦されて小譜請組となりしが元治元年水戸甲子の變に際し田丸稻之衛門が群に入り幕兵と戰ひ惡聞十卷を校定して世に流布す清の鴻臚寺卿丸山昌峰等を經て十九年御講書始の節御進講を命ぜらる二十三年根本義塾を創始し子弟を教養す二十八年更めて文科大學教授に任じ三十二年文學博士の學位を授けらる三十九年十月三日病歿す年八十五嚴性嚴格名利を輕んじ儉素自ら居る座作進退手に鐵扇を放たず又日本刀を愛玩す晩年論語解解を著はす病危篤に及び特旨を以て位一級を進め從四位に叙ぜらる谷中嘉地に葬る

ネモト　ブイ　根本武夷（根本自ら修して根と云ふ）　江戸の儒者なり名は惡忠字は伯修武夷は其の號、八右衛門と稱す相州鎌倉の人なり少壯より武技を好み擊劍を長沼四郎左衛門に學びて其の秘奥を極め專ら之を以て士類に教授す未だ書を讀み道を講ずるを聽き初めて幣帥の任は全く節制調練と規律整嚴とに在るを知る又た荀子を讀ずるを疏荀子、兵を趙の孝成王の前に論じ技擊を以て兵の最下とす是に於て慨然として學に從事せざるを悔い節を折り書を讀み遂に發を徂徠に執る後ち經史に淹通し鬱然一巨儒となる嘗て山井崑崙と同く下野の足利學校に遊び詩書易春秋禮記論語の七經を校勘して遂る書し本邦傳る所の舊本を以て異同を標驚し明版註疏の誤脫を訂正するを可必ず此の腹を除かんと病と稱して出てず一日外次郎に見えて曰く君の究する亦甚し然りと雖も君姑らく之を安せよ臣將北溪に命じて其の遺漏を補輯せしめ益すに孟子を以てす總べて二百六卷三十六本題して七經孟子考文補遺と曰ふ官長崎の奉行をして之を彼の士に傳致せしむ清の仁帝高慶二年に之を贈刺し稱して盛舉とす其の源皆崑崙武夷の手鈔する所に出づ武夷又盛の蟲復の論語義疏十卷を校定して世に流布す清の鴻臚寺卿丸山昌峰等を經て十九年御講書始の節御進講を命ぜらる二十三年根本義塾を創始し子弟を教養す二十八年更めて文科大學教授に任じ三十二年文學博士の學位を授けらる三十九年十月三日病歿す年八十五嚴性嚴格名利を輕んじ儉素自ら居る座作進退手に鐵扇を放たず又日本刀を愛玩す晩年論語解解を著はす病危篤に及び特旨を以て位一級を進め從四位に叙ぜらる谷中嘉地に葬る

ネモト　ツウメイ　根本通明　舊秋田藩儒なり易學を以て世に知らる文政五年二月羽後國仙北郡荊和野村に生る幼名周助と稱し天保三年藩校明德館勤學校崇德書院に入り通明と改稱せり幾もなく明德館勤學生となり學長となり一藩の教育學政を掌れり明治二年藩小參事に任じ五年秋田藩學校教授を命ぜられ尋で秋田縣權大屬に任ず後新に大藏省に出仕し八年に至りて大藏省沿革志編取調掛を拜命し斯文學會の選任講師より華族會館學則取調委員宮內省御用掛皇族御進講等を命ぜらる二十三年御講書始の節御進講を命ぜらる二十三年根本義塾を創始し子弟を教養す二十八年更めて文科大學教授に任じ三十二年文學博士の學位を授けらる三十九年十月三日病歿す年八十五嚴性嚴格名利を輕んじ儉素自ら居る座作進退手に鐵扇を放たず又日本刀を愛玩す晩年論語解解を著はす病危篤に及び特旨を以て位一級を進め從四位に叙ぜらる谷中嘉地に葬る

ネモト　ヨシクニ　根本吉國　薩州の鍛工なり法城寺に住す吉次の子なり金兵衛と稱す後國武又國清と改むと云ふ天和中の人（新刀辨疑、新刀一覽、古今鍛冶銘早見出）

ネモト　ヨシトモ　根本義知　字は子哲、大父渡邊某、五郎右衛門と稱す卓犖不羈奇節を以て著はる寛政中木村謙と近藤守重に從て蝦夷に到り廣情を探偵す後水藩の元老中山氏に仕ふ父寛藏五郎右衛門と稱す義知其次子なり出て根本氏を嗣ぎ久二八と稱す少にして膽氣あり文政の初め中山氏の家寄存正進島村昌邦と相結て姦を爲す勢焰甚だ熾んなり人皆て其意に忤ふ者なし中山氏も亦省みず是に於て檜窓日に長じ陽に主家を富ますと爲し以て務めて聚斂す諸臣の俸祿率れ皆減損す時に中山氏子なし庶弟を丹次郎と曰ふ常に疎薄せられ居は機に風雨を庇び食祿は數口に過ぎず義知は其傳なり竊に謂ふ此れ友子の道に非ずと同僚と議し丹次郎の爲めに封を增さんことを請ふ議かれず五年冬正進昌邦各貪五十石を增す意竊に丹次郎を誅じ之を廢し而して一藩侯の庶子を養ひ以て嗣と爲さんと謀る議已に成る義知之を聞き奮怒して曰く彼れ何人ぞ此姦計を爲す發使ひ主公終に子なくとも次郎君あらず乎而して彼れ獨り私欲を營み以て成功に居る可必ず此の賊を除かんと病と稱して出てず一日外次郎に見えて曰く君の究する亦甚し然りと雖も君姑らく之を安せよ臣將

に謀る所あらんとすと遂に書を作り父兄僚友に辭訣し明朝正進の舍に至りて謁を求む迄ぜず戶を排して入る正進且起つ義知刀を揮つて之を斫て曰く亡ぐるも得ざるなりと一擊して仆る徐かに刀を斂めて出て昌邦の舍に至り直ちに臥內に入る又其額に及ぶ家僮の戰ふ所と爲る昌邦走りて床下に匿くる之を索むるも獲ず去つて一叢祠の內に到り呼び曰く落合五郎兵衛既に之を殺せり吾以て死すべし唯恨らくは未だ孫衛門を斫る能はざるを吾將に死せんとす誰れか吾が頭を得る者ぞと乃ち自刎す孫衛門は昌邦の稱なり邸人變を聞き驚せ至て曰く子暫く狂せる乎請ふ醫を招て之を治せんと義知曰く吾豈に狂せんや今日君の爲めに賊を除く義死せざるを得ざるなりと既にして昌邦創を裹み衆を率ゐて迫ひ至る義知目未だ瞑せず其聲を聞き蹶然として曰く孫衛門至る刃を礪すに足らず然りと雖も以て一戰すべしと決鬪數刻敢て當る者なし而して義知憊る已に甚し昌邦を傷つく再び覓に昌邦提ぐる所の槍柄を截りて死す時に年二十正進の砺らるゝや未だ殊せず家人に問て曰く久二何くに之くと家人曰く聞く孫衛門亦害せらると曰く彼れ果して狂するに非ざるなりと遂に死す幾ならずして昌邦亦殺せられ中山氏終に事なきを得たり義知嘗て人の赤穗遺臣復仇の事を讀むを聞き其從容不迫の態ありと謂ふに至り慨然として曰く丈夫事に處する當にかくの如くならざるべからずと發するに臨み酒殺ふ具へて親戚を宴し歡笑平日の如しと云ふ（事實文稿）

ネモト　ヨジヱン　根本與人　奥の二本松の俳人なり與一兵衛と稱す（事實文稿）

ノ之部

ノウアミ　能阿彌　將軍足利義政の同朋なり畫を以て名あり能阿彌と稱す鳴齋又春鳴齋と號す名は眞能、京都の人、性畫を好み周文を師として人物山水花鳥を畫く筆意頗る風致あり後宋人牧溪を追慕して筆力大に進み周文の畫風を一變す畫く所悉く淡淡の墨畫にして緻密なり世人以て一種の畫風として大に稱譽す

ノウイン　能因「タチバナナガヤス」

ノウクワウ　能光「グワラクノウクワウ」

ノウクワウ　能光　禪師は其の生國を詳にせず海を截て唐に入り洞山价禪師に參じて宗印を贏く天復の初年遊化して蜀に入る永泰軍の節度使錄處辰碧鷄坊の宅を捨て院となして之に居らしむ道俗化に嚮ひ大に後梁の長興年末を以て遷化す年一百六十三宋に令玄居士と云ふものあり蜀都の人なり深く禪宗を究め法を長平雪に嗣ぐ光の塔を拜する偈に曰く大空無玄風を振ふ後梁の長興年の末（我朱金帝の年號年間）遊化して蜀に入る十三歳後、方於二此塔一發二身真一と、龍門夜話）

ノウクワウ　能光　字は瓦屋姓氏を詳にせず海下過二迷津一流流法乳誰無レ分、了了教知我最親、一百六十三歳後、方於二此塔一發二身真一と、龍門夜話）

ノウクワウ　能光　禪師は其の生國を詳にせず海を截て唐に入り洞山价禪師に參じて親しく法印を承く天復の初（我國醍醐帝の延喜年間）遊化して蜀に入る永泰軍の節度使錄處辰碧鷄坊の宅を捨て禪院と爲し光を請じて居らしむ僧俗化に嚮ひ大に後梁の長興年の末（我朱金帝の年號年間）を以て遷化す年百六十三、宋に勾令玄居士といふものあり蜀都の人博識巧文深く禪宗を究む嘗て火葬法印傳を著す中に瓦屋塔を拜すの偈あり（本朝高僧傳）

ノウケン　蘐軒「イスヰテイジョ」二世

ノウシン　能進「カハタケシンシチ」

ノウジュン　能順　京都北野の社僧なり加賀侯の招聘に應して小松梅林院に住す最も俳諧を能くせり寶永三年十一月二十八日年七十九にして歿す（俳林小圃）

ノウショウ　能勝「ケツダウノウショウ」

ノウショウキン　能證院「フヂハラヒデフサ」

ノウニン　能忍　大日と號す學家の士將軍家の叔父なり少より聯會に遊び諸の經論を究む天性禪を好み精を勵し工夫して卒に得る處あり三寶寺を攝津の水田郷に建て盛んに禪法を唱ふ畿內の僧俗風に歸するもの多し或は謗るに師承なきを以てするものあり文治己酉の夏泥弟子練中、勝尋をして書幣を齎して宋に入り育王山の拙庵光禪師に謁して其所悟錄を呈せしむ拙庵大に證明して拯ち附するに法衣道號並に賞遠壁の偈を以てす練中勝辨歸工をして拙庵の佛を繪かしめ以て賚を求む庵即ち書して曰く道の僧無面目天關を發轉して地軸を掀翻す泥師說體見得して親し外道天魔共に寬伏すと二弟歸朝の後泥の聲名益々華爽に駿す上足覺晏泥の印記を受け和泉の多武峯に居して大に禪要を唱ふ永平の孤雲奬公久しく覺晏に隨ふ晏終に臨み奬を勤めて道元禪師に依らしむ便ち自獨の心要提示並に泥師より受くる所の什物を付す元師其提示を見て大に嘆賞して曰く晏師は明眼の人なりと依之常に能忍を稱すると和尙を以て鎭西の聖光來て宗義を質す一夜景清來訪ふ泥其邂逅を喜び弟子を出して酒を買はしむ景清官府に告くと疑ひ乃ち劍を拔きて刺殺して去る（本朝高僧傳）

ノウハン　能範　仙巖と號す姓は平氏伊勢の人なり幼にして蟠龍を好み稍く長ずるに及びて大初を龍澤寺に禮して落髮す既にして遊方して諸老宿に見ゆ至る所轍ち請益して怠らず激發を蒙る亦多し還りて大初を佛陀寺に者す命に因りて賀客を與どる應接間大に悟る所あり應永戊の夏越の松陽寺に出世し龍澤諸巖の二祖に歷遷す尾州の牧某氏範の道化に歸し常樂寺を立てゝ第一世となす後疾なくして化す（洞上聯燈錄）

ノウヱ　トクゴフ　能惠得業　中御門正二位內大臣宗能の次男にして權大納言宗家の弟なり東大寺に入りて法相兼眞言の學を修し得業に至る馬道の大般若二百卷の闕を書寫し供養せんとの願を發し病を得て中途に死す而して蘇生し宿願を遂ぐるの後猶存命す又繪畫の道に長じて榊に入る戒壇院扉の畫きて世に賞せらる仁安四年十一月卒す（八將遮童訓抄、藤原系圖）

ノガミ　スクネマロ　野上宿禰麻呂　天平寶龜間の人なり官太宰府大令使に至る其だ和歌を能

くす詠歌は萬葉集に出づ（萬葉集作者履歴）

ノガミ　チンレイ　野上陳令　秋田藩の儒者なり字は安民通稱東藏後國佐と改む千秋閣、好古堂、古香庵、檜山、自得皆其號なり資性溫和寬厚出て藩主佐竹義和に仕ふ當時藩主學館を創設し資を給し有爲の士を養成するに志あり陳令其の選に與り山本北山の門に入り讀學多年博く經史に渉り歸りて學館の文學に進み後に祭酒となり位諸奉行の上に班す又家塾を開く門弟數百人あり弘化元年二月卒す年七十一

ノギ　カツノリ　乃木勝典　陸軍歩兵中尉なり成城學校を經て陸軍士官學校を卒へ明治廿七八年日露戰役起るや歩兵中尉を以て第一師團歩兵第一聯隊に屬して出征し廿七五月二十六日盛京省南山の激戰に於て負傷し重傷を蒙りし二十八日石門子第二野戰病院に於て遂に起たず年二十六戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ノギ　ハツタラウ　乃木初太郎　勤王の志士なり諱は高知別號を檜陰といふ長州藩士なり文久三年萩城に來り明倫館に學ぶ尋で命を以て山口城を守る此年八月藩主朝鑑を蒙りしより議論若りに起り物論囂々たりしかど初太郎痛く之を憂ひ福田又一其他數人の同志と謀り之が鎭制に力を盡すと少からず遂に又一等ゝ赤間關に於て國を結び兵を繫む後藩主名を干城隊と賜ふ元治元年甲子六月福原越後に從ひ上京し伏見に至る七月十九日の變初太郎兵餞となりて進み稱荷街道にて敵兵と相距ること僅に五六十歩戰起り碩丸に中りて死す年僅に十八（甲子殉難士傳、殉難錄稿）

ノギ　ヤスノリ　乃木保典　陸軍歩兵少尉なり東京府出身にして明治廿七八年日露戰役に於て後備歩兵第一旅團司令部附として從軍中廿七年十一月三十日旅順要塞二〇三高地に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ノグチ　イウコク　野口幽谷　畫家なり通稱は巳之助元大工源四郎の子なり父なくして母に孝なり大工の母を養ふに足らざるを憂ひ椿椿山に從て畫を學ぶ花鳥を畫くに長ず嘗て岩崎彌之助の爲に屏風を畫く謝金五百圓を得たり幽谷其の多きに過るを以て之を謝す彌之助の使者聞かず幽谷乃ち之が半を割きて養育し共に當世の名手たり（聲曲類纂）

ノザハ　ケンイチ　野澤健一　陸軍一等軍醫なり長野縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て後備役に召集せられ第六師團衛生隊備員として從軍中負傷し三十八年六月二十九日清國盛京省前四方蠶患者療養所に於て死去す

ノザハ　ゴスケ　野澤語助　義太夫の三絃師なり初め辰次郎と稱し語息齋と號す明治元年三月二十三日歿す年七十八（名人忌辰錄）

ノザハ　トシヒコ　野澤俊彦　陸軍歩兵中尉なり福島縣出身して明治三十七八年日露戰役に於て第二師團歩兵第二十九聯隊附として從軍中三十八年三月十日清國盛京省葛布街に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ノザラシ　ゴスケ　野晒悟助　浪花の俠客なり元佐々木氏の臣にして幼名は彦丸、梅津氏、父戰歿するや年十一、姉婿と流離して僧となり一休禪師に從ふ是雲と號す後還俗して野晒悟助と稱す蓋し禪の悟道に取て名づくるなり（泉南口碑）

ノシマ　スケサブラウ　野島佐三郎　勤王の志士なり水戸の藩士にして諱は惟孝といふ始め鄙鄙元綿となり後中間頭上座に班す各藩あり櫻田の塾には金子孫二郎等と同盟せしかど猶後日再塾を圖らんとて下野遠明と俱に國に潛み居たり恰も元治元年甲子の變あり松平頼徳兵を率ゐて水戸に來り那珂湊に屯す之を聞き農兵を具して之に應じ屢々敵と戰ひしが國老榊原照煕等が幕府に自首するに及び事の爲す可からざるを察し十月二十三日同志に永訣して自刎して死す年五十三（殉難錄稿）

ノジリ　マチザウ　野尻萬千三　陸軍歩兵少尉なり秋田縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て後備歩兵第十七聯隊附として從軍中三十八年三月七日清國盛京省鍾子營附近戰鬪の際負傷同九日逸城子第四師團第四野戰病院に於て死去す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ノジリ　イツセイ　野尻一成　儒者なり藤助と稱す熊澤了介の弟にして勤後岡藩に仕ふ王學辨答、耳知實記、嗅獄戰鬪筆記の著あり

ノセ　タツタラウ　能勢達太郎　勤王の志士なり諱は成章字は公遠愷軒と號す脱藩後姓名を改めて名和宗助と呼ぶ土佐藩士なり十四歳にして藩校に入り十六歳にして得業生に補せられ尋で國を辭し四方に遊學す士井有恪藤澤甫頼復藤森大雅等皆その師なり後昌平學校に入り劍道を藩の樋口某武市等江戸の千葉等に學び砲術を同藩伊東某田所某に學ぶ其餘算術水練に至るまで遂せざるはなし文久二年病に因りて國に歸り翌年四月都に上り幾ならずして同藩士北添佶磨森岡某四名と北海より舟行して蝦夷に至る歸路奥羽より陸行して七月江戸に著す八月更に京都に入り密に東方の事情を奏す當時勤王の志士は甚しく幕府の忌憚する所となり遂太郎亦其厄に遇はんとす遂太郎痛く志士の非命に斃るゝを歎き京都の藩邸を脱亡し京摂の間に潛匿し或は長州邸に在り後長州に赴く元治元年七月長州勢に與力し十九日の朝天王山を出て力戰數日に渉りしが軍覓に利あらず二十一日眞木和泉等十七人と共に天王山に屠腹して死す時に年二十二明治三十一年七月朝廷其忠志を追賞して特に正五位を贈らる（殉難錄稿）

ノセ　チャウゲツ　能勢長月　狩野派の畫家なり初め山三郎と稱す狩野安信の門人（扶桑畫人傳）

ノゾキト　クロベエ　荏戸九郎兵衛　經濟家なり名は鵬字は士雲米澤の藩士なり夙に學を好み江戸に出て澁井孝德に就き經濟の學を研究す既にして米澤の藩士上杉重定に仕ふ明和四年重定退隱し其子治憲嗣ぐ年十七勤儉華を斥け實を取り儒教を崇び經世に悉す九郎兵衛治憲を助け老職となり國政改む米澤藩を救し十月二十三日同志に永訣して自刎して死す年五十九郎兵衛の致す所なりと其の著す所廢錄一卷政語若干卷戀楚篇一卷世に行はる（鷹山公偉績錄）

ノダ　ガウサイ　野田剛齋　儒者なり名は繼勝七右衛門と稱す剛齋は其の號、江戸の人、高祖成次始めて幕府に仕ふ曾祖忠成父忠次父忠久累代皆な幕府に仕ふ剛齋に至り故を以て隱居して仕へず元祿三年を以て生れ明和五年二月歿す年七十九荒川善仁寺に葬る其の人となり溫厚淳實にして少より學を好み佐藤直方を師とし遂に程朱の學を研究して獲る所あり以て學徒に教授す（墓誌、江戸名家墓所一覽）

ノダ　カメイチラウ　野田龜一郎　陸軍三等獸醫なり岡山縣出身にして明治廿七八年日露戰役起るに際し後備役より召集せられ第十師團糧食總列附として廿七年六月十五日陸軍運送船常陸丸にて玄海灘航行中敵艦より襲撃を受け戰死す

ノダ　クワンザウ　野田歡藏　陸軍歩兵少尉なり熊本縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て近衛歩兵第四聯隊附として從軍中三十八年三月三日清國盛京省唐家屯東北高地に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ノダ　シンスケ　野田新助　面打なり面に秀能井と彫付あり豐臣時代名手五人中の一なり（假面譜）

ノダ　スキヨウ　野田醉翁　石州流の茶人なり松浦肥前守に茶道を學びて能くせり名は久忠、通稱は左衛門官司倉たり故ありて放たれ後ち免ぜられて本所石原に居る享保十六年七月十二日卒す法名即生院醉翁居士と云ふ小石川極樂山善仁寺に葬る（茶人系傳全集、江戸名家墓所一覽）

ノダ　セキヤウ　野田石陽　松山藩の儒者なり名は孝彝字は叔友通稱吉右衛門又鹿星閣と號す松山の人博學治聞にして醫圍の學を奉ず平生意を著作に用ゐ其の著す所五經纂註、學則纂註、豫陽古蹟志、外傳志略あり文政年中歿す年六十（欽墓錄）

ノダ　ダウイ　野田道意　水戸藩の士人なり傍ら茶道を片岡勘助に學びて能くせり知足庵と號し政德と云ふ（茶人系傳全集）

ノダ　タダマサ　野田忠肅　和學者なり初の名は善兵衛攝津介津の農なり初め長流に從ひ長流歿後契冲師に就て古學詠歌を修す有職の學に精し著す所萬葉集類句なり（鑒定便覽）

ノダ　チュウシウ　野田中洲　儒者なり名は好古別號は華陽字は尙甫、勘右衛門と稱す紀伊の人にして華陽詩話、中洲小草、中洲遺稿等の著あり（諸家著述目錄）

ノダ　テキホ　野田笛浦　丹後國田邊の儒者なり藩主牧野氏の臣名は邊字は子明俗稱を希一と云ふ父母に仕へ純孝奉養至らざる所なし年甫て十三江戸

院に施入し又他の百圓を牛込の貸家に賜す家牛込喜久井町に在ればなり其の屋勝を容るゝに過ぎず妻子綿衣を纏ふて侈奢の風なく清貧を樂む明治三十一年六月六日年七十四にして歿す帝室技藝員に列し又麗々共進會の審査官たり

ノグチ　ウリウ　野口有柳　俳人なり武州入間郡川角村の人祐助と稱し碩布の門に入り九世春秋庵を嗣ぐ明治二十六年七月七日歿す八十五（俳諧名譽譜）

ノグチ　カツイチ　野口勝一　珂北と號す珂北川は勤王の士にして元治元年水戸の亂にて反對黨の爲に斬殺せらる勝一時に識十七亡父の仇を報ぜんとて東奥に流離すること數年明治元年六月遂に報讐の目的を遂す八年茨城日報を起し十六年茨城縣會議長となり二十五年衆議院議員に當選す詩文を善くし畫に巧なり好んで墨を畫く門人千餘三十八年十一月十三日逝く年五十八

ノグチ　キョウイチラウ　野口恭一郎　陸軍少尉なり新潟縣出身にして明治廿七八年日露戰役に際し第二師團歩兵第十六聯隊附として從軍中廿七年九月二日清國盛京省黑英蠶附近戰鬪の際負傷し同三日官屯第二野戰病院に於て死去す戰功に依り勳六等功五級に勳せらる

ノグチ　ヂャウイチラウ　野口丈一郎　陸軍少佐なり佐賀縣出身にして明治三十七八年日露の戰役に於て歩兵第四十三聯隊附として從軍中廿七年六月二十六日清國盛京省猪圈子溝戰鬪の際負傷し同廣島檢疫病院に於て死去す戰功に依り勳四等功五級に叙せらる

ノグチ　ネイサイ　野口寧齋　詩人なり通稱は其號なり漢學者野口松陽の遺子にして漢詩に長す曾て漢詩界に星社の組織せらるゝや同人寧齋を稱すること斯界の鬼才と爲したり壯年沈病に罹り病呻に在ること多年而も曾て吟詠を絕たず雜誌百花欄を發行し自ら編輯の局に當り病苦と鬪ひ漢詩の爲めに氣を吐けり明治三十八年五月十二日腦溢血にて死す年三十九或は云く謀殺に罹れりと

ノグチ　ブンチク　野口文竹　狩野派の畫家なり畫法を狩野常信に學ぶ（扶桑畫人傳）

ノグチ　マサノリ　野口政記　陸軍歩兵大尉なり長野縣出身にして明治廿七八年日露戰役に於て第七師團歩兵第二十八聯隊附として從軍中廿七年十二月一日旅順要塞二〇三高地に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級叙にせらる

ノザキ　トウキツ　野崎藤橘　甲斐の儒者にして左傳晰義、孟子晰義、世說紀倒、大道新譜、作文柱礎、手筒踐制、軍機辨覽等の著あり

ノザキ　カズヘ　野崎主計　勤王の志士にして大和十津川の郷士也安政五年梅田源次郎の事を起すとするや深瀨維正等と共に之に加擔する所あり然れども志を得ず後文久三年中山侍從忠光に從ひ大和の義擧に加はりて數々幕府の兵と戰ひし衆寡敵し難く終に自刎して死す明治二十四年十二月朝廷其忠志を追賞し特に正五位を贈らる（殉難錄稿）

ノザキ　サダスミ　野崎貞澄　陸軍中將なり薩摩國鹿兒島の人戊辰の役に從ひ明治四年大尉となり四南の役には少佐として近衛聯隊長たり十五年少將に進み二十三年中將に陞り第六師團長に補せらる二十七八年日清役には留守第一師團長となり其後病を以て休職となり豫備役仰付られたり三十九年一月八日病を以て遊く病危篤に臨み特旨を以て位一級を進め從二位に叙し旭日大綬章を授けらる年六十七

ノザキ　ノリヨシ　野崎則義　陸軍三等軍吏なり鹿兒島縣出身にして明治二十七八年日清戰役に於て南部兵站監部附として從軍中二十八年七月十八日仁川兵站病院に於て病死す

ノザハ　カツジ　野澤勝次　陸軍歩兵少尉なり福井縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て後備歩兵第五十七聯隊附として從軍中三十八年三月八日清國盛京省大小方士屯に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ノザハ　キウエモン　野澤久右衛門　長崎の螺鈿工にして生島藤七の門人なり其工と稱せらる（工藝志料）

ノザハ　キハチラウ　野澤喜八郎　三絃家なり大阪の人其技を以て竹澤權右衛門等と名を齊う

に遊び古賀精里の門に入る當時家貧しく備さに艱苦を嘗め精志勵行學問文章大に進む藩主之を聞き學費を給し其志を成さしむ文政九年清國の商船得泰船護駛河の清水港に漂著す駿府代官羽倉簡堂その措置を掌どり幕府の儒員古賀侗庵に謀り其才能識に任ふるもの一人を擧げ該船を長崎に護送せしめんとす當浦時に年二十八昌平校にあり侗庵乃ち當浦を薦む由てその官差に應じ清人に接し筆談するに及んで才辯縱橫大に清客江雲閣朱柳橋等を敬服せしむ船を同うして長崎に回航するの間六十日唱和の文詩海內に傳播し名聲頓に顯はる駁して泰得船筆語にあり前後藩主の知遇を得拔擢せられて執政に任ず藩治文敎に於て裨益する所鈔からず晩年慶〻餞骨を乞ふも聽されず安政六年七月二十一日病を以て歿す年六十一其詩文は海紅園小稿、嘉永二十五家絕句、鐫東七家詩鈔、今世名家文鈔等に散見せり男鷹雄函館稅關に長たり（海紅園小稿、苑藝叢記）

ノダ　ミツヨ　野田三夫　海軍少尉なり熊本縣出身にして明治三十七年日露戰役に於て軍艦磐手に乘組み從軍中同年八月十四日蔚山沖に於て敵艦隊と交戰の際戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ノダ　ヤスジ　野田安次　陸軍工兵少尉なり熊岡縣出身にして明治卅七八年日露戰役に於て第一師團後備工兵第二中隊附として從軍中病に罹り卅七年十月十六日清國遼陽兵站病院に於て死去す

ノダ　ヤスノブ　野田安宣　裝劒彫工なり忠左衛門と稱す京都宮小路押小路上る町に住す（裝劒奇寶）

ノダ　ヨシアキラ　野田敬明　金工なり四郎兵衛と稱す刀劒彫鐔の鑑定に熟し又た書畫を善くす蓮墨して愚憲書要心と號す文政八年三月一日歿す年六十七（畫工錄界、萬寶全書）

ノダ　ヨシヒロ　野田喜寛　裝劒彫工なり江戸に住す奈良安親の門人なり俗稱み宇八と曰ふ（裝劒奇寶）

ノヂ　ゼンキャウ　野路善鏡「シノキヒデツグ」

ノチノ　アスカノ　ヨカモトノ　ミヤ

ノチノ　アメノシタ　シロシメス　テンワウ　後飛鳥岡本宮御宇天皇「サイメイテンワウ」

ノチノ　アンヤウキンノ　ミヤ　後安養院宮「クニスケシンワウ」

ノチノ　イチデウ　ダジャウダイジン　後一條太政大臣「フヂハラタメミツ」

ノチノ　イチヨンキン　クワンパク　後一音院關白「クデウフサザネ」

ノチノ　イツシンキン　ニフダウ　後一心院入道「フヂハラフユイヘ」

ノチノ　イハクラ　ウダイジン　後岩倉右大臣「ミナモトトモモリ」

ノチノ　イマデガハ　ウダイジン　後今出川右大臣「フヂハラサネナホ」

ノチノ　オシコウヂ　ナイダイジン　後押小路內大臣「フヂハラキンタダ」

ノチノ　オホオムロ　後大御室「チカアツシンワウ」

ノチノ　オホキノミカド　ウダイジン　後大炊御門右大臣「フヂハラモロツネ」

ノチノ　カウシャウコウ　後江相公「オホエマサツナ」「オホエマサヒラ」

ノチノ　コウエンキン　クワンパク　後香園院關白「ニデウモロツグ」

ノチノ　キシンキン　クワンパク　後巳心院關白「クデウタダモト」

ノチノ　キタキンノ　ミヤ　後喜多院宮「シンニンホウシンワウ」

ノチノ　キャウゴク　セツシャウ　後京極攝政「フヂハラシツネ」

ノチノ　キャウゴクキン　後京極院「フヂハラサキコ」

ノチノ　クガ　ダジャウダイジン　後久我太政大臣「ミナモトミチミツ」

ノチノ　クガ　ナイダイジン　後久我內大臣「ミナモトミチチカ」

ノチノ　クゼ　ダジャウダイジン　後九條內大臣「フヂハラモトイヘ」

ノチノ　クデウ　ナイダイジン　後九條內大臣「フヂハラノリモト」

ノチノ　クワウダイキンノ　オムロ　後光臺院御室「セイカクホウシンワウ」

ノチノ　クワウミャウジュキンノ　ミヤ　後光明壽院宮「シュジョホウシンワウ」

ノチノ　クワウミャウホウジ　セツシャウ　後光明峰寺攝政「フヂハライヘツネ」

ノチノ　クワウミャウキン　クワンパク　後光明院關白「フヂハラミチヒラ」

ノチノ　クワザンキン　ウダイジン　後花山院右大臣「フヂハラサダマサ」

ノチノ　クワザンキン　サダイジン　後花山院左大臣「フヂハラカネマサ」

ノチノ　クワザンキン　ダジャウダイジン　後花山院太政大臣「フヂハラミチマサ」

ノチノ　クワザンキン　ナイダイジン　後花山院內大臣「ミナモトモロノブ」

ノチノ　クワンジュジ　ナイダイジン　後勸修寺內大臣「フヂハラツネアキ」

ノチノ　クワンヨンジ　サダイジン　後觀音寺左大臣「フヂハラサネノブ」

ノチノ　ケイレンキンノ　ミヤ　後桂蓮院宮「ソンショウホウシンワウ」

ノチノ　コンガウヂャウキンノ　ミヤ　後金剛定院宮「クワンリウホウシンワウ」

ノチノ　サイヨンジ　ダジャウダイジン　後西園寺太政大臣「フヂハラサネカネ」

ノチノ　サンエンキン　クワンパク　後三緣院關白「フヂハラミツイヘ」

ノチノ　サンデウ　ダジャウダイジン　後三條太政大臣「フヂハラサネフユ」

ノチノ　サンデウ　ナイダイジン　後三條內大臣「フヂハラキンチカ」

ノチノ　サンデウ　ナイダイジン　後三條內大臣「フヂハラサネタダ」

ノチノ　サンデウ　ニフダウ　後三條入道左大臣「フヂハラサネカズ」

ノチノ　ジクワウキン　後慈光院「フヂハラサネモチ」

ノチノ　ジゲンキン　クワンパク　後慈眼院關白「フヂハラヒサツネ」

ノチノ　ジフリンキン　後十輪院「チュウキンミチムラ」

ノチノ　ジャウオンジ　クワンパク　後成恩寺關白「イチデウカネヨシ」

ノチノ　ジャウドジ　サダイジン　後淨土寺左大臣「フヂハラツネヒラ」

ノチノ　ジャウミャウジュキン　セツシャウ　後淨明珠院攝政「ニデウヤスミチ」

ノチノ　ショウミャウキン　後稱名院「サンデウニシキンヤス」

ノチノ　シラカハ　ニフダウ　後白川入道「サンデウキンフユ」

ノチノ　スズノヤ　後鈴廼舍「モトヨリハルニハ」

ノチノ　ズキウンキン　後瑞雲院「ヒロハシカネノブ」

ノチノ　ズキゲイキン　ニフダウ　後瑞慶院入道「フヂハラノブムネ」

ノチノ　セウネンキン　クワンパク　後照念院關白「フヂハラフユヒラ」

ノチノ　ゼンカキン　オムロ　後禪河院御室「カクダウホウシンワウ」

ノチノ　センシャウキン　クワンパク　後專稱院關白「フヂハラタダフユ」

ノチノ　ダイジョウキンノ　ミヤ　後大乘院宮「ダウエンホウシンワウ」

ノチノ　ダイゼンコンガウキン　クワンパク　後大染金剛院關白「ニデウタダフサ」

ノチノ　ダイツウキン　後大通院「サダツネシンワウ」

ノチノ　タカノノ　オムロ　後高野御室「ダウハフホウシンワウ」

ノチノ　チクリンキン　後竹林院「サイヨンジサネトホ」

ノチノ　チソクキン　クワンパク　後知足院關白「コノエヒサツグ」

ノチノ　チュウショワウ　後中書王「トモヒラシンワウ」

ノチノ　ツキノワ　クワンパク　後月輪關白「フヂハラカネタカ」

ノチノ　ツチミカド　ナイダイジン　後土御門內大臣「ミナモトサダミチ」

ノチノ　トキハキ　ウダイジン　後常盤井右大臣「フヂハラサネトシ」

ノチノ　トクダイジ　サダイジン　後德大寺左大臣「フヂハラサネサダ」

ノチノ　トクダイジ　ダジャウダイジン　後德大寺太政大臣「フヂハラキンタカ」

ノチノ　ナカノ　オムロ　後中御室「シャウジョホウシンワウ」

ノチノ　ナカノキン　クワンパク　後中院關白「フヂハラアキザネ」

ノチノ　ナカノキン　ダジャウダイジン　後中院太政大臣「ミナモトナガミチ」

ノチノ　ナカノキン　ナイダイジン　後中院內大臣「ミナモトミチシゲ」

ノチノ　ナガヨカ　ウダイジン　後長岡右大臣「フヂハラウチマロ」

ノチノ　ニデウ　クワンパク　後二條關白「フヂハラモロミチ」

ノチノ　ニョホウジュキン　クワンパク　後如法壽院關白「フヂハラヒサモト」

ノチノ　ノノミヤ　ナイダイジン　後野宮內大臣「フヂハラキンキヨ」

ノチノ　ノノミヤ　サダイジン　後野宮左大臣「フヂハラキンタネ」

ノチノ　ノノミヤ　ダジャウダイジン　後野宮太政大臣「フヂハラキントシ」

ノチノ　ハチデウ　ナイダイジン　後八條內大臣「フヂハラサネツグ」

ノチノ　ホウウンキン　後法雲院「フヂハラキンオキ」

ノチノ　ホウコウキン　クワンパク　後法興院關白「コノエマサイヘ」

ノチノ　ホウジャウジ　クワンパク　後法成寺關白「コノエヒサミチ」

ノチノ　ホウジャウジ　セツシャウ　後法性寺攝政「フヂハラカネザネ」

ノチノ　フククワウエン　クワンパク　後福光園關白「ニデウヨシモト」

ノチノ　フクセウキン　クワンパク　後福照院關白「ニデウモチモト」

ノチノ　フクワウエン　クワンパク　後普光園關白「ニデウヨシモト」

ノチノ　ブツボシンジノ　ミヤ　後佛母心寺宮「シャウオウホウシンワウ」

ノチノ　フンクワウキン　後芬光院「カラスマルミツヤス」

ノチノ　フンダリクワキン　クワンパク　後芬陀梨華院關白「フヂハラツネミチ」

ノチノ　ミナミ　オムロ　後南御室「クシンホウシンワウ」

ノチノ　メウゲジ　クワンパク　後妙華寺關白「イチデウフユヨシ」

ノチノ　モントクキン　後文德院「ゴハナゾノテンワウ」

ノチノ　ヤマシナ　ウダイジン　後山科右大臣「フヂハラミツモリ」

ノチノ　ヤマモト　サダイジン　後山本左大臣「フヂハラサネヤス」

ノチノ　リウシャウキン　後龍翔院「サンデウキンヨリ」

ノチノ　ロクデウ　クワンパク　後六條關白「コノエカネツグ」

ノチノ　キヂ　ウダイジン　後井手右大臣「タチバナウヂキミ」

ノチノ　キノクマ　クワンパク　後猪隈關白「コノエツネタダ」

ノチノ　エンクワウキン　クワンパク
後圓光院關白「フヂハラフユノリ」

ノチノ　エンミヤウジ　クワンパク　後圓明寺關白「フヂハラカネフユ」

ノチノ　ヨカヤノ　クンパワク　後岡屋關白「コノエモトツグ」

ノチノ　ソウジャウ　後小野僧正「コウシン」

ノチノ　ヨノノミヤ　ウダイジン　後小野宮右大臣「フヂハラサネスケ」

ノヅ　シゲヨ　野津鎮雄　陸軍中將なり名は鎮雄初め七左衛門と稱す雄は藤原考諱は鎮圭柴介と稱す母は柏木氏世々薩摩侯に仕ふ父祖以上未だ顯はれしものあらず家又た極めて貧し鎮雄幼にして怙恃を喪ひ叔父折田氏に青せらる人となり膽勇絕倫膂力人を兼ぬ擊劍を藥丸氏に學び好みて長刀を帶ぶ又た礮技を青山氏に學ぶ所謂る天山流なるものなり文久癸亥英艦來りて鹿兒島に戰ふ鎮雄青山氏に從ひて沖小島礮壘を守り戰甚だ烈し既にして英船退く此の役や鎮雄を推して首功となすと云ふ是より先き左衛門督大原重德詔を銜み幕府に赴く鎮雄藩命を受け扈して東下す已にして至り勅使の邸を護りて以て事變に備ふ慶應丁卯藩兵京を戍るや鎮雄小隊監軍となり小隊長に進む明治元年鳥羽に戰ひて功あり遂に東山道先鋒となり總野岩陸の間に戰ひ宇都宮、白川等の諸城を拔き若松を圍みて之を陷いる明年大隊長となり往きて函館の逋賊を討つ四年三月藩、親兵を貢獻す鎮雄之を率ゐて上京す七月兵部省出仕となり遂に陸軍大佐兼兵部權大丞に任ぜらる五年九月陸軍少將に任ぜられ七年三月佐賀人亂を作す鎮雄步砲二兵の指揮長官となり急に熊本鎮臺に赴むく十九日鎮雄內務卿大久保利通と一艦に駕し博多に抵る時に土人叛徒に應ぜんと欲するもの多く人々危懼す鎮雄筑を建て即日陸に上りて營を布き界を劃して以て守り令を下して敢て入るものは斬に處す是に於て人心始めて定まり土人皆な志を翻して歸順す因りて其の人を用ひて以て役に從はしむ二十一日佐賀に向ひて發す賊兵風を望みて遁走し米だ旬日を出でずして亂平らぐ此の役戰の方に半なるに方り天皇侍臣を遣はして慰勞し酒肴を賜ふ後ち鎮雄召されて京に在るや天皇詔して鎮雄の警戰略を奏賞す警し我が國に徽兵の令ありてより其の之を戰に用ひたるは則ち佐賀の役を以て始めとなす是の時に方りて四方の士族官兵各佞蹤と皆な謂ふ事あれば則ち寺關白「フヂハラカネフユ」

ノヅ　シゲヨ　野津鎮雄　陸軍中將なり名は鎮雄初め七左衛門と稱す雄は藤原考諱は鎮圭柴介と稱す母は柏木氏世々薩摩侯に仕ふ父祖以上未だ顯はれしものあらず家又た極めて貧し鎮雄幼にして怙恃を喪ひ叔父折田氏に青せらる人となり膽勇絕倫膂力人を兼ぬ擊劍を藥丸氏に學び好みて長刀を帶ぶ又た礮技を青山氏に學ぶ所謂る天山流なるものなり文久癸亥英艦來りて鹿兒島に戰ふ鎮雄青山氏に從ひて沖小島礮壘を守り戰甚だ烈し既にして英船退く此の役や鎮雄を推して首功となすと云ふ是より先き左衛門督大原重德詔を銜み幕府に赴く鎮雄藩命を受け扈して東下す已にして至り勅使の邸を護りて以て事變に備ふ慶應丁卯藩兵京を戍るや鎮雄小隊監軍となり小隊長に進む明治元年鳥羽に戰ひて功あり遂に東山道先鋒となり總野岩陸の間に戰ひ宇都宮、白川等の諸城を拔き若松を圍みて之を陷いる明年大隊長となり往きて函館の逋賊を討つ四年三月藩、親兵を貢獻す鎮雄之を率ゐて上京す七月兵部省出仕となり遂に陸軍大佐兼兵部權大丞に任ぜらる五年九月陸軍少將に任ぜられ七年三月佐賀人亂を作す鎮雄步砲二兵の指揮長官となり急に熊本鎮臺に赴むく十九日鎮雄內務卿大久保利通と一艦に駕し博多に抵る時に土人叛徒に應ぜんと欲するもの多く人々危懼す鎮雄筑を建て即日陸に上りて營を布き界を劃して以て守り令を下して敢て入るものは斬に處す是に於て人心始めて定まり土人皆な志を翻して歸順す因りて其の人を用ひて以て役に從はしむ二十一日佐賀に向ひて發す賊兵風を望みて遁走し米だ旬日を出でずして亂平らぐ此の役戰の方に半なるに方り天皇侍臣を遣はして慰勞し酒肴を賜ふ後ち鎮雄召されて京に在るや天皇詔して鎮雄の警戰略を奏賞す警し我が國に徽兵の令ありてより其の之を戰に用ひたるは則ち佐賀の役を以て始めとなす是の時に方りて四方の士族官兵各佞蹤と皆な謂ふ事あれば則ち寺關白「フヂハラカネフユ」

ノヅ　ミチツラ　野津道貫　舊鹿兒島藩士陸軍中將野津鎮雄の弟なり幼にして父母を喪ひ叔父折田氏に養はる明治元年鳥羽伏見の戰に從ひて功あり更に奥羽に轉戰し更に函館の賊を討つ四年三月薩藩親兵を貢獻し兄鎮雄を以て其將と爲すや道貫亦た之に從ひ上京し同年七月陸軍少佐に任じ正七位に叙せられ果進して七年一月陸軍大佐に進み三月佐賀の亂起るに及び同十二月雜司ヶ谷演習東軍司令官仰付けらる往て之を討つ九年六月米國聖府博覽會へ差遣せられ翌十年二月鹿兒島の亂起るや征討總督本營に於て出征第二旅團參謀長仰付けらる同十二年戰功により勳三等に叙し旭日中授章を授けらる十一年十一月陸軍少將に任じ同十二月勳二等に叙し陸軍卿大山巖歐州差遣に付隨行を命ぜらる十七年七月特旨を以て華族に列せられ勳功により子爵を授けらる十八年二月伊太利皇帝よりグランフキンアルテ、オルディネ、デ、ラロンナ、デ、イタリヤ勳章を露西亞皇帝よりスタニスラス第一等勳章を墺太利匈牙利皇帝より鐵冠第二等勳章を獨逸皇帝より王冠第二等勳章を法蘭西政府よりコンスンデール、ド、ロルナショナル、ド、ラル、ジョン、ドノール勳章を受領し且づ其佩用を允許せらる同二月特命全權大使伯爵伊藤博文清國差遣に付隨行仰付けらる同五月陸軍中將に任ぜらる二十一年五月第五師團長に補せられ二十六年五月勳一等に叙し瑞寶章を授けらる二十七年七月日清の役起るや第五師團長として最初の出兵に襻掌し後自ら兵を率ゐて出征し平壤の攻擊に本隊を提げて最も難局に當り奇効を奏ぜり二十八年三月陸軍大將に任じ軍功により伯爵に陞受し功二級に叙し金鵄勳章を賜はり旭日大綬章を授けらる同十一月近衛師團長に補せらる二十九年五月東京灣防禦總督に轉補し十月更に東部都督となる三十二年從二位に叙せられ三十三年四月教育總監に參加し兵餉に拔群の功を樹て淺田師團長より感情を授與せらる功に依り功四級に叙せられ金鵄勳章を賜はりたり凱旋後宿痾再發して終に四十年一月四日東京に於て逝く年三十

ノヅ　セイゴ　野津誠吾　陸軍步兵大尉なり鹿兒島縣出身にして明治二十八年征臺役に於て近衛師團第七機關砲隊附として出征中病に罹り廿八年十月廿日大甲兵站病院に於て死去す

ノヅ　ミチツラ　野津道貫　舊鹿兒島藩士陸軍中將野津鎮雄の弟なり幼にして父母を喪ひ叔父折田氏に養はる明治元年鳥羽伏見の戰に從ひて功あり更に奥羽に轉戰し更に函館の賊を討つ四年三月薩藩親兵を貢獻し兄鎮雄を以て其將と爲すや道貫亦た之に從ひ上京し同年七月陸軍少佐に任じ正七位に叙せられ果進して七年一月陸軍大佐に進み三月佐賀の亂起るに及び同十二月雜司ヶ谷演習東軍司令官仰付けらる往て之を討つ九年六月米國聖府博覽會へ差遣せられ翌十年二月鹿兒島の亂起るや征討總督本營に於て出征第二旅團參謀長仰付けらる同十二年戰功により勳三等に叙し旭日中授章を授けらる十一年十一月陸軍少將に任じ同十二月勳二等に叙し陸軍卿大山巖歐州差遣に付隨行を命ぜらる十七年七月特旨を以て華族に列せられ勳功により子爵を授けらる十八年二月伊太利皇帝よりグランフキンアルテ、オルディネ、デ、ラロンナ、デ、イタリヤ勳章を露西亞皇帝よりスタニスラス第一等勳章を墺太利匈牙利皇帝より鐵冠第二等勳章を獨逸皇帝より王冠第二等勳章を法蘭西政府よりコンスンデール、ド、ロルナショナル、ド、ラル、ジョン、ドノール勳章を受領し且づ其佩用を允許せらる同二月特命全權大使伯爵伊藤博文清國差遣に付隨行仰付けらる同五月陸軍中將に任ぜらる二十一年五月第五師團長に補せられ二十六年五月勳一等に叙し瑞寶章を授けらる二十七年七月日清の役起るや第五師團長として最初の出兵に襻掌し後自ら兵を率ゐて出征し平壤の攻擊に本隊を提げて最も難局に當り奇効を奏ぜり二十八年三月陸軍大將に任じ軍功により伯爵に陞受し功二級に叙し金鵄勳章を賜はり旭日大綬章を授けらる同十一月近衛師團長に補せらる二十九年五月東京灣防禦總督に轉補し十月更に東部都督となる三十二年從二位に叙せられ三十三年四月教育總監に參加し兵餉に拔群の功を樹て淺田師團長より感情を授與せらる功に依り功四級に叙せられ金鵄勳章を賜はりたり凱旋後宿痾再發して終に四十年一月四日東京に於て逝く年三十

ノヅ　ミチツラ　野津道貫　舊鹿兒島藩士陸軍中將野津鎮雄の弟なり幼にして父母を喪ひ叔父折田氏に養はる明治元年鳥羽伏見の戰に從ひて功あり更に奥羽に轉戰し更に函館の賊を討つ四年三月薩藩親兵を貢獻し兄鎮雄を以て其將と爲すや道貫亦た之に從ひ上京し同年七月陸軍少佐に任じ正七位に叙せられ果進して七年一月陸軍大佐に進み三月佐賀の亂起るに及び同十二月雜司ヶ谷演習東軍司令官仰付けらる往て之を討つ九年六月米國聖府博覽會へ差遣せられ翌十年二月鹿兒島の亂起るや征討總督本營に於て出征第二旅團參謀長仰付けらる同十二年戰功により勳三等に叙し旭日中授章を授けらる十一年十一月陸軍少將に任じ同十二月勳二等に叙し陸軍卿大山巖歐州差遣に付隨行を命ぜらる十七年七月特旨を以て華族に列せられ勳功により子爵を授けらる十八年二月伊太利皇帝よりグランフキンアルテ、オルディネ、デ、ラロンナ、デ、イタリヤ勳章を露西亞皇帝よりスタニスラス第一等勳章を墺太利匈牙利皇帝より鐵冠第二等勳章を獨逸皇帝より王冠第二等勳章を法蘭西政府よりコンスンデール、ド、ロルナショナル、ド、ラル、ジョン、ドノール勳章を受領し且づ其佩用を允許せらる同二月特命全權大使伯爵伊藤博文清國差遣に付隨行仰付けらる同五月陸軍中將に任ぜらる二十一年五月第五師團長に補せられ二十六年五月勳一等に叙し瑞寶章を授けらる二十七年七月日清の役起るや第五師團長として最初の出兵に襻掌し後自ら兵を率ゐて出征し平壤の攻擊に本隊を提げて最も難局に當り奇効を奏ぜり二十八年三月陸軍大將に任じ軍功により伯爵に陞受し功二級に叙し金鵄勳章を賜はり旭日大綬章を授けらる同十一月近衛師團長に補せらる二十九年五月東京灣防禦總督に轉補し十月更に東部都督となる三十二年從二位に叙せられ三十三年四月教育總監に參加し兵餉に拔群の功を樹て淺田師團長より感情を授與せらる功に依り功四級に叙せられ金鵄勳章を賜はりたり凱旋後宿痾再發して終に四十年一月四日東京に於て逝く年三十

ノヅ　セイゴ　野津誠吾　陸軍步兵大尉なり鹿兒島縣出身にして明治二十八年征臺役に於て近衛師團第七機關砲隊附として出征中病に罹り廿八年十月廿日大甲兵站病院に於て死去す

ノヅ　ミチツラ　野津道貫　舊鹿兒島藩士陸軍中將野津鎮雄の弟なり幼にして父母を喪ひ叔父折田氏に養はる明治元年鳥羽伏見の戰に從ひて功あり更に奥羽に轉戰し更に函館の賊を討つ四年三月薩藩親兵を貢獻し兄鎮雄を以て其將と爲すや道貫亦た之に從ひ上京し同年七月陸軍少佐に任じ正七位に叙せられ果進して七年一月陸軍大佐に進み三月佐賀の亂起るに及び同十二月雜司ヶ谷演習東軍司令官仰付けらる往て之を討つ九年六月米國聖府博覽會へ差遣せられ翌十年二月鹿兒島の亂起るや征討總督本營に於て出征第二旅團參謀長仰付けらる同十二年戰功により勳三等に叙し旭日中授章を授けらる十一年十一月陸軍少將に任じ同十二月勳二等に叙し陸軍卿大山巖歐州差遣に付隨行を命ぜらる十七年七月特旨を以て華族に列せられ勳功により子爵を授けらる十八年二月伊太利皇帝よりグランフキンアルテ、オルディネ、デ、ラロンナ、デ、イタリヤ勳章を露西亞皇帝よりスタニスラス第一等勳章を墺太利匈牙利皇帝より鐵冠第二等勳章を獨逸皇帝より王冠第二等勳章を法蘭西政府よりコンスンデール、ド、ロルナショナル、ド、ラル、ジョン、ドノール勳章を受領し且づ其佩用を允許せらる同二月特命全權大使伯爵伊藤博文清國差遣に付隨行仰付けらる同五月陸軍中將に任ぜらる二十一年五月第五師團長に補せられ二十六年五月勳一等に叙し瑞寶章を授けらる二十七年七月日清の役起るや第五師團長として最初の出兵に襻掌し後自ら兵を率ゐて出征し平壤の攻擊に本隊を提げて最も難局に當り奇効を奏ぜり二十八年三月陸軍大將に任じ軍功により伯爵に陞受し功二級に叙し金鵄勳章を賜はり旭日大綬章を授けらる同十一月近衛師團長に補せらる二十九年五月東京灣防禦總督に轉補し十月更に東部都督となる三十二年從二位に叙せられ三十三年四月教育總監に參加し兵餉に拔群の功を樹て淺田師團長より感情を授與せらる功に依り功四級に叙せられ金鵄勳章を賜はりたり凱旋後宿痾再發して終に四十年一月四日東京に於て逝く年三十

ノナカ　イチラウ　野中一郎　陸軍步兵大尉なり佐賀縣出身にして明治廿七年日露戰役に於て步兵第三十九聯隊附として從軍中廿七年七月三十一日清國盛京省三角山東方高地に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ノナカ　キンエモン　野中金右衛門　飫肥の藩士にして山林家なり寛政八年年三十植木万となり弘化二年年七十九に至る迄杉樹の栽植に從事し一日も怠らず栽殖の杉林一萬本以上のもの一百二十四所に及べりといふ嘗て藩政改革の擧あり金右衛門建言して曰く正月門松を立つるは古來の禮にして固より重んずべきことなれども何ぞ必ずしも特生の幹松を用ゐるを要せんや每歲家々四本の松樹を要すとすれば一萬の家四萬の松樹を伐採するなり四万の松樹は數十年を經れば國用を爲す少々にあらざるなり自今以後幹に代ふるに枝葉を以てすべしと藩其の旨を聽く（山林共進會報告）

ノナカ　ケンザン　野中兼山「ノナカヨシツグ」

ノナカ　ヨシツグ　野中良繼　土佐藩の執政なり名は止、字は良繼字を以て行はる幼字は左八郎少しく長じて傳右衛門と改め後主計又伯耆と稱し最後復た傳右衛門と稱す兼山と號し致仕して高山に改む其先は播磨の人高瀨道永移りて奚濃清水邑に住す曾祖白仙擊劍を善くするを以て聞ゆ曾仕へず祖良平山內一豐の妹を娶り良明を生む一豐養ふて子とし後土佐幡多の二萬丸千石を給す放有りて去り京都に卒す良明秋田氏を娶り子四人を生む長男を吉兼と爲す次男を良繼と爲す次男を良長と爲す次男を良明と爲す良繼一豐に近江長濱に仕へ仕僧役と爲る後從て土佐に來り祿二千三百石を食み町奉行に任ず元和八年十月年寸子直繼嗣ぐ執政と爲り政績大に著はる數ゝ祿を增して長岡郡本山の六千八百石を食む寛永十三年十一月幸す初直繼子無し小倉政平之に謂て曰く公子無し幸に左八郎君の在るあり僕を以て之を見るに他日必ず大器と爲らん盍ぞ養て以て嗣と爲さゞる直繼乃ち之に從ふ此に至りて藩主忠義亦良繼を愛し後を受け且其職を襲がしむ時に良繼才かに弱冠、天資英敏儀容雄偉初め禪法を好み超然頓悟せんと欲す一年小倉政實

藩主に屈して江戸に在り良繼託して禪書を求む政實報じて曰く江戸頃日儒學と云ふもの有りて行はる禪學の類に非ず天下國家を治めんと欲する者之を捨て他に求むべからず禪書の託請ふ故く之を舍けと乃ち中庸章句一本を贈る良繼之を讀み未だ盡く其義を解せずと雖佛說の虛誕多きの比に非ざるを喜び乃ち谷時中に請て之を講ぜしめ是より始めて聖人の道有るとを知り以爲らく朱晦庵能く其旨を得たりと因て朱書を四方に求め搜索海外に至り或は飜刻して世に公にす年を積みて私朱の書陰續として出て朱學終に大に海内に行はるゝに至る者文運の隆興に際すと雖も良繼表章の力亦居多なりと云暇時には其采邑に於て講學の會を開き僧紹藏主等同志數十人と經史を講論す紹藏主は城東吸江寺に居る元と京都の醫浮因なる者の子なり英敏人に絕す良繼勸恒等の名士皆其門下より出づ既に政を執るに及び奮然宿弊を除くの志あり乃ち數十條を疏して上る藩主意く之を嘉納す是に於て其學ぶ所を以て之を一國に施し敎育を隆にして薄俗を救ひ農桑を盛にして貧民を恤み種種の新政觀るべきもの多し其嶮巖を破碎して室戸港を繫り往來の船舶をして風濤覆溺の害を免れしめ香美郡山田の廣野を開墾し秦氏の遺臣に資して矣職飢寒の憂無からしめ弘岡高岡の大澮を疏し中野日出野の二川を通ずるが如き其間山を穿ち谷を截り勞費亦皆られず而して其事成るに及び遭運の便漕漑の利永く後人に賴して無涯の惠に報らしむ通業偉蹟今尙ほ人口に膾炙せり其他死を哭する者を賞して金錢を與へ火葬を禁じて棺槨を用ひ桑を植ゑ蠶を養ひ材を伐り薪を樵り或は藥草を栽ゑ蜜蜂を育する等以て國民を勸奬し上下に利する者勝げて計ふべからず土佐兩國の界澳の島あり彼我境界を爭ひ連年決せず良繼藩主の命を受け舊記を按じ地理を閲みし考證據して自ら之を幕府に訴へ遂に其直を得たり早く父を喪ふ母に事へて孝なり始めて家廟を建て祭儀儒法を用ふ慶安四年四月母の喪を執り哀毀禮に踰ゆ葬祭一に文公家禮に遵ひ浮屠の法を用ひず其藩主に從て江戸に往くや列侯諸官素より其名を聞て私舍を訪ふ者甚だ衆し國政を司ること殆ど三十年一國の事成一人に繫る謀を加へて一万石に至る屬く功を立つるを頁み褒ゝ奢侈に流るゝ且性本剛介惡を疾む太甚しく人の過を容る能はず故を以て忤ふ所多し藩主咨邁愈ゝ渥くして群臣の竭力益ゝ深し會ゝ俗吏捨克を以て事と爲す者あり是に於て謗讟喧騰す寛文三年七月老臣連署して之を訟ふ良繼自劾して致仕を請ふ之を許す乃ち香美郡中野の別業に屏居し自ら明寓軒と號し門を杜ぎ客を謝し讀書を以て自ら娛む故舊來り訪ふ者譏時政に涉れば則ち笑て應へず此年十二月十五日墓に疾て歿す年四十九崇海外に至り或は飜刻して世に公にす年を積みて私朱の書陰續として出て朱學終に大に海内に行はるゝに至る者文運の隆興に際すと雖も良繼表章の力亦居多なりと云暇時には其采邑に於て講學の會を開き僧紹藏主等同志數十人と經史を講論す紹藏主は城東吸江寺に居る元と京都の醫浮因なる者の子なり英敏人に絕す良繼勸恒等の名士皆其門下より出づ既に政を執るに及び奮然宿弊を除くの志あり乃ち數十條を疏して上る藩主意く之を嘉納す是に於て其學ぶ所を以て之を一國に施し敎育を隆にして薄俗を救ひ農桑を盛にして貧民を恤み種種の新政觀るべきもの多し其嶮巖を破碎して室戸港を繫り往來の船舶をして風濤覆溺の害を免れしめ香美郡山田の廣野を開墾し秦氏の遺臣に資して矣職飢寒の憂無からしめ弘岡高岡の大澮を疏し中野日出野の二川を通ずるが如き其間山を穿ち谷を截り勞費亦皆られず而して其事成るに及び遭運の便漕漑の利永く後人に賴して無涯の惠に報らしむ通業偉蹟今尙ほ人口に膾炙せり其他死を哭する者を賞して金錢を與へ火葬を禁じて棺槨を用ひ桑を植ゑ蠶を養ひ材を伐り薪を樵り或は藥草を栽ゑ蜜蜂を育する等以て國民を勸奬し上下に利する者勝げて計ふべからず土佐兩國の界澳の島あり彼我境界を爭ひ連年決せず良繼藩主の命を受け舊記を按じ地理を閲みし考證據して自ら之を幕府に訴へ遂に其直を得たり早く父を喪ふ母に事へて孝なり始めて家廟を建て祭儀儒法を用ふ慶安四年四月母の喪を執り哀毀禮に踰ゆ葬祭一に文公家禮に遵ひ浮屠の法を用ひず其藩主に從て江戸に往くや列侯諸官素より其名を聞て私舍を訪ふ者甚だ衆し國政を司ること殆ど三十年一國の事成一人に繫る謀を加へて一万石に至る屬く功を立つるを頁

ノナカ　エン　野中婉　野中良繼の第三女なり安履亭と號す母は池氏萬治三年高知に生る幼にして聰敏好みて書を讀む寛文四年五歲にして父の故を以て幽囚せらるゝと四十年學を勤め怠らず後谷重遠を師として其說を尊信し能く四書五經を講談す適居中詩歌を詠じ自ら遣る又書を善くし殊に楷書に長じ自ら明寓軒と號し門を杜ぎ客を謝し讀書を以て自ら娛む故舊來り訪ふ者譏時政に涉れば則ち笑て應へず此年十二月十五日墓に疾て歿す年四十九崇海外に至り或は飜刻して世に公にす年を積みて私朱の書陰續として出て朱學終に大に海内に行はるゝに至る者文運の隆興に際すと雖も良繼表章の力亦居多なりと云暇時には其采邑に於て講學の會を開き僧紹藏主等同志數十人と經史を講論す紹藏主は城東吸江寺に居る元と京都の醫浮因なる者の子なり英敏人に絕す良繼勸恒等の名士皆其門下より出づ既に政を執るに及び奮然宿弊を除くの志あり乃ち數十條を疏して上る藩主意く之を嘉納す是に於て其學ぶ所を以て之を一國に施し敎育を隆にして薄俗を救ひ農桑を盛にして貧民を恤み種種の新政觀るべきもの多し其嶮巖を破碎して室戸港を繫り往來の船舶をして風濤覆溺の害を免れしめ香美郡山田の廣野を開墾し秦氏の遺臣に資して矣職飢寒の憂無からしめ弘岡高岡の大澮を疏し中野日出野の二川を通ずるが如き其間山を穿ち谷を截り勞費亦皆られず而して其事成るに及び遭運の便漕漑の利永く後人に賴して無涯の惠に報らしむ通業偉蹟今尙ほ人口に膾炙せり其他死を哭する者を賞して金錢を與へ火葬を禁じて棺槨を用ひ桑を植ゑ蠶を養ひ材を伐り薪を樵り或は藥草を栽ゑ蜜蜂を育する等以て國民を勸奬し上下に利する者勝げて計ふべからず土佐兩國の界澳の島あり彼我境界を爭ひ連年決せず良繼藩主の命を受け舊記を按じ地理を閲みし考證據して自ら之を幕府に訴へ遂に其直を得たり早く父を喪ふ母に事へて孝なり始めて家廟を建て祭儀儒法を用ふ慶安四年四月母の喪を執り哀毀禮に踰ゆ葬祭一に文公家禮に遵ひ浮屠の法を用ひず其藩主に從て江戸に往くや列侯諸官素より其名を聞て私舍を訪ふ者甚だ衆し國政を司ること殆ど三十年一國の事成一人に繫る謀を加へて一万石に至る屬く功を立つるを頁

ノナカ　エン　野中婉　野中良繼の第三女なり安履亭と號す母は池氏萬治三年高知に生る幼にして聰敏好みて書を讀む寛文四年五歲にして父の故を以て幽囚せらるゝと四十年學を勤め怠らず後谷重遠を師として其說を尊信し能く四書五經を講談す適居中詩歌を詠じ自ら遣る又書を善くし殊に楷書に長じ自ら明寓軒と號し門を杜ぎ客を謝し讀書を以て自ら娛む故舊來り訪ふ者譏時政に涉れば則ち笑て應へず此年十二月十五日墓に疾て歿す年四十九崇海外に至り或は飜刻して世に公にす年を積みて私朱の書陰續として出て朱學終に大に海内に行はるゝに至る者文運の隆興に際すと雖も良繼表章の力亦居多なりと云暇時には其采邑に於て講學の會を開き僧紹藏主等同志數十人と經史を講論す紹藏主は城東吸江寺に居る元と京都の醫浮因なる者の子なり英敏人に絕す良繼勸恒等の名士皆其門下より出づ既に政を執るに及び奮然宿弊を除くの志あり乃ち數十條を疏して上る藩主意く之を嘉納す是に於て其學ぶ所を以て之を一國に施し敎育を隆にして薄俗を救ひ農桑を盛にして貧民を恤み種種の新政觀るべきもの多し其嶮巖を破碎して室戸港を繫り往來の船舶をして風濤覆溺の害を免れしめ香美郡山田の廣野を開墾し秦氏の遺臣に資して矣職飢寒の憂無からしめ弘岡高岡の大澮を疏し中野日出野の二川を通ずるが如き其間山を穿ち谷を截り勞費亦皆られず而して其事成るに及び遭運の便漕漑の利永く後人に賴して無涯の惠に報らしむ通業偉蹟今尙ほ人口に膾炙せり其他死を哭する者を賞して金錢を與へ火葬を禁じて棺槨を用ひ桑を植ゑ蠶を養ひ材を伐り薪を樵り或は藥草を栽ゑ蜜蜂を育する等以て國民を勸奬し上下に利する者勝げて計ふべからず土佐兩國の界澳の島あり彼我境界を爭ひ連年決せず良繼藩主の命を受け舊記を按じ地理を閲みし考證據して自ら之を幕府に訴へ遂に其直を得たり早く父を喪ふ母に事へて孝なり始めて家廟を建て祭儀儒法を用ふ慶安四年四月母の喪を執り哀毀禮に踰ゆ葬祭一に文公家禮に遵ひ浮屠の法を用ひず其藩主に從て江戸に往くや列侯諸官素より其名を聞て私舍を訪ふ者甚だ衆し國政を司ること殆ど三十年一國の事成一人に繫る謀を加へて一万石に至る屬く功を立つるを頁

ノナカ　ヨシ　野中良繼　野中良繼の第三女なり安履亭と號す母は池氏萬治三年高知に生る幼にして聰敏好みて書を讀む寛文四年五歲にして父の故を以て幽囚せらるゝと四十年學を勤め怠らず後谷重遠を師として其說を尊信し能く四書五經を講談す適居中詩歌を詠じ自ら遣る又書を善くし殊に楷書に長じ自ら明寓軒と號し門を杜ぎ客を謝し讀書を以て自ら娛む故舊來り訪ふ者譏時政に涉れば則ち笑て應へず此年十二月十五日墓に疾て歿す年四十九崇海外に至り或は飜刻して世に公にす年を積みて私朱の書陰續として出て朱學終に大に海内に行はるゝに至る者文運の隆興に際すと雖も良繼表章の力亦居多なりと云暇時には其采邑に於て講學の會を開き僧紹藏主等同志數十人と經史を講論す紹藏主は城東吸江寺に居る元と京都の醫浮因なる者の子なり英敏人に絕す良繼勸恒等の名士皆其門下より出づ既に政を執るに及び奮然宿弊を除くの志あり乃ち數十條を疏して上る藩主意く之を嘉納す是に於て其學ぶ所を以て之を一國に施し敎育を隆にして薄俗を救ひ農桑を盛にして貧民を恤み種種の新政觀るべきもの多し其嶮巖を破碎して室戸港を繫り往來の船舶をして風濤覆溺の害を免れしめ香美郡山田の廣野を開墾し秦氏の遺臣に資して矣職飢寒の憂無からしめ弘岡高岡の大澮を疏し中野日出野の二川を通ずるが如き其間山を穿ち谷を截り勞費亦皆られず而して其事成るに及び遭運の便漕漑の利永く後人に賴して無涯の惠に報らしむ通業偉蹟今尙ほ人口に膾炙せり其他死を哭する者を賞して金錢を與へ火葬を禁じて棺槨を用ひ桑を植ゑ蠶を養ひ材を伐り薪を樵り或は藥草を栽ゑ蜜蜂を育する等以て國民を勸奬し上下に利する者勝げて計ふべからず土佐兩國の界澳の島あり彼我境界を爭ひ連年決せず良繼藩主の命を受け舊記を按じ地理を閲みし考證據して自ら之を幕府に訴へ遂に其直を得たり早く父を喪ふ母に事へて孝なり始めて家廟を建て祭儀儒法を用ふ慶安四年四月母の喪を執り哀毀禮に踰ゆ葬祭一に文公家禮に遵ひ浮屠の法を用ひず其藩主に從て江戸に往くや列侯諸官素より其名を聞て私舍を訪ふ者甚だ衆し國政を司ること殆ど三十年一國の事成一人に繫る謀を加へて一万石に至る屬く功を立つるを頁

**ノナカ　エン　野中婉

ふ嘉元德治年間の人と（古今鍛冶鍛早見出、古今鍛冶備考）

ノブカネ　信包　備前福岡一文字流の刀匠信房の子にして長原權四郎と稱し後左近將監に拜す承久年間の人なり或は云信正の子にして建保承久年間の人なりと一に右近將監に作る（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考）

ノブキヨ　信清　大和當麻の刀匠にして應永年間の人なり或は云初代信長の二子にして觀應比の人なり（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

ノブキヨ　信清　大和奈良藤原の刀匠にして天文年間の人なり或は云金房延清の子にして天正慶長年間の人なりと（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ノブキヨ　信清　新左衛門と稱す尾張の刀匠にして三世信高の門人貞享年間の人なり（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ノブキヨ　信清　伊豫今治の刀匠にして安政元治年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ノブキヨ　信清「カトウノブキヨ」

ノブキヨ　信心　備前長船古刀の鍛工なり或は云ふ應永年間の人と又云康安比の人なりと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

ノブキヨ　延清　藤原姓大和奈良の刀匠にして天文年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ノブキヨ　延清　大和藤原の刀匠にして金房の派なり永祿年間の人並し前延清と同人なるべしと云ふ（古今鍛冶銘早見出）

ノブキヨ　延清　大和金房派の刀匠にして南都に住す姓は藤原寛永年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ノブキヨ　延清　周防の刀匠にして二王と稱す永正年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ノブキヨ　延清　肥後菊池同田貫の刀匠にして元龜年間の人なり（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ノブクニ　信國　山城の刀匠にして了戒久信の子建武年間の人なり或は云相摸貞宗の門人なりと（古今鍛冶銘早見出）

二世信國は山城に住す應永年間の人にして定國と同人なり或は云平安城に住すと（古今鍛冶銘早見出）

按ずるに信國の譜第諸說一ならず本朝鍛冶考古今鍛冶備考に載する所を左に錄して看者の參考に供す

初代信國は了戒久信の子にして彌五郎と稱す信濃小路に小路及五條坊門に住す正安乾元年間の人相摸貞宗を師とす（本朝鍛冶考）

初代信國は來光重の子にして彌五郎と稱す信濃小路に住し後五條坊門に轉居す建武比の人なり相摸貞宗を師とす法名清久と號す（古今鍛冶備考）

二世信國は久信の孫にして初代信國の子正慶延元年間の人なり（本朝鍛冶考）

三世信國は初名定國二世信國の子應安永和年間の人なり或は應永比の人と云（本朝鍛冶考）

三世信國は源左衛門尉と稱し又順城と號す應永比の人なり（古今鍛冶備考）

初代信國の女婿信國は初名正信源左衛門尉と稱す後越後に住す文和比の人なり長子信國は左衛門と稱す明德應永年間の人なり二子定光は應永比の人後九州に下る筑紫信國の祖なり（本朝鍛冶考）

二世信國の門人信光は至德明德年間の人平安城に住すと稱す永和永德年間の人なり（古今鍛冶備考）

三世信國の門人信國は初名定光又八郎と稱す後筑紫に移り信國と更め豐前宇佐に住す應永比の人なり子孫豐の前後に繁榮し信國又は了戒と稱すと云（古今鍛冶備考）

二世信國の弟信國は正慶延元年間の人なり（本朝鍛冶考）

ノブクニ　信國　山城堀川の刀匠にして至德年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ノブクニ　信國　初名了一通稱傳五郎山城の刀匠にして二世信國の門人明德比の人なり或は云了一は了戒久信の子にして延慶正和年間の人或は曆應比の人なり（古今鍛冶備考、本朝鍛冶考）

ノブクニ　信國　源左衛門尉と稱す山城の刀匠にして初代信國の二子信光と同人なり應永年間の人或は云ふ文順城と稱すと（古今鍛冶銘早見出）

ノブクニ　信國　山城堀川の刀匠にして祥雲入道と號す應永永享比の人なり（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ノブクニ　信國　初名信貞源式部丞と稱す山城の刀匠初代信國の三子なり應永永享間の人或は云文安比の人と又云二世信國の門人信貞は延文比の人と（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考）

二世信國は山城に住す長祿文正年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ノブクニ　信國　刑部尉或は刑部丞と稱す山城の刀匠にして應永年間の刀匠なり（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ノブクニ　信國　大和千手院の刀匠にして正和年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ノブクニ　信國　攝津の刀匠にして信吉の門人元祿年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ノブクニ　信國　近江國城寺の人にして古刀の鍛工なり一說に云ふ永和年間の人と（古今鍛冶銘早見出）

ノブクニ　信國　新藤平兵衛と稱す陸奥盛岡の刀匠本國筑前にして信國の一派なり筑後久留米に移住し天和中武藏江戸に下り直に陸奥盛岡に遷居し弟國輪と共に業を勵精す元祿十二年歿す（古今鍛冶備考）

ノブクニ　信國　若狹の刀匠にして應永年間の人京の刀匠了一信國と同人なりと云或は云文保比の人と（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考）

ノブクニ　信國　越後山村の刀匠にして應安年間の人なり或は云應安比の人山村正信の後名なり或は安信の後名なりと又云京都信國元亨正中年間本州山村に來り住す初名安信後信國に更む其孫正信後信國と更む文和三年に生れ應永四年に歿す亦た越中にも住すと（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考）

ノブクニ　信國　備前長船の刀匠にして行利の門人嘉祿年間の人なり或は云後吉包と改むと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

ノブクニ　信國　備前長船の刀匠にして古刀の作者なり或は云ふ應永年間の人と或は云國綱の門人に

して正長比の人なりと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

ノブクニ　信國　備中青江の刀匠にして慶安年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ノブクニ　信國　源姓新村氏筑前福岡の刀匠にして寛文年間の人なり（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

二世信國は正德年間の人にして筑前箱崎八幡境内に住す（古今鍛冶銘早見出）

ノブクニ　信國　助左衛門と稱す筑前の刀匠にして寛文年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ノブクニ　信國　筑前信國派の刀匠にして筑後及武藏江戸に住す貞享年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ノブクニ　信國　豐前宇佐の刀匠にして長祿年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ノブクニ　信國　豐前宇佐の刀匠にして天正年間の人なり或は云ふ京の刀匠信國三世の孫にして筑紫に移住し子孫豐前豐後に榮ふ信國業了戒業と稱する者は皆其同族なりと或は云定光の後名なり又云京信國三世定光宇佐に來り住す應長比の人世俗筑紫信國と稱す其子信國は了戒信國と稱す貞和比の人なり其子信國も亦了戒信國と稱すと（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考）

ノブクニ　信國　豐後の刀匠にして了戒と稱す嘉吉年間の人なり或は云宣光の子にして文安寶德年間の人と（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

ノブクニ　延國　備前古刀の鍛工なり或は云ふ天爾年間の人福岡に住すと（古今鍛冶銘早見出）

ノブクニ　延國　備前の刀匠にして嘉吉年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ノブコ　延子　油小路正二位大納言隆典の女なり享保十六年十一月十六日生る天資溫淳淑德聰慧永く青鍮門院に勤仕す性佛を信じ女院崩後老を告げ家祿を賜り退隱す向學上人に從て淨土の業を受け精修日を送る德本に就て十念を受く文政二年七月三日寂す年八十九（墓誌）

ノブコ　ナイシンワウ　延子內親王　伏見帝の皇女、母は左大臣藤原實雄の女從三位季子正應元年に生る應長元年八月十日內親王となり三宮に准す正和四年二月二十四日延明門院と號す文保元年九月二十八日出家法名信正惠時に年二十七

ノブコ　ナイシンワウ　恂子內親王　白河帝の皇女なり天仁元年十月齋宮となり樞口齋宮と號す長承元年十月十六日卒す（皇胤紹運錄）

ノブサダ　信貞　畫人なり能く馬形及び打毬の圖を畫く時の爲めに重ぜらる多く公卿の殿閣に畫きし云ふ天正中の人（本朝畫史）

ノブサダ　信貞　山城の刀匠にして二世信國の人なり或は云二世信國の門人にして延文比の子應永比の人なりと（古今鍛冶備考、本朝鍛冶考）

ノブサダ　信貞　京都の刀匠にして永正年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ノブサダ　信貞　山城の刀匠にして天文年間の人なり或は云ふ前の信貞と同人なるべしと（古今鍛冶銘早見出）

ノブサダ　信貞　藤原姓にして山城の刀匠寛文年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ノブサダ　信貞　美濃の刀匠にして千手院と稱す天文年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ノブサダ　信貞　藤原姓にして伊勢守と稱す美濃清水岩提の刀匠にして寛永年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ノブサダ　信貞　藤原姓にして伊村陸奥守と稱す越前の刀匠下坂派にして寛文元祿年間の人なり（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ノブサダ　信貞　太郎左衛門と稱す加賀の刀匠にして元祿年間の人なり（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ノブサダ　信貞　備前長船の刀匠にして文保年間の人なり或は云信直の子にして德治比の人（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

ノブサダ　信貞　備前長船の刀匠にして應安年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ノブサダ　信貞　信里　忠左衛門と稱す尾張の刀匠にして三世信高の門人天和年間の人なり（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ノブザネ　信眞　大和の刀匠千手院吉行の子なり或は云中次郎と稱す文永年間の人又云家宗の子にして中次郎と稱す弘安或は正中比の人なりと（古今鍛冶

井に住す弘長比の人なりと（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考）

ノブサダ　信貞　周防渭井津の刀匠にして清原右衛門尉と稱す天文年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ノブサダ　信貞　源姓周防の刀匠にして渭井信貞の末なり寛文年間の人（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ノブサダ　信貞　土佐の刀匠にして田內禮太郎と稱す嘉永年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ノブサダ　信定　山城の刀匠にして嘉吉年間の人なり或は云信國の族年代詳ならず信貞と同人なるべしと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

ノブサダ　信定　山城の刀匠にして天文年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ノブサダ　信定　大和守と稱す年代住地詳ならず或は云ふ山城の刀匠にして天文年間の信定是れなりと（古今鍛冶銘早見出）

ノブサダ　信定　林榮之助と稱し江戸本郷に住す元治年間の刀匠なり（古今鍛冶銘早見出）

ノブサダ　延貞　備前古刀の鍛工なり或は云長船の派にして天仁保安年間の人と（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

ノブサダ　延貞　備中青江の刀匠にして貞和年間の人なり或は云同名三世に逮ぶと（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ノブサダ　宣貞　大和の刀匠にして天正年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ノブサダ　宣貞　藤原姓大和守と稱す肥後熊本の刀匠にして寛永年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ノブサダ　誠貞　石見長濱の刀匠にして天文年間の人なり或は堪貞に作り元龜比の人となす（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ノブサト　信里　忠左衛門と稱す尾張の刀匠にして三世信高の門人天和年間の人なり（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ノブサダ　信貞　古今鍛冶銘早見出）

ノブサダ　信貞　周防渭井の刀匠にして嘉吉年間の人なり或は云嘉元比の人と又云二王の派にして渭

銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考)

ノブザネ　信眞　大和千手院の刀匠にして正和年間の人なり(古今鍛冶銘早見出)

ノブザネ　信眞　藤原姓伊勢守と稱す陸奥磐城の人にして新刀の鍛工なり(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考)

ノブザネ　信眞　備前の刀匠にして建武年間の人なり或は云ふ長船の一派一文字の派にして寛元比の人なりと(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考)

ノブザネ　信實　備前の刀匠にして元暦比の人なり(古今鍛冶銘早見出)

ノブザネ　信實　備前長船の刀匠にして應永年間の人なり(古今鍛冶銘早見出)

ノブザネ　信實　薩摩波平の刀匠にして正應年間の人なり或は云實行の子にして弘長文永比の人なりと(古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考)

ノブザネ　延眞　備前福岡の刀匠にして延生の子建保承久年間の人なり或は云同名二世に逮ぶと(本朝鍛冶考)

ノブザネ　延眞　備前福岡一文字派の刀匠にして文永年間の人なり(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考)

ノブザネ　延眞　備前の刀匠にして元暦比の人或は云ふ安元比の人福岡に住すと又云定則の子にして久壽保元年間の人或は壽永元暦比まで生存すと(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考)

ノブシゲ　信重　藤原姓にして李右衛門と稱す尾張の刀匠二世信高の門人萬治年間の人なり(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考)

ノブシゲ　信重　源助と稱す尾張の刀匠にして信勝の門人元文年間の人なり(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考)

ノブシゲ　信重　下坂氏遠江掛川の刀匠にして出雲守貞重の門人寛永年間の人なり(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考)

二世信重は遠江に住し大黒信重と稱す後武蔵江戸に移る天和年間の人なり(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考)

ノブシゲ　信重　金井弥三郎と稱す江戸の刀匠にして湯島天神切通片町に住す安政元治年間の人なり(古今鍛冶銘早見出)

ノブシゲ　信重　出羽の刀匠にして月山と稱す文明年間の人なり(古今鍛冶銘早見出)

ノブシゲ　信重　越後の刀匠にして山村正信の子なり或は云文明比の人又云應永年間の人一名信果と云と或は文和三年生れ應永廿四年歿す年六十五なりと(古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考)

ノブシゲ　信重　備前長船の刀匠にして真治年間の人なり(古今鍛冶銘早見出)

ノブシゲ　信重　長門の刀匠初代安吉の子にして應永年間の人なり或は云永和明德年間の人にして安吉の三子なり同名二世に逮ぶと又云顯國の一派にして應安比の人と(古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考)

ノブシゲ　信茂「コセノブシゲ」

ノブスケ　信助　馬加石見守と稱す肥後同田貫派の刀匠にして亦武蔵江戸に住す新刀の作者なり(古今鍛冶銘早見出)

ノブスケ　延助　備前の刀匠にして天文年間の人なり(古今鍛冶銘早見出)

ノブタカ　信高　尾張の刀匠にして本國伯耆即ち伯耆守信高九世の孫なり弘化嘉永年間の人(古今鍛冶銘早見出)

ノブタカ　信高　藤原姓尾張の刀匠にして信高九世の孫弘化嘉永年間の人なり(古今鍛冶銘早見出)

ノブタカ　信高　藤原姓河村氏左衛門と稱す伯耆守に拜す美濃上有知の刀匠三阿彌飯則の裔なり慶長の初尾張清洲に移住し同十五年名古屋に轉住し寛永十年隱居して慶遊と號す同十三年歿す(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考)

二世信高は寛永十年受領し伯耆守と稱し尾張に住す寛文二年年六十にして削髮隱居し山月居士と號す元祿二年歿す(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考)

三世信高は三之丞と稱し尾張に住す寛文五年受領して伯耆守と稱す寛永四年歿す法名道飯と云ふ(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考)

四世信高は初め三之助信照と曰ふ後三之丞に改む尾張に住す伯耆守に拜し正德元年信高と改む享保十四年歿す法名道勳(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考)

五世信高は初め三之助信照と曰ふ後三之丞と改む尾張に住す享保十五年信高と改むも天明三年歿す法名米布(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考)

六世信高は美濃關の刀匠氏舟の子にして孫四郎と稱す五世信高の養子と爲り三之助信照と曰ふ天明三年三之丞信高と改む同年の冬歿す法名宗堅(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考)

七世信高は橋井四郎と稱す勿め猪平と云ふ天明三年家嗣し尾張に住す後故ありて退去すと云ふ(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考)

八世信高は六世信高の門人にして甚之進信直と曰ふ後と爲り信高と改め師の家を再興す文化年間の人にして尾張に住す(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考)

ノブタケ　信武「ノノムラノブタケ」

ノブタダ　信尹　藤原伊信の門人にして其の畵法を傳ふ筆力風格見るに足るなり柿本人麿の神像を畵す(鑒定便覽、續本朝畵史)

ノブタダ　信忠　何人なることを知らず善く佛像鬼魅の形を畵く視る者恐怖す(皇朝名畵拾彙)

ノブタダ　信忠　藤原姓加賀金齋の人にして新刀の鍛工なり(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考)

ノブタネ　信種「ハナブサイッシウ」

ノブチカ　信近　藤原姓にして京都の刀匠寛文年間の人なり(古今鍛冶銘早見出)

ノブチカ　信近　前田定八と稱す尾張の刀匠にして六世信高の門人なり後攝津大阪に徙り尾崎助隆の門に入り政之允助包と改む寛政十年歿す(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考)

ノブチカ　信近　備前の刀匠にして元暦比の人なり或は云系譜年代詳ならず福岡一文字の派にして信房信正信包等の一族なるべしと又云福岡一文字の派にして真應比の人なりと(古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考)

ノブチカ　延近　備前長船の刀匠延房を看よ

ノブツグ　信欠　備中青江の刀匠にして守次の

門人建保年間の人なり或は云承元比の人と又云但次の子承久貞應比の人或は貞次の弟なりと(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考)

ノブツグ　信次　備後三原の刀匠にして鞆に住す康正年間の人なり(古今鍛冶銘早見出)

ノブツグ　信次　肥後同田貫の刀匠にして慶長年間の人なり(古今鍛冶銘早見出)

ノブツグ　信繼　彌六郎と稱す攝津の刀匠にして本國尾張なり三世信高の門人にして貞享年間の人なり(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考)

ノブツグ　延次　尾張山田關流の刀匠にして貞治年間の人なり或は云二世兼延の子にして寛正比の人或は正長比なりと(古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考)

二世延次は應永永享年間の人にして尾張に住す(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考)

ノブツグ　延次　美濃の刀匠にして應永比の人なり或は尾張の刀匠二世延次と同人ならんと云ふ又云兼延の門人にして正長比の人なりと(古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考)

ノブツグ　延次　備前長船の刀匠にして應安年間の人なり或は云亦備後に住すと(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考)

ノブツグ　延次　備中青江の刀匠にして建永年間の人なり(古今鍛冶銘早見出)

ノブツグ　延次　備中青江の刀匠にして家次の子建長年間の人なり或は云承元比の人又云弘長比の人と(古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考)

ノブツグ　延次　備中片山の刀匠にして弘安年間の人なり(古今鍛冶銘早見出)

ノブツグ　延次　備中の刀匠にして家綱の子貞和比の人なり(本朝鍛冶考)

ノブツグ　延次　備後の刀匠にして文和年間の人なり或は云應安比の人と(古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考)

ノブツナ　信綱　藤原姓伊豆守と稱す陸奥磐城の刀匠にして亦京に住す新刀の鍛工なり(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考)

ノブツネ　信常　又右衛門と稱す尾張の刀匠にして初代信高の門人寛永年間の人なり(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考)

ノブテル　信照　尾張の刀匠山村信高四世五世六世を見よ

ノブテル　信輝　岡田宗七と稱す薩摩の刀匠にして嘉永元治年間の人なり(古今鍛冶銘早見出)

ノブトシ　信利　藤原姓通稱清左衛門山城守又大和守と稱す播磨姫路の刀匠にして黑田助六の二子天和元祿年間の人なり(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考)

ノブトシ　延利　薩摩古刀の鍛工にして波平派なり或は云ふ真治年間の人と又云安家の子にして建治弘安年間の人と(古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考)

ノブトシ　延俊　肥後同田貫の刀匠にして天正年間の人なり(古今鍛冶銘早見出)

ノブトモ　信友　加賀の刀匠にして天正年間の人なり或は云ふ京の刀匠信國の末なりと(古今鍛冶銘早見出)

二世信友は元和年間の人加賀に住す(古今鍛冶銘早見出)

三世信友は寛永年間の人加賀に住す(古今鍛冶銘早見出)

四世信友は慶安年間の人加賀に住す(古今鍛冶銘早見出)

五世信友は貞享年間の人加賀に住す(古今鍛冶銘早見出)

六世信友は正德年間の人加賀に住す(古今鍛冶銘早見出)

ノブトモ　信友　加賀の刀匠にして信貞の子太郎右衛門と稱す藤原姓なり享保元文年間の人(古今鍛冶備考)

ノブトモ　信具　大和千手院の刀匠にして正和年間の人なり(古今鍛冶銘早見出)

ノブトモ　信具　備前長船の刀匠にして元弘年間の人なり或は云信安の子にして貞和比の人と(古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考)

ノブナガ　信長　大和當麻の刀匠にして貞治年間の人なり或は云有吉の子にして正慶比の人と(古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考)

二世信長は後越前淺古に移る世に淺古當麻と稱す應永年間の人なり或は越前に移るは三世信長と爲す(古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考)

三世信長は越前に住す長祿年間の人なり或は正長比の人越前淺古に移る其子亦信長と稱す長祿比の人と(古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考)

ノブナガ　信長　加賀の刀匠にして當麻流なり應安年間の人なり越前の信長と同人ならんとの說あり(古今鍛冶銘早見出)

ノブナガ　信長　加賀藤島の刀匠にして應安年間の人なり或は云行光の子にして明德應永年間の人或は友重の子なりと(古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考)

二世信長は加賀に住す文安年間の人なり(古今鍛冶銘早見出)

ノブナガ　信長　加賀の刀匠にして應永年間の人なり或は越前の信長と同人ならんと云(古今鍛冶銘早見出)

ノブナガ　信長　加賀の刀匠にして康正年間の人なり或は越前の信長と同人ならんと云(古今鍛冶銘早見出)

ノブナガ　信長　越後山村派の刀匠にして亟德年間の人なり或は云山村安信の二子にして亦越中に住す應永比の人(古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考)

ノブナガ　信長　備前長船の刀匠にして真治應安年間の人なり或は云守景の門人にして元享正中年間の人なり或は永和比の人同名三世に逮ぶと(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考)

二世信長は長船に住す應永永享年間の人なり(古今鍛冶銘早見出、今古鍛冶備考)

ノブナガ　信永　加賀の刀匠にして文明年間の人なり(古今鍛冶銘早見出)

ノブナガ　信永　備前長船の刀匠にして應安年間の人なり(古今鍛冶銘早見出)

ノブナガ　延命　出羽庄内の刀匠にして元祿年間の人なり(古今鍛冶銘早見出)

ノブナホ　信直　清水甚之進と稱す尾張の刀匠六世信高の門人にして八世信高の後見と爲り後攝津大

股に上り尾崎助隆の門に入り後薩摩に往き典元平の門に入り名を元長と改む文化年間の人なり（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ノブナホ　信直　青木喜代二と稱す尾張の刀匠にして八世信高の門人文化年間の人なり（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ノブナホ　信直　備前長船の刀匠にして信家の子正應永仁年間の人なり（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

ノブナホ　信直　備前長船の刀匠にして信光の子貞治比の人なり或信長の子なりと（本朝鍛冶考）

ノブナホ　信直　備前長船の刀匠にして明應永正年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ノブナホ　陳直　大道氏豐河守と稱す丹後田邊の刀匠にして寛文年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ノブナリ　信作　馬加氏肥後同田貫の刀匠にして天正年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ノブナリ　延生　備前福岡一文字派の刀匠にして貞應年間の人なり或は云延眞の二子にして治承比の人と（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ノブハル　信春　攝津の刀匠にして寛文年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ノブハル　信春　南部の畫家なり牧溪より出て能く其の風を得たり或は謂ふ狩野元信の門人なりと南都に住して春日畫師となり殊に佛像を能くす遺蹟著名の品は三社之圖（三尊之像、花鳥之圖、雜畫屏畫）とす（鑒定便覽、本朝畫史、扶桑畫人傳）

ノブハル　信春「カノノブハル」

ノブヒサ　信久　山城の刀匠初代信國の一名なり或は云久信の子にして後信國と改む德治比の人或は文和元年生れ應永廿八年歿す年六十八なりと初代信國と兄弟にして自ら別人とす（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

ノブヒサ　信久　甚八と稱す尾張の刀匠にして五世信高の門人寶暦年間の人なり（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ノブヒサ　延久　字兵衛と稱す肥後菊池の刀匠にして延寶國日出の門人文化年間の人なり（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ノブヒデ　信秀　梁原筑前守と稱す嘉永元治年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ノブヒデ　延秀　山城大宮の刀匠にして延暦年間の人或は云天福比の人後備前に移ると又云宗延の子にして永承天喜年間の人なりと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

ノブヒデ　延秀　備前古刀の鍛工なり或は云ふ山城大宮の刀工にして宗延の子乾元比の人なりと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

ノブヒラ　信平　大和千手院の刀匠にして正應年間の人なり（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ノブヒラ　信平　大和奈良の刀匠にして貞和年間の人なり（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ノブヒラ　江平　大和千手院の刀匠にして貞治年間の人なり信平と同人と云ふ未だ其是非を詳にせず或は云是高の弟にして寛喜比の人或は兄掛則成の子延元比の人奈良に住すと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

ノブヒロ　信廣　初名信家次に信屋に更め後信廣と稱す尾張の刀匠にして二世信高の門人亦京都に住す慶安寛文年間の人なり（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ノブヒロ　信廣　相摸小田原の刀匠にして天文年間の人なり（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ノブヒロ　信弘　加藤氏通稱源之進尾張の刀匠にして八世信高の門人文化年間の人なり（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ノブヒロ　信弘　備前長船の刀匠にして明德年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ノブヒロ　信廣　相摸の刀匠にして古刀の作者なり（古今鍛冶銘早見出）

ノブフサ　信房　相摸の刀匠にして天文年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ノブフサ　信房　陸奥舞艸の刀匠にして延武比の人なり或は云建長比の人にして法華經太郎と稱し岡部に住すと又云延久比の人にして法華經太郎と稱す或は高基と同人岡部に住すと（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考）

ノブフサ　信房　加賀の刀匠にして應永比の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ノブフサ　信房　備前の刀匠にして高平の父天暦寛和年間の人なり或は云延久比まで長壽生存すと又云永延比の人と（本朝鍛冶考、古今鍛冶備考）

ノブフサ　信房　備前の刀匠にして延眞の子元暦中の帶鍛冶なり或は云福岡一文字派にして中原權守と稱す承元二年の帶鍛冶廿四人の一にして久國と共に帶鍛冶の奉行たり或は延房の子なりと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考）

ノブフサ　信房　備前長船の刀匠にして建武年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ノブフサ　信房　備前長船古刀の鍛工なり或は云ふ應永年間の人なりと（古今鍛冶銘早見出）

ノブフサ　信房　備前長船の刀匠にして文明年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ノブフサ　信英　日向大掾と稱す美濃關の刀匠にして貞享年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ノブフサ　延房　藤原姓丹波守と稱す尾張の刀匠にして元和年間の人と（古今鍛冶銘早見出）

ノブフサ　延房　備前の刀匠信房の子にして建保中の帶鍛冶なり或は云福岡延眞の子にして治承比の人或は定則の子なり或は信房の一名なりと又云福岡一文字派にして承元中の帶鍛冶三月の帶に定められ長原權守と稱す建保年間の作多しと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考）

ノブフサ　延房　備前長船の刀匠にして永正年間の人なり或は云應仁比の人初の名は延近と（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ノブマサ　信正「カノシンセウ」

ノブマサ　信正　山城了戒派の刀匠にして貞和年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ノブマサ　信正　大和千手院の人にして古刀の鍛工なり或は云ふ寛元年間の人と（古今鍛冶銘早見出）

ノブマサ　信正　出羽大掾と稱す攝津の刀匠にして延寶天和年間の人なり（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ノブマサ　信正　武井兵三郎と稱す江戸の刀匠にして本郷に住す安政元治年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ノブマサ　信正　北岡氏磯二郎と稱す越前丸岡の刀匠にして文政年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ノブマサ　信正　或は延正に作る備前福岡の刀匠信房の子にして承久年間の帶鍛冶なり或は云ふ刀銘に一文字を彫すと或は云權三郎と稱す隱岐の帶鍛冶と爲り長原權守と稱す文治建久年間の人冶工の識者なりと（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考）

ノブマサ　信正　備前長船の刀匠にして應安年間の人なり或は云亦信政に作ると（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ノブマサ　信政「カノノブマサ」

ノブマサ　信政　清兵衛と稱す尾張の刀匠にして三世信高の門人元祿年間の人なり（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ノブマサ　信政　加賀の刀匠二世にして嘉永年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ノブマサ　信政　備前古刀の鍛工なり或は云ふ長船に住す應安年間の人鑒し信正と同人なりと（古今鍛冶銘早見出）

ノブマサ　信政　斧哥之助と稱す伊豫今治の刀匠にして安政元治年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ノブマサ　信昌　茂八郎と稱す美濃岩村の刀匠にして尾張五世信高の門人寛保年間の人なり（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ノブマサ　延正　備前の刀匠にして建武比の人なり或は云福岡一文字派にして帶鍛冶信正と同人なりと又延國の子にして元暦比の人と（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考）

ノブマサ　延正　備前長船の刀匠にして應安年間の人なり或は云康安比の人なりと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

ノブマサ　延正　備前三原の刀匠にして天正年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ノブミチ　信道　丸郎左衛門と稱す尾張の刀匠二世信高の門人にして寛文年間の人なり（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ノブミツ　信光　山城粟田口の刀匠にして延久比の人なり或は源信國の子と云もの大に非なりと（本朝鍛冶考）

ノブミツ　信光　源左衛門尉と稱す山城の刀匠にして了戒久信の子至德明德年間の人なり或は云二世信國の門人にして至德明德年間の人平安城に住すと又云信國の一派にして源左衛門と稱す永和比の人後信國と更むと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考）

ノブミツ　信光　山城の刀匠にして了戒と稱す古刀の鍛工なり或は云ふ亦豐後に住す後名を宣光と改む永享年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ノブミツ　信光　藤原姓加賀の刀匠にして康正年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ノブミツ　信光　備前の刀匠にして正應年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ノブミツ　信光　清兵衛の刀匠にして新堂刑部と稱すと又云實守の弟子にして建治比の人と（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考）

ノブミツ　信光　備前長船の刀匠にして應安年間の人なり或は云信長の子にして康永或は應安比の人なりと（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ノブミツ　信光　備前長船の刀匠にして應永年間の人なり或は云信長の一族なりと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

ノブミツ　信光　筑前左派の刀匠にして亦安藝族なりと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

ノブミツ　信光　豐後の刀匠了戒派にして能定の門人應安康暦年間の人了戒信光と稱す後宣光と改む（本朝鍛冶考）

ノブミツ　信光　薩摩の刀匠にして元暦比の人なり或は云行安の子にして長暦比の人なりと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

ノブミツ　信光　薩摩の刀匠波平派にして正行の子嘉元德治年間の人なり（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ノブミツ　延光　山城粟田口の刀匠にして弘安年間の人なり或は云吉光の子にして正安文保年間の人或は文永比の人と（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考）

ノブミツ　延光　美濃の刀匠にして文安年間の人なり或は云ふ峰屋派なりと又云政宗の門人或は正光の門人なりと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

ノブミツ　延光　備前の刀匠にして建武年間の人なり或は云ふ福岡一文字派にして嘉禎年間の人と又云延家の子にして元暦建保年間の人と（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

ノブミツ　宣光　山城の刀匠にして了戒と稱す建武年間の人なり或は延文又は應永年間の人と云ふ者は非なり（古今鍛冶銘早見出）

ノブミツ　宣光　了戒と稱す豐後の刀匠にして文安年間の人なり或は云信光の子にして應永比の人なりと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

ノブムネ　信宗　清八郎と稱す尾張の刀匠にして四世信高の門人正德年間の人なり（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ノブムネ　信宗　備前長船の刀匠にして建武比の人なり或は云弘長の比の人にして信國の弟子なりと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考）

ノブムネ　信統　藤原姓岡田氏陸奥磐城の刀匠にして新刀の作者なり（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ノブモト　信元　備前長船の刀匠にして宗則の二子德治比の人なり（本朝鍛冶考）

ノブモト　信元　備前長船の刀匠にして貞治至德間の人なり（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

ノブモリ　信守　備前長船の刀匠にして兼光の門人貞治年間の人なり（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

ノブモリ　信守　備前の刀匠にして基政の子明德比の人なり（本朝鍛冶考）

ノブモリ 信盛 平姓豐後高田の刀匠にして永正年間の人なり(古今鍛冶銘早見出)

ノブモリ 信盛 傳右衛門と稱す尾張の刀匠にして二世信高の門人寛文比の人なり(古今鍛冶備考)

ノブヤス 信安 出羽米澤の刀匠にして天保年間の人なり(古今鍛冶銘早見出)

ノブヤス 信安 加賀大聖寺の刀匠にして享和年間の人なり(古今鍛冶銘早見出)

ノブヤス 信安 備前長船の刀匠にして應安永和年間の人なり(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考)

ノブヤス 信安 備前古刀の鍛工なり或は云長船信直の二子にして嘉元比の人と(古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考)

ノブヤス 信安 薩摩谷山派の刀匠にして行滿の子天寛比の人なり或は云永万比の人と(本朝鍛冶考)

ノブヤス 信安 薩摩の刀匠にして信實の子弘安比の人なり(本朝鍛冶考)

ノブヤス 信安 薩摩谷山波平の刀匠にして天正年間の人なり(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考)

ノブユキ 信行 山城の刀匠にして文永年間の人なり或は云信國の族にして永仁比の人或は延元比の人にして錦小路又は三條に住すと(古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考)

ノブユキ 信行 長谷部氏山城の刀匠にして國信の子應永年間の人なり或は云國信の門人にして康暦比の人錦小路に住すと(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考)

ノブユキ 信行 山城の刀匠了戒と稱す應永年間の人なり或は云ふ亦豐前豐後に住すと(古今鍛冶銘早見出)

ノブユキ 信行 但馬村岡の刀匠にして水垣丹藏と稱す安政元治年間の人なり(古今鍛冶銘早見出)

ノブユキ 信行 備前長船の刀匠にして貞治應安年間の人なり(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考)

ノブユキ 信行 備後尾道の刀匠にして大永年間の人なり(古今鍛冶銘早見出)

ノブユキ 信行 藤原姓豐後高田の刀匠にして元龜年間の人なり(古今鍛冶銘早見出)

ノブユキ 信幸 權六郎と稱す尾張の刀匠にして五世信高の門人寶暦年間の人なり(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考)

ノブユキ 信幸 駿河島田の刀匠にして義助の族永正年間の人なり(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考)

ノブユキ 延行 豐後の刀匠にして明應年間の人なり(古今鍛冶銘早見出)

ノブユキ 延行 古刀の鍛工にして薩摩波平の派なり或は云ふ天正年間の人染川帶刀左衛門と稱す一名房安と云(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考)

ノブユキ 宣行 五阿彌と稱す備後尾道の刀匠にして天文年間の人なり一に其阿彌に作る(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考)

ノブユキ 宣行 豐後高田派の刀匠にして元龜天正年間の人なり(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考)

ノブユキ 宣行 豐後高田の刀匠にして姓は藤原寛文年間の人なり(古今鍛冶銘早見出)

ノブユキ 順行 藤原姓豐後三重の刀匠にして高田派なり永正年間の人(古今鍛冶銘早見出)

ノブユキ 信之「カノシユンセツ」 都の刀匠にして寛永寛文年間の人なり所作の刀銘に菊章を彫ると云(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考)

ノブヨシ 信吉 藤原姓高井氏信濃守と稱す京延寶寶永年間の人にして信濃守と稱し京都に住し亦大阪に住す(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考)

ノブヨシ 信吉 源姓來氏又高井氏を稱し越前守倫信入道と號す京の刀匠初代信吉の三子にして攝津大阪に住す延寶元祿年間の人なり所作の刀銘菊章を刻すと云(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考)

ノブヨシ 信吉 藤原姓高井氏通稱市之丞和摸守と稱す阿波守と稱す京の刀匠にして元龜天正年間の人なり(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考)

ノブヨシ 信吉 長氏大和の刀匠にして建武年間の人なり(古今鍛冶銘早見出)

ノブヨシ 信吉 通稱忠八郎尾張の刀匠にして四世信高の門人享保年間の人なり(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考)

ノブヨシ 信吉 尾張の刀匠にして嘉永年間の人なり(古今鍛冶銘早見出)

ノブヨシ 信吉 源姓にして新藤平八と稱す陸奥磐岡の刀匠信國四世の孫天明寛政年間の人なり(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考)

ノブヨシ 信吉 出雲の人にして信濃松代に住す安政元治年間の人なり、古今鍛冶銘早見出)

ノブヨシ 信吉 備前長船の刀匠にして應安永年間の人なり(古今鍛冶銘早見出)

ノブヨシ 信義 源姓武田氏京の刀匠にして亦た攝津竹田に住す寛文年間の人なり(古今鍛冶銘早見出)

ノブヨシ 信義 川井鯉三郎と稱す信濃松本藩の士にして鍛冶を好み信重の門に入り業みを修む慶應年間の人なり(古今鍛冶銘早見出)

ノブヨシ 信義 越中富山藩の冶工にして安政年間の人なり(古今鍛冶銘早見出)

ノブヨシ 信良 備前長船の刀匠にして貞治年間の人なり或は云大宮派の出なりと(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考)

ノブヨシ 信賀 備前長船の刀匠にして嘉吉年間の人なり或は云信直の子にして至德比の人或は則成の子なりと(古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考)

ノブヨシ 信賀 肥後同田貫の刀匠にして永祿天正年間の人なり(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考)

ノブヨシ 信榮 通稱助九郎尾張の刀匠にして四世信高の門人享保年間の人なり(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考)

ノブヨシ 信善 藤原姓にして武藏新刀の鍛工なり(古今鍛冶銘早見出)

ノブヨシ 信好 肥後同田貫の刀匠にして文化年間の人なり(古今鍛冶銘早見出)

ノブヨシ 延吉 京の刀匠にして了戒と稱す永正年間の人なり(古今鍛冶銘早見出)

ノブヨシ 延吉 大和千手院派の刀匠にして吉野郡龍門に住す文保年間の人なり或は云文和比の人にして重業の子なり世に大和の瓜實と稱す目貫の孔を瓜實の形に打故なりと(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考)

ノブヨシ 延吉 備前の刀匠にして建武比の人なり或は云長船にして年代詳ならずと(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考)

ノブヨシ 延吉 備前長船の刀匠にして永正年間の人なり(古今鍛冶銘早見出)

ノブヨシ 宣義 新刀の鍛工にして美濃關に住す(古今鍛冶銘早見出)

ノブヨシ 宣能 了戒と稱す豐後の刀匠にして文安文明年間の人なり或は云信國の子なりと(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考)

ノブヨリ 信仍 藤原姓石見守と稱す越前の刀匠にして寛文年間の人なり(古今鍛冶銘早見出)

ノブヨリ 延依 備前の刀匠にして文保年間の人なり或は云ふ吉岡に住し亦長船に住すと又云一文字信房の末流なりと(古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考)

ノブヲ 信雄「カハクボノブヲ」 野邊地尚義 南部藩士にして文政八年陸中國亀ヶ森に生る嘉永年中廿二歳にして江戸詰となりしが時事に感ずる所あり卅二歳の折に脫藩し幾干もなく大村先生の門に入り蘭學を修むる事三年姓名を變じて菊地久紀と稱せり此間師として往來せし諸先輩には松田成卿、杉田玄瑞、大鳥圭介、勝安芳等あり後毛利藩邸の學塾に聘せられて蘭學を教授す木戸孝允、伊藤博文等の知遇をうけたるも實に此時にあり當時天下の形勢漸く穩かならず毛利邸を辭して密に舊藩の爲に力を盡し約一年の後藩命により歸藩したるが識者の爲に誣ひられ途にして江戸に抑留せられ將に死を賜はらんとするに際し舊師大村氏の救ふ所となりしが維新の大業成るや藩を辭して京都に到り府員を命ぜられ其後府立英、佛、獨三語學校の監督を委せられ次に明治三年始めて女學校の同府に起すや更に之が專務に任じたり當時之を女紅場と稱し實に日本女學校の嚆矢となす其後職を辭し東京に來り紅葉館創立の事務に參同し去る十四年開業以來二十九年間之に從事する四十二年三月三日病を以て逝く年八十五

ノボリザカ ダカアキ 登坂高明 陸軍砲兵大尉なり山形縣出身にして明治卅七八年日露戰役に於て野戰砲兵第二聯隊附として從軍中卅七年十一月二十日清國盛京省和增溝にて病に罹り同十二月十日遂陽兵站病院四八里第二分院に於て病死す戰功に依り勳五等功五級に叙せらる

ノボリ ヘイジラウ 登平次郎 海軍兵曹長なり廣島縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て軍艦高砂に乘組み從軍中三十七年十二月十三日旅順口方面に出動中戰死す戰功に依り勳六等功七級に叙せらる

ノマ イツダウ 野馬一道 磐城標葉郡の人なり年十二始めて書を學び壯より老に及び諸州に歷遊し日に毫を揮つて竹を寫す道勁縱横老て益々壯なり其の墨竹嘗て叡覽を經ると云ふ自から冒ふ匾々の拙齋至尊の清鑒を蒙る高位重祿の榮も亦何ぞ之に易へんやと又曰く吾平生他の技能なし故に終身竹を畫て獨り樂むのみと悠然自得世と相忘る號して墨竹仙人と云ふ明治十六年東京淺草に寓す時に年百二歳

ノマ ゲンタクロウ 野間玄琢 德川幕府の醫員なり玉堂また白雲老人と號す平安の人、父宗印曲直瀬正紹と友とし善し故に玄琢幼にして其の門に入り年十六の時正紹已れに代りて學徒に教授せしむ慶長十五年法橋に叙せらるる數々御藥を獻じ功を以て號を壽昌院と賜ふ法印に累進す寛永の初め將軍秀忠に二條城に謁す十三年東福后不豫なり往再癒えず玄琢精治効を奏し后體尋て寧し玄琢の勞少からざるの故を以て特に其の東下を許し專ら后宮に奉ぜしむ當時の醫官は率れ京師に住して天朝幕府に往來給事す子孫に至りて皆な密に舊藩の爲に力を盡し約一年の後藩命により歸藩したるが識者の爲に誣ひられ途にして江戸に抑留せられ

ノマ セイケン 野間靜軒 德川幕府の醫員なり名は成大、一の名は三竹字は子包、靜軒は其の號又た白雲洞巷櫨柳谷と號す玄琢の子なり靜軒少にして名あり法橋に叙せられ法印に累進す父の號壽昌院を襲ひ禁裡附の醫師となり京師に在りて專ら朝廷に伺候す靜軒强記淹通博く素問靈樞の諸書を講ず時人能く及ぶものなし儒を松永昌三に學び石川丈山の詩友たり又た俳諧を能くす著書學醫通論、醫學類稿、北溪含毫、古今考、沈靜錄、古今逸士傳、修養編、四時幽賞、俗語錄、病餘反古錄、竹窓漫筆、席上談、桑華紀年、本朝年戴、本朝言行錄、本朝詩英、群書考、望海錄、孤燈錄、備忘錄、讀書得閑編、覆醬集類書等あり延寶四年八月十七日歿す年六十九(皇國名醫傳、俳林小傳、諸家人物志)

ノマ イハジ 能見岩次 陸軍騎兵中尉なり兵庫縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て騎兵第四聯隊附として從軍中三十七年六月十一日清國盛京省吳家屯戰鬪の際負傷同日唐房屯忠者療養所に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ノマ テイジラウ 野見鼎次郎 薩藩府興力たり戊辰の年前將軍慶喜恭順を表して上野寛永寺に謹慎するや鼎次郎藩臣の食祿に離るゝを慨し率先して大總督府に出頭し薩藩臣へ扶助料下賜を哀願する所ありき又幕府の上野山王臺覺王院等に大砲を据置くは不穩當なりと主張して水戸へ移轉せしめ又德川家臣屯所を京橋に置きて糧倉を開きて藩臣を賑はさんとし爲めに武州岩槻に潛伏せり後太政官其功を認め其後官軍東下の際盡力不勤として金二萬兩を下賜せり老年に及び淺草公園第六區に遊場を構へ法螺貝太鼓を打鳴らして擊劍を公衆の觀覽に供し以て其日を糊せしが四十一年九月二十日病を以て逝く年八十二

ノミ デウナゴン スミカネ 野見てふなごん墨金 **タテカハエンパ** 野見宿禰 出雲の人なり

天穗日命十四世の孫、勇を以て聞ゆ璽仁の朝當麻邑に當麻蹴速と云ふ者あり勇悍多力能く角を毀ち鉤を申ぶ恒に衆に謂りて曰く世間豈余が力に敵する者あらん願くは一の強力者と死を以て勝負を決せんと帝之を聞き群臣に問ひて曰く當麻蹴速は天下の勇士なり當世能く之に敵する者あるか乎と或ひと野見宿禰を薦む帝即日使を遣して之を召す野見亟る乃ち角力を命ず各足を擧げて相蹴る野見敵の肋骨及び腰を蹈て之を折る蹴速鉄に死す乃ち蹴速の地を以て悉く野見に賜ふ是に由りて其の邑に腰折田あり野見留りて朝廷に仕ふ二十三年皇后日葉酢媛薨ずるに日あり是れより先き帝殉死を禁ず此に至り群臣なして皇后の葬儀を議せしむ野見進て曰く凡そ陵墓に生ながら人を埋むるは誠に不仁にして後世に示す所以に非ざるなり臣願くは便宜を以て事に從はんと乃ち出雲の土部百人を召し自ら之を督し埴を以て人馬及び諸物を作り朝に献じて曰く今より以後之を以て生人に易へ陵墓に樹て以て後世の法とせんと帝之を嘉し其の土物を以て皇后の陵に樹つ因て土物を號して埴輪となし又立物と名け留を下して以て永制となし厚く野見を賞し陶地を賜ひ土部職に任じ姓を土部臣と改む是より土部連世〻相承けて大喪を司る（大日本史）

ノミフ　フケウ　能見富曉「マスミトウサ」　**ノミ　マツダイラ　野見松平**　信光の第十子光親三河國額田郡野見村に居る子孫此地を領す因て氏とす

ノミヤ　野宮　畫家なり牧溪の畫風を慕ひて周文に學び能く水墨の布袋を畫く（鑑定便覽）

ノムコ　嫩古　樂燒の名工なり姓は樂道入と號す通稱吉左衛門嫩古は別號なり朝次郎三世の孫同人が作る處の七種の名物は嵐雪が茶椀銘にもみえたり所作冒し舒嚮と號す（鑑定便覽）

ノムラ　ウントウ　野村雲洞　長崎の畫家なり名は思敬醉墨と號す長崎の人書を能くす後劉氏を後宮崎縣に移住し同縣立中學校長より巢進して文部省

ノムラ　サタギ　野村定治　陸軍步兵少尉なり靜岡縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て豫備役より召集せられ後備步兵第三十四聯隊附として從軍中三十八年三月十日清國盛京省黑鱗堡附近に於て戰死す

ノムラ　シヅヲ　野村鎭雄　陸軍步兵中尉なり愛知縣出身にして明治三十七八年日露戰に於て後備步兵第九聯隊附として從軍中三十七年八月二十一日旅順要塞東鷄冠山に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ノムラ　シャウザエモン　野村庄左衛門　幕府の青具堆朱彫物師なり堆朱楊成と列を同くす（萬延武鑑、蒔繪師傳）

ノムラ　ジロベエ　野村次郎兵衛　彫工なり後藤昌乘の弟子にして最も其の技に長ぜり（裝飾奇賞）

ノムラ　スケサク　野村助作　勤王家なり名は者通稱は宅之進後助作と改む筑前藩の馬廻組たり祖母望東尼と意を同うし時勢を傷み勤王の志厚く友人中村恒次郎無可の力を朝廷に竭さんと欲するや省に勤むるに同行を以てす事顯はるゝ五稱寧府に遷る時接伴を命ぜられ盡す所あり慶應元年十月二十三日玄界島に配流せられ尋で城下の獄に移さる三年八月十六日病歿す年二十四（筑前殉難志士傳）

ノムラ　セイラン　野村西巒　伊勢の儒者なり名は世業字は大受、津藩に仕ふ文政十年歿す年六十四西巒詩文集の著あり

ノムラ　カネノリ　野村包敬　英子と號す金工なり享保中江戸に住す

ノムラ　キウケイ　野村九圭　印龜工なり次郎又と稱し江戸に住す頗る蒔繪を能くす其の弟を樗平と云ひ次郎兵衛と稱す是れ亦妙手なりと云へり（裝劍奇賞、蒔繪師傳）

ノムラ　キウセイ　野村休盛　石州流の茶人なり片桐貞昌に學びて茶道を能くせり御數寄屋方となる（茶人系傳全集）

ノムラ　キウホ　野村休甫　蒔繪師なり俗稱源三郎古滿寛戯の門人にして後印龜蒔繪師野村九圭の養子となる（古滿系圖）

ノムラ　キヨシ　野村清　陸軍步兵中尉なり福井縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て後備步兵第五十七聯隊附として從軍中卅八年三月八日清國盛京省大小方士屯附近に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ノムラ　クハチラウ　野村九八郎　陸軍步兵少佐なり東京府出身にして明治卅七八年日露戰役に於て後備役より召集せられ後備步兵第十五聯隊附として從軍中卅八年三月八日清國盛京省小東溝東南方高地に於て戰死す戰功に依り勳四等功四級に叙せらる

ノムラ　グンキ　野村軍記　名は宗軌、字は子範、潛龍と號す初め通稱を左門といふ望岳舍金龍堂浣華溪の號あり父を明宗といひ世〻八月侯に仕ふ天資豪邁果斷幼より好んで百家の書を閱し最も經濟の學に長ず又兵馬の術に達す初め付に暫じ寺社奉行を兼ぬ此時藩の財政窘窮し君臣の疲弊甚だし藩主これを憂ひ願みて左右に問ふ誰か此に任ずべきやと左右皆軍記の用ふべきを曰ふ藩主乃ち軍記を召し藩政改革の事を以て命ず時に文政元年なり軍記此任を受けしより身を以て之に當り翌二年調役所を置き自ら之を總括し諸般の事務を行ひ志和郡より雲州所の米穀を以て年〻江戸邸に回漕し且つ魚鹽鹽油雜穀の類便宜に之を運送し曾て殿くる所の梁川藏邸に藏めて之を貿易に交易し江戸邸費及び參勤交替一切の費用に

桑事官等に歷任し頗る俠骨の聞えあり明治三十九年五月十六日病歿す年六十二

ノムラ　ヒウケイ　野村包敬　英子と號す

ノムラ　ヒウケイ　野村九圭　印龜工なり次郎又と稱し江戸に住す頗る蒔繪を能くす其の弟を樗平と云ひ次郎兵衛と稱す是れ亦妙手なりと云へり（裝劍奇賞、蒔繪師傳）

ノムラ　キウセイ　野村休盛　石州流の茶人なり片桐貞昌に學びて茶道を能くせり御數寄屋方となる（茶人系傳全集）

ノムラ　キウホ　野村休甫　蒔繪師なり俗稱源三郎古滿寛戯の門人にして後印龜蒔繪師野村九圭の養子となる（古滿系圖）

ノムラ　キヨシ　野村清　陸軍步兵中尉なり福井縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て後備步兵第五十七聯隊附として從軍中卅八年三月八日清國盛京省大小方士屯附近に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ノムラ　クハチラウ　野村九八郎　陸軍步兵少佐なり東京府出身にして明治卅七八年日露戰役に於て後備役より召集せられ後備步兵第十五聯隊附として從軍中卅八年三月八日清國盛京省小東溝東南方高地に於て戰死す戰功に依り勳四等功四級に叙せらる

ノムラ　グンキ　野村軍記　名は宗軌、字は子範、潛龍と號す初め通稱を左門といふ望岳舍金龍堂浣華溪の號あり父を明宗といひ世〻八月侯に仕ふ天資豪邁果斷幼より好んで百家の書を閱し最も經濟の學に長ず又兵馬の術に達す初め付に暫じ寺社奉行を兼ぬ此時藩の財政窘窮し君臣の疲弊甚だし藩主これを憂ひ願みて左右に問ふ誰か此に任ずべきやと左右皆軍記の用ふべきを曰ふ藩主乃ち軍記を召し藩政改革の事を以て命ず時に文政元年なり軍記此任を受けしより身を以て之に當り翌二年調役所を置き自ら之を總括し諸般の事務を行ひ志和郡より雲州の米穀を以て年〻江戸邸に回漕し且つ魚鹽鹽油雜穀の類便宜に之を運送し曾て殿くる所の梁川藏邸に藏めて之を貿易に交易し江戸邸費及び參勤交替一切の費用に

充て一歲出入決算の贏利を積て之を倉庫に貯藏する法を立つ是より先藩名藩〻諸藩商等皆之を輕侮し融通の道殆んど窮る軍記之を憂ひ因て當時有名の力士四賀峯等を抱へ歲俸を給ふ力士等至る處に八戸藩屈の名を帶び所在藩の富榮を說く是より商人等八戸藩富有の實あるを知り交際を求むる者多し四年吟味役ふを兼ね商船を遣作し物品を諸國に輸送し益〻通交を盛にす軍記改革に任ぜしより玆に三年財政の基畧ほ整ふ是より校心を內事に注ぎ開墾土木の業を起さんとし自ら新田開墾係を兼ねまた樹藝掛を置き漆櫨諸木を植ゑしむ其他社寺を築造し學校を設け諸技藝の師範職を立て儒醫を聘し祿を賜ひて子弟を敎育せしむ文政の初めより十二年にして改革の業整ふ藩主南部信眞大に其功を賞し名を軍記と賜ふ天保二年中老職兼側用人に任ず其歲整港整築の議を立て實行せんとし故ありて止む天保四年藩地大に飢ゆ藩主軍記を以て他藩に遣し米穀を我藩に糶せんことを命ず軍記四方附近の諸藩に至りて曾得ず僅に越後の新發田に至り一萬七千兩の米穀を購ふを獲これが回漕を約して復命す既にして期を過ぐるも到らず貧民益〻窮乏軍記焦心勞思人民の貯穀一人の粗稗三合に當らば以て翌米着港まで飢餓を救ふに足るべしと遂に吏を各村に派遣し民の貯穀を驗算せしむ時に訛傳して曰く一日一人の猛僅に三合の割を與に埋め或は床下に藏す吏等益〻嚴酷を極め探索を盛して之を檢す民心愈〻沸騰覺に所在の農民蜂起して城下に迫る藩主其臣某等に命じ論して之を鎭めしむ時に天保五年正月なり軍記之が爲めに罪を獲幽閉せらる其年十月廿日幽所に病死す年六十一是時藩其幽因を解かんとす其死を聞くに及び深く之を痛惜すと云ふ（日本教育史資料）

ノムラ　ケンギ　野村健治　陸軍步兵中尉なり新潟縣出身にして明治卅七八年日露戰役に於て第八師團步兵第十七聯隊附として從軍中三十八年三月七日清國盛京省楊士屯に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ノムラ　サクジラウ　野村作次郎　陸軍步兵中佐なり鹿兒島縣相瓦郡瀧生村の人原姓は黑川氏後祖母の家野村氏を嗣ぐ明治十三年上京して二松學舍

に入り後幼年學校に入り士官學校を卒業して二十一年七月步兵少尉に任ぜらる尋で中尉に進み士官學校教官に補せられ二十七八年日清戰役には兵站守備隊長として治績あり更に士官學校教官となり又臺灣守備隊附として十數回土匪討伐に從事して功あり大尉に進み勳五等に叙せらる三十六年少佐に昇任し翌年日露戰役起るや第八師團步兵第十七聯隊附として出征し三十八年一月二十八日清國盛京省黑溝臺の攻擊に猛烈なる夜襲を爲して優勢なる敵を驅逐せしが同時に身も復戰死す年三十八戰功に依り中佐に昇任し勳四等功四級に叙せらる

ノムラ　シヅヲ　野村鎭雄　陸軍步兵中尉なり愛知縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て後備步兵第九聯隊附として從軍中三十七年八月二十一日旅順要塞東鷄冠山に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ノムラ　シャウザエモン　野村庄左衛門　幕府の青具堆朱彫物師なり堆朱楊成と列を同くす（萬延武鑑、蒔繪師傳）

ノムラ　スケサク　野村助作　勤王家なり名は者通稱は宅之進後助作と改む筑前藩の馬廻組たり祖母望東尼と意を同うし時勢を傷み勤王の志厚く友人中村恒次郎無可の力を朝廷に竭さんと欲するや省に勤むるに同行を以てす事顯はるゝ五稱寧府に遷る時接伴を命ぜられ盡す所あり慶應元年十月二十三日玄界島に配流せられ尋で城下の獄に移さる三年八月十六日病歿す年二十四（筑前殉難志士傳）

ノムラ　セイラン　野村西巒　伊勢の儒者なり名は世業字は大受、津藩に仕ふ文政十年歿す年六十四西巒詩文集の著あり

ノムラ　ソウカグ　野村宗覺　野村源茶人の祖なり近江の人野村筑後守の男堺に住す吉右衛門と稱す千利休の門人（古今茶人系傳）

ノムラ　ソウタツ　野村宗達　畫人なり名は以悅、宗達は其の號、又伊年と號す又對青軒、劉青軒と曰ふ能登の人加州金澤に住す後ち京師に入り豐宗寺に寓す一時永德の畫法を學び後ち古土佐の筆意を取り泥を以て彩どるは宗達の一機軸なり畫く所の人物草花鳥獸は皆粗密に關せず人の意表に出で〻世人噴々之を稱す世に彼屋宗達と云ふ然るに其の人の傳に至りては二代三代あり一は野村氏一は喜多川氏と云ふ又伊年は二代目の號なりと云ふ諸說區々にして未だ一定せず然れども或る人言ふ多年の間宗達の畫數百を閱するに皆一人の筆意にして他筆を見ず故に伊年宗達は異名同人ならん乎否らずして若し他の人なりとせば其の畫恐くは拙陋にして世に稱するに足らざるものなるべし依て伊年宗達を稱し一人として可なりと寫山樓雪で宗達が筆源語繪屏の卷の圖を觀るに烏丸光廣卿の題歌あり殊に眞跡たり世上傳はる者多くは僞物なりと寛永年中の人（扶桑畫人傳、鑒定便覽、本朝畫史、畫乘要略、續本朝畫史、其他諸書）

ノムラ　タクサイ　野村琢齋　和學者にして續日本紀註解（四十卷）雪寃、生弓、殷雪志、櫻狩、千引磐等の著あり（和學者著述目錄）

ノムラ　タンサイ　野村澹齋　彥根侯の大夫庵原氏の臣なり名は正明、澹齋は其の號、父は正重頗る酒色の失あり澹齋諫て游獵を好み肝にして室者と爲る庵原氏甚だ驕恣にして游獵を好み漸く疎ぜらる主藩侯に從て東覲する此の行にして吾に命じて留守せしむ澹齋人に謂て曰く此の行にして吾れ從ふを得ざるは天か其れ此に在れば則ち主の驕恣と雖ども同列相制すると吾の數〻爭ふとを以て大過あるに至らず彼に在らば則ち事皆一意に決して憚る所なし吾恐らくは其の出づるを見て其入るを見て其入るを見ざるとを藩侯江戸より歸るに及びて果して罪を以て主を責め其の田宅を沒し之を某大夫の室に幽し盡く其の家臣を逐ひ

獨り澹齋と某〻三人とを以て庵原氏の族某家に放つ澹齋嘗に請ひて曰く主なりとして此に至らしむる者は皆な臣等の罪なり願くば臣等の身を以て有罪に踏し以て主の罪を贖はんことを願ひて命ず時に奸邪事を用ひて公室を蠹惑し謀施す所なし是に於て澹齋愈〻憂憤し私かに人を江戸に遣はし書を官廳に上りて庵原氏を復せんことを請ふ書辭懇到以て人を感動せしむるに足る前後凡そ六たび上る藩侯老し世子嗣ぐに及びて庵原氏を嚮ふし其の子をして家を繼がしむ其の田宅を賜ふこと故の如し是に於て主澹齋に命じて舊職に復せしむ職に居ること數年病みて歿す澹齋人と爲り方正にして人の爲に憚られ書を讀みて心を性理の學に潛む（事實文編）

ノムラ　チョヘイ　野村褘平　江戸の印籠蒔繪師にして九圭の弟なり次郎兵衛と稱し其技兄に劣らず（裝劍奇賞、蒔繪師傳）

ノムラ　ツトム　野村勉　海軍少佐なり岡山縣出身にして海軍機關學校に入り機關士となり後轉じて士官となり累進して海軍大尉に至る明治卅七年日露戰役起るや筑紫艦分隊長として出征し第三回旅順口閉塞の軍企てらるゝや自ら請ふて決死隊に加はり閉塞船小樽丸指揮官として五月三日の閉塞事業に參與し遂に戰死す年三十六戰功に依り直に海軍少佐に任じ勳五等功五級に叙せらる

ノムラ　トウイン　野村藤陰　儒者なり名は煥字は士章藤陰は其の號父名は龍左衛門大垣藩の步卒なり藤陰幼より學を好み年十八藩學の教授に補せられ尋で設を書藩拙堂に執り學大に進む擢でられて儒員と爲り幾くも無く侍講に進む是の時に當り海內多故列藩爭て文武を講ず藩老小原鐵心深く藤陰の人と爲りを知り委ねるに學政を以てす藤陰感奮躬を以て衆を率ゐ實學を先にし虛文を斥け廉恥を重し禮節を崇ぶ一藩翕然として之に從ふ慶應元年督學奎謀に進む評定局を置くに及び副總裁と爲り亞年寄に班し郡奉行加役を兼ぬ明治元年督學を拜し三等官に班し遂に大垣藩權少參事に進み專ら學務を管す一卒の徽より陞て藩老に伍す人以て異數と爲す五年八月大藏省に出仕し翌年親の病むを以て辭す三十二年三月十五日歿す年七十三藤陰人と

爲り端靖儀容修整言語溫然人と交るに畧城なし其の已を率るゝや僉官に在るゝ廉名を遊へず功を誇らず始終諄々焉たり緻心性豪邁寡て海内の豪傑と交り往々談論風發聖氣相加ふ既にして笑語歌管大に起る惟藩陰其の間に處り欽然靜默容愈恭しく而して氣愈々和く之に近く者覺えず自ら欽心之を見て益敬す（墓碣銘）

ノムラ　トウイチ　野村藤一　陸軍歩兵中尉なり兵庫縣出身にして明治廿七八年日露戰役に於て躍備役より召集せられ後備歩兵第四十聯隊附として從軍中三十七年十月二十三日清國盛京省三道崗子附近に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ノムラ　トモヨ　野村知夫　陸軍歩兵大尉なり石川縣出身にして明治卅七八年日露戰役に於て歩兵第七聯隊附として從軍中三十七年八月二十日清國盛京省五家房戰鬪の際負傷同二十二日鬪山子第九師團第三野戰病院に於て死去す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ノムラ　トウカウ　野村東皐（野村氏自ら修して野とす）儒者なり澹齋の子名は公臺、字は子賤、小字は新左衛門、近江の人澤榮所に學ぶ彦根侯に奉仕して儒官たり天明四年三月二十四日歿す年六十八（鑒定便覽）

ノムラ　トモヨシ　野村友喜　裝劍彫工なり野村家の元祖にして江戸に生れ阿州侯に仕ふ（裝劍奇賞）

ノムラ　ナホフサ　野村尙房　備前岡山の歌人なり通稱播六一技軒と號す京師に出て、宣阿法師に從ひ和歌を學て能く寶永中歿す（鑒定便覽）

ノムラ　ノリシゲ　野村法茂　裝劍彫工なり江戸の人世上間々其の銘を彫りし小刀柄の類往々散見するを見るに其の技甚だ巧みなり（裝劍奇賞）

ノムラ　ヒロンド　野村寛人　陸軍歩兵中尉なり廣島縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て第十師團歩兵第四十聯隊附として從軍中三十八年三月五日清國盛京省柳匠屯に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ノムラ　フミヲ　野村文夫　團々珍聞の創立者なり雨莊又蘆雨と號す廣島の人父は正碩世々眼醫

を業とす初め藩醫村田氏の養子となり虎吉と稱し後文櫻と稱す後大阪に出て緒方洪庵の弟子となり蘭學と醫を學び其眷顧を受て塾幹となる歸藩の後航海學の修業を命ぜられ又洋船購入の爲め長崎に赴く任了るの後再び長崎に遊び英學を修め慶應元年佐賀藩士石丸虎五郎馬渡八郎と英國に脫走す明治元年歸朝するや藩敢て之を咎めず洋學教授に擢て三年朝廷に召されて民部省出仕となる歷任して內務五等出仕に補し後辭して明治十年二月團々社を起す是れ日本滑稽雜誌の嚆矢なり是時生家に復し野村氏を冒す改進黨に入り後國民派に轉じ十七日竊を病て歿す年五十六著す所西洋見聞錄、洋語音譯筌、東西蒙求等あり

ノムラ　マサツグ　野村正次　裝劍彫工なり江戸京橋に住す阿州侯に愛せられ御抱となる野村忠吉の弟子なり（裝劍奇賞）

ノムラ　マサトキ　野村正時　金工なり後藤德乘の門に學び小左衛門と稱し宗德と號す延寶七年歿（新刀辨疑）

ノムラ　マタサブラウ　野村又三郎　大阪の狂言師なり其先は尾州家御抱狂言師にして和泉派に屬し斯道の重鎭たり明治四十年十二月三日病を以て逝く年七十二

ノムラ　モト　野村望東　尼は勤王家なり本姓は浦野氏名はもとと號に用ゐて望東と書す文化三年九月六日福岡城下厩後に生る浦野重兵衛勝幸の三女にして母は吉松次真の女なり大隈言道に學て和歌を能くすもと年二十四にして本藩の士野村新三郎貞實の後妻となり四十一歳の時夫貞實致仕し平尾村の山間に別莊を營み夫婦世塵を避け和歌を樂しむ五十四歳の時夫を喪び剃髮して望東と號す文久元年十一月和宮降嫁す望東其の行列を拜せんと欲し京に登り海路逆風に遭ふて其期に後れ翌年四月まで滯在して所々を遊覽す年十月神奈川縣令に任じ十九年三月遞信次官に任ず二十年五月特旨を以て華族に列せられ勳功に依り子爵を授けらる二十一年樞密顧問官に任じ二十四年三月佛國駐劄特命全權公使に任ぜられ次て四班牙、葡萄牙兩國駐劄公使兼勳仰付けらる二十七年十月內務大臣に任ぜられ二十九年九月遞信大臣となり三十三年三月三度樞密顧問官に任ぜらる四十年十月富美宮泰宮兩親王御養育掛長仰付けられ以て晩年に至る四十二年一月二十四日病危篤に臨み特旨を以て位一級を進め正二位に叙せられ旭日桐花大綬章を授けらる

ノムラ　ヤタラウ　野村矢太郎　陸軍歩兵少尉なり鹿兒島縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て歩兵第四十六聯隊附として從軍中三十七年七月卅一日清國盛京省榆樹林子附近に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ノムラ　ヨシユキ　野村嘉之　四郎兵衛と稱し幕府の詩繪師なり元祿二年幸阿彌長敎と共に日光東照公の宮殿に詩繪せり（幸阿彌系圖）

ノムラ　キシヤウ　野村維章　長州の人維新の際功勞あり後檢事となり正三位に叙せられ男爵を授けらる明治三十六年五月八日中風症より腦溢血に罹じ六十一歳を以て逝く病危篤なるに臨み維新前後の功勳により特に位勳一等を進叙せられ侍從を其邸に遣はして幣帛を賜ふ

ノムラ　ヨン　野村溫　靜宜軒と稱し儒を業とす靜宜軒稿採花集の著あり（諸家著述目錄）

ノムラ　エイ　野本璿　陸軍歩兵大尉なり千葉縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て第一師團歩兵第二聯隊附として從軍中三十七年五月二十六日清國盛京省南山に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ノモト　セツガン　野本雪巖　中津藩の儒者にして名は晃字は謙卿、通稱亮右衛門、初め元良、一に橋齋と號す筑前宇佐郡白岩村の產全庵の子なり家學を業とす雪巖醫を屑しとせず年十七名家に師事して學ばんとするも家貧しうして資なし書を苦學す初め原田東岳倉成龍渚に學び年二十二京都に遊び和田太淳に寄食し赤松洽洲松本愚山に學び居ること四年にして郷に歸り子弟を敎授す天明四年藩の儒者に擢でらる會々倉成龍渚藩命を奉じて家を江戸邸に移す則ち其宅を賜ひ代つて敎諭す子弟益々進む明年藩其宅を收めて學館を建つ是に於て龍渚と命を奉じ學規を制し釋菜を行ふ文敎是に於て大に興る文政六年召されて江戸に赴き藩公に侍讀す天保五年十二月三日家に歿す年七十四雪巖人と爲り樸直其學ぶ性精識卓氣岸あり學實用を專とし博く治體に達す詩書說、論語全書註解、明官略、俗語彙、租稅新論等あり人なり片桐貞昌に學びて茶道を能くせり（茶人系傳全集）

ノモト　ダウゲン　野本道元　石州流の茶人なり片桐貞昌に學び朱子學を奉じ中津侯に仕へ寵議し大に執政の爲めに忌まれて蟄居す弘化四年秋村に兒童を敎授す嘉永二年又四日市に移る同三年歐國の使船長崎に至るに及び慨然として書を水戸齊昭に上りて邊防の事を論ず翌年江戸に至りしも志を果さずして歸り白岩村の舊宅を治め書生を敎授して居る安政三年七月三日歿す年六十白巖弱冠京師に遊び賴山陽に古文を學ぶ性精識卓氣岸あり學實用を專とし博く治體に達す詩書說、論語全書註解、明官略、俗語彙、租稅新論等あり（日本敎育史資料）

ノモト　ハクガン　野本白巖　中津藩の儒者にして名は璂、字は白美、通稱武三、亂城山人と號す雪巖の子なり家學を受け又帆足萬里に學び朱子學を奉じ中津侯に仕へ寵議し大に執政の爲めに忌まれて蟄居す弘化四年秋村に移る同三年歐國の使船長崎に至るに及び慨然として書を水戸齊昭に上りて邊防の事を論ず翌年江戸に至りしも志を果さずして歸り白岩村の舊宅を治め書生を敎授して居る安政三年七月三日歿す年六十白巖弱冠京師に遊び賴山陽に古文を學ぶ性精識卓氣岸あり學實用を專とし博く治體に達す詩書說、論語全書註解、明官略、俗語彙、租稅新論等あり（日本敎育史資料）

ノモト　ヤスス　タロヨ　野安多魯　陸軍歩兵大尉なり高知縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て歩兵第三十六聯隊附として從軍中三十七年八月十九日旅順要塞龍眼北方角面堡壘に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ノモヤ　ツネカタ　野矢常方　會津の和學者なり涼齋又は蟄蟄園又は蟄園と號す初めは駒之丞と稱し後に嘉右衛門と稱す通稱は豫之丞と稱す文化年間の人なり或は云ふ商は高の誤なりと（古今鍛冶目錄）

ノリアキ　則商　備前長船の刀匠にして文龜永正年間の人なり或は云ふ商は高の誤なりと（古今鍛冶銘早見出）

ノリイヘ　則家　山城京都の刀匠にして文安年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ノリイヘ　則家　藤原姓八郎と稱す加賀の刀匠にして天正年間の人なり（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ノリイヘ　則家　加賀の刀匠にして寛永年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ノリイヘ　則家　備前福岡一文字派の刀匠にして助房の壻なり寶治年間の人或は云正應比の人後相模鎌倉に住す或は則宗の門人なり或は助眞と共に相模山內に移り住す弘長比の人新五郎と稱す或は助眞の子藤源次と稱す正治二年に生れ建治二年に歿す年七十八なりと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考）

ノリイヘ　則家　備後三原の刀匠にして文明年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ノリウヂ　則氏　越前子代鶴派の刀匠にして文祿年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ノリウヂ　則氏　備前の刀匠にして建武比の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ノリカヂ　則景　備前福岡一文字派の刀匠にして天福年間の人なり或は云則高の子にして暦仁仁治年間の人なりと（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考）

ノリカヂ　則景　備前の刀匠弘安年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ノリカヂ　則景　備前長船の刀匠にして應永年間の人なり或は云應安比の人なりと（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ノリカヂ　則景　備前長船の刀匠にして享德年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ノリカヂ　則景　薩摩古刀の鍛工なり或は云ふ波平派にして德治年間の人なりと（古今鍛冶銘早見出）

ノリカヂ　則景　備前長船の刀匠にして明德年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ノリカヂ　敎景　朝倉氏目下部と稱す越前の刀匠にして享祿年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ノリカゼ　御風「カダミカゼ」

ノリカヂ　德方「ゴトウセイジヨウ」二世

ノリカツ　則家　山城京都の刀匠にして文安年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ノリカツ　德勝　勝村彥六と稱す常陸水戸藩の

本心の數にいりなば」是より先太宰府蟄居の五卿に密謀せしに因ると云ふ同年十月姫島に流され烈風激浪の海邊に小獄を造りて居る時に同志の壯士餘人皆刑に處せらるゝと聞き者血を刺して心經を書し詠歌を添て密に其家族に送り以て弔ふ曰く「後れ居てかくも甲斐なし法の文よみかへりこむ傳ならなくに」又幽閉以後流島の日記を「いきのわかれ」「流れ木」「うくひす」の三編に列記し題して比賓島日記と曰ふ同二年九月同藩の浜士藤四郎親茂高杉晉作と謀り不意に姫島に入り獄を破り望東を奪ひ去り馬關に留め婢女を屬して勞養す後三田尻に移し適ゝ病あるを以て藤茂親澄川艳等晝夜其側に侍す國主毛利氏衣物菓子を與へ且つ吏人をして看護に供す又侍醫をして疾病を訪ふ望東自から死を期して「花浦の松の葉白く置霜と消るはあはれ一さかりかな」と詠じて永眠す時に慶應三年卯十一月十三日年六十二其の地桑山の麓に葬る維新の後旌忠祠に祭らる明治廿四年十二月十七日正五位を贈らる

ノムラ　モトノリ　野村意德　裝劍彫工なり庄左衛門と稱し江戸に住す友喜の父にして其彫技甚だ巧みなり（裝劍奇賞）

ノムラ　モリシゲ　野村盛茂　陸軍騎兵少尉なり宮崎縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て騎兵第十三聯隊附として從軍中三十七年五月卅日清國盛京省曲家店に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ノムラ　ヤスシ　野村靖　薯山口藩士野村嘉傳次の次男にして天保十三年八月を以て生る少うして吉田松陰の門に入り最も師の信頼を得門下生中俊秀の聞えあり維新の際國事に奔走し頗る功あり明治四年七月初て宮內權大丞に任ぜられ次て外務大記に任じ十月岩倉全權大使に隨從し歐米各國に差遣せられ六年七月歸朝す九年一月更に全權辨理大臣黑田清隆に隨て朝鮮に赴き同年五月歸朝勅語及び金品を下賜せらる十一年十月神奈川縣令に任じ十九年三月遞信次官に任ず二十年五月特旨を以て華族に列せられ勳功に依り子爵を授けらる二十一年樞密顧問官に任じ二十四年三月佛國駐劄特命全權公使に任ぜられ次て四班牙、葡萄牙兩國駐劄公使兼勳仰付けらる二十七年十月內務大臣に任ぜ

刀匠にして安政元治年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ノリカツ 德勝 常陸水戸藩の士にして鍛冶を能くす元治年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ノリカツ 宣勝 奚作の刀匠にして後肥後熊本藩の冶工となる弘化元治年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ノリカネ 則兼 山城の刀匠にして來氏應安年間の人なり或は云永和比の人或は則守の子暦應元年に生れ應永七年に歿す年六十三と又云ふ至德比の人と（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考）

ノリカネ 則兼 山城大宮の刀匠中納言と稱す又一文字を銘す信兼と同人なりと（古今鍛冶銘早見出）

ノリカネ 則兼 太郎兵衛尉と稱す備前長船の刀匠にして永享比の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ノリカネ 則包 近江の刀匠粟津の一派にして來氏永和年間の人なり（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ノリカネ 則包 出雲の刀匠にして道永と冒稱す至德年間の人なり或は云建武比の人雲上と同人なりと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

ノリカネ 則包 備前國岡一文字派の刀匠にして助房の子なり建長年間の人或は云ふ豐原萬壽莊に住すと又云助則の二子にして左近太郎と稱す天福比の人或は助則の嫡子なり或は弘長比の人と（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考）

ノリカネ 則包 備前の刀匠にして永文年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ノリカネ 則包 備前の刀匠にして觀應年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ノリカネ 則包 備前長船の刀匠にして嘉吉年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ノリカネ 德兼 關内彦四郎と稱す常陸水戸の刀匠幸右衛門德宗の子にして宗次の門人文久元治年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ノリカネ 德包 常陸水戸の刀匠にして安政元治年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ノリカネ 代包 新刀の鍛工にして武藏の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ノリキ トクヨウ 法木德翁 東京日本橋の人新聞實擅業者の元祖として又花柳界の通人として知らる純粹の江戸趣味の人にして市の公共事業に奔走する所あり明治四十一年二月十六日病死す年七十八

ノリキヨ 則清 山城粟田口の刀匠にして天福年間の人なり或は云國清の門人又は國綱の門人にして文應文永年間の人と又云弘安比の人と（古今鍛冶備考、古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考）

ノリキヨ 則清 山城京都の刀匠にして行景の門人應永比の人なり（本朝鍛冶考）

ノリキヨ 則清 因幡の刀匠にして至德應永年間の人或は云則長の子若くは門人にして平治比の人或は延文比の人と並し別人なるべし（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考）

ノリキヨ 則清 出雲道永派の刀匠にして寛正年間の人國は備前吉井なり或は云安安比の人と又云清則の子にして應仁比の人或は永享比の人と（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考）

ノリクニ 則國 林氏藤右馬允と稱す山城粟田口の刀匠國友の子にして承久の番鍛冶なり或は云ふ秘銘香の一字を用ふ又行宗と曰ふと又云其子則國も亦藤右馬允と稱す藤六左近の門人にして天福嘉禎年間の人なりと（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考）

ノリクニ 則國 京都の刀匠にして寛文年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ノリクニ 則國 大和尻掛の刀匠にして延文年間の人或は云則長の子若くは門人にして平治比の人或は延文比の人と並し別人なるべし（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

ノリクニ 則國 伯耆の刀匠にして則恒の子萬壽比の人なり（本朝鍛冶考）

ノリクニ 則國 伯耆の刀匠にして則重の門人なり（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ノリクニ 則國 伯耆の刀匠にして小鴨に住す二世則國は初代則國の子にして天喜比の人なり（本朝鍛冶考）

ノリクニ 則國 出雲道永派の刀匠にして則重の子正應比の人なり（本朝鍛冶考）

ノリクニ 則國 伯耆の刀匠にして正長年間の人なり或は云嘉吉比の人にして尻懸に住すと又云助長の子にして永德明德年間の人と（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考）

ノリサダ 則貞 越中の刀匠にして則重の門人貞和年間の人なり（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ノリサダ 則貞 出雲道永派の刀匠にして正長年間の人なり或は云重則の子にして應永比の人或は吉則の子なりと又云ふ本國備前吉井にして出雲に移ると（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考）

ノリサダ 則貞 備前の刀匠にして正和年間の出、古今鍛冶備考）

ノリクニ 敎國 筑後大石の刀匠にして永正大永年間の人なり或は云ふ三池の水流にして豐後に住すと（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考）

ノリクニ 順城 古刀の鍛工にして住地年代詳ならず或は云ふ山城の刀匠源左衛門信國の法號なりと（古今鍛冶銘早見出）

ノリコ 敎子 後村上帝の宮人なり其の姓氏を逸す從二位に叙し世泰親王を生む世泰薨ず如意輪寺に葬る明年敎子如意輪寺に往き冥福を修す後龜山帝和歌を賜ひ之を慰む敎子答歌を奉じ益〻之を哀む（大日本史）

ノリコ ナイシンワウ 範子内親王 高倉天皇第一（或は曰ふ第二）の皇女なり母は櫻町中納言成範の女治承二年六月二十七日内親王となり同日賀茂齋院となる養和元年正月十四日高倉天皇崩御に因りて齋院を退下す建久九年三月三日皇后宮となる土御門帝の准母たるを以てなり建永元年九月二日院號を許されて坊門院と號す承元四年四月十二日薨ず年三十四（女院小傳）

ノリコ ナイシンワウ 禮子内親王 後鳥羽天皇第二の皇女なり母は太秦内大臣信隆の女正治二年生れ元久二年六月二十三日内親王となり同日賀茂齋院となる建暦二年九月四日病に依り退下す建保二年六月十日院號ありて嘉陽門院と號す承久二年五月二十二日出家す時に年二十法名眞如性文永十年八月二日薨ず年七十三（女院記、女院小傳）

ノリサダ 則貞 大和の刀匠にして正長比の人なり或は云嘉吉比の人にして尻懸に住すと又云助長の子にして永德明德年間の人と（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考）

ノリサダ 則貞 越中の刀匠にして則重の門人貞和年間の人なり（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ノリサダ 則貞 出雲道永派の刀匠にして正長年間の人なり或は云重則の子にして應永比の人或は吉則の子なりと又云ふ本國備前吉井にして出雲に移ると（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考）

ノリサダ 則貞 備前の刀匠にして正和年間の

人なり或は云ふ福岡一文字派にして應長比の人と又云助常の子にして延慶比或は弘安比の人なりと（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考）

ノリサダ 則貞 豐後杵綱郷の刀匠にして寶德年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ノリサダ 則定 藤原姓京都の刀匠木國は三河矢矧にして寛永年間の人なり（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

二世則定は京都に住す貞享年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ノリサダ 則定 藤原姓豐後の刀匠にして杵綱則貞の裔元祿年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ノリサダ 度定 天文年間の刀匠にして何れの人なるを詳にせず或は云ふ豐後の人なりと（古今鍛冶銘早見出）

ノリザネ 則眞 大和の刀匠にして尻掛則成の子なり貞治年間の人或は云則弘の子にして大治或は觀應又は應永比の人なり又云暦應比の人と（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考）

ノリザネ 則眞 備前長船の刀匠にして德治年間の人なり或は云一文字の派なりと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

ノリザネ 則眞 備前の刀匠にして建武比の人なり或は云長船の派にして寛元比の人と（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考）

ノリザネ 則眞 備中片山の刀匠則常の子にして建治年間の人なり或は云正應比の人と一に則實に作り應安或は正長比の人となす（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考）

ノリザネ 則實 備中青江の刀匠眞行の二子にして則高の弟建久比の番鍛冶二十四人の一なり或は云ふ秘銘に枝橋を彫ると又云承元中の番鍛冶にして十二月の番に充らると（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考）

ノリザネ 則實 備中片山の刀匠にして弘長年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ノリザネ 則實 紀伊入鹿の刀匠景實の子にして彦四郎と稱し粉川に住す永享嘉吉年間の人なり或は云文正比の人なりと（古今鍛冶備考、本朝鍛冶考）

ノリザネ 則心 備前長船の刀匠にして應安年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ノリシゲ 則貞 山城平安城の刀匠にして天正年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ノリシゲ 則重 藤原姓尾張の刀匠にして寛文年間の人なり（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ノリシゲ 則重 相模の刀匠にして正中年間の云越中婦負郡吳服山佐伯の人にして相模に來り正宗の門人と爲ると（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考）

ノリシゲ 則重 薩原姓武藏川越久保市の刀匠にして寛元年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ノリシゲ 則重 五郎三郎と稱す一に五郎次郎則重五郎三郎正匠にして初め郷襲弘後相模に赴き五郎正宗の門人となる刀劍を傳を受け其微妙を得たり或は云ふ執行の期諧て既に本國に歸らんとす時に真宗相弟子の情を以て相州より送り來たる則重真宗に謂て曰く鄙夫未に鍛刀の妙み得ず先生願くは姑く足を止めて水火の法を授けられんことを と真宗之を許し遂に足を止めたりと云ふ延慶嘉暦年間の人なり或は云文保正中比の人世に吳服郷と稱すと又云正應二年に生れ貞治中歿す七十八歳なりと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考）

ノリシゲ 則重 越後義弘流の刀匠にして亦相模に住す貞治年間の人なり或は云越中義弘の門人なり又云相模及越中の則重と同人なりと（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考）

ノリシゲ 則重 丹後の刀匠にして天文年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ノリシゲ 則重 備前長船の刀匠にして應永年間の人なり或は云守助の門人にして至德比の人と（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

ノリシゲ 則重 備前長船の刀匠にして天文年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ノリシゲ 則末 山城三條の刀匠にして永承年間の人なり或は云萬里小路に住す又云豐後安則の門人後肥前諫早に住すと（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考）

ノリスエ 則末 備前長船の刀匠にして顯則の子養和壽永年間の人なり（本朝鍛冶考）

ノリスエ 則末 備前の刀匠にして貞和年間の人なり或は云長船に住すと（古今鍛冶銘早見出）

ノリシンゲ 則重 薩原姓豐後高田の刀匠にして永祿年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ノリシゲ 則重 薩摩古刀の鍛工なり或は云ふ波平派にして建治年間の人と（古今鍛冶銘早見出）

ノリシゲ 儀重 大隅の刀匠にして天正年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ノリシゲ 憲重 上野の刀匠にして天正年間の人なり或は云天文比の人と（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

ノリシゲ 意重 日向の刀匠にして慶長年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ノリシロ 應代 肥後古刀の鍛工なり或は云ふ延壽の裔なりと又云ふ文龜比の人廣代の誤なるべしと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

ノリスケ 則助 備前福岡一文字派の刀匠にして是助の子弘長比の人なり或は云建長比の人にして亦吉岡に住すと（本朝鍛冶考）

ノリスケ 則助 備前の刀匠にして文永正應年間の人なり或は云ふ福岡に住す又云助高の子或は信包の弟子なりと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

ノリスケ 則助 備前長船の刀匠にして永享年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ノリスケ 則助 來氏山城の刀匠にして貞享年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ノリスケ 法助 備前長船の刀匠にして文明年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ノリスケ 則季 京師の人高倉天皇の時の蹴鞠師なり安元元年後白河上皇五十の賀宴を開き天下の諸工藝の俊秀なる者を召見す則季召されて其の席に列る時人稱して名譽となす（工藝志料）

ノリスエ 則末 山城三條の刀匠にして永承年間の人なり或は云萬里小路に住す又云豐後安則の門人後肥前諫早に住すと（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考）

ノリスエ 則末 備前長船の刀匠にして顯則の子養和壽永年間の人なり（本朝鍛冶考）

ノリスエ 則末 備前の刀匠にして貞和年間の人なり或は云長船に住すと（古今鍛冶銘早見出）

ノリスエ　則末　備前長船の刀匠にして應永比の人なり（古今鍛冶備考）

ノリスエ　則末　初名利成敢位則末と稱す肥前伊佐早の刀匠にして曆應貞和年間の人なり亦大村に住す或は典太と稱すと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）二世則末は敢位と稱し肥前に住す應永年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

則末は敢位と稱し伊佐早に住し又大村に住す文明年間の人なり或は之を三世と爲すと云ふ（古今鍛冶銘早見出）

ノリスエ　則末　肥前増田の刀匠にして敢位則末の裔寛文年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ノリスエ　則末　肥後古刀の刀匠なり或は云ふ貞治年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ノリタカ　則高　備前の刀匠にして寶治年間の人なり或は云行高の子にして建暦建保年間の人或は行高の門人なり又は福岡一文字の一派にして建治比の人なりと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考）

ノリタカ　則高　備中青江の刀匠にして承安年間の人なり或は備前正恒の裔にして眞行の子瀬尾刑部丞又は刑部四郎と稱す元暦比の人なりと云ふ（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考）

ノリタカ　則高　備中片山の刀匠にして寛元年間の人なり或は云一文字則房の子にして貞和比の人妹尾刑部四郎と稱すと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

ノリタカ　則高　備中片山の刀匠にして應永比の人なり（本朝鍛冶考）

ノリタケ　サンダイフ　則武三太夫　堀尾吉晴信長に從て武田氏を伐つ時に三太夫亦從ひ往く武田果代の重臣小山田信茂勝頼に背て欺き織田氏に通じ命を善光寺に待つ信忠其の不義を憎み吉晴に命じて之を誅せしむ吉晴乃ち三太夫を遣はし竊に謂て曰く僞て甲冑を贈り彼れ賜を拜する際刺して殺すべしと三太夫命を領し使命を述ぶ信茂出て其の賜を受く時に三太夫手を出さず從容良久くして面を正し信茂に謂て曰く足下武田氏の部將にして數世の重恩を荷ふ今國の亡るに當り主に畔き降を納る是れ法の假さざる所なり足下自ら計を爲せ信茂其の欺かるゝを憤り曰く事此に至る運命逃るゝ所なし速かに斬れと三太夫猶ほ動かず信茂刀柄を攝り呼び曰く吾事已んなんと三太夫其の聲に應じ起ながら之を斬る

ノリタケ　カウタラウ　乗竹孝太郎　經濟學者なり舊但馬出石藩士にして年十六の時東京に出て尺振八の塾に入りて英語を學び業を卒へて後同塾の助教と爲る明治十二年經濟雜誌社に入り爾來諸種の飜譯稿叢の業に從事すると共に田口卯吉の指導に依りて經濟學を修め東京經濟雜誌に筆を執り又嘤鳴社に入り行の機務に參するや社友同人の希望に依り入りて經濟雜誌社長と爲り再び鉛槧に從事し先輩の遺志を襲ぎて熾んに自由貿易論を主張し倶々鬥々の論を樹つ四十二年一月五日急病を以て遽逝す年五十資性醇厚廉直義を重んじて利を輕んじ能く其責に任ず其著譯中スペンサーの社會學原理最も著名なり

ノリタケ　トウコク　乗竹東谷　字は子寶九郎右衛門と稱す東谷は其の號但馬出石の人なり世々仙石侯に仕ふ東谷幼にして櫪井長翰に從學し博聞強記果毅能く斷ず一曾嘗て裁判に服せず佛經を引て辯論す東谷即ち亦佛經を引て折辯す曾終に服す歷任して家老となり四百石を食む當時藩士武を尚び文を好まず東谷其の主大慈公を輔け學校を起し伊藤東所を聘して開講し弘道館と稱す寛政六年四月歿す年六十二（墓碑、日本教育史資料）

ノリタダ　則忠　備後三原の刀匠にして文和年間の人なり或は云年代詳ならずと（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ノリタダ　意忠　日向の刀匠にして古屋に住す（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ノリチカ　則近　備前福岡一文字派の刀匠にして天正年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ノリチカ　則近　備前福岡一文字派の刀匠にして鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考）

ノリチカ　則近　備前長船の刀匠にして文安年間の人なり或は云年代系譜詳ならずと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

ノリチカ　德鄰　市毛近江介と稱す水戸の刀匠にして文政嘉永年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ノリツグ　則次　藤原姓常陸の刀匠にして寛永年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ノリツグ　則次　薩兵衛尉と稱す備前長船の刀匠にして承元中の番鍛冶廿四人の一六月の番なり或は云恒光の子にして長承以降順德帝御宇年代の人なりと（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考）

ノリツグ　則次　左兵衛尉と稱す備前新田莊の刀匠にして正和暦應年間の人なり（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ノリツグ　則次　備前長船の刀匠にして大永年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ノリツグ　則次　備中青江の刀匠にして寛元年間の人なり或は云ふ但次の門人にして建暦比の人なりと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

ノリツグ　則次　備中の刀匠にして弘安年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ノリツグ　則次　備中の刀匠にして直次の子文和比の人なり（本朝鍛冶考）

ノリツグ　德次　日向延岡藩の刀匠にして正義の孫元治年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ノリツナ　則綱　出雲の刀匠にして寛正比の人なり或は云助綱と同人なりと（本朝鍛冶考）

ノリツナ　則綱　出雲の刀匠にして景則の二子應永文安年間の人なり（本朝鍛冶考）

ノリツナ　則綱　備前長船の刀匠にして景長の二子正和比の人なり或は云元亨比の人と（本朝鍛冶考）

ノリツナ　則綱　備前福岡一文字派の刀匠にして正和建武年間の人なり（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ノリツナ　則綱　備前吉井の刀匠にして眞則の門人なり明德應永年間の人（古今鍛冶銘早見出）

則綱は亦則繩に作る備前吉井の刀匠にして嘉吉寛正年間の人或は之を二世とし後出雲に住すと云ふ（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ノリツナ　則綱　源姓坂原善助と稱す安藝の刀匠にして本國は肥前佐賀なり則房と共に安藝廣島に移る寛文延寶年間の人（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備

考）

ノリツナ　則繩　備前福岡一文字派の刀匠にして則助の子正應永仁年間の人なり或は云嘉元比の人と（本朝鍛冶考）

ノリツナ　則繩　備前吉井の二世則綱か看よ

ノリツナ　德綱　平姓豐後高田の刀匠にして天正文祿年間の人なり（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ノリツナ　乘繩　源姓嘉暦の士にして好んで鍛を爲す嘉永年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ノリツネ　則常　大和の刀匠にして建久年間の人なり陸奥の刀匠上一丸は即ち是れなり或は云天延比の人と又云年代系譜詳ならずと（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考）

ノリツネ　則常　陸奥舞草派の刀匠にして光恒の子承安安元年間の人なり（本朝鍛冶考）

ノリツネ　則常　備前長船の刀匠にして後備中に移住す權太夫と稱す貞應比の人なり或は云文應比の人と（古今鍛冶備考）

ノリツネ　則常　備前吉岡一文字派の刀匠にして源太夫と稱す弘安正應年間の人なり或云家則の子にして仁治寛元年間の人と（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考）

ノリツネ　則常　備中青江の刀匠にして爲則の子寛喜比の人なり（本朝鍛冶考）

ノリツネ　則常　備中片山の刀匠にして則房の子なり曆仁年間の人或は云貞和比の人なりと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

ノリツネ　則恒　伯耆の刀匠にして家時の二子寛弘比の人なり（本朝鍛冶考）

ノリツネ　則恒　伯耆の刀匠にして文曆年間の人なり或は云宗隆の二子にして嘉祿比の人なり又云寛喜比の人と（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考）

ノリツネ　則恒　備前の刀匠にして元暦比の人なり或は云久壽比の人又云長船安家の門人にして天永比の人或は寛治康和年間の人なりと（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考）

ノリツネ　則恒　備前の刀匠にして嘉吉年間の人なり或は云則綱の族にして吉井に住すと（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ノリツネ　則恒　備前長船の刀匠にして則重の子應永比の人なり（本朝鍛冶考）

ノリツネ　則經　備前の刀匠にして元暦比の人なり或は云正暦比の人なりと（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ノリテル　則耀　伯耆の刀匠にして光信（重利の子）の子延喜比の人なり（本朝鍛冶考）

ノリテル　則耀　伯耆大原の刀匠にして光信（近饒の子）の子延慶比の人なり（本朝鍛冶考）

ノリテル　則輝　一に則耀に作る伯耆小鴨の刀匠にして文永年間の人なり或は云大原の人則恒の子にして文應弘長比の人と（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

ノリテル　則輝　一に則耀に作る備前福岡一文字派の刀匠にして應永年間の人なり（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ノリテル　則輝　一に則耀に作る備前福岡一文字派の刀匠にして延文貞治年間の人と（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考）

ノリトキ　則時　備前の刀匠にして延文年間の人なり或は云福岡一文字の派にして則貞の子正慶建武年間の人と（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

ノリトキ　則時　備前福岡一文字の末流にして明德應永年間の人なり或は云正長永享年間の人と（古今鍛冶備考、本朝鍛冶考）

ノリトキ　儀則　備前吉井の刀匠にして文明年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ノリトシ　則利　常陸大目益壽入道と號す越前の刀匠にして則光の末裔利重の族元祿年間の人なり（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ノリトシ　則利　富士太郎と稱す或は藤太郎に作る越中奥服山の刀匠にして同國郷則重十六世の裔なり亦常陸水戸に住す天和貞享年間の人（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

二世則利は藤原姓通稱其右衛門武藏の刀匠にして富士則利と稱す亦常陸水戸に住す享保年間の人なり（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ノリナガ　則長　山城京都の刀匠にして應永後の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ノリナガ　則長　山城京刀の鍛工なり或は云平安城則長と銘す綾小路に住す正安比の人亦則永に作ると（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考）

ノリナガ　則長　大和尻懸の刀匠にして則弘の子なり元德應長年間の人或は云太郎左衛門と稱す大治比或は正應又は元應比の人なりと又云ふ三郎と稱すと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考）

二世則長は初代則長の子左近允と稱し大和尻懸に住す元德曆應年間の人なり或は云平治比或は文永或は正和又は元亨正中年間の人と（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考）

三世則長は二世則長の子應永年間の人なり或は云ふ尻懸に住すと或は延元比の人又は貞治比の人なりと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考）

四世則長は大和に住す應永永享年間の人なり（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ノリナガ　則長　加賀の刀匠にして近則の子文明年間の人なり（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

ノリナガ　則長　丹波佐伯の人にして古刀の鍛工なり或は云ふ長享年間の人と（古今鍛冶銘早見出）

ノリナガ　則長　備前長船の刀匠にして應永年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ノリナガ　則長　備前長船の刀匠にして天文年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ノリナガ　則長　横山安之進と稱す備前長船の刀匠にして長次の子寛政文化年間の人なり（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ノリナガ　則永　大和の刀匠にして永正年間の人なり或は云ふ則長と同人亦京都に住すと或は山城京都の刀匠にして綾小路に住す一名則長正安比の人なりと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考）

ノリナガ　敎永　藤原姓筑後大石の刀匠にして家永の子文明文龜年間の人なり或は云ふ亦安藝に住す

と(古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考)

ノリナホ 德直 姓名を宗田又兵衛と云ふ又入道直道とも云ふ京都の金工なり

ノリナホ 則直 大和尻掛の刀匠にして則眞の子應永年間の人なり或は云則長の門人にして應安比の人なりと(古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考)

ノリナホ 則直 備前福岡一文字派の刀匠にして則繩の子正慶建武年間の人なり或は云嘉元比の人なりと(古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考)

ノリナホ 則直 備前長船の刀匠にして助則の子永和比の人なり(本朝鍛冶考)

ノリナホ 則直 備前吉井の刀匠にして應永年間の人なり(古今鍛冶銘早見出)

ノリナリ 則成 大和尻懸の刀匠にして初代則長の子正和年間の人なり或は云則弘の子にして大治比の人或は觀應比又は建武比の人と(古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考)

ノリナリ 則成 出雲の刀匠にして大和則弘の門人康元年間の人なり(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考)

ノリナリ 則成 備前の刀匠にして建治年間の人なり或は云ふ吉岡に住すと(古今鍛冶銘早見出)

ノリナリ 則成 備前長船の刀匠にして應永年間の人なり或は云則龍の子にして永享比の人と(古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考)

ノリノブ 則宣 美濃上有知の刀匠にして天正年間の人なり(古今鍛冶銘早見出)

ノリノブ 則延 備前の刀匠にして元暦年間の人なり或は云壽永比の人又云長船恒光の子にして保延永治年間の人と(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考)

ノリノブ 範宣 備前長船の刀匠にして則直の子文和比の人なり(本朝鍛冶考)

ノリノブ 範宣 備前吉岡一文字派の刀匠にして貞治年間の人なり(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考)

ノリノブ 範宣 備前福岡一文字派の刀匠にして則繩の子永德比の人なり(本朝鍛冶考)

ノリヒサ 則久 備前の刀匠にして建武比の人なり(古今鍛冶銘早見出)

ノリヒサ 則久 備前長船小反の刀匠にして則重の二子應永比の人なり(本朝鍛冶考)

ノリヒサ 則久 備前吉井派の刀匠にして嘉吉年間の人なり(古今鍛冶銘早見出)

ノリヒサ 典壽「ヤマモトジヨシユンサイ」

ノリヒト シンワウ

ノリヒト シンワウ 典仁親王「スケヒト」

ノリヒデ 則秀 備前長船の刀匠にして文明年間の人なり或は云宗吉の子にして應仁比の人又云安比の人と(古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考)

ノリヒト 敎仁 一名行吉山城の刀匠にして元暦比の人なり(古今鍛冶銘早見出)

ノリヒラ 則平 備前の刀匠にして天龜文暦年間の人なり或は云ふ福岡に住すと(古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考)

ノリヒロ 則廣 藤原姓富士と稱す攝津の刀匠にして則房の族寛文年間の人なり亦た武藏江戸に住す(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考)

ノリヒロ 則廣 源姓丹羽氏通稱は傳右衛門相模守と稱す本國は紀州石堂派にして攝津大阪に住す貞享年間の刀匠なり(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考)

ノリヒロ 則廣 一名廣吉藤原姓にして近江高木の刀匠寛永年間の人なり(古今鍛冶銘早見出)

ノリヒロ 則廣 備前古刀の鍛工或は云ふ應永年間の人なり(古今鍛冶銘早見出)

ノリヒロ 則廣 河内守と稱す寛文年間の刀匠にして明德應永年間の人なり(古今鍛冶備考)

ノリヒロ 則弘 大和尻掛の刀匠にして貞治年間の人なり或は云天永比の人にして則長の父なり太郎左衛門尉と稱す或は文永延慶年間の人或は則長の子なりと又云千手院の一派にして岸田村尻懸に住し尻懸太郎と稱す建長比の人なりと(古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考)

ノリヒロ 則弘 大和尻掛の刀匠にして初代則弘の孫なり(古今鍛冶銘早見出)

ノリヒロ 則弘 備前長船の刀匠にして嘉吉文安年間の人なり(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考)

ノリヒロ 德廣 海老原氏常陸水戸藩の刀匠にして安政元治年間の人なり(古今鍛冶銘早見出)

ノリヒロ 法廣 攝津の刀匠にして寛文年間の人なり(古今鍛冶銘早見出)

ノリフサ 則房 美濃上有知の刀匠にして弘治年間の人なり(古今鍛冶銘早見出)

ノリフサ 則房 美作の刀匠元信の子なり或は云ふ建武年間の人と又云元信の父本國備前にして朝忠の門人文治比の人なりと(古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考)

ノリフサ 則房 藤原姓越中の刀匠にして亦攝津武藏土佐に住す寛永萬治年間の人なり奥服部則重の末裔と云ふ(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考)

ノリフサ 則房 備前福岡一文字派の刀匠助房の第二子にして貞應年間の人なり後備中片山に住す或は云初代助房の五子或は門人にして建暦仁治年間の人又云ふ高津右馬允と稱す正嘉比の人亦山城京都に居ると(古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考)二世則房は備中に住す建長年間の人なり或は云初代則房の子初名則行一名顧則と云朝忠の門人にして右馬允と稱す寛元弘長年間の人或は文治比の人後備中に移る亦奥作に住す建治比の人と(古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考)

ノリフサ 則房 備前長船の刀匠にして文安年間の人なり(古今鍛冶銘早見出)

ノリフサ 則房 備中青江派の刀匠にして刑部三郎寶則の二子高津右馬允と稱す寛嘉比の人なり或は云建長比の人と又云片山一文字の祖にして寶則の子元享比の人と(本朝鍛冶考、古今鍛冶備考)

ノリフサ 則房 安藝の刀匠源姓坂原總左衛門と稱す本國は肥前佐賀にして則綱と共に唐島に移る慶安寛文年間の人なり(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考)

ノリフサ 則房 土佐の刀匠にして高知朝倉町に住す越中則重の末裔年代詳ならず蓋し慶長前後の人なるべしと云ふ(本朝鍛冶考)

ノリフサ 則房「ベツシヨセツザン」

ノリフヂ 言藤 相模の刀匠にして扇谷に住す建長比の人なり一說に或は雲藤と同人ならんと(本朝鍛冶考)

ノリマサ 德正 稻延氏常陸水戸の刀匠にして慶應年間の人なり(古今鍛冶銘早見出)

ノリミチ 則道 初名正繩岩元勘左衛門と稱す丹波守に拜す薩摩鹿兒島の刀匠にして正慶の門人後京都に上り丹波守吉道の門人と爲り受領の時則道と改む元祿年間の人なり(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考)

ノリミチ 法道 來氏山城の刀匠にして寛文年間の人なり亦攝津大阪に住す(古今鍛冶銘早見出)二世法道は山城西岡に住す貞享年間の人なり(古今鍛冶銘早見出)

ノリミツ 則光 山城京都古刀の鍛工なり(古今鍛冶銘早見出)

ノリミツ 則光 大和古刀の鍛工なり或は云ふ奈良勘に住す嘉元年間の人と又云貞和比の人月光と同人なりと(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考)

ノリミツ 則光 越前の刀匠にして越中の刀匠則重の末裔なり寛永年間の人(古今鍛冶銘早見出)

ノリミツ 則光 藤原姓加賀の刀匠にして永正年間の人なり或は云天文比の人と(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考)

ノリミツ 則光 左近將監と稱す丹後宮津の人なり亦武藏江戸に住す新刀の鍛工なり(古今鍛冶銘早見出)

ノリミツ 則光 伯耆の刀匠にして永享年間の人なり或は云赤石見出雲に居ると(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考)

ノリミツ 則光 石見古刀の鍛工なり或は云ふ伯耆の則光と同人なりと又云文龜永正年間の人と(古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考)

ノリミツ 則光 備前長船の刀匠にして初代長光の門人正和元享間の人なり或は云將監長光の門人後則宗と更むと又云宗長の子にして正慶延文年間の人子孫同名數世に連ぶと(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考)

ノリミツ 則光 備前長船の刀匠にして永德比の人なり(古今鍛冶備考)

ノリミツ 則光 助右衛門と稱す備前長船の刀匠にして明德應永年間の人なり(本朝鍛冶考)

ノリミツ 則光 五郎左衛門尉と稱す備前長船の刀匠にして守助の子なり應永康正年間の人或は云永德比の人或云文明元年七十二歲の作あり並し應永の末以降の人なるべしと(古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考)

二世則光は藤原朝臣左衛門尉と稱す長祿文明年間の人長船に住す或は云ふ則光の子にして應永比の人なりと(古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考)

三世則光は彦兵衛尉と稱す文明年間の人長船に住す(古今鍛冶銘早見出)

四世則光は長船に住す天正文祿間の人なり(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考)

ノリミツ 則光 左衛門尉と稱す備前長船の刀匠にして長祿年間の人姓は藤原なり(古今鍛冶銘早見出)

ノリミツ 則光 理兵衛尉と稱す備前長船の刀匠にして長享年間の人なり(古今鍛冶銘早見出)

ノリミツ 則光 三郎左衛門と稱す備前長船の刀匠にして長享永正年間の人なり(古今鍛冶備考)

ノリミツ 則光 備前長船の刀匠にして文明延德年間の人なり(古今鍛冶備考)

ノリミツ 則光 備前長船の刀匠にして明應比の人なり(古今鍛冶備考)

ノリミツ 則光 太郎左衛門と稱す備前長船の刀匠にして天文永祿年間の人なり(古今鍛冶備考)

ノリミツ 則滿 備前吉井の刀匠にして眞則の門人應永年間の人なり或は云寛正比の人と(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考)

ノリミツ 敎光 安藝の刀匠にして敎永の子明應比の人なり(本朝鍛冶考)

ノリミツ 敎光 筑後大石の刀匠にして文龜年間の人なり或は云嘉覆比の人と(古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考)

ノリミツ 法光 備前長船の刀匠にして應安年間の人なり或は云信光の二子にして延文比の人と(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考)

ノリミツ 法光 備前長船の刀匠にして應永年間の人なり或は云前の法光の子にして嘉慶比の人後同名數世永正大永の作ありと(古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考)

ノリミツ 法光 備前長船の刀匠にして文安應仁年間の人なり(古今鍛冶銘早見出)

ノリミツ 法光 備前長船の刀匠にして文明明應年間の人なり(古今鍛冶銘早見出)

ノリミツ 法光 新左衛門尉と稱す備前長船の刀匠にして永正年間の人なり(古今鍛冶銘早見出)

ノリミツ 法光 備前長船の刀匠にして永祿年間の人なり(古今鍛冶銘早見出)

ノリムネ 則宗 島田武兵衛と稱す大和平松村の刀匠にして安政元治年間の人なり(古今鍛冶銘早見出)

ノリムネ 則宗 島田又兵衛と稱す大和平松村の刀匠にして朝尊の門人なり(古今鍛冶銘早見出)

ノリムネ 則宗 駿河島田の刀匠にして天文年間の人なり(古今鍛冶銘早見出)

ノリムネ 則宗 相模山内の刀匠にして則家の子正和比の人なり或は安貞比の人又は則家の父なりと(本朝鍛冶考)

ノリムネ 則宗 備前太夫と稱す備前福岡の刀匠にして定則の子福岡一文字の祖なり元暦比の人にて承元中の晉鍛冶と爲り菊一文字の勅許を蒙り子孫此の銘を襲用す刑部丞と改む或は一名行宗と云秘銘に香の一字を用ふ又云仁平二年に生れ建保二年に卒す年六十三なりと(古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考)

ノリムネ 則宗 備前長船の刀匠にして弘安年間の人なり或は云後相模山内に移ると又云初代安部重吉の子にして二世重吉の弟正和比の人と(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考)

ノリムネ 則宗 備前の刀匠にして應永年間の人なり或は云長船の派にして享德比の人と（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ノリムネ 則宗 備前長船の刀匠にして天文年間の人なり或は云文明比の人と（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ノリムネ 德宗 關内幸右衛門と稱す常陸水戸の刀匠にして嘉永年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ノリムラ 則村 備前古刀の鍛工なり或は云ふ文明年間の人と又云長船小反の派にして永享比の人則兼と同人なりと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

ノリムラ 儀邑 備前長船古刀の鍛工なり或は云ふ永正年間の人なりと（古今鍛冶銘早見出）

ノリモチ 敎用 備後の刀匠にして嘉吉年間の人なり所作の刀銘に生得上手の文字を題すと云ふ（古今鍛冶銘早見出）

ノリモト 規故 相模の刀匠にして天文年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ノリモリ 則守 山城三條派の刀匠にして後丹波に移り住す弘安年間の人なり或は云正國の門人にして三條に住し後丹波に居る又云粟田口の刀匠にして眞清の門人弘安比の人と（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考）

ノリモリ 則守 山城の刀匠來氏の派にして曆應年間の人なり或は云ふ建武比の人又云來氏の一族にして至德比の人或は國眞の門人にして則兼の父なりと（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考）

ノリモリ 則守 備前の刀匠にして正長年間の人なり或は云康正比の人にして則能の父至德比の人或は則能の子なりと（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考）

ノリヤス 則安 備前の刀匠にして元曆年間の人なり或は云長久治曆年間の人にして宇野七郎の太刀は此人の所作なりと又云治承比の人と（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考）

ノリヤス 則安 備前長船の刀匠にして寛元年間の人なり或は云則恒の子にして永久元永年間の人と（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

ノリヤス 則安 藝の刀匠にして永享年間の人なり或は云ふ左の末裔と或は文明比の人又は左安行四世の孫守重の子にして永正比の人なりと（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考）

ノリヤス 則安 肥後菊池同田貫の刀匠にして古刀の作者なり或は云ふ天正年間の人と（古今鍛冶銘早見出）

ノリユキ 範行 伊豆古刀の鍛工なり（古今鍛冶銘早見出）

ノリユキ 則之 播磨赤穗の刀匠にして天保年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ノリユキ 則行 備前福岡一文字派の刀匠にして則房の子なり建長年間の人或は云一名顯則右馬允と稱す寛元延長比の人と又云文永比の人と（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考）

ノリユキ 則行 薩原丝豐後高田の刀匠にして元祿年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ノリユキ 則行 肥前の刀匠にして眞治年間の人或は云ふ散位の一派にして諫早に住す應永比の人又云散位則末の子にして應安比の人と（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考）

ノリユキ 則來 備前長船の刀匠にして文曆年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ノリユキ 順行「ノブユキ」

ノリユキ 矩隨「ハマノノリユキ」

ノリユキ 矩最「ナカザハノリヨシ」

ノリヨシ 則吉 山城三條の刀匠にして文明年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ノリヨシ 則吉 備前の刀匠にして弘安年間の人なり或は云福岡一文字派にして則行の子建治弘安年間の人と（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考）

ノリヨシ 則吉 備前長船の刀匠にして應永年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ノリヨシ 則吉 四郎兵衛と稱す武藏の刀匠にして一文字則吉の裔元祿年間の人なり（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ノリヨシ 則義 石堂氏武藏の刀匠にして貞享年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ノリヨシ 則能 備前長船の刀匠にして則守の子應永年間の人なり（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

ノリヨシ 德能 了戒と冒稱す山城の刀匠にして天文年間の人なり或は豐後の人と云ふは非なり（古今鍛冶銘早見出）

ノリヨリ 則依 攝津古刀の鍛工なり或は云助依の子なりと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

ノリヨリ 則依 備前の刀匠にして文永年間の人或は云福岡一文字派にして宗忠の子寛元又は正嘉比の人と（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考）

ノリヨリ 憲頼 常陸の刀匠にして天文年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ノロ カイセキ 野呂介石 儒者にして南宗畫に有名の人なり名は隆年後ち第五隆と改む字は松齡別に十友、矮梅、四碧、澄湖、混齋等の數號あり紀伊和歌山の人少うして畫を好む初め池大雅の門に入り後清人伊孚九の法を學び山水を能くす曾て大和多武峰に遊び黄一峯の天池赤壁の圖を觀て一本を摸寫し後ち其の筆意に倣ひ遂に一峯の高致を得世に所謂る三石（即ち介石竹石及び愛石なり）の第一に居る介石晚年熊野に到り其の峰巒谿谷を歷覽して專ら其自然の山水を法とす阿部耕洲介石に贈る詩に云く要し知ふ此叟師傳處一曾沉熊谿五十回と自註に先生話中の語を用ふとあり村瀨秋水嶺齡の時紀州に至り介石を訪ひ門外に立て其の内を窺ふ一の巨屋を設け數人此中にありて刀槍を試み拳法を習ふ其の狀講武場の如し秋水謂らく是れ甚だ文人者流の家に似ず其れ或は介石の家に非るかと逡巡之を久うし之を糺すに果して其の家なり驚て曰く介石武備ある亦此の如きかと紀州那智山の深處は古來到り極むる者なし介石一の修驗者と謀り米鹽及び食器を背に負ひ手に苧繩を携へ行く繩を以て木に懸け巖石を攀ぢ絶壁に登り危谿を渉り七日七夜にして終に通覽を遂ぐと云ふ文政十一年を以て卒す年八十二其の弟子祀之藥徽有竹曾少林皆な其の堂に上る（古今雅俗石亭畫談、扶桑畫人傳、鑒定便覽、諸家人物志、畫乘要畧）

ノロ ゲンヂャウ 野呂元丈 醫者なり名は實夫、元丈は其の字、字を以て行はる連山と號す勢

州波多瀨村の人なり父を高橋善太郎と曰ふ元丈年二十にして叔父野呂三書の嗣となり京師に遊び山脇玄修の門に寓して醫を學ぶこと凡そ七年又た儒書を並河天民に學び本草又た醫を稻若水に學ぶ性敦厚にして寡慾享保中江戸に在り幕府命して庶物類纂增補を撰ばしむ尋で藥を箱根山中日光及富士山に採り明年吉野熊野山中を探り既にして北陸道より白山妙高諸山を越え佐渡に至りて還る歷驗數年歸り報ず俸及び宅を賜ひて以て其の勞を賞す後ち擧られて醫官と爲る又た藥草を長石の諸州に採る其の探討海内に遍さを以て更に進みて清國に赴かんと請ふ許さず居常怏々寶曆十年三月十四日頭瘍を病みて歿す著はす所狂犬咬傷治方、佛足石碑考あり（元丈碣記、皇國名醫傳）

ノロ ショウロ 野呂松廬 儒者なり名は隆訓字は翼卿叔父正祥に從て射を學び弱冠にして門中の白眉たり後山本東籬の門に入り儒を以て名を成す天保十四年六月廿三日沒す年五十三京都黑谷に葬る（南紀名賢傳、平安墓所集）

ノロ スケサブラウ 野呂助三郎 森武藏守の屬士なり天正年中尾州長久手の戰に羽柴氏の將森武藏守長一敗る助三郎の父助左衛門防ぎ戰て遂に死す助三郎之を知らず敵首を搜へ退くと五六丁郎等馳來りて父の戰死を告ぐ助三郎落涙し髮を切つて母に遺り遂に亂軍中に戰死せり（豹皮錄）

ノロ マサヨシ 野呂正祥 紀藩の弓術家なり年十五官許を得て江戸に出て永代寺に於て半棠の射を試み又京師蓮華王院に於て本堂の射を試み夐かに先の射る者に勝り天下第一と稱す文政比の人（南紀名賢傳）

ノロマツ カンベエ 野呂松勘兵衛 傀儡師なり江戸和泉太夫座にて始めて野呂摩人形を操つり大に名を博す野呂摩は野呂松の畧語なり（早引人物故事）

ハ之部

ハアイシ 破鞋子「カウセツ」

ハアイアン 梅庵「ナゴヤタンスキ」

ハアイアン 梅庵「キノシタバイアン」

ハアイアン 梅庵「ヤマグチセツケイ」

ハアイアン 梅庵「バンリ」

ハアイアンサイ 梅庵「ヤマザキアンサイ」

ハアイアンリン 梅庵「コダマキンリン」

ハアイウダウジン 梅庵「ハウグワイダウジン」

ハアイアン 梅庵「シヤウアン」

ハアイイツ 梅逸「ヤマモトバイイツ」

ハアイシタシウハウ 梅隱「キノシタシウハウ」

ハアイウヒデノリ 梅宇「イノウヒデノリ」

ハアイウヤウエイ 梅宇「イトウチヤウエイ」

ハアイウキチ 梅塢「ヲギノヤヲキチ」

ハアイウン 梅雲「カノバイウン」

ハアイエイ 梅榮「カノバイエイ」

ハアイエイツイウ 梅我「ナカガハイツイウ」

ハアイガイ 梅我「イハヰハンシラウ」

ハアイガイ 梅崖「トトキバイガイ」

ハアイガイジ 「イツサ」 **イツサバウ** 俳諧寺一茶坊

ハイカイレウ 俳諧寮「ハクリクワンボウウ

ハイカイ 梅幸「ヲノヘキグラウ」

ハイカウ 梅岡「マツムラバイカウ」

ハイカウ **レンイン** 拜鄕蓮茵 歌人なり名は實道梅花園と號す伊勢多度の人、歌學を若狹の僧義門に受け後一家をなす明治十二年山本實政彌其著す所の菩の碑を朝廷に獻じ褒詞を賜ふ廿五年十二月十四日歿す年八十五京都三條高樹院に葬る

ハイカイ 梅岳「カノエイナフ」

ハイガク 梅岳「ムラバイガク」

ハイカン 梅閑「ミクリヤバイカン」

ハイカン 梅磵「モリタバイカン」

ハイガンダウ 梅巖「イシダバイガン」

ハイギョクシャ 梅含堂「センソウシツ」三世 **セキリウ** 佩玉舍石龍「イシヅカセキリウ」

ハイグワイ 梅外「タケチアイザン」

ハイグワイ 梅外「タイスイ」

ハイグワイ 梅外「チヤウバイグワイ」

ハイクワサンジン 梅花山人「トウダウリウサン」

ハイクワダウジン 梅花道人 詩人なり名は顯眞字は覺養、水竹叟た小有莊主人の號あり江戸の人なり（續墓一所號）

ハイクワンサンジン 梅關山人「スガキトウサイ」

ハイケ 梅溪「ニシムラバイケイ」

ハイケ 梅溪「ホリヰヂヤウキツ」

ハイケ 梅溪「カブラキバイケイ」

ハイケ 梅溪「リバイケイ」

ハイケ 梅溪「キノシタバイケイ」

ハイケ 梅兄「ミネジマバイケイ」

ハイケツダウ 梅月堂「カガハセンア」

ハイケン 梅軒「キムラバイケン」

ハイケン 梅軒「カノバイケン」

ハイケン 梅軒「ミナミムラバイケン」

山の釋迦の畫に長ず（鑒定便覽、扶桑畫人傳）

ハイゲン 梅軒「サトウバイケン」

ハイゲン 梅玄 畫家なり信州安曇郡細萱の人狩野梅笑の門に學び出藍の稱あり越後高田侯に仕ふ最も山水に得意にして傍ら義太夫、茶道、活花に精一荻原才二、翌月章齋等の門人を出す

ハイゲンザイ 梅五 佩弦齋「アヲヤマエンクワウ」俳人なり詔涼の二子（俳林小傳）

ハイゴウ 梅紅「ハセガハセツテイ」

ハイコク 梅谷「トトキバイコク」

ハイコク 梅谷「ダウカウ」

ハイコク　梅國　仙臺の僧なり性學を好み常に客を愛して之と文を論ず寶永七年來考證を集め櫻陰腐談と題して之を公にせり其書考證該博にして當時非常の學者なりしを徵するに足る（櫻陰腐談）

ハイサイ　梅齋「カウリウコ」
ハイサイ　培齋「ハヤシテイウ」
ハイサウ　梅窓「ハシモトツネアキラ」
ハイサウ　梅莊「キタガコウヂチクサウ」
ハイザン　梅山　畫僧なり本と松野氏名は純惠字は榮與雪香齋、無我道人等の號あり尾張の人幼より畫を嗜み岩井正雪に學ぶ長ずるに及び薙髮して僧となり名を純惠と改め美濃岐阜淨覺寺に住す此より多く佛像を畫く曾て京師に遊ぶ踏繪神其の畫を觀て嘆賞し爭ふて其の名を說く法眼位に叙せらる東歸の後名古屋に寓し安政四年八月歿す年七十五（近世畫史、扶桑畫人傳）

ハイザン　梅山　畫僧なり旭翁の門人たり尾張犬山常滿寺に住す後ち美濃古市場天壽庵に退去す榮竹を能くして其名高し（鑑定便覽）

ハイザンテイ　梅山亭如松「イシハラジョショウ」

ハイサヲウ　賣茶翁　肥前蹲池の人なり族は柴山氏名は元昭、月海と號す幼にして髮を薙ぎ龍津化緣に師とし事ふ化緣は黃檗獨湛の徒弟なり擾て黃檗山に抵り獨湛に謁す獨湛偈を作りて翁の才幹を賞す年二十二痢を患ひ困勞自ら安ずる能はず發憤し病を懷きて陸奥に到り萬壽月料に附き歷年諸州を經廻し律を滿堂に學び或は東し或は西して杖錫を駐めず身に寸蓄なし只々學を任となす筑紫雷山峰に上り火食を斷ち一夏を過ごして舍恬し獨り自から以て足らずとなす或とき謂く昔時世奇の首坐龍門の分座を亂す是れ尙ほ金針眼を刺すが如し瘞羸若し遂へば晴乃ち破る生々學地に居り自ら錬るに如かずと以て自ら警め後に國に歸り師に事ふると十四年師歿す乃ち寺を法弟大潮に讓り自ら京師に遯る而して謂ふ釋氏の世に處るや正邪心にあり て迹非らざるなりと而して褻裝の德に誇り人の信施を煩す者は我が好む所に非ざるなりと始て茶を賣りて飢を防ぐ春は花に倚り秋は紅葉を尋ね自ら茗具を荷ひ席を設けて賞を竢て之を論ず寶永七年來考證を集め櫻陰腐談の藩則に若し國の彊域を超え他邦に出る者は必ず符を携へ一旬毎に國に還り更に之を命ずるを法となせり浮屠氏と雖も亦然り翁七十に垂んとして復た國に歸り自ら曾を鬻て、君に事へ錯を京師の邸に列し期一旬を以て せざるを請ふ許可せらる自ら號を游外と稱す骨て人に謂て曰く吾貧にして魚肉を斷ち老て色を悅ばす葛巾野服茶を賣るを足れりとすと復京師に入りて茶を賣り曉年に及て岡崎に居り悉く携ふる所の茗具を火中と門を杜ぢ客を謝し以て天年を養ふ實曆十三年七月十六日歿す年八十九錢筒に題するの詩に云く壺處閒三狂歌師なり平久間氏名は盛章通稱佐兵衞八景園折芳の男にして狂名を魁花芳と呼べり文化六年二月小石川久保町の家に生る篠田新左衞門の門に入りて大構流の筆意を學び文耕堂蕉山の號を授けらる十八歲にして師の名跡を繼ぎ弟子を敎授す幼にして父に就て狂歌を學び十四歲の時より狂歌の會に出づ明治維新の後梓錦と稱し鈴木重崇に和歌を學び梅翁百花の著書あり明治二十六年四月歿す年八十五（古今狂歌人物誌）

ハイシ　梅所「カラカネコウリウ」
ハイシ　梅盛「タカセハイセイ」
ハイシイ　梅石「イハナカハイセキ」
ハイセキ　梅石　俳人なり美濃陽花庵に住す遺物尙ほ同庵に存す（俳林小傳）

ハイセツ　梅雪「カノハイセツ」
ハイセン　佩川「クサハイセン」
ハイセンダウ　梅仙堂「カガハカゲヒラ」
ハイセンダウ　梅仙堂「カガハカゲチカ」
ハイソ　梅素玄魚　意匠家なり宮城喜三郎と稱し父は經師職にして風雅の道を好み畢本由豆流の門に遊びて詠み歌多く名を玄魚と云ふ喜三郎其の名を襲ひ玄魚と呼びて實名とせり年甫て十五淺草諏訪町の骨董商金子吉兵衞の家に僮僕たり傘頭の巧なる書畫を摸造するに恰も眞物の如し と甘歲の時家に歸りて父の業を助け傍ら其の求に應じて模樣の雜形招牌の大文字を揮毫せしに意匠非凡なるを以て之れを求むる者多く遂に經師職を止めて傳書家專門となる書畫共に美にして趣向の斬新那每に人の眼目を驚かす明治十三年二月七日病を以て死す年六十四（條野傳平氏寄）

ハイソン　梅村「バンバイソン」
ハイダウ　梅堂「アサノチヤウソ」
ハイチ　梅痴　僧なり僧雲室の男、名は泰閑字は白純、小蓋主人と號す阿波の人、人となり清淡にして學問富贍太だ交人を愛す初め江戸深川本誓寺に住し後ち三緣山に入りて學頭となり最後北總弘經寺の主となれり詩及び書を善くし又た山水墨梅に妙なり（春亭雅談、續墓所一覽）

ハイテイ　梅亭「キハイテイ」
ハイテイ　梅第「シラヤマハイテイ」
ハイテイ　梅庭「トウサツ」
ハイテイキンガ　梅亭金鵝　小說家なり通稱は瓜生熊三郎名は政和柳剛流の劍客吉田勝之丞の次子なり劍術に趁て瓜生氏の養子となり本郷附木居に居るに及て文筆を好み武を廢す服部應賀を介して松亭金水に交り戲に紫竹林話七偏人を著す以後吾妻雄兎子又は鶯溪隱士等の號あ以て小說を著す又白山人の號あり圃々珍聞を起し其の記者となり又狂歌を善くす明治二十六年六月三十日歿す年七十三（古今狂歌人物誌）

ハイドウ　梅洞「ハヤシハイドウ」
ハイドウ　梅墩「ヒロセキヨクサウ」

ハイトン　梅墩「マヘダバイトン」
ハイトウ　梅東「ヤマダバイトウ」
ハイドウ　蟄童堂「ヤマシタミカゼ」
ハイニ　梅二　狩野派の畫家にして梅榮の門人なり享保年間の人信州安臺郡白金に生る最も人物山水に秀ぐ

ハイフウ　梅風　伯水堂と稱す江戸の歌人なり京師に來り梅月堂の門に入りて類りに修し終に其の旨を得て大に唱ふ著ほす所部類現藥集あり（鑑定便覽）

ハイホウ　梅峯「チクシン」
ハイホウケン　梅峯軒「ハセガハミツノブ」
ハイホクアン　拜北庵「サトムラシヤウタク」

ハイヤ　梅野「カンガハタツキヨ」
ハイヤ　灰屋紹益「セウセキ」
ハイエキ　梅龍「タケダバイリウ」
ハイリウ
ハイリウエン　梅龍園「ナカガミシユセツ」
ハイリサンジン　梅里山人　姓は陶名は卯字は伸巳本所中の郷に住し瓦師を業とす故に中郷橋邊人とも號す壯年の時家業を其の子に讓り別室に閑居し常に畫事を娛とす山水花卉翎毛皆逸趣あり時々釣を墨水に垂れ月を踏みて家に歸る出ること戶扉を鎖さず或は盜人の物を奪ひ去ることあるも敢て意に介せずといふ又畫を乞ふ者あれば潤筆を求むることを望まず自ら隱居料を以て足れりとなし或人畫を乞ひ金二百匹を包みてこれに贈りしに山人固辭して受けず其の人除に机上に投じて去る後三月を歷て山人を訪ひしに曩に机上に投ぜし一封依然として存せりと其の淡泊なる概れ此の如し寛政十年六月二十八日歿す本所中郷成就寺に葬むる（畫家人名辭書、江戸名家墓所一覽）

ハイリン　梅林「クロカハダウイウ」
ハイリンアン　梅隣庵五璉　江戸の俳人なり安永八年九月二日歿す年七十六（俳家歿故年表）

ハイロ　梅廬「タケダバイロ」
ハイキン　梅員　俳人なり備前岡山に生る元祿年間の人（俳人小傳）
ハイエン　梅園「マウリバイエン」

ハイエン　梅園「ミウラバイエン」
ハイエン　梅園「ハルノヤウメマロ」
ハイエン　梅園「キタセイロ」
ハイエンダウ　梅園堂「ウハヤギホサイ」
ハイエウ　梅翁「ニシヤマソウイン」
ハイエウ　梅翁「ツカダキヨクレイ」
ハイエウ　梅翁「クマバイヨウ」
ハイヨウ　梅翁「バイジユエンバイヨウ」
ハイヨウ　梅翁　俳人なり平野治兵衞と稱す字は子詢別號を平角と云ふ南部の人俳は曉臺の門に入り技素翔と上下す文政八年五月十二日歿す旬に曰く「納豆に古實もなしや四角管」「秋の夜や世は樣々の高笑ひ」（南部文學史）

ハイヨウケン　梅翁軒「ハセガハエイシユン」
ハイアン　匏庵「ムラタハウアン」
ハウアン　匏庵「クリモトジヨウン」
ハウアン　方庵「トウデウハウアン」
ハウイツ　望一「スギタバウイツ」
ハウイツ　抱一「サカキハウイツ」
ハウウン　寶雲「エウン」
ハウウンサウ　望雲窓節士　江戸の俳人なり安永二年四月二日歿す（俳家歿故年表）

ハウオン　報恩　高僧なり十五歲にして郷を離れ三十にして吉野山に入り觀世音呪を持すること五年靈應あり天平勝寶四年帝不豫なり勅して加持せしむ立所に癒ゆ時に恩僧に沙彌たり帝勅して披剃せしめ賜ふに報恩の名を以てす（帝疾痾平癒の恩に報ゆる謂なり）恩拜辭して山に廻り益々持念を勤む會々桓武帝異疾に罹り國醫皆手を拱す乃ち詔して內に入りて祈禱せしむ恩根本呪を誦す須臾に宮殿震動して大悲菩薩身を殿上に現はす帝の疾頓かに癒ゆ帝大に悅び封戶を賜ふ恩の親族に至る迄皆宜を受る譬て精舍を和州子島に建て號して子島寺と曰ふ以て大悲の聖像を奉ず像の高さ一丈八尺極めて靈驗ありといふ延曆十四年六月化す（元亨釋書、東國高僧傳）

ハウオンジ　クワンパク　報恩寺關白（クデウフサヂネ）
ハウオンキン　クワンパク　報恩院關白「クデウタダノリ」

ハウオンキン　ケンギヤウ　ソウジャウ　報恩院撿校僧正「ケンシン」
ハウカンシ　放閑子「カラスマルミツヒロ」
ハウギヤ　抱儀「モリムラハウギ」
ハウギテイ　放牛「クワウリン」　忘歸亭「コウジユンホウシンワ」
ハウキヤウジ　實鏡寺宮「リシウニワウ」
ハウキヤク　センセイ　忘却先生「ヲガハテンボウ」
ハウ　ギヤクセン　望玉蟾「モチヅキギヨクセン」
ハウギエン　芳宜園「タチバナチカゲ」
ハウグワイダウジン　方外道人　狂詩家なり本姓は福井氏通稱を鼎藏と曰ひ梅庵と號す天保中の人家世々醫を業とす江戸に住す道人出で、木下氏を嗣ぐ其の人となりや風流洒落狂詩を好み茶菓詩、江戸名物詩等を著す一時人口に膾炙する所なり（文莊漫錄、江戸名物詩序）
ハウクワウジ　寶光寺「ホウデウトキムネ」
ハウクワウシ　放廣子「テイリウ」
ハウクワズキリウダウ　傍花隨柳堂「ハヤシシユンサイ」
ハウケイキンノシヤウニワウ　ミヤ　芳桂院宮「ゲンシヤウニワウ」
ハウゲツダウ　芳月堂「オクムラマサノブ」
ハウケフキン　寶餡院「アシカガヨシアキ」
ハウゲンサイ　逢源齋「センサウサウ」初世
ハウコ　芳潛「アヲイケリンソウ」
ハウコ　方顧　書を善くす畫は即ち眞相の逸蹟を學ぶと（續本朝畫史）
ハウコ　方靈　奇僧なり何許の人なるを知らず亦た未だ其の姓氏を詳かにせず人之を方靈に問ふ皆な應へず或は曰く江戸の人少き時父の貸め羅を復し家を棄て僧となる因りて自ら韜晦す其だ詩酒を嗜む好みて靈靈貧生と交はる人詩酒を興ふれば輒ち喜びて拜謝

し興へざれば即ち涕泣して之を乞ふ必ずしも詩酒の美惡を論せざるなり常に一瓢酒を携へ行々傾け飲む醉へば即ち瓢を叩いて詩を吟じ嗚々大に慟す僧むに及べば路上に坐臥し泰然自適群犬遶りて之を吠れば方彊亦吟じて以て之に和す遂に群犬と近づき且つ狎る或は月を檐下に望み或は花を路傍に賞す驟ち曰く惧らくは太白なりと)履を取りて鳧梁に從ふ者多し獨り中村市兵衛尚みして之を見せしめざることなと林鶴梁一日生徒を集めて易を講ず僧あり來りて門を扣く未だ延接するに及ばず已に突入して座し乃ち問ひて曰く大極如何と鶴梁答ふるに極まりなきを以てす則ち笑て曰く吾聞く子は管儒にして詩酒の癖ありと乃ち來るのみ今洛閭の愚説人を誤て嘔を發せしむ復た言ふ勿れと是に於て瓢を傾けて飲み高歌朗々傍ら人無きが如し忽ち一詩を賦して鶴梁に贈る鶴梁其の落款を見て始めて其の方彊たるを知る乃ち相與に驚然として對酌す方彊も亦狂態百出路上に在る時と異ならず後ち蹇々來りて以て常となすと云ふ(鶴梁文抄)

ハウコ　方壺「ササキハウコ」
ハウコク　方谷「ヤマダハウコク」
バウゴサイ　忘吾齋「ニシヤマソウイン」
バウゴシ　忘吾子「ニシヤマソウイン」
ハウサイ　方齋「オホタハウサイ」
ハウサイ　方齋「ヤスハラホウサイ」
ハウサイ　芳齋「エサシヤウハク」
ハウサイ　芳齋「ササキバイジツ」
ハウゴンキンノミヤ　寶莊嚴院宮「ゴニンホウシンワウ」
ハウサウリン　芳艸林「キムラコジ」
ハウザウキン　寶藏院胤榮
インエイ　寶藏院胤榮(第一世)　寶藏院流槍術の祖なり覺禪坊法印と稱す中御門氏南部の僧なり父は中御門薩摩と稱し兄は武藏と號す身釋門に歸すと雖も顧る刀槍の術を好み之を學ぶが爲め武人の門に入ると四十餘家然れども未だ必勝の道を悟らざるが故に廢食を忘れ病に臥して其の道を考究すること既に數月に及ぶ後春日明神の靈夢を感じて地中を穿ちて寶鎧館地藏の三器を得たり其の後柳生但馬守宗嚴と共に刀法を上泉伊勢守秀綱に學び甚だ其の奥旨を究む時に大膳大夫盛忠と云ふ者あり槍術を以て南都に來る胤榮之を寶藏院に留めて槍法を受け既に熟して寛永六年八月粑州俵光貞の紹介により德川家光の前に其の技を演じ後又正保三年三月再び將軍の覽に供す敵手は則ち岡田淡路守之に擇ばる初回は胤舜勝ち次回は淡路守勝つ共に賞を賜はる慶安元年正月十二日病を以て死す時に年六十(軍實文稿、本朝武藝小傳)

ハウザウキン　**インセイ**　寶藏院胤清(第三世)　寶藏院流の槍術家なり覺舜房法印と稱す滿田氏の義子にして胤舜の家を繼ぐ幼なるを以て後見中御門中入清原胤號に隨ひ槍法を受く遂に流の奥旨を究むその稟性短慮なれども弟子を教導して倦むを知らず と云ふ例を追て延寶二年六月術を殿有大君の覽に備へんとせしに將軍病あり終に止め只時服を賜ふて其の勞を慰す元祿二年年(一に元祿十四辛巳年)四月四日寂す年六十六(一に六十五)

ハウザウキン　**インブウ**　寶藏院胤風(四世)　寶藏院流の槍術家なり覺山房羅律師と稱す滿田權右衛門清原胤成の男なり幼より槍術を好み胤清に從て槍法を學ひ遂に其の奥旨を究めて先師の傳を繼げりその性質剛強にして常に門戸を出入する毎に必らず鎧鎗を持てり享保十一年九月二十四日技を將軍吉宗の覽に供す相手は一山の持寶院胤與これを勤む十六年十二月六日江戸の客居に於て入滅す年四十六深川靈巖寺院中中谷寛成寮に葬むる胤風江戸に下るや黒田豐州直邦の臣下に假田半之丞といふ者あり竹内流の槍術に通ずと之と技を較す胤風は鎧鎗を上段に擬し假田半之丞は鎧を下段に擬し胤風が下腹を從て胤風鎗を揚て之を拂ひ入て勝を取れりといふ

ハウザウ　寶山「ツツミハウザン」
ハウザウ　寶山　僧なり名は湛海、山田氏、勢州安濃郡一色の人なり寛永六年二月二日生る十八歳にして癩染す苦學修業して卒に神通を得たり正德六年正月十六日寂す年八十八(傳記)
ハウザウ　寶山　上野伊勢崎の刀匠なり(古今鍛冶銘早見出)
ハウザウ　方山　瀧氏京都の俳人なり重賴の門人重賴の歿後似船に從ふ峰山或は芳山又た松鶴軒と號す(俳家歿故年表)

ハウザン　**ソウチン**　寶山宗珍　禪僧なり玄洛に永安寺に參じて洞上の宗旨を傳へ又咤祇寺の大智に依て益々智證を益す師爲めに寶山の二大字を書して與ふ洞谷寺に出世し永安寺に遷る加州太守某其の道風を慕ひ永祥寺を國内に創して開山始祖とす又河北郡に於て寶藏寺を建て冥福を薦め珍を以て第一世と爲す後ち太守の羽州仙北に移るや郡の南郊に就て梵刹を建て之に居らしむ延文中疾を以て歿す(洞上聯燈錄)

ハウジ　抱二「タナカハウジ」
ハウシ　芳洲「ヤマダハウシウ」
ハウシ　芳洲「ツダハウシウ」
ハウシ　芳洲「タカマツハウシウ」
ハウシ　芳洲「アメノモリハウシウ」
ハウシ　寶洲「ホリカハヨリハル」
ハウシ　方秀　字を岐陽と云ふ東福寺の住僧なり靈源濬の法嗣此人朱註の四書を本邦にて始めて開講す應永中に寂す

ハウジショウトクカウケン　クワウテイ　寶字稱德孝謙皇帝「カウケンテンワウ」
ハウシツ　芳室「シヒモトハウシツ」
ハウシツサイ　抱膝齋「イトウラングウ」
ハウジツダウ　芳日堂「オクムラマサノブ」
ハウシテイ　寶市亭升成　狂歌師なり世に八人料理と稱する料理店の主人にして日本橋四日市に居住す江戸橋の際なるを以て人呼んで江戸升とも云ふ俗稱は升屋多三郎狂歌を千穂庵三陀羅法師に學び後鯉々亭和樽の社中に遊ぶ始め狂名を黄金升成と云へり後年寶蓮の長となり別號を楓山舍又た寶山人と稱す嘉永安政の際最も隆盛を極む文久年間新和泉町に轉居後歿せしと云ふ其年月詳かならず

ハウシン　抱眞「イシガキハウシン」
ハウシン　芳信「タナカハウシン」
ハウシンサイ　寶晋齋「エノモトキカク」

寶生　寶晋齋「エノモトキカク」　禪僧なり、白鼎と號す河内の人、上野萬松山泉龍寺に住す俗姓橘、將に得度を求めんとして金剛峰に躋り禿阪に至りて龍眉の僧に逢ふ曰く何くに往く生曰く我れ出家せんと欲す僧曰く愛線來强、佛道懸曠、猛利の大心あらずんば焉んぞ能く修行せん若し眞法を求めんと欲せば宜しく禪門に入るべし此に滯ふること勿れと言畢りて掛し去る生已に落髮して鎌倉に游び清院寺に至り法師に就いて具足戒を受く房州の虚空藏菩薩を禮して三七日の中得法に因緣なく遂に一老僧と同宿す熟々親れは禿阪に邂逅し僧曰く房州の虚空藏菩薩を禮して三七日の中得法に因緣なく遂に一老僧と同宿す熟々親れは禿阪に邂逅し僧曰く永源寂室和尚に見えしむ室曰く慈悲喜捨を以て一面器重す一日將に粉里に赴かんとして道吉野を過ぐ風の竹を愛らす聲を聞き忽爾として省す時に年二十一抃躍して室に告ぐ室曰く爾宜しく保任して以て其の器を成すべし慎みて造次すること勿れと室の踏滅に及び遂に越の龍溪寺に掛錫し月堂心に參すること歲餘堂も亦化し去る生慨然として望を失ふ會々大拙元國より歸り上野の吉祥寺に在て天目の道を弘むと聞き便ち往て所解を呈す拙肯んぜず饒山托鉢の話を看せしむ一室に安座して戸を出てざること三載大拙圓覺の請に赴く途中に迎へ叩く機話契はず辭して日光山に入り誓て曰く大事を明めずんば再び山を下らずと早間粥を煮る粥爆裂す此の時大いに悟る偈を作りて曰く去年廣澤間房裏、今歲日光富窟邊、不覺同生同死處、孤峰拍手嘯青天と廻りて大拙に告ぐ拙印可し且曰く古代得法の後山谷に潜て應ず爾ち今より十三年慎みて開法する勿れと此れより一鉢雲游、抜隊、特峯、月庵、通幻、無著、遂西、堂林等五十五員の知識に歷見し後ち武州に抵り清水受けて典禪寺に住す圓福寺に遷る那波大江氏泉龍寺を創し生を請じて開山第一世となす法席隆盛にして衆盈つること五千、一處女あり奇疾を獲て命且夕に迫る生曰く爲に發狂す生の法語を索む即ち書して與ふ其の病立ちに癒ゆ僧あり深居習定す談笑の間乍ち死し忽ち生く或は旬を越えて蘇す生對坐すれば遂に化する能はず愧謝錯投す又一比丘自ら頭顱を掻き設利羅を出す生渠が來るを待ちて踏倒す爾後現れず越中の禪越藤氏大會齋を設けて生を請じ登坐設法せしむ爲めに留る旬餘邑に神祠あり峨冠木偶人を安ず洞前を過ぐる者多く神の爲め殺らる生冠を削り頂を圓にし背に法號を書す往來始めて安し其の異跡一ならず生圓福に在りて徴疾を示す俄に衆を集めて後事を囑し偈を書して曰く七十二疑頑、即今離二四山、焚天打二筋斗、六裡安閒睡と雖を擅て化す(龍門夜話)

ハウシャウ　寶生「ケウジン」
ハウシャウ　寶章「タナカハウシャウ」
ハウシャウ　**イツカン**　寶生一閑(四世)　養阿彌の男なり父の業を繼ぐ北條氏の時還俗して服部四郎左衛門勝政と號す永祿元年八月を以て卒す(寶生九郎氏贈)

バウジャウ　**ウダイジン**　坊城右大臣「フヂハラモロスケ」

ハウシャウ　**カツヨシ**　寶生勝吉(六世)　金剛孫太郎の弟なり寶山一子ありしも觀世家に嗣子なかりしを以て之を以て其家を繼がしむ故に寶山の後嗣なし依て寶山自ら孫太郎の弟を養ひ嗣子と爲す勝吉榮滇松城に在るの日勝吉召されて芭蕉の曲を勤む家康之れに深く感じ思召され葵の御紋を印せる羽織を賜ふ是れ德川家に召さるゝの始めなり後ち業を男重房に讓り剃髮して道奇と號す寛永七年八月卒す(寶生九郎氏贈)

ハウシャウ　**キンゼラウ**　寶生金五郎　能樂脇方の名人なり脇寶生の家元にして資性端默技藝精妙能樂の品位井に趣味あり數層の重きを爲さしめたり明治三十八年二月二十一日肋膜炎及び肺炎を併發して東京神田駿河臺北甲賀町の自宅に逝けり年六十五

ハウシャウ　**ゴンシチ**　寶生權七　寶生流脇師の祖なり二世春藤六右衛門の子に四人あり第三子春藤權七の次子即ち權七なり兄新之丞嗣なし仍て之れを嗣ぎ改めて寶生氏を稱す始め寶生源七の家を德川氏の脇師家元となす家絶えて春藤六右衛門の家を家元とす此に至て脇師寶生の家を再興し脇師二軒となる(鎗木祢胤氏贈)

ハウシャウ　**シゲトモ**　寶生重友(八世)　將監と號す重房の男なり父の業を繼ぐ世に名人の名あり威有公常憲公の二代に仕ふ貞享二年八月卒す(寶生九郎氏贈)

ハウシャウ　**シゲフサ**　寶生重房(七世)　勝吉の男なり九郎左衛門と號す將軍吉德公大猷公戰有世に傳ふ胤榮則に技を以て足利將軍に謁するの例を追て寛永六年八月粑州俵光貞の紹介により德川家光の前に其の技を演じ後又正保三年三月再び將軍の覽に供す敵手は則ち岡田淡路守之に擇ばる初回は胤舜勝ち次回は淡路守勝つ共に賞を賜はる慶安元年正月十二日病を以て死す時に年六十(軍實文稿、本朝武藝小傳)

ハウザウキン　**インセイ**　寶藏院胤清(第三世)　寶藏院流の槍術家なり覺舜房法印と稱す滿田氏の義子にして胤舜の家を繼ぐ幼なるを以て後見中御門中入清原胤號に隨ひ槍法を受く遂に流の奥旨を究むその稟性短慮なれども弟子を教導して倦むを知らず と云ふ例を追て延寶二年六月術を殿有大君の覽に備へんとせしに將軍病あり終に止め只時服を賜ふて其の勞を慰す元祿二年年(一に元祿十四辛巳年)四月四日寂す年六十六(一に六十五)

ハウザウキン　**インブウ**　寶藏院胤風(四世)　寶藏院流の槍術家なり覺山房羅律師と稱す滿田權右衛門清原胤成の男なり幼より槍術を好み胤清に從て槍法を學ひ遂に其の奥旨を究めて先師の傳を繼げりその性質剛強にして常に門戸を出入する毎に必らず鎧鎗を持てり享保十一年九月二十四日技を將軍吉宗の覽に供す相手は一山の持寶院胤與これを勤む十六年十二月六日江戸の客居に於て入滅す年四十六深川靈巖寺院中中谷寛成寮に葬むる胤風江戸に下るや黒田豐州直邦の臣下に假田半之丞といふ者あり竹内流の槍術に通ずと之と技を較す胤風は鎧鎗を上段に擬し假田半之丞は鎧を下段に擬し胤風が下腹を從て胤風鎗を揚て之を拂ひ入て勝を取れりといふ

ハウザン　寶山「ツツミハウザン」
ハウザン　寶山　僧なり名は湛海、山田氏、勢州安濃郡一色の人なり寛永六年二月二日生る十八歳にして癩染す苦學修業して卒に神通を得たり正德六年正月十六日寂す年八十八(傳記)
ハウザン　寶山　上野伊勢崎の刀匠なり(古今鍛冶銘早見出)
ハウザン　方山　瀧氏京都の俳人なり重賴の門人重賴の歿後似船に從ふ峰山或は芳山又た松鶴軒と號す(俳家歿故年表)

公の三代に仕ふ寛文五年六月没す（寶生九郎氏贈）

ハウシャウ　ソウアミ　寶生宗阿彌（二世）、蓮阿彌の男なり父の業を繼ぎ將軍義持義量義勝の三代に歷仕す明應三年六月卒す（寶生九郎氏贈）

ハウジャウ　タメタカ　坊城爲隆「フヂハラタメタカ」

バウジャウ　トシマサ　坊城俊將　織部流の茶法を好み近衛家熙に學びて能く其法を得たり藤原氏官權大納言正二位に至る寛延二年正月朝日薨ず年五十（茶人系傳全集）

ハウシャウ　トモカツ　寶生友勝（十三世）　九郎と號す觀世織部の三男なり友通の養子となり其業を繼ぐ淺明公に仕ふ寛政三年十二月卒す

ハウシャウ　トモキヨ　寶生友精（十一世）　九郎と號す寶生新次郎の三男なり若年にして養父賜榮の業を繼ぐ常に春日大明神を信じ其藝を磨く事を祈る或夜神託あり矢一筋を賜ふと夢む依て其紋印に一筋の矢を加へて九本立に改む遂に功成て當流御大に興る有德公惇信公淺明公の三代に仕ふ明和九年十一月卒す

ハウシャウ　トモハル　寶生友春（九世）　將監と號す重友の男なり父の業を繼ぐ世に上手の名あり常應公甫章公文照公有德公の四代に仕ふ享保十三年八月卒す

ハウシャウ　トモミチ　寶生友通（十二世）　九郎と號す金剛三郎の二男なり友綿の養子となり其業を繼ぐ將軍淺明公に仕ふる事僅かに四年間にして安永四年五月卒す

ハウシャウ　トモユキ　寶生友干（十五世）　彌五郎と號す邦保の嫡男なり邦保早世なりしを以て祖英勝の嗣子となる纏て德川家齊家慶の師範を勤む嘉永年中外神田に於て勸進能を備す勸進能は古來觀世氏の能すものに限る寶生氏にして能すは將軍の師範たるを以て特に許されたるなり又謠曲正本の再版を剞す文久三年七月卒す嫡男九郎知榮嗣ぐ（寶生九郎氏贈）

バウジャウ　ナイダイジン　坊城内大臣「フヂハラサネムネ」

ハウシャウ　ノブヒデ　寶生暢榮（十世）　九郎と號す友春の四男なり初め越前家に仕ふ兄三人纏て早世す依て本家を繼ぐ有德公に仕ふ享保十五年六月卒す

ハウシャウ　ハウザン　寶生寶山（五世）　觀世道見の子なり一閑子なきを以て之を養子と爲し其業を繼がしむ俗呼んで之を古寶生と爲す將軍家康に仕へ愛寧せらる天正十三年八月卒す

ハウシャウ　ヒデカツ　寶生英勝（十四世）　將監と號す彌三郎明喬の嫡男なり本家友勝幼年なりしに依り後見して其名代を勤む友勝遂に早世せしを以て本家を相續す德川家齊家慶の師範仰付らる始めて當流謠曲の正本を開版す文化八年十二月卒す

ハウジャウ　ヒヤクセン　彭城百川「サカキヒヤクセン」

ハウシャウ　ヤウアミ　寶生養阿彌（三世）　宗阿彌の男なり父の業を繼ぎ將軍義政義尙義稙の三代に歷仕す後ち上杉家に仕ふ大永四年六月卒す（寶生九郎氏贈）

ハウシャウ　ヤゴラウ　寶生彌五郎　寶生家嗣子の通稱なり故に其の何世たるを詳にせず相傳ふ幕府の俗人なり尤も技を善くす而して道成寺の曲殊に其得意たり某侯酷だ散樂を好み嘗て寶生を招き爲めに其曲を演ぜしむ寶生乃ち烏帽を戴き縞衣を着し階を歷て揚に上り謠ふて曰く花を除けば唯松のみ花を除けば唯松のみ其聲瓊々として命石より出づが如く人人して以て絕技となす曲闕み侯其の自ら所為を問ふて初めて同輩の寶る所となるを知り激賞舍かず實践して之を勞す後ち其侯假面を請求し之を秘府に藏し名けて瑜皿の假面と曰ふ云ゝ然れども寶生家に此の事を傳へず想ふに蓋の技を賞して假設する所の小說譚なるべし（晴雪樓存稿、本朝虞初新誌）

ハウシャウ　レンアミ　寶生蓮阿彌（初世）　觀世々阿彌の弟なり觀世と同じく將軍義詮義滿の二代に仕ふ博識多才にして和漢の傳說を索搜し之を歌謠に布き伎舞に施す是に於て和樂大に興る將軍蓮阿彌を敎く寵眷せられ領する所の外山崎に新息を加へ千石を賜ふ遂に和樂の名を更めて能と爲す時俗呼んで能寶生と謂ふ遂に始めて一流を開き寶生流と爲す應仁二年八月卒す（寶生九郎氏贈）

ハウジャウ　寶壽　陸奥の刀匠にして元祿年間の人（古今鍛冶銘早見出）

ハウジュ　寶壽　出羽米澤の刀匠にして國秀の子文化年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ハウシュアン　寶珠庵「サトムラセウハ」

ハウシュク　方祝「ヲガタクワウリン」

ハウシュク　彭叔　甕庵と號す東福寺の住僧なり自悅澤の法嗣たり元弘三年寂す

ハウジュニ　芳壽尼「ムラタタセ」

ハウジュマル　寶壽丸　陸奥の刀匠にして元祿比の人なり（古今鍛冶備考）

ハウジュキン　寶樹院「ラクノカタ」

ハウショ　芳所「アサヲカハウショ」

ハウショウアン　イチギョク　寶松庵　遠州流挿花の師なり幕府旗下の士土屋左衛門の二男にして通稱清二郎と云ふ少年より虛弱の故を以て仕官の望を絕ち文政年中初代黑松庵一齋の門に入り花技を修め出藍の稱あり黑松庵物故後二世本松齋一得其技を嘉し古門人を以て待遇し大に誘掖する所あり爲めに大に名を知らる小石川同心町に閑居し廣く門生を養ふ遂に一派の風を爲す明治四年九月十四日年六十八にして卒す墓は駒込常楡寺俳人雪中庵嵐雪の墓側にあり（飯田保太郎氏贈）

ハウショウアン　イチギョク　寶松庵　幕府旗下の士にして武技を修め傍ら初代一玉に就き花技を學ぶ寶暦庵一也と號し高弟に推さる偶ま離新の世變に因て千里隔離し師の訃を知らず數年を經て出京し當時の本松齋一得勅め諸先輩の勸誘に因て寶松庵を闢き專ら門下に教授す明治十六年十一月十日年六十一にて卒す生込宗榮寺に葬る男保太郎是より先き父寶松庵二世を闢ぐに及び二世寶壽庵一也と號す父の歿後先祖の勸に依り三世を闢ぐ

ハウショダウ　コヘヱ　寶書堂「ゴサン」

バウズ　コヘヱ　坊主小兵衛　江戸の俳優なり延寶天和貞享の頃道化形を以て其名高し其の頭絲髻にして坊主に髮髻たるを以て坊主の名あり其の頭小兵衛人形と小兵衛が乘髮の姿な五月の兜人形に作りて鬻ぎたる程の流行俳優なり

ハウスイ　方寸齋「タケノソウダワ」

ハウスキ　放水「ヲカノカネヒデ」

ハウセウ　寶蕉「ハナブサイツテフ」

ハウセンク　忘筌窟「ヒライハセンザン」

ハウセンサイ　忘筌齋「サカキバラカウザン」

ハウセンダウ　忘筌堂「ハタチクタン」

ハウセンキ　忘禪院「フヂハラトヨミチ」

ハウソウ　方叟「ホツダマサヨシ」

ハウタイロウ　望泰樓「コバヤシテンエン」

ハウダイキン　寶臺院「キリノカタ」

ハウタク　寶澤「シモダハウタク」

ハウシン　保田信解　勤王家なり

ハウカイ　シンカイ　芳澤「シモダハウタク」

ハウ　左衛門の二男にして通稱清二郎と云ふ少年より虛弱の故を以て仕官の望を絕ち文政年中初代黑松庵一齋の門に入り花技を修め出藍の稱あり黑松庵物故後二世本松齋一得其技を嘉し古門人を以て待遇し大に誘掖する所あり爲めに大に名を知らる小石川同心町に閑居し廣く門生を養ふ遂に一派の風を爲す明治四年九月十四日年六十八にして卒す墓は駒込常楡寺俳人雪中庵嵐雪の墓側にあり（飯田保太郎氏贈）

ハウ　遠州流挿花の師なり幕府旗下の士土屋

ハウ　左衛門の二男にして通稱清二郎と云ふ少年より虛弱の故を以て仕官の望を絕ち文政年中初代黑松庵一齋の門に入り花技を修め出藍の稱あり黑松庵物故後二世本松齋一得其技を嘉し古門人を以て待遇し大に誘掖する所あり爲めに大に名を知らる小石川同心町に閑居し廣く門生を養ふ遂に一派の風を爲す明治四年九月十四日年六十八にして卒す墓は駒込常楡寺俳人雪中庵嵐雪の墓側にあり（飯田保太郎氏贈）

ハウ　一玉（二世）　幕府旗下の士にして武技を修め傍ら初代一玉に就き花技を學ぶ寶暦庵一也と號し高弟に推さる偶ま離新の世變に因て千里隔離し師の訃を知らず數年を經て出京し當時の本松齋一得勅め諸先輩の勸誘に因て寶松庵を闢き專ら門下に教授す明治十六年十一月十日年六十一にて卒す生込宗榮寺に葬る男保太郎是より先き父寶松庵二世を闢ぐに及び二世寶壽庵一也と號す父の歿後先祖の勸に依り三世を闢ぐ

ハウ　寶書堂「ゴサン」

ハウ　坊主小兵衛　江戸の俳優なり延寶天和貞享の頃道化形を以て其名高し其の頭絲髻にして坊主に髮髻たるを以て坊主の名あり其の頭小兵衛人形と小兵衛が乘髮の姿な五月の兜人形に作りて鬻ぎたる程の流行俳優なり

ハウ　方寸齋「タケノソウダワ」

ハウ　放水「ヲカノカネヒデ」

ハウ　寶蕉「ハナブサイツテフ」

ハウ　忘筌窟「ヒライハセンザン」

ハウ　忘筌齋「サカキバラカウザン」

ハウ　忘筌堂「ハタチクタン」

ハウ　忘禪院「フヂハラトヨミチ」

ハウ　方叟「ホツダマサヨシ」

ハウ　望泰樓「コバヤシテンエン」

ハウ　寶臺院「キリノカタ」

ハウ　寶澤「シモダハウタク」

ハウ　保田信解　勤王家なり

ハウ　芳澤「シモダハウタク」

ハウ　保田信解　勤王家なり

ハウ　寶樹院「ラクノカタ」

ハウ　芳所「アサヲカハウショ」

ハウ　寶松庵　遠州流挿花の師なり幕府旗下の士土屋

ハウ　左衛門の二男にして通稱清二郎と云ふ少年より虛弱の故を以て仕官の望を絕ち文政年中初代黑松庵一齋の門に入り花技を修め出藍の稱あり黑松庵物故後二世本松齋一得其技を嘉し古門人を以て待遇し大に誘掖する所あり爲めに大に名を知らる小石川同心町に閑居し廣く門生を養ふ遂に一派の風を爲す明治四年九月十四日年六十八にして卒す墓は駒込常楡寺俳人雪中庵嵐雪の墓側にあり（飯田保太郎氏贈）

ハウ　一玉（初代）　遠州流挿花の師なり幕府旗下の士土屋

ハウ　左衛門の二男にして通稱清二郎と云ふ少年より虛弱の故を以て仕官の望を絕ち文政年中初代黑松庵一齋の門に入り花技を修め出藍の稱あり黑松庵物故後二世本松齋一得其技を嘉し古門人を以て待遇し大に誘掖する所あり爲めに大に名を知らる小石川同心町に閑居し廣く門生を養ふ遂に一派の風を爲す明治四年九月十四日年六十八にして卒す墓は駒込常楡寺俳人雪中庵嵐雪の墓側にあり（飯田保太郎氏贈）

ハウ　寶壽丸　陸奥の刀匠にして元祿年間の人（古今鍛冶銘早見出）

ハウ　寶壽　出羽米澤の刀匠にして國秀の子文化年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ハウ　方祝「ヲガタクワウリン」

ハウ　彭叔　甕庵と號す東福寺の住僧なり自悅澤の法嗣たり元弘三年寂す

ハウ　芳壽尼「ムラタタセ」

ハウ　寶壽丸　陸奥の刀匠にして元祿比の人なり（古今鍛冶備考）

ハウ　寶樹院「ラクノカタ」

ハウ　芳所「アサヲカハウショ」

ハウ　寶松庵　遠州流挿花の師なり幕府旗下の士土屋

ハウ　左衛門の二男にして通稱清二郎と云ふ少年より虛弱の故を以て仕官の望を絕ち文政年中初代黑松庵一齋の門に入り花技を修め出藍の稱あり黑松庵物故後二世本松齋一得其技を嘉し古門人を以て待遇し大に誘掖する所あり爲めに大に名を知らる小石川同心町に閑居し廣く門生を養ふ遂に一派の風を爲す明治四年九月十四日年六十八にして卒す墓は駒込常楡寺俳人雪中庵嵐雪の墓側にあり（飯田保太郎氏贈）

ハウ　一玉（二世）　幕府旗下の士にして武技を修め傍ら初代一玉に就き花技を學ぶ寶暦庵一也と號し高弟に推さる偶ま離新の世變に因て千里隔離し師の訃を知らず數年を經て出京し當時の本松齋一得勅め諸先輩の勸誘に因て寶松庵を闢き專ら門下に教授す明治十六年十一月十日年六十一にて卒す生込宗榮寺に葬る男保太郎是より先き父寶松庵二世を闢ぐに及び二世寶壽庵一也と號す父の歿後先祖の勸に依り三世を闢ぐ

ハウ　寶書堂「ゴサン」

ハウ　坊主小兵衛　江戸の俳優なり延寶天和貞享の頃道化形を以て其名高し其の頭絲髻にして坊主に髮髻たるを以て坊主の名あり其の頭小兵衛人形と小兵衛が乘髮の姿な五月の兜人形に作りて鬻ぎたる程の流行俳優なり

ハウチ　寶壽　陸奥の刀匠にして元祿年間の人（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

ハウチキンノ　ミヤ　寶池院宮「シャウウンホウシンワウ」

ハウテイ　抱亭「ホクガ」

ハウドウ　寶幢　豐後の刀匠にして和銅頃の人或は云豐前の人にして寶幢神足と稱すと又云寶幢寶壽とも題名せしと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考）

バウトウケン　望籐軒「ツチヤイツラク」

ハウドウバウ　寶幢坊、マツナガナガタネ」

ハウトン　芳暾　紀州なり朝山と號す肥前島原の人、俗姓西郷其の母大陽の海より昇りて懷に墮つと夢て孕む年十九溫泉山に登りて落髮し台敎を習ふ尋て築て、宗席に遊び足翁天寧寺に居ると聞き往て質すに疑を以てす翁雲見桃花の話を擧げて之を示す暾對へんと擬す翁之を打つ忽ち省あり遂に留て侍執す享祿辛卯南江の保福寺に出世し次に能州總持寺に升る天文乙巳深堀の郡主暾の行解師裏とすべきを以て金谷の菩提寺か革めて譯となし延請して第一世とす永祿戊午四月一日疾なくして寂す年八十四（洞上聯燈錄）

バウナンテイ　寶馬「コスゲホウバ」

ハウハバンコジ　方半居士「キヤウサン」

ハウボウケン　保毋建　勤王の志士なり諫は景光通稱利め鍛之遷後建と改む肥前島原の人安政中藩主從平氏の家士となり諫　石二人口を貪み中小姓の役を勤む平田織胤に從ひ晶朝の古典を研究すると年あり又江戸の齋藤彌九郎に就きて劍道を學ぶ異船渡來以來慶應元年五月幕府征長の事あるや信六郎は同藩士上坂三郎右衛門の讒すると雖ども鳥威の陵夷を憤り一身を以て國に親戚其遺骸を收めて安昌寺に葬る明治二十四年朝廷特旨を以て正五位を贈らる（勝所藩勤王家列傳、殉難錄稿）

ハウチクワウキンノ　ミヤ　寶池光院宮「ワンガニヨワウ」

バウチチテイ　傍池亭「ナイトウロセン」

バウテチョウ　帽重　石見長濱の刀匠にして文明年間の人なり一に帽重に作る（古今鍛冶早見出、本朝鍛冶考）

ハウチキンノ　ミヤ　寶池院宮「シャウウンホウシンワウ」

ハウテイ　抱亭「ホクガ」

ハウドウ　寶幢　豐後の刀匠にして和銅頃の人或は云豐前の人にして寶幢神足と稱すと又云寶幢寶壽とも題名せしと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考）

バウトウケン　望籐軒「ツチヤイツラク」

ハウドウバウ　寶幢坊、マツナガナガタネ」

ハウトン　芳暾　紀州なり朝山と號す肥前島原の人、俗姓西郷其の母大陽の海より昇りて懷に墮つと夢て孕む年十九溫泉山に登りて落髮し台敎を習ふ尋て築て、宗席に遊び足翁天寧寺に居ると聞き往て質すに疑を以てす翁雲見桃花の話を擧げて之を示す暾對へんと擬す翁之を打つ忽ち省あり遂に留て侍執す享祿辛卯南江の保福寺に出世し次に能州總持寺に升る天文乙巳深堀の郡主暾の行解師裏とすべきを以て金谷の菩提寺か革めて譯となし延請して第一世とす永祿戊午四月一日疾なくして寂す年八十四（洞上聯燈錄）

バウナンテイ　寶馬「コスゲホウバ」

ハウハバンコジ　方半居士「キヤウサン」

ハウボウケン　保毋建　勤王の志士なり諫は景光通稱利め鍛之遷後建と改む肥前島原の人安政中藩主從平氏の家士となり諫　石二人口を貪み中小姓の役を勤む平田織胤に從ひ晶朝の古典を研究すると年あり又江戸の齋藤彌九郎に就きて劍道を學ぶ異船渡來以來慶應元年五月幕府征長の事あるや信六郎は同藩士上坂三郎右衛門の讒すると雖ども鳥威の陵夷を憤り一身を以て國に親戚其遺骸を收めて安昌寺に葬る明治二十四年朝廷特旨を以て正五位を贈らる（勝所藩勤王家列傳、殉難錄稿）

ハウムソウ　寶夢叟「セウクワ」

バウモンドノ バウモンノ ツボネ 坊門殿「アシカガヨシアキ」の宮人なり兵衛尉信業の女、後白河帝に幸ぜられ圓慧法親王、定慧法親王、靜慧法親王、僧恒慧を生む（大日本史）

バウモンノ ツボネ 坊門局 後鳥羽帝の宮人なり内大臣藤原信清の女、四御方と稱し又坊門局と曰ふ長仁親王輔仁親王嘉陽門院を生む後帝に讒岐に從ふ帝崩ずるに及びて京師に歸る（大日本史）

バウモン ナイダイジン 坊門内大臣「フヂハラノヂキヨ」

バウモン マサタダ 坊門正忠「フヂハラマサタダ」

バウモンキン 坊門院「ノリコナイシンワウ」

バウヤウ 亡羊「ミヤケキサイ」

バウヨウケン 抱甕軒「ヤマヲカゲンリン」

バウライ 賓來 假面工福來の子にして父の業を繼き善く假面を打つ假面六作の一なり（假面譜）

ハウラン 芳蘭「センサウアン」三世

ハウリウ 芳流「センサウサ」三世

ハウリン 芳林「フルイチナンケン」

ハウリン 芳隣「ニシコガク」

ハウリンアン 芳林庵「オホグチジヨシンケン」

ハウレツコウ 芳烈公「イケダミツマサ」

ハウヱン 芳園「ニシヤマハウヱン」

ハウヱンサイ 方圓齋「サクラキヨシミツ」

ハガイツシンサイ 羽我一心齋 餓客なり身の丈五尺一尺二寸の小刀を携へて立てば當時天下に敵なしと云ふ寛永九年武術上覽の時難波一藤齋と配す而して吉田一刀齋の後れ至るに會し改めて之に配す互に相挑んで發せず一時の後敷合して又相持す又敷合して後木刀を交叉して相持し兩人共に疲れて木刀を擲すに至る因て勝敗なしと判す此の日第一の觀なり（風俗畫報）

ハガ イツシャウ 芳賀一晶 俳人也難冠井令德に學ぶ名は治良、京師の人冥應堂崑山翁の號あり檀林の俳諧に名あり又畫を好みて發句に畫を作ること巧なり寶永四年四月廿八日歿す年五十六（扶桑畫人傳）

ハガ クラノジヤウ 芳賀内藏允 池田氏に仕へて右筆たり内藏允嘗て輝政に從ひて岐阜を攻め命を受けて捷報狀を書す會〻城中の烟火延さて硫磺の爆き轟聲震動して山祭崩るゝが如し樂營驚す内藏筆を執り自若として終に書き畢る輝政之を感賞し登用し祿二千石を與ふ後ち大阪の役起るや利隆（輝政の長子）の軍に從ひて天滿を攻む時に須賀左京と云ふもの士募きを以て援を乞ふ是に於て内藏命を受けて之に赴く後年内藏番氏明と與に國事に奔與し殊に功を建つ（野史）

ハガ タウ 芳賀陶 陸軍歩兵少尉なり福岡縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て豫備役より召集せられ第二師團歩兵第廿九聯隊附として從軍中廿八年三月三日清國盛京省高台嶺附近に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ハガ トキツナ 芳賀時綱 下野の人なり勅旨に愕り下野に流され芳賀に住す因て後裔族を芳賀と稱す正平六年九月伊賀守高綱下野眞岡の城主となり邑五萬石を食み宇津宮氏に謀り功を建て〻清蘆と稱す足利尊氏賞するに越後の田を以てす高重十八世兵衛入道禪可の名未だ詳ならず事跡粗〻高綱に似たるあり記して後考を待つ下野守護代となる正平十八年恨を上杉憲顯に挾み兵を起して越後に戰ふ軍敗れ一族臣庶多く戰歿す尋て憲顯鎌倉に赴くと聞き兵を轉じて上野の板鼻に次す事鎌倉に聞ゆ管領基氏騎三千を遣はして來り伐つ禪可宇都宮に在り子高貞及二男駿河守を以て騎兵驗河戰死す貞高の子八郎虎藤は下野の郷里に帰しめられんより寧ろ死を賜へと基氏嘆賞し諭して送歸す禪可後ち眞岡に閒居して歿す法名は直山、禪可の五世成時左兵衛尉と稱す長子太郎丸宇都宮明綱の後を繼ぎ正綱と稱す二男時綱字は二郎三郎父に繼ぎて伊賀守と稱し眞岡に居る是より宇都宮氏と親族となり清蘆と稱し紀蘆と相並びて宇都宮氏に隷す（野史）

ハガハ チンチョウ 羽川珍重 浮世繪師なり本姓は眞中俗稱太田彌次郎武州埼玉郡川口村の人幼より江戸に來り一世鳥居清信に就き畫法を學び萬治節用集および劇場畫本吉原細見記等の挿畫を畫く其家もと士人なれば頗る武事を嗜み且つ謹直にして言行を慎み遊山翫水の時と雖も肩衣を脫せず初め神信と稱せしが晩年自ら法號を附し三同宣觀居士といふ寶暦四年七月二十二日歿す年七十餘下谷池之端東圓寺に葬る辭世「たましひのちり隱も今一葉かな」（浮世繪類考別本、扶桑畫人傳、江戸名家墓所一覽）

ハガハ トウスイ 羽川藤水 浮世繪師なり羽川珍重の門人谷中天王寺本堂天井の龍および天人を畫く（浮世繪類考別本）

ハカマダレ ヤスケ 袴垂保輔「ヤスケ」

バカン 馬肝 江戸自銀里の人、俳諧を善くし以て業となす甚だ菖蒲革を愛し着る所の衣服皆之に倣ふ壁衣屏子其の色と形とに擬せざるなく搗飯は三角形に非らざれば食せず食器什具菱子形に非らざれば用ゐず三角形を以て紋となす門人皆て贈くるに菖蒲製の夾袋及び三角形の火爐を以てす馬肝大に喜び以て至寶となす（譚海）

ハガン 破顏「イツサウ」

ハガリンシン 羽賀林眞 狩野派の畫家なり初め狩野玉燕の門に入り後ち狩野主信に學べり（扶桑畫人傳）

ハギゾノノアルジ カゲ 芳宜園主 タチバナチ

ハギノ シユンテイ 萩野春亭 儒者なり名は貫字は子恕一に東井と號す東槻侯の儒員なり餘ら書を能くす安政五年二月二十一日歿す（纏墓所一覽）

ハギノバウ ジヨウエン「ジヨウヱン」 萩野坊乘圓

ハギノ マタイチ 萩野又一 伊達政宗の

臣なり元和元年五月六日道明寺の軍に銃を發して後藤又兵衛に中つ又兵衛馬より墜つ家人扶け退く既にして遂に死す（宋朝武功正傳）

ハギノヤ ハギハラ オトヒコ 萩の屋「オホヤウラズミ」なり初め鈴亭と號す德川氏旗下の士桑原宗衛の弟にて淵一郎と稱す後萩原秋巖の養子となり對梅宇と號す戲作に從事し二世梅暮里谷峨と號す又歌澤節の作をなし歌澤能六齋と號す明治十九年二月廿八日歿す年六十一

ハギハラ ガクテイ 萩原樂亭 江戸の儒者なり萬世の長男名は善韶、字は文華、世稱を承けて亦英助と曰ふ當岳又樂亭と號す父萬世の業を紹ぎ生徒を教授す萬世は惠ら古學を師承し六朝以下の書は槩て顧ざる者あり善韶は則ち古今を博綜し明清考證の諸書究窮せざるはなし年四十にして死す男を裕と曰ふ詩經集解、論語私說、孟子私說、學庸私說等の著書あり

ハギハラ キザク 萩原喜作 陸軍歩兵少尉なり茨木縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て豫備役より召集せられ後備歩兵第二聯隊附として從軍中廿八年三月三日清國盛京省魚鱗堡に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ハギハラ コロク 萩原虎六 勤王の志士なり諱は政奥姫路藩士にして祿六十石を領す風に大志を抱き同藩士武井守正と相親み互に砥勵す後藩の專槳を生に選拔され樫原流槍術を修め九州を歷遊し其奥義を極め又砲術柔術にも達せり文久二年夏藩主に扈從して京都に往く同三年春河合總兵衛に伴はれて再び上京し諸藩の志士と交はる此年正親町少將勅使として長州に使するに當り選ばれて其隨從となる中途にして少將隨從の者二人を以て沿道諸藩の形勢を報ぜしむるに當り水戸藩士松本忠太夫と共に其選に當り急馳して上京す使事畢へて下關に至るや又選ばれて豐前小倉に使す京都に歸るに及び益々尊攘の大義を唱へて國事に奔走す時に廟議一變して長藩は斥けられ七卿は四に遁り京都殊に騷擾す虎六總兵衛と共に七卿に追跡せしが諜されて中途より師り元治元年夏國に還されて禁錮の身となり遂に獄に繫がれ同年十二月二十六日總兵衛等と共に自刃を命ぜらる在京中千種家の雜掌香川肇京都の儒者家里新太郎の二人を暗殺したる罪を以てなり時に年二十二明治三十一年七月特旨を以て正五位を贈らる（殉難錄稿）

ハギハラ サンケイ 萩原三圭 醫師なり字は守敬、衆堂と號す三圭は通稱なり土佐の人蘭學を細川潤二郎に受け醫を緒方洪庵に學ぶ慶應の初め幕府醫學校及病院を長崎に創建し大に天下の醫生を教導す三圭乃ち藩に請ふて長崎に至り醫學校に入りマンスヘルド、ボードイン等の蘭醫に就て醫學を修む明治二年獨國伯林に赴き大學に入る是れ實に本邦醫學生の伯林に至るの始なり六年文部理事官田中不二麿長興專齋を伴ふて伯林に至る登大學設立に就て教諭を聘せんが爲めなり是れより先きホフマシュルレルの二人既に聘せられて東京に在り然れども已に大學を興す生理解剖等の科を設けざる可らず故に聘するにプロフエツソルデーニツツを以てせりデーニツツと共に歸朝せしむ七月齋乃ち三圭に勸めてデーニツツを助け三圭東京に歸り大學出勤を命ぜられデーニツツを助けて教授の事を務む七年十二月大學教授に任ぜられ次いで故あり其の職を免ぜらる後ち聘ぜられて京都に赴き京都病院監學事となり教師澳國人ヨンケルと共に專ら生徒の教育に從事す又幾くも無くして辭す十七年八月を以て再び獨逸に赴き學全科を研究し十九年六月に至りて科業を畢りドクトルの學位を得て歸途に上る二十年一月久宮殿下不豫召されて宮中に伺候し侍醫局勤務を命ぜらる翌年五月侍科を以て稱せらる又遷ばれて東京醫會總町部會の副會長となり擢げられて醫術開業試驗委員となり力を公私の事に盡せしこと少からず三圭性溫厚君子の風あり而かも剛毅にして敢へて人に屈せず其の病者に對するや慇切にして殊に貧者を視ること甚だ厚く常に自ら工フランドの戒に一握の黃金も是を貧士双眼の淚に比すれば何ものぞやと實に千古の確言にして醫たるものの必ずこれを服膺せざるべからずと二十七年一月の初め脳炎に かゝり十四日死す年五十五谷中の墓地に葬る（中外醫事眞誌）

ハギハラ シウガン 萩原秋巖 畫家なり名は聲字は文侯古瑯流史と號す通稱唯助後ち自然と改む菱湖の門人にして一派をなす著はす所書法晉粹あり明治十年二月十九日歿す年七十五（纏墓所一覽）

ハギハラ セイチウ 萩原西疇 樂亭の長男なり名は谿、初の字は公寬、後好問と改む通稱は英助三歳にして父に別る幼にして性英敏學を好み長じて經學文章を善くす嘗て謂ふ世人勳もすれば好て頼氏の外史を誦す之を且頼氏は文を主とし事實を錯論に本づく者多しと雖も實は頼氏の論は讃史餘論に本づく者少からず仍て餘論を刻して世人を警省す後又獻替錄を著す大に人口に膾炙せり四十歳の頃伊豫國今治藩の聘する所と爲る家を挈げ今治の久松定法に仕へ藩學を藍革し藩政に參す居ること三年辭して東京に還る明治五年九月陸軍省九等出仕より諸官を經て修史局一等協修に任ず修史局廢せられてより家居悠〻私塾を張る塾徒常に數十人あり又學習院の講師に聘せらる命を承けて臺灣琉球始末を纂す病あり特旨正七位に叙す明治三十一年二月十九日を以て歿す時に年七十谷中共同墓地に葬る男弘之家を繼ぐ著す所東坡外傳、獻替錄、明後錄、丹碧類稿、獻帝逃略、女訓、諸子大意、四子左氏傳講義錄、古本大學講義、虛字註解、詩文集遺稿等あり

ハギハラ ソウコ 萩原宗固 歌人なり百花園と稱す江戸市ケ谷本村比丘尼坂なる鈴木氏の家に生る四谷左門町の萩原氏の養子となりて通稱を七左衛門源貞辰といふ幼にして冷泉家に從て歌を學び夢中郭公「夢なれや枕ならべてねし人もきかぬ初音の山ほとゝぎす」の秀詠あり後は烏丸光榮の風を仰ぎて松宿月の題にて「もりかぬる木の間のかげのよひ〳〵は出でも月をまつの下庵」又夜ひ萩舟をめて人はしゞまる湊江に荻の葉さわぐ夜の涙風」等の名什あり光榮薨ずるの後は武者小路實岳に從ふ實岳薨じて後師なし某貫神爲に紹介して冷泉爲村の門に入る晩年に四谷荒木横町に住み天明四年五月二日年八十二にして歿す著書に蒭蛉日記の注釋、家集しのゝは草、（刊本三卷）、世に行はる横田袋翁筆檢校は其の門に學びし人なり其墓は四谷南寺町本性寺にあり（擁書漫筆、江戸名家墓所一覽）

ハギハラ ダイロク 萩原大麓（自ら修

して萩と云ふ）江戸の儒者なり名は萬世、字は侏飛、通稱を英助と曰ふ大饒は其號なり上野國緑野郡藤岡町の人少より農業を悅ばず蚤く父母を喪ひ田莊財産を擧げて其弟に與へ江戸に出でゝ片山兼山の門に入る松下壽と入室の弟子たり兩國藥研堀に卜居し門徒を聚む時に安永六年なり其學師承する所を奉じ攷證を主とし古を以て古を證す同學の外妄に交通せずと雖風流匪岸なきたり二本松侯丹羽長祥演松侯井上正定贊み執て門に入り尤敬信する所となる嘗て岡山の支藩池田某の禮聘する所となり講書に臨み案に對して默然たる者久し有司之を促す萬世從容として曰く侯の坐下に溺あるに似たり某侯遽に之を除く是より復往かず萬世嘗て出でゝ花を曠堤に觀る蹴乞者あり童兒北與を撓て至る乃謂て曰く吾錢を汝に與へん暫く其與と童とみ我に借貸すべし蹴乞者悅て與を下る萬世之に乘り童をして其與を挽て花下を經過せしめ仰ぎ見て曰く王公の花を觀るも亦是の如きに過ぎざるのみと其風流物に帶介せざる亦此に類す萬世常に曰く仕へて祿五百石に至らざれは爲す所あるに足らず寧ろ仕へずして自放なるに如かずと年六十文化八年を以て死す遺言して芝南寺町妙福寺先師世璠の墓畔に葬る著す所五經解閉、荀子攷、韓子攷、列子攷、呂子攷、顯譚、白鶴堂詩文集若干卷あり子二人長を善韶と曰ひ次を公寵と曰ふ（續諸家人物誌、鑒定便覽）

ハギハラ チクラ 萩原竹良 俳人なり通稱榮造甲斐國東山梨郡勝沼驛に住す始めは竹原田其輔と稱せり竹原田は甲府の名族なり早くより俳諧に心ざし惺庵西馬の門に遊ぶ非齋又智德堂の號あり師歿後幹雄と無二の交りを爲す家は奥服太物を以て業とし一世にして近域を壓するの富豪を成せり關翠集、月下集、山梨士産、花の序の撰あり明治三十年九月二十七日歿す年七十三（三森松江氏寄）

ハギハラノ ヒロミチ「ハギハラノ ヰワウ」 萩原廣道 和學者なり鹿左衛門と稱し霞沼と號す出石居、鹿鳴草舍、蒜園皆其の別號なり初めは藤原小平太濱雄と稱す備前岡山の人にして大阪に寄寓す好て國書を讀み尤も源語に通ず著書多く皆な實用有益を主とす文久三年中風を病みて歿す年五十一著す所源氏物語評釋、本學提綱、遺聲字論、補圖文集帶十數種あり（小傳）

ハギハラ マサヒラ 萩原正平 伊豆國の和學者なり初の名は直鼎碧澤郡川西村小坂の人平田篤胤及び權田直助に從學す明治初年官命により伊豆七島式内社官社調査の爲め渡航して事代主神此國土を天孫に讓りて後伊豆七島に渡り來まして后妃王子は諸島に分居して其の開拓の祖となりしことを證蹟を擧げて考記し尊て伊豆國式社考證六卷及三島神社考證一卷を編して時の神祇官に上進せり有二書の外著書は增訂豆州志十六卷、古史冒行頌二卷、承久殉難五殉事蹟考を始として二十餘部あり教導職に補せられて大教正に至り三島神社少宮司となる明治二十四年六月七日歿す年五十四

ハギハラ ムネヒロ 萩原宗廣 陸軍步兵中尉なり熊本縣出身にして明治卅七八年日露戰役に際し臨備役より召集せられ第六師團步兵第十三聯隊附として從軍中三十七年八月三十一日清國盛京省首山堡に於て戰死す戰功六等功五級に叙せらる

モトカツ 萩原元克 甲斐の和學者にして鈴廼舍の門人なり平吉と稱す道のしみり、甲斐國名勝志、石森孝女傳等の著あり

ハギハラ ラクヰ 萩原樂水 書家なり宇は文齋、紋二郎と稱す樂水は其の號一に溫故堂と號す（續墓所一覽）

ハギハラ ラクデイ 萩原樂亭 大麓の子なり字は文華英助と稱し又蕾岳の號あり父の業をつぎて生徒を教授す人となり方正修飾妄りに言笑せず交通すること少し是を以て世其學力を知るもの稀なり松平冠山學を好み常に親交あり嘗て諸儒名流相會し談偶古書諧子に及ぶ四島輓座にありて曰く萩原文華に笑はるゝ勿れと一座肅然たり其同人間に推重せらるゝこと此の如し編庸私記、論語私記、孟子私記、左氏傳解閉、詩經集解、國語說、老子考、蕾岳文話、修倉錄等の著あり文政十二年歿す年四十九男裕、四嘯と號し亦儒を以て著はる

ハギハラ リョクヤ 萩原綠野 儒者なり萬世の二男なり字は公寵後之を名とす、風二郎と稱し晩年石桂堂、一枝庵等の別號あり年二十八家を分ち日本橋茸屋町に寓居し亦生徒を聚む善韶の死する遺孤方に幼稚なり乃ち家を驛げ還りて撫字す學術善韶と大同小異なり或人問ふて曰く先生何學を修むるや曰く宋學を修む俱洛閩の學體を奥せざるのみと門徒極めて多し牧野忠恭牧野貞明大河内信古安藤正信大久保教義松平直諒岩城隆邦等は皆其門人なり平生好て易を玩ふ讀易膳言を著し又詩賦に巧みに古調を主とし閒讀を學ぶ石桂堂詩集あり安政甲寅を以て死す時に年五十九先塋の側に葬る

バキン 馬琴 有名の小說家なり瀧澤氏、名は解字は瑣吉小名は倉藏後清左衛門と改めて晩に剃髮して蕙民と稱し曲亭馬琴と號す又著作堂、蓑笠漁隱、玄同陳人、魁蕾子等の別號あり江戸の人父を興歳と曰ひ幕府の士松平信成に仕て家密と爲り三子を生む馬琴は其の季なり明和四年六月深川に生る父歿して兄貴嗣き事を以て致仕す馬琴甫めて九歳留りて小主に仕ふ馬琴幼にして書を讀むことを好み又た稗史野乘を喜びて晝夜手に卷を釋てず小主驕暴動もすれば之れを虐使す馬琴慷ばず一夜俳歌を房壁に書して曰く「水がらしに思ひ立けりかみのたび」と遂に逃れ去る時に年十四兄與旨戶田氏に仕ふ之を聞きて諭示すること再三之を主に薦めて徒士と爲す其好むところに非ざるなり幾くもなくして辭し去り更に幕士戴氏に歷仕す皆な終へずして去り醫官山本宗英の家に寓して醫を學び宗仙と號す又た經を龜田鵬齋に受く皆な學を終へずして罷む小說家山東京傳の家に寓す京傳其才を愛して之を待つこと甚だ篤し馬琴慨然として曰く吾れ官となり醫となる能はず又た儒となる能はず寧ろ稗史小說を作りて名を後世に著はすも亦た一快事なりと乃ち始めて一書を著し壬生狂言と曰ふ京傳一見して驚き歎じて曰く今より二三年にして世復た老夫を說かじと京傳爲に介して書肆蔦屋重三郎の管店と爲す時に花の春風の道行二册を著す北齋畫て大に行はる馬琴身の丈六尺餘ありて眸睨魁偉角觝長軍來り見て曰く子余に從はゞ必ず名

を海內に揚げんと馬琴笑て答へず蔦屋の叔父の家は妓館の側に在り茶屋を以て業と爲す女あり甚だ美なり馬琴を以て壻と爲さんと欲す馬琴曰く妓家何ぞ乞盜に異ならん父母の遺體を以て之を汚すに忍びずと蔦屋に居ること三年にして俄田街中坂の履商伊勢屋の寡婦に入壻す然れども年硯を好むを以て履の業を懶とせず則ち其の女に壻を取り自ら書を兒童に教へて給し其の暇を以て著作す其所作文辭絕妙にして引證精博なるを以て海內馬琴の書を讀まざる莫し而して八犬傳尤も著はると云ふ書賈彫刻日々に其門に至り一紙の成るを待ちて一紙を刻し一篇成りて一篇を刻す萬本立どころに售れ遠邇爭ひ觀る馬琴已に著述を以て家を爲す著はす所無慮二百五十餘種筆を下せば立どころに獻り文點を加へず家漸く財に饒かなり是れより先き嗣子興繼醫を業として馬琴と別居す戀ばくもなくして興繼病みて歿せしかば悉く其藏書を賣りて其子の爲に武士の官を買ひ與へたり馬琴年七十餘にして眼を患ひ殆んど盲して字を作すことを得ず乃ち口づから興繼の婦木村氏に授けて之を寫さしむ字句練琢絕えて代稿の跡を見ず既にして壽藏を小石川深光寺に作り自ら法諡を撰して著作堂隱譽蘭笠居士と曰ふ又た吾佛記を著はして家に藏す八犬傳は筆を文化十一年に起して天保十二年に成る凡そ二十八年明年幕府大に新政を行ひ稗史小說は淫猥俗を盜ると爲し命じて之を禁ず而して獨り馬琴の著はす所は則ち問はず嘉永元年十一月六日歿す年八十二馬琴少年にして豪宕不羈後ち行を改め老て益ゝ方正剛毅世と俯仰せず或は一言合はざれば終身交を絕つ故を以て京師京山北齋の徒と終に相協はず（譚海、燕石十種）

ハキヤウ 破鏡 膳所の士菅沼外記の妻なり外記は芭蕉の門に入りて馬指堂曲翠と號し俳諧を以て世に著る破鏡は和泉岸和田藩士の女にして和歌を好み筑紫箏を工にす嘗て夫と俱に故郷に赴き播磨を過ぐ時に其の日記あり文章佳麗なりと云ふ外記の同僚に曾我權太夫と云ふものあり寵愛人皆之を惡む外記伴りて之を己れの家に饗し其の罪を數へ之を殺して自刎す妻髮を截ち尼となりて堺津に隱れ自ら破鏡と號す蓋し破鏡復たび照さずと云ふ義に取れり日に歌を詠じ箏を彈じ以て自ら娛しむ其の琴の流今尙ほ存して破鏡流と曰ふ（近世畸人傳）

ハギヤ ノリヨシ 萩谷德善 陸軍砲兵少佐なり京都府出身にして明治二十八年征臺役に於て臺灣兵站監部附として出征し同年十月廿日臺灣島大甫林兵站司令部に於て虎列刺病に因り死去す

ハギヤ（イハイハチ） 萩谷平八 勤王の志士なり常陸國茨城郡小泉村の鄉士列たり諸は義方安政の末年木村善道等と力を合せ勤國事に奔走す元治元年水戶甲子の亂起るや那珂湊に戰ひしが後銃子に禁錮せられ慶應元年四月二日殺さる年六十六（殉難錄稿）

ハギヤウケイ 萩井尙綱 盛岡の人なり兩眼明を失ふ嘗て江戶に抵り贅を芳町金陵に執り易學を研鑽す安政二年十月二日夜地大に震ひ家屋崩壞す此夕尙綱避く可きの術無し火に而して行く倒ゝ躄して坐す尙綱謂て曰く噂我眼無し東西を辨ぜず子能く之を辨ずや奚んぞ避けざる躄曰く我脚有り而して子は眼有り我れ子を負て行かん子遊ゝ所を示せ是或は以て相償ふ可きなりと二人相扶けて遂に其の災を免かれ相謝して別る明日尙綱其の師家を訪ひ其の事を繼述す同門某氏給事を能くする者芳野櫻陰之に敎すと云ふ（聲人傳）

ハクアン 柏庵 「アヲキホウキウ」

ハクイウ 白幽 書家なり京都白川の山中に住常に金剛經を誦す石川丈山の師友なり曾て隱怪みて詰るに唯長生の法を告るの外白幽常に巖上に坐し傍らに卓一基を置き上に老子と金剛經あるのみ其の筆跡甚だ稀なり偶ゝあるものは八分字なり筆法超凡にして實に仙境の人の筆跡や此の如し長壽にして齡數を知らず或は云く二百餘歲なりと或は云く實は其の寂年詳ならず寶永六年と云ふ（鑒定便覽、俳林小傳）

ハクイウケン 薄友軒 「カノドウウン」

ハクイウ 白雄坊 「シユンジウアンハク」

ハクイン 白隱 高僧なり名は慧鶴（慧一に惠に作る）俗氏長澤、駿河原驛の人年十一僧の地獄の苦楚を戰くを聽き乃ち求法度生の志あり爾後父母を辭して著はる

ハギハラ リョクヤ 萩原綠野 儒者なり萬世の二男なり字は公寵後之を名とす、風二郎と稱し晩年石桂堂、一枝庵等の別號あり年二十八家を分ち日本橋茸屋町に寓居し亦生徒を聚む善韶の死する遺孤方に幼稚なり乃ち家を驛げ還りて撫字す學術善韶と大同小異なり或人問ふて曰く先生何學を修むるや曰く宋學を修む俱洛閩の學體を奥せざるのみと門徒極めて多し牧野忠恭牧野貞明大河內信古安藤正信大久保教義松平直諒岩城隆邦等は皆其門人なり平生好て易を玩ふ讀易膳言を著し又詩賦に巧みに古調を主とし閒讀を學ぶ石桂堂詩集あり安政甲寅を以て死す時に年五十九先塋の側に葬る

バキン 馬琴 有名の小說家なり瀧澤氏、名は解字は瑣吉小名は倉藏後清左衛門と改めて晩に剃髮して蕙民と稱し曲亭馬琴と號す又著作堂、蓑笠漁隱、玄同陳人、魁蕾子等の別號あり江戶の人父を興歳と曰ひ幕府の士松平信成に仕て家密と爲り三子を生む馬琴は其の季なり明和四年六月深川に生る父歿して兄貴嗣き事を以て致仕す馬琴甫めて九歳留りて小主に仕ふ馬琴幼にして書を讀むことを好み又た稗史野乘を喜びて晝夜手に卷を釋てず小主驕暴動もすれば之れを虐使す馬琴慷ばず一夜俳歌を房壁に書して曰く「水がらしに思ひ立けりかみのたび」と遂に逃れ去る時に年十四兄與旨戶田氏に仕ふ之を聞きて諭示すること再三之を主に薦めて徒士と爲す其好むところに非ざるなり幾くもなくして辭し去り更に幕士戴氏に歷仕す皆な終へずして去り醫官山本宗英の家に寓して醫を學び宗仙と號す又た經を龜田鵬齋に受く皆な學を終へずして罷む小說家山東京傳の家に寓す京傳其才を愛して之を待つこと甚だ篤し馬琴慨然として曰く吾れ官となり醫となる能はず又た儒となる能はず寧ろ稗史小說を作りて名を後世に著はすも亦た一快事なりと乃ち始めて一書を著し壬生狂言と曰ふ京傳一見して驚き歎じて曰く今より二三年にして世復た老夫を說かじと京傳爲に介して書肆蔦屋重三郎の管店と爲す時に花の春風の道行二册を著す北齋畫て大に行はる馬琴身の丈六尺餘ありて眸睨魁偉角觝長軍來り見て曰く子余に從はゞ必ず名

松蔭寺單巖傳公に謁し祝髮して弟子となる時に年十五居ること五年四方に周遊し諸老を訪ひ參問垂切越後の英岩寺に在るや日夕端坐怨ち省覺あり時に年二十四後ち宗格禪人に由りて信州飯山の正受端公に見え機緣交隅豁然超悟するあり後原に還り松蔭寺に住す華蘭第一坐の職に就き法を鮮承公に嗣ぐ時に年三十一是の時院宇頹損上漏り下濕ふ白隱濟然枯淡を守ること幾んど二十年時人其の高踏を知らなし元文五年春白隱虛錄を讀說す妙機英發、萬衆悚聽す是に由りて名望海內に遍く參請の徒庵を結びて村里に散居するもの常に百餘人瞎方推して一代の龍門とす明和五年十二月十一日寂す年八十四敕諡を賜て神機獨妙禪師と曰ふ白隱雖て雜書を好み道歌を詠じ畫贊を作りて人を敎導す其の畫は異風淡墨童子の畫が如し然れども能手なりと云ふ其の法を嗣ぐものは龍澤寺の東嶺圓慈松蔭寺の遠霸元慶とす著はす所塊安國語、關提紀聞、息耕錄雜說、荊叢毒蕊、夜船閒話、遠羅天釜、左之母草、寶鑑貽賊、寒林貽寶、市談、壁生草、粉引歌、毒爪牙、藻鹽集、八重蓬、同二編（一名十句觀音靈驗記）同三編、辻談義、講贊搖櫓船等あり（續近世叢語、近代名家著述、扶桑畫人傳）

ハクウ 白羽 「カシマハクウ」

ハクウ 白雲 「エケウ」

ハクウコジ 白雲居士 「タナカシキウ」

ハクウサンジン 白雲散人 「イトウクワシアン」

ハクウサンジン 白雲山人 「シラキヤウイン」

ハクウンシ 白雲子 京都の書家なり姓は筒井吟龍軒と號す通稱は左京進京師の人書法御家流より出でゝ遂に一家をなす世に白雲子流と稱す門に入りて學ぶ者頗る多し俳人に白雲と云へるあり蓋し同人ならん（鑒定便覽、俳林小傳）

ハクウンドウ 白英 「ハヤシハクエイ」

ハクエイ 伯瑛 「フクチハクエイ」

ハクエン 栢筵 「イチカハダンジフラウ」二代目

ハクガイ 白蛾 「アラキハクガ」

ハクガイ 白崖 「ホウシヤウ」

ハクガイ　白亥「イシザカハクガイ」
ハクガノサンミ　博雅三位「ミナモトヒロマサ」
ハクガン　白岩「モロクズハクガン」
ハクガン　白嵒「イナガキチヤウシヨウ」
ハクガンコジ　白眼居士　東山の僧なり貞享四年の印本に好色破邪顯正あり好色本の流行を雖ぜし書なり又正月揃といふ書あり共に此人の著なり北條團水と別人なり
ハクキ　白龜「コマツヤハクキ」
ハクキ　白岐「アリマハクギ」
ハクキ　伯毅「ヒトミハクキ」
ハクキ　伯輝「タナカニツクワ」
ハクキ　白賁「ハツトリチユウエイ」
ハクキン　白芹「キジツアンハクキン」
ハクキヨ　白居「ヘウケイアンハクキヨ」
ハクギヨ　白玉齋「カノエイセン」二代目
ハクサイ　白玉齋「カツラウセキ」
ハクギヨクヨウ　白玉翁「オホギマチキンミチ」
ハクキエン　白駒「ヨカハクク」
ハクク　白賁園「ヒトミボクイウケン」
ハクク　白駒「セキハクク」
ハククワ　白華「スゲノハククワ」
ハククワ　白華「トキエイシヤウ」
ハククワヌウ　白華翁「アマノノブカゲ」
ハクケイ　伯繼「クマザハレウカイ」
ハクケイ　白圭「マツザキハクケイ」
ハクケイ　白圭「ウヘハラハクケイ」
ハクゲン　伯元「サカキハクゲン」
ハクコウサイ　白后齋「テイイン」
ハクコク　白谷「ニシナハクコク」
ハクサイ　伯齋「ササヲカハクサイ」
ハクザウス　白藏主　泉州堺南庄の少林寺中の人傳へ云ふ此の僧常に稻荷を信ず一日此邊に三足の狐を獲携へ來て之を畜ふ狐靈あり賊を道ひ吉凶を告ぐ大藏狂言師某之を狂言に趣向し吼噦と名づく（近代世事談）
ハクサン　柘山「タコハクザン」
ハクザン　白山「ナカネハクザン」
ハクザン　白山「キヨセハクザン」
ハクザン　白山「ヲガハハクザン」
ハクサン　白山權現　句々理ゴンゲン
ハクサンラウジン　白山老人「ゲンブバウ」
ハクシ　泊子　狩野元信の門に入りて人物花鳥の畫を能くせり（鑒定便覽、繽本朝畫史、扶桑畫人傳）
ハクジツアン　白日庵「アヲヤマトクラウ」
ハクジフ　柏十　俳人なり嵐雪の門人（俳林小傳）
ハクシン　伯愼「ヨコダハクシン」
ハクシヤ　伯砂「ヨシダハクシヤ」
ハクジユ　伯壽「カノハクジユ」
ハクジユバウ　白壽坊　鄰子門の俳人なり野村氏道元居士と號し信我と稱す江戸の人文化十四年六月十六日歿す年六十四麻布園林寺に葬る（江戸名家墓覽、俳家歿故年表）
ハクジヨテイ　柏如亭「カシハギジヨテイ」
ハクスキ　麥水「ホツタバクスキ」
ハクセイ　伯清「カノハクセイ」
ハクセキ　白石「アラキハクセキ」
ハクセン　博泉「トウサンダウ」
ハクセン　博泉「ミヅタリハクセン」
ハクセン　白仙「ハクイウ」
ハクセン　白僊　グワメダウジン」
ハクタクチウ　白澤「イリエマサヨシ」
ハクツウ　博通　大寶中和歌を善くするを以て名あり詠歌は殺て萬葉集にあり（萬葉集作者履歴）
ハクテイ　柏亭「イトウランダウ」
ハクテイ　柏亭「アサヲカイウキ」
ハクテイ　柏亭「ヤスハラハクテイ」
ハクト　白圖「ニツキハクト」
ハクトウ　白藤「スズキハクトウ」
ハクトウマル　白頭丸「ハマギヨリウ」
ハクニヨ　泊如　名は運歛字は元春、泊如は其の號種津大阪の人なり姓は藤原氏父の名は秀俊嘗て勇名あり母は江崎氏泊如慶長甲寅の歳十月十九日に生る羅根風植あるがごとく利智も亦た尋常の人に越たり二三歳の頃よりはやく吾が姓名の文字を識れり幼時常に一寶殿を夢みることより其の高廣殿麗たる殿前に白馬を繫げり後ち京師に至り母に伴はれて東山を遊覽し大佛殿を見るに儼として嘗て夢みる所の如し父の歿する時に年十三神泉我上人の父と故あるを以て母に喩して云ふ既に三子あり何ぞ其一人を僧として佛に供養せざるやと然れども母の鍾愛するを限なく忍びざるの意あり然れども泊如の自ら懇請すること再三なるによりて遂に許して僧とすこれより常に神泉に詣り内典を習ひ學修すること怠たらず次の年高野の真慧和尚の京師に寓するにあひて往て謁す真慧乃ち秘藏寶鑰數紙を以て授くるにあひて往て謁す真慧乃ち秘藏寶鑰數紙を以て授くるに乃ち覆讀して隻字も遺るゝなし學者皆靈異せざるといふことなし是より真慧泊如をともなひて高野山に歸り後また安樂壽院にて觀運和尚に謁す觀運一見して器量の過れたるを許しつ乃ち留めて左右に侍らしむ一日母遽に死すと聞て觀運心經秘鍵を誦せしむ泊如即ち往て魂に讀誦するに母乍ち甦て泊如に告るに昨夜子が誦經するに當て病鬼の遁れ去るを見たり佛法の經驗誦に誣ゆべからずといへり十六歳の時出家行道しある公に謁するに及びて請て佛經を講ぜしむ公もとより儼典を嗜みかれて本邦の神書に通曉し釋氏の法に於て初は信ずるとなかりしを泊如豫め之を知りて謂經の次て因みに儒釋および十住心轉昇と即身成佛の理を辯論し以て說き驗せしかば公ふかく感嘆して云ふ今日はじめて佛理の妙を知るとの給ひて盛饌を以て餞裝を送られたり晩年に至りてある日弟子慈觀に語りて云ふ我れ明日滅をとるべし汝が輩他に行くこと勿れと云て翌日諸弟子を召し遺誡するに佛制に違ふことなく興法をもて常に懷とせよと懇に告げ遺偈をしるし秘印を結び遷化せり時に年八十元祿六年九月十日なり嘗て擯逃の書いと多し故らに大師の書を發揮するもの少からず性靈集、便蒙、三教指歸、刪補秘藏、寶鑰臺解等、題筆には谷響集あり（名家略傳）

ハクハクサンジン　狛々山人「リツテイセンクワ」
ハクハクシヤ　泊酒舍「シミヅハマオミ」
ハクバサンジン　白馬散人　播磨加古の俳人なり蕉風の名家なり（俳林小傳）
ハクフン　白賁「ハツトリチユウエイ」
ハクフンエン　白賁園「ヒトミボクイウケン」
ハクホ　伯市「カノコウヤ」
ハクホウケン　白鳳軒「フクワウセツギン」
ハクボンアン　白梵庵「バシウ」
ハクミン　伯民「アヒザハセイシ」
ハクメイ　伯明「ナカバヤシハクメイ」
ハクヤウ　伯養「フタムラハクヤウ」
ハクラ　アヅママロ　羽倉春滿「カダアヅママロ」
ハクラ　アリマロ　羽倉在滿「カダアリマロ」
ハクラ　カンダウ　羽倉簡堂　名は用九字は士乾通稱外記別號を天則又可也と云ふ晩に蓬萊と號す其の堂を小四海堂といふ父某幕府の代官たり寛政二年簡堂大阪の官舍に生まる少にして古賀精里に學ぶ歷史を好みて溫史を通閱すること前後數回史訂若干卷を著す文章は韓文公を喜び後年祠を麻中に建てゝ之を祭る初め父鎭四に官する時從て西遊し諸名士に交る廣瀨淡窓の姓氏帶刀を許されたる如きは簡堂雅馴の力多きに由れりとぞ中年家を繼ぎて亦た諸州の代官に歷任す人と爲り廉潔にして奇移を惡み軀幹瘦癯にして中身に過ぎずと雖も氣力精にして强し天保九年命を奉じて伊豆七島を巡視す從者を募るに皆其の風波の險を聞き懼れて應ずる者なし會津の人松本來藏は豪傑の士なり奮て巡行す將に三倉島に赴かんとす颶に遇ひ覆沒して死す簡堂既に諸島を巡閱し其の稅法及び海防の議を上陳す執政水野忠邦諮詢政を更革するに及び俄に拔擢せられて納戸頭に進み布衣に列し諸機務に預る十四年六月に大阪及び生野銀山を巡視す發するに臨み賞賚甚厚し既て幕府帑藏の窮乏を救ふ然るに復命の後數日にして俄に職を罷められ門を閉ちて屏居す傳へ云ふ簡堂松平伊勢守江川太郎左衞門と海防の見を同じくするを以て同時に島居耀藏に構陷せらると果して然るや否やを知らず此より意ふ世途に絕ち家を其の弟内記に讓り前髮を蓄へ一室に起臥す專ら力を讀書に用ふ嘉永の末國家漸病むを以て辭し出でず著す所不盡岳志、駿城記、四上記、養小錄、蠡測篇、三律摭要等十餘種あり文久二年七月三日病て歿す三田正泉寺に葬る（香亭手稿）
ハクケイ　羽倉子磬　歌人なり名は惟德本姓は荷田氏御風の嗣子なり父の小字を受けて東之進と云ふ本姓は藏井氏なり有職の學を脩し又詠歌を善くす文政十年二月歿ず年六十三なり（鑒定便覽）
ハクケイ　羽倉信卿　京師の詩人なり又歌を善くす字は子晟三峯と號す龍草廬に從て詩を學ぶ歌は麗庭蒼溪等と相推敲す本姓は荷田氏洛南稻荷の祠官なり東丸翁の男信滿の子にして本宗を闕ぐ擬官宜

なり名は成實養潛は其の字、謙齋又牧野老人と號す近江の人、牧野左平治と稱し彦根侯に仕ふ中年志を得ざるを以て致仕して講説を業とす後姓名を變じて加賀金澤に遊び專ら性理の學を唱ふ從學するもの衆し室鳩巣、岡石瀾等の如き皆な此地に在り時に養潛に從ひて其の教授を受く養潛初め山崎闇齋に學ぶ闇齋歿して其の人となりを稱す佐藤直方、桑名松雪、淺見絅齋皆な之を畏敬す然れども養潛天資敦樸學術を以て世に顯はるるを欲せず專ら實踐躬行を以て主とす故に當時の人其の學術操行を知るもの少し元祿十四年夏疾に罹り金澤を辭して彦根に還り翌年正月十一日を以て歿す時に年七十四著はす所四書翼、天道流行圖説、講學筆記あり（先哲叢談）

ハクエン　伯圓「シヨウリンハクエン」
ハクエン　伯圓「カノハクエン」
ハクエン　泊園「ヒロセハクエン」
ハクエン　白猿「イチカハダンジフラウ」五代目
ハクヨウ　柏翁　祥曾なり江戸落合泰龕寺の開山たり名は道體正德元年ヵ月十八日を以て化す同所に葬る（江戸名家墓所一覽）

ハゲツ　波月「ユケトウサツ」
ハコワウマル　箱王丸「ソガトキムネ」
ハサウアイ　破草鞋「ミンテウ」
ハザマ　シゲトミ　間重富　曆學者なり攝津大阪の人、字は大業、長涯と號し晩に自から耕雲主人と號す父は五郎兵衛重光、重富は其の第六子なり兄弟皆な夭す重富即ち嗣ぐ世ゝ典舗を業とす十一屋五郎兵衛と稱す幼にして穿止凝重成人の如し年甫めて十二渾天圖を見て反覆之を翫ぶ後ち數日手自づから竹木を採輪して一儀器を造くるに少しも差はず人皆な之を驚歎す十七八の比ひ算法を學ぶ既にして嗣冠始めて星象の學に志し遍れく古今の曆書を求めて之を讀み夙夜覃思研鑽して寢食倶に廢するに至る者數年後ち洋曆の精確なるを知り乃ち之を專攻す後清の乾隆に定むる所の曆象考成後編を讀みて益ゝ發明する所あり時に豐後の人麻田剛立と云ふ者あり浪花に僑居し曆學を以て聞ゆ因て贄を執り往きて見ゆ剛立嘗て綵星周天の數に疑ひあり後ち其の術み得ると雖ども未だ其の所以を究めず重富乃ち天行方數諸曜一に歸するの理を闡き錄して以て之を示す剛立宿疑忽ち釋く乃ち歎じて曰く窮理徹に入る惟ゝ一の問氏あるのみと蓋し方數の説既に著はして洋書に在り而して其の書當時猶ほ未だ舶來せず本邦固とより未だ言はざる所漢土亦此くの如きものなし然れども剛立始めて能く其の術を得其の理は則ち重富を待ちて之を發すと云ふ重富嘗て望遠鏡を剏し衡祿心差の法を加ふ亦た其の製する所の儀器十數に下らず而して尤とも其の用ある者は曰く垂揺珠儀曰く測食定分儀、常に工人を家に養ひ凡そ作る所あれば必らず面喰指畫して蒙繆なからしむ重富の算數に於ける亦た算注弧矢索隱一篇を著はし又た尺度を考索して其の古今同異を辨ず皆な曆學の緒餘に出づるなり寛政中官に改曆の擧あり七年徵されて江戸に赴き曆局に留在して其の事に與かる曆成るに及び廬舍宅地を賜はり且族を稱し旅矢非常に際し刀を佩るを許さる居ること三年休暇を賜ひ仍は鄉に在りて測候せむ享和三年旨を奉じて長崎に赴き食限を查驗し且遏海の里程を測候す文化中曆官高橋東岡死す因りて復た重富を召す東岡嘗て命を奉じて西洋新法曆書を譯す未だ成らず嗣子觀某繼で之を成す重富亦た與る府に留ること六年暇を乞ひて鄉に歸り幾くもなく病に罹りて歿す時に文化十三年三月廿四日なり年六十一重富人ゝなり深沈にして智あり人の爲めに謀りて其の心を盡くす鄉人事の處し難き者ある毎に必らず來りて重富に就きて諮詢す重富爲に之に處して其の背槃に中たる是を以て人益ゝ嚮往す又た技能の士を愛し窮して衣食する能はざる者あれば即ち自ら減じて之に給す子重新字は盛德樂を繼て家聲を隕さず（墓碑、野史）

ハザマ　ヒデノリ　間秀矩　岡學和歌を善くす美濃中津川の酒造家なり通稱半兵衛平田鐵胤の門人維新の際勤王の有志を輔く明治の後神祇官小史に任ず

ハザマ　ミツオキ　間光興　赤穗四十七士の一人なり初め乃ち之を專攻す後清の乾隆に定むる所の曆象考成後編を讀みて益ゝ發明する所あり時に豐後の人麻田剛立と云ふ者あり浪花に僑居し曆學を以て聞ゆ因て贄を執り往きて見ゆ剛立嘗て綵星周天の數に疑ひあり後ち其の術み得ると雖ども未だ其の所以を究めず重富乃ち天行方數諸曜一に歸するの理を闡き錄して以て之を示す剛立宿疑忽ち釋く乃ち歎じて曰く窮理徹に入る惟ゝ一の問氏あるのみと蓋し方數の説既に著はして洋書に在り而して其の書當時猶ほ未だ舶來せず本邦固とより未だ言はざる所漢土亦此くの如きものなし然れども剛立始めて能く其の術を得其の理は則ち重富を待ちて之を發すと云ふ重富嘗て望遠鏡を剏し衡祿心差の法を加ふ亦た其の製する所の儀器十數に下らず而して尤とも其の用ある者は曰く垂揺珠儀曰く測食定分儀、常に工人を家に養ひ凡そ作る所あれば必らず面喰指畫して蒙繆なからしむ重富の算數に於ける亦た算注弧矢索隱一篇を著はし又た尺度を考索して其の古今同異を辨ず皆な曆學の緒餘に出づるなり寛政中官に改曆の擧あり七年徵されて江戸に赴き曆局に留在して其の事に與かる曆成るに及び廬舍宅地を賜はり且族を稱し旅矢非常に際し刀を佩るを許さる居ること三年休暇を賜ひ仍は鄉に在りて測候せむ享和三年旨を奉じて長崎に赴き食限を查驗し且遏海の里程を測候す文化中曆官高橋東岡死す因りて復た重富を召す東岡嘗て命を奉じて西洋新法曆書を譯す未だ成らず嗣子觀某繼で之を成す重富亦た與る府に留ること六年暇を乞ひて鄉に歸り幾くもなく病に罹りて歿す時に文化十三年三月廿四日なり年六十一重富人ゝなり深沈にして智あり人の爲めに謀りて其の心を盡くす鄉人事の處し難き者ある毎に必らず來りて重富に就きて諮詢す重富爲に之に處して其の背槃に中たる是を以て人益ゝ嚮往す又た技能の士を愛し窮して衣食する能はざる者あれば即ち自ら減じて之に給す子重新字は盛德樂を繼て家聲を隕さず（墓碑、野史）

ハザマ　ヒデノリ　間秀矩　岡學和歌を善くす美濃中津川の酒造家なり通稱半兵衛平田鐵胤の門人維新の際勤王の有志を輔く明治の後神祇官小史に任ず

ハザマ　ミツオキ　間光興　赤穗四十七士の一人なり喜兵衛と稱す其先は近江の人蒲生氏より出づ父佐兵衛人を殺し仇を赤穗に避く城主淺野長直召して祿を授く光延人と爲り謹愿寡默長矩に事へて馬廻となり百石を食む赤穗の變作らに及びて衆復仇を謀る光延原元長堀部金丸と與に老成を以て倚賴せらる姓名を變じて醫となり柚莊喜齋と稱す仇家を覺ふに及び子光興義央を獲導て細川氏の邸に在り死を賜ふに及びて和歌を賦し細川氏の家臣堀内重勝に贈る其歌に曰く「草まくら結ぶ假れの夢さめて常世に返る春の曙」と時に年六十九餘は大石良雄の傳に詳かなり（赤穗四十七士傳）

ハザン　巴山「セウリン」
ハザン　嶽山「タサカハザン」
ハシ　土師　遊女なり大寶中の人和歌を善くす詠歌は載せて萬葉集に在り（萬葉集作者履歷）

ハシイチ　橋市「ハシモトイチザウ」
ハシイナタリ　土師稻足　天平中の人和歌を善くす詠歌は載せて萬葉集に在り（萬葉集作者履歷）

バシウ　馬洲　名古屋の俳人なり榎本權平と稱し白梵庵と號す露川の門人犬山成瀬侯の臣なり寶暦十三年歿す年六十三（尾張名所志）

ハシカノ　デンエモン　初鹿野傳右衛門　甲州武田氏の臣なり後德川氏に仕ふ寛永九年武術上覽の時年八十六朝比奈彌太郎と相鬪ふて勝敗なし按ずるに昌次と同人なる歟

ハシカノ　マサツグ　初鹿野昌次（大阪軍記に昌備に作る○武德編年集成に正備に作る）加藤する時二十六餘は大石良雄の傳に詳かなり（赤穗四十七士傳）

ハザマ　ミツカゼ　間光風　赤穗四十七士の一人なり新六と稱す光延の子、光興の弟、嘗て罪を獲て國を去る（義臣傳に曰く光風嘗て里村津右衛門の爲に子とし養はる尋て其の驅を失ひ江戸に亡命すとあり未だ是否を知らず）赤穗の變作るに及びて大石良雄に請ひ復讐の盟に預り父兄に從ひて節に死す時に年二十四餘は大石良雄の傳に詳かなり（赤穗四十七士傳）

ハザマ　ミツノブ　間光延　赤穗四十七士の一人なり喜兵衛と稱す其先は近江の人蒲生氏より出づ父佐兵衛人を殺し仇を赤穗に避く城主淺野長直召して祿を授く光延人と爲り謹愿寡默長矩に事へて馬廻となり百石を食む赤穗の變作らに及びて衆復仇を謀る光延原元長堀部金丸と與に老成を以て倚賴せらる姓名を變じて醫となり柚莊喜齋と稱す仇家を覺ふに及び子光興義央を獲導て細川氏の邸に在り死を賜ふに及びて和歌を賦し細川氏の家臣堀内重勝に贈る其歌に曰く「草まくら結ぶ假れの夢さめて常世に返る春の曙」と時に年六十九餘は大石良雄の傳に詳かなり（赤穗四十七士傳）

信邦の季子なり初字は孺吾郎永祿四年秋川中島の役に初鹿野源五郎忠次の戰死するや武田信玄愛惜し措かず乃ち昌次を以て其の後を承ぎ其寡嫡に贅せしめんと欲す然れども寡婦其の二夫に見ゆるを恥ぢ信玄の內意に入り敢て貞節を保たんと請ふ因りて更らに其の妹を以て昌次に配し忠次の嗣となし字を傳右衛門と更む昌次時に年十八なり昌次信玄に仕へて使番と爲る永祿十一年（或は十二年に作る）十月信玄の小田原を攻むるや昌次軍に從ふ時に酒匂川水方に漂りて渡るべからず昌次時に年二十五先登して遂に河岸に達し尋で師皆な濟るとと云ふ壬午の後ち昌次幕府に仕へ擢られて使番となる大阪の役起るや昌次軍に從ひて功あり後ち寛永元年歿す時に年八十一子某字は勘解由尾侯に仕へ後ち幕府に仕ふ（野史）

ハシジチ　サウスケ　橋口壯介　鹿兒島藩士なり幼にして氣節を負ひ壯年に至り軀幹魁偉器度豁達雄畧衆に超ゆ造士館の教導と爲り大山格之助に就きて藥丸流の劍を學ぶ常に幕府の虐政を歎き勉めて大器有爲の士と交る奈良原幸五郎柴山愛次郎等と最も好し文久二年春愛次郎と同じく江戸に赴き幾もなく相共に大阪に歸り旅店魚太に寓して有馬新七田中謙助等と相謀り所司代酒井忠義を九條邸に襲ふて之を殺し以て攘夷の事を決行せんとす四月二十三日柴山等九人と共に魚太を出て淀川を溯りて伏見に抵り寺田屋に投ず既にして鎭使奈良原幸五郎等抵る抗論痛詰の末遂に格鬪となり壯介克く奮鬪し刀創肩より乳に及び氣息殆んど絶えんとし後に幸五郎の在るを見請ふて曰く幸に一杯の水を賜へと幸五郎之を與ふ壯介一飲之を渴して曰く死は二なし唯だ事の成らざるを以て遺憾とするのみ今より後天下の事君等宜しく之を圖ろ可しと纔に述べ訖りて遂に暝す時に年二十二伏見大德寺に葬り法號を眞實院双照玄壯居士と云ふ明治二十四年十二月朝廷其忠志を追賞し特に從四位を贈らる（伏見殉難士傳「殉難錄稿」）

ハシジチ　デンザウ　橋口傳藏　鹿兒島藩の志士伏見殉難者の一人なり父を與三次と云ひ目付役たり傳藏は其二男なり兄を與一郎を覺之進樺山資紀と云ふ傳藏驅幹長大眼光人を射る資性謹愼正直憂國の志凜然として侵す可からざるものあり交を嗜み武を好み江戸に在るの日安井息軒の門に入り專ら學術を修む又薩の書記に心を留め兵法純粹卷なる膳寫し善く其綱要を諳記せしため記錄所の書記と爲り刻苦精勵學に努むること柴山愛次郎に似たり文久二年時事に感ずる所あり橋口壯介等と共に江戸の藩邸を脫して大阪に來り中の島旅店魚太に潛伏し有馬新七等と義擧を畫す四月二十三日柴山等と共に旅宿を出て伏見に舟行し同志と寺田屋に會して九條邸襲擊の計を爲す會ゝ鎭使奈良原幸五郎等來り樓下に於て柴山等と會談し激論遂に終へず格鬪す傳藏等樓上に在りて初めて之を知り蹶起して樓を下る大山格之助階下に要して之を斫る傳藏捷まず奮鬪せしが遂に鈴木昌之介の爲めに殺さる年三十遺骸は伏見の大黑寺に葬る法名を法傳院賢德泰嚴居士と曰ふ明治二十四年十二月朝廷其忠志を追賞し特に從四位を贈らる（伏見殉難士傳、殉難錄稿）

バシダウ　チシマ　馬指堂　キヨクスキ　土師千島　壬申の亂に村國男依と安河の上に戰ひ敗れて執へらる（大日本史）

ハシヂヌ　ゲンノジョウ　橋爪源之丞　陸軍步兵少尉なり三重縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て第一師團步兵第三聯隊附として從軍中三十七年八月廿一日旅順要塞水師營四南方高地に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ハシヅメ　ヒサノリ　橋詰久則　江戸小石川の人金工を以て名あり遲抒と號し文次と稱す松平大學の家士なり（万賞全書）

ハシバ　ヒデカツ　羽柴秀勝　關白太政大臣秀吉の猶子にして贈太政大臣信長の第四子なり小字を萩丸或は御次丸と曰ふ天正十年秀吉信長に請ひて猶子となし諱字を授けて秀勝と稱す十月秀吉と與に兵一萬五千を率ゐ餘濱城を攻めて之を拔く是の歲任子となり越前に往く後京師に還る六月丹波に封ぜられ龜山城に治す從五位下丹波守となり尋で從四位下侍從となる十三年七月左近衛權少將に任ぜらる十五年四月秀吉の島津氏を征するや秀勝師を督して諸將と與に奮戰し遂に之に克つ十八年三月秀吉に從ひて小田原を征す七月甲斐に封ぜられ一年を歷て母氏の愁訴に因り封を美濃岐阜城に轉ぜらる十九年十一月參議に任ぜらる（補任に二十年六月ヵに入り專ら學術を修む又薩の書記に心を留め兵法純粹卷なる膳寫し善く其綱要を諳記せしため記錄所の書記と爲り刻苦精勵學に努むること柴山愛次郎に似たり文久二年時事に感ずる所あり橋口壯介等と共に江戸の藩邸を脫して大阪に來り中の島旅店魚太に潛伏し有馬新七等と義擧を畫す四月二十三日柴山等と共に旅宿を出て伏見に舟行し同志と寺田屋に會して九條邸襲擊の計を爲す會ゝ鎭使奈良原幸五郎等來り樓下に於て柴山等と會談し激論遂に終へず格鬪す傳藏等樓上に在りて初めて之を知り蹶起して樓を下る大山格之助階下に要して之を斫る傳藏捷まず奮鬪せしが遂に鈴木昌之介の爲めに殺さる年三十遺骸は伏見の大黑寺に葬る法名を法傳院賢德泰嚴居士と曰ふ明治二十四年十二月朝廷其忠志を追賞し特に從四位を贈らる（伏見殉難士傳、殉難錄稿）

ハシバ　ヒデナガ　羽柴秀長　關白太政大臣秀吉の異母弟にして母を白蓮院と號す天文九年三月三日生る小字を小一郎と號す天正六年十月播磨を伐ち頗る功あり七年五月自ら兵士三千を將ゐて信長の援兵と與に丹波を侵し綾部を拔き將ゐて攻めんとす波多野宗貞云ふもの軍を八幡山に出して之を迎擊す秀長奮戰して遂に宗貞を走らし進みて萩野城を攻て之を拔き又久下氷上城を取り悉く四丹を平ぐ十一年十一月從五位下に叙し美濃守に任ぜられ十一年正月兵を率ゐ土岐多羅口に入りて濃城を攻め之を陷る十一年十月秀吉大和を以て秀長に付す十三年三月秀吉に從ひて根來の徒を紀州に伐ちて之を平ぐ四月封紀伊和泉を增す五月秀吉秀長及び猶子秀次をして舟師六萬を帥ゐて阿波に入り長曾我部元親を伐たしむ秀長秀次每戰皆な克つ元親大に懼れ任子を送て和み請ふ秀長乃ち之を秀吉に報ず秀吉之を許す是に於て南海悉く平ぐ秀長、秀次任子を攜て凱旋す十四年正月參議に任ぜられ從三位に陞る十月權中納言に進む十一月正三位に進む十五年一月島津氏を討ず果戰皆な克ち遂に鹿兒島に迫る發久出降り四海亦咸く平ぐ八月權大納言に轉じ從二位に昇る十六年四月詔を以て清華の上に班す十八年三月秀吉の小田原を伐つや留りて大阪を守る十九年

正〻廿二日薨ず時に年五十二法名春嶽紹榮、大光院と號す子なし故に甥秀俊を養て嗣となす(野史)

ハシバヒデヨシ 羽柴秀吉「トヨトミヒデヨシ」

ハシビトオトナ 間人老　譽屋別命の後なり小乙下に至る白雉五年遣唐判官となりて唐に如く性和歌を好む秀歌は載せて萬葉集に在り(萬葉集作者履歴)

ハシビトオホウラ 間人大浦　仲哀天皇の皇子譽屋別の後なり近衛將曹從六位下勳六等に至る天平寶龜の間和歌を善くするを以て其の名を揚ぐ秀歌は載せて萬葉集に在り(萬葉集作者履歴)

ハシヒトベノアナホベノワウジ 泥部穴穂部皇子(古事記に三枝部穴太部王に作る)欽明帝の皇子にして母は皇妃堅鹽媛なり一の名は大香子又住迹と云ふ敏達帝崩じ用明帝位に即くに及びて陰に不軌を謀る元年五月敏達帝の皇后炊屋姫に迫ぜんと欲し强て殯宮に入らんと欲す三輪逆兵衛に命じ門を鎖さして內れざらしむ皇子呼ぶこと七度に及びて寬に空しく歸れり是より三輪逆を憎み大臣馬子守屋等を謂ひて之を殺さんとす逆早く知りて逃る皇子猶守屋をして追ひ討たしむ守屋逆が皇后の別宮に匿るゝを聞き遂に之を圍みて逆並に其の子等を殺す明年四月帝崩ずず守屋皇子を立てんと欲す炊屋姫皇后馬子に詔して皇子を誅せしむ兵士皇子の宮中に入る卒に之が爲に殺さる(大日本史)

ハシマサタダ 土師正忠　醫者なり寬弘四年典藥寮醫師に任ぜらる(皇國名醫傳前編)

ハシマシキ 土師眞敗　天武帝の十年に卒す壬申の功を以て大錦上を贈らる(大日本史)

ハシミチナガ 土師道良　天平寶龜間の人なり和歌を善くす(萬葉集作者履歴)

ハシミナミチ 土師水通　字を志婢麻呂と曰ふ天穗日命十世の孫可美乾飯根の後なり詠歌を善くす(萬葉集作者履歴)

ハジンイチザウ 橋本市藏　翰塗師又次郎の子にして幼名を市三郎といふ壯放蕩にして常に花街に遊ぶ年廿二父を失ひ先非を悔い專ら心を職業に委れ又深く慈愛する所ありて己が姓名の頭字各一字を取て自ら橋市と稱し年々はし一の文字を染め拔きたる紺色木綿の頭巾數百を作り乞食非人に施したりこれより橋市の名普く人の知る所となる性淡泊にして奇行多し明治元年頭髮を剃に結び自ら醉阿彌と記し黃金箔を貼りたる櫂木を腰にさし四方に行く上野戰爭の時大旗を作りて之に剃頭の目印を畫き下に御輦塗師橋市と大書したるを樹て官兵の刀の鞘を無代價にて塗り與へたんとし中山侍從を擁して兵を舉ぐ既にして朝議速かに變じ志士幕府の爲に擊たれて或は死し或は散ず元治元年京師志士の亂已に平ぎ幕東大に餘黨を索む而して香坡之に坐して亦捕はる尋で準解く後幕吏藍田の家を搜索し香坡の書翰を獲是に於て復香坡を捕へ獄に投ず卒に拷て獄中に死す其絕命の詞に曰く棒聲響息夜凄々憂國傷心身頭自低、幾歐鮮し雲天上鶴、明朝赴し鼎縛中鷄、徒將三宿志一投二冥府一、雖奈孤兒托二小妻一、悵三望淡川一纔百里、幽魂未必惡二東西一(繪愛國傳跡)

ハシモトカシラウ 橋本嘉四郎　陸軍步兵中尉なり福島縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て豫備役より召集せられ第二師團步兵第廿九聯隊附として從軍中卅八年三月三日清國盛京省高麗嶺附近戰鬪の際負傷同十四日高麗子戰地定立病院に於て死去す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ハシモトガハウ 橋本雅邦　狩野派畫家の巨擘なり江戸木挽町の繪所狩野家の邸內に生る其先は京都に出づ祖父伊眞かつて狩野晴川の門に在るや同門の後進淀橋米商の子兼吉(晴園養邦と號す)を婿養子と爲し一子を擧ぐ雅邦は即ち是なり幼名千太郎後に長卿と改む七歲より畫道に志し十三歲の時狩野勝川院雅信の門に入り勝園雅邦と號し狩野芳崖と弟子兄弟たり二十三歲にして塾頭に進む安政六年二十六にして獨立して一家を爲すに至る時恰も尊攘の論鼎しく師家の知行所塙玉に避難するに當り雅邦も亦其妻子を此處に避難せしめたり後戊辰の役となり世事の激變に際して繪畫美術は措て顧みられず家計益〻困難に陷り纔に支那行の圖扇畫を百枚一圓にて畫き又は三味線の胴を造にして之を辭し去りて浪華に寓居す深巷陋屋鹽室匱かに膳を容るゝに足り文を賣りて口を糊し晏然たり時に人あり其の門戶を高大にせんことを勸む香坡笑て曰く吾固より京擺の儒生の猥りに自ら衒鬻するを疾めり豈尤めて而して之を做はんや抑〻吾知るものは決して門戶を以て輕重を爲さずと香坡居常時事の日々に非なるを慨嘆し奮て勤王を主張す會〻文久三年夏天皇親征外寇を攘ふの詔あり是に於て天下の志士先づ名分を正し民心を定め君側を淸め幕府を討て後事に按に從はんとし中山侍從を擁して兵を舉ぐ既にして朝議速かに變じ志士幕府の爲に擊たれて或は死し或は散ず元治元年京師志士の亂已に平ぎ幕吏大に餘黨を索む而して香坡の友人藤井藍田謀を長人に通ずるを以て捕へらる香坡之に坐して亦捕はる尋で準解く後幕吏藍田の家を搜索し香坡の書翰を獲是に於て復香坡を捕へ獄に投ず卒に拷て獄中に死す其絕命の詞に曰く棒聲響息夜凄々憂國傷心身頭自低、幾歐鮮し雲天上鶴、明朝赴し鼎縛中鷄、徒將三宿志一投二冥府一、雖奈孤兒托二小妻一、悵三望淡川一纔百里、幽魂未必惡二東西一(繪愛國傳跡)

り辛うして飢を凌ぎたり既にして海軍兵學校の製圖掛となりしも生計猶ほ非薄なるを免れず明治二十年岡倉覺三歐米美術界を視察して歸朝し文部省に繪畫取調所を設置するや狩野芳崖と共に其の所員となり次で美術學校設立せられ岡倉覺三の校長となるや又撰ばれて其の教授となり聲名是より揚れり三十一年覺三と共に東京美術學校を辭し日本美術院を創立し邦畫の新生面を開き爾來門下生の誘掖に努め爲めに名を成す者尠からず資性溫厚誠實書畫骨董の外他の嗜好なく畫を以て生命とし死に瀕するまで雖を棄てざりしと云ふ四十一年一月十三日病を以て歿す年七十四深川淨心寺內玉泉院に葬り法號を謙德院勝園雅邦日操居士と云ふ葬儀に際し文部省より特に祭粢料を贈れり

ハシモトゴラウザエモン 橋本五郎左衛門　豐後國大分櫻町の商賈なり寬文年間鷹苗を琉球に求めて薩摩を製し遂に豐後の國產となすこれを七島薩といふ享保二十年八月二十六日歿す年八十三明治十四年同地の有志者相謀り地を大分郡神崎村にトし嗣字を創建し其の靈を祭るこれを青島神社と稱す(農事有功傳)

ハシモトサダヒデ 橋本貞秀　浮世繪師なり俗稱兼次郎三世彫國の門人にして玉蘭齋又五雲亭と號す繪草紙風俗畫および山水花鳥等を畫く多し爲井戶に住せり(歌川家列傳)

ハシモトサナイ 橋本左內　越前の藩士なり名は綱紀、字は伯綱、左內は其の通稱、蓼園又景岳と號す大阪に遊び緒方洪庵に從て醫を學ぶ歸て父に繼て藩醫となる又藩命を以て江戶に遊學し藩侯藩學を改革するに當て醫員を免じ其の事に幹せしむ洋法の學科を加へ設け宿儒を以て蕃學を藩侯一橋殿を以て蕃嗣とす旋す事殆ど成るに及て家茂薨じ紀侯嗣ぐ一橋殿を推す者皆黜けられ大老井伊直弼大に志士の獄を起し所在物色して之を逮捕す左內亦た捕へられて獄に下だり終に敕書を要請するの罪に坐し安政六年十月七日江戶小塚原に斬られる時に年二十六左內人となり溫和博覽强記其の繫がれて獄に在るや手づから資治通鑑を註し漢記に至りて刑に就くと云ふ又嘗て獄制を論じ曰く獄は惡を懲し善を勸むるの所に非らずや然るに其の接する所の者は賊逆の徒若くは盜竊の奴其の獄を出るに方りて身に一錢を齎さず而して家の寓すべきあるなし是に於てか爲す べき法なく向きに誘ずる所の術を以て事に試みんと欲す强て殯宮に入らんと欲す三輪逆兵衛に命じ門を鎖さして內れざらしむ皇子呼ぶこと七度に及びて寬に空しく歸れり是より三輪逆を憎み大臣馬子守屋等を謂ひて之を殺さんとす逆早く知りて逃る皇子猶守屋をして追ひ討たしむ守屋逆が皇后の別宮に匿るゝを聞き遂に之を圍みて逆並に其の子等を殺す明年四月帝崩ずず守屋皇子を立てんと欲す炊屋姫皇后馬子に詔して皇子を誅せしむ兵士皇子の宮中に入る卒に之が爲に殺さる(大日本史)

ハシモトゴラウザエモン 橋本五郎左衛門　豐後國大分櫻町の商賈なり寬文年間鷹苗を琉球に求めて薩摩を製し遂に豐後の國產となすこれを七島薩といふ享保二十年八月二十六日歿す年八十三明治十四年同地の有志者相謀り地を大分郡神崎村にトし嗣字を創建し其の靈を祭るこれを青島神社と稱す(農事有功傳)

ハシモトサダヒデ 橋本貞秀　浮世繪師なり俗稱兼次郎三世彫國の門人にして玉蘭齋又五雲亭と號す繪草紙風俗畫および山水花鳥等を畫く多し爲井戶に住せり(歌川家列傳)

ハシモトサナイ 橋本左內　越前の藩士なり名は綱紀、字は伯綱、左內は其の通稱、蓼園又景岳と號す大阪に遊び緒方洪庵に從て醫を學ぶ歸て父に繼て藩醫となる又藩命を以て江戶に遊學し藩侯藩學を改革するに當て醫員を免じ其の事に幹せしむ洋法の學科を加へ設け宿儒を以て蕃學を藩侯一橋殿を以て蕃嗣とす旋す事殆ど成るに及て家茂薨じ紀侯嗣ぐ一橋殿を推す者皆黜けられ大老井伊直弼大に志士の獄を起し所在物色して之を逮捕す左內亦た捕へられて獄に下だり終に敕書を要請するの罪に坐し安政六年十月七日江戶小塚原に斬られる時に年二十六左內人となり溫和博覽强記其の繫がれて獄に在るや手づから資治通鑑を註し漢記に至りて刑に就くと云ふ又嘗て獄制を論じ曰く獄は惡を懲し

ハシモトシキン 橋本子琴「カツシカシキン」

ハシモトシャウザウ 橋本省三　陸軍步兵大尉なり甚岡山藩士雀部氏より出て橋本氏を嗣ぐ明治二十六年九月陸軍幼年學校に入學し卒業後士官學校に進み三十年十二月業を卒へ翌年六月步兵少尉に任ぜらる三十三年北淸團匪の亂あるや出征の命を受け天津城攻擊に參加して功あり凱旋後功に依り功六級に叙せらる三十七年日露戰役起るに際し大尉に任ぜられ近衛後備步兵第一聯隊附中隊長として陸軍運送船常陸丸に乘じて出征の途中同年六月十五日玄海灘に於て敵艦に襲撃を受け戰死す年二十八戰功に依り勳五等功五級に叙せらる

ハシモトセイジュ 橋本正壽　陸軍步兵少佐なり水戶市下市紺屋町の人幼名を六之助といふ幼

にして父を喪ひ長兄正邦に養はる元治元年水戶の亂に際し正邦黨を受けて上州松平家に預けらる依て六之助は伯父大高某に身を寄す明治元年正邦幽囚を赦され勅使御守衛を命ぜられ次て水戶藩兵隊編成さるゝに及び六之助は遊擊隊別隊士に任ぜらる時に年十七なり爾來身を軍籍に投じ諸戰役に從軍累進して少佐に至り己にして後備に編入せらる三十七年日露戰役起るや召集せられて後備步兵第一聯隊附と爲り從軍中八月十二日清國盛京省胡家屯附近に於て戰死す年五十二戰功に依り勳四等功四級に叙せらる

ハシモトセツセウ 橋本雪蕉　畫工なり名は素淳蕉與の花卷の人幼より繪事を嗜み江戶に來り谷文晁に就き畫法を學び又京師に遊び浦上春擧の門に入り花鳥を學ぶ最も淡彩の山水に長ぜり後江戶に出で淺草瓶河岸に住し畫技を業とせり畫を乞ふ者爭ひ來る曰く畫の紹は必ず雖しと紹素稚みて山の如くなるも意に介せず花を觀香を爽きて曼如たり天機一たび動けば筆を揮つて立どころに畫き嘲て曰く畫何ぞ價あらんや金も亦た可當百錢も亦可なりと年六十餘始めて石川氏を娶る明治十年五月六日歿す年七十六(橋本雪蕉翁墓碣)

ハシモトセンダイ 橋本仙桂　畫家なり越前敦賀の人(其印面に見えたり)能く俊禽を畫く尤も工緻なり(繪本朝畫史)

ハシモトセンサク 橋本仙作　陸軍步兵少佐なり靜岡縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て第九師團步兵第十九聯隊附として從軍中三十八年三月二日清國盛京省彰驅店戰鬪の際負傷し歸國後自宅療養の處三十九年九月十四日死去す

ハシモトソウキチ 橋本宗吉　名は鄭、繪漢堂と號す大阪の人なり幼より才慧衆に秀れ長じて識見凡に非ず父某曾て象工を業とせしを以て宗吉も亦た之を能くし其の紋を畫くの技に於て最と妙を得たりと云ふ天明中大阪の小石元俊漢方を捨て新に蘭方を唱ふ然れども元俊は徒〻譯書に據るのみ未だ檮文に通ぜざるを以て常に其の人を得て蘭書を講ぜんと欲し居たり宗吉の聰敏にして且つ機警なるを見大に之を愛び未だ幾ばくならず其の交友間五郎兵衛と相謀り學費を醵出して宗吉に與へ之をして江戶に赴き六視磐水に就

きて其の教を受けしむ實に寛政初年なり宗吉已に磐水の門に入りしより元俊等が期するところに負かず刻苦勉勵殆んど眠食を忘る是を以て學業大いに進み僅かに歳餘早く横文の讀法に通ずることを得たり因りて大阪に還り蘭方醫師と爲りて專ら醫學を勤め盛んに蘭學を興す近畿中國の志士相踵て其の門に集まる當時此の學の關西に及びしは實に宗吉の功なりと云ふ其の寛政十二年庚申に刊行せし新譯地球全圖を附するに博く和蘭の地誌十數種を援引し一々圖説を載せて方域の區畫邦國の界限は勿論諸品物の種類形狀より産出の地に至るまで精細記ささるはなく加之ならず附するに奇事異聞を以てせり而して又地球の圓體なるとを論じて脚版相對の考證を示し且つ五體經緯度の理を學げて天文の概畧を述ぶ其他四洋醫事集成寶函、和蘭醫宗三法方典等を著したるが就中四洋醫事集成寶函は之を本草、藥方、製藥及び治病の四部に分ち凡べて五十卷頒ち世に行はる斯く其業を務むる三十年文化文政の際に在りて名聲愈々隆く東國の宇田川榕菴西國の橋本宗吉と並び稱せらるゝに至れり文政の末京都八坂に巫女豐田貫と云へるものあり密かに醫師某と謀り巧舌詭辯愚夫愚婦を誑惑し以て贏利を博し富貴を極む世人大に其の奸を惡み呼て切支丹婆と云へり後ち醫師某罪を得んことを懼れ大阪に到りて是れを大鹽平八郎に告ぐ平八郎時に町奉行吟味與力たり乃ぱち貫を誘ひ提へて之を獄に繫ぎ國法の嚴禁たる邪宗を唱ふるに擬し終に其の首從五人を殺す宗吉も連累の嫌を招き貫と同じく縛に就く文政十二年己丑十一月遂に磔刑に處せらる（浪花名家墓所集に云く天保七年五月朔日歿す年七十四）

ハシモト　タダカ　橋本直香　國學和歌に通ず橘守部の門人通稱彦八年代暦、萬葉集私抄の著あり

ハシモト　ツナツネ　橋本綱常　醫學の泰斗なり舊越前藩士にして弘化二年六月二十日福井常盤町に生れ幼名破竃吉又は破竃ヶ郎といひ後琢磨又綱常と改めたり父は長綱と云ひ某代の醫家なり長男綱紀又左内と云ひて尊王攘夷の志士たり嘉永二年綱常五歳にして小林彌十郎高野眞齋等の門に入り後吉田東篁に學びて發明する處少からず安政二年の頃より藩學明道館又は半井仲庵等に就きて醫學を修業し田代萬隆に蘭學を亞ぎ富田陽波に詩學を學び萬延二年十六歳にして家督勉勵殆んど眠食を忘る是を以て學業大いに進み僅かに歳餘早く横文の讀法に通ずることを得たり因りて大阪に還り蘭方醫師と爲りて專ら醫學を勤め盛んに蘭學を興す近畿中國の志士相踵て其の門に集まる當時此の學の關西に及びしは實に宗吉の功なりと云ふ其の寛政十二年庚申に刊行せし新譯地球全圖を附するに博く和蘭の地誌十數種を援引し一々圖説を載せて方域の區畫邦國の界限は勿論諸品物の種類形狀より産出の地に至るまで精細記ささるはなく加之ならず附するに奇事異聞を以てせり而して又地球の圓體なるとを論じて脚版相對の考證を示し且つ五體經緯度の理を學げて天文の概畧を述ぶ其他四洋醫事集成寶函、和蘭醫宗三法方典等を著したるが就中四洋醫事集成寶函は之を本草、藥方、製藥及び治病の四部に分ち凡べて五十卷頒ち世に行はる斯く其業を務むる三十年文化文政の際に在りて名聲愈々隆く東國の宇田川榕菴西國の橋本宗吉と並び稱せらるゝに至れり文政の末京都八坂に巫女豐田貫と云へるものあり密かに醫師某と謀り巧舌詭辯愚夫愚婦を誑惑し以て贏利を博し富貴を極む世人大に其の奸を惡み呼て切支丹婆と云へり後ち醫師某罪を得んことを懼れ大阪に到りて是れを大鹽平八郎に告ぐ平八郎時に町奉行吟味與力たり乃ぱち貫を誘ひ提へて之を獄に繫ぎ國法の嚴禁たる邪宗を唱ふるに擬し終に其の首從五人を殺す宗吉も連累の嫌を招き貫と同じく縛に就く文政十二年己丑十一月遂に磔刑に處せらる（浪花名家墓所集に云く天保七年五月朔日歿す年七十四）

ハシモト　タダカ　橋本直香　國學和歌に通ず橘守部の門人通稱彦八年代暦、萬葉集私抄の著あり

ハシモト　ツネアキラ　橋本經亮　和學の大家なり幼名を藤馬といふ大和吉野郡丹生神社の祠官なり正平中檢非違使となり新判官と稱す畠山國清の族なり正武赤阪城を修めて之に據り正高等を以て平石城を築き五百餘兵を以て之を守らしむ既にして國清兵を分ち來攻む諸砦竝びに陷る正高正儀等と退きて金剛山を保つ十六年正儀に從ひて佐々木秀詮弟氏詮を擁護して攻めて之を破り又從ひ攻めて京師を復し幾ばくもなく京師を棄てゝ南に歸る尋で民部大輔となる正儀出て降る正高和田正武等と河内和泉の事を據す其の後ち官軍屢々利を失ひ後龜山帝遂に天野に避け吉野に幸す同族宮内大輔正泰等叛して敵に降る正高屈せず天授四年兵を固く守る是に於て足利義滿大兵を遣して棄秀を攻む棄秀淡路に逃る正高和泉紀伊に起し細川棄秀を攻めて之を破る棄秀を攻む棄秀淡路に逃る正高和泉及び又兵を聚めて棄秀を攻む棄秀淡路に逃る正高和泉に戰ひて克たず之に死す宗族三人及び從兵盡く圍む正高逆へ擊て利なし乃ち兵を引去る敵軍み班へずして防戰して利を失ひ遂に城を捐てゝ逃る明年復た清氏と和泉に戰ひて克たず之に死す宗族三人及び從兵盡く圍ひて死す（大日本史）

ハシモト　マサモチ　橋本正茂　九郎と稱し左衛門尉たり楠正成の戰死するや攝泉の間賊兵大に起る畠山國清大家惟正を八木城に圍む時に正茂中院清歴寺に陣す乃ち俱に兵を率ゐて赴き援ふ國清敗走す延元三年鎮守府將軍源顯家出て和泉に陣し弟顯信をして男山に據らしむ正茂和田正興と兵を擧げて之に應じ升下城を圍む之を攻むること數日にして高安の壘を燒く既にして顯家戰歿す正茂尊軍を旋へして男山を救ふ敵兵路を遮る正茂奮戰して進む未だ男山に至らず正茂兵を廻らして松原野田等の敵營を攻めて之を破る後醍醐帝崩ずるに及び正行を輔けて勤王す正平中薙髮して其の終はる所を知らず（大日本史）

ハシモト　ラクカウ　橋本樂郊　大阪の儒者なり葛子榮の兄名は識通稱は宇藏泯華の人儒を菅谷甘谷に學ぶ（鑒定便覽）

ハシモト　ワカサ　橋本若狹　勤王家なり譯は綱幸幼名を藤馬といふ大和吉野郡丹生神社の祠官なり原姓益田後橋本善平の養子となり其姓を冒す文久三年侍從中山忠光が大和五條に義兵を擧ぐるや若狹郷兵を募りて之に應ず義軍が四十餘日間大敵と戰ひて屢ゝ勝を制したり後鷲家村の戰に味方多く戰死し若狹亦傷を蒙りしが奮鬪して都に遁れたりしが元治元年十一月二十九日大坂に於て擒はれ京都六角の獄に繫がれ慶應元年六月殺さる年四十四維新の後朝廷其忠誠を憫み若草山麓に於て殉難志士と共に祭典を執行し且つ其の遺族に救助として玄米一石を下賜せらる明治三十一年七月特旨を以て正五位を贈らる（殉難錄稿）

ハシモムラ　ツカサ　土師百村　天平養老の間の人和歌を善くす詠歌は載せて萬葉集に在り正七位上に至り東宮に侍す（萬葉集作者履歴）

ハジヤウ　トモツネ　巴常　俳人なり蕉門の門人（俳林小傳）

ハジヤウインシ　馬上隱士「サクラキトウモン」

ハシュクエン　チカザネ　巴菽圓「アベレキサイ」　蓮池親實　左京進と稱す四國の太守長曾我部元親の姪男なり弘岡蓮池の郷を領し吉良の古壘に據るを以て或は吉良と稱す人と爲り直截にして回避するなく驍雄にして多力、堅を被り鋭を執て鷹揚電擊威を逞うし功烈洗々諸士を睨視す此時沙門に信四と云ふものあり好て書を讀み善く孝經論孟を釋く親實は信四が徒なり乃ぱち同志の士波川玄蕃、宮飛驛、長曾我部搖部と相謀りて士夫の氣慨ある者數十人を招き交交を結び課程を立て、曰く相鏃りて勤勉訂督せんと長曾我部氏遂に儒教を尙び郭内に校舍を置き信四忍性を以て師と爲す學術漸く風動す密臣中に能を嫉み技を妬むの儕あり酷だ其の課を拒み名づくるに黨を立つるを以て讐隙を爲して相客れず天正中元親の世子死して儲嗣未だ定まらず次を以て襲ぐに當れば乃ち親忠を爲す元親諸臣を召し盛親を立て、嗣と爲さんことを謀す親實肯んぜずして曰く嫡兄を廢して庶擧を樹ては乃ち禮を失し計を失して賢隙斯に萌し禍人に害救ふ可らず本と是れ君慮に非ず謟賊内に煽し婦人に長舌ありて之が階を厲ますならん臣敢へて命を奉ぜずと玄蕃飛驛搖部亦た死を以て諍ふ故に議覔に決せず會

非藏人に任ぜらる少より學を好み博聞强記時輩に超越す高橋圓南の門に入りて有職古實を研究し其名一世に冠たり詠歌は廬庵、蒿蹊等の輩と交りて殊に善し人となり豪放不羈にして物に拘らず貴族の前と雖も意に任せて雄辯時俗を褒貶す生涯奇話最も多し嘗て江戸に來遊す時に執柄家の召に應じ武家の古實を講じ覔に馬術の事に及び經亮自ら馬を乞ひて之に騎り種々其の狀をなして示す侯大に感賞し黄金若干を賜ひて之を勞す經亮其の賜金を以て忽ち花街に往き宴遊すること數日に亦た悉く散じ歸路に至りては一も蓄へず又京師に在て朋友蒿蹊蘭工東洋等と一日集會の時一人曰く文事雅談は我輩の常なり其の餘會戲れに滑稽の嘘談して遊ばんもまた可ならずやと諸子これを賛やがて其初會の日を定むるに其の催主經亮にあたれり而して其の日諸友相伴ひ洛西梅津郷の經亮が居宅に至るや門戸を鎖して今日侘行の標を出せり諸子驚き其の滑稽を奇とし且つ笑ひ且つ賞して俱に家に歸り空談の妙又た此の右に出るものなしとて其の事こゝに至て停むと又或一貴紳に不圖失敬のことありしにより禁足を命ぜらる其の間にも門に三人在宿の體を出せり此事無頼に似たれども本と失敬の事たる文事中の麁忽に出たれば貴紳にも經亮の人となりを愛甚して其の失敬の罪を許されと平生の行狀丸て人の不意に出る斯の如し然れども其の學を勉むるや梅津の郷より禁中へ詣るの途中にも手に卷を釋かず故に屢ゝ田畑に墮て衣服を汚すとありと雖も自若として猶故の如く書を讀みて行くまた或時平生のごとく書を見つゝ洛の朱雀街を北に往くに駄荷を負ふの馬來る經亮其の馬夫の聲懸るを知らず誤りて其の馬に嚙まれしとありといふ凡て其の疎誕なる行ひかくの如しまた一笑話あり經亮一日蒿蹊東洋の輩と俱に東山に遊行し觀楓を為して歸路時雨を避んと祇園町の一小屋の軒下によるに家内より一人の婦出でゝこは梅の宮の先生におはさずや過し日より頻りに拜謁したき事ありといふに經亮之を見れば常に遊興せし妓樓にして且少しの債ある家なれば愕然として大に恐れ一言を交へずして走る同行の友人驚きてその意を知らずまた其の亭も何の故たるを知らず頻りに經亮を呼ぶ同友又喚びつゝ跡を追ひ往くに終に建仁寺の藪中に隱れ密かに

諸友を呼び大に嘆息して曰く嗚呼恐るべし彼の亭はもと余が宴遊せし所にして且つ些少の殘銀あり往々小庵に來りて之れを促す然るに何ぞ圖らん今彼亭の前に憩はんとほと是に於て皆掌を拍て笑ふと云ふ詠歌は蘆庵にその是非を譏ずと然れども亦た一の風致ありて超凡の名あり故に其の門に遊ぶものまた群し文化三年四月十日歿す時に年四十七著す所服飾等古實の考證多くあれども惜いかな年壽長からずして稿を脱するもの少く世に傳はるもの梅窓筆記、橘窓叢譜、校正年山紀聞等なりまた高橋圓南の寶石類書其他の校正は專ら經亮のせし所なり皆今其の家に藏して子孫に傳ふ（近世卅六家集、鑒定便覽）

ハシモト　テイゲン（カシキン）　橋本貞元「カツシ」

ハシモト　デンシラウ　橋本傳四郎　陸軍步兵少佐なり和歌山縣出身にして明治三十七八年日露戰役に際し步兵第三十九聯隊附として從軍中廿七年十月十二日清國盛京省承德縣三塊石山に於て戰死す戰功に依り勳四等功五級に叙せらる

ハシモト　トホル　橋本通　字は大路通稱伊丹介香坡と號す上野國沼田に生る故有て攝津國川邊郡學を好み篠崎小竹に從ひ經史の講義を受く其後東西に遊歷し天保十一年近衛家の仕人となり其の領地に在り し明倫館の教官となる又四方を漫遊し慶應元年大阪に假住せしが幕府の施爲を慨し友人藤井藍田と謀り又長州倉屋敷留守居北條瀧平大樂源太郎等と交り守護職松平容保を斥けんと欲し謀る所ありしが元治元年七月禁門の變起り長州勢敗れしと聞き其妻に命じて團餅數多作らしめ落行く長州勢を呼止めて遍く施與したり此事早くも新撰組の知る所となり通は長州勢に加擔のものなりとて忽ち捕へられ獄に下されたりしが遂に獄中にて死せりと云ふ（殉難錄稿）

ハシモト　ヘイザエモン　橋本平左衛門　赤穗藩の士なり淺野長矩に事へて馬廻となり百石を食む國難作り赤穗を走るに及びて衆に先ちて國に殉せんと欲し遂に自殺す（赤穗四十七士傳）

ハシモト　マサタカ　橋本正高　楠正成の族なり正平中檢非違使となり新判官と稱す畠山國清兵を發して四上し將に行在を犯さんとす楠正儀和田正武赤阪城を修めて之に據り正高等を以て平石城を築き五百餘兵を以て之を守らしむ既にして國清兵を分ち來攻む諸砦竝びに陷る正高正儀等と退きて金剛山を保つ十六年正儀に從ひて佐々木秀詮弟氏詮を擁護して攻めて之を破り又從ひ攻めて京師を復し幾ばくもなく京師を棄てゝ南に歸る尋で民部大輔となる正儀出て降る正高和田正武等と河内和泉の事を據す其の後ち官軍屢々利を失ひ後龜山帝遂に天野に避け吉野に幸す同族宮内大輔正泰等叛して敵に降る正高屈せず天授四年兵を固く守る是に於て足利義滿大兵を遣して棄秀を攻む棄秀淡路に逃る正高和泉紀伊に起し細川棄秀を攻めて之を破る後醍醐帝崩ずるに及び正行を輔けて勤王す正平中薙髮して其の終はる所を知らず（大日本史）

ハシモト　ラクカウ　橋本樂郊　大阪の儒者なり葛子榮の兄名は識通稱は宇藏泯華の人儒を菅谷甘谷に學ぶ（鑒定便覽）

ハシモト　ワカサ　橋本若狹　勤王家なり譯は綱幸幼名を藤馬といふ大和吉野郡丹生神社の祠官なり原姓益田後橋本善平の養子となり其姓を冒す文久三年侍從中山忠光が大和五條に義兵を擧ぐるや若狹郷兵を募りて之に應ず義軍が四十餘日間大敵と戰ひて屢ゝ勝を制したり後鷲家村の戰に味方多く戰死し若狹亦傷を蒙りしが奮鬪して都に遁れたりしが元治元年十一月二十九日大坂に於て擒はれ京都六角の獄に繫がれ慶應元年六月殺さる年四十四維新の後朝廷其忠誠を憫み若草山麓に於て殉難志士と共に祭典を執行し且つ其の遺族に救助として玄米一石を下賜せらる明治三十一年七月特旨を以て正五位を贈らる（殉難錄稿）

ハシ　モモムラ　土師百村　天平養老の間の人和歌を善くす詠歌は載せて萬葉集に在り正七位上に至り東宮に侍す（萬葉集作者履歴）

ハジヤウ　トモツネ　巴常　俳人なり蕉門の門人（俳林小傳）

ハジヤウインシ　馬上隱士「サクラキトウモン」

ハシュクエン　チカザネ　巴菽圓「アベレキサイ」　蓮池親實　左京進と稱す四國の太守長曾我部元親の姪男なり弘岡蓮池の郷を領し吉良の古壘に據るを以て或は吉良と稱す人と爲り直截にして回避するなく驍雄にして多力、堅を被り鋭を執て鷹揚電擊威を逞うし功烈洗々諸士を睨視す此時沙門に信四と云ふものあり好て書を讀み善く孝經論孟を釋く親實は信四が徒なり乃ぱち同志の士波川玄蕃、宮飛驛、長曾我部搖部と相謀りて士夫の氣慨ある者數十人を招き交交を結び課程を立て、曰く相鏃りて勤勉訂督せんと長曾我部氏遂に儒教を尙び郭内に校舍を置き信四忍性を以て師と爲す學術漸く風動す密臣中に能を嫉み技を妬むの儕あり酷だ其の課を拒み名づくるに黨を立つるを以て讐隙を爲して相客れず天正中元親の世子死して儲嗣未だ定まらず次を以て襲ぐに當れば乃ち親忠を爲す元親諸臣を召し盛親を立て、嗣と爲さんことを謀す親實肯んぜずして曰く嫡兄を廢して庶擧を樹ては乃ち禮を失し計を失して賢隙斯に萌し禍人に害救ふ可らず本と是れ君慮に非ず謟賊内に煽し婦人に長舌ありて之が階を厲ますならん臣敢へて命を奉ぜずと玄蕃飛驛搖部亦た死を以て諍ふ故に議覔に決せず會

ミ元親内外の諸盟を信じ使を遣して親實に死を賜ふ親實歎じて曰く伯父君は四施の色に溺れ太宰師の讒に惑ひて伍子胥に屬鏤の劍を賜ふか嗟乎微軀は惜むに足らず今や讒諛志を得、忠直悉く淪胥す社稷何んぞ亡びざらん三歳を俟たずして秦氏其れ遺類なからんと言畢りて自盡す時に天正戊子冬十二月なり一時結契の諸士悉く誅に伏し言連りて信西を殺す親實の事實戚紳士より市廛の炊婢に至るまで感怨慟澹せざるなし年を踰えて其の靈祟を爲す人民孔だ怖れ元親悔愧し爲めに廟を建て、蓮池大明神と號す廟宇鼎新祭祀今に迄りて弭むことなしと云ふ（事實文綱）

ハスダ　イチゴラウ　蓮田市五郎　櫻田の刺客なり名は正質父を榮助と曰ふ市五郎早く父を喪ひ母に養はる性學問を好めども家貧しくして紙筆を購ひ難く自ら三食を減じて其の費に充て饑を忍び勉學怠ることなし初め町方同心となり後寺社方の手代となる齋藤監物と交り親し遂に相謀りて櫻田に伊井掃部頭を襲撃するに至り事終り本多修理亮邸に囚はる市五郎性至孝囚中より其母姉に寄する書あり情義紙に溢れ讀むもの涙を揮はざるはなし後諸士と共に斬に處せらる明治三十五年從五位を追贈せらる（維新史料、櫻田始末、官報）

ハスミツ　蓮光　備前長船の刀匠にして銘定の子天文弘治年間の人なり或は云利光の門人にして應永比の人なり（本朝鍛冶考、古今鍛冶備考）

ハスミ　リャウサク　蓮見良作　陸軍歩兵中尉なり栃木縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て豫備役より召集せられ第七師團歩兵第廿八聯隊附として從軍中廿八年三月十日清國盛京省三台子附近に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ハスヰ　バセウ　覇水「フクハラハスヰ」　馬笑　江戸の戲作者なり樂亭又樂山人と稱す後狸瑠璃語となり四代目竹本倉太夫と稱す寛政時代の人なり

ハセガハ　アサジラウ　長谷川淺次郎　陸軍歩兵少尉なり神奈川縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て豫備役より召集せられ後備歩兵第一聯隊附として從軍中三十八年三月九日清國盛京省田義屯東南高地に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ハセガハ　ウヘエ　長谷川右兵衛　豐臣氏に仕へて一萬石を領す慶長五年石田三成に與して佐和山に在り三成軍敗れ東師來り圍むに及び潛に志を遂じ卒に遁れて東師に赴く故を以て罪を免る後德川家康に仕へて式部と改稱す右兵衛兼て茶道を能くするを以て世に名あり（君臣略傳、茶人系傳全集）

ハセガハ　エイシン　長谷川永信　畫家なり信春の子（鑑定便覽）

ハセガハ　エイシュン　長谷川永春　浮世繪師なり梅翁軒一に梅峯軒と號し美人畫に長ぜり實暦年間の人（浮世繪師便覽）

ハセガハ　カズイヘ　長谷川一家　八郎兵衛と稱す長谷川流砲術の祖なり土井利勝の臣（武術流祖錄）

ハセガハ　カヘイ　長谷川嘉平　陸軍歩兵少尉なり香川縣出身にして明治廿七八年日露戰役に際し豫備役より召集せられ後備歩兵第四十三聯隊附として從軍中廿七年八月三十一日清國盛京省首山堡に於て戰死す戰功に依り勳七等功六級に叙せらる

ハセガハ　キウザウ　長谷川久藏　雪舟の人神官の家に生れ少壯勤王の志爲く維新の際有志と共に遵州報國隊を組織し有栖川大總督宮に隨從し尊て大總督府會計官となり後兵部書に移り海軍省創設の際拔擢せられて同省出仕となり爾來常に同省會計の要務に當り二十四年貴族院議員に任ぜられ退職の後は專ら力を海軍、山林、水產等の事業發達の事に慮し晚年郷里に居を移し同地方の公共事業に貢獻する事勤なしとせず三十八年二月八日病歿す年六十一）

ハセガハ　シゲヨシ　長谷川重美　蒔繪師なり姓氏年代詳ならず佐々木氏所藏七草蒔繪の印籠に此の銘あり（漆器圖錄、蒔繪師傳）

ハセガハ　シンノジャウ　長谷川新之丞　浮世繪師なり筆意雪舟を慕ふ京都の人祇園社の額大黑布袋角力の圖を畫く明應三丁酉仲春下浣長谷川新之丞筆の歟あり（扁額軌範）

ハセガハ　シュゼンノシャウ　長谷川主膳正　石州流の茶人なり業を宇佐美默に受く（茶人系傳）

ハセガハ　シュチャウ　長谷川珠長　畫人なり墨色山水を能くす好みて戲畫をなす單する所渡唐天神の像能く雪舟の筆意を學で更に家流なしと云ふ（本朝畫史、鑑定便覽）

ハセガハ　ジュトク　長谷川樹德　江戸の醫士なり但馬村岡の人小兒科に工なり（醫家人名錄）

ハセガハ　シュンジ　長谷川駿兒　陸軍歩兵大尉なり德島縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て後備歩兵第四十三聯隊附として從軍中廿八年三月五日清國盛京省三道崗子に於て戰死す戰功に依り勳五等功五級に叙せらる

ハセガハ　スガヲ　長谷川菅緒　古學者なり通稱は三折、和泉の人なり本居宣長に從て和歌古學を脩し生徒に教示す（鑑定便覽）

ハセガハ　ガハテツノシン　長谷川世傑「ハセガハテツノシン」

ハセガハ　セツコウ　長谷川雪貫　畫家なり名は等英別に背春庵、德々齋の號あり江戸の人、法橋畫嶽の男にして山水人物花鳥に至るまで皆精妙を極め其名都下に鳴る（書畫選鼓）

ハセガハ　セツタン　長谷川雪旦　江戸の畫人なり名は宗秀、蘆菊齋又た一陽庵と號す法橋に

叙せらる此の家累代長谷川氏を唱へ雪舟の畫風を慕ふ雪旦に至りて特に其の風を能くす天保中齋藤月岑の江戸名所圖繪を稿するに當りて雪旦其の圖を草し月岑及び同志一二人と日々に諸名勝を探り僧寺及び故家に就きて其の事蹟を質し體ひて讎けば從ひて餘す碩り雪旦或は坐し或は立ち出入徘徊其の眞景を摹す後ち深川龍眠寺に至りて以謂らく許多の佛像倉卒に寫し畢るべからずと因りて僧に乞ひて堂中に投宿す夜半眠り醒めて首を昂げ燈を挑ぐるに明暗中忽ち五百應眞の壁を攫ひ足を翹る形狀悪引き去らんと欲するが如きを見雪旦悸れて被を蒙りて屏息し以て天明を俟つ後ち每に此を言ひて以て笑ひをなすと云ふ本郷の一勝地を御茶の水と稱す（亭あり守山と呼ぶ一客來りて酒飯を命じ饌を昭ひ深く亭榭の結搆と山川の位置とを觀悉く寫して去る其の夜亭に登あり主人思らく書間圖をなし去るものゝ所爲なりと他日その客又た來る主人之を捕吏に訴ふ吏鍛棍を操ひて入り將に之を縛せんとす客談然として大に驚く吏中客を識るものありて曰く是れ畫師雪旦なり平生篤實謹厚何ぞ賊をなす者ならんやと乃ち問て曰く吏何を以て屢〻來て此の家を窺ふや答て曰く頃者友人齋藤氏江都名所圖繪を編し其の附圖を余に囑す故に來りて勝地の眞景を寫すのみと乃ち稿本を出して吏に示す吏の意解く主人之を聞きて深く其の粗忽を謝す滿座一大笑をなして別ると江戸名所圖繪の一たび出るや聲聞大に籍く天保十四年正月二十八日歿す年六十六（香亭雅談、石亭畫談、扶桑畫人傳、書畫官料）

ハセガハ　セツテイ　長谷川雪堤　江戸の畫人なり名は宗一、雪堤は其の號、又梅紅、松齋の號あり、雪旦の子、父に學て同く雲谷風の畫を能くす筆力父に劣らず明治十五年三月十五日歿す年六十四（扶桑畫人傳）

ハセガハ　セツテウ　長谷川雪朝　浮世繪師なり俗稱平四郎畫法は雪舟を嘉ふ京都紙園社の仁王腕角力の額を畫く寛永年間の人（扁額軌範）

ハセガハ　センシ　長谷川千四　雖波竹本座の狂言作者なり大和の人長谷寺の僧なり後還俗して大阪に出て淨瑠璃京土產を作りて其の名世に知らる

ハセガハ　ソウキ　長谷川宗喜　長谷川流劍法の祖にして富田五郎左衛門の弟子なり左近將監と名聲を齊うす技を以て豐臣秀次に謁す（武術流祖錄、豪雄言行錄）

ハセガハ　ソウタク　長谷川宗宅　畫家なり法橋に叙せらる（鑑定便覽、繪師家人物志）

ハセガハ　ソウニン　長谷川宗仁　通稱は源三郎朝髮して宗仁と號し織田信長に近侍す天正六年信長功臣十人を茶室に享せし時宗仁之に預る十年六月信長上京都に從ひ變に遇ふ人を聽せて之を羽柴秀吉に高松の陣に報ず後ち秀吉に仕へ食邑一萬石を賜ひ法印に叙し式部少輔と稱す卒するに及び德川幕府に請ひ食邑を男子三人に割き幕府に仕へしむ之を許す長子正倫縫殿助と稱し七千石を食む次は守勝三左衛門と稱し千を賜ふ庚午の夏其の師の喪に郷里に至る既にして京都に還り卒未の秋疾み以て歿す年五十餘之進平生酒を嗜み醉へば善く怒る狀貌夜叉の如し人近く能はず僕善助と云者あり善く之に事ふ人善助に謂て曰く長谷川氏暴怒甚し子の頭日に大烟管の打擊を被らざるなし盍ぞ去て他に仕へざるやと善助泣て曰く主公嘗て僕を死に救ふ僕の身は即ち主公の身なり僕未だ報ずる所あらず且夫れ隆冬自ら衣を脫して僕に賜ひて曰く汝の寒を見るに忍びずと世間僕を愛する寧ろ復た主公の如きものあらんやと其の人爽然として自失して去る善助は信州伊奈郡の人亦た好みて大刀を佩び結髮太だ奇なり宇して珍髮と云ふ常に鐵之進の命を奉じ東西に奔走す初め寒暑雨雪を避けず鐵之進の京郡に客死するに及びて其本主を奉じて粟生津村に歸葬すと云ふ（近世偉人傳）

ハセガハ　テツヤ　長谷川徹也　海軍少尉なり愛媛縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て軍艦三笠に乘組み戰役に從事中廿八年九月十一日本艦の火災に際し彈藥庫爆發の爲め殉難す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ハセガハ　トウウン　長谷川等雲　宗圓の子にして雲谷風の畫人なり（扶桑畫人傳）

ハセガハ　トウエツ　長谷川等悅　雲谷派の畫家等伯の族なり又雲澤と名く（扶桑畫人傳、鑑定便覽）

流劍法の祖にして富田五郎左衛門の弟子なり左近將監と名聲を齊うす技を以て豐臣秀次に謁す（武術流祖錄、豪雄言行錄）

ハセガハ　ソウタク　長谷川宗宅　畫家なり法橋に叙せらる（鑑定便覽、繪師家人物志）

ハセガハ　ソウニン　長谷川宗仁　通稱は源三郎朝髮して宗仁と號し織田信長に近侍す天正六年信長功臣十人を茶室に享せし時宗仁之に預る十年六月信長上京都に從ひ變に遇ふ人を聽せて之を羽柴秀吉に高松の陣に報ず後ち秀吉に仕へ食邑一萬石を賜ひ法印に叙し式部少輔と稱す卒するに及び德川幕府に請ひ食邑を男子三人に割き幕府に仕へしむ之を許す長子正倫縫殿助と稱し七千石を食む次は守勝三左衛門と稱し千を賜ふ庚午の夏其の師の喪に郷里に至る既にして京都に還り卒未の秋疾み以て歿す年五十餘之進平生酒を嗜み醉へば善く怒る狀貌夜叉の如し人近く能はず僕善助と云者あり善く之に事ふ人善助に謂て曰く長谷川氏暴怒甚し子の頭日に大烟管の打擊を被らざるなし盍ぞ去て他に仕へざるやと善助泣て曰く主公嘗て僕を死に救ふ僕の身は即ち主公の身なり僕未だ報ずる所あらず且夫れ隆冬自ら衣を脫して僕に賜ひて曰く汝の寒を見るに忍びずと世間僕を愛する寧ろ復た主公の如きものあらんやと其の人爽然として自失して去る善助は信州伊奈郡の人亦た好みて大刀を佩び結髮太だ奇なり宇して珍髮と云ふ常に鐵之進の命を奉じ東西に奔走す初め寒暑雨雪を避けず鐵之進の京郡に客死するに及びて其本主を奉じて粟生津村に歸葬すと云ふ（近世偉人傳）

ハセガハ　テツヤ　長谷川徹也　海軍少尉なり愛媛縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て軍艦三笠に乘組み戰役に從事中廿八年九月十一日本艦の火災に際し彈藥庫爆發の爲め殉難す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ハセガハ　トウウン　長谷川等雲　宗圓の子にして雲谷風の畫人なり（扶桑畫人傳）

ハセガハ　トウエツ　長谷川等悅　雲谷派の畫家等伯の族なり又雲澤と名く（扶桑畫人傳、鑑定便覽）

暮り忠禮隊と號し其の將となる大樂源太郎德田軍人等之を佐く元治元年長門の老臣福原元侗國司親相等に從ひ京都に抵り會津の兵と大に戰ひ敗績す後ち四國に走る慶應三年丁卯奥羽に遊ぶ是の冬十二月東國より京都に上り途中足疾に罹り床に臥し月餘を閱す乃ち詩を賦して曰く吉人興作善、從來當報天、功名何足問、禍福付自然、蘭摩使不遜、孤憤起草間、尊攘唱大義、周遊原萬縣、六年究二洲、決策促歸裝、歸來策駑敵、賊臣互奉遷、見幾即決去、書匿游四邊、鈹逢聖主斷、鬪躍難自止、請命赴祖谷、突入賊至伏水、去入攘夷營、英氣呑乾坤、出從三除姦師、誠心誠帝闕、一舌擊二國、獨槍殺三軍、或爲忠勇督、禦侮敷南屯、或爲忠憤將、折衝回鑾輦、悲歌使西鎮、と戊辰王師北征す鐵之進之が標導となり其の明年己巳の春朝廷其の功を賞し祿若干を賜ふ庚午の夏其の師の喪に郷里に至る既にして京都に還り卒未の秋疾み以て歿す年五十鐵之進平生酒を嗜み醉へば善く怒る狀貌夜叉の如し人近く能はず僕善助と云者あり善く之に事ふ人善助に謂て曰く長谷川氏暴怒甚し子の頭日に大烟管の打擊を被らざるなし盍ぞ去て他に仕へざるやと善助泣て曰く主公嘗て僕を死に救ふ僕の身は即ち主公の身なり僕未だ報ずる所あらず且夫れ隆冬自ら衣を脫して僕に賜ひて曰く汝の寒を見るに忍びずと世間僕を愛する寧ろ復た主公の如きものあらんやと其の人爽然として自失して去る善助は信州伊奈郡の人亦た好みて大刀を佩び結髮太だ奇なり宇して珍髮と云ふ常に鐵之進の命を奉じ東西に奔走す初め寒暑雨雪を避けず鐵之進の京郡に客死するに及びて其本主を奉じて粟生津村に歸葬すと云ふ（近世偉人傳）

ハセガハ　テツヤ　長谷川徹也　海軍少尉なり愛媛縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て軍艦三笠に乘組み戰役に從事中廿八年九月十一日本艦の火災に際し彈藥庫爆發の爲め殉難す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ハセガハ　トウウン　長谷川等雲　宗圓の子にして雲谷風の畫人なり（扶桑畫人傳）

ハセガハ　トウエツ　長谷川等悅　雲谷派の畫家等伯の族なり又雲澤と名く（扶桑畫人傳、鑑定便覽）

ハセガハ　トウサク　長谷川等作　雲谷派の畫家なり等林の養子法橋に叙せらる（扶桑畫人傳、鑒定便覽）

ハセガハ　トウセツ　長谷川等雪「トウセツ」

ハセガハ　トウチョウ　長谷川等重　畫人なり或は云く等伯の族人なりと能く墨畫を書き且つ竹林七賢の圖を善くす其の筆法家傳を脱して而して古風の格あり清奇甚だ佳なりと云ふ（本朝畫史、鑒定便覽、扶桑畫人傳）

ハセガハ　トウテキ　長谷川等的　雲谷派の畫家なり本氏小野後ち長谷川を稱す又雲谷と曰ふ長谷川等伯の門人にして師の畫風を能くせり寛永三年歿す（扶桑畫人傳）

ハセガハ　トウハク　長谷川等伯　雲谷派有名の畫家にして長谷川流の祖なり能登七尾の人世と染工たり等伯畫を好み京都に到り大泰廣隆寺に寓し狩野氏の門に入る是時に當り狩野派の永德山樂友松相繼ぎて聲譽あり等伯其の右に出で雖きを思ひ終に雲谷派に入りて僧雲舟五世の畫孫と云ひて自ら誇る實は雲谷等顔の足なり特に肖像寫眞に長ず一時其の右に出る者なし力量氣局超拔嘉落、家法に泥まず韻致紙外に溢る人寸紙を獲ると雖も大に之を珍重す世に長谷川樣と爲す一門戸を立つ年七旬辨慶土佐坊を摹にする圖及び本法寺涅槃の像の大幅を畫くに筆力襲へず世之に驚く等伯千利休と相善し晩年に至りて利休と狩野氏の畫風を駁す等伯二子あり善く家法を繼ぐ其の歿年詳かならず蓋し文祿中の人なり（燕臺風雅拔抄、鑒定便覽、武乘要略）

ハセガハ　トウリン　長谷川等林　雲谷派の畫家なり等伯の養子本氏小野後ち長谷川を稱す等伯の畫風を能くせり（鑒定便覽、扶桑畫人傳）

ハセガハ　ナガハル　長谷川長春　浮世絵師なり自ら雲舟の末孫と稱し京都に住す天和貞享の頃吉田半兵衛と共に行はる好色旅日記に今の長谷川吉田が筆とあるは此の人なり（浮世絵類考別本）

ハセガハ　ヒデカズ　長谷川秀一　本名は貞長、尾張の人なり小字は竹後改めて藤五郎と稱す織田信長に仕ふ天正七年五月淨土日蓮の僧徒宗意を安土に論ず信長秀一等を遣りて和解せしむ從はず遂に討論に及ぶ秀一命を受けて之を警衛す十年五月信長弑に遇ひてより後ち羽柴秀吉に屬す十二年四月羽柴秀次等と師五萬五千を率ゐ長湫に向ふ途に敵に會ひ秀次遽かに擊破す秀一も亦接戰す隊伍散亂敗走すること二里餘五月越前東郷城主となる十三年三月根來の僧徒を伐ち て之を平ぐ七月從五位下に叙し侍從に任ず文祿元年兵五千を率ゐ海に航して朝鮮を伐つ三年二月秀一朝鮮に卒す家絶ゆ（野史）

ハセガハ　フヂヒロ　長谷川藤廣　左兵衛と稱す德川家康に仕へ慶長十一年長崎奉行となり有馬直純と共に擊て夷船を燒き悉く沈没せ し忠兵衛船主安眞を斬る十七年八月駿府に上り寅船八十餘艘長崎に來る旨を自す家康命じて耶蘇宗を禁ぜしむ十九年全く之を禁す十一月大阪の役に戰ふ堺津は長崎の商買住居の地なるを以て其の政所を兼ねしむ（君臣昇傳）

ハセガハ　ミツノブ　長谷川光信　浮世絵師なり名は永春梅峰軒と號し又松翠軒と號す英男畫譜を畫く（浮世絵類考別本）

ハセガハ　ムネキヨ　長谷川宗清　雪舟派の畫人にして宇右衛門と稱す京都祇園社鐘楼の額を畫く享保十三年戊申年五月吉祥日雪舟八代長谷川宇右衛門宗清六十歳筆の款あり（扁額軌範）

ハセガハ　モトツラ　長谷川基連（盛正秋直に作る）　齋藤弘重の士なり天文永祿記に基連を挙げ川中島に相抗衡し連年勝敗決せず互に死傷あり七年八月兩軍相約して曰く各々單身戰を試みしめ其の贏輸に就て川中島の地を得るとを決し以て兵を罷めんと是に於て信玄安間弘重をして騎し矮にして弘重は長大槊に超ゆ己にして雙騎相搭し抱て馬より墜ち弘重強力にして基連を壓す而して基連刀を拔き弘重の臍下を刺し終に之を滅す因りて其の約を愆み川中島四郡の地を越後に屬し以て兵を罷むと云ふ讎信乃ち基連を召し之に祿を與ふ（野史）

ハセガハ　ヤウシン　長谷川養辰　狩野派の畫家なり藤法眼狩野常信に學ぶ（扶桑畫人傳）

ハセガハ　ヨシハル　長谷川好春　彌右衛門と稱す有名の彫工なり江戸横山町一丁目に住す其の初めは喜世留の毛彫師なりといふ（裝劍奇賞）

ハセガハ　ランケイ　長谷川嵐溪　畫人なり名は荃宇は芳溪嵐溪は其の號越後三條の人弱冠江戸に遊び大視磐溪の門に入り傍ら丹青を春木南湖に學び研精すること年あり一日菅梅關の畫を觀欣慕して止まず乃ち仙臺に赴き其の門に入る梅關愛するに及び嵐溪其の粉本を模悉く其の秘を傳ふ梅關愛するに及び嵐溪其の粉本を模筆意を得たり是に於て更に妙義金洞の勝を探り之を明治名家の蹟に合し構思經營大に發明すると雖も自ら一家を成す慶應元年五月病を以て歿す年五十二（尙友小史）

ハセガハ　リジフラウ　長谷川理十郎　陸軍步兵少尉なり栃木縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て從軍中廿八年三月九日清國盛京省田莊屯附近に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ハセクラ　ツネナガ　支倉常長　幼名與市後六右衛門と稱す伊達政宗の臣なり六十貫二百四十三文を領し大御番組たり少より政宗に仕ふ政宗大志あり島津氏が琉球を伐ちたるを聞き已亦た南蠻を討たんと欲す適〻四班牙の宣教師ソテロ江戸淺草に會堂を建つ秀忠之を毀ちソテロを殺し信者を刑せんと欲す政宗乞ふて之を赦しソテロを仙臺に伴ひ常長及び合泉令史松木忠作等をして彼の弟子となり其の國情を聞かしむ常長をして其の實際を探らしめんと欲し幕府の船政職向井忠勝に請て船夫十人を傭ひ慶長十八年九月十五日陸奥牡鹿郡月の浦を發し隨行者六十八人同十九年一月二十五日墨士哥の アカパルコに着し十月に至て四班牙セビル府に入り十一月マドリッド府に入り翌年一月三十日國王に謁し政宗の書を呈す二月十七日洗禮を受け九月三十日羅馬府に至り十一月三日上客の禮を以て法王ポール五世に謁し政宗の書と贈品とを呈す是に於て日本奥州王の名彼邦に聞ゆ既にして使事を終へ法王の返書及び種〻珍異の贈品と王の畫像並びに常長畫像とを携へ往復淹留凡そ八年を經て月の浦に歸航せり常長殺

察して遂ぎ備さに復命し兩驢の伐つ可きを厭ぶ政宗大に喜び其の準備を爲す際耶蘇教の禁頗る嚴にして海外に逃すると者は皆斬に處ぜらる常長又た刑せられんとす仙臺光明寺の住職其の檀家なるを證言して免かるを得たりしが遂に其の初志を果さずして止む當時にありて此通使の偉蹟を遺し外交史上に燦爛たる光輝を放つに至ては政宗の遠謀偉略と常長の勝豪大志とに據るものにして誠に此君ありて此臣ありといふべし常長元和八年七月朔日歿す年五十二子常賴嗣ぐ（初名勘三郎）第權四郎常直耶蘇教を信ずるを以て兄常賴も亦坐せられ寛永十七年三月一日刑死す年四十二後常賴の子又兵衛常信れ貫文の地を賜ふ常長の畫像二あり一は當時自から携る者にして祭服掌を合して神を拜す現に伊達氏の寶庫にあり一は彼邦に傳ふるもの外套を服し長袴を穿ち雙刀を帶ぶ其服裝おのづから別なり然れども其面高顴廣額一見してその偉人たるを知るは即ち同じ（仙臺史傳）

ハセ　シュミマル　長谷朱味丸　陸軍步兵少尉なり靜岡縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て第三師團步兵第廿四聯隊附として從軍中廿八年三月四日清國盛京省燈鍋附近戰鬪の際負傷し同五日三家子第四師團第一野戰病院に於て死去す戰功に依り勳六等功六級に叙せらる

ハセダ　ツトム　長谷田務　陸軍三等軍醫正なり石川縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て豫備役より召集せられ步兵第三十五聯隊附として從軍中廿八年四月十七日清國盛京省孟家口にて病に罹り歸國後自宅療養中廿九年四月九日死去す

ハセ　ノブアツ　長谷信篤　信好の子なり騰雲また梧園の號あり明治元年參議に任じ大津裁判所總督となり京都府知事となり八年元老院議官となり子爵從一位勳四等に叙し貴族院議員に勅選せらる和歌及び書道に長ず明治三十五年十二月廿六日薨ず年八十五

ハセ　ハンダイフ　長谷半太夫　大阪城中に於て有名の勇士なり木村重成佐竹義信と加毛堤に戰ふ時に半太夫一番に鎗を入れ甲首十八級を獲重成自刃するに及び背木七郎右衛門と俱に進みて井伊直高の先隊を破り本陣に突入して敵六人を斬り又搏て一人を

疑し將に誠ぜんとす時に敵群り來りて遂に擒にせら後宥されて德川氏に仕ふ（本朝武功傳）

ハセベ　イナマロ　丈部稻呂　天平寶龜中和歌を善くするを以て名を知らる詠歌は載せて萬葉集に在り（萬葉集作者履歴）

ハセベ　オホトシ　丈部大歳　下總印幡郡の人なり和歌を善くす其の作萬葉集其の他諸書に在り（萬葉集作者履歴）

ハセベ　カハアヒ　丈部川相　和歌に工みなるを以て世に其の名あり詠歌は萬葉集等諸書に散見す（萬葉集作者履歴）

ハセベ　クロタヘ　丈部黑當　天平寶龜中其の族川相等と與に和歌を善くするを以て世に名あり詠歌は萬葉集等諸書に載す頗る秀歌多し（萬葉集作者履歴）

ハセベ　コマロ　長谷部古麻呂　天平寶龜中生玉部足國等と和歌を以て知らる詠歌は載て萬葉集中に在り（萬葉集作者履歴）

ハセベ　シマ　丈部島　養老中和歌を善くする人なり知らる詠歌は載せて萬葉集中に在り（萬葉集作者履歴）

ハセベ　タルマロ　丈部足麻呂　天平寶龜中和歌を善くす其の詠歌は載せて萬葉集其の他諸書に在り（萬葉集作者履歴）

ハセベ　ナガモリ　長谷部永盛　醫者なり長元元年典藥少屬に任ぜらる（皇國名醫傳）

ハセベ　ノブツラ　長谷部信連　右馬允爲連の子なり人となり膽勇あり年甫めて十六瀧口に直す僚友に忿怒する者あり其人壯健、衆制する能はず信連敵に當らんと欲す更卒其の驍勇を憚りて敢て逼り近く者なし矢を放て之を射る左股に中る一人あり眉尖刀を執りて進む信連之を奪はんと欲して右股を鏟傷す是に於て更卒相聚りて之を毆にす信連縛に就き大に罵りて曰く汝等は田舍人太だ事を解せざるなり身は是れ靱負尉何ぞ縲絏を以てせん吾れ豈に逃遯する者ならん散と乃ち之を六波羅に送る平宗盛賞讃して王の蹤跡密謀を鞫問す信連曰く吾固より死の往く所を知らざるをやと辭知ると雖も應に之を言はざるべし況や知らざるをやと辭氣壯烈毫も撓む色なし侍坐の將佐嘆賞せざるなし清盛其の勇烈を壯とし死を敕して伯耆日野に流す、平氏滅後鎌倉に至る源朝賴其の舊功を錄し收めて家士となしづ王大に驚き乃ち情運を召して實を告げ以て計策を問ふ信連曰く事辯じ易きのみ王深く憂ふる勿れと後關に入りて結人の衣裳及び笠を取りて王を之を服せしめ婢姿を爲りて夜に乘じて宮を出づ藤原宗信傘を擔ひ侍童鶴丸蠶を戴きて相從ふ信連乃ち婢妾を匿し器物を欲む王に寶笛二箇あり曰く蟬折曰く小枝常に身を離さず宮を出るに及て之を遺る王甚だ戀情す信連後に之を探り得て追及して之を獻ず王喜ぶ乃ち信連に命じて僧に行かしむ信連曰く檢非違使等王宮を圍まんとす而して一人も警備する者なし奴輩をして王宮を蹂躪せしむること臣深く之を恥づ且つ臣の王府にあるは世人の知る所なり將に謂はんとす信連は怯懦命を惜みて逃亡すと請ふ黍かに還りて王宮を衛らんと王誤を揮て別る信連第に歸り門を閉きて之を待つ翌明に檢非違使王の第を圍む光長大呼して曰く王の異圖發覺す檢非違使宣旨を奉じて來り遊ふ王速に出でよと信連曰く汝等無狀なり王適〻微行して他所に在りと檢非違使乃ち更卒をして宮に入りて搜索せしむ信連怒り叱して曰く汝等何ぞ不禮なる左兵衛尉信連此に在り來りて共に戰を決せよと刀を拔きて待つ更卒五十餘人躍噪して宮に入る信連縱横奮戰敢て敵する者なし光長の兵に七耶安清と云ふ者あり力十餘人を兼ぬ進みて之に當る信連迫りて之れを搏ち安清を掖はさみて光長に間ひて曰く我汝が養ふ所の壯士を獲たり汝之を活さんと欲ぜば來り救へと光長懼れて進まず信連安清を曳きて地に投ず絶して復た蘇く其の餘死傷する者十餘人信連刀折る赤手にして敵に當らんと欲す更卒其の驍勇を憚りて敢て逼り近く者なし矢を放て之を射る左股に中る一人あり眉尖刀を執りて進む信連之を奪はんと欲して右股を鏟傷す是に於て更卒相聚りて之を毆にす信連縛に就き大に罵りて曰く汝等は田舍人太だ事を解せざるなり身は是れ靱負尉何ぞ縲絏を以てせん吾れ豈に逃遯する者ならん散と乃ち之を六波羅に送る平宗盛賞讃して王の蹤跡密謀を鞫問す信連曰く吾固より死の往く所を知らざるをやと辭知ると雖も應に之を言はざるべし況や知らざるをやと辭氣壯烈毫も撓む色なし侍坐の將佐嘆賞せざるなし清盛其の勇烈を壯とし死を敕して伯耆日野に流す、平氏滅後鎌倉に至る源朝賴其の舊功を錄し收めて家士となし

安藝權非違使所に補し能登大屋莊を賜ふ建保六年大屋莊河原田に終はる子孫世〻能登に居り長を以て氏となす(大日本史)

ハセベノミチノ　アヅマロ　丈部路安頭麻呂　漆部司令史從八位上石勝の第二子なり(傳は朝父麿の所にあり)

ハセベノミチノ　オチマロ　丈部路祖父麻呂　漆部司令史從八位上石勝の子なり養老四年石勝直丁秦犬麻呂と司漆を盜むに坐して竝びに流刑に處せらる時に祖父麻呂年十二弟安頭麿九歲乙麻呂七歲同く官に詣り冒して伏請して曰く父石勝諸子を養くんが爲に司漆を盜み是に緣りて遠方に配役せらる冀くは兄弟三人官奴となりて父の罪を贖はんと詔して曰く人五常を稟く仁義斯れ重し士に百行あり孝敬を先きとす今祖父麻呂等身を沒し奴となりて父の罪を贖ひ以て骨肉を存せんと欲す理當に矜愍すべし宜く請ふ所に依りて官奴と爲すべしと乃ち石勝の罪を免し獨り犬麻呂を免して配所に赴かしめ幾ばくもなくして祖父麻呂等を免して其に從はしむ(大日本史)

ハセベノミチノ　オトマロ　丈部路乙麻呂　漆部司令史從八位上石勝の子なり養老中石勝蓁犬麻呂と司漆を盜みて流に處せらる時に乙麻呂年七歲二兄安頭麻呂及び祖父麻呂と同く官に詣り官奴と爲りて父の罪を贖はんと請ふ朝廷其の情を愍み乃ち石勝の罪を免し幾ばくもなく乙麻呂等を免して其に從はしむ(大日本史)

ハセベ　ママロ　丈部貫麻呂　相模の人和歌を善くするを以て其の名あり詠歌は載せて萬葉集其の他諸書に在り(萬葉集作者履歷)

ハセベ　ヒトマロ　丈部人麻呂　和歌に工みなり其詠歌は載せて萬葉集に在り(萬葉集作者履歷)

ハセベ　ヤマシロ　丈部山代　養老中和歌を以て名あり詠歌は萬葉集其の他諸書に出づ(萬葉集作者履歷)

ハセベ　ヨマロ　丈部與麻呂　和歌を善くするを以て其の名高し詠歌は萬葉集其の他諸書に出づ(萬葉集作者履歷)

ハセベ　ワカササギノ　テンワウ　泊瀬部若雀天皇「スシユンテンワウ」

ハセン　巴泉　書僧なり周文の筆意を學びて殊に布袋の圖を能くせり(扶桑畫人傳、鑒定便覽)

ハセンシ　破屐子　江戸の俳人なり延寧と號す貞享年間の人(俳林小傳)

ハセンダウ　巴扇堂(二世)　狂歌師なり姓は藤原名は長賢氏は連通稱を彦右衛門と云ふ江戸の人某侯に仕へ故有て仕を辭し後ち市谷に住し筆匠を以て業とす狂歌を好み初代巴扇堂に就て是を學び初名を鶴毛なり享萬年また筆の常持等の別號あり詠歌多し「そしるとそほとゝぎすうしろゆびさす人のおほきなり思ひたがへそほとゝぎすうしろゆびさす人のおほきなり」の詠は狂歌作者部類に收めて人口に膾炙せり後年師の號を繼ぎ二世巴扇堂と稱す文政十一年正月十八日病て歿す年五十四藤新宿追分四方寺に葬る法號「清光院蓮山淨休居士」と云ふ辭世に「極樂の浪人ものとなりぬめり今日はこの世の暇貰ひて」(古今狂歌人物誌)

バセヲ　芭蕉　俳諧の名家なり名は宗房初め金作と稱し後甚七郎と更め最後に忠左衛門と稱す風藍、桃青、羽扇、鈞月、羊角の數號あり松尾氏、伊賀阿拜郡の人、津侯に仕ふ幼にして穎悟長じて老莊禪學を修め俳諧を好みて北村季吟に學ぶ僧四行の人某に遊び明年大和を巡り元祿二年陸奥に往き七年秋伊賀に歸り翌年冬大阪を歷て將に南都に赴かんとす十月十二日病み堂命を受けて江戸小石川の水路を修む甚七工夫を盡し功を成し即日病と稱し暇を告げて去る(一說に云く芭蕉忠に謹あり其忠早世するに及びて追悼せり後年其忠の志を發し數〻致仕を乞へども許されず因て自ら去る時に年二十三京都に往きて北村季吟に從學す)(一說に風藍坊庵を深川に結び髮を剃りて天々軒桃青(一說に風藍坊と號す時に延寶八年年三十七天和三年深川火起りて庵燼す乃ち甲斐駿河の間に歷遊し後ち深川に還り一室を造りて居る芭蕉一株を栽る年を經て茂殖繁衍す桃青愛翫遂に以て自ら號とす貞享四年秋鹿島に遊び明年大和を巡り元祿二年陸奥に往き七年秋伊賀に歸り大阪に歷て將に南都に赴かんとす十月十二日病み堂命を受けて江戸小石川の水路を修む甚七工夫を盡し芭蕉俳諧に於て其の妙奥を極め其忠の志を發し數〻致仕を乞へども許されず因て自ら去る時に年二十三京都に往きて北村季吟に從學す)と號す時に延寶八年年三十七天和三年深川火起りて庵燼す乃ち甲斐駿河の間に歷遊し後ち深川に還り一室を造りて居る芭蕉一株を栽る年を經て茂殖繁衍す桃青愛翫遂に以て自ら號とす貞享四年秋鹿島に遊び明年大和を巡り元祿二年陸奥に往き七年秋伊賀に歸り大阪に歷て將に南都に赴かんとす十月十二日病み堂命を受けて江戸小石川の水路を修む甚七工夫を盡し芭蕉忠に謹あり其忠早世するに及びて追悼せり後年其忠の志を發し數〻致仕を乞へども許されず因て自ら去る時に年二十三京都に往きて北村季吟に從學す)と云ふ辭世に「極樂の浪人ものとなりぬめり今日はこの世の暇貰ひて」(古今狂歌人物誌)

バセヲ　芭蕉　俳諧の名家なり名は宗房初め金作と稱し後甚七郎と更め最後に忠左衛門と稱す風藍、桃青、羽扇、鈞月、羊角の數號あり松尾氏、伊賀阿拜郡の人、津侯に仕ふ幼にして穎悟長じて老莊禪學を修め俳諧を好みて北村季吟に學ぶ僧四行の人某に遊び明年大和を巡り元祿二年陸奥に往き七年秋伊賀に歸り大阪に歷て將に南都に赴かんとす十月十二日病み堂命を受けて江戸小石川の水路を修む甚七工夫を盡し芭蕉俳諧に於て其の妙奥を極め功を成し即日病と稱し暇を告げて去る(一說に云く芭蕉忠に謹あり其忠早世するに及びて追悼せり後年其忠の志を發し數〻致仕を乞へども許されず因て自ら去る時に年二十三京都に往きて北村季吟に從學す)と號す時に延寶八年年三十七天和三年深川火起りて庵燼す乃ち甲斐駿河の間に歷遊し後ち深川に還り一室を造りて居る芭蕉一株を栽る年を經て茂殖繁衍す桃青愛翫遂に以て自ら號とす貞享四年秋鹿島

し而して兵を起すの日に及びて一人の雛に赴く者なしと雖じて曰く吾れ新田義興を殺すを悔ゆと因て固守すること數月基氏詐りて使を遣して招き降さしむ國清遂に僧衣を著て出で、降り弟義深を基氏の營に遣り自ら伊豆府に留ること數日基氏將に國清等を掩殺せんとし兵を遣はして路を樫がしむ夜人あり國清に告げて曰く聞く明日將さに異處分あらんとすと國清驟ち弟義熙に目し僞りて近出する爲れし一奴をして刀を持たしめ徒步して藤原の佛寺に奔る寺僧給するに馬二匹曾て人を以てす國清等晝夜馳せて京師に至り七條佛寺に匿れ又た去りて宇治に居り補正儀に遷て歸順す正儀卻けて發せず遂に大和山城の間に竄れて餓死す（大日本史）

ハタケヤマ　クワンサイ　畠山寛齋　儒者なり小字は政五郎寛齋は其の號播州の人那波魯堂に學ぶ（變定便覽）

ハタケヤマ　ケイタラウ　畠山慶太郎　陸軍工兵少尉なり宮城縣出身にして明治二十八年征蠻役に於て第二師團第二步兵彈藥縱列附として出征中病に罹り十一月十七日臺南舍營病院に於て死去

ハタケヤマ　サダマサ　畠山貞政　姓は源氏政尙の子なり未だ其稱呼を詳にせず天正五年二月貞政岩室城に居る根來、雜賀等の群士擁衛し立て、主と爲す德川家康織田信雄を助て羽柴秀吉と隙を構ふるに及び貞政遽かに德川家康に應じ舊交の士を募る來歸する者多し貞政織田信雄を峡て兵を起さんと欲す未だ發せずして會〻東西和議成る是に於て貞政止りて岩室城を守る秀吉貞政を滅して根來、雜賀を屠らんと欲し貞政の臣白樫某を誘ひて內應を爲さしめ十三年二月大兵を率ゐて岩室城に薄る白樫約を守りて火を城に縱ち遂に陷る貞政遁れて蹤を晦す子あり政信と曰ふ（野史）

ハタケヤマ　シゲタダ　畠山重忠　幼字は氏王丸武藏の人其先は平高望の子良文より出づ祖は重弘父は重能畠山莊司となり三浦義明の女を娶り重忠を生む因り莊司二郎と稱す治承四年源頼朝以仁王の令旨に應じ兵を起して平氏を討つ時に重能京師にあり平氏重能の宗人皆な頼朝に嚮せんことを恐れ拘留して置きず故を以て重忠頼朝の徵發に從はず八月頼朝石橋山に據る大庭景親擊ちて之を破る重忠も亦た五百餘騎を率ゐて金江川に屯す時に年十七會〻三浦義澄和田義盛兵に將として頼朝を助く途に頼朝敗ると聞き還る徑

大夫と稱す（野史）

ハタケヤマ　タネナガ　畠山植長（或は長を家に作る）姓は源氏、尙順の長子なり河州高屋城に居る右衛門佐兼尾張守に任ぜられ永正八年八月將軍足利義植に屬して舟岡山の戰に從ふ後ち大永六年二月將軍義晴に石清水に從ひ相伴衆に列す七年八月柳本某等植長を高屋城に圍むや植長交尙順の援けを乞ひ擊ちて之を卻く天文三年七月植長兵士を發して湯川、野邊等を紀州に討つ時に家臣遊佐長敎、木澤長政等植長の怒弱にして爲すに足らざるを厭ひ相議して之を廢し其の弟長纘を迎へ以て畠山氏の家督と爲す是より植長所在に蒼蠅、長纘亦た資性傲惰輕慢にして諸士を侮弄す或は之を諫むるも更に悛めざるを以て十年八月遂に鴆殺一又た植長を迎へて之を立て以て高屋城に置く是に於て河州又た大に亂る是歲十二月木澤長政畔きて高屋城を攻む長政は攝津の人初め細川晴元に從ひ後ち畔き細川氏綱に降る終始反覆常なし天文十一年正月河州に侵入一植長を伐て泉河二州を掌握せんと欲し城を落合に築き騎兵五千を率ゐて之に擅る植長兵士一萬五千を嘗して之を攻め其城を火きて軍を高屋城に旋へす後ち十四年五月卒す法名覺源伍公、大和寺と號す子なく弟政國を以て後となす（野史）

ハタケヤマ　テルタカ　畠山昭高　姓は源氏本名政賴、小字は小二郎、左衛門尉と稱す（或は左衛門督に作る）政國の第三子なり永祿十二年兄高政河州高屋城に退居て老室遊佐信敎等同族貞政を迎へて之を立つ然れども其の未だ幼なるを以て昭高を以て高屋城代となす是に於て昭高城に入り將軍義昭に諱字を請ひて今名に改む又た織田信長と親昵し て其の妹を娶り以て妻となす而して自立の志あり因て遊佐等漸く之を忌憚す天正元年六月遊佐信敎昭高を高屋城に弑す初め昭高の高屋城に入るや信敎己の女を以て之に配し以て權を專らにせんと欲す然るに昭高信敎の累世暴戾恣橫なるを惡みて更に織田氏と姻を結び私かに信敎を誅せんと謀る而して事泄れ遂に鼓に至ると云ふ法名は高源道看、釋迦寺と號す（野史）

ハタケヤマ　ヂホノブ　畠山尙順（武家譜に尙長に作る）姓は源氏、政長の子なり本の名を尙度と曰ひ左衛門佐と稱す文明十年七月從五位下尾張守に叙任せらる明德元年八月將軍足利義植に京極の軍に從ふ二年二月軍に從て正覺寺の陣營に在るや四月に至りて敵兵の攻擊甚だ急なり父政長其免るゝ能はざるを知り尙順を平三郎と云へるものに托し鼓女の裝に擬して紀州に奔る是歲九月家人木澤、杉原、丹下、安見、遊佐等の諸士と胥謀して兵を擧げ桃井、一宮等を攻めて之を拔き遂に河州高屋城に據る八年正月畠山義豐を正覺寺城に攻めて之を獲る永正元年に至て義豐の子義英を擁して高屋城を以て子植長に讓り剃髮して自ら山と號す四年八月又た細川澄元と和を講ず十二月尙順の親を破りて細川高國、尙春、奈良元亮及び攝人三宅、伊丹、池田等と相ひ謀りて茂英を獄山城に攻めて之を走らす大永七年八月又た植長を援けて柳本某を擊ち首五百級を獲たり天文三年三月紀人野邊某等反すに應るもの多く尙順亂を避けて淡路に遁る未だ幾くならず山城を攻む兵鋒甚だ銳し義就支へすして高野山に逃げ長纘、或は長賴に作る）政河と云ひ植長闕と（野史）

ハタケヤマ　バイエン　畠山梅園　和學者なり名は常操初名は常保入道して梅軒と云ふ一橋侯の日付役たり古風歌學に委し天保十二年十二月四日歿す四谷笹寺に葬る（名人忌辰錄）

ハタケヤマ　マサクニ　畠山政國　姓は源氏尙順、武家譜尙長に作る）入道卜山の第二子なり長兄植長に繼て河州高屋城に居る初字は三郎、上總介又た播磨、尾張守と稱す天文十九年八月卒す三子あり高政、政尙、昭高（野史）

ハタケヤマ　マサナガ　畠山政長　姓は源氏小字は彌三郎畠山持國入道德本の養子にして尾張守持富の子なり初め持國の第二男なり初め細川勝元に屬し尾張守に任ず尊て持國老し悉く封國を以て勝元に委ねし後ち入道して道祐と號す諸即和歌を嗜みて大原に閒居す是を能登畠山一流の祖と爲す子孫世く其の封を襲ふ（野史）

ハタケヤマ　モチクニ　畠山持國　姓は源氏滿家の長子なり小字は尾張二郎、家を繼ぎて從五位下左衛門督に叙任せられ從四位下に陞り嘉吉元年二月從三位に進む嘗て薙髮して德本と號す是の歲八月持國弟持富と興に河內、越中、能登、紀伊の兵士八千餘人を率ゐて諸將と謀み合し赤松滿祐を白旗城に攻む二年八月持國嘗領と爲り始めて評定座に列して政務を聽き綱代興に乘り騎兵十人を從へて禁裏に出入す三年六月持國讓して曰く赤松滿祐は大逆を以て既に誅戮に伏す藍も其の父祖累世の功績は又た曠くすべからず夫れ皆な降る政慶身を置くの地なく潛行して河內に走り吉益牛笑齋の家に匿くる牛笑齋は畠山の族なり世々金瘡產科を業として世に名あり之を吉益流と謂ふ政慶詐

應す二月義植及び政長師を河州に發して陣營を正覺寺に布く義豐拳田に屯し屢々興に戰て利あらず既にして政元の援軍を得て來り攻むる甚だ急なり政長乃ち其の克つ能はざるを察し子尙順をして遁れ去らしめ衆と興に酒を酌みて死を督ひ遂に自殺す權大納言藤原光忠嘗て政長と親あるを以て從ひて軍に在り危を見て去るに忍びず亦た自殺す丹下備後守等二百餘人火を縱ちて之れに殉す時に明應二年四月二十三日なり謚して霊隆寺（或は實禪寺に作る）と號す子あり尙順と曰ふ（野史）

ハタケヤマ　マサノブ　畠山政信　姓は源氏貞政の子なり民部と稱す元和元年大阪の役に從ひて功あり八年八月謁を德川家康に執りて食邑二千石を賜はる後ち休山と號す片桐且元の女を娶りて基玄を生む（野史）

ハタケヤマ　マサヒサ　畠山政尙（政尙一に元政又直政に作る）姓は源氏、政國の第二子なり一の名は政義、播磨守、阿波守と稱す政尙父政國の讓りを受けて石室城に居り（或は岩村に作る）安見河內守と興に兵士三千二百餘人を率ゐて江口城を攻め十河一存と戰ひ將に之に克たんとす會〻三好義長十河の請に應じて來り援く乃ち兵を收めて還る元龜元年二月安見等と興に將軍足利義昭の命を以て三好長慶、松永久秀等の軍を擊ちて之を卻く子あり貞政と曰ふ（野史）

ハタケヤマ　マサヨシ　畠山政慶　父を高政と曰ふ管領畠山政長の苗裔なり世々河內紀伊二州を領し五畿悉く麾下に屬す父高政の時蠶く其の封を亡ひ獨り河內高屋城を保つ高政卒す政慶時に幼弱にして立つ能はず之れを叔父昭高に讓る元龜甲老臣遊佐氏亟して高屋城を圍む昭高自殺す一政慶遁るゝを得て紀州に在り天正十四年秀吉の始めて天下を定むる德川家康信雄を援けて兵を起さんとし使を遣はして政慶及び諸將に約して秀吉の後を襲はしむ秀吉聞きて大に怒り兵を引き紀州に入る其の勢ひ鋭にして兵に鋒を爭ひ驍將諸城風を望みて降る政慶其の敵す可らざるを知り軍を棄てゝ熊野に走る其の諸城は皆な親戚なり十八年諸城皆な降る政慶身を置くの地なく潛行して河內に走り吉益牛笑齋の家に匿くる牛笑齋は畠山の族なり世々金瘡產科を業として世に名あり之を吉益流と謂ふ政慶詐られんことを懼れて遂に其の姓を冒し醫を以て自ら隱くる慶長六年淺野幸長の紀州に封ぜらるゝや畠山の族皆な出でゝ仕ふ政慶志を立てゝ仕へず元和中淺野氏封を藝州に移す畠山の族皆な之に從ふ政慶遂に往かず醫を以て世を終ふ（東洞先生行狀記）

ハタケヤマ　ミツイヘ　畠山滿家　姓は源氏基國の長子なり父に嗣ぎて從五位下尾張守に叙任せられ左衛門督に遷る後ち應永六年正月從五位上に進む是歲十二月父に從ひて大內義弘を堺浦に討ち事平ぎて後ち功を以て紀伊國に封ぜらる十七年六月斯波義淳に代りて管領と爲り尋で入道して道瑞と號す二十八年七月（或は二十九年に作る）再び管領と爲る永享五年九月卒す諡して貞觀寺と號す法名を眞源と曰ふ三子あり畠山（野史）

ハタケヤマ　ミツノリ　畠山滿則　右衛門督基國の二男なり能登國を父に受け修理大夫と稱す後ち入道して道祐と號す滿則和歌を嗜みて大原に閒居す是を能登畠山一流の祖と爲す子孫世く其の封を襲ふ（野史）

ハタケヤマ　ミツイヘ　畠山滿家　姓は源氏滿家の長子なり父に嗣ぎて從五位下尾張守に叙任せられ從四位下に陞り嘉吉元年二月從三位に進む嘗て薙髮して德本と號す是の歲八月持國弟持富と興に河內、越中、能登、紀伊の兵士八千餘人を率ゐて諸將と謀み合し赤松滿祐を白旗城に攻む二年八月持國嘗領と爲り始めて評定座に列して政務を聽き綱代興に乘り騎兵十人を從へて禁裏に出入す三年六月持國讓して曰く赤松滿祐は大逆を以て既に誅戮に伏す藍も其の父祖累世の功績は又た曠くすべからず夫れ皆な降る政慶身を置くの地なく潛行して河內に走り吉益牛笑齋の家に匿くる牛笑齋は畠山の族なり世々金瘡產科を業として世に名あり之を吉益流と謂ふ政慶詐

左租す是の月二十一日京師大に亂れ禁闕及び幕府皆兵を聚めて戒しむ夜に至りて宗全火を持國の第に縱ち持國及び義就等出奔す是に於て勝元政長を携へて將軍足利義政に謁見し明日を以て政長持國の故第に移り祠て畠山氏の家督と曰ひ左衛門督兼尾張守に任ぜらる康正元年七月義就兵を大和に擧ぐ（或は河內に作る）政長乃ち紀泉和河四州の兵を率ゐ分ちて三部と爲し赴きて之を攻む二年三月政長復た義就と營振に戰ふ是の歲十二月政長義就と和す畠山氏分れて二流となる後ち長纘元年三月畠山道祐（名は滿則）義政及び夫人藤原富子を饗し竊に請ふに義就を以て政長に代へ以て家督となさんことを以てす義政之を領す是に於て政長私かに予盾の心を挾み深く勝元に依賴す寛正元年九月義就幕府の命に背き出でて河內に奔り政長再び家督を繼ぐ閏九月政長命を受けて兵を起し京師を發して龍田に至り義就の軍を討て之に克つ義就退きて獄山城を保つ政長進みて若江城を拔き軍を弘川に移す二年春衆悉くして獄山城を攻む兵鋒甚だ銳し義就支へすして高野山に逃げ轉じて岡城に入る而して政長の追擊甚急なり義就乃ち爲す可らざるを見吉野の奥北山に潛匿す是に於て政長捷を京師に報じ猶義就を索む十二年政長命を奉じて戊兵を紀河二州の諸城に置き族を整へて凱旋し翌正元年正月京師に歸る八月細川勝元に代りて管領となる文正元年九月義就復た兵を擧げて河州を侵掠し諸城を拔て京師に入る政長預め備を設けて敢て發せず深く元勝に結納す應仁元年正月二日義政舊例を變じて管領の第に往かず政長以て宗全及び義就のなす所となし隱忍て甚し共に兵を募りて東西相抗衡し大に京師に戰ひ互に勝敗あり是より亂階を開く戀內七道干戈曠日なく天下大に亂る文明五年十二月政長復管領となりて七日にして罷む七年之を復す十二月政長復管領となりて十八年八月再び管領に補せらる長享元年八月將軍足利義尙に從て近江に奔る後ち延德二年七月將軍義植政長を復して管領となす當時故舊部將咸な歿して政長獨り生存し隣位群に超え齡亦高く且事務に熟練するを以て意稱し驕侈に傾き往々諸士を輕侮す是に於て細川政元及び巨室群類皆な悅ばず明應二年正月畠山義豐政長の驕奢を訴へて畔く政元及び畠山名、一色、椿井、京極の徒と內

威勢日に張り部屬の士月に專橫を極め往〻無辜の人を殺傷す持國初め子なく姪政長を取りて子となす既にして義夏を生む之を鍾愛し幕府に請ひて諱字を受け遂に政長を嗣け義夏を立てゝ嫡嗣となし名を義就と改め伊勢守に任ず尊て持國老し悉く封國を以て義就に讓る初め畠山氏の山東に在りしより遊佐、神保の二氏共に家宰たり而して其の國權を執るに及びて二氏殆ど府臣に擬するに至る遊佐氏は河內守護代となるを以て部屬の覺悉く其の下に在り後ち持國の時に及び遊佐大に脅過を蒙むり家事を預聞して義就の傅たりを以て神保氏之を猜忌し遂に政長を奉じて家督を繼がしめ自ら進みて家事を專らにす是より一家分れて二流となり政長又た細川勝元に依賴して以て其の勢を假る時に畠山滿則入道道祐と云ふものあり當時の宿老にして名望あり畠山氏の同胞壻に閥き嗣方に迫れるを憂ひ百方之を和解せしめんとす然れども實は義就に左袒するを以て其の部下の士遊佐氏に黨するもの者亦多し是に於て持國之を制する能はず家聲漸く衰ふ三年四月持國意を決して政長を逐ひ義就を以て嗣とす遂に將軍足利義政の數書を請ひ兵を起して政長を誅戮せんとす然れども政長出でゝ勝元の第に蓄匿し其の黨之を援くるを以て持國遂に志を遂ぐる能はず而して神保益〻政長を援く是の歲八月義就の部下離散して或は山名宗全の第に赴き或は政長に屬するもの多し益〻宗全は勝元の舅にして亦は同じく政長を援くる者なり是より黨論四面に喧しく京師頗る鼎沸す是に於て義政諸將を召して戒慎す廷臣又各〻禁闕に朝して不穩を戒む既にして宗全火を持國の宅に縱つ持國之を叔父祖道祐の家に避く義就亦た出でゝ遊佐國助に依り尋で與に伊賀に走る持國遂に移りて建仁寺西來院に蟄居す是に於て政長家を繼ぎて義政に謁見す而して勝元之を扶く持國之を聞き益〻怒る既にして政長の部下神保某等議して曰く持國他慮に在らず惑くは害を作さん因りて之を遊へて敬禮を竭さず其の怒を消し以て永久の無事を保つに足らんと乃ち畠山持純を遣はし兵士三百を率ゐて之を迎ふ持國忿りて將さに自殺せんとす時に其の族西方某之を諫めて止む是に於て持國出でて持純擁護して歸る後ち康正元年三月持國卒す歲五十九、法名立源、光孝寺と號す子義就（野史）

ハタケヤマ モトクニ 畠山基國 姓は源氏尾張守護深の長子なり其の先鎮守府將軍源義家の玄孫太郎義純母氏に依りて始めて族を畠山氏と稱す基國の父義深は即ち義純六世の孫なり基國家を繼ぎて從五位下右兵衛佐兼上總介（或は右兵衛佐右衛門佐に作る）に叙任せられ尋で侍所頭人となり右衛門佐に遷る元中八年十二月將軍足利義滿に從ひ山名清之を京師に攻めて功あり九年正月山城國に封ぜらる是歲父義深河州に在りて楠正勝と相戰て未だ決せず基國兵を率ゐて會戰し父を援けて遂に千餘破城を拔く是に於て補氏の部屬或は降り或は走る應永元年基國河內國を加賜せらる十二月復正勝と戰ひ擊ちて之を走らす五年五月管領となる蓋し畠山氏の管領に補せらるゝや之を始めとす基國尋で剃髮し號して德元（或は德山に作る）と曰ふ二子あり十三年正月卒す歲五十五謚して長禪寺と曰ふ二子あり長子滿家立ちて家を繼ぐ次は滿則修理大夫に任ぜらるる之を能州畠山氏の始とす（野史）

ハタケヤマ ユウコ 畠山勇子 千葉縣安房郡鴨川町の女なり明治二十四年五月在江國大津に於て露國皇太子が巡査津田三藏の爲め負傷するや上下ために震駭す此報千葉縣下に傳はるや當時某家に雇はれ居たる勇子は大に憂ひ主家に請ひて直に京都に赴き五月二十日夕景京都府廳の門前に至り露國大臣と日本府廳に宛たる二通の書面を車夫をして門番所に差出さしめ纏て懷中より鋏利なる制刀を取出し自殺を遂げたり遺骸は京都大宮松原なる末廣寺に埋葬せらる四十年九月史談會は勇子の名を後世に傳へんとて同女の追弔會を兼れ報告祭を行ひたり

ハタケヤマ ヨシシズミ 畠山義純 初め太郎と稱す足利義兼の長子なり從五位下に叙せられ遠江守となる初め北條時政の女畠山重忠に適く重忠既に死して更に義純に嫁す時政惡く重忠の食邑を以て之に授く因て畠山氏を冒す（大日本史）

ハタケヤマ ヨシタカ 畠山義隆 姓は源氏義則の子なり小字は二郎、初め父義則の部下を制する能はずして越後に奔るや長連龍等義隆を擁立して主となし稱して修理大夫と曰ふ而して年未だ長ぜず輔佐亦力なく遂に天正二年家臣遊佐義房の爲に惨殺せらる時に歲十八是に於て部下大に騷擾し上杉謙信、或は織田信長と爲す）討て之を平ぐ三子あり義春、義有、義友（野史）

ハタケヤマ ヨシツナ 畠山義綱 能登の國主にして從五位下左衛門佐に叙任す禪法を信じ紫野大德寺の中に院を建立し已の法謚を以て寺號とす興盛院これなり天文十四年七月十三日殁す傳翁德胤と稱す（興臨院過去帳）

ハタケヤマ ヨシトホ 畠山義深 國清の第、三男と稱す尾張、能登、越中、河內、和泉、紀伊守護となる國清に從ひて鎌倉に居る國の命に因りて京師に入り政長と和を行ふ是に於て畠山氏分れて兩派となれり長祿元年三月畠山道誕義政及び夫人薩原富子を讒し竊かに請ふに義就を以て政長に代へ總領となさんとを以て義政之を聞きて悅ばず密かに猥心を挾み益々勝元に依賴す寛正元年九月義政義就を以て法令に違へるの罪ありと爲し伊勢貞親、飯尾下總守其の第に遣はして之を逐ふ義就乃ち歎じて曰く我未だ犯罪あるを覺えず浸潤の譖得て解すべからずと乃ち去て河內の若江城に入る遊佐國助遊へて之を相く義政遂に政長の家督を復し且命じて義就の職を除き政長をして之に代らしむ是より二人復た隙を構へて相ひ爭ふ是の歲十月政長出でゝ和州に軍す義就亦た遊佐彈正忠、畠田釜河入道等をして龍田の陣營を襲はしめ自ら後援を爲す然れども軍敗れ士卒多く之に死するに及び四林寺を歷て獄山城に入る是に於て政長進みて若江城を取り弘川（或は實弘寺に作る）に陣して獄山金胎寺に攻む十一月義就金胎寺を寨ゝ昔な獄山城に合して之を守る三年畿將政長等來り攻め內外相ひ持して未だ決せず四月細川、山名、佐々木、武田、北畠等の諸士軍を併せて來り攻む義就時に再び金胎寺を修めて之れに據り擊ちて大に敵兵を挫く特り山名是豐奮戰して七勝七敗雄未だ決せず是豐聲を勵まして曰く我は是れ宗全の子なり城を拔かざれば即ち去らずと衆を率ゐ殊死して戰ふ是に於て城兵勢稍々屈す義就亦た衆を鼓舞して接戰す終に決せず日沒するを以て互に兵を戢む而して諸軍又た競ひ迫るに及びて城終に陷る四年三月義就字を賜はり以て義夏と稱し遠に政長を讐け義夏を立てゝ嫡子となす以て今名に改め伊勢守に任ぜらる（或は伊豫守に作る）既にして持國老を告げ義就其の家督を繼ぎて右衛門佐に遷る是より義就政長と隙を構へ臣屬亦た各々相分れて黨を樹て以て相爭ふ時に細川勝元、山名宗全の二氏强兵を以て政長を援く享德二年八月宗全火を縱ちて持國の家を燒く義就難を避けて遊佐國助の宅に入り遂に與に其第を燒き伊賀に奔る（或は河內に走ると爲す）後ち康正元年夏義就兵を大和に擧げて屢ゝ郡邑を侵掠し政長の黨と片岡に戰ふ是より兩黨所在相抗衡して連戰決せず是の歲十二月義就將軍義政の命に因りて京師に入り政長と和を行ふ是に於て畠山氏分れて兩派となれり長祿元年三月畠山道誕義政及び夫人薩原富子を讒し竊かに請ふに義就を以て政長に代へ總領となさんとを以て義政之を聞きて是に於て義就の徒萬歲を唱へて之を觀す政長之を聞きて悅ばず密かに猥心を挾み益々勝元に依賴す寛正元年九月義政義就を以て法令に違へるの罪ありと爲し伊勢貞親、飯尾下總守其の第に遣はして之を逐ふ義就乃ち歎じて曰く我未だ犯罪あるを覺えず浸潤の譖得て解すべからずと乃ち去て河內の若江城に入る遊佐國助遊へて之を相く義政遂に政長の家督を復し且命じて義就の職を除き政長をして之に代らしむ是より二人復た隙を構へて相ひ爭ふ是の歲十月政長出でゝ和州に軍す義就亦た遊佐彈正忠、畠田釜河入道等をして龍田の陣營を襲はしめ自ら後援を爲す然れども軍敗れ士卒多く之に死するに及び四林寺を歷て獄山城に入る是に於て政長進みて若江城を取り弘川（或は實弘寺に作る）に陣して獄山金胎寺に攻む十一月義就金胎寺を寨ゝ昔な獄山城に合して之を守る三年畿將政長等來り攻め內外相ひ持して未だ決せず四月細川、山名、佐々木、武田、北畠等の諸士軍を併せて來り攻む義就時に再び金胎寺を修めて之れに據り擊ちて大に敵兵を挫く特り山名是豐奮戰して七勝七敗雄未だ決せず是豐聲を勵まして曰く我は是れ宗全の子なり城を拔かざれば即ち去らずと衆を率ゐ殊死して戰ふ是に於て城兵勢稍々屈す義就亦た衆を鼓舞して接戰す終に決せず日沒するを以て互に兵を戢む而して諸軍又た競ひ迫るに及びて城終に陷る四年三月義就

嶽山を棄て、熊野に逃れ轉じて高野山に走る是の歲五月復た山を下りて岡城に據り政長と幣川に戰ふこと數回遂に敗れて自殺せんとす時に湯浅二郎と云ふもの義就の甲を乞ひて自殺せんとす時に湯浅二郎と稱して自殺す義就僅かに脫して吉野の奥北山に走る十一月政長京師に凱旋す後ち山名宗全密かに謂へらく畠山氏兩雄なして鬻峰の爭あらしめば我れ漁人の利を占るに足れり抑ゝ義就は當時二十餘州の兵士に對して僅かに孤城を保ち四年を經て勢力屈せず今や流落すと雖ども其の豪雄愛すべきなり我れ若し彼と謀を同くせば天下亦た圖るに足らんと義就亦た背て宗全の威權强盛にして群侯を壓するに足るを稱し密かに信を宗全に通ず文正元年九月宗全義政の夫人富子に依りて義就の赦を請ふ義政之を聽す宗全又た曾て細川勝元の權柄を挫かんと欲す因て義就を京師に引くは表面は政長を逐ふが爲めなるが如しと雖ども實は細川氏を謀るなり義就の發して河州に入るや遊佐長直降を乞ひ遂へて之を若江城に入る河州悉く之に服す十一月義就入幡に致る宗全自ら出でゝ之を迎ふ十二月義就、義政に謁見す而して政長の管領たるや猶ほ舊の如し政長又た預め武備を設け勝元と益々深交す應仁元年正月義政舊例を變じて管領の第に往かず義就寓居して日々事己に熟せりと乃ち其の黨與と議し政長を逐ひて父祖の業を復せんとす而して群議猶豫して未だ決せず會ゝ義政令を下だして嚴に結黨の事を禁ず宗全乃ち懼ばずして曰く我れ府下に在ると既に三月未だ所望を遂げず且義就を援くるを得されば何の面目ありて士籍に列せんと義就悅て曰く我れ獨り政長と勝敗を決せば所望を遂ぐるなり願くば諸將我黨の剛臆を傍觀せよと遂に兵を擧げて相抗衡す武威益々張り墓行日を追ひて甚し二月勝元義就及び宗全の橫恣を怨み謀を定めて之を滅せんと欲し兵を諸道に募る宗全之を聞きて亦た其の徒黨を聚め剛雄東四に分れて相抗衡す所在攻戰止む時なく天下大に亂る義就每に宗全の軍に從ひて政長と相戰ふ文明四年八月勝元寺を發して山崎を襲ふ九年八月河州を併せ明應二年に卒す（或は延德四年十二月に作る）寶泉寺と號す子義豐（野史）

ハタケヤマ ヨシノリ 畠山義則 姓は源氏左衛門佐と稱す修理大夫義繼（或は義總に作る）の子なり亦修理大夫と稱す能登の國主なり當時歷仁騷亂の流弊諸國に徧く部下の士溫井景隆、三宅長盛、平式部丞、長連龍及び景連、遊佐美作守等各々四方に割據し義則の命に從はず義則父之を制す時に年未だ十一月、越後に奔る子あり義隆と曰ふ（野史）

ハタケヤマ ヨシハル 畠山義春 姓は源氏能登の國主義隆の三子なり小字は彌五郎後長盛の領人畠山尙順來り國を明年正月に迄り城中泉水涸渴して頗る窮窘す時に高畠與三義英を扶けて堺浦に走る八年七月義英河州高屋城に入る後ち大永七年十月三好筑の募に應じ朝倉宗滴が擊ちて之れを破る享祿九年六月自殺す家遂に亡ぶ（野史）

ハタケヤマ ヨシムネ 畠山義統 能登の領主政國の子なり初字を二郎と稱す左衛門佐に任ぜられ修理大夫に遷る應仁の亂に初め山名宗全に黨す後ち文明四年將軍義政の命を以て細川勝元に屬す五年十二月帝領となす能登畠山氏の此の職に補せらるゝや是を始となす十二年相伴衆に列せらる義統兼て圓嚴を作る二子あり長義元字は二郎、次子義繼（或は義總に作る）封を嘗ひ左衛門佐、修理大夫に任ぜらる（野史、畠朝名書拾遺）

ハタケヤマ コヘマロ 秦許遍麻呂 天平寶龜間の人なり和歌を善くす（萬葉集作者傳歷）

ハタケ サウラウ 秦滄浪 尾張の儒者なり名は鼎字は子鈴滄浪と號す父峨眉刈谷侯に仕ふ滄浪其の教を受け明倫堂典籍と爲り教授に遷る幾くもなく罷られ優游身を終る其の學博綜古書を校正するを好む皆な後學に裨益あり文政丁亥の秋風疾を得五歲癒へず天保二年七月朔を以て殁す享年七十一校刊する所春秋左氏傳、國語、左傳周觀、左傳世族解、古詩紀、周易解、莊子因、世說新語補、韓文起、文選李善註（賦部）、詩韻含英あり一曾話を著す（尾張名家誌）

ハタケ ザウロク 秦藏六 鑄工なり姓氏詳ならず始め米藏といふ山城國愛宕郡岩屋端村の人四方龍文堂に就き鑄工術を學び和漢の古鑄器を參考し發蠟法に精し嘗て孝明天皇の勅を奉じ鑄冠鉦の御銅印を鑄造し又德川慶喜公の命を奉じ鱧鉦征夷大將軍の金印を鑄造せり明治六年宮內省の命を奉じ御璽及び國璽を鑄造せり同二十三年四月十四日殁す年八十五（大澤氏雜記、工藝遺芳）

ハタ サタノ キミ 秦酒公 秦始皇の後苟洞王の子なり曾祖を功滿王と云ふ仲哀帝八年來歸す子を賜はり以て義夏と稱し遠に政長を讐け義夏を立てゝ嫡子となす以て今名に改め伊勢守に任ぜらる（或は伊豫守に作る）既にして持國老を告げ義就其の家督を繼ぎて右衛門佐に遷る是より義就政長と隙を構へ臣屬亦た各々相分れて黨を樹て以て相爭ふ時に細川勝元、山名宗全の二氏强兵を以て政長を援く享德二年八月宗全火を縱ちて持國の家を燒く義就難を避けて遊佐國助の宅に入り遂に與に其第を燒き伊賀に奔る（或は河內に走ると爲す）後ち康正元年夏義就兵を大和に擧げて屢ゝ郡邑を侵掠し政長の黨と片岡に戰ふ是より兩黨所在相抗衡して連戰決せず是の歲十二月義就將軍義政の命に因りて京師に入り政長と和を行ふ是に於て畠山氏分れて兩派となれり長祿元年三月畠山道誕義政及び夫人薩原富子を讒し竊かに請ふに義就を以て政長に代へ總領となさんとを以て義政之を聞きて是に於て義就の徒萬歲を唱へて之を觀す政長之を聞きて悅ばず密かに猥心を挾み益々勝元に依賴す寛正元年九月義政義就を以て法令に違へるの罪ありと爲し伊勢貞親、飯尾下總守其の第に遣はして之を逐ふ義就乃ち歎じて曰く我未だ犯罪あるを覺えず浸潤の譖得て解すべからずと乃ち去て河內の若江城に入る遊佐國助遊へて之を相く義政遂に政長の家督を復し且命じて義就の職を除き政長をして之に代らしむ是より二人復た隙を構へて相ひ爭ふ是の歲十月政長出でゝ和州に軍す義就亦た遊佐彈正忠、畠田釜河入道等をして龍田の陣營を襲はしめ自ら後援を爲す然れども軍敗れ士卒多く之に死するに及び四林寺を歷て獄山城に入る是に於て政長進みて若江城を取り弘川（或は實弘寺に作る）に陣して獄山金胎寺に攻む十一月義就金胎寺を寨ゝ昔な獄山城に合して之を守る三年畿將政長等來り攻め內外相ひ持して未だ決せず四月細川、山名、佐々木、武田、北畠等の諸士軍を併せて來り攻む義就時に再び金胎寺を修めて之れに據り擊ちて大に敵兵を挫く特り山名是豐奮戰して七勝七敗雄未だ決せず是豐聲を勵まして曰く我は是れ宗全の子なり城を拔かざれば即ち去らずと衆を率ゐ殊死して戰ふ是に於て城兵勢稍々屈す義就亦た衆を鼓舞して接戰す終に決せず日沒するを以て互に兵を戢む而して諸軍又た競ひ迫るに及びて城終に陷る四年三月義就

ハタケヤマ ヨシヒデ 畠山義英（或は源義英を義宣に作る） 姓は源氏、義豐の子なり字は太郎、下總守に任ぜられ其の獄山城に居る永正四年十二月畠山尙順來り圍む明年正月に迄り城中泉水涸渴して頗る窮窘す時に高畠與三義英を扶けて堺浦に走る八年七月義英河州高屋城に入る後ち大永七年十月三好筑の募に應じ朝倉宗滴が擊ちて之れを破る享祿九年六月自殺す家遂に亡ぶ（野史）

ハタケヤマ ヨシムネ 畠山義統 能登の領主政國の子なり初字を二郎と稱す左衛門佐に任ぜられ修理大夫に遷る應仁の亂に初め山名宗全に黨す後ち文明四年將軍義政の命を以て細川勝元に屬す五年十二月帝領となす能登畠山氏の此の職に補せらるゝや是を始となす十二年相伴衆に列せらる義統兼て圓嚴を作る二子あり長義元字は二郎、次子義繼（或は義總に作る）封を嘗ひ左衛門佐、修理大夫に任ぜらる（野史、畠朝名書拾遺）

ハタケ 和歌を善くす（萬葉集作者傳歷）

ハタケ サウラウ 秦滄浪 尾張の儒者なり名は鼎字は子鈴滄浪と號す父峨眉刈谷侯に仕ふ滄浪其の教を受け明倫堂典籍と爲り教授に遷る幾くもなく罷られ優游身を終る其の學博綜古書を校正するを好む皆な後學に裨益あり文政丁亥の秋風疾を得五歲癒へず天保二年七月朔を以て殁す享年七十一校刊する所春秋左氏傳、國語、左傳周觀、左傳世族解、古詩紀、周易解、莊子因、世說新語補、韓文起、文選李善註（賦部）、詩韻含英あり一曾話を著す（尾張名家誌）

ハタケ ザウロク 秦藏六 鑄工なり姓氏詳ならず始め米藏といふ山城國愛宕郡岩屋端村の人四方龍文堂に就き鑄工術を學び和漢の古鑄器を參考し發蠟法に精し嘗て孝明天皇の勅を奉じ鑄冠鉦の御銅印を鑄造し又德川慶喜公の命を奉じ鱧鉦征夷大將軍の金印を鑄造せり明治六年宮內省の命を奉じ御璽及び國璽を鑄造せり同二十三年四月十四日殁す年八十五（大澤氏雜記、工藝遺芳）

ハタ サタノ キミ 秦酒公 秦始皇の後苟洞王の子なり曾祖を功滿王と云ふ仲哀帝八年來歸す

組、弓月君、應神帝十四年百濟より來り奏して曰く臣百二十縣の人口を以て歸化す然るに新羅に梗塞せられて皆な加羅國に留ると帝乃ち葛城襲津彦をして往きて之を召さしむ三年還らず再び平群木兎を遣し兵を率て之を召さしむ覓に弓月の人口を以て襲津彦と俱に來る弓月金銀玉帛諸珍寶を獻ず帝之を嘉し大倭朝津間拾上の地を賜て此に居らしむ酒公無量帝に事ふ帝嘗て木工闘鳥御田に敕して始て櫂閣を作る御田櫂に登る疾走飛ぶが如し伊勢采女と云ふ者あり偶〻仰ぎ視て顰ゃ仆れ捧ぐる所の御膳を覆す帝御田を疑ひ物部に付し將に之を刑せんとす酒公進に侍り琴聲を以て帝を諷す帝悟り之を釋免す是より先き秦氏分散して秦造に屬せず臣、連等恣に之を驅使す酒公時に帝に寵せらる帝爲に詔を下し其の部曲一百八十種を聚め以て領せしむ酒公乃ち之を率て鷲桑し厩縑緤を進めて殿前に充溢す因て姓を禹豆麻佐と賜ふ盈積利あるの義に取る又敕して諸秦氏をして大藏を宮側に造らしめ以て其の寶物を納る是の時始めて大藏の官員を置き酒を以て長官となす（大日本史）

ハタ　サダヤス　畑定安　海軍少尉なり宮城縣出身にして明治三十七年日露戰役に於て軍艦三笠に乘組み從軍中同年八月十日黄海に於て敵艦隊と交戰の際戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ハタ　シゲカネ　秦重遠　陸軍少尉なり廣島縣出身にして明治三十七年日露戰役に於て第四師團歩兵第三十七聯隊附として從軍中同年五月二十六日清國盛京省南山附近に於て戰死す戰功に依り勳六等功六級に叙せらる

ハタ　シゲトヨ　秦茂包、**ハダシ**　**ハチベエ**　徒跣八兵衛　江戸麴町に住し魚類を賣るを以て業とす常に市場に赴くに草鞋を穿たず故に徒跣の綽名あり性任侠にして好みて義に勇む時に淺草藏前に醉庄三と云へる者あり嘗て事を以て兼松勘右衛門を殺し脱して跡を山林に隱し後江戸に還りて市中を横行す八兵衛其の兇惡を惡みて之を除かんと欲し其の徒蟻傳右衛門と常に之を窺ふ適〻庄三に麴町六丁目に遇ふ八兵衛之と戰ふと數十合既にして傳右衛門馳せ來り共に擊ちて之を殺す事官に聞ゆ八兵衛罪の其身に及ばんことを恐れ跡を逸隊に匿す時に仁王重兵衛と云ふ者あり此事に坐して獄に下さる八兵衛之を聞き直に馳せて官に自首す官庄三の罪か推し且情狀を酌量して重兵衛と共に之を放つ（本朝俠客傳）

ハタ　シンソン　秦新村　三河赤坂の儒者なり名は惟貞貞八と稱す安部侯に仕ふ弘化二年歿す年六十八、四書直解、五經直解、大極圖說解等の著あり（諸家著述目錄）

ハタ　シンダラウ　畠信太郎　陸軍歩兵少尉なり兵庫縣の出身にして明治二十七八年戰役に於て第四師團歩兵第廿聯隊第九中隊附として出征中病に罹り廣島陸軍病院に入院し後本籍に歸り同年十月廿八日遼東半島大石橋檢疫所に於て死去す（武衛隊の其身に及ばんことを恐れ跡を逸隊に匿す時に仁王重兵衛と云ふ者あり此事に坐して獄に下さる八兵衛之を聞き直に馳せて官に自首す官庄三の罪か推し且情狀を酌量して重兵衛と共に之を放つ（本朝俠客傳）

ハタ　シンスケ　秦守節　長門の儒家なり字は貞夫局南の門人にして後才の人なり（諸家人物志）

ハタ　ショウカウ　秦松峽　儒家なり姓は松室、名は熙載字は虞臣松峽は其の號式部と稱す洛西の人なり特に學を善くす（諸家人物志）

ハダスミ　秦誦　伯耆の刀匠なり嘉元比の人なりと人或は云有包の門人にして延慶又は嘉元比の人なりと又云秦誦安友と稱する者は治安比の人なりと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考）

ハダスミザネ　畑奥實　五郎左衛門と稱す小笠原流の射禮家なり會津の人小笠原長時及良慶の京師の難を避て會津に赴くや奥實の家に居る奥實奉養の功を以て射術の奥義を授けられ遂に畑流を起す（武術流祖錄）

ハタ　セイウハ　秦星鳩　江戸の書家なり名は鐘字は伯奐通稱は源十郎星池の号なり（諸家人物志）

ハタ　セイチ　秦星池　書家なり名は其韓字は子馨、星池は其の號一に菊如齋と號す通稱は源藏江戸の人なり始め平陵に學びて孫過庭を摹す數年にして長崎に遊び來船の清人胡兆新に親み源筆の法を受く遂に古帖を摹し世に稱せらる尤も楷行に長じ遺墨天下に遍し文政六年三月八日歿す年六十一著す所崎鎗書論、星池玉屑、鄭筆眞證、封照書社、雲法帖、清風帖、巒雲帖等あり（繼諸家人物志）

ハタ　スミザネ　畑與實　五郎左衛門と稱す射禮家なり會津の人小笠原長時及良慶の京師の難を避て會津に赴くや與實の家に居る與實奉養の功を以て射術の奥義を授けられ遂に畑流を起す（武術流祖錄）

ハタ　セイウ　秦星鳩　江戸の書家なり名は鐘字は伯奐通稱は源十郎星池の号なり（諸家人物志）

ハタ　セイチ　秦星池　書家なり名は其韓字は子馨、星池は其の號一に菊如齋と號す通稱は源藏江戸の人なり始め平陵に學びて孫過庭を摹す數年にして長崎に遊び來船の清人胡兆新に親み源筆の法を受く遂に古帖を摹し世に稱せらる尤も楷行に長じ遺墨天下に遍し文政六年三月八日歿す年六十一著す所崎鎗書論、星池玉屑、鄭筆眞證、封照書社、雲法帖、清風帖、巒雲帖等あり（繼諸家人物志）

ハタ　ソウハ　秦宗巴　有名の醫師なり字は德岩、一字は立安、山城の人、幼より敏捷人に超す郷人連歌の會を爲す宗巴之が執筆たり時に年八歲已に長じて醫を吉田宗桂の門に學ぶ宗桂其才を奇とし待つに門生を以てせず謂て曰く我が術以て子が師となるに足らず宜しく廣く其師を擇び以て其の造詣する所を極むべしと宗巴是に於て曲直瀬正慶に就きて醫方の要を問ふ素雖及び張劉諸家の書は熟せざるなし正慶妻すに已れが女を以て聖馨益〻著はる加州侯聞て面體を悉ふ醫診して瘡毒とす之を治して驗なし乃ち宗巴を招く宗巴曰く是れ瘡毒に非ず邪氣の惑變する所にして傷寒の類のみと其の治を爲す數日にして癒ゆ業より宗巴の術を賞ずるものあり平時と雖ども毎に診視を請ふ一日診し畢りて曰く子の命恐くは來歲を過ぎざらんと其の人信ぜず明年の秋に至り果たして死す宗巴初め豐臣秀次に仕ふ秀次爲めに奏して法印に叙し誕命院と賜ふ慶長五年德川家康京師に在り左右を宗巴の家に遣はして其の起居を訪ひしむ尋で命じて侍醫と爲す宗巴聞て海に航し明に入るの志あり上言して曰く醫治の術む所は唯〻良藥のみ然れども四土の藥物一に齒齒の產す所に漂る其の眞僞固より知るに由なし之を以て疾病に應ず豈危からずや願くは官書を賜ひ使を明國に奉じ其の良醫に就きて醫間講論せば則ち唯親ら藥品を驗するのみならず亦將に得る所あらんとす家康其の志を嘉みす然れども他故ありて許さず宗巴文學を好み博く典籍に涉る當時馬氏の紫問能く講ずるものなし宗巴始めて之を講ず聽くもの常に數百人あり著はす所素問法抄、醫學的要方、鍼灸參伍的方、炮炙評鑑、本草序例抄、徒然草抄、一炷煙等あり（皇國名醫傳）

ハタ　タケモト　秦武元　世々侯御たり少にして仁和寺の沙門に事へて童役と爲る其の師高野山に入りて一百日護摩を修す武元平旦に閼伽水を汲みて一日も怠らず冠するに及びて其の父家業を授く嘗て太上皇の御と爲る性田鹿を好む一旦好む所を棄て佛乘に歸す上皇高野に幸す武元陪す夜夢みらく高餙身垢を捏りて丸と爲し武元に授く武元手を展べ之を受けて曰く師なぜ誰とか爲す答て曰く我は是れ弘法大師なり昔日汝閼伽水を給す其の賞甚だ勃む故を以て我汝僧むのみと覺めて後ち手中に一顆の玉あり武元感激に堪へ

ず上皇都に還る即ち此の事を奏し殯葬して道を修す又た堂宇を建て丈六の阿彌陀の像を安んじ朝暮に禮供し無礼て講席を設く承德二年八月小恙に嬰る臨終に要子を斥せ比丘に仲ひて跏趺念佛し晏然として逝す（元亨釋書）

ハタ　タマロ　秦田麻呂　和歌を善くするを以て天平中其の名を知らる詠歌は敕せて萬葉集に在り（萬葉集作者履歷）

ハタ　チクタン　秦竹探　大阪の書家なり名は茂包、竹探又忘筌堂と號す享保十五年正月八日歿す年五十八書法一家を成し其の要も亦書を能くす（書體便覽）

ハタ　ヂサク　畑治作　陸軍歩兵少尉なり新潟縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て鴨綠江より召集され第二師團歩兵第十六聯隊附として從軍中卅八年三月十日清國盛京省葛布街附近戰鬪の際負傷同日葛布街假繃帶所に於て死去す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ハタ　チョウカウ　秦澄江　俳人なり常陸國龍ケ崎の人明治七百題の撰あり明治十五年十二月十一日歿す（三森松江氏寄）

ハタ　ツナヂ　秦綱手　小錦下に位す天武帝の八年卒す壬申の功を以て大錦上を贈らる（大日本史）

ハタ　トキヨシ　畑時能　大郎左衛門と稱す武藏の人なり體貌雄偉志氣壯烈にして謀略に長じ多力善く泗を擊劍騎射精妙ならざるなし戰ふごとに未だ嘗て敗れず年甫めて十六角力を好む坂東に敵する者なし後信濃に家し强を以て生となす建武の初め新田義貞の義を唱ふ時能從ひて力戰す又脇屋義助に從ひて船坂山を攻めて之れを拔く義貞杣山城に據る時能加賀の人駿地、山岸、上木氏等を以て細呂木に城き出て津葉清文を大聖寺に擊ちて之を破り遂に加賀越前を略して義貞の爲めに擊ちて之を破り遂に加賀越前を略して義貞の爲めに擊ちて之を破り遂に加賀越前を略して義貞戰死するに及びて義助時能を以て越前湊城を保たしむ衆僅かに二十三人死を矢ひて固く守る北陸の兵之を攻む年を歷て拔く能はず會〻義助足利高經を足羽に攻めんと欲し檄を諸將に移して同時に兵を發せしむ時能兵三百を招集し攻めて金津金碕河合河口等の地を略し城十二か降り首を斬ると八百級過ぐる所殆んど遺類なし是に於て河合種繩來り降る時能其の衆を合して即夜に足羽に赴き山下に繰りて城背に出で發喊連射す高經懼れて城を棄て逃る已にして敵又大衆を發して杣山を攻む義助越前に敗走し加賀能登若狹迫中の官軍守を失ふ唯〻時能二十七人を率て鷹巣城を守る一井氏政亦來り會す高經及高師治北陸道の兵七千人に將として之を攻む鷹巣城峻嶮にして驟に上る能はず乃ち城に對して三十七壘を作り城を仰ぎて攻戰日夜休まず時能の嫡曾快舜家僮惡八郎爲輔皆な驍勇善く戰ふ曾快舜家僮惡八郎爲輔皆な驍勇善く戰ふ犬あり犬獅子と名く騎長鑿捷能く人意を解す時能快舜爲輔を率ゐ夜に乘じて城を出づ先づ犬を遣はして敵の動止を覘はしむ敵備あれば即ち犬一吠して出づ備なければ即ち時能に向て尾を掉る三人犬の尾を掉るを見乃ち隨て壘に入り叫呼奮擊其の不意に出づ敵甲仗を棄て走る時能每夜術を易へ遍く諸壘を襲ふ敵ら恐れ時に上木密に酒糧を餉して請て其の壘を襲ふ敵ら恐れ時に上木家光叛して高經の軍に在り軍中流言す家光粟數百石を輸して畑の内應をなすと又高經の營に榜するものあり曰く畑を打んと欲せば先づ上木を斫れと高經の將士感疑ふ家光悲り耻づ一日黎明家族二百餘人を率ゐ楯を擁して直進す諸軍謂ふ彼れ畑の情を知る今急に城を攻陷れん彼を以て功を專にせしむ勿れと躍て登ると雖も城中寂として人聲なし衆甚だ之を怪む兵已に城に迫る時能乃ち快舜及爲輔、勉澤源藏人、長尾新左衛門、兒玉五郎左衛門を將ゐ大呼して拔隊して一番に槃を爲輔殺す傷創を槃る者又勝して計ふ可らず時能機に乘じて進む縱橫奮擊殺傷甚だ多し高經引卻きて復來り戰はず時能意謂く今久く相持すると雖も能は謀の良きものに非ず更に奇を出だして敵を誘ひ以て勝敗の在る所を決せんのみと因て一井氏政留て城を守らしめ身兵十六人を簡み夜伊地上に登りて中黑の旗を揭げ以て敵の至るを候ふ高經之を聞き謂らく是れ豐原平泉寺の僧徒來りて官軍を援くるなりと親寺の僧徒來りて官軍を援くるなりと親ら騎三千に將として急に攻む時能乃ち盛に鎧馬を飾り自呼して曰く畑將來れり請ふ尼張守に面尖刀を揮ひ大呼して曰く畑將來れり請ふ尼張守に面尖刀を揮ひ大呼して曰く畑將來れり請ふ尼張守に面せんと敵陣悚動す時能左右十六人と驍勝鏖戰す高經軍敗れ川を渉りて走る時能其の兵を聚るに五人を亡ふ餘は感な重く傷く快舜七創を被り奪て死す時能亦數創を被る流矢肩に中る鏃出る能はず三日にして死す是より北方の官軍復た振はず（大日本史）

ハタ　トクリン　秦德隣　德川幕府の醫なり字は有室、阪淨慶の子、宗巴乞て嗣となす家光の時特に德隣及び直曲瀬親純に命じて諸醫の長とす德隣既に貴く而して其の治術尤も貧者に急にす當世之を高とす宮城丹波守傷寒を患ふ醫以て陽證とし之を治す病益〻劇し或は以て陰證とす爭論決ぜず德隣診して曰く是れ陰陽共に不足の證なりと乃ち藥を與へて痊ゆ其術概れ斯の如し著はす所善從老鑑草等あり（皇國名醫傳）

ハタ　トモタリ　秦友足　壬申の亂に兵に將として村國男依と戰ひ敗死す（大日本史）

ハタ　トモフサ　秦友房　金工なり勘平と稱し父を勘七と曰ふ作州津山の人なり堆朱彫其外木彫の目貫小刀柄の類を作るに秀で又塗師に巧みなり（裝劍奇賞）

ハタナカ　キゼン　畠中喜善　陸軍一等軍醫なり宮城縣出身にして明治卅七八年日露戰役に於て後備役より召集せられ第二師團野戰病院附として從軍中急症に罹り卅八年八月一日清國盛京省南沙河堡第舍營病院に於て死去す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ハタナカ　グワンサイ　畠中觀齋　京師の人なり狂詩に名あり名は正盈歡齋と號す字はれむる緯名を銅脈と呼ぶ通稱は頼母と云ふ蜀山人同時の人享和元年六月二日歿す

ハタナカ　セイガク　畠中西嶽　書家なり名は景字は介藏靜齋と號し又夏竹と號す俗稱介藏四谷北伊賀町に住せり文化年間の人（諸家人名錄）

ハタナカ　セイザン　畑中西山　畫工なり名は好字は子德竹醉と號し又竹石と號す俗稱圭之介書家西撝の子四谷北伊賀町に住せり文化年間の人（諸家人名錄）

ハタナカ　タチュウ　畑中太冲　荷澤と號す仙臺藩の人なり嘗て藩主伊達侯に從ひて江戸に如く始めて井上金峨に訪ふ金峨適〻友侯を會して書を說く太冲を以て別室に坐せしむ太冲偷かに其の講說を聽き時々呼び曰く先生誤れりと一日藩生君平來り名刺を通

ず太冲人をして一室に延き坐せしむ然る後端坐す障を開きて之を見る僕炤猶君臣の禮のごとし乃ち謂て曰く汝は是れ蒲生君平かと君平覺えず稽首す太冲曰く汝の來る所以は經義を質問せむ爲か汝我が面貌を見むと爲めかと君平應へて曰く大名を欽慕し特に來り拜謁するのみと太冲君平に向ひて烟を吹く數管謂て曰く汝吾が所貌を見む爲に來ると則ち予既に汝をして縱觀を得せしむ汝宜に疾く歸るべしと乃ち障を閉て入る君平茫然自失して去る太冲初め林子平と親み善し子平時に海國兵談を著し太冲に序を乞ふ太冲固辭して曰く是れ誇書なり予敢てせずと子平慄びず竟に躊躇ありと云ふ（新編先哲叢談）

ハダノ サカキ 羽田野榮木 國學者なり三河國渥美郡の人羽田の里なる神明社の嘶の兩宮に仕へて神官たり初め通稱常陸と稱せり名を敎雄といひ文政十年七月平田篤胤の門に入り學事を勉め名を遠近に揚げ衆庶その篤行を信じたり庭中に文庫を造り書を藏む花田文庫と號す其の數二千五百十五部卷數一萬三百十七卷あり明治元年十二月鼎學所御用係を命ぜられ尊て講官となりまた宣敎の事に勉め六年十月權大講職となり十四年十二月權少敎正に補せられ十五年六月一日行年八十二にて病歿す（小傳）

ハダノ タダマサ 波多野尹政 舊小田藩士にして幼時廟瀬藩陪臣波多野勇次の後を嗣ぐ維新の際勤王藩に投じて奔走したり常に羅紗の原料たる羊毛の本邦に乏きを慨し明治六年内務卿大久保利通に謀られ我國牧羊の嚆矢なり又宮内省權少書記官を拜命せり十九年職を辭してより父敎育事業に盡瘁して其績あり三十四年四谷銀行を創立して其頭取となる四十年九月二十七日六十三歳にて病歿す

ハダノ デンサブラウ 波多野傳三郎 安政三年八月二十二日を以て越後國古志郡長岡町觀光院町に生れ父を前田繁左衛門と云ふ夙に漢籍を藩校成章黨に學び英學を長岡學校に修む明治七年笈を負ふて東京に出で共立學舍に入り尺振八に就て英學を攻め次て同舍に教鞭を執り十二年師病に罹るや遂に舍長となる十三年文部省に職を奉じ十四年國會開設の遲迫に關して廟議二派に分れ大隈重信河野敦錄前島密等冠を挂くるや僚三郎赤職を辭し以來嗯鳴社員として改進黨員となり其年新聞社に入りて會計を監督し二十一年新潟縣會議員に當選し二十四年松方大隈兩伯の聯立内閣組織せらるゝや區井縣知事に任じ正五位に叙せらる同内閣瓦解して大隈伯野に下るや亦職を辭す三十一年憲政黨内閣の成立するや自由進歩兩黨の合同を鞏固にする爲め同黨員に讃り韓將李舜臣と碧波亭下に戰ふ舜臣砲を十二艘に乘せ潮流に乘じて來る我兵不意に擊に遇ひ且つ流れに逆り進退便ならず舜臣機を見て急に火銃を縱つ我軍終に亂る信時戰て死す船中七十五人皆な殲く（野史）

ハタノ ノブヨシ 秦信慶 伊勢の和學者にして神代卷風俗抄、御鎭座次第紀抄、儀姫命世紀抄、外宮引付等の著あり貞享頃の人

ハダノ ムネナガ 波多野宗長 秀治の支族なり主殿頭と稱す子宗貞美作守と稱す氷上丹波の城主となる天正七年五月羽柴秀長來り攻む宗貞性驍勇自ら進みて敵を擊ち加藤嘉明脇坂安治等と接戰す士卒多く死す退きて八幡山に次す秀長來り攻む宗貞又退て氷上に入る十九日秀長久下を攻む守將宗貞戰ひ敵の爲に圍まれ城に入て自殺す久下陷る秀長使を氷上に遣り降を勸む宗長使を斃し之を城下に送り而して自殺す城寛に陷る（野史）

ハダノ ノリヨ 羽田敎雄「ハダノサカキ」陸奥の刀匠にして元暦年間の人（古今鍛冶銘早見出）

ハタ フヂヨシ 畑藤義 陸軍砲兵中尉なり福岡縣出身にして明治三十七年日露戰役起るや野戰砲兵第十聯隊附として出征中病に罹り同年九月四日清國盛京省石門嶺兵站病院に於て死去す

ハタ ムネザネ 秦致眞 藝家なり太子傳の繪を和州法隆寺の壁に畫く而して後ち製して屏風二雙となす傳へ曰ふ壓は世尊寺伊經朝臣なりと案ずるに往年屋代輪池寺に到りて之を見るに書跡頗る古く時代して廟議に分れ大隈重信河野敦錄前島密等冠を挂くるや僚三郎赤職を辭し以來嗯鳴社員として改進黨員となり且つ爲に國會開設の遲迫に關して東奔西走し又毎日新聞社に入りて會計を監督し筆硯に從事せり二十一年新潟縣會議員に當選し二十四年松方大隈兩伯の聯立内閣組織せらるゝや區井縣知事に任じ正五位に叙せらる同内閣瓦解して大隈伯野に下るや亦職を辭す三十一年憲政黨内閣の成立するや自由進歩兩黨の合同を鞏固にする爲め同黨員に讃り韓將李舜臣と碧波亭下に戰ふ舜臣砲を十二艘に乘せ潮流に乘じて來る我兵不意に擊に遇ひ且つ流れに逆り進退便ならず舜臣機を見て急に火銃を縱つ我軍終に亂る信時戰て死す船中七十五人皆な殲く（野史）

ハタ ノブトキ 波多信時 三河守と稱す肥前唐津の城主なり征明の役起るに及び海を渡りて佞懦なり文祿二年五月太閤秀吉之を怒り邑を奪て放逐す慶長二年再び役起る信時前驅を當がんと欲し死を決して小四行長の一隊中に隸し韓將李舜臣と碧波亭下に戰ふ舜臣砲を十二艘に乘せ潮流に乘じて來る我兵不意に擊に遇ひ且つ流れに逆り進退便ならず舜臣機を見て急に火銃を縱つ我軍終に亂る信時戰て死す船中七十五人皆な殲く（野史）

ハダノ ヒデハル 波多野秀治 姓は藤原なり其先は鎭守府將軍秀郷に出づ其玄孫經範始て波多野と稱す元弘建武より以來波多野氏は赤井、久下、長澤と剿據權を爭ふ應仁の後波多野氏最も顯る遂に三氏服して一州を保有す宗家は八上城に居り四波多野と稱す秀治初の名は千熊丸實は因州の一族清秀（清秀太閤記に左衛門尉と稱す）の子なり宗家元秀に亟て嗣なしと秀治繼ぐ秀行に作る）の子なり宗家元秀に亟て嗣なしと秀治繼ぐ左衛門大夫と稱す八上城に居る弟秀尙遠江守と稱し龜山城に居る織田信長秀治等を招く一族從はず毛利氏に通ず天正三年明智光秀來り攻む秀治槊ぎ守る五年冬龜山陷り秀尙走る七年二月羽柴秀長丹羽長秀頴り攻む秀治の族宗長城を陷る秀長使を氷上城に遣し降を勸む秀治の族宗長城を降す光秀怒り止りて八上に薄る秀治秀尙堅く守りて果月拔け難し秀治使を城中に遣し且礪し且諭し盟書を送り降を勸む兄弟應ず光秀母を送り質となす兄弟始て許諾す六月二日城を出で光秀を見んと欲す光秀兵を途に伏せ兄弟を擒にす且僞計を設け母を奪はんと欲す城兵兄弟の歸らざるを以て且殺す光秀人を宗士に遣し兄弟を宥さんとか請ふ許されず佐久間信盛遂に兄弟を懲恩寺に斬殺す城中讙て悲り光秀の將を擒き光秀為に且つ怒りて其の母を鎗す光秀悅び其の報を待つ城兵母を櫃上に挾み二人の兵其の脇を執り逆に之を釣り以て其の體を寸斷す光秀火の如くに忿り急に城を攻め之に拔く城兵悉く死す光秀怒猶解けず痛憤に至るまで之れを寸斷すと云ふ（野史）

ハタ ノブトキ 波多信時 三河守と稱す肥前唐津の城主なり征明の役起るに及び海を渡りて佞懦なり文祿二年五月太閤秀吉之を怒り邑を奪て放逐す慶長二年再び役起る信時前驅を當がんと欲し死を決して小四行長の一隊中に隸し韓將李舜臣と碧波亭下に戰ふ舜臣砲を十二艘に乘せ潮流に乘じて來る我兵不意に擊に遇ひ且つ流れに逆り進退便ならず舜臣機を見て急に火銃を縱つ我軍終に亂る信時戰て死す船中七十五人皆な殲く（野史）

亦應ぜず當に是れ伊房卿の筆なるべし（本朝書史）

ハタ ヤチシマ 秦八千島 和歌を善くす和歌は載せて萬葉集に在り（萬葉集作者履歷）

ハダ ヤツクニ 羽田八國 壬申の亂に弘文帝の將たり而して子大人と族を率ゐて天武帝に降る斧鉞を賜ひ將軍に任じ北越の地を定む位大錦下に叙せらる十一年詔を奉じて諸國の封彊を定む大辨に轉じ直大壹に位す朱鳥元年疾あり帝爲めに三僧を度す卒後直大壹を贈らる（大日本史）

ハタ ヤヘイ 畑彌平 勤王の志士なり諱は以義水戸藩士なり初め金子孫二郎に從ひ奔走して雪寃の事に盡力し後田丸稻之衛門の群に入り姓名を小栗彌市と改め武功を以て稱せらる元治元年水戸甲子の亂に正義派に屬して幕兵と戰ひしが事敗れて後加賀に遁れ翌慶應元年同志と共に斃賀に斬らる年四十六明治四十年五月朝廷其忠志を追賞して特に正五位を贈らる（殉難錄稿）

ハダヤマ マタヨ 畑山全男 陸軍步兵大尉なり高知縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て第十師團步兵第十聯隊附として從軍中卅八年三月五日清國盛京省柳匠屯に於て戰死す戰功に依り勳五等功五級に叙せらる

ハタ ヨキチ 畑與吉 陸軍步兵少尉なり石川縣出身にして明治三十七八年日露戰役に際し後備役より召集せられ後備步兵第五十七聯隊附として從軍中卅八年三月八日清國盛京省大小方士屯附近に於て戰死す戰功に依り勳七等功七級に叙せらる

ハタ ランテイ 秦蘭汀 江戸の儒者なり名は郁、別號は半月齋字は士芳

ハタ リウアン 畑柳安 御醫なり名は惟和字は厚生柳安は其の通稱、黃山と號す平安の人、本姓は安藤幼にして讀書を好む嘗て群兒と樂を共にす群兒或な其の指導を聽く醫官畑柳景見て之を奇とし乞ひて己の嗣と爲す延享の初め法橋に叙せらる御醫と爲り法眼に進む天明元年尙藥に任じ法印に叙せらる顯步を以て特に殿上杖を許し號を醫學院と賜ふ柳安悅て曰く余醫官か恭うー切りに脊寵を蒙り此の榮號を受く今にして後進か誘掖し以て濟生に供せずんば以て國恩に報ずる無しと是に於て書院を營造し麗く生徒を納れ躬自ら勸勵を以て之を率ゆ病客門に滿るも未だ嘗て一日も謬說を廢ぜず最も心を長洲氏の書に用ひ大に見解あり弟子籍に著くもの二千人嘗て生徒の爲に學範を著す見識深粹議論確實なりと云ふ性謹慎其の尙藥たりしとき京師に災あり乘輿遷幸す柳安行宮に宿直す三年退て家人と語るに未だ嘗て富禁の事に及ばず少壯にして博く方書を記す每夜暗誦數十條暁に就く老に至りて變ぜず文化元年五月二十六日歿す年八十四著はす所學範の外に斥醫談、辨溫疫論等あり（皇國名醫傳、續近世叢語）

ハタ リウキヨウ 畑柳恭 京師の御醫なり名は維禎、字は世吉、播洲と號す法眼に叙せらる醫を以て大に行はる又詩文を善くして頗る世に稱譽せらる天保三年四月十日歿す年六十二（鑒定便覽）

ハタ リウケイ 畑柳敬 京師の儒者なり名は維龍、鶴山と號す通稱勘解由、柳安の義子、儒を以て業とし時に行はる文政十年十月八日歿す年八十（鑒定便覽）

ハダ ロクサブラウ 羽太錄三郎 陸軍步兵少尉なり栃木縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て第三師團步兵第三十四聯隊附として從軍中三十七年八月三十一日遼陽附近に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ハタ ヰ バンリウ 畑井蟠龍 黑石藩の儒者にして名は常武、通稱多仲、陸奥國小湊村の產幼に究す既にして野邊地村野村漬民に從ひ漢學を修む又私塾を小湊に開く天保三年黑石に移り藩邸學校の敎授たり旁尋で代官に任じ十年江戸に上り藩邸學校の敎授に任じ弘化四年を伐つ韓艨艟を整へ來り歸る嘉永三年正月十一日歿す年五十二蟠再び小湊村へ歸る嘉永三年黑石に移り藩邸學校の敎授に任じ十三年藩の參政に任じ弘化四年龍天資溫厚、品行格勤、朱子學を崇び博く經史に涉り又文章詩歌に巧なりき（日本敎育史資料）

ハダ ヲタル 波多少足 波多入代宿禰の後なり天武帝の十三年姓臣を更めて朝臣と賜ふ和歌を善くす詠歌は載せて萬葉集に在り（萬葉集作者履歷）

ハチガタ 八岳「アヲキシユクヤ」

ハチカヒノ オトド 蜂飼の大臣「フヂハラムネスケ」

ハチザウ 八藏 もと朝鮮の韋登の人なり慶長年中征韓の師還るに及び黑田長政に從ひて歸化し更名して八藏といふ筑前國高取に於て陶器を製造す高取燒の祖なり寛永年間長政の子忠之八藏井に其の子八郎右衛門に命じ點茶家の宗匠小堀政一が家に遣はし茶器を製するの指敎を受けしむ既にして八藏八郎右衛門本國に歸り工巧大に進歩す其の陶質は緻密にして其釉は白色淡碧または暗灰色を帶びまた青黑のもあり並に潤澤あり陶窯火候の度によりて自から金色を纏し亟て美なり世にこれを遠州高取といふ遠州は小堀政一の官名なるを以て名と爲すなり（工藝志料）

ハチスカ イヘマサ 蜂須賀家政 正勝の子なり小字は小六、信長及び秀吉に仕ふ天正四年長篠の役に從ひて首級を獲たり六年秀吉大に播州姬路に築て來屬せざる者を伐つ播州廣瀨の城主宇野某城を驚て、走る家政これを追擊し其の驚重清を誠す秀吉乃ち夏焉を賜ひて其の功を賞す後ち青龍寺及び曉嶽の役に從ひ皆な軍功あり天正十二年秀吉紀伊の土寇を征し中村一氏を以て岸和田城を守らしむるや土寇蜂起して城に迫る家政乃ち一氏を援けて土寇と戰ひ終に之に克つ秀吉其の功を賞し細目利平の邑三千石を賜ふ十三年秀吉四國を征服して家政を阿波に封ず家政乃ち德島に治す家政の封を受けて阿波に徙るや國人悅服し恰も市に歸するが如し家政撫するに慈愛を以てし國人を分ちて三等となす曰く山士曰く民曰く賤士を以て上とし國人を伐つ韓艨艟を整へ來り歸る嘉永三年正月十一日歿す年五十二蟠再び小湊村へ歸る嘉永三年黑石に移り藩邸學校の敎授に任じ十三年藩の參政に任じ弘化四年龍天資溫厚、品行格勤、朱子學を崇び博く經史に涉り又文章詩歌に巧なりき（日本敎育史資料）

ハチスカ マサカツ 蜂須賀正勝 正利の子なり姓は源氏足利高經の後にして尾張の人なり正勝初め小六と呼び後ち彥右衛門と稱す大山城主織田信

清に屬す犬山城其國人の反亂によりて陷れらるゝや正勝奮戰して之を復す又た岩倉城主織田信賢に屬し後ち去りて美濃に往き齋藤道三に仕ふ皆な功あり永祿の初年織田信長に仕へて桶狹間の役に從ひ一騎を斬り一人を虜にす七年信長の齋藤龍興と稻葉山に戰ふや正勝又軍に從ひて功あり元龜元年秀吉に屬して偉功を樹つ天正元年秀吉勢州長島の田を以て正勝に授く三年大阪樋岸の戰に功あるを以て信長有紋の革外袍を賜ふ四年秀吉別所氏と播磨に戰ふ正勝奪兵を率ゐて百餘の敵兵を擊破し最も功あり秀吉乃ち邑五千石を賜ひ之を賞す七年幕府の第に火起る衆疑ひ叛者の所爲となし赴き鎮むるもなし獨り正勝之に赴き遠に能く之れを滅す將軍義昭其の功を賞して章服を賜ひ且つ桐記號を聽す信長蜂須賀の田及び三淵郷を賜ふ九年秀吉龍野城を賜ふ十一年丹波、河内の田五千石を加賜す十三年羽柴秀長に從ひ四國を征伐して凱旋し從五位下に叙し修理大夫に任ぜらる十三年五月卒す時に年六十一法名良豎淨張禪菜寺と號す子あり家政と曰ふ（野史）

ハチスカ　ヤマシロ　蜂須賀山城　松平阿波守忠英の家臣なり天草の役に板倉重昌監軍となりて兵を出だす四國中國の諸牧各〻船艦を出して之を護送す時に忠英江戸に在り居守の家臣相議して曰く戰船の數は國に定制あり數を盡して之を用ふるが若きは変番警備の道に非ず其の數を中分し半を以て護送し半を以て不虞に備へんと山城獨り異論に悖り數ゝ盡して之を出し以て監軍を送る艦船壯麗にして旌旗林立し阿波より播津に至る海上數百里殆んど戰船尾を銜むの勢あり見る者其の衆多に驚く既にして賊城堅固官軍拔く能はず是に因りて松平伊豆守信綱再び兵を肥前に發す時に阿波の家臣其の初めに儆ひて悉く其の船を出さんと欲す山城可かずして曰く事同うして理異なり初め數を盡して戰船を出す者は竊かに知る烏合の賊彈丸の城に據る四州諸侯軍を出さば必ず日ならずして樣滅し四國中國の軍は再び轉ず可らず且時西風の候に屬す錨帆必ら速やかならんと是を以て數を擧げて之を出し以て國威を外邦に示すのみ今賊壘孤立にして四軍力屈し之を久うして拔けず必ず謂はん四國中國の兵ありと若し船を出し未だ歸らざるに羽檄頓かに至らば何を以てか之に應ぜん水國は船を以て馬となすなり船なくんば決して軍を外邦に出す可からず他時廣を疇むとも後悔何の益かあらん一船一隻と雖ども切に之を出すを禁ぜんと衆之に從ふ山城人を聽せて忠英に江戸に告ぐ忠英以聞す幕府甚だ賞して其の忠に因て兵を知るを嘆ず（事實文編）

ハチスカ　ヨシシゲ　蜂須賀至鎭　家政の長子なり本の名は豐雄又た忠吉、小字を千松丸と稱す時に年甫て八歲慶長四年冬疱瘡に罹し文祿二年長門守

力士なり淡路國志津木の鹽製造業漁業大空業の次男にして幼名を由蔵と呼ぶ夙に力士たらんと欲し單身大阪に出て年寄小野川の門に入り司天龍と稱せり明治十二年一月東京力士となり同五月幕内に入り程なく薯德島藩主蜂須賀侯の抱力士となり十五年一月關脇に進み大鳴門と改め二十三年四方大關に進みて直に退隱し年寄八角の名を襲ぎて東京相撲協會檢査員となり爾來專ら弟子の養成に勢めたり四十一年一月十五日病を以て逝く年五十六算數に長じ天候の變を觀ること敏く年寄となりし後は米相場に手を出し連勝して數萬圓を儲けたりと云ふ

ハツキテイ　八龜亭「クワサンキンナルノリ」

ハツキミ　初君　越後寺泊驛の遊女なり亞相藤原爲兼（或は云ふ爲教）故あり佐渡に遷され纔を此浦に掛く初君和歌を詠じて之に寄せ逆め歸期を祝して曰く「ものおもひこし路の浦の白浪も立かへるならひ有れとこそきけ」爲教歌に遇ふて後ち勅を奉じて玉葉集を撰す其の詠を採りて集に入る里人胥謂し碑を建て其の事を記して不朽に垂ると云ふ（初君遺跡之碑）

ハツケイエン　ヨリヨシ　八景園折芳　狂歌を以て名あり姓は平、久間氏にして名は盛光幼名を金五郎と云ふ安永四年十二月廿五日を以て江戸牛込細工町に生る家世々德川氏に仕へ小十人たり父は久間喜兵衛と稱して御勘定役留物方を勤む折好好みて軍學兵書を講じ又文學を好み傍ら狂歌を能くせり當時雅人と謀りて石山連の一社を起し自ら棟梁たり曾て小石川善仁寺本堂（當時善仁寺の僧侶皆門弟なり）に狂歌百物語會を催し友を會し最も盛なりしと云ふ天保十四年小十人組頭に登用せられ少しく憚る所あるを以て石山連第に出づ爾後多く留に讓り後ち改て磯連と稱す名あり門多し七十九歳にて仕を辭す勤續の賞として黄金二枚を拜領す以後月花を賞し專ら狂歌を事とし安政五年十二月廿日病なくして死す年八十四「梅が香や郡界の川向ふ」小日向臺町曹洞宗清嚴寺に葬る（古今狂歌人物誌）

ハツサウ　八巣「セウウ」

ハツセ　アサクラノ　ミヤニ　アメノシタシロシメス　テンワウ　初瀬朝倉宮御宇天皇「ユウリャクテンワウ」

ハツセ　ナミキノ　ミヤニ　アメノシタシロシメス　テンワウ　泊瀬列城宮御宇天皇「ブレツテンワウ」

ハツセベノ　シュンテンワウ　泊瀬部天皇「スシュンテンワウ」

ハツセンダウ　八仙堂「イバラキヒヤクセン」

ハツセンバウ　八千坊「リウビ」

ハツセンバウ　八千坊「ヨクテウ」

ハツセンバウ　八千坊「シヤボツ」

ハツセンバウ　八千坊「ゴチクアンボクセン」

クワヤウ　八田華陽　儒者なり名は鎔字は靖民華陽は其の號なり大二郎と稱す三河の人抗厲にして世と交らず終身窮著に僻處し葆光自晦す然れども其學を信ずる者多し曾て淺草觀音の境内に儒居すること十八年或人談話のとき問ひて云く先生觀音の境内に儒居す定めて境内の事を熟知せん境内に餅を商ふ店ありて金龍山淺艸餅と云ふ其の名世の知る所なれども小人未だ之に立寄りしことなし何の邊にありやと問ふ華陽これを知らず亦た淺艸餅の名だにも知らず曾て日く吾今始めて聞くと其の世事に疎きこと總て此の如し然れども經說に於ては有用割切のこと多し文政の初年七十餘にして歿す著す所周易說疏、書經解疏、詩經古義解、學庸記、論孟解疏、三禮一家言、華陽文章、童の古義解、學庸記、論孟解疏、三禮一家言、華陽文章、童のしるべ等あり（續諸家人物志）

ハツタ　コシウ　八田古秀　畫家なり字は金峨學びて江戸に住す其實質實にして浮華を好まず終身窮著に僻處し葆光自晦す然れども其學を信ずる者多し曾て淺草觀音の境内に儒居すること十八年或人談話のとき問ひて云く先生觀音の境内に儒居す定めて境内の事を熟知せん境内に餅を商ふ店ありて金龍山淺艸餅と云ふ其の名世の知る所なれども小人未だ之に立寄りしことなし何の邊にありやと問ふ華陽これを知らず亦た淺艸餅の名だにも知らず曾て日く吾今始めて聞くと其の世事に疎きこと總て此の如し然れども經說に於ては有用割切のこと多し文政の初年七十餘にして歿す著す所周易說疏、書經解疏、詩經古義解、學庸記、論孟解疏、三禮一家言、華陽文章、童の古義解、學庸記、論孟解疏、三禮一家言、華陽文章、童のしるべ等あり（續諸家人物志）

ハツタ　トモイヘ　八田知家　姓は藤原、家の子なり筑後六郎と稱す和田の亂に足利義氏を擊て之を破る後鳥羽上皇に仕へて左衛門尉に任ぜられ西國を守らしめ親悴する所の刀を賜ひて之を勵ます軍敗る武如し然れども經說に於ては有用割切のこと多し文政の初年七十餘にして歿す著す所周易說疏、書經解疏、詩經古義解、學庸記、論孟解疏、三禮一家言、華陽文章、童のしるべ等あり（續諸家人物志）

ハツタ　トモヒサ　八田知尙　左衛門尉知家の子なり筑後六郎と稱す和田の亂に足利義氏を擊て之を破る後鳥羽上皇に仕へて左衛門尉に任ぜられ西國を守らしめ親悴する所の刀を賜ひて之を勵ます軍敗る武田信隆の爲めに追及せらる知尙返戰して賜ふ所の刀を抽き信隆の馬の首を斷ち脫して其師に歸り又出でゝ宇治橋を守り藤原朝俊と共に戰死す（大日本史）

ハツタ　ノリアキ　八田憲章　字は子漢備前岡山の人其先知家は源頼朝に仕へて武功あり世々名臣と稱す高祖掃部正久を生む勢より攝に來り贄を備前侯に委れ武功を以て得秩二千石を食む久治を生む復た武功を以て名を得秩二千石を食む久治を生む復た武功を以て名を得秩二千石を食む久治を生む復た武曰ふ宗久長與を生む長與四子あり其季を憲章となす憲章幼より敏捷にして强記人に絕す長與好みて禪を談ず憲章纔かに數歲傍聽して試みに客に代りて對す其の意の欲する所の如く出づ東林精舍に僧秀雲と云ふ者ありて別に東海道將帥と爲し常陸下總の兵を率ゐて逢隈河に會せしむ戰ひて功あり承久元年頼朝將に京師に朝せんとす諸將悉く會す知家未だ至らず頼朝之が爲に發せず午に及びて乃ち至る頼朝之を讓む知家謝して曰く前驅後隊は何人に命ずる頼朝曰く前驅は已に畠山重忠に命ず後隊は未だ其の人を得ずと知家天皇樂胤に命ぜんことを請ふ頼朝之に從ひ乃ち發す其の親任せらるゝこと此くの如し知家の邑多氣義幹の邑と界を接し爭ひて相恐む會ゝ頼朝富士野に獵す曾我祐成兄弟父の讐を復す遠近驚接知家變を聞て將に往かんとす乃ち義幹を陷れんとゝ謀り竊に人を使はして義幹を誘はしめて曰く知家將に來り襲はんとす當に之が備を爲せよ義幹以て信とし兵を勒して自ら守る又使を遣して義幹に謂て曰く聞く將軍狩獵に戒あり諸將悉く集ると將に公と俱に行かんとすと義幹益ゝ疑ひて臨かず知家富士野に至り頼朝に見えて義幹姦謀ありと譖す頼朝義幹を召して知家と辨析せしむ義幹自ら明にすること能はず遂に罪を得頼朝薨ずず頼家嗣ぐ知家北條時政大江廣元と政事に參決す後ち薙髮して尊念と稱す（大日本史）

ハツタ　トモノリ　八田知紀「ハチダトモノリ」

ハツタ　トモヒサ　八田知尙　左衛門尉知家の子なり筑後六郎と稱す和田の亂に足利義氏を擊て之を破る後鳥羽上皇に仕へて左衛門尉に任ぜられ西國を守らしめ親悴する所の刀を賜ひて之を勵ます軍敗る武田信隆の爲めに追及せらる知尙返戰して賜ふ所の刀を抽き信隆の馬の首を斷ち脫して其師に歸り又出でゝ宇治橋を守り藤原朝俊と共に戰死す（大日本史）

ハツタ　ノリアキ　八田憲章　字は子漢備前岡山の人其先知家は源頼朝に仕へて武功あり世々名臣と稱す高祖掃部正久を生む勢より攝に來り贄を備前侯に委れ武功を以て名を得秩二千石を食む久治を生む復た武曰ふ宗久長與を生む長與四子あり其季を憲章となす憲章幼より敏捷にして强記人に絕す長與好みて禪を談ず憲章纔かに數歲傍聽して試みに客に代りて對す其の意の欲する所の如く出づ東林精舍に僧秀雲と云ふ者ありて別に東海道將帥と爲し常陸下總の兵を率ゐて逢隈河に會せしむ戰ひて功あり承久元年頼朝將に京師に朝せんとす諸將悉く會す知家未だ至らず頼朝之が爲に發せず午に及びて乃ち至る頼朝之を讓む知家謝して曰く前驅後隊は何人に命ずる頼朝曰く前驅は已に畠山重忠に命ず後隊は未だ其の人を得ずと知家天皇樂胤に命ぜんことを請ふ頼朝之に從ひ乃ち發す其の親任せらるゝこと此くの如し知家の邑多氣義幹の邑と界を接し爭ひて相恐む會ゝ頼朝富士野に獵す曾我祐成兄弟父の讐を復す遠近驚接知家變を聞て將に往かんとす乃ち義幹を陷れんとゝ謀り竊に人を使はして義幹を誘はしめて曰く知家將に來り襲はんとす當に之が備を爲せよ義幹以て信とし兵を勒して自ら守る又使を遣して義幹に謂て曰く聞く將軍狩獵に戒あり諸將悉く集ると將に公と俱に行かんとすと義幹益ゝ疑ひて臨かず知家富士野に至り頼朝に見えて義幹姦謀ありと譖す頼朝義幹を召して知家と辨析せしむ義幹自ら明にすること能はず遂に罪を得頼朝薨ずず頼家嗣ぐ知家北條時政大江廣元と政事に參決す後ち薙髮して尊念と稱す（大日本史）

ハツタ　ノリ　八田知紀「ハチダトモノリ」

即ち人を厭かさん何を以て世を遯るゝとか爲さんと長典も亦た之を奇とし擕へて以て歸る長與飯椀にして薦藉少なし憲章力を竭して之に事ふ親戚其の至誠を稱す長ずるに及びて學に耽り簡を執り以て寢食を忘る正德四年大隊武騎と爲り享保六年武府吏と爲る十一年祿を增し留守副帥に擢んでらる十三年書記と爲り宗廟の事を掌り典館總裁を兼ぬ十六年遷りて執法と爲り屢ゝ江戸に從ふ憲章弘毅剛亮にして常に大體を引き爭辨して屢ゝ大臣に忤る旁人憲章の爲めに懼る憲章便々として言ふ神色自若たり事に莅みて決斷流るゝが如し侯屢ゝ之を賞し祿を增すこと二たび寛保二年會ゝ國用匱乏す是の時侯の族森臻爲國に當り水伯壽巧言を以て遷起して下大夫に至る咸な利事を言ひ卒に變法の令を定む憲章獨り曰く君子は民を易へずして教へ知者は法を變ぜずして治む夫れ法に據りて行ひ怨を欲めて德を爲すは開く所に非ず蓋し國用を制するは入を量て以て出を爲す烈公典刑具さに在り讒みて其の法を修めて之れを施行せば定まらん法を作る清儉其の奬猶ほ貪に流る況んや法を貪邪に作る士民を如何せん國家の敗なり士民を以て土芥と爲さば即ち亂崩並び生ぜん亦た哀しからずや節するに制度を以てして財を傷はず民を害せざるは古の道なりと遂に抗疏して諫む議行はれず伯壽中つるに奇法を以てせんと欲す然れども臻の輩ず可きなし是の時諸有司專ら聚斂を事とし苟くも伯壽に媚び人の病むを恤まず憲章獨り益ゝ禮を衆りて撓まず論議常に名節に依る延享元年憲章を遷して火器隊長と爲す實は憲章を用ひざるなり寶暦二年疾病あり骸骨を乞ふ五年卒す年六十四憲章博聞强記にして治亂に明らかなり傍ら天文地理九章象胥に通ず初め洛閭家の學を爲し壯歲にして徂徠の風を聞き節を折りて古文を倚む詩に於ては漢魏盛唐及び明李王氏を好み最も近體の七言律に長ず且つ軍旅の事に精しく撰著する所甚だ多し嘗て歎じて曰く兵は死地なり國家の事焉より大なるは無し之を神明にするは其人に存す苟くも其の人に非ざれば徒らに强論亂理するのみ即ち孫子十三篇も亦た唯ゝ土苴のみと遂に其の稿を焚く憲章多く鄙事を能くし武技嫌はざるなし（串賀文稿）

ハツチャウツブテ　キヘイジ　八町礫喜平次　源爲朝の老僕なり能く礫を飛ばす故に此名あり鎭西に從ひて忠あり發超「キハセヲ」

ハツテウ　イウキチ　服部雄吉　海軍中佐なり薩鹿兒島藩士服部其七の三男なり家代々伏見なる薩藩邸の留守居役たり明治十七年海軍兵學校を卒へて海軍少尉候補生となり廿七八年日清戰爭の際には海軍大尉を以て軍艦秋津洲砲衛長として豐島黃海威海衛蟹灣各地の海戰に於て功あり凱旋の後功五級に叙せられ寶章を賜はる其後海軍兵學校教官となり比叡遠洋航海を爲し三十一年少佐に進み佐世保海兵團副長に補せられ動五等瑞寶章を賜はる廿三年六月北清に義和團の亂猖獗を極むるや臨時筮置乘組員を命ぜられ同年十二月中佐に進み佐世保海兵團水兵三百餘名を率ゐて出征す尊て十七日列國聯合軍の太沽を攻擊するや中佐は海軍の指揮官として聯合軍と共に砲臺攻擊の任に當る當日遊軍の部署は露兵を先鋒とし獨英之に續き日本兵は曾に殿軍たり既にして敵の抵抗劇烈にして三國の兵容易に進むと能はず中佐勵聲一令を下し野砲二門を中心とし左右に縱隊を作り英露獨の中間を驅馳して第一砲臺に向ふ時に砲臺の發砲益ゝ急なり中佐ために敵彈に中りて戰死を遂げたり年三十八

ハツテイ　イツテイ　服部一貞　俳人なり一雪の門に入る著述に貞德俳諧記あり

ハツトリ　ゲンケウ　服部元喬「ハツトリナンクワク」

ハツトリ　サコンエモン　服部左近衞門　諱は宗重伊賀の人島津義久に仕へて近習となる性煙草を嗜み自ら耕耘を執りて薩摩の國府字梅木に於て一段餘歩を耕耘し始めて煙草を栽培す品質極めて佳良なりこれ國分煙草の始めなり（日本農功傳）

ハツトリ　サダタケ　服部定武　俳人なり常姐の門人元祿中の人なり（俳林小傳）

ハツトリ　ガケイ　服部鵞溪　江戸の書家なり名は保考又た誠之字は清助鵞溪は其の號享保十四年十一月二十三日歿す若荷谷德雲寺に葬る（江戸名家墓所一覽）

ハツトリ　カサイ　服部賀齋　茶人なり荒尻人寛文中一雪の門に入る著述に貞德俳諧記あり

ハツトリ　カズタダ　服部一忠　尾張津島の人なり父を平左衞門と稱す一忠初字は小平太、織田信長に仕へて桶狹間の戰に今川義元の軍中に入りて其の股を刺す義元刀を拔て其の膝を擊つ毛利秀高義元を刺し遂に之を殺す後ち羽柴秀吉に屬す天正十三年七月從五位下に叙し采女正に任ず文祿四年七月關白秀次に驚するに坐して越後に謫せられ尋で自殺す子左源太天正七年波多野氏を丹波に征し中野又左衞門と戰ひ死す二男某字は八郎左衞門大崎長行の養子となり龜田高緒の女を娶り紀侯に仕ふ高緒悉く我一世得る所の感書を某に讓與す（野史、豪雄言行錄）

ハツトリ　キウホ　服部休甫　歌嚢家なり江戸の人享保年中の人（近代世事談）

ハツトリ　キンゴ　服部金吾　陸軍步兵少尉なり宮城縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て第二師團步兵第三十騎隊附として從軍中三十七年十月十二日清國盛京省楊城塞東方高地に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ハツトリ　クワンサイ　服部寬齋　儒士なり（服部自ら修して服とす）名は保庸字は紹卿、梅園の長子藤五郎と稱す江戸の人本下靖菴の門人なり家居して孝を盡す其の行誼原なり學問にして才華久藝はず出でゝ文廟の侍講となる會弟愚菴ユ時に書名あり俱に侍讀たり享保六年六月三日歿す年五十五談苑、桑韓唱酬集、寬齋日記等の著あり（諸家人物志、鑒定便覽）

ハツトリ　ゲンケウ　服部元喬「ハツトリナンクワク」

ハツトリ　サコンエモン　服部左近衞門　諱は宗重伊賀の人島津義久に仕へて近習となる性煙草を嗜み自ら耕耘を執りて薩摩の國府字梅木に於て一段餘歩を耕耘し始めて煙草を栽培す品質極めて佳良なりこれ國分煙草の始めなり（日本農功傳）

ハツトリ　サダタケ　服部定武　俳人なり常姐の門人元祿中の人なり（俳林小傳）

ハツトリ　シゲト　服部重登　陸軍步兵少尉なり廣島縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て第五師團步兵第四十一聯隊附として從軍中三十七年十月十五日清國盛京省沙河陣近に於て戰死す戰功に依り勳六等功六級に叙せらる

ハツトリ　シザン　服部芝山　江戸の儒者

なり名は元濟字は君美通稱眞藏南郭の曾孫なり（廣益諸家人名錄）

ハットリ　セイイチ　服部誠一　撫松と號す　東京新繁昌記を著はして名あり後東京新誌を刊行して麗麗なる漢文を以て破島柳北等と共に名を馳せしが該誌廢刊後明治二十九年中仙臺に退隱し同縣の第一中學校漢文教師となりしが晩年東京に來り嗣子の家に老を養ふ四十一年八月十五日病歿す年六十八

ハットリ　セイゲイ　服部星溪　醫なり名を牛十郎といひ江戸の人風に思を生理の學に潛むる所深く終に天人の要を考察して學髓、天人雜記、人事源等の書を著はせり時人其說の新奇なるを以て名づけて異論といふ然れども星溪毫も之を意とせず熱心其學と術とを唱へ終に多くの門弟子を養へり文政八年十月江戸吉益欽、星溪の著人事源を公刊するや先生の斯著は天人の要を示して咸く是れ古人の言はざる所開闢以來の發明たりと附記せり以て此書の當時に重んぜられしを徵すべし（人事源）

ハットリ　ソウゲン　服部宗賢　高取侯の醫官なり名は時壽字は子萬、宗賢は其の號、又葛城と號す大和高市郡の人家世々醫を以て行なはる宗賢夙に意を家學に用ひ旁ら本草學を修む稍々長じて京師に出て畑柳安、小野蘭山に從ひて學ぶ歸後遠近治を請ひ屢戶外に滿つ寛政壬子高取侯幕府の命を賜ふ後ち擢んでゝ侍醫とし秩百石を賜ふ是の時侯幕府の老中となる宗賢に命じて來り侍せしむ宗賢因て江戸に來る列侯士大夫延請虛日なし文政己卯侯劇疾に遭ふ宗賢湯藥を進め日夜侍護すること數旬遂に癒ゆ侯因て秩三十石を加賞す其の明年宗賢疾に罹りて歿す年六十九宗賢家頗る富む然れども自ら奉ずる儉素好みて嗣恤をなす數年に穀を糶して凶歲に賑貸す一鄕皆な其の澤を受くと云ふ（續近世叢話）

ハットリ　ソモン　服部蘇門（服部自ら修して服とす）京師の儒者なり名は天游字は伯和、蘇門は其の號、又曬翁と號し六藏と稱す京都の人父織造を以て業とす蘇門多病を以て家資を族人に讓りて其の業に服せず唯々讀書を事とす年二十五徒を聚めて教授す其の學漢魏傳註を主とし專ら博洽を務む年三十八自ら髡して緇衣を服し佛乘を研究し又老莊を講じ意を道釋に專にす然れども經史を以て生徒に授くる猶ほ故の如し故に自ら號して三教主人と曰ふ初め徂徠の復古の說を欽慕す後ち其の非を知り物氏を攻擊するに及て物徂徠を奉崇するものを指して無眼の人とす明和六年九月十六日歿す年四十六其の著作する所數十百卷就中燃犀錄同續錄、同別錄、同餘錄、同遺錄、落草放言、贅放言、赤縣々、碧巖方語解、蘇門文鈔、前賦錄、後賦錄、嚼蠟餘響、同遺響の如きは皆な世に行なはる（先哲叢談續篇、名家畧傳、近世叢語、鑒定便覽）

ハットリ　ダイハウ　服部大方　信濃の人名は誼字は和甫、初は澤典學と稱す藤田丹岳と殆んど時を同うす精微の學卓越の識を有し江戸にあり帷を垂れて諸生に教授す文化十四年二本松藩に聘せられて教官となる其師承及び歿年月を詳にせず著書に人事原二卷、同後篇一卷あり宇宙に就て論ずるものなり其他天人雜記、易通、易說、讀拳秋、古文辨、王制圖考、大日本風土記等あり

ハットリ　ダウゲン　服部道圓　茶人なり宗佐に茶道を學びて能くせり京師の人なり白珍齋と號す（茶人系傳全集）

ハットリ　タカアキ　服部尊明　俳諧師なり江戸本郷に住す直互の門人なり（俳林小傳）

ハットリ　チクヨ　服部竹塢　津藩の儒者なり名は統、文稼と稱す竹塢は其の號、伊賀の人本氏は藤田、服部氏の爲めに養はれ遂に其の姓を冒す服部氏は世々處士たり書札及び散樂を以て人に授く竹塢續て其の業を修むと雖ども意屑とせず好みて砧聲を事とし詞藝を攻めて刻苦甚だし體素と羸弱養父道白之を患へ痛く讀書を禁ず竹塢面あたり從ひて心に否とし晝は則ち其の在らざるを俟ひ夜は則ち燈に就くを時として巻を拔きて默讀す年甫めて十八父の命を以て往きて樂を京師に肄ひ又た潛かに文事を研し學進みて歸る父其の禁ずり可からざるを知りて復た言はず是に於て力を專らにして講習し更に上國に游び猪飼敬所賴山陽に從ひて益々受く出入數年漸く人の爲めに識られ四方文藝を以て來り遊ぶ者皆な竹塢に謁す伊賀は本と無文の地と爲すも今日に至りて能文の士多きは竹塢實に之れが嚆矢と爲すなり文政の初め藤堂侯大に學政を振ふ乃ち擢んでゝ學職と爲し諸官に累歷し祿百五十石を給し宅を郭內に賜ふ竹塢人と爲り敦厚にして雅韻あり上、卿大夫より下、散人處士に至るまで皆な喜みて之に從游す因て以て業に就く者少なからず口未だ嘗て經營を談ぜず日く吾其の人に非ざるなりと其の詩文を作るや蕭散閒適の旨多し書法も亦清雅、書を讀む每ごとに手鉛黃を釋てず住處に遇へば驚ちて之を批し誤處に遇へば輙ち之を正す故に其の藏書は彩華燦然たり家甚だ貧しと雖ども孝養架に滿つ嘗て嗣子に謂て曰く吾れに書籍あるは猶ほ人に錢財あるが如し亦た甚だ貧ならず汝謹みて之を守りて失ふこと勿れと安政三年病みて歿す年六十七（墓誌）

ハットリ　チュウエイ　服部仲英　江戸の儒者なり名は元雄、多門と稱す仲英は其の字、南郭の養子白貫と號す本と西村氏、父は四宮の祝人たり嘗て主祠の貪汚を訴へ反りて其黨の謀る所となりて竟に放逐せられ流落以て死す仲英乃ち江戸に來り三たび父の寃柱を官に訴へ事始めて辨ずるを得たり遂に舊例に因りて父の靈を以て四宮の祠中に享祀す仲英少うして南郭に學び門戶を開き教授を以て業とす未だ幾ならずして南郭の男皆な亡す獨り季女あり乃ち仲英を娶ひ妻に之を以てす是に於て服部氏を冒す最も詩を善くす然れども家風を墨守せず明和四年六月八日歿す年五十六品川東海寺中少林院に葬る著蹈海集あり（鑒定便覽）

ハットリ　チョシウ　服部樗洲　儒者にして書を善くす源八と稱す字は墨恭寬齋の弟正德元年二月十四日歿す

ハットリ　テツ　服部徹　甫洋探檢家なり圖南と號し姓冒險的旅行を好む明治二十四年伊豆七島を探檢して植物學の著書數種あり後南洋スマトラ島の蠻地に深入して珍奇なる植物を採集して歸り操觚に從事すること年あり四十一年五月大阪日報の記者として再び南洋探檢の壯圖に出で先づ臺灣に入りて金島の視察を了へ南清厦門油頭を經て香港に到り將に便船を待りて瓜哇に向はんとする際五月二十四日遇つて河舫より墮ちて死す

ハットリ　トウジベエ　服部藤次兵衛

神陰流の劍客なり神後伊豆守の弟子京師の人（武術流祖錄）

ハットリ　トシナツ　服部敏夏　歌人なり京師の人俗稱を中川屋九郎右衛門と曰ふ本居の門人にして頴に詠歌を脩し尤も之を能くす文政初年歿す（鑒定便覽）

ハットリ　ドハウ　服部土芳　俳人なり初め蘆島と號す此中庵又ば蓑中庵とも云ふ伊賀上野の人通稱半左衛門名は保英享保十五年（一一十四年）正月十八日卒す長田四蓮寺に葬る（俳林小傳）

ハットリ　ナガサダ　服部永貞　庄太夫と稱す幕府の醫繪師なり元祿二年幸阿彌長敬と共に日光東照公の宮殿に畫繪せり（幸阿彌系圖）

ハットリ　ナカツネ　服部中庸　古學者なり京師の人貨田又水月と號す醫を以て業とす本居宣長に學び唯々一に古學を勉む曾て三大考を著して未發の說を出す平田篤胤益々其說を主張して大に昌なり文政七年三月十四日歿す年六十八（鑒定便覽、平安墓所集）

ハットリ　ナンクワグ　服部南郭（服部自ら修して服に作る）有名の儒者なり名は元喬、字は子遷、小右衛門と稱す南郭は其の號又た芙蓉館と號す平安の人幼にして穎敏、年十四江戸に來る十六にして柳澤吉保に仕ふ壯なるに及て物徂徠を見て大に其の學を喜び遂に其の門に入り日夜研究す徂徠稱するに妙才を以てす三十四にして致仕し專ら詩古文辭を修め離を下だして徒に授く南郭人と爲り冲雅蕭落、交際の際談笑怡々如たり其の學博しと雖ども深く自ら韜晦す朱だ嘗て師儒の重きを挾まず居常雅致を以て自ら居り人或は時事を問へば晒ひて曰く文士迂闊、事務を知らずと蓑兎の士來りて東修を執るもの甚だ衆し大抵年に金百五十兩を得凡そ儒を以て生計を爲す其の饌裕此の如きも の鮮し經書を講說する每に敢て己が意見を發せず謂て曰く今日授くる所は昔予の受くる所なりと當時諸侯往々延招欽待す晩年肥後侯禮を厚うして接待し以て文辭を問ひ旁ら邦政を諮詢す呼ぶに先生を以てして名ないはず南郭年老い身癒れ諸侯に見るを欲せず然れども大に肥後侯の賢を喜び屢ゝ往きて見る是の時蘐園の名流凋喪殆んど盡きて南郭獨り存す故を以て名望益々重し寶曆九年六月二十一日歿す年七十七品川東海寺中少林院に葬る南郭惡ら詩文を攻め年老て進益々精し詩文兼れづ南郭を稱す勞ら書を著す筆法雪舟より出づ故に畫名周雪又た觀蕉と號す山水の僻あり自ら諸國を遍歷し見る所の勝景を寫して之を壁間に展べ以て自ら娛みと見る所の勝景を寫して之を壁間に展べ以て自ら娛みと見る所の勝景を寫して之を壁間に展べ以て自ら娛みと

多し尾張侯口糧を優給し招て經を講ずるを聽く禮遇頗る厚し寛政の初め大政一新し栗山、奚泉、二洲、精里の諸老一時靈征す栗齋亦宅地を麴坊善國寺谷に賜ひ庠舍を設けて其の藝を掌らしむ列侯貴人貲を執りて來り學ぶ者日々に多し既にして兄拙常疫す因りて老を告げて將さに歸らんとす允さず平川町市鄙の地租を賜ひ以て膏火の費を資けしむ丙辰再び辭す允さず寛政十二年五月十一日病みて歿す年六十五麻布善福寺に葬る、栗齋學落闊を祟ぶ其の書を讀む先づ義を曉りて後ち道理に求む常に謂ふ此の間の儒者は閑齋を以て第一と爲す獨り惜むらくは其の徒道を求むるに太だ急にして或は文辭を察せず其の流遂に文を捨て、理を說くに至ることを此れ吾が驚の大患なりと是故に栗齋經を講ずるには必ず先づ文義に據りて以て義理を斷ず其の蒔說を改むる者も亦少なしとせず玉水曰く佑甫は善く閑齋を學ぶ者なりと其の人に敎えて講讀するや遲より遲に至る而して要は大極通書に在り謂ふ性理の淵源は此に在りと故に二書に於ける諄々として疏解し最も精微を盡くす而して博く經史に涉り傍ほら詩文を屬す韵度高雅皆傳居放言の著あり（先哲叢談、續諸家人物志、墓所一覽）

ハツトリ　ナキヨウ　服部惟恭　南郭の次子なり字は愚卿少うして詩名あり不幸にして夭折す遺稿錦囊集あり元文五年三月十一日歿す年十七品川東海寺に葬る（諸家人物志）

ハツトリ　ナリヤウ　服部惟良　儒者なり字は温卿南郭の嫡子なり夭死す（鑑定便覽）

ハツネノ　ソウジャウ　初音の僧正「エイエン」

ハツネ　ミミジラウ　初音耳次郎　豐後國の產なり安永七年戊の春江戸に耳次郎といふ觀せ物あり其藝は耳に物をいふ一奇となすまづ耳より聲を出し或は歌を謳ひ三絃に合せまた大聲を出せば竹細工の象鼠樂の如く開えたり人或は以て口中に笛など仕掛あらんと疑ふ乃ち口に多葉粉を吸ひつゝ聲を出せり實に稱代の奇藝なりとす（蓬萊堂雜錄）

バツボク　ハツヲカ　ケイヂ　伐木「サカキハクゲン」初岡敬治　詳は綱正孤松又冬松と號し秋田藩士小貫賴久の次子資性純真父母に事ふること最も恭順孝道至らざるなし事に當りては堅忍不拔勤勵怠らず必ず所志を貫くにあらずんは止まず明治戊辰の役秋田藩の賊中に孤立するや敬治公務人常に勤王の大義を明にするを以て自ら任せり明治二年三月藩より評定奉行を以て公議人を命ぜられ各藩士と公議所に會し諸事洋風に倣ふの不可を痛論し又上表して國體を保持し國是を確立するの要を論し議院の設立せらるゝや其議員となりて幹事に選任せられ明治三年藩に歸る柳河藩士古賀十郎陰謀の企あるに及び敬治を此れ吾が驚の大患なりと是故に栗齋經を講ずるには必ず先づ文義に據りて以て義理を斷ず其の蒔說を改むる者も亦少なしとせず玉水曰く佑甫は善く閑齋を學ぶ者なりと其の人に敎えて講讀するや遲より遲に至る而して要は大極通書に在り謂ふ性理の淵源は此に在りと故に二書に於ける諄々として疏解し最も精微を盡くす而して博く經史に涉り傍ほら詩文を屬す韵度高雅皆傳居放言の著あり（先哲叢談、續諸家人物志、墓所一覽）

ハツトリ　ハンカイ　羽鳥半海　俳人なり上野の人樫洲庵と號す遨遊の門人明治十六年二月四日沒す（三森松江氏寄）

ハナガサ　ブンキャウ　花笠文京　小說家なり東條氏名は來甫一號を花笠菅助、魯鈍翁牛空と云ふ初め江戸柴井町に住し書を鬻ぎて業とす鶴屋南北の門に入り劇曲を作り中歲大阪に住し代作舍大作と稱す後江戸に歸り專ら小說を以て行はる著作の多くは尾上梅幸の名を假ると云ふ萬延元年六月（或は云ら安政元年三月）歿す年七十六東條琴臺は其の兄なり（戲曲小說通志）

ハナコンガウ　ハナサンジン　鼻金剛「コンガウシンロク」鼻山人　江戸の小說家なり細川浪次郎と稱し幕府の奥事たり九陽亭又東里山人と號し麻布三軒家に住す山東京傳の門人なり一時流離して芝の切通に住し奇方奇術を鬻ぎ號して傳授屋と曰ふ著書多し安政六年九月歿す年七十四（戲曲小說通志）

ハナゾノ　サダイジン　花園左大臣「ミナモトアリヒト」

ハナゾノ　テンワウ　花園天皇　名は富仁、伏見帝の第二子なり母を顯親門院藤原厚子と曰ふ二條帝崩じて位に即く伏見上皇院にありて政を聽く後ち後伏見上皇亦政を聽く帝位にあると十一年改元する と四度位を東宮尊治（後醍醐帝）に讓り正慶二年亂に因て東國に幸す後ち薙髮して遍行と號す帝才學和漢を兼れ傍ら佛樂に精し貞和三年萩原仙洞に崩ず壽五十三（大日本史）

ハナダ　タクミ　花田內匠　浮世繪師なり四鶴が大鑑にも承應元年のことゝいへる條に浮世繪の名人花田內匠といへる者美年を墓し云々とあり然れば內匠は承應年中の繪師にして當時世に其名ありしものと思はる（嬉遊笑覽）

ハナノ　エドズミ　花江戸住　狂歌師なり銀座一丁目に住せり俗稱か山口政吉と云ひ狂歌に名あり初め狂號を霞谷蹊と稱へ後に花の江戸住と改む別名は萬蟲亭と云ふ四方側の判者たり文化二年六月歿す

ハナノモト　花の本「イヌヰテイシヨ」
ハナノモト　花の本「ソウギ」
ハナノモト　花の本「ソウチヤウ」
ハナノモト　花の本「マツナガテイトク」
ハナノモト　花の本「ヤスハラテイシツ」
ハナノモト　花の本「タカクハランカウ」
ハナノモト　花の本「ヒサムラゲウダイ」
ハナノモト　花の本「ヤギキンシヤ」
ハナノモト　ケンゲウ　花の本「ハナハホキイチ」

ハナハ　ジラウ　塙次郎　和學者なり名は忠瑞、保己一の男なり世々德川幕府に仕ふ時に鈴木重胤モの日本書紀傳に記して云く次郎前田夏蔭と老中安藤信正の命を以て廢帝の典故を按ずと藝に屢々信正の邸に召されて寛永以前幕府が外國人を遇せる式例等を

取調べしを誤り傳へたるならん浪士某等次郎を殺みこと殺さんと謀る次郎一日嫌疑に陵河臺の中坊陽之助の家に趨く浪士歸途に要して次郎の門前に暗殺す同伴せる客加藤一周共に殺さる時に文久三年十二月廿二日なり次郎年四十九

ハナハ　ナホツグ　塙直次（一に直之に作る）本名は尙之、尾張羽栗の人（一に遠江橫須賀の人木須田三郎左衞門と稱し流落して京師に住すに作る）なり初め長八と稱す膂力人に絕す山壑を鼯鼠して獸を擒へ以て業と爲す妙に早技を得年甫めて十八織田信長に仕へ既卒となる三年を歷て箕作の戰に坂井政尙と云ふもの建部源八を獲源八豪强人以て實となさず直次其の功ありて賞なきを憐む前田利家に欲て其の實を告ぐ信長直次の友を憐むの情を盡すを嘉みし登庸して士隊に列し又政尙の功を褒賞す政尙愧び謝し詐字を授けて尙之と稱す實性酒を嗜み濫酔して人と諍論し或は之を傷ふ信長怒りて之を放逐す京師に移居し更に時雨左之助と稱し加藤嘉明に隸して功を樹て祿千石を貪み銃卒隊長となる遂に今の名に改め閤右衞門と稱す征韓の役嘉明に朝鮮唐島に從ひ嘉明と敵艦に投じて之を奪ふ慶長庚子の秋嘉明に關ヶ原に從ふ嘉明兼て軍令を定め進退を約す直次の前隊度を過つ嘉明叱して曰く終世將帥の任たる能はずと直次恚て乃ち去り大床に臥して曰く遂不留江南野水一高飛東海一一閑鷗と嘉明奮怒仕途を禁絕す直次小早川秀秋に仕へ祿千石を貪み銃隊長となる未だ幾ばくならずして秀秋薨す尾張に適き德川忠吉に仕ふ忠吉亦薨ずや乃ち福島正則に仕ふ居ること數年嘉明之を正さんことを請ふ直次去りて薙髮し鐵牛と號し妙心寺に入る大阪夏軍起るに及び閤部則綱直次の去年の功を嫉み部兵を後に駐めて僅に二三騎と路を安倍野海濱に取りて而して進む直次未だ之を識らず東海道を歷て信太に至りて之を望み騎に襲ちて先を爭ひ之に蟻通北池の側に會す時に四月二十九日雨歇み餘鶯未だ囀れず直次の斥候山口兵內兄弟進みて淺野長晟の先鋒龜田高緒と蟻通前に相遇ひ語み交えて而して歸る高緒之が備を爲す直次則綱將に安松に到らんとす兵內歸り報ず敵已に邁ること急なりと則綱乃ち進む直次及び淡輪重政之に次ぎ高緒と戰ふ淺野左衞門佐銃手を樫井の北堤に備ふ中間狹隘にして互に戟を棄てゝ力戰す奮擊すること數刻城兵寡單にして後隊纔がず上田安土重田子助の家に趨く浪士歸途に要して次郎の門前に暗殺す同伴せる客加藤一周共に殺さる時に文久三年十二月廿二日なり次郎年四十九

ハナハ　ホキイチ　塙保己一　江戸の和學者なり姓は荻野、通稱は辰之輔、水母子と號す武州秩父郡保木野里の人、人となり孝慈友愛にして躬ら行ふ人を得ず管天神を祀らしめ絃歌餘炎は亦た復た強ひず法兄豐一の任たる能はずと直次恚て乃ち去り大床に臥して曰く遂不留江南野水一高飛東海一一閑鷗と嘉明奮怒仕途を禁絕す直次小早川秀秋に仕へ祿千石を貪み銃隊長となる未だ幾ばくならずして秀秋薨す尾張に適き德川忠吉に仕ふ忠吉亦薨ずや乃ち福島正則に仕ふ居ること數年嘉明之を正さんことを請ふ直次去りて薙髮し鐵牛と號し妙心寺に入る大阪夏軍起るに及び閤部則綱直次の去年の功を嫉み部兵を後に駐めて僅に二三騎と路を安倍野海濱に取りて而して進む直次未だ之を識らず東海道を歷て信太に至りて之を望み騎に襲ちて先を爭ひ之に蟻通北池の側に會す時に四月二十九日雨歇み餘鶯未だ囀れず直次の斥候山口兵內兄弟進みて淺野長晟の先鋒龜田高緒と蟻通前に相遇ひ語み交えて而して歸る高緒之が備を爲す直次則綱將に安松に到らんとす兵內歸り報ず敵已に邁ること急なりと則綱乃ち進む直次及び淡輪重政之に次ぎ高緒と戰ふ淺野左衞門佐銃手を樫井の北堤に備ふ中間狹隘にして互に戟を棄てゝ力戰す奮擊すること數刻城兵寡單にして後隊纔がず上田安土重田子助の家に趨く浪士歸途に要して次郎の門前に暗殺す同伴せる客加藤一周共に殺さる時に文久三年十二月廿二日なり次郎年四十九

ハナハ　ナホツグ　塙直次（一に直之に作る）本名は尙之、尾張羽栗の人（一に遠江橫須賀の人木須田三郎左衞門と稱し流落して京師に住すに作る）なり初め長八と稱す膂力人に絕す山壑を鼯鼠して獸を擒へ以て業と爲す銃隊長となる三年を歷て箕作の戰に坂井政尙と云ふもの建部源八を獲源八豪强人以て實となさず直次其の功ありて賞なきを憐む前田利家に欲て其の實を告ぐ信長直次の友を憐むの情を盡すを嘉みし登庸して士隊に列し又政尙の功を褒賞す政尙愧び謝し詐字を授けて尙之と稱す實性酒を嗜み濫酔して人と諍論し或は之を傷ふ信長怒りて之を放逐す京師に移居し更に時雨左之助と稱し加藤嘉明に隸して功を樹て祿千石を貪み銃卒隊長となる遂に今の名に改め閤右衞門と稱す征韓の役嘉明に朝鮮唐島に從ひ嘉明と敵艦に投じて之を奪ふ慶長庚子の秋嘉明に關ヶ原に從ふ嘉明兼て軍令を定め進退を約す直次の前隊度を過つ嘉明叱して曰く終世將帥の任たる能はずと直次恚て乃ち去り大床に臥して曰く遂不留江南野水一高飛東海一一閑鷗と嘉明奮怒仕途を禁絕す直次小早川秀秋に仕へ祿千石を貪み銃隊長となる未だ幾ばくならずして秀秋薨す尾張に適き德川忠吉に仕ふ忠吉亦薨ずや乃ち福島正則に仕ふ居ること數年嘉明之を正さんことを請ふ直次去りて薙髮し鐵牛と號し妙心寺に入る大阪夏軍起るに及び閤部則綱直次の去年の功を嫉み部兵を後に駐めて僅に二三騎と路を安倍野海濱に取りて而して進む直次未だ之を識らず東海道を歷て信太に至りて之を望み騎に襲ちて先を爭ひ之に蟻通北池の側に會す時に四月二十九日雨歇み餘鶯未だ囀れず直次の斥候山口兵內兄弟進みて淺野長晟の先鋒龜田高緒と蟻通前に相遇ひ語み交えて而して歸る高緒之が備を爲す直次則綱將に安松に到らんとす兵內歸り報ず敵已に邁ること急なりと則綱乃ち進む直次及び淡輪重政之に次ぎ高緒と戰ふ淺野左衞門佐銃手を樫井の北堤に備ふ中間狹隘にして互に戟を棄てゝ力戰す奮擊すること數刻城兵寡單にして後隊纔がず上田安土重田子助の家に趨く浪士歸途に要して次郎の門前に暗殺す同伴せる客加藤一周共に殺さる時に文久三年十二月廿二日なり次郎年四十九

ハナハ　ホキイチ　塙保己一　江戸の和學者なり姓は荻野、通稱は辰之輔、水母子と號す武州秩父郡保木野里の人、人となり孝慈友愛にして躬ら行ふ人を得ず管天神を祀らしめ絃歌餘炎は亦た復た強ひず法兄豐一の任たる能はずと直次恚て乃ち去り大床に臥して曰く遂不留江南野水一高飛東海一一閑鷗と嘉明奮怒仕途を禁絕す直次小早川秀秋に仕へ天正の役に海を踏みて東に走る家尙ほ一鼎を存す餘に傳ふる所なし保己一七歲にして明を喪ひ乃ち之を江戸の醫僧に屬す其の師は雨富檢校管一と云ふ者なり家は城四四ッ谷に在り保己一絃歌を學ぶ四年にして一節だも成らず更に鍼法を受く復た四年にして成らず而して歌唱の字句は一聽して記せざるなく其の未だ曾て犬馬に及ばず稽古折義專ら力を竭してこれを思ひて又た思ふ衣食起居は一に皂隸に比し金錢餘りあれば則ち一之を藏書の資に委し未だ嘗て自から歡娛に供せず逢迎、酢醋、誘惡、損貸、驕奢は勿論絕えて釣名機利の意なく貧儉貧約曼如として樂しむ保己一繁華を避け榮盛を厭ふと雖も從游日に盛んに聲名月に興り官の和學講談所に用ひられ惣檢校に任ぜらる保己一保元以降諸家の記錄雜書の永く湮沒して世に顯はれざるを嘆じ海內を拽集して之を校訂し以て上梓す總て一千二百七十三種六百三十五卷各書皆類を以て纂編す故に群書類從と名く數百年來先儒の著書後世に廢棄して知る者なかりしも是に依りて不朽に傳はる次で續集千百八十五卷成り將に刻せんとす偶ま文政四年九月十二日病歿す年七十六法號を和學院前惣檢校心眼智光居士とす保己一初め江戸に至るや年尙ほ少一日某商に詣る會會衆蒼頭舖頭に立て一片紙を傳觀し其の記する所の卷名を按ず保己一側に在り之に叩きて曰く其の字水偏に義の勞知らず何音なるやと保己一則ち應へて曰く是れ必ず油巷ならんと是に於て人を其の地に遣はして之を問ふ事果して辨ずる為に行り紙鑑きて曰く何を以て之を知る保己一曰く鑑し當初書を作る者油の字を知らず勞人之に敎へて曰く水を偏となし由を勞となせと由義邦音相通ず故に之を誤るのみと既にして之を問ふに果することを千日趨每とに百回廟庭に還拜す家居も亦た常に神を拜し每旦殷若心誦すること百遍世其の精誠にして誦讀獻釋を樂しむを感じ以て其の業を佐くるものと之れを佐く保己一謂へらく其の國に生れ其の故典に暗くして可ならんやと遂に邦典を講究し我が中世の事實に於て通曉せざるなし又た和歌を善くして吟詠を嗜む友人官を買ひて自から榮へんことを勸む保己一應かず師之を聞き保己一に其の言に從はんことを勸む保己一始めて之を許す友人相喜びて貨二百金を鳩め乃ち買ひて勾當に任じ號して塙勾當と曰ふ此より聲名日に興り從游月に繁く兩菩に寓居して衆を容るゝ能はず友人復た議して貨を鳩め卜築して同鄉靈原に移す保己一諒として賞福を擲げず厚饌重贈必ず辭して受けず叱咤の聲ひて又た思ふ衣食起居は一に皂隸に比し金錢餘りあれば則ち一之を藏書の資に委し未だ嘗て自から歡娛に供せず逢迎、酢醋、誘惡、損貸、驕奢は勿論絕えて釣名機利の意なく貧儉貧約曼如として樂しむ保己一繁華を避け榮盛を厭ふと雖も從游日に盛んに聲名月に興り官の和學講談所に用ひられ惣檢校に任ぜらる保己一保元以降諸家の記錄雜書の永く湮沒して世に顯はれざるを嘆じ海內を拽集して之を校訂し以て上梓す總て一千二百七十三種六百三十五卷各書皆類を以て纂編す故に群書類從と名く數百年來先儒の著書後世に廢棄して知る者なかりしも是に依りて不朽に傳はる次で續集千百八十五卷成り將に刻せんとす偶ま文政四年九月十二日病歿す年七十六法號を和學院前惣檢校心眼智光居士とす保己一初め江戸に至るや年尙ほ少一日某商に詣る會會衆蒼頭舖頭に立て一片紙を傳觀し其の記する所の卷名を按ず保己一側に在り之に叩きて曰く其の字水偏に義の勞知らず何音なるやと保己一則ち應へて曰く是れ必ず油巷ならんと是に於て人を其の地に遣はして之を問ふ事果して辨ずる為に行り紙鑑きて曰く何を以て之を知る保己一曰く鑑し當初書を作る者油の字を知らず勞人之に敎へて曰く水を偏となし由を勞となせと由義邦音相通ず故に之を誤るのみと既にして之を問ふに果

して然り著はす所鶴林玉露、晶親譜畧、椒邸譜畧、武家名目抄史料、紫瓊小、花咲松、總隆集（後ち松山集と改む）等あり（事實文獨、香亭雜談、續諸家人物志、鑒定便覽）

ハナハ　マタザブラウ　塙又三郎　勤王の志士なり水戸藩士諱は重義又三郎と稱す幼より才鋭く大志あり文久年中鎌に京都に如き諸藩の志士に交り寡ち尊王攘夷の說を唱へ密に圖る所あり元治元年水戸甲子の變に際し松平甲斐守鎧鎗使として之に向ふに及び同志の人々之に隨ふ者多かりしが獨り重義は考ふる所あり立花氏順根本義次等と議を協せ死士數百人を募り水戸の近傍に至りしかど諸藩の兵所々に屯し警固最も嚴にして其志容易に行はれ難きを見更に謀を變じて横濱に出で外國人を壓殺せんとて引返し鹿島に赴く途中幕府の大軍に遇ひ九月六日大船津に戰ひしが遂に圍を脫して前野村に至りしに八州巡廻の吏に捕へられ下總國岩井に禁錮せらる十一月四日斬に處せらる時に年僅に十九（殉難錄稿）

ハナブサ　イツケイ　英一珪（或は一桂に作る）一蝶四世の孫にして名は信重（一に重信に作る）一川の男なり畫法を父に學ぶ本所柳島に住せしが後に林町邊に移る天保十四年十一月（或は十二月廿一日に作る）歿す年九十六（辭世の歌に「百まではなんでもないとおもひしに九十六ではあまり早死」（或書八十五に作る）（廣益諸家人名錄、歌川家列傳）

ハナブサ　イツシウ　英一舟　二世一蝶の義子なり（一に初代一蝶の養子に作る）名は信種彌三郎と稱す一舟は其の號又東窓翁、潮窓の號あり父の畫法を繼ぎて同く戲畫に長じ明和五年正月二十三日歿す（一に廿七日に作る）年七十一江戸二本榎承教寺中顯乘院に葬る（扶桑畫人傳、文風堂雜纂、鑒定便覽、墓所一覽）

ハナブサ　イツシヤウ　英一幃　畫家なり一蝶の門人なり寶暦十年四月二十八日歿す年七十（鑒定便覽）

ハナブサ　イツセン　英一川　英一舟の男なり家伝を守りて戲畫を能くせり安永七年正月廿八日歿す（鑒定便覽、扶桑畫人傳、見ぬ世の友）

ハナブサ　イツテウ　英一蜩　畫家なり二世一蝶の二男百松溪雲と號す後ち源内と改む父の風を得て戲畫を能くせり（鑒定便覽）

ハナブサ　イツテフ　英一蝶　畫人なり本氏は多賀、名は安雄、字は君受、幼名は伊三郎長じて治右衛門又助之進と稱す一蝶は其の號「又た翠簑翁、牛丸、舊斗堂、一蝶閑人、一閑山人、隣禮庵、隣壽庵、曉雲、雲堂の數號あり六巣、潤雪、寶蕉、利央（一に應に作る）雲堂の數號あり大阪の人某侯の侍醫多賀伯庵の子なり年十五にして父と共に江戸に移り吳服町新道に住す畫を狩野安雄と稱すと雖も遂に妙手に至る人物花鳥を善くす當時者家に佐玄龍佐文山あり俳諧に芭蕉其角風雪あり金工に横谷宗珉あり通客に紀伊國屋文左衛門あり皆な親睦の友なり故に畫風に自ら俳興ありて觀るもの頗を解くに至る遠く鳥羽僧正を距るの後ち戲畫は玄龍に學びて之を能くし書畫一筆の名圖あり一蝶の畫風は斯の如き為て或は浮世繪の評を下すものあるも其の實は狩野家の正風にして時に戲畫を描くと雖も一蝶は中佛像師村田民部と謀り戲に當世百人首事歌政者が詩るに坐し十一年十二月三日三宅島に配せられ阿古邑に居す時に年四十七在留十二年を召し之を縛せしむ秀家唯々して去る一町餘秀吉呼び返して曰く彼も亦た士なり自殺せしむべし秀家去る復た呼て曰く今四海の内吾に對し罵詈す勇士なり必ず殺す勿れ祿邑を增賜すべしと秀吉薨ず德川家康に謁す關原の戰及び大阪の兩役並に從て功あり後秀家八丈島に在り人に謂て曰く我內地に還り花房に因り白米を食て滿腹せば死すとも悔なしと嘗て土井利勝に懇り請て秀家が世を終る迄白米二十俵を贈る毎年絕えず子孫世々幕府に仕ふ（野史）

ハナブンゴ　ミヤ　鼻豐後「フヂハラヨリスケ」

ハナマチノ　ミヤ　花町宮（第一世）「クニミシンワウ」

ハナマチノ　ミヤ　花町宮（第二世）「ユキヒトシンワウ」

ハナヤギ　ジュスケ　花柳壽輔　俳優振付の名人なり晩に壽輔と號す葺屋町の鮫商鮫金の子に

して吉原の臺屋鶴岡吉五郎に養はれ幼名を芳次郎と云ふ初め七代目市川團十郎の門に入り俳優となり市川鯉吉と號し子供芝居の女形に扮し好評あり父死し團十郎江戸を逐はるゝに及び宮地芝居の劇場に出演し後二代目四川扇藏の門に入り舞踏を學ぶ四川芳次郎と號し師に從て劇場の振付と舞踏の教授を業とす師後に七之助と改め尊で歿するに及び高弟已之助當さに其統を繼ぐべきに芳次郎竊かに自ら之に當らんと謀る事師の未亡人に洩れ義絕せらるゝに及び吉原に住し藝妓に舞踏を教授せり後市村羽左衛門十二世及び中村歌右衛門等の庇護に依り再び振附となる時に妓樓玉屋山三郎の家に清人某の筆に花柳園と題せる扁額あり芳次郎之を請ひて家に掲げ仍て姓を花柳と改む又市川海老藏より壽海老人の偏字を讓られ壽輔と改む時に中村座の振付世家眞大助（初め岩井紫子松と云ふ振付の巧手なり）大阪に變死し三世扇藏（前に云ふ已之助）名を繼ぎて幾くならずして歿し壽輔の名漸く鳴り十三世尾上菊五郎助高屋高助九世團十郎皆な振附を壽輔に待つに至り猿若町三座に出入す明治以後新富座に紅葉狩の劇あり壽輔之に關して團十郎と瑞を生じ爲に團十郎に用ひられざるに至りしも他の大小劇場に勢力あること古今に絕す老て頗る健明治三十六年一月廿八日歿す年八十四舞踏の師に花柳氏を稱する者壽輔を以て祖とす

ハナレゴマ　シロウザエモン　放駒四郎左衛門　江戸の闘藝家なり四郎兵衛の孫初めて淺草海苔を製す

ハナレゴマ　シラウベエ　放駒四郎兵衛　俠客幡隨院長兵衛の乾兒にして黨中の領袖とす長兵衛水野十郎左衛門の爲めに殺さるゝに及びて唐犬權兵衛等と其の讐を復せんことを謀りて成らず既にして幕府令を下して大に其の黨を逮捕す四郎兵衛路に捕丁に遂ふ捕丁之を捕へんとす四郎兵衛手から一人を投ず餘衆來り圍む乃ち四人を投じ力盡きて捕へらる後冥途小八佐野次郎左衛門等數十人と斬に處せらる（本朝俠客傳、實事譯）

ハナレゴマ　チャウキチ　放駒長吉　大阪天滿町の人性強氣にして角力を能くし頗る任俠の風あり事を以て濕髮長五郎と鬪爭し相擊て斃る（早引人物故事）

ハナヲカ　ズキケン　華岡隨軒（軒一に賢に作る）醫者なり名は震字は伯行、隨軒は其の通稱青洲と號す紀洲の人、祖は尙親父は尙道世々醫を以て業とす隨軒幼にして穎敏氣宇英邁交遊廣く學を承けて醫術を研精す然れども健康を以て京師に遊ぶ桃谷華州山田靜齋諸子を友とし又吉益南涯に從ひて氣血水を講じ又た大和見水を師として外治を學ぶ其の他從游する所常師なしして悟りて曰く世醫の論ずる所は舊方に拘はらず新を出して其の軌を失はず奇策必ずしも局方に拘はらず藥餌の及ばざる所は針灸之を治め針灸の及ばざる所は以て腹背を刻く可く以て臨して之を活用すること能はず又た科を分ちて局と內外と爲して合一の理を知らず是れ安んぞ痼疾を起し沈痾を救ふに足らんやと乃ち翻然去て郷に歸り遂に內外合一活物窮理の說を唱へて曰く凡そ疾を療するは其の處方制を治め針灸の及ばざる所は以て腹背を刻く可く以て臨胃を浚ふ可し苟くも以て人を活す可くんぞ何の爲さゞる所かあらん今闡を言ふ者は理に密にして法に暗なり漠を奉ずる者は法に精くして跡に泥す豈に共に治を論ずべけんやと是に於て諸家を折衷して之を活用す古を本として其の跡に拘らず新を出して其の軌を失はず奇疾異病方書の載せざる所手に隨ひて効を奏せざるなし郷里聞く者始めは驚き且つ排し終りは皆な心服して口に譽め勸して華陀の再出と爲し聲價大に海內に著はる沉痾篤疾に罹りて藥醫療する能はざる者皆な海臭して門に集まり里閭是が爲めに塡塞す凡そ六十六州圖として來らざるなし又た醫生の塾に入りて業を受る者凡そ千三百人國を以て之を數ふれば其の至らざる者止だ大隅壹岐二國のみ著はす所に瘍科瘡言、產科瘡言、痔瘡辨、天刑祕錄、傷寒論義等凡そ二十七種あり皆な其の治術の大意を言ふ常に門人に謂りて曰く吾が術は心に得て手に應ず口言ふ能はず筆書て以て人に授ずるに在るのみと又た曰く余は內治に精覈にして世は外科を以て之を稱す故に蘊未だ盡さざる所あり亦た遺憾ならずや至素施を好み務めて貧困を恤れも此に由りて火を舉ぐる者數十家名あり隨軒撫して己れが嗣と爲す長じて京師に學ぶ吉益南涯に從ひ儒は佐野山陰に學ぶ業既りて和泉堺泄に

ゑ賜ひ特に邑居を許す後ち又た命じて侍醫に準じ俸若干を加へらる天保乙未病を以て歿す年七十六（畫裏、皇國名醫傳）

ハナヲカ　マサヅダ　花岡正貞　其家世世若狹國小濱藩主酒井若狹守の家臣にして父を酒井信之丞と云ひ酒井家の勘定奉行たり母は同藩川村氏の女なり嘉永二年十一月二十三日を以て京都所司代邸に至る三歲にして江戸牛込の藩邸に移住す後ち同藩花岡鈴五郎有順養て嗣子となす幼少にして藩士山岸新八郎に從て漢學を受け後藩憂に入り專ら力を漢學に注ぐ稍〻長じて擊劍拳法馬術砲術を學び刻苦勵精怠らずして技大に進み頓に藩中錚々の名あるに至る慶應四年北越朝命に抗ぎしかば正貞征討總督仁和寺宮の先鋒隊として征討の途に上り七月十七日越後柏崎に著し同日小倉崎に進み遂に木澤口庄內口等の各地に轉戰し九月二十三日金澤藩服罪せしを以て十一月十五日小濱に歸れり明治三年より職を陸軍に奉じ爾來二十餘年善く其任務を盡し累進して陸軍少佐に任じ正六位勳六等に叙せられ第六師團歩兵第十四聯隊第一大隊長たり二十七年八月征清の事起り出師の命下るや長谷川少將等と倶に渡清し旅順口攻擊の際終に命を敵彈に殞したり正貞天資沈毅寡言部下の士卒を愛撫すること殊に深し部下皆從服し爲めに死せんことを思ふ十一月二十一日午前十一時長谷川旅團の鎭冠山の敵壘に突入するや正貞馬を躍らせ前進し大喝部下を指揮す時に敵の銃丸命中し馬より墮つ身已に重傷を負ふも旅手南少兵中尉が軍旗を壘上に樹つるを見て其重傷の苦痛を忘れ軍旗萬歲を絕叫したりと云ふ

ハナヲカ　ヨシヂ　花岡佳治　陸軍歩兵少尉なり愛知縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て後備歩兵第六聯隊附として從軍中廿八年三月五日清國盛京省沙河堡東南方畑地に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ハナヲカ　リャウヘイ　華岡良平　醫者なり名は文鼎字は子微、良平は其の通稱、鹿城又た中州の號あり隨軒の弟、紀州の人始め外傳に就く即ち才名あり隨軒撫して己れが嗣と爲す長じて京師に學ぶ吉益南涯に從ひ儒は佐野山陰に學ぶ業既りて和泉堺泄に

居る醫案超敏、儕輩之を推す後大阪に徙る衛益〻行はる年未だ五十に滿たず病みて歿す時人之を惜む著はす所鹿城醫譚あり（皇國名醫傳）

ハニツ　レイシ　土津靈師「ホシナマサユキ」

ハニフ　ガウエモン　羽生郷右衛門　何れの國の産なるやを知らず慶安中浪人して江戸に居る同四年由井正雪の事あるに當り幕府悉く江戸在住の浪人を呼出し評定所に於て委細の取調をなす郷右衛門も亦呼出さる郷右衛門法廷に入り喝呼して曰く拙者は羽生郷右衛門と云ふ浪人なり身不肖ながら天下の爲に難を除き害を防がんとするを以て平常の志とす由井正雪の如き反者に黨する痴人にあらず若し廷丁の棒端拙者が身に觸るゝ事あらんには多人と雖も長ゝ所なし必ず酬ゆる所あらんと詳に尋問の條を答辯し靜に引退く郷右衛門時に垢染たる木綿の單衣を衣るのみ（正雪の自殺は慶安四年七月二十六日の事なれば此時は同年八月中にもやありけん）而して其尋問に應ずる時に至り擧動從容として迫らず然も凜然犯すべからざる威儀あり評定所一應擧りて感歎せざるはなく當時紛問せし浪士中第一等の人物なりと評す評定所留役鈴木某は因州侯に因故あり此の事を侯に語る侯即ち有司に命じて急に之に辟さしむ有司郷右衛門を藩邸に召して曰く卿何藝を能くする郷右衛門答へて曰く臣別に藝とするなし唯〻飯粒を以て糊を作るの技は少しく人に異なるべしといふ試みに推糊板に飯粒を盛りて與ふ郷右衛門瞬間に推して糊とし之を練るに拍子を取り糊を空に弄すると恰も粟餅實の粟餅に於るが如く其の妙を極む有司心中其の意外に驚き更に問て曰く推糊の技は頗る感心せり但し此の外武藝に於ては別に學ぶ所なきやと郷右衛門笑て曰く武士が武藝を知るは矢師が矢を矧ぎ鍛冶の鐵を鍛ふると同じく固より言ふを俟たざるなり然るを殊更何藝を知るやとの問に接し遊藝の事と了解して乃ち推糊の事を答ふるのみ武藝に於ては弓馬鎗刀各〻一斑を等くせり但し其の能否の如きは傍觀の公評を俟たんと乃ち其の試を受けしむるに其の技各〻奥妙を極む即時に三百石を以て士となし藩士に師範たり當時劍術修行家の鳥取城下を經過する者必ず羽生を訪はざるはなく訪へば必ず自ら親しく其の對手となり勝負を決するものの前後二十餘回にして未だ一回も敗を取らずと云ふ貞享二年病て歿す島取城下鍛物町慶福寺に葬る遺影刻す「世の中をめぐり〳〵て因幡路にしばらく足を引曰となる」墳墓今尚ほ存すといふ

ハニフ　ダウヤ　羽生道也　陸軍歩兵中尉なり鹿兒島縣熊毛郡北種子村の人東京美術學校に遊び日本畫科を修め明治二十九年業を卒ふ此年一年志願兵として入營し除隊後少尉に任ぜらる三十二年佐賀縣師範學校教諭に任ぜられ尋で又農事試驗場に奉職し農業上に貢獻する所あり三十七年日露戰役起るに及び召集せられて第六師團歩兵第四十五聯隊附として從軍し同年八月三十日清國盛京省マエトウンに於て戰死す年三十其著はす所のもの日本稻作害虫圖説明書、重要農作物害虫圖、稻作害虫驅除圖、日本桑樹害虫圖、日本茶樹害虫圖等あり戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ハニフ　ボウサイ　羽生懋齋　紀伊の漢學者なり名は遠業、五郎と解す制度通考、船舶通考、防海紀畧、鎣不恤緯、問答十案等の著あり（漢學者著述目錄）

ハニヤスヒメ　埴安媛　孝元帝の妃なり河内青玉繫の女武埴安彦命を生む（大日本史）

ハニヤスビコノカミ　波邇夜須毘古神　伊奘那岐神の第二十二子なり傳へ云ふ母尊病床に在る時其の屎那岐神の屎中より生ずと靈士の神なり（古事記）

ハニヤスビメノカミ　波邇夜須毘賣神　ハニヤスビコノカミに夾ぎて伊奘那美神の屎中より生るると云ふヒノヤギハヤチノカミの妻となる一の名をハニヤマヒメと云ふ（古事記）

ハネダ　ゴラウ　羽田五郎　足利時代の漆工にして奈良の法界門の邊に住すよりて人皆其の製品を呼びて法界門塗といふ茶器を製する最多し中に就き著明なるは羽田盆なり其の製は盆の内外を眞塗にせしなり一説に黒の茶入は五郎か創製せしなりと（工藝志料、塗師傳）

ハバ　キンラチ　馬場金埒　狂歌師なり江戸數寄屋橋外數寄屋町二丁目に住し家號は錢屋俗に大阪屋甚兵衛と稱す別に滄洲樓と號して夙に狂歌を能くし四方側狂歌四天王の一人と稱せらる文化四年十二月歿す

ハバ　シュンスキ　馬場春水　江戸の書家なり名は政房條助と稱し青池堂と號す寛延元年八月十四日歿す年八十六市谷長昌寺に葬る（江戸名家墓所一覽）

ハバ　ショクフ　馬場職夫　文政五年七月二十七日を以て江戸淺草厨町邸内の宅に歿すこれを城北下谷宗延寺に葬る職夫名は良由豐里と號し佐十郎と稱す源姓三栖谷氏職夫は其の字肥前長崎の人なり伯兄馬場貞暦子なし職夫を養ひて嗣と爲す馬場氏世〻和蘭の通事たり職夫最も醫譯に長し又た好みて西洋窮理の說を爲す文化初年の比佐藤坦幕府の命を奉して萬國全圖を補訂す因て廣く洋書を檢索す而して醫譯其の人に乏しきに苦しむ是に於て建白して職夫を召し崎ばら醫譯に任ず會〻俄羅斯國書簡を呈して之を譯せしむ職夫未だ其の語に通ぜず因て多方諸詢し乃ち能く之を譯して進呈す辛未の歳十二月に至り官廩米歳銀且佩刀を賜ふて士に視らふ是より先き俄羅斯屢〻北海に寇す官其の舶會等七名を房にして是を松前に幽す是に至り職夫を召して親しく接して其の語を得せしむ居ること未だ期ならずして略〻能く通曉す既に還りて俄羅斯語學小成す一卷を述て進呈す甲戌の歳四月に至り擢て蒙賀港に突入する有り言語通ぜず民惰驕然又職夫なしてこれを鞫問せしむ職夫往て船將に接し曲に事情を得乃ち之を嘘して去らしむ職夫人と爲り易直靜默然れども其の自得する所を語るに及びては則ち崛々未だ嘗て倦怠を知らず幼にして中野柳圃に從學す蓋醫譯の學柳圃を以て精と爲す而して職夫を出藍と爲す然るに齡僅かに三十六歳にして病んで卒す（事實文編未定稿）

ババ　ゾンギ　馬場存義　江戸の俳人なり信房の末孫にして三浦氏に仕る春來泰室に從て俳諧を善くす初名は泰里別に李井庵、古來庵、有無庵の號あり服部南郭に從ひて儒を學ぶ既にして寛に其名を成す能はざるを悟り翻然俳道に入る後南郭に遇ひて廢學の罪を謝す南郭笑て曰く汝儒を學ぶとも程朱に勝ると能は

ず況んや顏回子貢をや而して今俳諧は汝の以て名を成すに足るべき者なり能く勤めば良德芭蕉と肩を比ぶると雖からじと泰里再拜して退き終に名を俳道に擧ぐ天明二年十月三十日歿す年八十一淺草誓願寺に葬る（墓所一覽、俳林小傳）

ババ　タツキ　馬場辰猪　土佐人馬場來八の男明治十四年自由黨組織の大會に當り選まれて副議長となる而も黨の將來を憂し其員となるを肯ぜず唯〻隱然力を盡すべきを誓ふ衆曰く今や黨を組織せんとするに當り名望あり實力ある者ありて能く之を統轄するに非ざれば不可なりゝ諸友勸て同黨に入れ副議長となす議長は後藤象次郎なりしも馬場副議長の資格を以て實際議長の務に當り時同黨の總理板垣退助其の志を述て云ふ予が今後の進退擧動は都て黨員の衆議に從ひ決して一人の私を以てせざるべしと其の頃自由黨の範圍は極めて廣く都鄙遠近の政社殆ど之に應ぜざる者無し蓋し板垣の所說は專制政府の下に政黨を組織せんと欲する者は勢ひ中央集權の筆法を用ひて各社の勢を一所に集め以て政府に對するに非ざれば黨勢甚だ微弱なるを免れずと云ふにあり辰猪及び大石正巳等は之に反對して米國聯邦の體裁に則とり各社を各州として各隨意に運動せしめ以て黨勢を張るに如かずと逃べたりしも遂に聽かざりしより幾ならずして分離する者多く種〻異名の黨派を生ずるに至る時に板垣偶〻海外に遊ばんとす辰猪は大石末廣重恭等と共に洋行の非なるを論じて曰く今の自由黨は喩へば船の構造既に竣功して將に港航を始むる能はずと言を盡して論じたれども其の用ひられざるを知り遂に脱黨す當時自由黨より分離せし者贊成し大石等と共に各地方に遊說し孜々として自黨を集むるに勉めたりしかど世人は之を目して獨立黨の名を下せり斯て又一方には明治義塾を創始して俊才を養成し訴訟鑑定所を創めて法律上の事務に從事せり又た當時洋行者の珍重せらるゝ時節なりしを以て官亦た屢〻之を採用せんとせしこと度〻なりしに曾て之を顧みずして曰く曾て現政府の反對に立ちたる志操は飽までも之を持續して政治家の節義を全うせんことを期すと辰猪未だ曾て細君を娶らず其の說に曰く日本前途の形勢を案じ來れば盤錯縱横して紛雜測られざるもの多きが如し予も亦た國家の重きを擔ふ者なれば此の間に處して或は奇禍に罹るを免れざらん予今單獨の身にして猶ほ且つ朋友を煩はすこと多きに猶妻子の累を遺すが如きことあらば曾に朋友に對して心苦しきのみならず亦た以て悲を妻子に與ふるのみ吾を生むの親は之に奉ぜざる可らざれども家庭の快樂は未だ敢て望まずと明治十八年十一月爆發藥事件にて其筋の嫌疑を被り寃を呑て獄窓の月に呻吟す既にして無罪の宣告を受け獄を出づるや直ちに米國に赴きて演說に新聞に論述する所多し世人或は之を認めて恰も本國の不平に堪へずして破壞黨を外國に募るが如く云ひ做せるものあり然れども辰猪の意は然らず曰く西洋諸國の日本を目するや政府は獨り文明の域に進んで人民は之に伴はざる者未だ以て眞の文明國となすに足らずとするの趣あるが故に今自由黨が政治上に勢力を得るに當りても西洋諸國は之を以て過に民間の狂暴者が前後を顧みずして壓擾するものと見做すなきを期す可らず現に開國維新の際も故に之を辯明するは方今の急務也と往年英國滯在の時に類似したる實例あり是れ前途の爲め其だ憂ふべし利し種〻の小册子を出版せしも乃ち此の意に出でしなり其の之を辯明するや都て之を學問上よりして曾て米國に於て日本古代の武器を說明せしが如き專ら學問的に歩武を進めて我が人文の程度を說き人民の政府に反對するものは決して變亂黨に非らざるを示せり明治二十一年十一月三日病に罹り米國に客死す年三十九

ババ　チクハ　馬場竹坡　名は文安字は士恭美濃の人にして江戸に住す天保頃の書家なり（廣益諸家人名錄二編）

ババ　トウカウ　馬場董岡　江戸の書家なり名は政宣董水の子なり

ババ　トウスキ　馬場董水　江戸の書家なり名は政隆春水の子青海堂と號す明和三年九月二十七日歿す年七十八市谷長昌寺に葬る（江戸名家墓所一覽）

ババ　ノブオキ　馬場信意　玄隆と號す京師の人なり信武の子和學を好み通俗軍書を多く編輯せり後に柳隆子山川素石と改名し父の業か嗣ぎて專ら神書を購讀す享保十三年三月八日歿す洛東鳥部山に葬る著す所演義體の軍書多し（墓誌、戯曲小說通志）

ババ　ノブカツ　馬場信勝　武田氏の奥將なり本と敎來石氏（一に敬禪寺氏に作る）初の名は景政又氏勝と名く氏部少輔と稱す世〻武田氏に仕ふ信勝の族馬場虎貞屢〻事を以て武田信虎を諫む信虎之を殺す信虎の子晴信立て虎貞の後なき為憐み信勝に命じて其の家を承がしむ是に於て馬場氏を冒す晴信偏諱を賜ふ因て名を信房と更む又信春と曰ふ後今の名に改む資性總敏にして志節あり髫齡學に就く尤も軍略に通曉す五十騎長となる今川義元北條氏康と隙を生ず信勝義元を援けて氏康を擊つ向ふ所披靡す首を斬ること二百義元其の功を多とす永祿二年晴信壯男七十騎を遇みて信勝に隸す前に合して百二十騎を有す後又百騎を加へらる四年上杉輝虎來り侵す晴信關志なし信勝飯富虎昌等と戰ふ勝ち晴信業より信勝を重んず則ち意を決して河中島に戰ふ是の歲原虎種死す虎種美濃守と稱す驍健比なし晴信虎種を追思して曰く彼の稱號に堪ゆる者は信勝に非らざれば不可なりと因て命じて美濃守を襲はしむ又た諱の字を賜ふて信房と更名せしむ九年牧野の城將となる十一年晴信に從て駿河を討つ今川氏國を委て〻遁れ走る甲斐の將士爭て金帛財物の府庫に赴く獨り信勝之を顧みず逕に牙城に入りて火を縱つ十二年晴信北條氏康と相持す跡部勝資三百騎を以て敵將松田氏を擊ちて利を失ふ晴信代り擊たんと欲す然れども其の人を難んず縱信勝を推す時に信勝の兵僅かに百騎松田氏の兵二千五百皆な信勝を危む信勝兵を分て三隊となし大に之に勝つ既にして山縣昌景の兵と合し北條氏照を擊ちて又た之に勝つ晴信師老ゆ信勝諫めて歸る晴信再擧して北條氏を討つ信勝信濃を守る信勝心に晴信を危む乃ち別將を留めて自ら追ひて晴信に松山に及ぶ元龜元年華澤新に隍陸崩壊たり晴信命じて之を修繕せしむ信勝其の役を督す信勝固より築城に精し土物を積り材用を慮り以て甚だ守禦の要を得更に田中城と名く又江尻城を經營す三年德川家康を攻て味方原に戰師の人なり信武の子和學を好み通俗軍書を多く編輯せ

を爲す天正元年晴信に從ひて四繼田信長を伐つ信長万騎出でゝ拒ぐ信勝八百騎を以て之に馳す信長戰はずして走る是の歳晴信卒す子勝頼立つ初め晴信孫子の語を以て旗に書して曰く其疾如し風、其徐如し林、侵掠如し火、不動如し山と信勝晴信に謂て曰く風は疾しと雖も或は倏ち起り倏ち止むあり可ならんやと晴信曰く兵は疾きを尚ぶ苟くも止まれば則ち麾下を以て纏き進まんのみと信勝曰く君は第二合の勝を奚せりと其の君臣戎事を練究するを率れ此の類なり勝頼兵を好みて謀なし信勝等諸老臣交々勝頼を諫て曰く先君遺命して曰く慎みて兵を好むなかれ宜しく上杉輝虎に和して以て國の永久を計るべしと勝頼聽かず兵を出だして遠江を擊つ敵伏を燔柴に設け營を撤して遁るゝ窘れして以て我が兵を誘ふ衆之を蹈まんと欲す信勝曰く烟は白し營を燔くに非ず是れ伴り遁るゝなりと人をして往て覘はしむ果たして伏あり之を頃くし敵久し叢林の間に伏し銃を持して勝頼を狙ふ信勝其の人を生擒す勝頼諏訪原に城く信勝武田信豐と其の役を督す三年信勝勝頼に從て長篠城を圍む德川織田の二氏大舉長篠を援く信勝等諫て曰く敵衆新に至る我が疲師を以て之に角せば恐くは兵を損せんを沮む信勝乃ち疾く攻め城を拔て歸らんとを請ふ二人復た沮みて曰く敵を見て退くは大丈夫に非ず老怯の策なり社稷の故を以て強いて言ふのみ詰且準に臨みて老法必ず死せん二子の如きは必ず挺走せんと既に戰ふ調閑勝資果して走る闔軍大に亂る信勝首を斬ること四十三然れども多く士卒を損す和田某信勝に謂て曰く子盍んぞ退かざると信勝曰く未だ君の存否を知らず予焉んぞ獨りに退くを得んと即ち人を使はし馳て勝頼に告て曰く君速に去れ臣留りて之に死せんと乃ち高邱に登り勝頼の去るを望み稍く其の遠きに至るに及び士卒に謂て曰く今朝我が部兵七百皆な鋒鏑に死す而して餘す所僅に八十のみ卿等危に臨みて棄離せず其の勞苦至れり今卿等と訣れん卿等歸りて府城の父老を見ば幸に予が意を致せと皆な曰く死生子に從はんと信勝則ち敵を呼びて曰く我は馬場信勝なり盍ぞ斬りて重賞を受けざると敵兵四集し悉く我が士を殺す信勝遂に自刎す時に天正三年五月二十一日年六十二初め甲斐四邊多事にして重臣身矢石に當る原虎繩創を被る五十三、小幡虎盛創を被る四十、山本晴行創を被る六十三、自餘の將校大率れ斯の如し獨り信勝一創なし戰功を著はすもの二十一、大捷を得るもの九或る人嘗て信勝に問て曰く子何の方に能く克つと信勝曰く戰に臨みて先づ其の勝つ可きを謀りて能く克つと信勝曰く吾れ野戰は小幡山城に倣ひ攻城は山本道鬼に倣ふと一日諸將天下の豪傑を論じて上杉、北條、織田、德川の四氏に及ぶ時に德川氏國最も小なり而して信勝曰く懼る可きは唯々德川なり三氏の比に非ず織田地大なりと雖も其の臣を封ずるに過ぐ所謂る尾大掉はざるものの必ず自ら斃するの道なりと後ち果して其の言の如し信勝嘗て儒士を召して書を講ぜしむ儒士曰く昔日諸葛亮隲欽に在り劉備亮に詣るとん得たり有爲の者然らざる可らずと時に偶ま甘利氏の使至る信勝鄭重之を待す儒士怪しみ問て曰く子は國主を以て下士を禮する奚ぞ太だ遽きと信勝曰く劉備は天下の豪傑を論じて曰く我が三氏に徳

人なり(茶人系傳全集)

ハマダ ヤヘエ 濱田彌兵衛 長崎の商人、勇にして謀あり嘗て弟小左衛門子新藏等と海に航して臺灣島に到る是より先き支那の逸民を招き其の霸顏振泉衆を聚めて之に據り我邦の逸民を招き其の霸に入れ因て自ら日本甲螺と稱す蓋し甲螺は頭目の義なり後ち我逸民代りて甲螺と爲る時に紅毛夷來りて地を借り鹿皮三萬を輸せんとを約し既にして城郭を築き之に據り又た前約を履まず且つ我商船の印度に往く者其の近海を過ぐれば爲めに殺掠せらる甲螺之を如何ともする能はず此に至りて衆走りて之を彌兵衛に訴へ共に報復せんことを圖る彌兵衛之を許す乃ち甲螺の徒二十人と還りて之を幕府に請ふ幕府之を允るし長崎代官末次平藏に檄し船を備へ卒を募りて之に强兵を附す彌兵衛盡く其の從兵數百を率ひて農夫を爲し箬笠を被むり鍬鎌を持して行て臺灣海口に到り守吏に請ひて曰く日本の倭臺地の土廣く人寡くして中に菜蕪多しと聞き移住して以て之を開墾せんと欲すと守吏以て甲必丹に告ぐ信ぜず喻船を以て之を圍むと數重遽かに上陸を許さず入をして來り盲はしめて曰く汝の來るは決して好意に非す然らざれば何ぞ人を從ふることの衆きや彌兵衛曰く噫公何んぞ人を疑ふことの甚だしきや但し日本をして海外の國を略せんと欲せしめば將に猛將精兵を遣はして來る可し日本素と其の人に乏しからず奚んぞ我憊小民を使ふことを之れ爲んと守吏舟中を檢するに僅かに數十の防身刀あり其の他は唯く耕耨の具に肯たるのみ還りて備さに甲必丹に告ぐ甲必丹意稍々解け乃ち衆に上陸を許す彌兵衛等城に入りて甲必丹に謁見することを得鷹を受けて俱たらんことを請ふ許さず本邦に還へらんことを請ふ亦た許さず留まること數月屢々入りて之を請ふ甲必丹依違して答へず彌兵衛衆に謂て曰く甲必丹我に去留を許さゞる其の意測るべからず大丈夫不測の地に入らば當さに死中に活を求む可き耳と衆憤然として之に死せんと欲す一日昧爽に彌兵衛父子兄弟三人城に入る衆之に從ひて門外に留る三人身を挺んで闥を排きて進む甲必丹猶ほ寢れて床に在り驚き起きて叱して曰く汝等人の闥闕に入る何んぞ夫れ無禮なると彌兵衛嗤哮奮前して甲必丹が眉に擬し慣より匕首を出して其の喉に擬して曰く汝死罪あり尚ほ何んぞ人の無禮を告むるやと左右之を刃せんと欲す小左新藏刀を拔て遮ぎり立ち目を瞋らして之を叱す左右披靡して敢へて逼まらず甲必丹惶懼して命を乞ふ彌兵衛曰く汝生きんと欲ずば何ぞ城上の放礮を停めざる甲必丹曰く諾みて命を奉ぜん曰く汝嚮きに掠むる所の貨は倍數にして之を還へせ甲必丹曰く唯々命之れ從はんと彌兵衛乃ち左手に甲必丹の臂を扼し右手に匕首を執りて俱に起つ小左新藏其前後を擁して出づ爽卒敢て動かず甲必丹命を傳へて放礮を停め其の卒なして蠻船一隻及び日本船二隻を艤して裝貨山のごとく積ましむ彌兵衛入りて之を檢し乃ち甲必丹を拉て俱に去らんと欲す曰く島民皆な某の指揮を仰ぐ某去らば則ち俱々乎として歸する所なし某に一見あり年十二歳願はくは某に代て從去せんとを公幸に愛憐を垂れよと彌兵衛乃ち其の子及び頭目數人を質として鎮臺に歸り報ず鎮臺幕府に稟して厚く之を賞す是に於て彌兵衛の名一時に震ふ肥後侯聘して之に祿す時に寛永五年なり後三十餘年鄭成功紅毛を攘ひて臺地を復す猶原田孫七郎の傳參看すべし(事實文編)

ハマチドリノ カンヌシ 濱千鳥の神主「ナカトミスケシゲ」

ハマチ ヨウザン 濱池庸山「ハマイケヨウザン」

ハマナカ タクダウ 濱中琢堂 書家なり名は英信字は信梅通稱は真輔架天翁と號す(續墓所一覽)

ハマナカ ナホキチ 濱中猶吉 和歌山縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て機關士なり其の後日露戰役に從事中三十八年八月二十五日清國盛京省安東縣にて病に罹り同九月十九日同所兵站病院に於て死去す

ハマナカ ヤキチ 濱中彌吉 陸軍步兵中尉なり三重縣出身にして明治三十七八年日露戰役に際し獨立步兵第三十三聯隊附として從軍中三十七年十二月十二日清國盛京省千家窪永五年今年七十二

ハマノ トモユキ 濱野知隨 江戸神田鍛冶町に住し俗稱金左衛門と稱す後鍛冶と改む政隨の弟子にして刀劍彫刻の名工なり(裝劍奇賞)

ハマノ ノリユキ 濱野矩隨(初代) 江戸有名の金工なり政隨の門人忠五郎と稱し蓋雲堂又た望窓軒と號す神田小柳町に住し天明七年八月二十九日歿す(古今金工便覽)

ハマノ ノリユキ 濱野矩隨(二世) 金工なり初め熟野松次郎と稱す十四歳にして初世矩隨に從ひ政方と稱し後矩施と改め二十三歳にして終に師の名を繼ぐ松壽軒は其一號なり嘉永五年七月朔歿す年八十二(古今金工便覽)

ハマノ マサユキ 濱野政隨 金工なり太郎兵衛と稱す乙柳軒・味墨・閑經・鶴風堂・子順・遊雷亭・秋峰齋・半圭子・一瞬庵・玉溪舍・圭實等の號あり奈良利壽の門人明和六年十月二十六日歿す年七十二(新刀實鑒)

ハマベ ツネキチ 濱邊常吉 陸軍三等主計なり三重縣出身にして明治三十七八年日露戰役に際し獨備役より召集せられ步兵第五聯隊附として從軍中三十七年十二月廿五日清國盛京省遼陽に病に罹り歸國後廿八年一月廿一日大阪豫備病院に於て病死す

ハマベノ クロンド 濱邊黑人 狂歌師なり俗稱三河屋半兵衛本芝二丁目書舗の主人なり老後剃髮して鬚を染め青色の禮服を着す人鬚まで黑人と綽名せり其頃元杢綱は美男にして常に居士衣を着し紫の服紗に包みたるものを背に擔ひ居りしを以て常時の諺に云ふ杢綱は兼好を一度湯がきたる如く黑人は文覺を油揚となしたるが如しと現今狂歌社會にて入花と稱し點料を出すは此の黑人より始まれり最も古き狂歌師にして其名世に高し歿年を詳にせず(古今狂歌人物誌)

ハマムラ クイカイ 濱村大澥 篆刻家なり四世藏六居士と號す備州の人彫刻に名あり又詩書を善くす明治二十八年二月二十四日肺を疾みて歿す

ハマムラヤ ハマモモ 濱藻 濱村屋「セガハキクノジョウ」江戸の俳人五十嵐梅夫の女(人名錄)

バンアジドノ 鏝阿寺殿「アシカガヨシカネ」

ハンイン 半隱「キクチハンイン」

ハンインサイ 半隱齋「ハリヤソウシュン」

バンウヂアキ 番氏明 景次の子、大膳利隆に從ひ大阪を攻む利隆故ありて中島に逗留す時に訛言あり曰く利隆貳心を懷く故に兵を按して前まずと康慰りて其の封を收めんと欲す氏明爲めに陳謝す家康許さずして入る氏明追隨其の裾を牽き死を以て爭辯す聲涙並び下る家康其の忠を嘉みして乃ち許す利隆の封を全うするは氏明の力居多なり(續日本史、野史)

バンウン 伴雲「シマヅケイザン」

ハンエン 範宴「シンラン」

ハンカイ 半海「ハトリハンカイ」

バンカイアン ソウサン 卍海宗珊 諱は宗珊其號は卍海、自ら恒堂と稱す寶永三年十二月廿七日京都增田氏の家に生る幼にして出家し寶圓大乘寺の諸剃に遍參し遂に白龍の室に入つて法を嗣ぎ後永平に勅住す著す所禪戒訣の註解、圖譜等あり年六十一(行業記)

ハンカウ 半香「フクダハンカウ」

ハンカウ 半江「ヨカダハンカウ」

ハンカウ 晩香「イハヰバンカウ」

バンカウ 晩香「ヨカベキクグワイ」

バンカウ 晩香「ニシゴリバンカウ」

バンカウイ 伴蒿蹊 有名の國學者なり名は資芳、閑田子と號す近江八幡の豪富の子なり少より文雅を好み京師に出で、初め和學を有賀長伯に學び後ち武者小路實岳の門に入る實岳歿去の後獨り古學を研究し遂に一家を成す文章和歌を以て一時に鳴る當時平安に於て蘆菴・澄月・慈延と蒿蹊を併せ稱して四天王と曰ふ京師大佛の邊に住し其の居閑を田廬と號す故に自ら閑田子と稱す優遊著作を事とす兼て漢學を善くし且つ佛理を究む林泉院六如上人と方外の交を結ぶ上人嘗て詩を作りて之れに贈る其の詩に曰く老來幾部著書成、祇道屏居遂情情、最是紙田閑不得、長遊筆乘四時耕と蒿蹊乃ち悅びて曰く此の詩は予の實錄なりと其の人となり篤厚溫順妙法院の宮殊に寵遇す文化三年七月二十五日歿す洛東智恩院に葬る年七十四著はす所閑田耕筆、近世畸人傳、同續、國文世々の跡、譯文章喩、勝地吐懷編、加具つちのあらび、大和物語補翼抄、閑田文草、閑田詩草、閑田の早苗、增補題字要解、庭の訓抄、諸辭要解、萬葉類業代匠記句解、同續篇等あり(近世叢語、世六家集略傳、續諸家人物志)

バン カウチク 伴香竹 水戸藩の和學者なり名は暢字は叔雄香竹は其の號、武平と稱す美作の人なり和歌を善くし書に工なり初長劔を横たへ四方に周遊して那珂湊に至る村島與十郎と云ふ者其の和歌を賞す乃ち武平を招き聞きて義公に告す公時に晒落亭に在り月日く「さゞなみの八重にたゝめる高殿の手にとるばかり見ゆる月かげ」と公覽て安藤爲實に示す爲實一見賞嘆して曰く「この體尋常の人の詠ずべき者に非ず」と是に於て召されて奉仕す萬葉集の註釋に參預す嘗て歌林備考を著はす安藤爲章見て諺りて曰く備考は人の作を竊みし者なりと香竹亦た爲章が萬葉の釋義を駁して曰く義公の意に異なる者なりと蓋し二人相和せざるに出づるなり晚年中風を疾みて死す辭世の歌に曰く「今までの武平は石に身をかへて歌もよまれずものもいはれず」其の子助當詞の鄙俚を患へて改刪せんと欲す人皆之を止む(書畫得聞)

ハンガク 板額 城九郎資國の女にして小太郎資盛の族なり建仁元年頼家資盛の叔父長茂を執へて之を誅す資盛爲めに仇を報ひんと欲し兵を起して臺を越後鳥坂に築て之に據る頼家佐々木盛綱を使はして之を擊たしむ資盛の士卒殊死して戰ふ矢下ること雨の如し盛綱兵多く死傷す板額雄桀多力善く射る能て兵略あり東髮して童形の如くし腹卷を著け帽上より射發して中らざるなし信濃の人藤澤清親逃りて城後に出で山より狙て之を射其の兩眼を貫く板額僅る因て之を擒にす遂に資盛の兵敗れて奔竄す清親板額を以て鎌倉に到る頼家召して之を見る板額進みて簾前に至る容貌麤醜少しも屈する色なし淺利義遠請ひて妻となさんと欲す頼家曰く是れ無雙の朝敵なり汝ち之を請ふは何ぞや義遠答て曰く勇力の男子を生み朝廷を護り武家を扶けんと欲するのみと遂に携て甲州に還る(大日本史、本朝烈女傳)

バン カゲツグ 番景次 大膳と稱す池田輝政の臣なり贈署人に絕す初め圍卒たり長滅の役輝政の父兄並に戰歿す輝政亦た之に死せんと欲し馬に鞭ちて敵に圍入す時に景次側に在り諫て曰く公亦た歿せは孰れか宗祀に主たるものぞ往くこと勿れと輝政聽かず景次轡を攬りて放たず輝政奮怒し鎧を揚げて其の顴を蹋る血流れて面に濺ぐ然れども景次堅く執りて可かず遂に輝政をして大封を保たしむ後屢〻軍に從ひ功を累ねて執政となる(野史、續日本史)

バン カズヤス 番一安 左衛門と稱す吉田流道雪派の射術の祖なり吉田雪荷重勝に從て射を學び細川玄旨に仕ふ根失を以て初て三十三間堂に射る(武術流祖錄)

ハンキウ 帆丘「イタクラクワウケイ」

ハンキウアン 半求菴「アベキウハ」

ハンキウクワ 半九窩「ウヘダカンシ」

ハンキウダウ 反求堂「ハヤノリウスキ」

ハンキョクアン ササヤレン 半局庵「カサヤイツシ」「カ

ハンクウ 半空「ハナガサブンキヤウ」

バンクワン　盤桓「ニハバンクワン」
バンケイ　盤珪　高僧なり播州龍野の人、幼にして京師に遊び松尾寺に寓居して密教を學ぶ一日臺閣の碑銘に入る盤珪を熟視して曰く予汝の器を相するに禪藥を修せば悟道必ず速ならんと乃ち妙心寺に入りて學ばしむ既にして京を去りて播州に還る赤穗郡野中村に興福寺の廢址あり唯〻海帶を食ふのみ既にして奏濃に遊び居ること數年又た野中村に還る又た赤穗に往き臨鶴寺の玄甫に見えて學ばんことを請ふ玄甫辭するに老たるを以てし備前朴翁の弟子となしむ朴翁命じて永琢と曰ふ然れども僧衣を著るを許さず是の時明僧超元長崎に來る天下の禪僧之を聞き皆な長崎に赴く盤珪亦た往く超元出でて一問を發す衆僧相顧みて應ずるなし獨り盤珪答問剛三次超元善と稱す其の堅超元親ら上坐永琢と書し之を禪堂に貼す衆僧皆な慄ぼず超元之を叱す猶ほ囂然服せず超元因て盤珪をして禪堂を出でて別室に居らしむ盤珪夏を終へて播州に還り超元の從者鐵心と共に謀りて江都に來り寺社奉行に書を上りて超元を留めんことを乞ふ許されず因て又た長崎に往く超元將に歸らんとすゝ時平戸の城主松浦鎮信當今禪僧の能く道を悟るものを問ふ超元永琢を擧ぐ丸龜城主京極高豐播州の綱乾に於て龍門寺を建て盤珪をして居らしむ是の時更に今名を稱し名譽藉甚歸依するもの甚だ衆し加藤泰興爲めに一寺を大洲に建つ赤穗の城主亦た爲めに勝地を卜し再び興福寺を興す後に盤珪江都に居り本莊に於て天祥寺を開創す元祿六年入寂す天皇詔して禪師の號を賜ふ初め泰興少かりし時好みて槍を演ず一日盤珪侍坐す泰興槍を執りて將に鋒さんとす盤珪珠數を以て之を拂ひて曰く其の技未だ進ぜず心先づ動くと泰興是に由りて參禪甚だ力む卒に其の技に通ずるを得たり是に於て盤珪を信ずる益〻深しと云ふ(續近世叢語)

ハンケイ　板溪「イトウハンケイ」
バンケイ　盤溪「オホツキバンケイ」
ハンケイ　繁慶　名は清堯野田章四郎と稱す三河の人にして武藏江戸に來り瓶氏の門人と爲り鋳工たり後駿河府中に移り刀匠と爲り繁慶と稱す後復江戸に歸り鐵砲町に住す慶長寛永年間の人なり世に音讀となれども實はシグヨシなりと云ふ(古今鍛冶備考)

ハンゲツ　半月「カキタニハンゲツ」
ハンゲツサイ　半月齋「ハタランテイ」
ハンゲバウ　半化房　俳人なり高桑氏、關東の産なり若年より商業を厭ひ早く漫遊の志あり關東に遊ぶ後京師御幸町に住し俳諧の道を希因に學べり半化房本と醫を業とす曾て欺す加賀金澤の商家釣瓶屋某の子

放駒四郎兵衛、勘三郎彌平、薩摩源五兵衛、冥途小八、大佛三郎、小佛小平、神田彌吉、佐野次郎左衛門等尤も著はる時に幕府麾下の士にして又た黨を樹て大小神祇組と稱す水野十郎左衛門（五千石を領す）之れが黨長たり其の黨亦た多し就中加々爪甲斐守（一萬石）坂部三十郎（五千石）等尤も著る慶安中十郎左衛門配下の士某々と演戯を某所に觀る會々町奴雷十五郎亦た場に在り事を以て人と爭ふ十郎左衛門見て之を制す十五郎聽かず益々之と相爭ふ十郎左衛門大に怒り部下金時を呼して之を毆打せしむ時に見物の中より黑茶の木綿布子に同じ色の蝙蝠羽織左巻の三尺手拭にて頰冠りしたる一個の男子急に起て金時を執へ拳手頭上に連下し且つ呼びて曰く我れは是れ幟隨院長兵衛なり汝等何ぞ妄に場中を騷がすと意氣傲然たり金時等大に恐怕々として逃れ去る十郎左衛門憤懣に堪へず刀を拔して切齒す然れども寛に敵する能はずして退く此事早くも市中の談柄となり人皆な長兵衛の剛膽に服す十郎左衛門遺憾に堪へず黨中と謀りて其怨を報ぜんとし伴りて保昌庄左衛門を遣はし禮を厚して長兵衛を招く長兵衛謂らく是れ叢し讐を報ぜんと欲するなりと乃ち諾し日を期して行く十郎左衛門陽に交誼を表し讐膳美を盡し強るに大杯を以てす長兵衛大に酩酊す乃ち辭す辭さず綱保昌等左右より頻に強迫す定光時機を計り銚子を執りて眉間を擊つ中らず熱酒溢れて兩眼に入る長兵衛大に驚き刀を手にして起つ十郎左衛門機を得て進み擊て其面に傷つく保昌季武父た左右より之を刺す長兵衛敵する能はず遂に斃る時に慶安三年四月十三日なり享年三十六十郎左衛門髻を薙に包み入をして之を川に投ぜしむ唐犬權兵衛等以爲らく長兵衛の歸らざる豈に水野等の所爲にあらざるなきを得んやと既にして長兵衛の髻を神田川の下流に發見す因て大に其黨を會し之を淺草寺町五臺山文殊院源空寺に葬る後權兵衛等長兵衛の枉死を悼み遂に同黨と其讐を復すと云ふ（實事譚）

ハンスキエン　晩翠園「シホノヤキザン」
ハンセイ　半成「ナカウラセキホ」
バンセイ　晩成「オホタバンセイ」
ハンセイシヤ　晩晴社「カシハギジヨテイ」
ハンセン　半仙「ナカムラリツエン」
ハンセン　半仙「ナカネハンセン」
ハンセン　半仙「ウエダハンセン」
ハンタイシ　飯袋子「ヲカモトノブナリ」
ハンタイシツセイ　幡太室「ヲバタタイシツ」
ハンダ　半田一誠　陸軍歩兵中尉なり石川縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て後備役より召集せられ後備歩兵第七聯隊附として從軍中廿八年二月十九日清國盛京省哈瓜嶺附近に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ハンダイヤ　ソウアン　萬代屋宗安　茶人なり和泉堺の人千利休の嫡なり宗安と號す慶長二十年四月廿五日歿す

バンダイヤ　ヨシラウ　萬代屋與四郎　茶人なり有馬家の臣にして後一唯齋宗眞と稱す千道安の贊となる（古今茶人系傳）

ハンダ　タカトキ　半田隆時　陸軍歩兵少佐なり宮城縣出身にして明治二十七八年戰役に於て第五師團歩兵第十二聯隊第二大隊長として出征せしが廿八年五月七日遼東半島鳳凰城宿舍に於て急病にて死去す

バン　ダンヱモン　塙團右衛門「ハナハナホツグ」

ハンダ　モンキチ　半田門吉　勤王の志士なり諱は成久筑後久留米藩士なり初め身微賤なりしも安政元年三月目附役となる兼て勤王の志深きを以て藩主の命を以て屢々都に往來して事情を探査す文久三年五月上京し八月に至り侍從中山忠光が義兵を擧ぐるに附役の命を以て屢々都に往來して忠臣蔵に御直、川の鎮撫其他兵士召募に盡力す先づ五條代官鈴木源内を初め數多の奸吏を仆し夫より和歌山、津、彦根等の諸藩の討手と戰ひ屢々勝利を得しかども關議に一變しなられ七卿は四方に遁竄するに至り しかば同志の者散逸し終に門吉以下六人を以て大膳忠光を護衛し辛うじて大阪に落延び長州屋敷に入りそれより舟にて長州へ赴き名を變へ跡を韜し山口又は三田尻の民舍に潛み居たり翌元治元年甲子七月長藩國老等上京するに當り之に從ひて京都に上りしが十九日の變禍司邸に於て會津藩と激鬪し爲めに死せり享年三十一

明治三十五年十一月朝廷其忠志を追賞して特に正五位を贈らる（殉難錄稿、甲子殉難士傳）

ハンヂヨ　斑女　美濃國野上の遊女なり名を花子と曰ふ深く吉田某と契る某則に臨みて扇を贈る其事唐の班女に似たるを以て人呼て班女と曰ふ爾來某音信なし班女遂に狂となり其の扇を挿み「夏はつる扇と秋の白露と孰れか先にかきふしの床」と歌を唱て市中を徘徊せりと云ふ

ハンテイ　帆亭「サイトウトクゲン」
ハンテイアン　半提庵「イサカウタク」三世
ハンテツ　繁哲「ケンチユウハンテツ」
バン　トウアン　伴侗庵　彦根藩の儒者にして名は成初名温之字は伯玉梅村と號す後に侗庵と改む幼名材太郎後に只七と稱す徒義の男なり初め藩黌弘道館の素讀方加役なりしが後儒員に進む是より徒來の古學を廢し闔藩朱子學を唱ふ明治二年九月文館副教頭となり三年に至りて致仕す侗庵人と爲り耿介剛直常に義理の精微を研究し其學窮めざるなし又能く周易を談ず又喜びて兵を談ず意生産を事とせざれば家極めて貧なり明治六年歿す年六十八著述孫子軸解、引類曲名解、貞觀政要集解證、陸宣公全集軸解證、英雄傳、侗庵遺稿、詩集あり（日本教育史資料、杉岳樂氏寄）

バンドウ　イハゴラウ　坂東岩五郎　俳優なり坂東國五郎の門人家名を阿波屋、俳名を岩子と稱す寶暦の初めより大芝居へ出て驚出し後ち三枚目に永らくすわり安永二巳年大阪馱右衛門座にて忠臣蔵に師直、うすゆきの大膳同五申年松之丞座にて忠臣蔵に師直、藥師寺、了竹の三役次に夏祭の義平次大出來にて戀女房に官太夫又つとれの錦に加村字太右衛門菅原の兵衛時平の二役三代記の時政何れも沙汰よく天明二寅年中の座にて天下茶屋に佐藤元右衛門役にて彌助殺しのにくてい又伊織を返り討にするしぶとい仕打一代の大出來にて今に其の風を殘したり卯年同座にて忠臣蔵に九太夫いせ物語のどらの如入評判よく同五己年角の座にてこくもん庄兵衛同七未年中の座にて枕斧右衛門同九酉年同座にてうすゆきの逃川寛政二戊年千手護助切にかんばら兵衛其の外いが越の林左衛門火車小次兵衛信仰記のふろやのお爪どすの喜藏何れも持前の役にて沙

汰よく後年角の座の頭取を勤む寛政七卯年八月十七日歿す年四十八（俳優世々の接木）

バンドウ　カキツ　坂東家橘　俳優なり市村十二世羽左衛門の三男にして幼名を竹松と云ふ弘化二年十二月十八日生れ六年八月十八日初舞臺に出づ明治元年八月十八日兄十三代目羽左衛門尾上菊五郎の名を繼ぐに及び順養子となりて十四世羽左衛門となり市村座主となる後市村座負債多くして營業繼續し難きを以て座主を村山丈三郎に讓りて退隱し俳優專門となり俳號を用ひて家橘と稱す從來座元に屋號なし明治七年大阪に出勤せる時浪華の看客呼て橘屋と云ふ是に於て終に自ら橘屋を稱するに至れり十七年十一月十八日亡坂東彦三郎の死跡を襲ぎ坂東氏を冒し坂東家橘と云ひ音羽屋と稱す子竹松をして市村氏を繼がしむ廿五年秋市村座災後新築成り廿六年三月山開目黑新富士及び兜軍記を出し家橘長坂坡仁藏と重忠に扮す開場中疾あり十八日歿す年四十八法號義考院彦譽橘仙居士押上村大雲寺に葬る一身の大事常に十八日に起ること人以て奇となす人となり寛弘細事に關はらず技藝各種に渉ると雖ども尤も和事に長じ殊に品格ある貴公子に扮して好評あり

バンドウ　コサブラウ　坂東小三郎　長唄の名人なり大阪の人本名は羽喰小三郎といふ十五六歲の頃堀井仙助の門に入りて音曲を習ふ二十三歲改めて阪東定次郎の門人となりて長唄を習ひ名人宗十郎延若右團治等の誘掖により技藝愈上達して浪華唯一の長唄名人と呼ばるゝに至れり明治四十年十二月八日病を以て歿す年六十二歲

バン　トウザン　伴東山　彦根藩の儒臣にして名は徒義、字は伯德、通稱兎毛、後貝七と改む藩の士望月太介の男なり幼にして學を好み大管南陵に從ひて學び勉勵甚だ力む寛政十二年藩の稽古館の素讀方加役に擢んでられ果進して文化十二年儒員となり藩主に侍讀し屢々謹賀を獻ず天保五年七月二十九日歿す年六十二著述孝經正解、論語通解、學庸詳解、國語解等其他頗る多し子倜惹あり（日本教育史資料）

バンドウ　サンパチ　坂東三八　俳優なり家名は大和屋俳名は平久江戸の人也實は大和屋又八といへる者の男にて元曦子方にて大田三十郎と云しが享三寅年初て市村座へ出て其の後明和元申年大阪三桝大五郎座へ上り其の時竹田芝居を勤居る已之助を養子として江戸へ歸る依りて明和七寅年正月十一日歿す（俳優世々の接木）

バンドウ　シウカ　坂東しうか　俳優なり幼名を玉三郎といひ四代目三津五郎の養子なり文政十三寅年大阪中の座に梅幸に從て始て出で暫く梅幸引立となり夫より大阪稻荷宮芝居にて修行し其の後江戸へ歸り戾駒屋馱右衛門の引立となり秀馱と改む夫より又假名に改む當時江戸に於て若女がたの寶出し人氣よく若手の玉梓となり鬼神のお松人丸のお六橘本屋白糸明烏の浦ざとを仕初む安政二卯年九月六日年四十三歲を以て世を去る（俳優世々の接木）

バンドウ　ジユダラウ　坂東壽太郎　坂東國五郎の養子なり家名を鳴田屋といふ俳名を岩子後に厳郷といふ父は江戸ヶ崎小三郎といふ相撲者にて寛政四子年大阪中の座へ初て出て頗が下なり其子にて寛政四子年大阪中の座にて忠臣二葉蔵に足利直義の役をたゝ勤め同年冬同座にて忠臣二葉蔵に矢張同座にて五大力の千島萬太郎辰年は角の座にて伊勢おんどに矢田萬次郎の役安樂錄に三好要之助同九巳年より少し役廻り宜敷粗成布引の多田蔵人鷹金小紋に布袋市右衛門山川屋權六を勤め翌午年は同座にて彦山鶴川彌三郎同十一未年には中の座にて下の二枚目に付き源平桂礎暦に八丁礫の春平治切隅田春に金屋金五郎でつち長吉の二役次に雪國嫁威谷に此時一筆と成て蒲生結城之助丹波屋重三郎百姓茂作是が出世の始となり同未年角の座にて忠臣蔵に早の勘平何れも大出來大當りなり夫より享和の頃迄は角中の座座を勤め文化の初より濱芝居に出で文化四卯年若太夫芝居にて金子の手代藤兵衛、頭お八十、中村のしほにて是一代の大當りにて末世に其名を殘しけり又竹田芝居にて先代萩の政岡三田平の二役古今の大出來にて大入なり此時俄に三重の機敷なかける又角丸芝居にても矢張大入なり其外團七、茂兵衛、酒屋牛七、瀧岡貫、牙のお才、小栗、柏重兵衛、筑紫權六、猿まはし與次郎、猫間新太郎、唐橋作十郎、女形にては安趣ケ原釉はぎ、和田の板額、戀女房の重の井、金比羅のお辻、里見佐介、小鯖の源五郎、吳服屋重兵衛杯は度々出しお籍なり文政二卯年春中の座にて大璃冠と一座にて花都遊にて三浦常陸、村川兵藏、山田軍助の三役を勤む其後目德璃寛と始終一座して同八酉年中の座にて伊勢物語に春日野小芳役大當りにて同十二丑年同座にて薄霧のまがき關九郎二役天保二卯年も同座にて紫夜話の奴鳴平治に梅玉の有常に小芳役大出來なり翌辰年角の座にて妹背山に定家役梅玉の大判事にて凡近來箇程の面白き山の場を見ずとの評判にて大出來なり其後は段々老年に及ばれさして大當りはなしされども舞臺の年功とていつも懲らず若々敷見えたる人なり天保十一子年中の座にて蝶々の十治兵衛切にお籍の猿曳を出し此の狂言中にて病氣にて引籠跡かはり役を松朝勤む天保十一子年十二月二十四日終る年七十一（俳優世々の接木）

バントウ　ゼテウ　坂東是調（又は是朝）　舊派俳優なり文久二年十月九日伊豫國新井郡に生る本名を高塚號平と稱せしが同地出身の坂東秀調の門人となり坂東大十郎と名乘り從弟三人孰れも俳優を業とせしが維新後東京に來りて一座を組織し四國中國邊を巡業せり十六年守田勘彌に知られ新富座に出勤し導いで大阪に赴き地方を巡業せしが三十四年三月再び上京し春木座に興行し後横濱の羽衣座に移りしが心臟病の爲め三十六年一月十五日東京に死去せり

バンドウ　タマサブラウ　坂東玉三郎　女俳優なり本名を守田きみと呼ふ守田勘彌の五女なり明治二十年五歲にして始めて新富座に出づ踊りを藤間勘右衛門及花柳勝次郎等につきて練習し三味線は杵屋六三郎常盤津は岸澤式佐孚は山口某に習ふ其他生花茶の湯等の技に通ぜり父勘彌歿後は青年俳優の一座に加はり又女優の名人市川九女八の手につきて諸所の興行に出勤したり三十六年大阪內國勸業博覽會の際大阪に下り道頓堀浜花座にて演藝會を催して好評を得翌廿七年四月米國聖路易萬國博覽會に際し渡米し終には大統領ルーズヴエルト夫人の愛顧をも受くるに至り博覽會閉會後も組育に留りて米國劇場を視察し舞踏師に就きて修業したりしが心臟病を患へ三十八年二月十五日遂

に客死す年二十三遺骸は同地にて茶毘に附し遺骨を本所雷場町妙源寺へ葬る

バンドウ ヒコサブラウ 坂東彦三郎
(元祖) 俳優なり家名は音羽屋元は堺州伏見の出生にて幼名菊松といふ寶永三年より初て出づ一代の内大經師の廣兵衛を仕出し大當りをなせしと云ふ寛延四未年正月元日終る年四十一此の坂東は元又九郎より出たる苗字にして彦三は元祖又太郎の門弟なりといふ(俳優世々の接木)

バンドウ ヒコサブラウ 坂東彦三郎
(二代目) 俳名は薪水初代の實子なり幼名かきく松といふ明和五子年五月五日行年廿八歳なり以て早世す(俳優世々の接木)

バンドウ ヒコサブラウ 坂東彦三郎
(三代目) 家名は音羽屋俳名は薪水半艸庵樂善と稱す實は九代目市村羽左衛門の弟にて幼名を吉五郎といふ初め初代尾上菊五郎は元祖彦三郎の子分なるがゆゑ則ち彦三郎名跡は右梅爭方に預りありしを是に至り吉五郎へ傳へしなりといふ明和七寅年彦三郎の遺言に因り一旦梅爭子分となりて三代目彦三郎を相續す其碩より追々立身して寛政の中ばより最も評判を高め同十二未年江戸森田座において由其之介勘平の二役大出來なり文化九申年江戸中村座にて菅丞相、白太夫、源藏の三役を一世一代に勤め翌年梅玉同道にて中の座へ上り同年角の座にて右の三役を一世一代として東京芝居にて相勤め三都の舞臺を舞納め功成り名遂げて身しりぞき洛東黒谷において剃髪し淨衣の委となり故郷へ歸り本庄佛三味を嘗み文政十一子年二月十八日年七十五を以て終る(俳優世々の接木)

バンドウ ヒコサブラウ 坂東彦三郎
(四代目) 俳名は薪水後に樂善と稱す實は市村座の樽元祖智茂兵衛の男にして幼名を竹三郎といふ又市村龜三郎と改め三世樂善舞納の後四代目を相續す文政十三寅年大阪中の座へ初て上り三勝半七の早替り小はた小平次の怪だん又盆替りに彦山の音成傳五右衛門二役最も評よし其の後大阪濱芝居にて修行し天保三辰年には筑後芝居へ出て伊丹屋瑞寛と一座にて夏祭の磯之丞のやく大出來の上一寸徳兵衛と龜平次の二役を勤め大出來なり天保六未年江戸へ下り安政二卯年京村座にて幹竹三郎へ五代目なゆづり龜藏と改名す此の人都ての翫

バンドウ ヒコサブラウ 坂東彦三郎
(五代目) 俳名薪水初め薪子といふ實は狂言作者冠二郎の弟にて初め竹三郎といふ安政二卯年より五代目を相續す同五年父と共に大阪中の座へ上り眞柴久吉切に年河原崎座鼠島雪顔親に渡邊渡役にて幸四郎の遠藤武者の石段の立廻り大當りにて此の時より名を上ぐと云ふ寛政十一午年中村座にて千本櫻に彌介と忠信の二役二番目團十郎が勤め土間へ水舟をこしらへ水試合演ずと古今大評判にて甚だ大入なり翌十一未年の顔見世に三代目三津五郎と改名す文政三辰年九月同座にて大阪道成寺所作事月雪花名纏す同五年父と共に大阪中の座へ上り眞柴久吉切に年河原崎座鼠島雪顔親に渡邊渡役にて幸四郎の遠藤武者の石段の立廻り大當りにて此の時より名を上ぐと云ふ寛政十一午年中村座にて千本櫻に彌介と忠信の二役二番目團十郎が勤め土間へ水舟をこしらへ水試合演ずと古今大評判にて甚だ大入なり翌十一未年の顔見世に三代目三津五郎と改名す文政三辰年九月同座にて大阪大阪に死す年四十六(俳優世々の接木)

バンドウ ミツゴラウ 坂東三津五郎
(初代) 俳優なり幼名竹巳之助大阪の人故ありて坂東三八の養子となり家名を大和屋俳名を是葉といふ初め竹田芝居へ出で明和中江戸へ下り同三年森田座へ出て坂東三津五郎と改名して元祖馱右衛門清盛の役を勤め秋迄打通す次秋狂言に室町殿榮花の舞臺に白井權八役ばんずい長兵衛に幸次郎南人の出合評判よき所天明二寅年四月十日病みて

バンドウ ミツゴラウ 坂東三津五郎
(二代目) 俳名は是葉初尾上蘭藏といひ後紋三郎と改む天明五巳年故ありて二代目坂東三津五郎と名乘り江戸にて評判よく段々立身して立者となる然るに初代三津五郎の實子成人せしを以て名跡を戻し後年萩野伊三郎と改む文政十二年十月二日歿す年八十(俳優世々の接木)

バンドウ ミツゴラウ 坂東三津五郎
(三代目) 初代の實子なり深川榮喜町に居るを以て世にえいきさ三津五郎と呼ぶ俳名は秀佳初名を三田八と云ふ安永八年初めて森田座へ出て朝日奈の奴豆平の役を子役にて勤む天明二寅年坂東巳之介と改め翌卯年森田勘次郎と改む寛政五丑年桐座にて曾我五郎の初役同八辰年河原崎座鼠島雪顔親に渡邊渡役にて幸四郎の遠藤武者の石段の立廻り大當りにて此の時より名を上ぐと云ふ寛政十一午年中村座にて千本櫻に彌介と忠信の二役二番目團十郎が勤め土間へ水舟をこしらへ水試合演ずと古今大評判にて甚だ大入なり翌十一未年の顔見世に三代目三津五郎と改名す文政三辰年九月同座にて大阪道成寺所作事月雪花名纏す同五年父と共に大阪中の座へ上り眞柴久吉切に年河原崎座鼠島雪顔親に渡邊渡役にて幸四郎の遠藤武者の石段の立廻り大當りにて此の時より名を上ぐと云ふ寛政十一午年中村座にて千本櫻に彌介と忠信の二役二番目團十郎が勤め土間へ水舟をこしらへ水試合演ずと古今大評判にて甚だ大入なり翌十一未年の顔見世に三代目三津五郎と改名す文政三辰年九月同座にて大阪大阪に死す年四十六(俳優世々の接木)

バンドウ ミツゴラウ 坂東三津五郎
(初代) 俳優なり幼名竹巳之助大阪の人故ありて坂東三八の養子となり家名を大和屋俳名を是葉といふ初め竹田芝居へ出で明和中江戸へ下り同三年森田座へ出て坂東三津五郎と改名して元祖馱右衛門清盛の役を勤め大當りなり安永二巳年同座にて唱役を勤め大當りなり安永二巳年同座にて富十郎お七役翌年同座にて初實曾我にて富十郎お七てすぐに發足し戸塚宿まで着せし所ひいき連中打揃ひ来大入なり安永六未年中村座青柳曾我八幡二郎の役三津五郎相手となり夜の編笠の所作事大出來の外玉川座芝居懸り一統役者不人にて今年顔見世十五日が問すけられる樣とひいき連の親みに再び戸塚より取て返し新場より玉川座へ乘込是藝道の冥加なり文政五年正月大阪角の座へ下り菅原に松王丸と丞相の二役大切娘道成寺所作事三の替り金門門に五右衛門大欣之介切に五大力の源五兵衛何れも大出來なれどもきして大入なく其切にて江戸へ歸り天保二卯年十二月二十七日歿す年五十七(俳優世々の接木)

バンドウ ミツゴラウ 坂東三津五郎
(四代目) 三代目の養子俳名は秀朝幼名を寶助といふ文化十四年初めて中村座へ出て肴賣いさみの役を子役にて勤め同十三子年同座にて不破名古屋に狩野獄之助不破伴作鮫かはしの巳の三役評判よく文政二卯年いろは偽名に早野勘平同四巳年春大阪角の座へ上り惠太

功記に眞柴小一郎又鏡山に多賀宜二郎其外布引の多田藏人等大役を勤め爰より先へ江戸へ下り其後文政九戌年大阪筑後芝居濱の役者と一座にて百ちどりに濱名出雲の役次は若太夫芝居へ出伊達の仁木と鼠の幽靈大出來又京因幡藥師にても大評判同十一子年江戸へ下り市村座六月芝居に布引の義賢と實盛二代鏡の秋津島古今の大出來是より名を上ぐ次に忠臣藏の七役又大當りなり九月替の千本櫻に忠信の役夫より益々評判を得大立者となる養父死去の後四代目三津五郎と改めしが不途中年より病氣さし起り手足不自由となりしかど尚ほ相かはらず舞臺を勤む世によい〳〵三津五郎又はよい三津と呼ぶ天保十亥年正月病中ながら大阪角の座へ上り姫小松の後寛を勤め夫より大阪近國を巡り其後江戸へ還り森田家を相續して勘彌といふ安政三辰年より是好と改め又森田を改めて守田とし又案山子と號す文久三年十一月十八日歿す年六十二文字に通じ戲文に長ず(俳優世々の接木)

バンドウ ミツゴラウ 坂東三津五郎
(五代目) 俳名秀山と云しうかの實子幼名は吉彌嘉永三年初て場に上り安政三年五月三津五郎となり明治六年五月十一日歿す年廿八(名人忌辰錄)

バン ナホカタ 伴直方 江戸の和學者なり万五郎と稱す書圖品類、家記書目備考等の著あり

バン ナホキ 伴直樹(一に直枝に作る) 國學者なり名は實規蒲蹊の養子なり國學を好み先旨を繼述す增補題辭要解、歌辭要解を著す文化七年六月廿日歿す(平安墓所集、續諸家人物志)

ハンニチアン ハンニヤジ ソウジャウ 半日庵「ミヅムラフゴン」「クワンケン」 般若寺僧正

ハンニヤバウ 般若坊 面打なり時代詳ならず假面古作八人の一なり(假面譜)

バンネイ 萬寧 禪僧なり諱玄囊萬寧と號す尾州善師野村の人也幼にして穎異龍福寺大衍和尚に就て得度す長じて豫州の行應に謁し從ふこと八年歸て大衍に印記を受け法山第一座に轉位す龍福寺榮林和尚を迎へ遂に蘊奥を盡し席を董す廿五年大休に嗣がしめ退て桃玉庵に移る尊て尾の祥雲寺に寓し又瑞龍寺の僧堂を管す嘉永己酉歟により始心寺に住す萬延元年庚申三月瑞龍の僧堂天瀑庵に化す年七十一是歳五月歳して神機妙悉禪師と謚せらる(禪林僧寶傳)

バンネン ハンノキヨウ バン ノブトモ 萬年「チヤウバンネン」 榛木翁「タナカミチマロ」 伴信友 國學者なり初め藤原、正卜考、假字本末及び蹠蛇比古論表、歌集、文集、等あり六國史の如き は學生の力を盡して諸書と對照校正し朱批紙に認つ明治十八年宮內省之を其の後裔より貸り得て謄寫せりと云ふ平生菁莪に耽り一室に端坐して拮据夜分に至り外出遊覽を喜ばず一日友人長澤伴雄來り誘て曰く「行きて見ぬ人は嵐の山櫻花と文とはいづれ勝れる」然れども居常意を振生に用ひ朝夕中庭に出て丶弓を彎き刀を揮ひて身體を健にす其の弟子を教ふる甚懇篤尊王愛國修身齊家の要を說きて諄々倦まず又其の性謙退なるを以て著書の誤謬あらんを慮り上木して世に傳ふるを好まず然れども晚年名聲漸高く交誼を求むる者甚多し水府烈公、紀伊一位、白川樂翁、三條實萬、日野資愛、本居大平、藤井高尙、近藤芳樹、足代弘訓、僧義門、中島廣足、加納諸平、八田知紀、杉田玄白、淺田宗伯、伴林光平、村田春門、內山眞龍、植松有信、藤田彪、野々口隆正、清人江雲閣等其の最たり弘化三年十月十四日京都所司代屋敷に卒す辭世の歌に曰く「いまはには何みかいはんよの常に言ひし言葉ぞ我が心なる」享年七十四若狹の國遠敷郡伏原村發心寺に葬る明治廿四年十二月正四位を贈る子信近孫信好曾孫信興相繼て家を承く(中根香亭氏贈)

バン バイヤウ 伴梅村「バンドウアン」

バンバ マサヂ 番場政治 陸軍歩兵中尉なり新潟縣出身にして明治廿七八年日露戰役に於て豫備役より召集せられ第二師團後備歩兵第十六聯隊附として從軍中廿七年九月二十日旅順要塞太平溝東方高地に於て戰死す戰功に依り勳五等功五級に叙せらる

ハンハンアン ハンハンサイ ハンフクケン 半々庵「イサカウタク」初代 半々齋「イサカウタク」 板復軒「イタクラフクケン」

ハンムサイ モンゴラウ 半夢齋「マヘダムネヒサ」

バン 伴門五郎 名は真懿字は士德通稱は門五郎者齋と號す本姓は岡田氏父諱は正廣武州足立郡蕨驛の人世々里正たり母は小谷野氏門五郎は其第三子なり叔父伴經三郎諱は真榮幕府に仕へ中年にして殁す因て其後を承け伴氏を冒す仕て徒士隊となり文久三年德川家茂に京都に扈從し開物成務論を著し大に時弊を論ず慶應二年陸軍調役に補せらる明治元年正月伏見の變あり王師東下す門五郎大息して曰く事此に至る當に君家のために哀訴冤を伸ぶべし不幸にして聽れざれば則ち一死あるのみと乃ち同志を會して將に上京して請ふ所あらむとす事遂に果すあら是に於て其徒數十人と淺草本願寺に屯し彰義隊と號す來屬するもの二千餘人蓋此隊の起る門五郎實にこれが稱首たり是より先き前將軍慶喜痛く群議を斥け東台に屏居す門五郎隊を帥て入衛す四日前將軍水戸に徒る而して少壯過激の輩客氣自から禁ぜず稍く不蕃の迹あり門五郎愀然として曰く吾輩の一擧一動隱然として君家の安危に係れり然るに壯士等彼が如し君家の事を誤るものは必ず此輩なり因て謂らく一旦事敗れて敵を此に迎ふるは策にあらず退て晃山に據り徐かに事を圖るにしかずと激徒等聽かず門五郎慷慨人に語て曰く吾事去れりれども危に臨て難を避るは丈夫にあらず我一死を以て

吾事を謀すべしと五月十五日官軍風雨を冒して四面來攻す門五郎一軍を以て南門に出て突擊す一以て十に當らざるなし日既に午を過ぐ會〻官軍檀彈を發して高閣に中つ火大に起る機に乘じて柵を奪ふ門五郎兵を勵まし返戰數合身十餘創を被り終に大に敗れ全軍覆沒す越て數日家人其の存亡を審にせず人を遣て物色するも竟に得ず鑒し傷重うして自殺すること能はず火に赴て死しならむ天保十年四月を以て生れ享年三十配伴氏一女あり其の旗長島弘道の子鈴五郎に贅して後を嗣ぐ門五郎人となり深沈温雅文學を好みて子弟を教授し才を愛し衆を容る忠孝節義のことを聞くごとに稱揚措かず感泣するに至る尤も氣節を尚び朋友故人の急を聞けば百方營求し財を餌けて吝まずと云ふ（墓表）

ハンリ　繁里「クマシロミツホ」　**萬里**　高僧なり初め萬年寺に住し後相國寺に住す名は瑞九、萬里は其の號なり又梅庵、漆桶居士の號あり應仁中の人なり（書畫便覽）

バンリウ　蟠龍「ヰサハバンリウ」　**萬里居士**　江戸の俳人なり太田次郎兵衛と稱す名は盛庸平山梅人の門に入り採茶庵の號を嗣ぐ（俳家殁故年表）

バン　レンペイ　伴廉平　何許の人なるを知らず善く相するを以て世に聞へ曾登照等と名を齊うす（大日本史）

ハムロ　ダイナゴン　葉室大納言「フヂハラミツヨリ」

ハンエツ　繁越「カイガンハンエツ」

ハンエツ　汎園「サウカレンケイ」

ハンエツアン　半圓庵「フヂシゲトウゲン」

バンヨ　ジシユン　萬尾時春　六兵衛と稱す丹波篠山藩士なり數學のオあり師を得ずして終に能く斯道に通じ著書多し規矩分導集二卷あり書中船の方向を定むるに逆盤磁石を製することを記載せり後世邦人航海測量家の用ふる者と爲りたるは蓋し時春より始まりしものゝ如し當時未だ測量術極めて幼稚にして概れ竹竿を以て之を度し方盤を以て之を望見するの法に過ぎず時春愛に測器を作れりと之を四方六面樣合曲尺と云ふ眞鍮を以て之を製す當時にあつては頗る精密なるものといふべし（大日本數學史）

ハンヨウ　範翁「サンキ」

ハンヨウ　磻翁「ヒサダソウケイ」

ハヤアキツヒコノ　カミ　速秋津日子神　穢戸の神にして事物の穢汚を除くを司るミナトノカミの妹なり或は曰ふハヤアキツヒコノカミと同神にして伊豆能賣神の別名なりと伊勢内宮の第四の別宮ミナトノカミの神とを合せ祀れるなり（皇宮名所圖會、古事記）

ハヤアキツヒメノ　カミ　速秋津比賣神　ミナトノカミの妹なり或は曰ふハヤアキツヒコノカミと同神

ハヤカハ　アユノスケ　早川鮎之助　尼子十勇士の一人なり尼子義久山中鹿之助と狩して郊外に遊ぶ晨夫あり水中に立ち板を水流に竪て〻水を塞ぎ且つ押して上流に上り以て跳出する鹿の鮎を漁するあり二人其の勇を愛し召して士に列し名を命ず鮎之助是れなり義久亡び勝久世を嗣ぐに及び十勇士の中に在て毛利氏と戰ひ終に其の地を復す

ハヤカハ　タツヘイ　早川辰平　陸軍少兵少尉なり薩摩島藩島藩出身にして明治三十七八年日露戰役に於て後備役より召集せられ後備歩兵第十一聯隊附として從軍中卅八年一月廿八日清國盛京省下平臺子に於て戰死す

ハヤカハ　チャウセキ　早川丈石　京都の俳人なり千載堂と號す初名は和雄と云ふ鈴鹿知石の門人なり師家の執事たり曾て四時堂の主に因んで漢和を善くす師殁して剃髮し宗順と號す家書多し華麗蕉、長樂千句、菅蕉日記、兩吟百歌仙、緒手卷拾遺、橘立紀行、南紀紀行、狂歌百首、俳諧家譜等あり安永八年七月二十一日殁す行年八十五歳辭世「極樂に誕生日はけふなれや」（俳家大系圖）

ハヤカハ　ハツセ　早川初瀬　花形俳優なり一八松本名左衛門座に始めて翫子の所作事をなす（早引人物故事）

ハヤカハ　マサツナ　早川正紀　字は子綱、八郎左衛門と稱す寛政丁未笠岡の令と爲り又作州久世の宰となり人となり公正忠厚仁恕物に接して毅然にし勤儉以て之を率ゐ誠信以て之を待つ民之を欺くに忍びず之が舊俗たる貧民或は子を生みて殺げざる者あり正紀嚴に之を禁止し驗すに父子の道を以てす俗以て革まることを得たり歲時に部下を巡り轍ち民に訓示し遂に學を興す二縣政化大に行る丁巳夏暮府旨あり金帛を賜ひ以て儀表を貧し特に其の所管を增す享和辛酉還りて東武に住す民群して送る文化戊辰冬病みて卒す計主る痛悼せざるなし（事實文編）

ハヤカハ　マンマン　早川漫々　甲州東郡の俳人なり圓橋と號す（大家人名錄）

ハヤクモ　カウヘイ　早雲幸平　陸軍少兵少尉なり德島藩出身にして明治三十七八年日露戰役に於て後備役より召集せられ第十二師團歩兵第四十三聯隊附として從軍中卅八年三月三日清國盛京省馬群丹東方高地に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ハヤクモ　ゼンスケ　早雲善助　陸軍歩兵少尉なり德島藩出身にして明治卅七八年日露戰役に際し第七師團歩兵第廿七聯隊附として從軍中卅七年十二月一日旅順要塞二〇三高地に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ハヤザキ　ガンセン　早崎巖川　伊勢の漢學者なり名は勝任、別號は南運、字は士信、門太夫と稱す實は森田氏津藩に仕ぶ明治十九年殁す年八十二、經解、東征集、南巡名勝志、遊名勝記等の著あり

ハヤシ　アウケイ　林鶯溪　名は晃字は伯華林氏鶯溪と號す幼にして都賀太郎と稱し後圖書之助と改め叙爵して圖書頭又式部少輔と稱す文政の長子而して堀氏の出なり天保十四年三月始めて慎德公に謁す弘化四年四月小姓組番士に擢でらる六月儒員試補に轉ず嘉永六年儒官と爲る九月宗家昭甫卒す嗣なし特旨を以て文殺を以て入て宗家を紹がしむ鶯溪既に官に在るを以て鶯溪を以て文殺の家を承けしむ安政元年正月二城の留守居に陞り學職を兼ね尋で持筒頭に班す六年十二月四城の留守居に遷る官停て以て免じ更に上野芝廟守祠の命を奉ず九月罷免す明治三年三月聯岡に移居す七年一月十日病むで東京下谷長者街の僑居に殁す齡五十二東京牛込郷先塋の兆次に葬る識して文懿先生と

日ふ配坂井氏子なし妾出一男輝之助殤す山高信離の第二子浣次郎を養つて嗣となす（墓誌）

ハヤシ　イサム　林勇　陸軍歩兵中尉なり岡山縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て第十師團歩兵第二十旅團司令部附として從軍中卅八年三月二日清國盛京省小東勾北方高地戰鬪の際負傷し同四日蛇山子第十師團第三野戰病院に於て死去す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ハヤシ　イツウ　林一烏　醫者也奥州岩城の人初め某侯の醫員となり江戸に居て元清と稱す後職を辭し漫遊し乃ち謂ふ吾世に處る譬へば烏鵲啞々樹林の間に飛翔するが如しと遂に姓名を變じて林一烏といふ長崎に往き荷蘭醫術を得たり山名某大香頭たり大阪に戍す一烏を聘して既に至る適〻城中臚疾流行暴死者甚だ多し其の微附上臚を發し直ちに逆行衝心臚を回さずして蹴る醫脚氣臚漏の舊套に因り補瀉變に施す寛に功を得るなし某乃ち一烏を召して詢るに救濟の方を以てす一烏退きて精思累日其の說を得たり曰く紫問の所謂諸湯臚滿皆脾上に屬す王氏の土氣太だ過れば即ち湯邪盛んに行くの類なり即ち脾胃敎阜の致す所故に當に其氣を疏し其の湯を散じ小水なして通利せしむべし補瀉皆宜しき所にあらず以て効なき所以なりと是に於て意を込めて製方し禁忌を殿にし食必ず大麥及小豆等利水物を擇び其の方を試みるに及び病輕き者は即ち時効を見る又其の諸劇證の前古論じて死病と爲す所の者亦た皆癒えざるなし人賴て蘇息す一烏後再び大阪にゆく時に臚疾遂〻盛んに延郭より外に及び近國に傳染す一烏又他の治を爲さず專ら治臚を業とす其方唯〻一方妙製證に隨ひて加減し以て虛實を定む虛なる者は己の方宜しき所にあらずと謂ひ辭して藥を與へず晩年還りて江戸に居る性簡易人と交るを喜まず寒子なし唯〻數婢を養ふ自ら奉ずる質素にして婢妾に衣するに錦繡を以てす重く之が資を爲す人或は之を譏る一烏爽然以て意と爲さず生平の治錄して卷帙と爲す然れども甚だ其の方を惜しみ書中亦た之を載せず或は換ふるに三百金を以てせんとするものあり一烏聽さず其の傳遂に絕す著はす所客中集及び臚病工案あり明和五年四月廿一日殁す年八十九（皇國名醫傳、浪花名家墓所集）

ハヤシ　イヅミダイフ　林和泉太夫　京都の人なり淨瑠璃節を善くす元祿中の人（聲曲類纂）

ハヤシ　カウヂ　林衡「ハヤシジユツサイ」　陸軍騎兵中尉なり兵庫縣出身にして明治卅七八年日露戰役に於て第十師團騎兵第十聯隊附として從軍中卅八年六月十九日清國盛京省北苗牙口子南方高地戰鬪の際負傷し同廿二日馬石堡舍營病院に於て死去す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ハヤシ　カクサイ　林學齋　德川幕府の儒官なり名は昇字は平仲學齋は其の號復齋の子安政六年世職大學の頭を襲ぎ從五位下に叙せられ諸大夫に班す明治維新後德川氏更に命じて寺社奉行と爲す學職故の如し未だ幾ならず用人に轉じ德川公に從て駿府に移る七年司法省辟して明法權大屬と爲す十年群馬縣師範學校敎師に轉ず十四年女學校敎諭に任ぜられ校長を兼ぬ二十一年日光東照宮主典に遷り後爾宜に陞る三十三年疾を以て職を辭し舊采地武州大幡村柿沼里に寓し三十九年七月十四日終に卒す東京牛籠山伏町の先塋に歸葬す年七十四私かに謚して文靖と曰ふ（墓銘）

ハヤシ　キウセイ　林九成　京都の儒者也名は義端通稱は九兵衛仁齋の門に學ぶ家世々書肆を業とし扁して文會堂と號す正德元年五月八日殁す著す所扶桑名賢詩文集、詩林良材、文林良材等あり（鑑定便覽、諸家人物志）

ハヤシ　キカウ　林龜岡「ハヤショシモト」

ハヤシ　キクト　林喜久人　海軍大尉なり明治二十七八年日清戰役に於て天龍艦長樂千句、菅蕉日記、兩吟百歌仙、緒手卷拾遺、橘立紀行、南紀紀行、狂歌百首、俳諧家譜等あり安永八年七月二十一日殁す行年八十五歳辭世「極樂に誕生日はけふなれや」（俳家大系圖）

ハヤシ　ギタン　林義端「ハヤシキウセイ」

ハヤシ　ギボク　林義牧　遠州流の茶人名は宗甫（茶人系傳全集）

ハヤシ　キンシユウ　林金秋　陸軍三等軍吏なり兵庫縣出身にして明治廿七八年戰役に於て第二師團第二兵站糧食廠列附として出征中病に罹り廿八年七月十三日遂東牛島柳樹屯兵站病院に於て死去す

ハヤシ　キンポウ　林錦峰　德川氏の儒者林家第七世の大學頭又式部少輔と稱す文政の長子而して堀氏の出なり天保十四年三月始めて慎德公に謁す弘化四年四月小姓組番士に擢でらる六月儒員試補に轉ず嘉永六年儒官と爲る九月宗家昭甫卒す嗣なし特旨を以て文殺を以て入て宗家を紹がしむ鶯溪既に官に在るを以て鶯溪を以て文殺の家を承けしむ安政元年正月二城の留守居に陞り學職を兼ね尋で持筒頭に班す六年十二月四城の留守居に遷る官停て以て免じ更に上野芝廟守祠の命を奉ず九月罷免す明治三年三月聯岡に移居す七年一月十日病むで東京下谷長者街の僑居に殁す齡五十二東京牛込郷先塋の兆次に葬る識して文懿先生と

ハヤシ　クニヨ　林國雄　江戸の和學者なり一名は眞樹常磐舍と號し主稅と稱す鈴廼舍の門人なり二神三名考、日本書紀寫誤考、三元論等の著あり

ハヤシ　クワウ　林晃「ハヤシアウケイ」

ハヤシ　クワウ　林虨「ハアシテイウ」

ハヤシ　クワウ　クリヤウ　林鶴梁　名は長孺、通稱は伊太郎、鶴梁はその號なり、武藏の人祖伊兵衛父左十郎、三世相承て德川氏武鑑の吏員となり鶴梁年二十四始て悔勵自ら奮ひ古文を長野豐山に學び經義に松崎慊堂に受け文名大に鳴る弘化二年乙巳甲府の敎官に擢られ嘉永六年癸丑遠州中泉の代官に任ず事を作するに民財を費さゞるを誓ひ公を聽くを究なきを期し請謁を絕ち苞苴を禁ず時論鑒遠謫星を待たりといふ安政元年甲寅地震海嘯あり居民大に食に困むや倉を開て賑濟し舊儲を罄すも未だ足らず依て私金一百三十圓を出し麥稗を市ふて之を貯へ名けて惠濟倉といふなほ富豪を募り足らざるを助けしむ昔惑激して之に赴く民賴て存活せりまた古社倉に本づき議して稱貸收息立本の法を設く未だ免許を得ざるに任を羽州幸生に科す幸生は銅坑幾んど三十所あり先きに務を開き吏を置きしが銅久しく出でず鶴梁任に赴き督視し從者十餘人と各炬火を手にして坑に入り銅源を窮め其の採るべきを探し遂に工に命じ大小數百の布を裁し各大直利の三字を染成し大なるものは赤布白文鰉を製して山に竪て小なるものは白布青文手布を製し額を抹し酒を載せ肉を盛り殺夫を鼓舞して坑中に趨かしめ旬日にして果して銅三千斤を得たり皆大に喜び官の賜ものなりといふ幕府儒を以て吏務に任ずるもの岡本花亭、羽倉簡堂等の數名に過ぎず鶴梁これと譽を齊しうす鑿艦の入津するや首として鎖港を唱へ藤森弘庵等と其の議論を上下す此等の事を以て遂に營路者の擅斥する所となる明治戊辰巳

後また仕へず麻布の第に住み生徒を教授す梅樹百餘本を植ゑ花香月影の間に優游して以て身を終れり文化三年八月十三日を以て生れ明治十一年一月十六日歿す年七十三溜池澄泉寺に葬る長子國太郎先つて歿す次子鋼三郎出て羽倉簡堂の後を嗣ぐ國次郎の長子圭太孫を以て後を承ぐ總梁文鈔の著あり（墓銘）

ハヤシ　クワン　林完　陸軍歩兵少尉なり長野縣出身にして明治廿年齋藤國語學校を卒業し同地總督府殖産局に奉職中一年志願兵となり除隊後豫備歩兵少尉となる廿七八年日露戰役起るに及び召集せられて第一師團歩兵第十五聯隊附として從軍中旅順攻圍軍に加はる廿七年十一月三十日旅順背面赤坂山第四回の攻擊に際し白襷隊の三大隊爆彈を携へて進みしが多大の損害を受けたるより更に豫備隊中より四十名を選拔し少尉之が率ゐて敵陣に突進し激烈慘憺たる爆彈戰を交へしが敵は要塞に據れるとて我死傷算なく少尉亦翌十二月一日寺兒溝西方高地に於て戰死す然れども此攻擊の爲め痛く敵の志氣を沮喪せしめ爲めに其翌日に至りて奈坂山及び二〇三高地は全く我占領に歸せりと云ふ戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ハヤシ　ケウジ　林翹二　陸軍歩兵少尉なり島根縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て後備役より召集せられ後備歩兵第廿一聯隊附として從軍中廿八年三月十四日清國盛京省蓋南方陽山に於て戰死す

ハヤシ　ケン　林憲「ハヤシシュントウ」

ハヤシ　ケン　林健　德川氏の儒者第十世の大學頭なり檉宇の子名は僑字は寧齋壯軒又櫻齋と號す父歿するに及んで弘化三年祭酒の職に任ず嘉永六年歿す年二十六（林氏系譜）

ハヤシ　ゲンシチ　林源七　舊熊本藩士にして明治十年四南役に於て警部補を以て別働隊第三旅團附と爲りて從軍中三月十二日肥後國鮑田郡段山に於て戰死す

ハヤシ　コマキチ　林駒吉　陸軍歩兵少佐なり福井縣出身にして明治廿七八年日露戰役に於て歩兵第十九聯隊附として從軍中廿七年八月二十一日旅順要塞盤龍山に於て戰死す戰功に依り勳四等功四級に叙せらる

ハヤシ　ゴラウサブラウ　林五郎三郎　勤王の志士なり水戸藩士譜は正德天保中選ばれて牧机組に入り弘道館の會長を兼ね文久二年と京都に上り諸藩の志士と交を結び時廻となり又馬廻組に入り元治元年正月潮來館の陣營掛となりけるに近郷の尊攘說を唱ふる者來り屬するもの多し幾もなく鎮使松平頼德那珂湊に苦戰するよしを聞き部下數百人を率ゐて頼德の軍に投じ東南方の首脊と稱せらる丸十九日大貫村の戰に流丸に中りて傷き遂に逝く年三十三（殉難錄稿）

ハヤシヂキ　シゲノブ　林崎重信　其助と稱す陸奥の人なり幼にして劍術を好み林明神に懇願する故に林崎夢想流と號す初て長柄の刀を用ひ中興拔刀の始祖と仰がる專は希傳叟著はす所の許可卷軸に詳らかなり門弟子相承けて其衞を攻むる者各〻一家を成す（谷派劍術記、豪雄言行錄）

ハヤシ　サンヤウ　林三陽　熊本の儒臣なり名は長泰字は三陽字門と稱す本氏は荒川、初名は長東江學館に學ぶ臥文院學士春齋愚遇他に異なり命じて林氏を冒さしむ是に於て朝髮して林春泰と改む春齋の台命を蒙り本朝通鑑を選するや春泰亦與かる年二十二肥後侯に仕へて儒臣と爲る二百石を賜ふ後ち采地合せて四百石に至る享保二十年八月二十六日病で歿す年八十七（先哲遺蹤）

ハヤシ　シゲハル　林重治　肥後の金工なり初め又七と稱し後ち房吉と改む加藤清正に仕へ又細川忠利に仕ふ元禄四年歿す年八十四（古今金工便覽）

ハヤシ　シゲヨシ　林重吉　肥後の金工なり初め藤八後ち重房と改む正德元年生れ享保十四年歿す年六十九（古今金工便覽）

ハヤシ　シヅエ　林静枝　陸軍砲兵大尉なり東京府出身にして明治三十七八年日露戰役に於て野戰重砲兵第二聯隊附として從軍中三十八年九月十日清國盛京省泡子沿にて病に罹り同十月十日大房身舍營病院に於て死去す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ハヤシ　ゴヨウ　林完　陸軍歩兵少尉なり長野縣出身にして明治廿年齋藤國語學校を卒業し同地總督府殖産局に奉職中一年志願兵となり除隊後豫備歩兵少尉となる廿七八年日露戰役起るに及び召集せられて第一師團歩兵第十五聯隊附として從軍中旅順攻圍軍に加はる廿七年十一月三十日旅順背面赤坂山第四回の攻擊に際し白襷隊の三大隊爆彈を携へて進みしが多大の損害を受けたるより更に豫備隊中より四十名を選拔し少尉之が率ゐて敵陣に突進し激烈慘憺たる爆彈戰を交へしが敵は要塞に據れるとて我死傷算なく少尉亦翌十二月一日寺兒溝西方高地に於て戰死す然れども此攻擊の爲め痛く敵の志氣を沮喪せしめ爲めに其翌日に至りて奈坂山及び二〇三高地は全く我占領に歸せりと云ふ戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ハヤシ　ケウジ　林翹二　陸軍歩兵少尉なり島根縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て後備役より召集せられ後備歩兵第廿一聯隊附として從軍中廿八年三月十四日清國盛京省蓋南方陽山に於て戰死す

ハヤシ　ケン　林憲「ハヤシシュントウ」

ハヤシ　ケン　林健　德川氏の儒者第十世の大學頭なり檉宇の子名は僑字は寧齋壯軒又櫻齋と號す父歿するに及んで弘化三年祭酒の職に任ず嘉永六年歿す年二十六（林氏系譜）

ハヤシ　ゲンシチ　林源七　舊熊本藩士にして明治十年四南役に於て警部補を以て別働隊第三旅團附と爲りて從軍中三月十二日肥後國鮑田郡段山に於て戰死す

ハヤシ　コマキチ　林駒吉　陸軍歩兵少佐なり福井縣出身にして明治廿七八年日露戰役に於て歩兵第十九聯隊附として從軍中廿七年八月二十一日旅順要塞盤龍山に於て戰死す戰功に依り勳四等功四級に叙せらる

ハヤシ　ゴラウサブラウ　林五郎三郎　勤王の志士なり水戸藩士譜は正德天保中選ばれて牧机組に入り弘道館の會長を兼ね文久二年と京都に上り諸藩の志士と交を結び時廻となり又馬廻組に入り元治元年正月潮來館の陣營掛となりけるに近郷の尊攘說を唱ふる者來り屬するもの多し幾もなく鎮使松平頼德那珂湊に苦戰するよしを聞き部下數百人を率ゐて頼德の軍に投じ東南方の首脊と稱せらる丸十九日大貫村の戰に流丸に中りて傷き遂に逝く年三十三（殉難錄稿）

ハヤシヂキ　シゲノブ　林崎重信　其助と稱す陸奥の人なり幼にして劍術を好み林明神に懇願することと一百日滿期の夜夢兆あり是より其の技妙に入る故に林崎夢想流と號す初て長柄の刀を用ひ中興拔刀の始祖と仰がる專は希傳叟著はす所の許可卷軸に詳らかなり門弟子相承けて其衞を攻むる者各〻一家を成す（谷派劍術記、豪雄言行錄）

ハヤシ　サンヤウ　林三陽　熊本の儒臣なり名は長泰字は三陽字門と稱す本氏は荒川、初名は長東江學館に學ぶ臥文院學士春齋愚遇他に異なり命じて林氏を冒さしむ是に於て朝髮して林春泰と改む春齋の台命を蒙り本朝通鑑を選するや春泰亦與かる年二十二肥後侯に仕へて儒臣と爲る二百石を賜ふ後ち采地合せて四百石に至る享保二十年八月二十六日病で歿す年八十七（先哲遺蹤）

ハヤシ　シゲハル　林重治　肥後の金工なり初め又七と稱し後ち房吉と改む加藤清正に仕へ又細川忠利に仕ふ元禄四年歿す年八十四（古今金工便覽）

ハヤシ　シゲヨシ　林重吉　肥後の金工なり初め藤八後ち重房と改む正德元年生れ享保十四年歿す年六十九（古今金工便覽）

ハヤシ　シヅエ　林静枝　陸軍砲兵大尉なり東京府出身にして明治三十七八年日露戰役に於て野戰重砲兵第二聯隊附として從軍中三十八年九月十日清國盛京省泡子沿にて病に罹り同十月十日大房身舍營病院に於て死去す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ハヤシ　シヘイ　林子平　名は友直江戸の人なり其先は越智刑部少輔通高に出づ曾祖は總兵衞豐臣秀頼に事ふ豐臣氏亡びて堀越後守に事へ祿三千石を食む堀氏國除かるゝに迨びて江戸に徒る祖は新左衞門と稱す父は良通源五兵衞と稱し幕府に仕へて祿百二十石を食み小納戸兼書物奉行となり更めて大炊頭と稱す其馬邸に四門あり方位に配す幕府改めて氏を賜ひて四門と曰ふ良通學古今に渉り和歌を善くし最も國朝典故に通じ儀式數十卷を著はす後ち事に因て藩を削らる良通に二男あり長女清姿色あり和歌を善くして仙臺侯の側室となる侯因りて友諒を召して祿を與へ仙臺に寶藏て子平幼にして穎悟、人の羈絆を受けず常に山野に遊びて鳥獸を驅逐す年十三の比ろ略〻書史に通ず學動一に成人の如し喜て地圖を展觀し終日食を忘る邦土の廣狹山川の脉絡一々暗記せざるはなし甚だ奇句の業を事とせず最も心を經濟實務の事に力む大志あるを以て本藩に仕へず冠にして郷を辭し四方に流寓す蹟を慮して晏如たり其親族縉紳多し子平之を篤視して更に家事を爲さず常に曰く齷齪全きを求むるは丈夫の恥る所なり鄂ろ驍〻ろ國の爲に盡さずんばあるべからずと下野の蒲生君平亦偉士なり子平の人となりを聞きて常に之を墓ふ一日子平を訪ふ君平性眞率逸韜を飾らず敵筠短褐行裝鄙野なり子平見て叱して曰く何物の窮措大乎自から修むる能はずして肯て人に望まんや君平亦怒りて曰く野蒲何ぞ自ら尊大なると遂に一語を接せずして去る子平最も心を海防の策に慕す嘗て外國の寇に東洋を窺ふを見て憤り且つ憂て曰く我國昇平日久く士風懦弱上下恬安恰も醉眠中の人の如し外國の何物たるを知らず問々或は之を聞見するも概して禽獸視して更に心に關せず殊に知らず彼れ百技精巧器械整備海に鐵艦あり千里一瞬攻るに火員り金湯指くべし若し一たび變あらば邦家の事如何ともすべからざるなりと是に於て慷慨憂憤自ら奮て天下に先んぜんと四長崎に到り北蝦夷の地を極め天下の士氣を鼓舞し以て皇國の基礎を確定せんと欲す偶々同藩の士に工藤琢磨と云へる者あり醫を以て業とす博學卓見の人なり一日子平と

相見る琢磨常に邊防の議あり子平亦持論斯にあるを以て意氣相投合し懇懃慨談論時を移して別る是より日に相ひ訪問し交道尤も相親し子平一日琢磨を訪ひ再び長崎に到り寓情を審にせんと欲する琢磨手を拍て其志を壯なりとし宴を設けて之を餞す子平乃ち裝を促がし再び長崎に遊ぶ會〻洋艦の來航せしものあり子平躬自ら飲て洋人に接し審かに海外諸州の事情を諮訪し西洋諸國の强盛にして日々に邦境を闖き堅經利兵將に蹤を東洋に垂るゝを知り益〻邊防の急なるを憂ひ直ちに蹤を旋らして江戸に歸る是に於て海國兵談并に三國通覽の諸書を著はす子平の著書恨れ皆な平易俗言にして更に雜說の字を用ひず前に藩主に其所見を上書するや學政、武備、制度、法令、賞罰、地利、儉約、章服、及び雜篇の九篇とす其文極めて平易にして其言極めて深切なり藩主見て大に之を賞す海國兵談は總て十六卷とす初卷より十五卷に至り水戰、陸戰、物見、夜軍、人數扱、器械、經來、地形、城制、城攻、籠城、騎射、其他の事を說き末卷は文武相須て國家を經濟し食を足し兵を足すの義を言ふ今其大意を擧ぐれば曰く四洋諸國は慨して地を奪ひ疆域を拓くを以て務とす威力日に强く又航海の術に長ず然るに我日本國たる周圍皆な海にして凡そ江戸日本橋よりして歐羅巴洲に至る其間一水路にして區隔あることなし彼來らんと欲すれば則ち來る備無くんばあるべからず云々又三國通覽は隣國朝鮮琉球蝦夷の地圖を明にす其意に曰く若し日本勇士にして此三國と干戈を動かすことあるの時以て此書に實り應變をなしめんとなり二書既に刻成る而して海内未だ外寇の何ものたるを知らず人皆之を無根の事と爲す幕府有司亦た相議して虛談妄說以て衆を惑はすと爲し命じて梓を毀ち子平を仙臺に護送し兄嘉膳の家に禁錮す時に寛政四年壬子五月十六日なり其の宣告の文に曰く

松平陸奥守家來
林　嘉膳同居弟
子　平

其方儀總令利慾の爲に不致共一己の名聞に拘はり取留も無き風聞又は推察を以て異國より日本を窺ふ事可有之趣奇怪異說等取交ぜ著述致し且右の内には御要害等の儀も認入其外地理相違の繪圖相添書寫又は板行に致し室町二丁目權八店市兵衞方へ差使し候始末不愼公儀仕方不屆の至に付兄嘉膳へ引渡し在所に於て登居中付候尤も板行物并に板木取上る

右松平越中守より町奉行小田切土佐守を以て之を送しむ嘗て京都に在り一日中山亞相に謁見亞相時に高正之と云へるもの〻慷慨を稱し其の時事を論ずるや熱心終に涙を流すの狀を冒ふ子平之れに對へて曰く彼れ泣辭あるのみ抑〻今や王室端拱政府亦た人あり豈泣くべきものあらんや只憂ふべきは海防の一事のみ夫れ公既に正之を以て善と爲す若し一旦外寇の來るあらんば何を以て之れを禦ぐべき將に坐して神風を万一に待たんとするかと並し當時子平正之及び君平を稱して三偉人と云ふ而して子平の見別に異なる所あり其兄嘉膳の妻嘗て疫を患て頗る劇だし親戚と雖も或は之を避く而して子平看護して背へて避けず其疫するに及び遂に自ら罹て臥す夜半子平の所在を失し之を呼べども應へず戸衾中鼻息轟々たるを聞き揭けて之を見れば則ち子平なり叱して之を起す子平曰く夜深くして寒甚だし故に暫く衾を借るのみ抑も疫已に死す見猶ほ結む所ある乎と因て一笑す其拘ばらざること此くの如し初め子平の江戸に在る某氏に從ひて兵法を講じ幕府外國製する所の甲冑を藏す嘗て之を出さしむ子平曰く徒らに寇なるよりは躬之を撰するの愈れるに若かずと則ち損して馬に跨がり一鞭して出づ馬躍りて休まず數町を過ぎて一侯邸に入る所を說く侯之を奇とし袍を脫して之を賜ひ且つ護送して之を還さしむ侯は乃ち閣老或は曰く水戸侯なりと其禁錮に在る惰眠せず欠伸せの放體此の如し然れども其年端坐年を閱して終始一の如し後病に罹る荏苒癒えず嘉膳等之を憂ひ友人をして言はしめて曰く童蒙は末なり父兄は本なり本にして教なくんば末たるもの何を以て能く爲さんと其の立論常に人の意表に出づと云ふ（六無齋全書、慷慨家列傳、事實文稿）

ハヤシ　シャウスケ　林昌介　陸軍歩兵少佐なり舊鹿兒島藩士にして嘉永四年を以つて鹿兒島城下に生る明治十三年初めて身を軍籍に列し累進して三十五年歩兵少佐となり豫備役に編入せらる三十七年日露戰役起るに及び後備役より召集せられ最初對馬守備〻篤く寛に歿す時に年四十餘後ち數年ならず將軍家齊太政大臣に任じ夫人亦位一階を進む斯に於て四方に告て大赦を行ひ諸侯を免ず而して子平既に歿す官則ち大番頭泉田佐渡守みして赦免の狀を達す其文に曰く

死失子平再勑
林　良　伍

承り人

林子平儀先年蟄居申付候所文政五年二月御轉任御兼任之御赦之御免被仰付候然る所病死致し候に付其方へ申渡候間雖有奉存候旨令殷水野越前守殿御指圖にて遠國の儀に付主人方にて赦免申渡證書受取可指出候條別段請取案相添遣す

月　日

子平家貧して妻子無し其人と爲り慷慨大志齷齪として生を保つ是屑とせず常に心を外夷の事に痛む當時位に在るもの概れ昇平に狃れ曾て遠慮なし故に子平を以て罪と爲す世を怪しむもの無し獨り蒲生君平あり子平の歿するを聞き上書して爲に墳墓を立てんとを請ふ官許さず其後ち外夷の患敵〻あり其言皆な驗あり乃ち始て墓を立ることを許す墓は仙臺雲院の域内にあり表面に六無齋友直之墓と彫む子平將に瞑ぜんとして絕命の歌を賦す曰く「親も無し妻無し子無し板木無し金も無れど死にたくも無し」と板木なしとは出版の書籍を製禁沒收せられたるを謂ふなり後ち五十有餘年を經て明治十五年六月其大義愛國の誠意を嘉賞せられ里門に旌表し更に祭粢料を賜り正五位を贈らる仙臺曾て飢ゆ藩老佐藤伊賀なる人の子平の才を奇と爲し召して之に策を問ふ子平乃ち當國策を著し之を獻ず中に云ふあり東海鯨魚多し之を捕へば亦た以て國用の一助たるべし云々と其の他論ずる所一として經世の要務に劃切ならざるものなし子平又た嘗て父兄訓一册を著して曰く童蒙は末なり父兄は本なり本にして教なくんば末たるもの何を以て能く爲さんと其の立論常に人の意表に出づと云ふ（六無齋全書、慷慨家列傳、事實文稿）

ハヤシ　シャウスケ　林昌介　陸軍歩兵少佐なり舊鹿兒島藩士にして嘉永四年を以つて鹿兒島城下に生る明治十三年初めて身を軍籍に列し累進して三十五年歩兵少佐となり豫備役に編入せらる三十七年日露戰役起るに及び後備役より召集せられ最初對馬守備

に任ぜしも後後備歩兵第十三聯隊附と爲りて滿洲に出征し安東縣柴馬吏及び廐城を經て三十八年二月下旬奉天戰の序幕戰に於て前進右翼軍の一隊長として二十日より二十八日まで惡戰苦鬪を重ね榛子嶺の戰に於ては要害に據れる敵を擊退して遂に之を占領し更に前進するに際し孤家子附近に於て敵彈に中りて死す年五十

ハヤシ　ジュツサイ　林述齋　德川幕府の儒官なり名は衡字は德詮、述齋は其の號又蓮隱と號す幼字は熊藏叙爵せられて大學頭と稱す生父は岩村城主大給松平の支族能登守乘薀述齋は其の次子なり幼にして好みて書を讀む父之を鍾愛し爲めに老儒大鹽鷲渚服部仲山を聘して之が師となす十七八に迨びて和漢古今の書通覽ぜざるなし詞藻亦た縝にして觀るべし既にして二老相尋で物故す自後獨學して師なし佐藤一齋鵝述齋より少きこと四歳亦少より藩內に長じ晝夜伴讀研鑽すゝと約そ三四年述齋一旦自ら悔いて謂ふ人志あれば成らざるなし我曾て漢唐の學に從事して訓詁に瑣々たり今其だ之を厭ふ吾れ將さに宋說を取舍して別に一家言を成さんとすと乃ち朱子の撰者を合併し號して八書訓となす又齊魯韓三家の詩說を折中して詩考補を作り及び經義叢說若干卷を編著す當時述齋英氣勃々肯て人に屈下せず獨り澁井太室と云ふ者あり林門の高足と稱す述齋一見して心服し遂に貲を執りて之に師事す又細井平洲と云ふ者あり太室の友となす固て復た往て其の講說を聽き又布衣の交りをなす同藝を以て相來往する者無慮十數人時寛政の初めに際し幕府政を新たにし賢者無慮十數人時寛政の初めに際し幕府政を新たにし賢を進めて不肖を退け苟くも驥縲の善あれば必らず甄拔を蒙むる而して述齋名上達す蓋し將に用ふる所あらんとするなり會〻林祭酒簡順卒して嗣なし官特に述齋を抽んでゝ其後を承けしむ事不意に出づ述齋狀を上りて然辭すると再三允るされず是に於て輟然として起つ時に年二十六述齋の出づるや首として上言して國學を制建し以て文教を崇び造士法を立て三年に業を試み其の俊偶を擧げて以て國家の用に充てんとを請ふ允るさゝ此より前き昌平坂一區は林氏の別邸たり聖廟ありと雖も私家に屬す是に至りて述齋地と廟とを并せて之を納む因て旨を承けて區域を開拓し改めて聖廟を營み黌館察を建てゝ上下を區し以て官私生員を增益し司業を抄選し屬更を置く規模弘大に制度森嚴學政是に於てか擧征し安東縣柴馬吏及び廐城を經て三十八年二月下旬奉天戰の序幕戰に於て前進右翼軍の一隊長として二十日より二十八日まで惡戰苦鬪を重ね榛子嶺の戰に於ては要害に據れる敵を擊退して遂に之を占領し更に前進するに際し孤家子附近に於て敵彈に中りて死す年五十

ハヤシ　ジュツサイ　林述齋　德川幕府の儒官なり名は衡字は德詮、述齋は其の號又蓮隱と號す幼字は熊藏叙爵せられて大學頭と稱す生父は岩村城主大給松平の支族能登守乘薀述齋は其の次子なり幼にして好みて書を讀む父之を鍾愛し爲めに老儒大鹽鷲渚服部仲山を聘して之が師となす十七八に迨びて和漢古今の書通覽ぜざるなし詞藻亦た縝にして觀るべし既にして二老相尋で物故す自後獨學して師なし佐藤一齋鵝述齋より少きこと四歳亦少より藩內に長じ晝夜伴讀研鑽すゝと約そ三四年述齋一旦自ら悔いて謂ふ人志あれば成らざるなし我曾て漢唐の學に從事して訓詁に瑣々たり今其だ之を厭ふ吾れ將さに宋說を取舍して別に一家言を成さんとすと乃ち朱子の撰者を合併し號して八書訓となす又齊魯韓三家の詩說を折中して詩考補を作り及び經義叢說若干卷を編著す當時述齋英氣勃々肯て人に屈下せず獨り澁井太室と云ふ者あり林門の高足と稱す述齋一見して心服し遂に貲を執りて之に師事す又細井平洲と云ふ者あり太室の友となす固て復た往て其の講說を聽き又布衣の交りをなす同藝を以て相來往する者無慮十數人時寛政の初めに際し幕府政を新たにし賢者無慮十數人時寛政の初めに際し幕府政を新たにし賢を進めて不肖を退け苟くも驥縲の善あれば必らず甄拔を蒙むる而して述齋名上達す蓋し將に用ふる所あらんとするなり會〻林祭酒簡順卒して嗣なし官特に述齋を抽んでゝ其後を承けしむ事不意に出づ述齋狀を上りて然辭すると再三允るされず是に於て輟然として起つ時に年二十六述齋の出づるや首として上言して國學を制建し以て文教を崇び造士法を立て三年に業を試み其の俊偶を擧げて以て國家の用に充てんとを請ふ允るさゝ此より前き昌平坂一區は林氏の別邸たり聖廟ありと雖も私家に屬す是に至りて述齋地と廟とを并せて之を納む因て旨を承けて區域を開拓し改めて聖廟を營み黌館察を建てゝ上下を區し以て官私生員を增益し司業を抄選し屬更を置く規模弘大に制度森嚴學政是に於てか擧がる以て後世に至て替ふるとなし述齋時に謂らく學問を掌どるものは敎亦た公ならざるを得ず其の道德を一にし趨向を同うする概れ常に宋學を以て唱となすべし私說は必ず瞰々せずと是に於て盡く舊撰を屏けて一家の私說は必ず瞰々せずと是に於て盡く舊撰を屏けて復た用ひず文化辛未に至りて韓使來聘す例は使者を延て今は則ち旨あり聘を對馬に受く是に延まる所特り區々たる文儒に在らざるを知る天保戊戌年の若きは殊に其の餘業のみと是に由て其の終身の期待の者は必ず瞰々せずと是に於て盡く舊撰を屏けて復た用ひず文化辛未に至りて韓使來聘す例は使者を延て今は則ち旨あり聘を對馬に受く是に延まる所特り區々たる文儒に在らざるを知る天保戊戌年七十一老病を以て開殿侍講及び學事を解かんことを乞ふ幕府其の乞を聽るす猶ほ機務に參預すること故の如し居ること三年宿痾纏綿して自ら其の起たざるを知り一齋を召して後事を遺託し爾後數日にして沒す年七十四籠して快烈府君と曰ふ述齋職に在ること凡そ四十九年其の寵異を被むる終始渝はらず家秩元と千五百石述齋に至りて前後秩を增して三千五百石歳給今して一千二百金特旨班を進めて木城留主に亞ぐ盡し述齋入りて繼ぐより班秩廻かに家祖數世の上に出づ稱して中興と曰ふ述齋幼より詩を好み十八歳の時一夜を限りて百律を作る既にして長じて詩人木口蘭齋と訂交唱和し晩年に渾化して益〻妙に趨き自ら一家を成す述齋嘗て一齋を訪ひ一行厨を携て之に示して曰く此の物吾子記するや否一齋記ずず述齋乃ち曰く此の物は伯氏玉川に驕行する時佩ぶる所の者に係る食し訖りて香魚を此の厨に活蓄し并せて賜はる時に吾子七八歳來りて香魚を翫弄す余之を叱す吾子余の亡きを時とし竊かに來りて香魚を拈りて盡く之を殺す余怒りて吾子を拳り吾子泣號す幼時は此の如く今は則ち道學先生なりと爲りて一笑す一齋之を聽き亦た驚然たり（墓表、近世先哲叢談）

ハヤシ　ジュンイチ　林純一　海軍中尉なり山口縣出身にして明治廿七八年日露戰役に於て軍艦厳島に乘組み從軍中廿七年八月九日龍十塘沖に於て敵艦隊と交戰の際戰死す

ハヤシ　シュンサイ　林春齋　德川幕府の儒官なり名は恕、一の名は春勝、字は子林後ち之道と改む春齋は其の號又鶯峯と號す別に向陽軒、葵軒、竹廬、爬背子、晞顏齋、也菴齋、格物庵、溫故知新齋、硯雪眠月庵、傍花隨柳堂、辛夷塢、仲林、南聰、恒宇、南敬、櫻峯、碩果等の稱號あり羅山の第三子、母は荒川氏元和戊午を以て春齋を京都に生む天性至孝にして溫柔貞固、文詞は那波活所を師とし松永貞德に學ぶ稍〻長ずるに及びて博學強記、經史子集悉く之れを究めざるなし且つ本朝の歷史に通じ諸家の本文を諳んじ每れに問ふ者あれば應對流るゝが如し寛永甲戌父に從ひて東來し江戸に住居す時に年十七其の年將軍家光に謁し其後或は近く御前に召されて異國の書を草し或は政事を咨詢す而して能く其事に堪ふ或は命を奉じて日光久能南祀京都に赴むき勤勞少なからず癸未の歳命に依りて寛永系圖三百卷を蒐集す正保甲申俸支宅地を賜ひ明年食祿を加倍す万治申申官金を賜ひて珍藏を藏書す寛文辛丑法印に叙せらる癸卯の冬五經を講了し私考を作りて蘊奥を開示す事台聽に達し弘文院學士の號を賜ふ且つ心力四書に罩し程朱を篤信して國字解を作くる其の餘編軸の書甚だ多し度戊の歳國史を編す總べて三百十卷官命じて名を本朝通鑑と賜ひ食祿を加增し且つ俸支を賜ひて諸生を教育せしむ又た官材を賜ひて學察を造る來り學ぶ者日々に多し家に塾舍を立て循々勸誘し自ら以て樂と爲す闔國推して儒宗と爲す延寶甲寅命ありて再び忍岡の聖堂を修し年々祭祀して絕えず禮典漸く備はり賞介侯伯勳老執政來りて祭儀を觀る暇日には著述を愛し韓使の至る每とに贈酬頗繁凡そ詩は一万首文は二千編家に存すハ年五月五日病みて歿す私謚して文穆といふ年六十三人皆な之れを歎惜す著す所其の概略を學ぐれば前書の外に周易本義首書、王代一覽、職原抄聞書、古文孝經講解、孟子講解、歷代答疑、本朝言行錄、日本百將傳、職原抄會通、和漢軍談、本朝事蹟考、改元物語、諸家系圖傳、歷代叙畧抄、弓書等あり二男を擧ぐ長は春信次は鳳岡、鳳岡家を嗣ぐ（春齋墓碑、近世叢語、先哲叢語、近代名家著述目錄）

ハヤシ　シュントウ　林春東　德川幕府の儒官なり第二林家と稱す春德の男、名は勝淫、一の名は憲字は章甫、幼名又助、後春東、晉軒、洗林の三號あり萬治四年父の業を繼ぎ本朝通鑑編輯の事に預る延寶四年十一月九日歿す年二十三著す所梧右錄、梧棠餘錄あり（事實文編、鑒定便覽）

ハヤシ　シュントク　林春德　德川幕府の儒官なり初の名は守勝字は子文、右近と稱す後ち名を靖字に改む春德は其の號又函三子、考槃蘊、讀耕齋、剛訥子、欽哉亭、靜廬、其齋等の號あり後專ら讀耕齋の號を用ふ羅山の第四子春齋の弟なり寛永元年十二月日京都に生る家庭に學び博學强記當時名あり正保三年始て將軍家光に謁し宅地井に年俸二百苞を賜ひ祿髮して春德と號し第二の林家と稱す明暦二年法眼に叙ぜられ三年食祿を加賜せられ前に遡じて五百石となす万治四年三月十二日病歿す年三十八春德資性嚴毅人に柱屈せず世之を稱す私謚して貞毅先生と云ふ著述は所讀耕集、本朝遯史、八人一筆、平聲廣韻畧、和漢補袞錄開見抄、本朝編年錄、中朝帝王譜、處守橋等あり子澄と曰ふ（先哲叢誌、事實文編、鑒定便覽、近代名家著述目錄）

ハヤシ　ショウリン　林松林　畫家なり名は儼字は稚膽長崎の人にして畫を善くし最着色に長ぜり熊斐の門人なり安永年間江戸に來り一時大に行はれ人となり風神倜邁酒を嗜み小事に屈々たらず鏡あれば妓館酒樓にあり鏡盡くれば門を閉ち孜々筆を揮ふ寛政四年八月歿す松林斐らず亦兄弟なし或は曰く松林は唐山賈人の子なりと（松林山人墓碣、鑒定便覽）

ハヤシ　ズヰオウ　林隨應　村上彌十郎に石州流の茶道を學びて能くせり（茶人系傳全集）

ハヤシ　セイ　林靖「ハヤシシュントク」

ハヤシ　セイウ　林整宇「ハヤシホウカウ」

ハヤシ　ソウウウ　林雙橋　淡路の儒者なり名は英字は俊仲縱新の後京都に居り諸生に敎授す明治二十九年三月廿日歿す年六十九

ハヤシダ　イウキ　林田游龜　陸軍步兵中將なり熊本縣出身にして明治二十七八年日清戰役中大隊の旨を承けて邊方に派遣せられ廿八年四月九日本營副官部員として蠻灣に派遣せられ廿八年四月九日澎湖島馬公城避病舍に於て死去す

ハヤシ　ダウエイ　林鑾「ハヤシホウカウ」

ハヤシ　ダウエイ　林道榮　有名の書家なり名は鷹雄、字は鐵雲、道榮は其の號、又鑾淀、蘿山の號あり肥前長崎の人、幼にして書を好み五行俱に下る時より父に就て佛學を學ぶ後嗣井藩の貢進生となり昌平學南校に入るその卒業六ケ月前偶〻起立工商會社が巴里博覽會に陳列所を設くるの擧あり忠正は雇はれて其の事大に操ふ遂に衆に忌まれて長崎に還る寛文癸卯擢てられて譯官となる時に年二十四延寶真享の際道榮の書名大に天下に聞れ遠近爭ひ求む世目して高天漢と並び稱して長崎の二妙と云ふ大村侯大に道榮を崇ぶ乃ち雄浦の地數十步を賜ひ以て儒居の所とす又奉行牛込勝登に寵あり此時大譯官劉宣義博聞學を好む又奉行に寵あるを以て道榮宣義の二人曹夜相會に陪侍して詩を賦し文を屬す一日奉行二人を招て置酒す偶〻杜少陵の東閣官梅の句を分ち各賜ひて以て號とす宣義を東閣と道榮を官梅とす是に由りて道榮の子孫相襲ひて官梅を號とす元祿中清國進士周勤士長崎に遊ぶ道榮熊接唱酬す勤士大に之を賞す寶永五年十月二十二日年六十九にして歿す（近世叢語、諸家人物志）

ハヤシ　ダウケイ　林道溪　遠州流の茶人なり縣宗知の門に入りて茶事を能くす千手庵當向、又日繡と號す享保二十年乙卯十月二十三日卒す（茶人系傳全集）

ハヤシ　ダウシュン　林道春「ハヤシラザン」

ハヤシダ　サブン　村田左文　戶田流飯道の達人なり筑前藩の士にして步卒二十人に長たり一國の士多く其の門下に集る一日其の卒六人相謀り人を狂害して他州に奔る左文馬を馳せて之を追ひ從容諭して曰く同士中必ず罪に首從あるべし我遠く並に至るは其の輕重を糾し務て寛典に處せんと欲するのみと且官ひ且前む一人其儁心を察し忽ち拔刀して遊ふ左文手を擧げて之を制す聽かず即ち一刀に之を斃す大に呼びて曰く敵に來る者は皆斬らんと又一人刀を舞して來る左文逡巡する數步彼れ間を得て突き入る又同く斬りて之を殺す是の如くにして斬る者四人一人に重傷を負し踢て又一人を倒し馬上に死傷者を束縛して歸る後左文人に語りて曰ふ始め甘罰を以て之を愍諒せしは其一時に相敵せんとを恐れてなりと人其機智に感ず（藥雄言行錄）

ハヤシ　タダマサ　林忠正　越中高岡の人父を長崎譯定といふ富山藩士蘭學者林太仲に養はる幼名は熊雄字は鷹雲、道榮は其の號又書法に巧みなり凡そ眞草行隸能くせざる所なし詩を作るに構思を務めず筆を下せば立所に就る萬治中奉行斐木氏に從ひて江戸に來り觀髮して自ら道榮と號す名

ず故に應酬の文字は率れ稿を留めず而して韻語及び和歌小品は一時の遊戲に出づる者にして子弟門人の錄する所を遺す耳嘗て曰く大丈夫心事は宜しく明白爽快なるべし官に居らば尤も宜しく公正の二字を失する勿るべし學問の道は他なし之を誠意に本づきて其の體を樹て之を事業に推して以て其の用を宏くす夫の文藝詞翰の若きは殊に其の餘業のみと是に由て其の終身の期待する所特り區々たる文儒に在らざるを知る天保戊戌年七十一老病を以て開殿侍講及び學事を解かんことを乞ふ幕府其の乞を聽るす猶ほ機務に參預すること故の如し居ること三年宿痾纏綿して自ら其の起たざるを知り一齋を召して後事を遺託し爾後數日にして沒す年七十四籠して快烈府君と曰ふ述齋職に在ること凡そ四十九年其の寵異を被むる終始渝はらず家秩元と千五百石述齋に至りて前後秩を增して三千五百石歳給今して一千二百金特旨班を進めて木城留主に亞ぐ盡し述齋入りて繼ぐより班秩廻かに家祖數世の上に出づ稱して中興と曰ふ述齋幼より詩を好み十八歳の時一夜を限りて百律を作る既にして長じて詩人木口蘭齋と訂交唱和し晩年に渾化して益〻妙に趨き自ら一家を成す述齋嘗て一齋を訪ひ一行厨を携て之に示して曰く此の物吾子記するや否一齋記ずず述齋乃ち曰く此の物は伯氏玉川に驕行する時佩ぶる所の者に係る食し訖りて香魚を此の厨に活蓄し并せて賜はる時に吾子七八歳來りて香魚を翫弄す余之を叱す吾子余の亡きを時とし竊かに來りて香魚を拈りて盡く之を殺す余怒りて吾子を拳り吾子泣號す幼時は此の如く今は則ち道學先生なりと爲りて一笑す一齋之を聽き亦た驚然たり（墓表、近世先哲叢誌）

ハヤシ　ジュンイチ　林純一　海軍中尉なり山口縣出身にして明治廿七八年日露戰役に於て軍艦厳島に乘組み從軍中廿七年八月九日龍十塘沖に於て敵艦隊と交戰の際戰死す

ハヤシ　シュンサイ　林春齋　德川幕府の儒官なり名は恕、一の名は春勝、字は子林後ち之道と改む春齋は其の號又鶯峯と號す別に向陽軒、葵軒、竹廬、爬背子、晞顏齋、也菴齋、格物庵、溫故知新齋、硯雪眠月庵、傍花隨柳堂、辛夷塢、仲林、南聰、恒宇、南敬、櫻峯、碩果等の稱號あり羅山の第三子、母は荒川氏元和戊午を以て春齋を京都に生む天性至孝にして溫柔貞固、文詞は那波活所を師とし松永貞德に學ぶ稍〻長ずるに及びて博學强記、經史子集悉く之れを究めざるなし且つ本朝の歷史に通じ諸家の本文を諳んじ每れに問ふ者あれば應對流るゝが如し寛永甲戌父に從ひて東來し江戸に住居す時に年十七其の年將軍家光に謁し宅地井に年俸二百苞を賜ひ祿髮して春德と號し第二の林家と稱す明暦二年法眼に叙ぜられ三年食祿を加賜せられ前に遡じて五百石となす万治四年三月十二日病歿す年三十八春德資性嚴毅人に柱屈せず世之を稱す私謚して貞毅先生と云ふ著述は所讀耕集、本朝遯史、八人一筆、平聲廣韻畧、和漢補袞錄開見抄、本朝編年錄、中朝帝王譜、處守橋等あり子澄と曰ふ（先哲叢誌、事實文編、鑒定便覽、近代名家著述目錄）

ハヤシ　ショウリン　林松林　畫家なり名は儼字は稚膽長崎の人にして畫を善くし最着色に長ぜり熊斐の門人なり安永年間江戸に來り一時大に行はれ人となり風神倜邁酒を嗜み小事に屈々たらず鏡あれば妓館酒樓にあり鏡盡くれば門を閉ち孜々筆を揮ふ寛政四年八月歿す松林斐らず亦兄弟なし或は曰く松林は唐山賈人の子なりと（松林山人墓碣、鑒定便覽）

ハヤシ　ズヰオウ　林隨應　村上彌十郎に石州流の茶道を學びて能くせり（茶人系傳全集）

ハヤシ　セイ　林靖「ハヤシシュントク」

ハヤシ　セイウ　林整宇「ハヤシホウカウ」

ハヤシ　ソウウウ　林雙橋　淡路の儒者なり名は英字は俊仲縱新の後京都に居り諸生に敎授す明治二十九年三月廿日歿す年六十九

ハヤシダ　イウキ　林田游龜　陸軍步兵中將なり熊本縣出身にして明治二十七八年日清戰役中大隊の旨を承けて邊方に派遣せられ廿八年四月九日本營副官部員として蠻灣に派遣せられ廿八年四月九日澎湖島馬公城避病舍に於て死去す

ハヤシ　ダウエイ　林鑾「ハヤシホウカウ」

ハヤシ　ダウエイ　林道榮　有名の書家なり名は鷹雄、道榮は其の號、又鑾淀、蘿山の號あり肥前長崎の人、幼にして書を好み五行俱に下る時より父に就て佛學を學ぶ後嗣井藩の貢進生となり昌平學南校に入るその卒業六ケ月前偶〻起立工商會社が巴里博覽會に陳列所を設くるの擧あり忠正は雇はれて其

通蹤兼寶子となり渡航す博覽會閉會後留りて修學せんとしたれども學資給せず爲めに學事を斷念して貿易商たらんとし明治十七年の元旦より巴里下宿屋の一室を以て一小美術店となし每朝市中に行商し漸次業務繁昌して一個の商店を成すに至れり是れ巴里に於ける日本美術商林商店の起源なり三十三年巴里に世界大博覽會の開設せらるゝや駐佛公使曾根荒助の推薦によりて博覽會事務長官に任ぜられ日本出品事務所々長として大に斡旋したり功によりて正五位勳四等に叙せらる三十六年巴里の林商店を引揚げ東京に歸りしが病に罹り三十九年四月十日歿す

ハヤシ　タツジラウ　林辰次郎　陸軍歩兵少尉なり長野縣出身にして明治卅七八年日露戰役に於て歩兵第三聯隊附として從軍中卅七年九月廿日旅順要塞水師營南方高地戰鬪の際負傷し同二十八日青泥窪兵站病院に於て死去す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ハヤシ　タツミ　林辰巳　陸軍歩兵中尉なり福岡縣出身にして明治卅七八年日露戰役に際し歩兵第二十二聯隊附として從軍中卅七年八月二十四日旅順要塞望臺に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ハヤシ　タンザン　林單山　名は孔彰、信濃の儒者にして松代藩に仕ふ天保七年歿す單山雜著、單山詩文集等の著あり（諸家著述目錄）

ハヤシ　チャウ　林長羽　水戸の人にして書畫を善くす字は子翼又雲夫十江と號す俗稱長次郎幼にして善く畫く試みに雷公擊落狂夫相囓等の雜題を畫かしむるに筆を把りて立どころに成る人皆其の俊逸に驚く長じて其の技益々進む江戸に來り谷文晁と交はる文晁其の腕力の非凡なるを知り己に代りて吉原の引手茶屋某の金屏風を畫かしむ長羽爲めに梅花を畫きたり氣韻卓絕凡筆にあらず大に賞讃せらる文化十年九月十九日歿す年三十七（碑文）

ハヤシ　チュウ　林忠「ハヤシラザン」

ハヤシ　チュウザエモン　林忠左衛門　勤王の志士なり水戸藩士なり以德と稱す初め林杞廻と稱し後鳥廻組に遷る安政年中主君齊昭幕府の讒責を蒙るや同士を誘ひ江戸に上り朝旨を奉し君寃を雪かんと謀議起るに及び忠左衛門其不可なるを論す後勅書奉還の議起るに及び忠左衛門其不可なるを論す憤り猶も同士を慕り前意を貫徹せんとす忌み且つ負傷し同月十八日同島大藩林に於て戰鬪中負傷し同月十七日同所衞生隊に於て死去す

ハヤシ　テンシン　林天眞　書家なり名は台字は子量安藝の人京都貴船に住す文政四年九月十三日歿す年六十（鑒定便覽、平安墓所集）

ハヤシ　ドウカイ　林洞海　豐前小倉の醫師なり名は彊字は健卿、洞海は其號なり後以て通稱となす文化十年二月を以て小倉篠崎村に生る天保二年歳甫めて十九京阪の間に遊び二十一にして江戸に遊び二年三長崎に遊び二十六又江戸に遊ぶ寮蒐兒藥性論を譯述し三十部を謄寫し一部の價金三兩を爲し以て同好の士に頒ち之を以て遊學の資に充つ二十八にして再び長崎に遊び三十一にして遂に江戸に出で藥を藥研堀に開く時に天保十四年なり窺氏藥性說大に行はるゝ雖も謬遠の際誤譯鮮からず加ふるに傳寫の故を以て魯魚の失亦甚だ多し是に於て失誤を考訂し新說を增補し以て上木せんと欲し之を醫學館に請ふ三年なるも報あらず遂に上木を許さゞるの箋を附し以て之を返す嘉永三年歳三十八小倉侯に簒仕す此年復た藥論の上木を請ふ遂に許可を得たり以て世に公にす萬延元年幕府の召に應じ出でゝ幕ら二丸製藥所を主る翌年進て侍醫と爲り法眼に叙せらる文久三年將軍上洛供奉の列に加はり京に上る後慶喜及龜之助に歷任し隨て騎府に移る明治二年靜岡藩病院を沼津に建て洞海を以て其副長と爲す三年大學中博士に任じ從六位に叙せらる尋で大阪醫學校長と爲る十二月權大典醫に轉任し鼎太后所用と爲る洞海嘗て內科書の譯述あり將に上木せんとす聞き因て相議して黑忠恵も亦同書譯述上木の擧ありと聞き因て相議して三氏合譯と爲し內科簡明と題し以て世に公にす九年四等侍醫に轉任し正六位に叙せらる後退隱復た出でず二十八年二月二日病を以て歿す年八十三

ハヤシ　トウシウ　林東舟　德川幕府の儒官なり初め名は信澄、後永善と改む東舟は其の號、晚に樗墩と稱す羅山の弟京都の人なり慶長戊申始て江戸に來り柳營に筮仕す時に年二十八歳に至て顧問を承け既にして屋宅を承け甲寅乙卯雜波の役に鹵簿の後に從ふ元和丙辰命を蒙りて台嶺僧正と俱に洛に入り家康の諮詢に奏議し詔を得て東歸す脊過日々に厚し會し府廳に官事及神祇浮屠の事の牒訴ある每に其席に陪す故に世を擧て其名を識る寛永丙寅の秋二條城に行幸して數奏取捨あり即ち東舟預り聞く時に敕して宋朝類苑一部及綿數十匹を賜ふ已巳交の憂に丁たり暇を告て洛に赴き忌擧りて歸る臘晦刑部卿法印に叙せらる乙亥台命あり十九條の制法を邦國に示す其討論修飾與りて力あり丙子冬朝鮮來貢す其禮及返簡兄羅山と共に或は之を考へ或は之を草す東舟幼より書を讀み詩を作り文を屬す藤原惺窩及兄羅山に學び衞業益々進み名聲羅山と齊し且倭歌を弓治に問ひ以て祕蘊を窺ふ兄そ倭唐の群書涉獵せざるとなく咨詢ある每に補ひなしと爲さず寛永十五年八月十五日病て歿す年五十四、人皆歎惜す著す所樗敏雜記、東武紀年、三史鈔、東舟詩集、東舟文集等あり（東舟墓碑、先哲叢談、續諸家人物志）

ハヤシ　トウオイ　林東溟　江戸の儒者なり名は義卿字は周父、東溟は其の號、周介と稱す長門の人、少き時山縣周南に師事して州學明倫館に寓す年十三に至り擢られて生員となる遂に同門の士和智樣卿、山根清、瀧長愷、小倉實服等と長州十才子の稱あり其の名風に聞四に著はる歳中樣卿長愷と之を山縣門の三傑と稱す年二十四故ありて其の州里を去り溟華に來り講說して業となす又平安に移る從遊の士日に衆し京橋の間稍々物氏の學の行はるゝは東溟を以て嚆矢とす郷里を去りてより意を仕進に絕ち王侯の聘問悉く辭謝す後江戸に來り生徒に教授す初め其の泯華に在りし時備後の人鍋島公明東溟に學て篤く物氏の學を信ず曾て物氏が人に與ふる國字の書を僞作し名て徂徠國字牘と曰ふ序を東溟に求む東溟其の僞作なるを知らずして其の請に應ず後其の僞作の事世に發覺す故を以て東溟江戸に至ると雖も讒社の諸家爭へて共に交らず聲價漸く減ず乃ち常に詩酒の間に豪放し敢て儒を以て居らず晚年に及びて紫碧仙叟と稱し老莊の學を好み優遊以て晚を終ふ時に安永九年九月廿五日なり年七十三著はす所明官古名考、文則、詩則、明月篇、林塾學規、東溟詩稿等あり（先哲叢談續編）

ハヤシ　トモユキ　林友幸　薩山口藩士林友信の長男なり文政六年二月六日を以て生る幼より槍術を好み藩の師範役小畑源右衛門の門に入りて日夜勉めて倦まず二十八歳の時既に奥免狀を得て寶藏院流の奥儀を究め槍の半七（當時の通稱）の名一藩に響き下士の身分より士分に陞せらる風に勤王攘夷の論を主持して馬關に於ける外船砲擊に際し長槍を揮つて部下を勵まし維新前藩論二派に分れ紛糾を極むるに當り書夜奔走して藩侯の爲めに謀り功に依り寶轉職して功あり賜物授賞士盛岡藩大參事九戸縣權知事內務大丞兼土木頭內務少輔議官權知事內務大丞兼土木頭內務少輔議官戸縣權知事岩倉大納言公務人民部大丞兼民部省刑事試補年七月勳功に依り子爵を授けられ特に廿三年貴族院議員に當選し以後當選す年五月富美宮御養育主任を拜命し其後更に泰宮御養育主任をも兼ね三十三年四月樞密顧問官に任ぜられ貴族院議員を辭す四十年十一月病を以て東溟江戸に至ると雖も讒社の諸家爭へて共に交らず聲價漸く減ず乃ち常に詩酒の間に豪放し敢て儒を以て居らず晚年に及びて紫碧仙叟と稱し老莊の學を好み優遊以て晚を終ふ時に安永九年九月廿五日なり年七十三著はす所明官古名考、文則、詩則、明月篇、林塾學規、東溟詩稿等あり（先哲叢談續編）

ハヤシ　トモユキ　林友信　薩士林友信の長男なり文政六年二月六日を以て生る幼より槍術を好み藩の師範役小畑源右衛門の門に入りて日夜勉めて倦まず二十八歳の時既に奥免狀を得て寶藏院流の奥儀を究め槍の半七（當時の通稱）の名一藩に響き下士の身分より士分に陞せらる風に勤王攘夷の論を主持して馬關に於ける外船砲擊に際し長槍を揮つて部下を勵まし維新前藩論二派に分れ紛糾を極むるに當り書夜奔走して藩侯の爲めに謀り功に依り寶轉職して功あり賜物授賞士盛岡藩大參事九戸縣權知事岩倉大納言公務人民部大丞兼土木頭內務少輔議官權知事內務大丞兼土木頭內務少輔議官戸縣權知事岩倉大納言公務人民部大丞兼民部省刑事試補年七月勳功に依り子爵を授けられ特に廿三年貴族院議員に當選し以後當選す年五月富美宮御養育主任を拜命し其後更に泰宮御養育主任をも兼ね三十三年四月樞密顧問官に任ぜられ貴族院議員を辭す四十年十一月病を以て東溟江戸に至ると雖も讒社の諸家爭へて共に交らず聲價漸く減ず乃ち常に詩酒の間に豪放し敢て儒を以て居らず晚年に及びて紫碧仙叟と稱し老莊の學を好み優遊以て晚を終ふ時に安永九年九月廿五日なり年七十三著はす所明官古名考、文則、詩則、明月篇、林塾學規、東溟詩稿等あり（先哲叢談續編）

ハヤシ　トモユキ　林友幸

ハヤシ ヒロモリ 林廣守 廣爲七代の孫にして廣就の養子なり幼名を榮之助と稱し林廣倫の第三子なり性音律に精しく父祖の業を襲ぎ笙琵琶琵琶に舞に兼通せり特に笙は其堪能なるところにして近代斯道の泰斗なり今代の笙師は皆其門より出て其樂風一世に遍くまた國歌君が代の作者として著名なり樂を祖父廣清に受く廣清は正四位上播津守に至り仁孝帝御宇文政蒙り木工助を兼任し名聲藉甚なり父廣就また近世の大家にして笙に堪能なるを以て有名なり祖父殁後父廣就に就き樂道の奥旨を究む慶應元年十月樂家及第に臨み滿票を得たり當時樂家之を異數となす蓋し樂家試驗法の行はれし爾來こゝに二百有餘年其間滿票を得たるは廣守を加へて僅かに五人なりといふ又吹笙に巧妙なるのみならず其製笙また巧藝を極む嘗て小笙一管を鑄製し東宮殿下に奉獻せり天保二年十一月大阪に生る幼名を廣金といふ天保十二年十月初めて正六位下に叙し左兵衛權少尉に任ず後ち累遷して正五位上筑前守に至る明治元年正月内侍所非常附勤番被仰付同年二月大阪御親征供奉被仰付同年四月東上を命ぜられ大咎人に任ず同十七年雅樂師副長に任じ同十一月更に正八位に叙す同廿一年五月雅樂部副長に任ず同廿五年三月從七位に叙す同廿六年四月致仕同廿九年四月特旨を以て位一級被進正七位に叙す同年四月五日病殁す年六十六

ハヤシ ヒロヤス 林廣康 本姓秦氏天王寺の樂人なり父を廣政といひ笙舞を以て世業とす應仁以後京都の樂官耗散し朝廷の雅樂久しく廢缺す正親町帝之を憂ひ天王寺の樂人を召す廣康笙を善くするを以て其中にあり京都の樂人となり弟廣勝を以て父廣政の後を嗣がしめ別に一家を興す文祿元年石見守に任じ慶長八年從四位上に叙ぜらる寛永三年四月十一日卒す年七十三(林氏家傳)

ハヤシ フゲイチ 林孚一 勤王家にして備中倉敷の樂舗なり本姓石井氏林氏を繼ぐの初、家勢甚だ振はず森田節齋の倉敷に寓するや勃興の変をなす常に皇室の微衰を慨歎し鈴木重胤と共に京都に至り藤本鐵石轟武兵衛河上亥齋等と會見せしが其の過激輕躁にして事を共にす可からざるを思ひ家に歸り專ら王政恢復の計畫せり而して幕府の嫌疑を蒙りたるも幸に縲絏の患を免かれたるは平素温厚にして過激の擧動をなさゞるが爲なり維新の初岡山藩其藩地備前國兒島郡小串村に關門を設け出入の船舶に重税を課し猥りに人民の往來するを妨ぐ此に於て單身京都に至り太政官に上書し藩の亡狀を訴ふ官直に關門を撤せしむ維新後專ら治七年區長となり十一年九月郡長に任ぜらる人民と接するに誠實を以てし十年一日の如し故に年老いたるを以て職を辭するや郡民知事に迫りて之を許さゞらんを乞ふ辭すること三たび漸く允許を得たり明治十七年三月宮内省より維新前後國事に盡力し且つ德行の聞えあるを賞して金百圓を下賜せられ二十二年六月特旨を以て正七位に叙せらる明治二十五年九月十三日八十二にして殁す

ハヤシ フイン 林孚尹 儒者なり加州の人天明紀元六月十六日生る名は瑜、周輔と稱し輝拔一に藤坡に作る)と號す孚尹は字なり實は澁谷氏其德公に屬し頗る軍績あり後從ひて越中に居り致仕して民と爲ること數世、名は亮といふものあり松堂と號し儒を以て藩老横山氏に仕ふ孚尹は第二子なり母は小西氏出でゝ林氏を繼ぐ林氏の祖名は某加賀介と稱す世〻州の石川郡に家す長享中、六郎名は光明、僧徒の離に死し後ち久く微にして顯はれず四傳して慶助翼に至りて亦た儒を以て藩老今枝氏に仕へ幾ばくもなく擢でられて藩學の助教と爲る是れ孚尹の義父なり孚尹少より學を好み江戸に遊學して昌平黌に寓す業成りて歸り藩侯の侍讀と爲る是より先き藩俗惟〻武事是れ張る其をしか稍〻文學に向ふを知らしむるもの其の功勲なからず前後加ふる所の秩百七十石に及べり其の遭遇の擊遂に將に他日の期し爲す所あらんとす天保七年七月二十五日殁す年五十六(墓碣銘)

ハヤシ フクゲン 林復軒「ハヤシリウカ ウ」 勤王家にして備中倉敷の樂舗なり本姓石井氏林氏を繼ぐの初、家勢甚だ振はず森田節齋の倉敷に寓するや勃興の変をなす常に皇室の微衰を慨歎し鈴木重胤と共に京都に至り藤本鐵石轟武兵衛河上亥齋等と會見せしが其の過激輕躁にして事を共にす可からざるを思ひ家に歸り專ら王政恢復の計畫せり而して幕府の嫌疑を蒙りたるも幸に縲絏の患を免かれたるは平素温厚にして過激の擧動をなさゞるが爲なり維新の初岡山藩其藩地備前國兒島郡小串村に關門を設け出入の船舶に重税を課し猥りに人民の往來するを妨ぐ此に於て單身京都に至り太政官に上書し藩の亡狀を訴ふ官直に關門を撤せしむ維新後專ら治七年區長となり十一年九月郡長に任ぜらる人民と接するに誠實を以てし十年一日の如し故に年老いたるを以て職を辭するや郡民知事に迫りて之を許さゞらんを乞ふ辭すること三たび漸く允許を得たり明治十七年三月宮内省より維新前後國事に盡力し且つ德行の聞えあるを賞して金百圓を下賜せられ二十二年六月特旨を以て正七位に叙せらる明治二十五年九月十三日八十二にして殁す

ハヤシ フイン 林孚尹 儒者なり加州の人天明紀元六月十六日生る名は瑜、周輔と稱し輝拔一に藤坡に作る)と號す孚尹は字なり實は澁谷氏其德公に屬し頗る軍績あり後從ひて越中に居り致仕して民と爲ること數世、名は亮といふものあり松堂と號し儒を以て藩老横山氏に仕ふ孚尹は第二子なり母は小西氏出でゝ林氏を繼ぐ林氏の祖名は某加賀介と稱す世〻州の石川郡に家す長享中、六郎名は光明、僧徒の離に死し後ち久く微にして顯はれず四傳して慶助翼に至りて亦た儒を以て藩老今枝氏に仕へ幾ばくもなく擢でられて藩學の助教と爲る是れ孚尹の義父なり孚尹少より學を好み江戸に遊學して昌平黌に寓す業成りて歸り藩侯の侍讀と爲る是より先き藩俗惟〻武事是れ張る其をしか稍〻文學に向ふを知らしむるもの其の功勲なからず前後加ふる所の秩百七十石に及べり其の遭遇の擊遂に將に他日の期し爲す所あらんとす天保七年七月二十五日殁す年五十六(墓碣銘)

ハヤシ フクゲン 林復軒「ハヤシリウカ ウ」 勤王家にして備中倉敷の樂舗なり本姓石井氏林氏を繼ぐの初、家勢甚だ振はず森田節齋の倉敷に寓するや勃興の変をなす常に皇室の微衰を慨歎し鈴木重胤と共に京都に至り藤本鐵石轟武兵衛河上亥齋等と會見せしが其の過激輕躁にして事を共にす可からざるを思ひ家に歸り專ら王政恢復の計畫せり而して幕府の嫌疑を蒙りたるも幸に縲絏の患を免かれたるは平素温厚にして過激の擧動をなさゞるが爲なり維新の初岡山藩其藩地備前國兒島郡小串村に關門を設け出入の船舶に重税を課し猥りに人民の往來するを妨ぐ此に於て單身京都に至り太政官に上書し藩の亡狀を訴ふ官直に關門を撤せしむ維新後專ら治七年區長となり十一年九月郡長に任ぜらる人民と接するに誠實を以てし十年一日の如し故に年老いたるを以て職を辭するや郡民知事に迫りて之を許さゞらんを乞ふ辭すること三たび漸く允許を得たり明治十七年三月宮内省より維新前後國事に盡力し且つ德行の聞えあるを賞して金百圓を下賜せられ二十二年六月特旨を以て正七位に叙せらる明治二十五年九月十三日八十二にして殁す

ハヤシ フクサイ 林復齋 名は鶚、初號は鵬潢字は弱中、武部少輔と稱す逸齋の第六子なり出は藏人なり名は直之大阪の人畵を中江藍江に學びて人物山水花鳥を能くす弘化二年三月十六日殁す(扶桑畵人傳)

ハヤシ ホウカウ 林鳳岡 德川幕府の儒官なり名は鵞、一の名は信篤字は直民、春常と稱す鳳岡は其の號、又た整宇と號す春齋の第二子、梅洞の弟なり幼にして聰明、經書に通曉し詩律に耽嗜し兄梅洞に從ひて學ぶ寛文丙午春梅洞殁す鳳岡年甫めて二十三父に代りて諸生を統べ詩禮を以て任となす研精勵志手に卷を釋かず春齋命を以て本朝通鑑を選す鳳岡其の職務を謹ぎ大藏卿法印に任ぜられ弘文院學士の號を賜はる天和新政の時に當りて殆んど孤夜公に在りて殆んど盧日なし初め羅山私に書院を忍岸に建て弘文館と號す孔子及び十哲の像を安置して之を奉祀す元祿四年鳳岡旨を奉じて之を湯島臺に移して官祀とす其の經營規畫更に壯麗を加ふ將軍綱吉大成殿の三字を書して之を掲げ祀田千石を附し館を設けて學士を延き併せて宅地を此に賜ひ以て朝に便にす蓋し保元以降天下擾亂士大夫皆な金革に從事し文藝浮屠に墜ちその事一に五山に歸猶ほ目して制外の徒とす其の間を免して士品に列せざられ三十四年歸朝し三十六年横須賀海兵團附を命ぜられ三十七年三月天城艦長に補し尋で鳥海艦長に轉ず五月三日第三回旅順口閉塞の擧あるや指揮官として閉塞事業を計畫せり尋で五月二十日第一次敵港強行偵察に於て殊功を奏し同二十六日我第二軍が金州南山を攻擊するに方り鳥海艦長として他の諸艦と共に深く金州灣に進入し熾んに援助砲擊に從事する中敵の榴散彈に中り遂に瘡る戰功に依り官一級を進め海軍大佐に任じ勳三等功四級に叙せらる

ハヤシ モウセン 林毛川 勝山藩士なり名は棟、字は季華、米藏と稱す儒者にして安政五年殁す年五十八毛川遺稿の著あり(漢學者著述目錄)

ハヤシ モンニフ 林門入 碁手なり寶永年間安井仙角井上因碩等と共に當時の名手と稱せらる(因云碁話)

ハヤシ モロトリ 林諸鳥 江戸の歌人なり本姓は鹽瀬氏通稱利助加茂翁の門人にして詠歌に巧みなり且つ長歌に妙なり寛政六年八月十九日殁す下谷鰯隨院に葬る(鑑定便覽)

ハヤシ ヤウジ 林陽次 陸軍歩兵中尉なり山口縣出身にして明治卅七八年日露戰役に際し歩兵第三十九聯隊附として從軍中卅七年九月三日清國盛京省遼陽附近に於て戰死す

ハヤシ ヤウセイ 林養清 狩野派の畵人にして狩野常信の弟子なり(扶桑畵人傳)

ハヤシヤ シャウザウ 林屋正藏 江戸の落語家なり中頃二世鹿野武左衛門と改め怪談噺の元祖なり天保六年剃髮して林泉と改め程なく還俗して正勤務に於て病死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる明治廿八年二月九日清國盛京省金州臨時患者宿所に於て病死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ハヤシ ミチカツ 林通勝 美濃の人なり織田信秀及び信長に仕ふ天文二十年十一月信長逃勝を以て名古屋城を守らしむ明年五月逃勝柴田勝家等と信長を廢し信行を立てんと謀り事露はる勝家髮を剃り以て謝す逃勝亦た赴き謝す後信長に仕へて力を竭し厦く功を建つ天正六年正月信長逃勝等功臣の人を安土の茶室に召し親ら茶を點して之を饗す七年秋伊丹下田甲斐守其の黨と相反す信忠逃勝及び伊賀忍俊を以て赴き征せしむ二人兵三千を率ゐ戰に及ばずして敗走す信長憐る八年八月信長大に逃勝を鹽責し其の舊功あるを以て死一等を減じ遂に放逐す二子あり長光時第三十九聯隊附として從軍中卅七年九月三日清國盛京省エフリ附近に於て戰死す

ハヤシ ミネジ 林峰次 陸軍歩兵少尉なり香川縣出身にして明治廿七八年日露戰役に於て後備歩兵第五十九聯隊附として從軍中病に罹り卅八年二月九日清國盛京省金州臨時患者宿所に於て病死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ハヤシ ミネヲ 林三子雄 海軍大佐なり大阪府の出身にして梁と河内の人家代々浪山藩士たり幼にして藩の儒者彝鐵之助に就きて漢學を修む父殁後某陸軍將校の賞給を以て海軍兵學校に入る卒業後海上勤務に服すること多年後又獨逸駐劄を命ぜられ造兵造船監督官として夙に令名あり明治廿七八年日清戰役には海軍大尉を以て第一遊擊隊秋津洲航海長として出征し戰後功に依り功五級に叙せらる卅年六月獨逸留學を命ぜられ三十七年三月天城艦長に補し尋で鳥海艦長に轉ず五月三日第三回旅順口閉塞の擧あるや指揮官として閉塞事業を計畫せり尋で五月二十日第一次敵港強行偵察に於て殊功を奏し同二十六日我第二軍が金州南山を攻擊するに方り鳥海艦長として他の諸艦と共に深く金州灣に進入し熾んに援助砲擊に從事する中敵の榴散彈に中り遂に瘡る戰功に依り官一級を進め海軍大佐に任じ勳三等功四級に叙せらる

ハヤシ モウセン 林毛川 勝山藩士なり名は棟、字は季華、米藏と稱す儒者にして安政五年殁す年五十八毛川遺稿の著あり(漢學者著述目錄)

ハヤシ モンニフ 林門入 碁手なり寶永年間安井仙角井上因碩等と共に當時の名手と稱せらる(因云碁話)

ハヤシ モロトリ 林諸鳥 江戸の歌人なり本姓は鹽瀬氏通稱利助加茂翁の門人にして詠歌に巧みなり且つ長歌に妙なり寛政六年八月十九日殁す下谷鰯隨院に葬る(鑑定便覽)

ハヤシ ヤウジ 林陽次 陸軍歩兵中尉なり山口縣出身にして明治廿七八年日露戰役に際し歩兵第三十九聯隊附として從軍中卅七年九月三日清國盛京省エフリ附近に於て戰死す

ハヤシ ヤウセイ 林養清 狩野派の畵人にして狩野常信の弟子なり(扶桑畵人傳)

ハヤシヤ シャウザウ 林屋正藏 江戸の落語家なり中頃二世鹿野武左衛門と改め怪談噺の元祖なり天保六年剃髮して林泉と改め程なく還俗して正勤務に於て病死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる明治廿八年二月九日清國盛京省金州臨時患者宿所に於て病死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ハヤシ ヨウ 林庸 諱は政義通稱初め彌三郎後に庸と改む水戸藩の別封守山藩の士にして馬廻役を勤む元治元年水戸に於て正好國驚の軋轢激しく遂に騷擾を惹起するに及び藩主慶篤は之が鎮撫として同族尖戸藩主松平頼德を國に遣はしむ守山藩主も亦同族の故によりて頼德の護衛并に領分松川の陣屋警備としぬ恢復を計畫せり而して幕府の嫌疑を蒙りたるも幸に縲絏の患を免かれたるは平素温厚にして過激の擧動をなさゞるが爲なり維新の初岡山藩其藩地備前國兒島郡小串村に關門を設け出入の船舶に重税を課し猥りに人民の往來するを妨ぐ此に於て單身京都に至り太政官に上書し藩の亡狀を訴ふ官直に關門を撤せしむ維新後專ら治七年區長となり十一年九月郡長に任ぜらる人民と接するに誠實を以てし十年一日の如し故に年老いたるを以て職を辭するや郡民知事に迫りて之を許さゞらんを乞ふ辭すること三たび漸く允許を得たり明治十七年三月宮内省より維新前後國事に盡力し且つ德行の聞えあるを賞して金百圓を下賜せられ二十二年六月特旨を以て正七位に叙せらる明治二十五年九月十三日八十二にして殁す

ハヤシ フイン 林孚尹 儒者なり加州の人天明紀元六月十六日生る名は瑜、周輔と稱し輝拔一に藤坡に作る)と號す孚尹は字なり實は澁谷氏其德公に屬し頗る軍績あり後從ひて越中に居り致仕して民と爲ること數世、名は亮といふものあり松堂と號し儒を以て藩老横山氏に仕ふ孚尹は第二子なり母は小西氏出でゝ林氏を繼ぐ林氏の祖名は某加賀介と稱す世〻州の石川郡に家す長享中、六郎名は光明、僧徒の離に死し後ち久く微にして顯はれず四傳して慶助翼に至りて亦た儒を以て藩老今枝氏に仕へ幾ばくもなく擢でられて藩學の助教と爲る是れ孚尹の義父なり孚尹少より學を好み江戸に遊學して昌平黌に寓す業成りて歸り藩侯の侍讀と爲る是より先き藩俗惟〻武事是れ張る其をしか稍〻文學に向ふを知らしむるもの其の功勲なからず前後加ふる所の秩百七十石に及べり其の遭遇の擊遂に將に他日の期し爲す所あらんとす天保七年七月二十五日殁す年五十六(墓碣銘)

ハヤシ フゲイチ 林孚一 勤王家にして備中倉敷の樂舗なり本姓石井氏林氏を繼ぐの初、家勢甚だ振はず森田節齋の倉敷に寓するや勃興の変をなす常に皇室の微衰を慨歎し鈴木重胤と共に京都に至り藤本鐵石轟武兵衛河上亥齋等と會見せしが其の過激輕躁にして事を共にす可からざるを思ひ家に歸り專ら王政恢復の計畫せり而して幕府の嫌疑を蒙りたるも幸に縲絏の患を免かれたるは平素温厚にして過激の擧動をなさゞるが爲なり維新の初岡山藩其藩地備前國兒島郡小串村に關門を設け出入の船舶に重税を課し猥りに人民の往來するを妨ぐ此に於て單身京都に至り太政官に上書し藩の亡狀を訴ふ官直に關門を撤せしむ維新後專ら治七年區長となり十一年九月郡長に任ぜらる人民と接するに誠實を以てし十年一日の如し故に年老いたるを以て職を辭するや郡民知事に迫りて之を許さゞらんを乞ふ辭すること三たび漸く允許を得たり明治十七年三月宮内省より維新前後國事に盡力し且つ德行の聞えあるを賞して金百圓を下賜せられ二十二年六月特旨を以て正七位に叙せらる明治二十五年九月十三日八十二にして殁す

ハヤシ ブンパ 林文波 儒人なり名は直之大阪の人畵を中江藍江に學びて人物山水花鳥を能くす弘化二年三月十六日殁す(扶桑畵人傳)

ハヤシ ホウカウ 林鳳岡 德川幕府の儒官なり名は鵞、一の名は信篤字は直民、春常と稱す鳳岡は其の號、又た整宇と號す春齋の第二子、梅洞の弟なり幼にして聰明、經書に通曉し詩律に耽嗜し兄梅洞に從ひて學ぶ寛文丙午春梅洞殁す鳳岡年甫めて二十三父に代りて諸生を統べ詩禮を以て任となす研精勵志手に卷を釋かず春齋命を以て本朝通鑑を選す鳳岡其の職務を謹ぎ大藏卿法印に任ぜられ弘文院學士の號を賜はる天和新政の時に當りて殆んど孤夜公に在りて殆んど盧日なし初め羅山私に書院を忍岸に建て弘文館と號す孔子及び十哲の像を安置して之を奉祀す元祿四年鳳岡旨を奉じて之を湯島臺に移して官祀とす其の經營規畫更に壯麗を加ふ將軍綱吉大成殿の三字を書して之を掲げ祀田千石を附し館を設けて學士を延き併せて宅地を此に賜ひ以て朝に便にす蓋し保元以降天下擾亂士大夫皆な金革に從事し文藝浮屠に墜ちその事一に五山に歸猶ほ目して制外の徒とす其の間を免して士品に列せり天保九年二丸留守居となる式部少輔と稱す嘉永六年宗家大學頭に任ず小性組番頭次席に轉す依て復齋と號す嘉永七年米國使節ペルリ再び浦賀に來る復齋井戸覺弘浦賀奉行伊澤政義と全權として之に接す米使江戸に出でゝ自ら將軍に謁せんと云ふ我が全權之を止め覇水を給するの地を下田函館と定む三月三日を以て其條約を定む之を神奈川條約と云ふ其の談判の筆記を墨夷應接錄と云ひ之を閣老に覽す安政四年留守居次席となり是冬目付津田半三郎と上京して米使來航の狀況を所司代に陳じて上奏せしむ公卿之を難ずる者多し安政六年九月十七日殁す年六十、文鼓と謚す重訂御書籍來歷志、靈刻類目錄、復齋詩文稿等の著あり(諸家著述目錄)

ハヤシ ブンシン 林文進 儒者なり名は景砥(鑑定便覽)

ハヤシ ヤウ 林庸 諱は政義通稱初め彌三郎後に庸と改む水戸藩の別封守山藩の士にして馬廻役を勤む元治元年水戸に於て正好國驚の軋轢激しく遂に騷擾を惹起するに及び藩主慶篤は之が鎮撫として同族尖戸藩主松平頼德を國に遣はしむ守山藩主も亦同族の故によりて頼德の護衛并に領分松川の陣屋警備としぬ

て家臣の内林庸を初め中臺溫三本木鎗三郎增子鼎一郎三瓶閑三郎等の十人を選びて養遣す然るに奸黨の兵拒庸等は一旦松川の陣屋に引取り事の顚末を幕府に具申せんとする中奸黨の徒は頼德等を誑かりて頼德等四十餘人を悉く殺戮せしかば庸等大に寢狐し江戸に抵りて訴訟する所あらんと周旋盡力せしが是又奸徒の讒訴に遇ひ同年十一月二十三日何等の糺問もなくして庸以下死罪に處せらる時に年二十二(殉難錄稿)

ハヤシ　ヨクサイ　林抑齋　名は保定字は定卿姓は林通稱富太郎狩齋は其の號なり後ち雨村と更む備中玉島邑の人なり文化癸酉を以て生る考名は貫通妹尾氏林氏を冒すに其の女を以てす即ち妹なり夫妻亂飼藥に服し太だ產を起す抑齋幼にして穎悟學を橫溢藩里に受け傍ら劍及打拳を演じ夙夜研精皆造詣あり然れども商事を憚らず家道益々盛なり嗣冠撰ばれて邑吏と爲り治下に來る每に山田方谷を訪ひ益を請ふ後ち藩其學行有り能く親に事ふるを褒じ特に佩刀を許す安政二年二口糧を賜ふて鄕士格に進め命じて封內を巡教せしむ說論明辯にして聞く者多く感化す同五年八口糧を賜ひて中小姓に班し藩學の助教となす翌春移て松山に住す居ること一年產物方を兼ぬ文久中再び江戸に役す元治元年祿五十石を賜ひ慶支副官に遷る幾ばくもなく隣好方を兼ぬ又藩育總裁に轉じ市尹を兼ぬ明治三年致仕す四年三月十六日卒す年五十九其鄕竹浦の先人の墓側に歸葬す佛諡して忠貞院純誠篤敬居士と云ふ(事實文錄未定稿)

ハヤシ　ヨシモト　林良本　信濃の和學者なり監物と稱し筑翁又は龜岡と號す香川景樹の門人なり明治二年歿す年七十六(諸家著述目錄)

ハヤシ　ラウエン　林閭苑　醫師なり名は新字は日新通稱は秋藏大阪の人五岳を師とす閭苑性慧敏蚤に明人の書法を基び和泉堺(堺は昔異邦の繫船所故に明時の書尤も多し)の豪族某の家に多く明人書幅を貯ふと聞き請ひて展て之を摹す遂に其風趣を得たり故に其美人を寫すの筆法纖勁にして著色鮮明略ゝ仇英に似たり水墨人物の如きは則ち專ら剛勁を尙びて張平山に似たり未だ四十に滿たずして歿す(書畫要略)

ハヤシ　ラザン　林羅山　德川幕府の儒官なり名は忠、一の名は信勝、字は子信、羅山は其の號、又羅浮山、浮山、梅花村、麟祠、四維、長胡、蝶洞、瓢庵、夕顏庵、雲母溪、鶯經堂、菊麗(一に菊松丸に作る)其の先は加賀の人、後ち紀州に徙る父信時に及びて京都に住す羅山生れて神彩秀徹菊麗(一に菊松丸に作る)其の先は加賀の人、後ち紀州に徙る父信時に及びて京都に住す羅山生れて神彩秀徹せんことを建議す家康之を天海に諮ふ天海直ちに嚴論を草して獻ず家康二人を召して辯論せしむ羅山敗る憤りて本朝神社考及び神社啓蒙を著はして不保中病で家に在り執政將軍の旨を承て書を寄せ或は就て事を論じ官醫に徙る父信時の宅に讀む羅山側ちに聞きて諳んずる所多し記を信時の宅に讀む羅山側ちに聞きて諳んずる所多し時に年八歲人以て之を異なりとす十三歲既に國字を解し漢史稗說を誦し且つ中華の記錄を窺ひ見聞して忘れず世稱す此童耳は靈の如しと年十四建仁寺に入りて書を讀む時喪亂に屬し書籍甚だ乏し羅山百方索借して國師每に且に趨す細流學者の輩貳に疑義を問へば即ち紀析す皆稱して神童とす明年山僧議して羅山を佛徒たらしめんと欲し之を京尹前田玄以に訴ふ父信時皆肯て肇門に入る口から和し男春德なを以て之を錄せしも曉に至りて稿成る一點を加へず人をして驚らし遣らしむ田原の勝に及て之を致す秋澤大に驚くと云ふ又少より心を著作に注ぎ老に到りて衰へず撰著編輯する所凡そ一百七十種又羅山文集一百五十卷あり世に行はる今其の著書に就て重なるものを擧ぐれば東鑑綱要、群書治要補、儒門思問錄、倭漢法制、荒政恤民錄、本朝編年錄、寬永諸家系圖傳、貞觀政要抄、神代系皇代系圖大綱、鎌倉將軍家譜、京都將軍家譜、織田信長譜、豐臣秀吉譜、中朝帝王譜、六義考、洋天儀考、周易手記、性理字義誹解、經籍和字考、奧手抄、司馬法抄、尉繚子抄、六韜抄、羅山涉獵抄、道統小傳、駿府政事錄、諫抄、神道秘傳、折中俗解あり羅山四子を擧ぐ長は叔勝次は長吉曾早く夭す叔擧齋嗣ぐ季は靖亦幕府に仕ふ(近世叢語、先哲叢談、事實文錄、近代名家著述目錄)

ハヤシ　ラザン　林羅山「ハヤシダウエイ」

ハヤシ　リウカウ　林榴岡　儒者なり名は忿、一名信充、字は士厚、後巷祭と名ぐく信篤の子なり幕府に仕て大學頭たり實曆八年十一月十一日歿す年七十八贈國史、本朝世說、越後孝婦傳、詩法蒼測、驅象編等の著あり(諸家著述目錄)

ハヤシ　リャウサイ　林良齋　陽明學者なり名は久中自明軒と號す讀岐多度津の人其先は世ゝ藩の老職たり良齋初め父の後を承けて藩侯に仕ふ然れども早歲多病にして奉仕に耐へず因て請ひて其職を去り廻江の弘濱の原に私塾を開き名けて弘濱書院と名く居を此に移して專ら姚江の學を講ぜり吉村秋陽、春日潛庵、池田草庵等と友たり就中草庵の如きは良齋を以て千古の心友となせり嘉永二年五月四日歿す著はすところ自明軒文鈔一卷あり良齋容貌清癯風神蕭疎鬚毛除かず被服庶人に類すと嘗て大疆中齋に從つて學ぶ中齋注して曰く「是は醫師の積りにて讃州に仕へ內弟子となろ」

ハヤシ　レウザウ　林了藏　水戶藩士諱は正龍了藏と稱す幼より學を好み志操あり安政中弘道館舍長より準訓導に補せられ奥右筆に進む元治元年甲子の變柳原照愛と同じく江戶に上り藩主慶篤に見えて利害を論じ後松平頼德に從ひて那珂の湊に陣せしが遂に古河に捕はれ死す年三十七(殉難錄稿)

ハヤシ　レンア　林蓮阿　和學者なり名は茂樹醫雨庵と號す文苑玉露の著あり伏見宮に仕ふ天保九年九月廿五日歿す(見ぬ世の友)

ハヤシ　ヨクザン　林屋山　名は翼字は師馮藤原の支族なり慶助と稱す屋山は其の號なり加賀國金澤の人其の先吉某加賀介たり其の後ち世々石川郡林庄に居ろ六郎光明に至り遂に林を以て氏と爲す富樫氏と同く武を以て北地に雄たり長享中曾徒の亂富樫氏亡び光明之に死す其の後ち遂に微なり次郎兵衛長貞に至り徒て金澤に居ろ是を屋山の高祖と爲す與右衛門名は定勝を生む元祿中淺野川を浚ふて功あり藩侯因て道水東に補す是を曾祖と爲す大父名は常賴父名は富則俱に長兵衛と稱す越氏を娶る延享元年を以て屋山を生む幼にして穎悟甫めて五歲能く字を爲し經を誦す隣里指して曰く此の兒終に廉中の物に非ずと才歲能く家事を幹し十有五父に代りて吏と爲る公事を以て能越二州に往來する歲數回加ふるに家務殷劇を以てす而して讀書懈らず溢江潛藏に從て學ぶ又京に入り一時の名流に從游し以て討究す其父の疾病あるに及び請ふて家業吏務を舉げて之を從弟國香に付し塵事を謝絕し讀書自から娛しみ膳に以て身を終へんとする者の如し既にして從學者日に衆く聲名日に著はる寬政二年國老今枝氏禮致して待するに師禮を以てす同四年藩侯大に學を興す延して以て教事に參す同七年遂に公に升りて文學と爲る同九年五月二十七日疾を以て歿す疾革まり婦人を斥け條友を延き入れ相勗めしむるに學を以てす親から生順死寧の四字を書し筆を投じて絕す年五十四金澤城南松樹林山中に葬る屋山性溫厚恭儼嫺激の行を喜ばず子弟に訓ふる整にして簡、從游の者を待するに師禮を以て自から居らず而して揖讓循至各其の才に應ず其の疾て既に瘳るゝや訪ふ者日に數十人粗ゝ倦厭の色無く誨諭平日の如しと云ふ(先哲叢傳)

ハヤセ　カウタラウ　早瀨孝太郎　陸軍歩兵中尉なり佐賀縣出身にして明治廿七八年日露戰役に於て第六師團歩兵第四十八聯隊附として從軍中廿七年八月三十一日清國清京省首山堡に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙ぜらる

ハヤセ　リザイ　早瀨理齋　狩野派の畫人にして狩野常信の弟子なり(扶桑畫人傳)

ハヤタ　ムネイヘ　早田宗家(二世)　因幡の金工なり忠左衛門と稱す初め備前に住す寬永十三年六月四日歿す春田家次嗣て三世と稱す四世忠兵衛家久五世利家以下卓家卓次卓重卓置卓隨に至て十世なり名は辨之字は士譽、桑輔と稱す大阪の人、中井竹山に從ひて學ぶ或は云ふ中井甃庵の門人なりと勤苦厭はず後讓德書院の教授となる其人と爲り甚だ瘦せて衣に勝へざるが如し因て自から大瘦生と號す飲を好む醉て益ゝ謹む寬政二年三月廿七日歿す年四十五(續近世叢語、浪花名家墓所集)

ハヤノ　チチク　早野遲竹　大阪の俳人なり通稱新七郎下野鳥山に生る初め其角の門に入り竹雨と號す後嵐雪の門に入る後京都に往き鄕月泉と號す老後復江戶に歸り夜半亭と號す又宋阿と曰ふ寬保二年六月二日歿す年六十六(或は曰く八十一)(俳林小傳)

ハヤノ　ハジン　早野巴人　大阪の俳人なり三河の人文化元年六月一日歿す(俳家歿故年表)

ハヤノ　リウスキ　早野流水　大阪の儒者して道春と稱し民部卿法印に叙任せらる羅山國家創業の時に際して大に寵任を受け朝議を創し律令を定む幕府の文書率ね其の手に成る四世に歷仕し即位改元行幸入朝の禮より宗廟祭祀の典及び外國蠻夷の事に至るまで預り議せざるなし曾て佛教を以て政治に干するを嚴論を草して獻ず家康二人を召して辯論せしむ羅山敗る憤りて本朝神社考及び神社啓蒙を著はして不保中病で家に在り執政將軍の旨を承て書を寄せ或は就て事を論じ官醫として疾を看せしむ是の時日光山に事あり便殿に召見し特に乘輿城に入るを聽さる又其の齡漸く高きを以て朝望に朝ぜしむ明曆三年正月二十三日歿す年七十五謚して文敏と曰ふ羅山強記宏覽詩文を作るに須臾も筆をやすめず頃刻千言を成す嘗て朝鮮の信使愈秋澤錄錄の一夕前扶桑壯遊百五十韻を寄せて賡韻を求む時に醜荒川氏重疾に罹り羅山其の側に在りて監護す而して夜間口から和し男春德なを以て之を錄せしも曉に至りて稿成る一點を加へず人をして驚らし遣らしむ田原の勝に及て之を致す秋澤大に驚くと云ふ又少より心を著作に注ぎ老に到りて衰へず撰著編輯する所凡そ一百七十種又羅山文集一百五十卷あり世に行はる今其の著書に就て重なるものを擧ぐれば東鑑綱要、群書治要補、儒門思問錄、倭漢法制、荒政恤民錄、本朝編年錄、寬永諸家系圖傳、貞觀政要抄、神代系皇代系圖大綱、鎌倉將軍家譜、京都將軍家譜、織田信長譜、豐臣秀吉譜、中朝帝王譜、六義考、洋天儀考、周易手記、性理字義誹解、經籍和字考、奧手抄、司馬法抄、尉繚子抄、六韜抄、羅山涉獵抄、道統小傳、駿府政事錄、諫抄、神道秘傳、折中俗解あり羅山四子を擧ぐ長は叔勝次は長吉曾早く夭す叔擧齋嗣ぐ季は靖亦幕府に仕ふ(近世叢語、先哲叢談、事實文錄、近代名家著述目錄)

ハヤシ　ラザン　林羅山「ハヤシダウエイ」

ハヤシ　リウカウ　林榴岡　儒者なり名は忿、一名信充、字は士厚、後巷祭と名ぐく信篤の子なり幕府に仕て大學頭たり實曆八年十一月十一日歿す年七十八贈國史、本朝世說、越後孝婦傳、詩法蒼測、驅象編等の著あり(諸家著述目錄)

ハヤブサヒメ　鶻媛　開化帝の妃なり葛城垂見宿禰の女建豐波豆羅和氣命を生む(大日本史)

ハヤブサワケ　ウウジ　隼總別皇子　應神帝の皇子にして母は皇妃絲綾なり仁德帝四十年帝雌鳥皇女を納れ以て妃となさんと欲し隼總別をして命を通ぜしむ然るに隼總別は雌鳥と私通し之を久くして復命せず帝未だ之を知らず親ら雌鳥の室に臨む既にして待女の謳歌するを聞き乃ち隼總別の私通を知り心に之を衝む(古事記に曰く天皇其の弟速總別王をして鐵を爲さしむ雌鳥速總別王に謂ひて曰く天皇皇后の姤を憚りて八田若郎の女を納るゝ能はず故に妾亦之に事ふるを欲せず願くは君の妻とならんと即ち相姦す因て復た奏せず天皇偶ゝ雌鳥王の室に御幸す雌鳥王機に上りて織る天皇歌を作る雌鳥王亦歌を作りて之に答ふと)然れども帝遂より友愛(帝隼總別皇子と兄弟なり)且皇后を憚りて隱忍罪せず一日隼總別雌鳥の膝に枕して臥す謂て曰く鷦鷯と隼と孰れか捷き曰く隼なり隼總別曰く是れ我れ先ずる所以なりと帝聞て之を惡む(帝名は大鷦鷯命因て此の譬喩あり)隼總別の舍人爭歌て曰く破夜步佐波、阿梅琊能朋利、爭所箇慨梨、伊瓦岐岐餓宇倍能、袋弊岐等羅佐泥と帝聞て大に怒て曰く朕恥怨を以て親を滅すを欲せず然れども彼れ反て社稷を危くせんと欲する乎と乃ち之を殺さんと欲す(古事記に曰く雌鳥王隼總別王の來るを見歌て曰く比袋理波阿米邇迦氣流、多迦由久、波夜夫佐和氣、佐邪岐登良佐泥と帝之を聞き隼總別王を殺さんと欲すと)隼總別雌鳥と逃れて伊勢の神宮に赴むく帝吉備の品遲部雄鉏及び播磨の佐伯阿俄能胡をして之を追はしめて曰く及所に之を殺せと雄鉏等伊勢蔣代野に追及して之を殺す(古事記に曰く隼總別王雌鳥王と逃れて倉梯山に入り行々字陀蘇邇に到り官兵の爲に殺さる)(大日本史)

ハヤマ　タカユキ　葉山高行　平戶藩老なり父高、藩主豐功公に仕へて親任を得江戶に抵役すること二十年なりしを以て高行國に在つて思墓止まず年十七にして江戶に出で始めて父に見えたり時に高佐藤一

齋と親善なりしを以て高行一齋の門に入り文學を修す既にして高行家を承け乾齋老侯の爲に擢でられて藩主諸乘公の傅となり嗣子高餘も亦純篤にして擢でられて世子の傅と爲れり是に於て高行厚遇に感し儲保執鑑を稱して之を左右に獻じたりしに公受けて之を喜び座右に置きて鑑戒とせり高行面目を施し之を一齋に郵致す一齋一見して其愛君の誠と自得の見あるとに感じ讀み且つ評し之を上梓せしむ偶々藩主諸乘公物故し一齋亦殁せしを以て之を果さゞりしが萬延元年高行藩主に從ひて東觀し執政に擢でられしかば倹命を受けて終に其書を刊せり一齋の子昌平學講官佐藤榥乃ち其書に序を加へぬ時に文久元年三月下浣なり(儲保執鑑序)

ハヤマツミノカミ　羽山津見神「カグツチノカミ」

ハヤマトノカミ　羽山戸神　大年神の子なり大氣津比賣を娶りて若山咋神、若年神、若沙那賣神、彌豆麻岐神、夏高津日神、秋毗賣神、久々年神、久々記若室葛根神を生む(古事記)

ハヤミ　ゲンタツ　速水彦達　裏千家の茶人なり宗達の長男分家して寂室と號す文化十三年六月二十四日殁す(古今茶人系譜)

ハヤミ　コレタダ　速水惟忠　陸軍砲兵少尉なり愛知縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て第三師團野戰砲兵第三聯隊附として從軍中三十八年三月六日清國盛京省奉天附近戰鬪の際負傷し醫國療養せしが同七月三十日名古屋豫備病院に於て死去す

ハヤミ　シユンケウサイ　速水春曉齋　畫工なり名は恒章俗稱彦三郎大阪の人蘆鳳玉山を學ひたるが如し文學の才あり著作多なし自作の繪本類を畫く多し、繪本忠臣蔵、雪鏡談、金花談、龜山話、孝感傳、顚勇錄、誠忠錄、合法辻、平泉實記、夜船讀、甲越軍記、一休話、彦山靈驗記、金毘羅神靈記、二島英勇記、淺草靈驗記、箱根靈驗記、伊賀越孝勇傳、都風俗化粧簒、年中行事大成の類なり文政六年七月十日殁す(鑒定便覽、虛心筆記)

ハヤミ　ソウエウ　速水宗曜　裏千家の茶人なり初代宗達の次男茶道を父に學ぶ京都の人文政八年十一月四日死す年五十五(古今茶人系譜)

ハヤミ　ソウケン　速水宗筧　裏千家の茶人なり宗曜の男茶道を父に學び名あり守三軒と號す明治九年十月十四日殁す年六十四子宗汲嗣ぐ(古今茶人系譜)

ハヤミ　ソウノツ　速水宗達　茶人なり一齋宗室に茶道を學びて能くせり京都の人養壽院と號す(茶人系傳全集)

ハヤミ　ツネタダ　速水常忠　儒者なり又和歌を善くす姓は藤原、梨陰と號す一號清流、山田阿波介以文の次子なり出て速水常純の家を嗣ぐ右兵衛大志に任じ從六位下に昇る讀書を好み詩文を能くす國典に精通し意六位下に昇る讀書を好み詩文を能くす國典に精通し意を和歌に注ぐ著す所内裏式、貞觀儀式、恒例臨事公事儀經圖、拜考證、古今便覽、清流歌集、梨陰文集、泮流類聚、皆東に家に藏す寛政三年二月十日卒す年三十九(墓誌)

ハヤミ　デキマル　逸見出來丸　逸見甲斐守時之の子なり大阪夏陣の時年十四歲勇氣殆んど逸し政日父甲斐守出來丸を召して竊かに諭して曰く落城近きにあり吾が死も且夕に逼れり汝未だ十五歲に充たされば假令ひ降るとも世の笑を受るなし急ぎ敵陣に投じ降を乞へと出來丸諾して退き直に母に見えて鎧を乞ひ之を着て小旗を指し馬に乘れり母問て曰く何地に行く出來丸對て曰く我父に纏綿して奮鬪するとを能くせず乞ふ先死して父の激奮を慰かんと馳て敵陣に赴き暫く戰て敵將一人を斬り終に亂軍に死す父甲斐守此に勵まされ突出して大に血戰し共に戰死す(豹皮錄)

ハヤミ　トンサイ　早見頓齋　遠州流の茶人なり明三と號す小堀政一の茶道なり茶法を政一に學ぶ(古今茶人系譜)

ハヤミ　ナカシチ　早見仲七　陸軍工兵少尉なり愛知縣出身にして明治廿七八年日露戰役に際し第九師團工兵第五大隊附として從軍中廿七年九月旅順要塞龍眼北方高地に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ハヤミ　フサツネ　速水房常　京都の和學者なり京都の人壺井氏の門に入て修學し有職古實に精しく殊に律令格式を研究して世に稱せらる又た和歌を好めり(鑒定便覽)

ハヤミ　ミツダカ　早水滿堯　赤穗四十七士の一人なり藤左衛門と稱す淺野長矩に事へて馬廻となり百五十石を食む長矩の吉良氏を刺すや從て江戸に在り管野重實と懋を赤穗に告ぐ滿堯弓力人に絕し仇吉良氏を護ふに及びて家士其の弦擊を聞き蹶懼せざるなし衆將に去らんとす滿堯弓を以て其室を探り呼びて曰く吾れ汝が君を殺す何ぞ出て關はざると乃ち自ら其の名を稱し雙矢を發して去る死を賜ふ時に年四十、餘は大石良雄の傳に詳かなり(赤穗四十七士傳)

ハヤミ　ユキミチ　速水行道　國學者にして又和歌を善くす美濃郡上青山侯の士なり木宇考、皇統正閏考の著あり岐阜縣に出仕し後圖書屬となる

ハラ　アリノリ　原在德　陸軍歩兵少尉なり京都府出身にして明治廿七八年日露戰役起るに際し後備役より召集せられ第四師團後備歩兵第三十八聯隊附として從軍中廿七八年月二十四日清國盛京省楊家屯戰鬪の際負傷し同十月一日廣島檪備病院に於て死去す

ハラ　イヴリン　原有隣　福島縣信夫郡瀬の上町の人醫家に生れ幼少の堅家を脫して米澤に赴き醫學を修め後江戸に出て林洞海の門に入り蘭醫を學び業を卒へて故郷に歸り二十八の時召されて藩醫となる明治四年廢藩後縣立病院に職を奉じたるが後之を辭して開業す晩年横濱に老を養ひしが四十一年三月六日病を以て殁す年八十一長子龍太は工學博士次子忠雄(隅川)は醫學博士なり

ハラ　イツラウ　原逸朗　陸軍騎兵大尉なり靜岡縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て騎兵第十四聯隊附として從軍中三十八年一月二十五日清國盛京省黑溝臺に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ハラ　ウンアン　原芸庵　醫者なり名は永貞芸庵は其通稱、播州姫路の人、長じて京都に徙る經を宇都宮三近、伊藤維楨に受け醫を半井瑞堅に學ぶ時に世醫傷寒論を讀む者絕えて少なし芸庵首として之を崇奉し治一に張氏に法る人と爲り剛介にして苟も合はず不可なる所あれば面折して匿かず是を以て學富み術精しと雖も聞達甚だ晚し年五十を過ぎ名始めて著る享保元年八月十日殁す年七十四子あり亦た芸庵と云ふ(皇國名醫傳)

ハラ　ウンアン　原芸庵　醫者なり名は善材永貞の子父の稱を繼ぎ芸庵と稱す京都の人なり江戸に徙る性開豁にして大言を好み顧忘する所なし初め家甚だ貧し自ら存する能はず或人之を勸め交を權貴に結ばしむ芸庵頭を掉りて曰く醫經本草は吾の嘗て學ぶ所腦腴の言は吾未だ之を學はず何ぞ相待するの薄きやと一侯醫を聘せんと欲す之を芸庵に謀る芸庵曰く術玄妙を窮め國手と稱するに足る而して性放縱酒を嗜み善く罵る此の如き者如何と侯誰ぞと曰ふ曰く臣是なりと侯大に笑ふ傷寒を病む者あり診を請ふ會ゝ醫官方を議す一醫小柴胡湯を主とし一醫大柴胡湯を主とす芸庵曰く大小柴胡齊く用に中らず當に中柴胡湯を與ふべしと二醫嘲て其の方を問ふ芸庵曰く是庸醫の知る所に非ず所謂中柴胡は大柴胡湯を作す一煎して滓を去り再煎して之を服する者なりと二醫大に慚づ一婦疾あり芸庵之を視て其の夫に謂て曰く汝宜く先づ自ら藥を服すべしと夫怪み故を問ふ曰く婦の疾は之を慾事遂げざるに得る吾料るに汝の陽道必らず痿弱ならんと夫即ち服す室女謬症を病む芸庵曰く是れ氣滯なり治方戲場散を用ふべしと父母其の意を解せず芸庵曰く末や丑や且や淨や合劑して之を投ず是れ誠に良藥なり女之を聞て微笑す芸庵女を指して曰く戲場散の效一器既に此の如し況や屢ゝ之を用ふるに於てをや世謂ふ芸庵善く傷寒を治すと目して傷寒科となす然も其の學術を極るに必ず深詣あるに非ず特に其の機警敏疾人の意表に出づ故に盛名を一時に得るなり安永四年十二月二十二日殁す(皇國名醫傳、名家墓所一覽)

ハラ　ウンタク　原雲澤　江戸の醫師なり名は尙賢字は子才又湖南と號す太宰春臺の門人安永三年七月二十日殁す富士前江岸寺に葬る(鑒定便覽、江戸名家墓所一覽)

ハラ　オホスミノカミ　原大隅守　武田氏の臣なり川中島の役上杉謙信理騎信玄が陣に入り之と鬪ふ信玄將に危からんとす原大隅信玄の槍を採て側にあり接して中らず乃ち之を打つ誤て馬に中る馬遂して謙信水中に奔り去る

ハラ　オホスミノカミ　原大隅守　大友宗麟の家臣なり管力紹鷗名九州に聞ゆ嘗て南蠻より巨砲五百門肥後戸口に至る之を大友家の居城丹生島に運ぶに各夫卒十六人を要せり麟宗大隅を召して曰く汝試みに獨り能く之を持せよと大隅乃ち之を肩にし廣庭を徘徊するに二三回にして之を舊處に置き毫も苦む色なし宗麟大に驚き尙ほ其の力を試みんと欲し石製の大水盤を指して曰く其の位地我心に適せず宜しく之を改め置くべしと大隅起て充滿せる水を一滴も漏さずして之を改置す宗麟益ゝ舌を捲く又た嘗て角力者、雷、稻妻、大嵐、辻風等京都より來り豐後府内に於て勸進相撲を興行するに與に敵するものなし技終りて同國臼杵に至る會ゝ大隅此に在り雷等人に遷りて與に力を較せんことを請ふ大隅之を諾し自から謂らく先づ其の膽を破ら大小柴胡齊く用に中らず當に中柴胡湯を與ふべしと二醫嘲て其の方を問ふ芸庵曰く是庸醫の知る所に非ず所謂中柴胡は大柴胡湯を作す一煎して滓を去り再煎して之を服する者なりと二醫大に慚づ一婦疾あり芸庵之を視て其の夫に謂て曰く汝宜く先づ自ら藥を服すべしと夫怪み故を問ふ曰く婦の疾は之を慾事遂げざるに得る吾料るに汝の陽道必らず痿弱ならんと夫即ち服す室女謬症を病む芸庵曰く是れ氣滯なり治方戲場散を用ふべしと父母其の意を解せず芸庵曰く末や丑や且や淨や合劑して之を投ず是れ誠に良藥なり女之を聞て微笑す芸庵女を指して曰く戲場散の效一器既に此の如し況や屢ゝ之を用ふるに於てをや世謂ふ芸庵善く傷寒を治すと目して傷寒科となす然も其の學術を極るに必ず深詣あるに非ず特に其の機警敏疾人の意表に出づ故に盛名を一時に得るなり安永四年十二月二十二日殁す(皇國名醫傳、名家墓所一覽)

ハラ　オホスミノカミ　原大隅守　大友宗麟の家臣なり管力紹鷗名九州に聞ゆ嘗て南蠻より巨砲五百門肥後戸口に至る之を大友家の居城丹生島に運ぶに各夫卒十六人を要せり麟宗大隅を召して曰く汝試みに獨り能く之を持せよと大隅乃ち之を肩にし廣庭を徘徊するに二三回にして之を舊處に置き毫も苦む色なし宗麟大に驚き尙ほ其の力を試みんと欲し石製の大水盤を指して曰く其の位地我心に適せず宜しく之を改め置くべしと大隅起て充滿せる水を一滴も漏さずして之を改置す宗麟益ゝ舌を捲く又た嘗て角力者、雷、稻妻、大嵐、辻風等京都より來り豐後府内に於て勸進相撲を興行するに與に敵するものなし技終りて同國臼杵に至る會ゝ大隅此に在り雷等人に遷りて與に力を較せんことを請ふ大隅之を諾し自から謂らく先づ其の膽を破ら大小柴胡齊く用に中らず當に中柴胡湯を與ふべしと二醫嘲て其の方を問ふ芸庵曰く是庸醫の知る所に非ず所謂中柴胡は大柴胡湯を作す一煎して滓を去り再煎して之を服する者なりと二醫大に慚づ一婦疾あり芸庵之を視て其の夫に謂て曰く汝宜く先づ自ら藥を服すべしと夫怪み故を問ふ曰く婦の疾は之を慾事遂げざるに得る吾料るに汝の陽道必らず痿弱ならんと夫即ち服す室女謬症を病む芸庵曰く是れ氣滯なり治方戲場散を用ふべしと父母其の意を解せず芸庵曰く末や丑や且や淨や合劑して之を投ず是れ誠に良藥なり女之を聞て微笑す芸庵女を指して曰く戲場散の效一器既に此の如し況や屢ゝ之を用ふるに於てをや世謂ふ芸庵善く傷寒を治すと目して傷寒科となす然も其の學術を極るに必ず深詣あるに非ず特に其の機警敏疾人の意表に出づ故に盛名を一時に得るなり安永四年十二月二十二日殁す(皇國名醫傳、名家墓所一覽)

ハラ　オホスミノカミ　原大隅守　武田氏の臣なり川中島の役上杉謙信理騎信玄が陣に入り之と鬪ふ信玄將に危からんとす原大隅信玄の槍を採て側にあり接して中らず乃ち之を打つ誤て馬に中る馬遂して謙信水中に奔り去る

ハラ　オホスミノカミ　原大隅守　大友宗麟の家臣なり管力紹鷗名九州に聞ゆ嘗て南蠻より巨砲五百門肥後戸口に至る之を大友家の居城丹生島に運ぶに各夫卒十六人を要せり麟宗大隅を召して曰く汝試みに獨り能く之を持せよと大隅乃ち之を肩にし廣庭を徘徊するに二三回にして之を舊處に置き毫も苦む色なし宗麟大に驚き尙ほ其の力を試みんと欲し石製の大水盤を指して曰く其の位地我心に適せず宜しく之を改め置くべしと大隅起て充滿せる水を一滴も漏さずして之を改置す宗麟益ゝ舌を捲く又た嘗て角力者、雷、稻妻、大嵐、辻風等京都より來り豐後府内に於て勸進相撲を興行するに與に敵するものなし技終りて同國臼杵に至る會ゝ大隅此に在り雷等人に遷りて與に力を較せんことを請ふ大隅之を諾し自から謂らく先づ其の膽を破ら大小柴胡齊く用に中らず當に中柴胡湯を與ふべしと二醫嘲て其の方を問ふ芸庵曰く是庸醫の知る所に非ず所謂中柴胡は大柴胡湯を作す一煎して滓を去り再煎して之を服する者なりと二醫大に慚づ一婦疾あり芸庵之を視て其の夫に謂て曰く汝宜く先づ自ら藥を服すべしと夫怪み故を問ふ曰く婦の疾は之を慾事遂げざるに得る吾料るに汝の陽道必らず痿弱ならんと夫即ち服す室女謬症を病む芸庵曰く是れ氣滯なり治方戲場散を用ふべしと父母其の意を解せず芸庵曰く末や丑や且や淨や合劑して之を投ず是れ誠に良藥なり女之を聞て微笑す芸庵女を指して曰く戲場散の效一器既に此の如し況や屢ゝ之を用ふるに於てをや世謂ふ芸庵善く傷寒を治すと目して傷寒科となす然も其の學術を極るに必ず深詣あるに非ず特に其の機警敏疾人の意表に出づ故に盛名を一時に得るなり安永四年十二月二十二日殁す(皇國名醫傳、名家墓所一覽)

ハラ　カツタネ　原勝胤　姓は平氏、豐臣秀吉に仕へ(隱岐守と稱す岡崎侯内三萬石を食む庚子の亂三成に黨し阿波國徳島城を攻めて太田山に屯し長島を壓し軍敗れて擒に就く或は云ふ自殺すと(野史)

ハラカラノキケイギ　アキンド　腹唐秋人「ナカリ名は公遜字は飛卿狂齋は其の號、豹蔵と稱す淡路國本の人、世々稻田家に仕ふ狂齋官を好まず二十一歲の時家事を諸弟子に托し藝を辭し浪華京都に漫遊し諸名流と應接すること五年一人も意に適ふものなし遂に江戸に來る是の時井上金峨盛んに折衷學を唱へて物氏の修辭を排擊し其の業一時に行はる狂齋大に其の說を喜ぶ遂に贄を執りて門人となる金峨之を遇すること他の弟子に踰ゆ年二十七歲初て離を乖れて教授し厚く師說を奉崇す纔で化する者亦た數家あり蘭國赤羽の學之が爲に襲ゝ賢ふ故に舊智を堅守するもの金峨狂齋を見ること殆んど仇讎の如し然れども與に爭ぶ能はず狂齋人と爲り任遂にして毀譽に拘らず好みて誕放の行をなす然れども其の學術は反りて金峨より蘭慣篤實なり又射術騎法に通じて其の與を究む晚年禪理を好み講說の暇に佛典を讀み信仰の餘遂に自ら剃髮して僧形となり修眞と號す寛政二年四月二十日殁す年五十六或は七十と小日向金剛寺に葬る狂齋詩說、論語博議、學庸私衡、唐明詩笑、舌詩十九首解、藝海叢、狂齋諸器銘、原子内編、仝外編、集あり(先哲叢談續編、諸家人遺稿、狂齋友贈答詩文、師友談錄、狂齋新錄、俗眞道人遺稿、狂齋墓所一覽)

ハラ　キヨウイン　原恭胤　古河侯の儒員なり字は敬仲双桂の二子炎の嵯を襲ひ何くもなく病あり致仕を請ひて止まず故を以て罪を獲て禁錮一年終に尋で海軍兵學校に入り卒業後二十八年海軍少尉に任じ横須賀砲術教官に補せられ累遷して大尉に至る三十七年日露戰役起るや大尉を以て軍艦磐手に乘組み上村中將の下に對馬海峽警備の任に當る適ゝ烏港艦隊の金州丸を擊沈し尋で常陸丸を擊沈したる事件あり世論囂々上村艦隊を詰るに無能を以てするものあるに至る部下の水兵深く之を憤慨し大尉に向て煽弾を負ふて敵艦の在る處に赴き之を爆發して敵艦と共に死せんと請願するものあり大尉之を諭して曰く汝等急く べからず死する時機來れば汝等門は其生命を捧ぐべし其時迄は之を汝等に預け置かん衆口如何に喧しきも上村艦隊の動かざる處大飛躍の機あり と部下其言に服す果して同年八月十四日蔚山沖に於て烏港艦隊に會するや大尉は部下に告げて曰く是れ汝等の當に死すべき時なり而て上村

艦隊の技兩を發揮するは今日に在りと衆之を聞き勇氣百倍一以て十に當らざるなく接戰の功を奏す然れども彎手は傘纛を通じて最も多くの損害を蒙り大尉亦難に殉す年三十二戰功に依り少佐に昇任し勳四等功五級に叙せらる

ハラグチ　ハジメ　原口一　陸軍歩兵中尉なり長崎縣出身にして明治卅七年日露戰役起るに際し護備後より召集せられ歩兵第四十六聯隊附として從軍中卅七年十月十三日清國盛京省土門子嶺東北高地に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ハラクマノスケ　原熊之介　水戸藩士諱は忠愛通稱熊之介といひ初め脉机廻に遷ぜる學を好み勤勉怠るなし果造馬廻頭たりしが弘化元年齊昭隱閉に物に江戸に赴き老中阿部正弘に哀訴する所ありしに却て水戸に拘送せらる幽囚數年の後藩政若に復し熊之介亦釋さる元治元年甲子の變起るに及び藩邸に到りて意見を陳べ松平頼徳目代として水戸に赴くに際し之に從て那珂湊に戰ふ後古河藩に預けられしが慶應元年四月自刄を命ぜらる時に年四十一（殉難錄稿）

ハラクワサイ　原花祭　肥前の儒者なり名は五、字は士岳、若太夫と稱す多久氏に仕ふ明和六年歿す年五十一敬論說、祭禮考等の著あり

ハラクワンザン　原冠山「ヨガサハラクワンザン」

ハラコシヨ　原古處　儒者なり名は震字は士藺、震平と稱し古處山人と號す筑前の人秋月の世臣義井道敏の門人にして詩を善くす歸郷に在りと雖も其の名藤宛に顯れ詩家を以て稱せらる著す所曉月山房集あり文政十年正月二十二日歿す年六十一（續諸家人物志、鑒定便覽）

ハラコチン　原湖南「ハラウンダク」

ハラザイセイ　原在正、書家なり字は子榮在中の子なり家法を學びて能くす若年にして歿せり（扶桑畫人傳）

ハラザイセウ　原在照、畫工なり在明の子にして近江介と稱し南蘋と號す畫法を父に學び固く家法を守り歷々宮中の屏障を畫く明治四年十二月二十一日歿す年五十九（保田氏筆記、平安藝所集）

ハラザイチュウ　原在中　畫人なり名は政逵字は子重在中は其の號、又風遊と號す京都の人、明人の古蹟を摹倣して大に畫學を研究し後一格の風をなす山水花鳥を能くす其の設色のもの精密にして美麗なり又有職の畫を能くす當時名手と稱せらる天保八年十二月二十八日歿す年八十八（扶桑畫人傳、鑒定便覽、畫乘要畧）

ハラサイヒン　原采蘋　豐後秋月藩の儒士の山水花鳥を能くす其の設色のもの精密にして美麗なり又有職の畫を能くす當時名手と稱せらる天保八年十二月二十八日歿す年八十八（扶桑畫人傳、鑒定便覽、畫乘要畧）

ハラザイメイ　原在明　畫人なり在中の子なり家法を學びて能くす天保十五年六月十五日歿す年六十七（鑒定便覽、扶桑畫人傳）

ハラサウケイ　原雙桂　名は、瑜字は公瑤小字は三右衛門雙桂は其號又尚庵と號す平安の人唐津侯に仕ふ（侯後ち封ず古河に移す）父を光茂と曰ふ小字は三右衛門武田信玄の將原虎胤（美濃守）六世の孫なり平安に住して仕へず原芸庵の女を娶り（芸庵京都に居る其の子亦芸庵を襲稱し江戸に居り共に醫を以て名あり）享保三年十月十三日を以て雙桂を生む雙桂生れて奇偉群兒に異なり十歲にして章句を伊藤東涯に受く漸く長じ學を嗜むと飢渴の如し口誦手錄晝夜懈せず父母之を憂て病を得んことを過慮し請て曰く雖も下して贈發するは戒人の事なり兒今年惟く學問斷なくして可なりと雖も之を聞ゆ稍く晏なれば則ち頭岑々として心裏甚だ安かず遂に自己の見を立て論孟を以て根據となし細に道德性理を講ず嘗て一書を著はし名けて泝洄微響と曰ふ謂ふ父を喪ふ哀毀殯に過ぐ服闋て大阪に往く既にして江戸に來り則原芸庵に依り青原南「嵩子式、呂玄文等と往來爽を覺ゆ稍く晏なれば則ち頭岑々として心裏甚だ安かず遂に自己の見を立て論孟を以て根據となし細に道德性理を講ず嘗て一書を著はし名けて泝洄微響と曰ふ謂ふ他日亦た文事を以て大に人に過るあらんと十四にして文を論ず居ること三歲母を念ひて已まず乃ち大阪に赴く母萃て病歿し喪を治め蘆ち茹ひ遂に復た京に歸る雙桂兼て又た醫を善くす其京に居る遠近來て治を請ふ者絡繹門外に滿つ時に土井侯長賓を召す雙桂懼然聽應じて起つ山脇東洋來り謂て曰く請ふ辭に就く勿れ君は學富み量深し他日必ず當に三顧の人に遇ひ以て其の用を覓るべし醫術の如き他人に於ては稱すべきも君に於ては乃ち末技のみ末技を以て僻遠の藩に屈仕す甚た惜むべし雙桂曰く子の言ふ所の如くんば此の如き主人宇宙幾ばくか有る吾れ烏ぞ敢て之に當らん且つ已に其の召に應ず義辭す可らざるなりと遂に唐津に適く十八年を閱て京に歸遊す途に東洋に遭ふ東洋雙桂の手を握り嘆じて曰く平凡庸器なして皆貴顯に列し海內名士なして僻遠に屈處せしむ信に命なる哉と雙桂津に在る日地を掘りて儒懷に遇ふ其の夕、月明、窓紙に女子の影あるを見る出て見れば則ち無し家人大いに怖る雙桂讀書自若頃くありて次子恭胤に謂て曰く是狐狸の爲す所弓を將て之を射よと是に於て女影自ら滅すと云ふ嘗て芳野に遊び櫻花を賞す耽戀三日去る能はず遂に一枝を折て携へ去り制して杖と爲す終身之を手にす其の常に帶る所二劍の柄飾金を以て櫻花を彫書す亦其忘るゝ能はざるを表す家に二馬を畜ふ一を蓬萊と名け一を瑤池と名く蓬萊は仙台の產駿駛常に異なり初め某侯重價を出して購求す而して蹄嚙近くつかず遂に之を繫ぐ是に於て驅車に充られ又其の銅鍊を寧ふ雙桂之を聞て曰く惜哉其の能を展べず而して墓戾自ら縱なるは此れ之を御に買ふ乃ち一食して一石の粟を盡さむ則ち雄奚龍の如し然るに其の觀氣亦た初の如し諸人驚を奪くする者各其の術を施して御するを得ず雙桂獨り其の學を捉躍りて之に上れば鞭策の威を假らずして能く其訓に安ず進退周旋意の如くならざるなしと云ふ雙桂奮然道を究め經を治るを以て志と爲す漢儒以來の諸說に於て窺はざる所なしと之を久しく以爲く或な聖人の旨を得ずと遂に自己の見を立て論孟を以て根據となし細に道德性理を講ず嘗て一書を著はし名けて泝洄微響と曰ふ謂ふ是れ以て百世聖人を俟て惑はざるに庶幾しと云ふに在り其の大意增彥敬に復する書中に詳かなり其訓に雙桂集に載せりと云ふ失れ漢唐訓詁の學、道に於て得る所なし宋に至りて其の說く所大に變じ大に行はる然れども亦聖人の旨に非ず元寛以來學者亦皆な宋儒に從ふ伊藤仁齋に及て始て之を排す物徂徠亦一家の言を成し海內の士と則に旗鼓を建て、馳す然れども其の說聖

人の旨を去ること益々遠し雙桂の時に當て學者朱に非ざれば則ち物、物に非ざれば即ち藤是に於て慨然として非朱、詰物、疑藤の三種を作り決泗微響と併せ以て梓に鏤せんとす而して天早く年を奪ひ大業をして終らざらしむ惜むべきなり雙桂曰く宋儒は聖學の演繹なり陳志に云ふ王允清に卓の將呂布に結び內應を爲さしむ又云く董卓呂布をして中間を守らしむ布私に侍婢と情通す布自ら安ぜず遂に卓を刺殺すと演義之に溯るに翁蟬連環の計を以てす猶宋儒の易に窮理の二字あるを以て許多格物致知の說を添へ形氣の章に許多の本然理氣を添へ樂記の大理人欲に許多の本然氣質を添ふる亦如く學竟聖人未だ嘗て學ばざるの說を以て之を敎行するなり此の宋儒猶演義三國志ならずやと又曰く宋儒は雙に精にして用に粗なり物氏は用を知りて體を知らず之を計るに其の失一つのみ然りと雖も宋儒たるも物氏たらずと又曰く徂徠每に曰ふ宋儒の說は佛氏の所謂る偈一切法界と若し佛の異同を論ぜず即ち徂徠の說は豈に佛氏の捨身倉地愈佛榮生撮取不捨說より轉化し來りしにあらざるかと又曰く徂徠の學は猶演劇に聖人を扮するが如し堯の服を服し堯の言を誦し堯の行を行ふ是れ堯のみと此れ孟子爲めにすると云ふ嘗て之を言ふ而して徂徠恒に引きて其の學を證す果して其の心と德と何如を問はゞ是れ則ち大友の眞鳥に類する者なり孰れか之を拜して眞天子と爲さんや云々嘗て藩中の一士入南條某と云ふ者あり稻葉迂齋に從て學ぶ嘗て雙桂が增彥敬に復する書中見て人の生ある仁義禮智其の他百德皆性の具する所なり即ち性の具する所と雖も猶是れ微なりの語を觀其の旨を飯せず雙桂の門人古館尙淳恩田大雅に因て之を問ふ雙桂其の兩端を叩き之を竭す而して彼れ尙ほ朱說を守り問答反復數十條に及ぶ古館恩田の二子其の語を筆記して聖學辨談錄と名く亦以て雙桂の學に還なるを知るに足るべし雙桂年二十八京を去りて江戸に來りて江戸に歿するに至り唐津古河に僻居すること二十三年是を以て交遊甚だ廣からず故に世未だ實に雙桂を知る者なし然れども伊藤才藏曰く幼にして穎敏學を嗜み早く神童の稱あり長ずるに及びて博學能文名の爲に動かず利の爲に謀らずと芥彥章曰く海の四東轍迹遍るの群儒に等して大論を建つ古聖に考へ倫を證ず命世の傑先覺の民と其他の名士之を稱して噴々止まず雙桂十五にして京を出て十九にして歸る是歲東遲の爲に提撕を受る實に幼時に屬せり而して後の說を爲す伊藤氏と迫かに其の見を異にす然して疑藤を作るに縱ゝ之を辨ぜざるものは習師に背くに忍びざるを以てなりと云ふ嘗て君侯に屈して長崎に象管を過ぎて乃ち雙桂をして清商に接せしむに幼なり又絲竹管絃を嗜み荒木古童の門に入り尺八の奥を極む名手多く其の門に出づ明治二十五年八月三十日病歿す年六十谷中全生庵にに葬る（酷雪漫錄）

ハラゼンザブロウ　原善三郎　貿易商なり元武州兒玉郡若泉村渡瀨の人安政六年始めて橫濱に出て生絲貿易に從事す實に開港の時を距る僅に三ケ月にして浪士等外人と貿易する者を目して國賊として其の店舗を襲ふこと屢々なり善三即危きを免かるゝと數回明治二年商法司爲換方となり尋て登易商社頭取に拜し名字帶刀を許さる六年第二國立銀行を建つ其の頭取に撰まれ十三年橫濱商法會議所頭取に撰まる生絲貿易上外商の專橫を低し大に衆論を喚起し外商に當らんとを企つ而して成らず廿二年製艦國防の費中へ金二萬圓を獻じたるを嘉賞せられ黃綬褒章を賜ひ正六位に叙せらる市會議員たるを嘉賞せられ黃綬褒章を賜ひ正六位に叙せらる市會議員たるを撰まれ尋て議長となる廿五年埼玉縣より撰まれて衆議院議員となり三回の解散に當撰するもの三回廿年九月貴族院議員に當選す其の他商業會議所會頭に選まれ生絲檢査所臨時商議員となり蠶絲外四品取引所理事長となり農商工高等會議員となり赤十字社支部商議員となり鐵道會議臨時議員となり橫濱市參事會員となる廿年十月勳四等に叙し廿二年二月六日從五位に叙せらる同日卒す年七十三

ハラダイツサク　原田一作　勤王の志士なり諱は廣又通稱を龜太郎といふ備中國上房郡松山の商家に生る安政元年江戸に遊學し岸澤蔵の弟子となり數識を歷て森田節齋の門に入る領主板倉氏之を擢て、州に行き谷三山の弟子となりまた京阪の間に漫遊せり三十四年に至り之を辭す爾來專ら高野派管長となり三十四年に至り之を辭す爾來專ら高野派管長となり是より先き異船來航の事ありて和戰の論嘖し一作慷慨國家の爲めに爲すあらんとす偶ゝ文久三年八月中山侍從忠光義兵を大和に擧ぐと聞き直に其麾下に屬して五月六日遂に遷化す年七十四

ハラシヤウゲン　原昌元　軍談師なり初の名は赤松青龍軒堺町に芝居を掛け太平記を講ず

ハラジヨドウ　原如童　尺八の名人なり名は信孝天保四年十一月常陸の國水戸に生る幼にして樂を松延定雄に受く年甫めて二十二川越の藩醫原泰玄養ひて子と爲す如童資性技藝を能くし最も文字及び篆刻に妙なり又絲竹管絃を嗜み荒木古童の門に入り尺八の奥を極む名手多く其の門に出づ明治二十五年八月三十日病歿す年六十谷中全生庵にに葬る（酷雪漫錄）

ハラシ

諸處に轉戰したるが寛に和歌山藩兵の爲めに擒はれ京都六角の獄に繫がれたり翌元治元年七月七日謀叛の罪に依り斬罪に處せらる維新の後朝廷其志を憫み京都靈山に合祀し明治七年五月祭粢料として金二十圓を遺族に賜はる（殉難錄稿）

ハラダ　ウコ　原田宇古　俳人なり始め魚を賣るを業とせしが俳諧を好みて芭蕉の弟子となる和州郡山侯の臣なり（俳諧奇人傳）

ハラダ　カシャウ　原田霞裳　詩人なり名は藩字は叔馨霞裳は其の號紀州の人才名一時に高く菊池淡擧と友とし善し著す所敝芳園遺稿あり又時に墨蘭を畫く頗る風韻多し

ハラダ　カヒ　原田甲斐「ハラダムネスケ」

ハラダ　タカミチ　原隆道　信拔流の劍法家なり字は通卿平次と稱す少にして山瀬源太に就き劍技を學ぶ技既に成る人皆な之れに畏服して夜叉平次の目あり源太も又自ら及ばずと爲す蓋し隆道天資既に超なるに加ふるに習練絕精を以て其の師の門に遊びて往來すること二十一年那爽暑雨と雖も未だ嘗て一日も休せず道路語を爲して曰く烏鳴かざる日あるも平次行かざるの日なしと源太既に死す隆道の名益々彰はれ門人益益衆し每れに弟子に語りて曰く劍に劍なし體を以て劍と爲す體に體なし神を以て體と爲す渾然圓を以てし熒然明を以てすと又曰く待たず止まらず思はず慮らず坂上に丸を轉ずるが如く水中に飄を擺するが如しと又曰く我の彼に勝つは我の勝に非ず虛彼に在ればなり彼の我に勝つは彼の勝に非ず我れ則ち未だ實あらざればなり故に人に虛實ありて衛に勝負なしと此の數語を觀て隆道の得る所亦其の一二を窺す可し天保甲辰歿す年六十三（墓誌）

ハラダ　キザエモン　原田喜左衛門　尾張愛知郡生路村の人なり享保中に台命あり砂糖を琉球より取りて當郡に植ふ始て砂糖を製す其の子孫連綿として之を製し每年藩主に貢せしと云ふ（尾張名所圖會）

ハラダ　キジラウ　原田喜次郎　陸軍歩兵少尉なり福島縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て第二師團歩兵第廿九聯隊附として從軍中廿八年三月十日清國盛京省葛布街戰鬪の際負傷し同五月十二日遼陽兵站病院に於て死去す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ハラダ　ケイガク　原田圭岳　畫人なり武州郡山侯の臣なり（俳諧奇人傳）

ハラダ　ケイスケ　原田大亮　陸軍歩兵中尉なり福岡縣朝倉郡福田村大字平塚の人明治十二年二月を以て生る士官學校卒業後三十七年日露戰役起るや第四師團歩兵第三十七聯隊附として四月出征の途に上り第二軍に從ひて金州上陸以來南山、蓋平、大石橋、遼陽に戰ひ殊勳あり終に三十七年十月十四日清國盛京省林盛堡附近に於て戰死す年二十六戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ハラダ　ケイガク　原田慶　陸軍歩兵大尉なり福井縣出身にして明治廿七八年日露戰役に際し歩兵第十九聯隊附として從軍中廿七年十一月二十六日旅順口に於て戰死す戰功に依り勳五等功五級に叙せらる

ハラダ　ケイスケ　原田權左衛門　馬術家なり名は種明、久太郎種勝の子にして彥根藩に仕ふ後ち長濱縣出仕に補す明治八年歿す年六十八（武術流祖錄、本朝武藝小傳）

ハラダ　ケンザエモン　原田甲斐　信拔流の劍技を學ぶ技既に成る人皆な之れに畏服して夜叉平次の目あり源太も又自ら及ばずと爲す蓋し隆道天資既に超なるに加ふるに習練絕精を以て其の師の門に遊びて往來すること二十一年那爽暑雨と雖も未だ嘗て一日も休せず道路語を爲して曰く烏鳴かざる日あるも平次行かざるの日なしと源太既に死す隆道の名益々彰はれ門人益益衆し每れに弟子に語りて曰く劍に劍なし體を以て劍と爲す體に體なし神を以て體と爲す渾然圓を以てし熒然明を以てすと又曰く待たず止まらず思はず慮らず坂上に丸を轉ずるが如く水中に飄を擺するが如しと又曰く我の彼に勝つは我の勝に非ず虛彼に在ればなり彼の我に勝つは彼の勝に非ず我れ則ち未だ實あらざればなり故に人に虛實ありて衛に勝負なしと此の數語を觀て隆道の得る所亦其の一二を窺す可し天保甲辰歿す年六十三（墓誌）

ハラダ　キザエモン　原田喜左衛門　尾張愛知郡生路村の人なり享保中に台命あり砂糖を琉球より取りて當郡に植ふ始て砂糖を製す其の子孫連綿として之を製し每年藩主に貢せしと云ふ（尾張名所圖會）

ハラダ　キジラウ　原田喜次郎　陸軍歩兵少尉なり福島縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て第二師團歩兵第廿九聯隊附として從軍中廿八年三月十日清國盛京省葛布街戰鬪の際負傷し同五月十二日遼陽兵站病院に於て死去す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ハラダ　ケイスケ　原田大亮　陸軍歩兵中尉なり福岡縣朝倉郡福田村大字平塚の人明治十二年二月を以て生る士官學校卒業後三十七年日露戰役起るや第四師團歩兵第三十七聯隊附として四月出征の途に上り第二軍に從ひて金州上陸以來南山、蓋平、大石橋、遼陽に戰ひ殊勳あり終に三十七年十月十四日清國盛京省林盛堡附近に於て戰死す年二十六戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ハラダ　タケマ　原武馬　陸軍歩兵少尉なり佐賀縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て第五師團歩兵第四十二聯隊附として從軍中廿八年一月廿八日清國盛京省李家窩棚近戰鬪の際負傷し同廿一日大台年間の人（虛心筆記）

ハラ　タケ　原隆道　信拔流の劍法家なり字は通卿平次と稱す少にして山瀬源太に就き劍技を學ぶ技既に成る人皆な之れに畏服して夜叉平次の目あり源太も又自ら及ばずと爲す蓋し隆道天資既に超なるに加ふるに習練絕精を以て其の師の門に遊びて往來すること二十一年那爽暑雨と雖も未だ嘗て一日も休せず道路語を爲して曰く烏鳴かざる日あるも平次行かざるの日なしと源太既に死す隆道の名益々彰はれ門人益益衆し每れに弟子に語りて曰く劍に劍なし體を以て劍と爲す體に體なし神を以て體と爲す渾然圓を以てし熒然明を以てすと又曰く待たず止まらず思はず慮らず坂上に丸を轉ずるが如く水中に飄を擺するが如しと又曰く我の彼に勝つは我の勝に非ず虛彼に在ればなり彼の我に勝つは彼の勝に非ず我れ則ち未だ實あらざればなり故に人に虛實ありて衛に勝負なしと此の數語を觀て隆道の得る所亦其の一二を窺す可し天保甲辰歿す年六十三（墓誌）

ハラダ　カヒ　原田甲斐「ハラダムネスケ」

ハラダ　タカミチ　原隆道　信拔流の劍法家なり字は通卿平次と稱す少にして山瀬源太に就き劍技を學ぶ技既に成る人皆な之れに畏服して夜叉平次の目あり源太も又自ら及ばずと爲す蓋し隆道天資既に超なるに加ふるに習練絕精を以て其の師の門に遊びて往來すること二十一年那爽暑雨と雖も未だ嘗て一日も休せず道路語を爲して曰く烏鳴かざる日あるも平次行かざるの日なしと源太既に死す隆道の名益々彰はれ門人益益衆し每れに弟子に語りて曰く劍に劍なし體を以て劍と爲す體に體なし神を以て體と爲す渾然圓を以てし熒然明を以てすと又曰く待たず止まらず思はず慮らず坂上に丸を轉ずるが如く水中に飄を擺するが如しと又曰く我の彼に勝つは我の勝に非ず虛彼に在ればなり彼の我に勝つは彼の勝に非ず我れ則ち未だ實あらざればなり故に人に虛實ありて衛に勝負なしと此の數語を觀て隆道の得る所亦其の一二を窺す可し天保甲辰歿す年六十三（墓誌）

ハラダ　キザエモン　原田喜左衛門　尾張愛知郡生路村の人なり享保中に台命あり砂糖を琉球より取りて當郡に植ふ始て砂糖を製す其の子孫連綿として之を製し每年藩主に貢せしと云ふ（尾張名所圖會）

ハラダ　キジラウ　原田喜次郎　陸軍歩兵少尉なり福島縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て第二師團歩兵第廿九聯隊附として從軍中廿八年三月十日清國盛京省葛布街戰鬪の際負傷し同五月十二日遼陽兵站病院に於て死去す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ハラダ　ケイガク　原田圭岳　畫人なり武州郡山侯の臣なり（俳諧奇人傳）

ハラ　タケ　原武馬　陸軍歩兵少尉なり佐賀縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て第五師團歩兵第四十二聯隊附として從軍中廿八年一月廿八日清國盛京省李家窩棚近戰鬪の際負傷し同廿一日大台年間の人（虛心筆記）

ハラダ　ゴンザエモン　原田權左衛門　馬術家なり名は種明、久太郎種勝の子にして彥根藩に仕ふ後ち長濱縣出仕に補す明治八年歿す年六十八（武術流祖錄、本朝武藝小傳）

ハラダ　サトル　原田覺　陸軍歩兵大尉なり福井縣出身にして明治廿七八年日露戰役に際し歩兵第十九聯隊附として從軍中廿七年十一月二十六日旅順口に於て戰死す戰功に依り勳五等功五級に叙せらる

ハラダ　シゲカネ　原田重包　筑前の鍛工なり箱崎八幡洞邊に住す助左衛門と稱す延寶三年生る

ハラダ　シチベエ　原田七兵衛　荒木流の馬術家種明の子なり名は種茂父の業を繼ぎて名あり元祿十六年五月三日死す年六十八（武術流祖錄、本朝武藝小傳）

ハラダ　ジュンサイ　原田筍齋　近江の儒者なり字は義、實は小森氏にして彥根藩に仕ふ後ち長濱縣出仕に補す明治八年歿す年六十八皇朝譜

ハラダ　ジュンタラウ　原田隼太郎　海軍少尉なり山口縣出身にして明治廿七八年日露戰役に於て軍艦初瀨に乘組み從軍中廿七年五月十五日旅順口附近に於て初瀨沈沒の際戰死す

ハラダ　セイジラウ　原田清次郎　陸軍歩兵少佐なり石川縣出身にして明治廿七八年日露戰役に於て歩兵第三十六聯隊附として從軍中廿七年十一月二十六日旅順要塞二龍山に於て戰死す戰功に依り勳五等功五級に叙せらる

ハラダ　タカタネ　原田隆種　大藏氏、秋月種實と祖を同うし筑前高祖城に居る天文六年從五位下に叙し彈正大弼に任ず秋月文雄及び筑紫惟門と皆な門閥を以て自負す然れども國小に勢弱く大友氏の將士之を待遇する極めて倨れり三人俱に之を憤り毛利氏の招きに應ず七月戶次氏に攻られ文種自殺し八月惟門敗走す七年六月秋月種實筑紫廣門と龍造寺隆信に應じ戶次氏高橋氏と決戰す七月敗れて委奴に入る八月隆種伐て戶次氏を破る九月戶次道雪高橋紹運志賀道輝相議し隆種を伐ち紹運秋月氏筑紫氏に備ふ道雪道輝と謀を合し高祖城を改む隆種波多江吉井原田等と計を設け之を破る敵を追て河に逼る敵死を決して戰て原田林慶遂に獲らる餘兵皆な走りて高祖城に入る隆種髮を剃り了榮と號す四男親種下總守と稱す永祿十一年衛藤尾張筑前道雪等と立花城を夾み擊つ親種之と奮鬪し軍敗れ且肯を失ふ臣萩原等諫め逸馬に乘らしめ圍を破りて走る生松原に及ぶとき從ふ者僅に五十餘人遂に走りて高祖城に入る白杵氏來り攻む親種走て高良城を保ち終に深川十郎の爲めに殺さる時に天正元年二月なり親種多く士を養ふ其の殺さるゝに及ひ父了榮殘兵を收め高祖城に還り秋月種實と謀り城に據る終る所なし知らず（野史）

ハラ　タダサダ　原忠貞　東京府出身にして明治廿七八年日露戰役に際し陸地測量師として臨時測圖部附と爲りて從軍中廿七年十月三日清國營口に病に罹り同十一月十八日南瓦房店兵站病院に於て病死す

ハラダ　タネナリ　原田種成　薩佐賀藩士なり戊辰の役先鋒を命ぜられ奥羽に轉戰して功あり明治五年司法權大錄となり十年判事となり大審院評定官となる二十四年大審院部長となり後從三位勳二等に叙せらる在職中三十六年十二月三日東京赤坂新町の自邸に逝く年六十三

ハラダ　タネマサ　原田種方　勤王家なり通稱七郎一時大江豐雄と稱す豐前小倉の神官周防守重枝の弟なり和漢の學に通じ又劍槍の術に長じ和歌を詠じ又醫を權田直助に學ぶ安政中三池藩の伊藤氏に養はれしも離別して諸國を歷遊し京都に出で丶勤王の士と交り文久中小倉に歸り高橋伊賀と事を擧げんとして窪田治部右衛門に捕へられ蒸氣汽罐に投ぜられて死す

ハラダ　トウガク　原田東岳（原田氏自ら修して原とす）中津侯の儒員なり名は直、初の名は殖、字は泓夫、東岳は其の號、吉左衛門と稱す越後の人、本姓は酒田氏、出で丶原田氏を繼ぐ原田氏は日出侯の世臣、巨室を以て藩の大夫たり東岳其の義父の蔭を以て少にして近侍たり日出侯人を識るの鑒あり東岳の異才あるを愛し命じて京師に遊學せしむ堀河の塾に寓し經義を伊藤東涯に受く四年にして歸る侯又た命じて服部南郭に從ひ古文辭を學ばしむ江戶に在ること三年後侯に從て東來すること數次是に於て經藝文章共に時習の統を得たり之に加ふるに博綜該覽通曉せざるなし小倉の增彥敬と經藝を以て名を齊うし人之を九州の原增と呼ぶ人と爲り剛介にして屈せず實曆中言用ひられざるを以て致仕し去りて京師に往き講說し徒に授く從遊頗る衆し又た去りて關西諸州に遊ぶ豐前の中津に至り此に講學す中津侯其の經藝を聞き屢〻來を賜ひて之を助け優遇頗る渥し遂に侯家に賓事す天明三年十二月三日歿す時に年五十五著はす所論語箋注、孟子箋、經說拾遺、封建考、郡縣考、逸民史略、臥遊漫鈔、席上腐談、堂詩選、東岳筆疇、東岳學的、唐詩正聲箋注、詩學新論、文集遺稿等あり（先哲叢談後編、鑒定便覽、諸家人物志）

ハラダ　トシシゲ　原田利重　市左衛門と稱す一刀流の劍客にして槻正直の弟子なり（武術流祖錄）

ハラダ　トヨキチ　原田豐吉　地質學者なり陸軍少將原田一道の子岡山縣の人萬延元年十一月廿一日を以て江戶小石川竹島町に生る明治三年東京外國語學校に入り佛語を學ぶと二年餘六年三月獨逸に遊び普國部ライヘルケ府の地質鑛物窮理採鑛古生物測量化學の諸科を修め十三年十月更にハイデルベルゲ大學に入り岩石學應用地質學哲學を修む後ミュンヘン大學に轉じて古生物學を專攻す十五年五月理科學士の學位を受く後墺國アルベン山地方ゆ地質を巡視し更に墺國地質調査の業に從事して大に學理實驗講究の機會を得たり十六年四月歸朝す幾何ならずして農商務權少書記官に任ぜられ十九年二月農商務地質局次長に任ぜられ理科大學教授を兼務す又二十四年四月歐洲漫遊の序を以て各國の方法取調を委囑せらる八月理學博士の學位を受く豐吉常に肺を疾む洋行の途獨逸の名醫コッホの塾に從ひ治療を受く藥石効を奏ぜず二十七年十月一日遂に歿す年三十四豐吉英敏にして才器あり歐洲より歸朝の後洋人菜に代りて本邦地質調査の業を監督し諸種の材料に參照して日本群島の地質調査論文を起草す當時地質局創設の際なりしを以て之を根據として其事業を計畫せり豐吉又東部地質測量を囑製す是れ地質調査上最も便益を與ふる所にして其地質局に於ける功績は實に偉大なりと謂ふべし

ハラダ　ナガトシ　原田長俊　本名は直正通稱九郎左衛門　織田信長に仕ふ元龜元年八月信長火を餘吾木本に縱ちて師を還へす馬俊之れが殿たり天正三年五月長篠の役に鉄卒柴田勝家と之れが殿たり天正三年五月長篠の役に鉄卒初め族を塙と稱す晩十人の列となる七月信長命じて族を原田と改め備中守と稱せしむ四年四月長俊細川藤孝、荒木村重、惟任光秀、筒井順慶と騎三萬餘を率ゐ一向の徒を大坂に攻む村重は海路より上りて夢を芝る藤孝光秀は淀川を挽て長俊營て南面より進みて天王寺の陣を守るを約す而して事大に違ひ佐久間正勝先づ之を守りて長俊を遮り留む敵亦寨を木津及び雄波に構へて敵を欺き鉄砲を以て之を狙撃し敵深田を縱ちて疾走し長俊之に代りて進む敵深田を縱ちて疾走し長俊之に代りて進む敵深田を縱ちて疾走し長俊兵を督して

泰長院に葬る（事實文編）

ハラダ　ヘイニフ　原田平入　石州流の茶人にして野田醒翁に茶道を受けて能くせり江戸の人、名は福孝、一に無心庵宗貞と號す寶暦八年三月三日歿す年七十一田畑興樂寺に葬る（茶人系傳全集）

ハラダ　ヘイニフ　原田平入（二世）　石州流の茶人なり村士彌十郎に茶事を學びて能くす其歿年詳かならず（茶人系傳全集）

ハラダ　マゴシチラウ　原田孫七郎　肥後の人なり性頗る機智に富み亦た膽畧あり天正の初年厦と呂宋に往來しマニラに住し西班牙語に通じ西人と交り深く其の事情を察し以爲く彼の宗教を以て他國に侵略するの跡を以て觀れば我呂宋を取るに非んば彼覓を起さしめんと欲し日本に歸り其の近臣に由りて秀吉に勸說し呂宋太守の入朝を促がさしむ蓋し太守をして激して事を起さしめ之れに乘じて爲す所あらんと關りしなり秀吉直に其の說を容れ太守に書を贈り入貢を嚴命す孫七郎其の甥某をして呂宋に使せしむ時の太守ダスマリニアス之れを受け天主教師フランコホウを答使として日本に至らしむ時に秀吉征韓の軍を起し肥前の名古耶に營す孫七郎も亦隨ふて營中にあり使節を導きて秀吉に謁せしむ使節、太守の書翰及び贈物を呈し謁に受けたゝ書の果して太閤の書なるか否を確めん爲に來りたるか言ふ其使節頗る曖昧なりと雖も當時秀吉全力を征韓に注げる際なるを以て敢て之を責めず孫七郎が南蠻を以て始て入貢せしめたるの功を賞して之を慕呂の列に加へて年祿五百俵を與ふ孫七郎更に太守をして確答せしめんと欲し文祿二年自ら呂宋に航す然るに前の使節フランコホウ等は歸航雜に遭ふて溺死し秀吉の復書太守に達せざりき孫七郎又一策を按じ天主教長居を下総の長德院に定む明治五年官教導職を置き總結城の長德院に定む明治五年官教導職を置き各宗に令し碩學德望の僧十名を選出せしむ坦山もまた其の選に與かる始め權訓導に補し轉遷して大講義に至る七年事に因て職を去り僧籍を脫し市に隱る本願寺法主光尊上人頗る之れ惜み禮を厚うして之を聘し門下の教育を囑託す十一年大學講師となる十二年相州關本最乘寺の住職樣仙和尚の大本山總持寺に昇住するにより坦山其後を承け最乘寺に住し再び僧籍に入り少教正に補せらる十五年最乘寺を退きまた市に隱る十八年學士會院の會員に選擧せらる二十一年大學講師を辭す二十四年曹洞宗大學林總監を囑託せらる二十五年曹洞宗事務取扱を命ぜらる是年七月二十七日病なくして遽然として遷化す年七十四茶毘して遺骨を市ヶ谷樂王寺前町長昌寺に葬るその戒目に先だつこと二十分知友某々へ郵報して曰く拙者儀即刻臨終仕候此段御通知に及び候也と此一事以て其の道に造詣せるの深きを知るべし

ハラダ　ムネスケ　原田宗輔　伊達家の老臣なり甲斐と稱す父宗實の職を嗣ぎ八千石を領す兵部宗勝伊達氏を奪はんとす乃ち宗輔と謀り藩主綱宗を以て名故に荒まし其の過失を聚して以て之を幽禁子繼千代を立つ宗輔立つ功を恃み跋扈甚し且終に繼千代を殺さんと欲す老臣伊達宗重稍〻其謀を知り女弟淺岡をして繼千代の乳母と爲し以て之に傳とす一日庖人某毒を鴆む淺岡之を知り庖人をして之を嘗めしむ庖人謀の露はるゝを知り其毒を仰て死す宗勝心自から安んぜず家人をして繼千代を刺さしむ成らず是に於て國內恟々たり逆臣神並白首宗重乃ち馳せ往きて江戸に訴ふ將軍德川家綱宗重宗輔を召して應に對辯せしむ宗輔辭屈す黙然起し即ち擊ちて宗輔を殺す時に寛文十一年三月廿七日宗輔年五十三（伊達藩輯譜、仙臺史傳）

ハラダ　ヤスナガ　原田泰永　陸軍步兵中尉なり鳥取縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て第七師團步兵第二十五聯隊附として從軍中三十七年十一月二十六日旅順要塞松樹山に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ハラダ　ヤスヲ　原田安男　陸軍步兵大尉なり熊本縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て第八師團步兵第卅一聯隊附として從軍中卅八年三月八日清國盛京省瓦房店に於て戰死す戰功に依り勳四等功五級に叙せらる

ハラダ　ヨザウ　原田與三　陸軍砲兵少尉なり石川縣出身にして明治卅七八年日露戰役に際し近衛野戰砲兵聯隊附として從軍中卅七年六月廿七日清國盛京省瓦房店に於て戰死す戰功に依り勳六等功六級に

叙せらる

ハラダ　リウグワイ　原田柳外　名は讓、字は公基、通稱を四郎左衛門と云ひ柳外は其號なり別に謙齋と號す晩年に至り又牛山人の號あり近江國神崎郡金堂村の人原姓磯部氏幼より同國蒲生郡八幡の原田氏に養はれ其家を嗣ぐ少壯より學を好み詩を頼門の高足牧百峰に學び易を梁川星巖、廣瀨旭莊、齋藤拙堂等に問ふ又書を篠崎小竹に受け後鞆山陽の筆意を摸し更に進んで唐宗の古法帖に及ぶ故に文士墨客の往來するもの少からず貫名海屋、藤井竹外、賴三樹等亟交友なり然れども其本業とする所は醬油釀造に在り家道敗頽の後を受け拮据勵精四十餘年遂に家名を恢復す元治元年八月二十五日病歿す年五十七

ハラダ　リャウスケラウ　原田良太郎　陸軍騎兵監なり周防國都濃郡末武村の人明治元年正月吉山口藩の兵隊となり伏見の役に從ひ三年二月同藩戍兵鎭定の事に從ひ五年三月初め陸軍省に出仕す十年四南役に於て陸軍中尉なり以て征討軍御令使仰付けられ後參謀本部に出仕し戰時衞生事務改正需査委員を命ぜられ二十年三月輜重兵少佐に任ぜられ二十四年十一月輜重兵中佐に進み日清戰役中大佐に昇進し巡輪通信の事務に從事し三十年九月陸軍少將に任じ憲兵司令官となり後父轜重兵監を兼ぬ三十二年三月臨時陸軍建築部長に兼補し本職を免して騎兵監に補す三十五年五月將校生徒試驗委員長に兼補せらる三十六年三月二十三日特旨を以て正四位に叙し勳二等瑞寶章を賜り同二十四日死去す年五十七青山共同墓地に神葬す

ハラチ　モリトミ　原地盛美　薩鹿兒島藩士にして明治十年四南役に於て二等少警部を以て別働隊第三旅團附となりて從軍中三月十八日肥後國阿蘇郡二重峠に於て戰死す

ハラ　チュウジュン　原忠順　薩鹿島藩の人にして少より氣節あり其の昌平黌に在るや同輩記誦の學を屑とせず名節を重んじ經濟の道を講じ切に王室の式微を悲み大義の明ならざるを嘆き風に王政恢復の大志を抱けり故に其の交る所は松本謙三郎、松林駒次郎、高杉晉作等の如き概れ慷慨氣節の士なり業成り藩に歸るや當時本藩の有志者副島次郎、大木民平、江藤新平、古賀一平、島彈右衞門等と結び辛苦經營藩主鍋島公を輔佐して大に本藩勤王の擧を翼成せり文久三年鍋島閑叟建策ありて病に因て自から朝するを能はず支藩鹿島領主鍋島直彬代て上京す明治元年二月鍋島直彬復た鍋島直大に代り其の北陸道先鋒の兵を督一京師に朝す是より先き忠順日夜奔走し頻に時期の遷延すべからざるを論じ隱然爲す所あり是に於て直彬の手兵七百に將として隨從し將に日ならずして戰途に就かんとす此の時朝命あり鍋島直彬をして宗家直大に代り長崎の邊戍を督せしむ蓋し宗家の請に出つるなり忠順憤慨百方北伐の軍に從はんを請ふも聽かれずして鬱藩し遂に其の志業を完成するの機を失却せしは忠順の每に遺憾とする所なり翌明治二年鹿島藩の名を以て函館殘賊追討の命を請ひたるが知き報効の志禁ずると能はざりしに因らずんばあらず其の他勤王の事業尠しとせず然れども其の跡多くは湮沒して顯はれず蓋し其の末藩の士なるを以て是等の一切の計畫常に間接に出づるの已むを得ざりしに因るなり當時直彬と本藩有志者との間に在て專ら諸般の畫策に從事せしものは即ち忠順にして其の功勞豈重且大なりと謂はざる可けんや是れ故三條岩倉二公の夙に知悉する所岩下方平等の知きも亦た記憶するを務め瘴烟毒霧の中に奔走して日夜休せず此の如きもの數旬以て藩吏及士族盤の大に藩力を養ひ他日王事に盡すの素を爲せり遂に鹿島所あらん初め忠順藩に歸るや其の主鍋島直彬を翼けて藩執政と爲り專ら意を經濟に注ぎ學校を改良し人材を養育し兵士を訓練し戎器を整備し維新の後鹿島藩大藩事に擧げられ益〻力を藩政に盡し百度俱に擧る其の鹿島の小藩を以て維新の際已に英式三大隊の精兵を養ひたるが知き又た廢藩置縣の時に及び一金の藩債なかりしが知き以て其の平生の施設を見るべきなり明治五年鍋島直彬に屬して米國に航し華盛頓に在て其の政體を視察し以て維新の際已に英式三大隊の精兵を養ひ島の小藩を以て維新の擧に參與し百度俱に擧る其の鹿島藩の政治始て其の緒に就けり是に於て有志士琉球藩を以て廢して沖繩縣を置かゝるに當り忠順擧られて之が書記官と爲る當時沖繩の形勢たる只廢置處分を決せしもの已に等後の貨未だ立たず綜撫の方未だ定らずんばあらず明治十四年九月沖繩縣大書記官を辭し且太政官書記官に轉任の內命を辭して郷里に歸る初め明治八年官を罷むるや歸郷田園に從事し植物園を私設し其の太守は予を奉じて其の地の君主と爲さんが爲め且つ予が出征を謝せんが爲めに來朝せんと欲すと予は會院の會員に選擧せらる二十一年大學講師を辭す二十四年曹洞宗大學林總監を囑託せらる二十五年曹洞宗事務取扱を命ぜらる是年七月二十七日病なくして遽然として遷化す年七十四茶毘して遺骨を市ヶ谷樂王寺前町長昌寺に葬るその戒目に先だつこと二十分知友某々へ郵報して曰く拙者儀即刻臨終仕候此段御通知に及び候也と此一事以て其の道に造詣せるの深きを知るべし

ハラダ　ムネスケ　原田宗輔　伊達家の老臣なり甲斐と稱す父宗實の職を嗣ぎ八千石を領す兵部宗勝伊達氏を奪はんとす乃ち宗輔と謀り藩主綱宗を以て名故に荒まし其の過失を聚して以て之を幽禁子繼千代を立つ宗輔立つ功を恃み跋扈甚し且終に繼千代を殺さんと欲す老臣伊達宗重稍〻其謀を知り女弟淺岡をして繼千代の乳母と爲し以て之に傳とす一日庖人某毒を鴆む淺岡之を知り庖人をして之を嘗めしむ庖人謀の露はるゝを知り其毒を仰て死す宗勝心自から安んぜず家人をして繼千代を刺さしむ成らず是に於て國內恟々たり逆臣神並白首宗重乃ち馳せ往きて江戸に訴ふ將軍德川家綱宗重宗輔を召して應に對辯せしむ宗輔辭屈す黙然起し即ち擊ちて宗輔を殺す時に寛文十一年三月廿七日宗輔年五十三（伊達藩輯譜、仙臺史傳）

ハラダ　ヤスナガ　原田泰永　陸軍步兵中尉なり鳥取縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て第七師團步兵第二十五聯隊附として從軍中三十七年十一月二十六日旅順要塞松樹山に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ハラダ　ヤスヲ　原田安男　陸軍步兵大尉なり熊本縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て第八師團步兵第卅一聯隊附として從軍中卅八年三月八日清國盛京省瓦房店に於て戰死す戰功に依り勳四等功五級に叙せらる

ハラダ　ヨザウ　原田與三　陸軍砲兵少尉なり石川縣出身にして明治卅七八年日露戰役に際し近衛野戰砲兵聯隊附として從軍中卅七年六月廿七日清國盛京省瓦房店に於て戰死す戰功に依り勳六等功六級に

して諸般の種苗を栽培し以て殖産興業の首唱者となり地方の公益を計れり是に於て復た拳勵社を設け郷人就産の源を開き銀行を立て士族家産保持の道を定め勤勉貿貿の習を誘導して獨立の精神を養ほしめ協同一致の風を養成して自治の基礎を立てしめ尚ほ力を教育に致し學校を擴張して子弟を誘掖す而して是等地方公共の事に關しては率先して私財を義捐するもの前後數十回其の効果や一小地方を以て早く既に佐賀縣下に重さを爲し常に近邑隣郷の推す所となる明治二十三年帝國議會開設の期に及び佐賀縣多額納稅者の互選に當り九月二十九日貴族院令第一條第五項に依り貴族院議員に任せらる爾來第六議會に至るまで至誠以て其任務を盡し重要の議案出づる毎に往々夜を徹して其の利害を査覈し敢て或は苟且に付することなし多額納稅議員中衆の推す所と爲る二十七年十一月二十七日歿す（國民新聞）

ハラ　チュウネイ　原仲寧　水戸の藩士なり名は忠成、字は仲寧、初名は忠敬、任藏と稱し後ち市之進と改む尚不愧齋と號す其の先甲斐の勇將原半人より出づ十左衛門雅言の第二子天資穎敏等儕中に在りて靜然頭角を見はす業を會澤憲齋、藤田東湖に受く東湖に於て從弟たり成章弘道館に入り居學生と爲る當時師家の小傳及逸事を叙して居學筆叢若干卷を著はす居ること歲餘學愈〻進み擢られて舍長と爲る弱冠江戸に遊び贄を古賀謹堂に執る昌平黌に入り重野士德、秋月子錦、松本士權、岡天爵等と文字の交を爲す會〻俄羅斯使臣長崎に來る幕府川路聖謨、古賀謹堂等をして往て之に接せしむ仲寧從ふ蓋し烈公の聖謨謹堂に屬し門生を以て從行せしめ以て應接事情を得んと欲してなり事畢て還り羽倉簡堂の門に入り又た鹽谷宕陰、藤森弘庵に從遊す簡堂深く仲寧を器重し聖謨と謀りて將さに薦引する所あらんとす藩の爲に召されて覓に水戸に歸る安政三年擢られて步士と爲り弘道館訓導を兼ね尋で扈從人と爲り史館編修を攝す乃ち家塾を城西五軒坊に開きて生徒を教授す從游の者數百人謹學約束を遵べ以て爲學の大要を示す其の意專ら經濟實用を主とす及門子弟皆な道義を講じ氣節を勵ますを以て務と爲す萬延元治の間慷慨憂國の士多く仲寧の門に出づと云ふ是時に方りて烈公彥根侯と合はず藩士將に爲す所あらんとす時に朝廷、幕府の擾はず國事を誤らんとするを憂へ勅を水戸の公益を計れり是に於て復た拳勵社を設け郷人就産の源を開き銀行を立て士族家産保持の道を定め勤勉貿貿の習を誘導して獨立の精神を養ほしめ協同一致の風を養成して自治の基礎を立てしめ尚ほ力を教育に致し學校を擴張して子弟を誘掖す而して是等地方公共の事に關しては率先して私財を義捐するもの前後數十回其の効果や一小地方を以て早く既に佐賀縣下に重さを爲し常に近邑隣郷の推す所となる明治二十三年帝國議會開設の期に及び佐賀縣多額納稅者の互選に當り九月二十九日貴族院令第一條第五項に依り貴族院議員に任せらる爾來第六議會に至るまで至誠以て其任務を盡し重要の議案出づる毎に往々夜を徹して其の利害を査覈し敢て或は苟且に付することなし多額納稅議員中衆の推す所と爲る二十七年十一月二十七日歿す（國民新聞）

ハラ　チュウネイ　原仲寧　水戸の藩士なり名は忠成、字は仲寧、初名は忠敬、任藏と稱し後ち市之進と改む尚不愧齋と號す其の先甲斐の勇將原半人より出づ十左衛門雅言の第二子天資穎敏等儕中に在りて靜然頭角を見はす業を會澤憲齋、藤田東湖に受く東湖に於て從弟たり成章弘道館に入り居學生と爲る當時師家の小傳及逸事を叙して居學筆叢若干卷を著はす居ること歲餘學愈〻進み擢られて舍長と爲る弱冠江戸に遊び贄を古賀謹堂に執る昌平黌に入り重野士德、秋月子錦、松本士權、岡天爵等と文字の交を爲す會〻俄羅斯使臣長崎に來る幕府川路聖謨、古賀謹堂等をして往て之に接せしむ仲寧從ふ蓋し烈公の聖謨謹堂に屬し門生を以て從行せしめ以て應接事情を得んと欲してなり事畢て還り羽倉簡堂の門に入り又た鹽谷宕陰、藤森弘庵に從遊す簡堂深く仲寧を器重し聖謨と謀りて將さに薦引する所あらんとす藩の爲に召されて覓に水戸に歸る安政三年擢られて步士と爲り弘道館訓導を兼ね尋で扈從人と爲り史館編修を攝す乃ち家塾を城西五軒坊に開きて生徒を教授す從游の者數百人謹學約束を遵べ以て爲學の大要を示す其の意專ら經濟實用を主とす及門子弟皆な道義を講じ氣節を勵ますを以て務と爲す萬延元治の間慷慨憂國の士多く仲寧の門に出づと云ふ是時に方りて

武田耕雲齋の戮に就くや仲寧陰に人を遣はして遺孤を匿し以て其の祀を存せしむ其の學該博經史並び修め最も國典に精し又た武藝に精し詩文その所長にあらず然るに才氣煥發、長篇大策筆を授き立ろに成る著述纂めて富む多くは散逸して傳はらず今僅かに護王明神事蹟、西游記、論史會稿、晋府紀略、尚不愧齋存稿若干卷を存するのみ（行遊、尚不愧齋存稿）

ハラ　ツネタカ　原經孝　陸軍步兵中尉なり熊本縣出身にして明治廿七八年日露戰役に於て步兵第六十四聯隊附として從軍中廿八年九月十九日清國盛京省遼海屯にて病に罹り同十月九日歿後步兵第六聯隊に於て死去す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ハラ　トクサイ　原得齋　儒者なり名は義亂字は正道、正之進と稱す實は志賀氏にして念齋の養子たり漢學を善くし先哲傳、復讐新話、武藏地名攷等の著あり

ハラ　トナン　原斗南　平安の儒者なり名は存之、字は子希、小字は義助斗南と號す大阪の人中井甃庵に學ぶ後ち懷德書院の教授たり（鑒定便覽、諸家人物志）

ハラ　トミゴラウ　原富五郎　三絃の名手なり後に武太夫と稱す名は盛和原富と號す德川氏の先手與力なり常に登て市谷長流寺に道成寺の三絃を彈ず同所淨榮寺の住僧白獅尺八を以て之に和す偶〻雨降る觀世の禮朝廷素と慣例あり古新九郎山彥源四郎尾上梅幸市村羽藏等座にあり之を惑ず風雷日く三絃は俗曲なり神何そ之を聞て感應あらん雨の降ること是偶然のみと著す所なら柴あり安永れ年七月九日或は云く寛政四年二月廿二日歿す（俗耳鼓吹、見ぬ世の友）

ハラ　トラタネ　原虎胤（甲陽軍鑑に虎種に作る）父は友胤能登と稱す祖父胤繼肥前守と稱す同族胤道の介有と なり下総小弓城に居る足利義明攻て之を陷る友胤甲斐に奔り（松窗漫錄に曰く光胤原村に居る文正元年死す二男友胤義昌の爲に逐はれ甲斐に奔る武田信虎に仕へ軍功あり寛に戰死す其子を虎胤と曰ふ）武田信虎に仕へ餘步隊長となる（國志）虎胤奚濃守と稱す驍勇魁偉一を以て百に當る衆目して夜叉奚濃と云ふ信虎其の剛勇を愛し諱字を授く信玄に迨て屢〻功樹

つ天文二十二年冬淨土の僧日蓮の徒と宗意を爭ふ信玄虎胤に謂て曰く汝が歸依する所の日蓮の徒は念佛を稱して無間法と謂ひ之を會息す他日汝宗門を導じなば念佛を唱ふるか虎胤曰く能はず信玄强ゆ虎胤色を變じて曰く臣闇蒙と雖も願目を信じ佛果を得べし念佛を唱へて蹕に墜つるを欲せず夫れ佛は釋氏よりして後ち是非善惡となく各〻鼻祖の說を把りて其の教法を守る今更に宗祖の遺戒を毀却せば道に戾り義に違ふなり君命重しと雖も敢て念佛を唱ふる能はずと信玄怒り虎胤を逐ふ虎胤去りて相模に行き北條氏に仕ふ氏康虎胤の勇猛を愛し渡邊綱に擬すと云ふ是より先き虎胤髮を剃り清嵩と號す天文二十三年春氏康信玄と賀島に戰ふ日あり相人越智彈正斥候に出て甲士と鬪ひ之を刺す敵群り率て還る甲兵追躡す太田源六側に在り虎胤を援け長槍を揮ひ敵を殲し將に復た擊たんとす虎胤顧みて曰く我嘗て甲にありし時斯人と少しく因あり請ふ赦せと乃ち俱に歸る後ち信玄氏康と成を行ひ善德寺に會盟す信玄氏康に謂て曰く原美濃先に我旨に違ふ誠めんと欲して姑く之を逐ふ問く今獨が麾下に在りと渠已に我に功ある二つ請ふ之を得んと是に於て氏康命じて歸任せしむ永祿七年病みて歿す年六十八二子あり長康禁出でて横田高松の嗣と爲る次盛胤字は甚四郎元龜元年兩角昌守と評論して曰く原美濃を磯はる天正三年五月長篠に戰死す（野史）

ハラ　ナンヤウ　原南陽　水戸侯の醫員なり名は昌克字は子柔、玄與と稱す南陽は其の號、水戸の人父昌衛始めて醫を以て本府に仕ふ南陽京師に遊び山脇侃賀川玄悅の術を受く伎倆卓越名東國を掩ふ其醫經を治むる章句を事とせず專ら適用を主とす著す所の諸書後學奉じて至寶とす南陽國侯の爲めに知らる二世に歷事し侍醫となる三十餘年優命致仕す文政三年八月十六日歿す年六十八初め南陽其の先昌俊甲斐の名將なるを以て常に方伎に食するを恥づ子昌綏疎を襲ふに及び工侯命じて改めて諸士班に就かしむ以て其の志を成す昌綏進て軍師となる南陽著はす所叢桂偶記、醫事小言、經穴靈解、瘍狗傷考、傷寒夜話、痘瘡策、脚氣編、叢記、藥語、四遊雜記、百金錄、解毒奇功方、寄奇方記、砦草等あり（皇國名醫傳、鑒定便覽）

ハラ　ネンサイ　原念齋　德川幕府の士なり名は善字は公道、三右衛門と稱す念齋は其の號、鱣溪の孫、父敬仲幕府に仕へて步隊に入る父死して念齋其の後を繼ぐ時方さに嗣冠母秋田氏性嚴敎ふるに義方を以てす念齋學を山本北山に受く夙夜刻苦暇あれば則ち徒を聚めて講授す著はす所の先哲叢談一書皆て旨を奉じて幕府に進呈し銀錠を賜はる人之を榮とす祭酒林述齋其の名を聞き召見す又た鷹めて史事に與らしむ既に一師團步兵第十五聯隊附として出征中病に罹り廿七年十二月三十日旅順塞寨寺兒溝西方高地に於て戰死す戰功に依り勳六等功七級に叙せらる

ハラ　ハウイチアン　原白隱（ハクイン）　名の人名は余三郎抱一庵は其號なり文學的著作を以て世に知らる明治三十七年八月二十三日精神病にて死す年三十九

ハラ　ハクイン　原斌　海軍大尉なり山口縣出身

ハラ　ヒン　原斌　海軍大尉なり山口縣出身にして明治廿七八年日露戰役に際し軍艦平遠分隊長として出征中九月十八日旅順口附近鳩灣沖に於て平遠沈沒の際戰死す戰功に依り勳五等功五級に叙せらる

ハラ　ヒロマサ　原熙政　陸軍步兵大尉なり

ハラ　ヒコ　原房親　姓は藤原氏字は彥二郎織田信長に仕ふ天正三年越前大野郡を賜はり二萬石を食む七年冬命を受けて荒木村重の一族を斬る十一年二月柴田勝家の先鋒と爲り出で丶賤岳に陣す四月佐久間盛政の殿となり退く會〻秀吉の軍進み到る房親盛政に謂ひて曰く請ふ捷戰疎雄を決せよ我先驅たらんと聽かず盛政終に虜に就く房親其の終る所を詳にせず（野史）

ハラ　ホウザン　原鳳山　土佐の儒者なり名は喰字は大短、琢左衛門と稱す天明七年歿す年七十一傳書注解、武功日訣、兵器圖說、鳳山詩文集等の著あり（諸家著述目錄）

ハラミイシ　チュウヤ　孕石忠彌　武田家の足輕大將にして武功の士なり常に子弟に訓へて曰く武將に謂ふ大智は智ならず大謀は謀ならず大勇は勇なちず大利は利ならず天下を利する者は天之を啓き天下を害する者は天之を阻づ天下は一人の天下に非ず天下の天下なり我一人にして利德を收めんと爲すべからず我が部下の士卒は我と一身一體なり各〻の功勞は即ち我の功勞なり我の功勞は即ち主公の功勞なり而して天下太平に治まらば吾〻の功勞遂に天下太平の基となる則ち是れ天下の天下たる所以なりと一日宿直に當る偶〻伊豆の山民訪問の次で其國諸所の要害を話す忠彌近年に於て北條家と豐を啓くの料察ぜるを以て之を詳知せんと欲し覺えず傾聽して昇を移し時過ぎて直廬に赴く交代人其の遲きを詰る忠彌答ふるに其の事を以てす主君之を傳聞して大に怒り急に甘利左衛門に命じ之を殺さしむ其日忠彌佛寺に詣る甘利の部兵跟して寺內に亂入す忠彌呼びて曰く我れ屋形に對し寸點の野心なしといへども今に迨び逃路なし設ひ陳謝の道ありとも一旦忌嫌を蒙りては終身心に懷からず一死以て寃を伸べんと多勢に當て快戰す其の兵傷を受ざるなし是に於て徐かに佛堂に入り腹を劃して死す山民數日を經て其の事を聞き痛嘆して曰く彼人を以て當直の時間を愆り恨を含んで死せしめしは皆是れ我罪なり豈に隱忍坐視して生を偷むに堪んやと寺に抵て其の死所を泣拜して又屠腹して死す（豪雄言行錄）

ハラミイシ　モトヤス　孕石元泰　姓は藤原氏初め主水佐と稱し後和泉守と改む駿河の人なり父を讃岐守光尙と云ふ突出今川家に臣屬す義祖原左衛門尉忠泰遠州原田庄を云ふ領す玄孫名は忠賴といふ其弟高忠別に始て孕石氏と稱す蓋し庄內に孕石村あるに因てなり高忠より父讃岐守光尙に至り子孫相續き兄弟相傳へて七世と爲す光尙義元を助けて駿府を屠り方上葉梨城を陷る其の功居多なり義元賞するに足洗田を以てす光尙文武備はり最も書を善くす元泰能く志節あり義元

之を奇とし偏字を賜ふ義元既に亡ぶるに及んで子氏眞立つ用ふること能はず武田信玄に事ふ信玄委するに重事を以てす地を略し城を攻むる皆徙はざるはなし驃足を得ると謂ふべし駿州蒲原の役先登と稱し清水新七郎を擊ち殺し勇名一時に聞ゆ信玄甚だ其の功を奬とし勳を書し賞を行ふ後勝頼の指麾に應じ岡部丹波守元信と遠州高天神を守る三州の兵之を攻むる三年相持す天正五年の春大軍城下に蟻集し牢く三重の木柵を築て急に之を攻む既に援道要截す二人相謀て曰く此れ吾曹節に死するの時なりと遽に士卒を麾いて之を擊つ元泰堅を被り利を執り殺傷無數既に柵二重を破り元信戰死す元泰髀を傷つけ自殺するに遑あらずして虜と爲る家康其の器用を愛惜し宿昔の嫌む所を訊はず而して其の死を宥し以て幕下に仕へしめんと欲し乃ち大久保忠世をして其の旨を曉さしむ元泰頓首し答へて曰く神君の恩東山より高く蒼海より深し然れども臣の義勝頼に負くに忍びず願くは早く死を賜へば寧ろ死すとも朽ちずと遂す而して子孫盛り服せず今日の事何ぞ日を曠くするを得に元泰請ふなり三月二十二日城陷る元泰の節に死するは二十三日なり勝頼元泰の闕元虔に命じて父の職を繼がしめ給賞故の如し相州小田原の役元成井伊直政に屬し亦戰功ありしと云ふ（事實文編未定稿）

ハラ　ミチタ　原道太　勤王の志士なり諱は盾雄筑後久留米藩の卒なり幼時より大志を抱き皇室の式微を歎き歴〻同藩眞木保臣の謫所を訪ひ皇室挽回の事を議せり時勢漸く逼迫するに及び文久二年二月同志數名と亡命し薩摩の有志數名も亦此に集る依て同船して大阪に出で島津邸に入る幾もなく島津泉州着京したれば諸國有志は此機を以て事を擧げんとて纏々京都に上りしが偶〻伏見寺田屋の事起りて各藩の士にして京都に在る者は悉く大阪に去る可しとの命下りたれば道太も同藩士十人と共に涙華の藩邸に退きしに森久屋順藏の家に預けられ三箇月を經て國に送られ一室に蟄居申付けらる翌三年二月特旨を以て罪を免され四月禁闕親兵仰付けらる七月朝命を以て國に歸り翌八月再上京の途中廟議一變七卿西竄の事を聞き防州三田尻に至り七卿に隨從す三田尻滯在中七卿の内意を以て薩州に赴き具に親苦を嘗めて使命を完ふす元治元年甲子七月幕府の苛政を憤り毛利家の赤心を訴へんが爲め長藩の老臣國司信濃を初め眞木和泉其他諸藩の有志等と京都に赴きしが同月十九日の變となり道太槍組の先鋒として奮戰したるも遂に重傷を負ひ鷹司邸に退きて切腹し て死せり年二十三なり明治三十一年七月朝廷其の忠志を追賞して特に從四位を贈らる（甲子殉難士傳、殉難錄稿）

ハラ　モトトキ　原元辰　赤穂四十七士の一人なり總右衞門と稱す赤穂侯淺野長矩に事へて足輕頭となり三百石を食む深秘筐底錄に云く初め近江侯京極氏に仕ふと長矩に從ひて江戸に在り會〻變作る元辰部卒を率ゐて詔使館の什器を收む事倉卒に出づ衆皆な愕錯す元辰從容指麾舟を道三橋に聚めて尸を巡らすに頃刻にして擧はる觀るもの賞す即夜馳せて赤穂に長矩の死を告ぐ父大石良雄に從ひて城中に會議す大野九郎兵衞異議を建つ元辰進みて曰く闔座大石氏の議に服す而して子獨り服せず今日の事何ぞ日を曠くするを得ん子宜しく座を去るべしと聲色俱に厲し大野懼れて起ち荷ふ國に難あれば死して以て之に報ずるは固より其の分なり汝ち宜く勇を奮ひて報ずべし万一節を失はゞ吾れ復た汝を見ず元辰曰く機事密を尚ぶ故に大石氏と相議す至親と雖ども敢て漏泄せず是を以て告げず見の悲む所以は母既に老いて見侍養を終ふる能はざるのみと言ひ訖りて泣く母怒りて曰く忠孝爾ち全きを得ず汝ち君が仇を報ぜんと欲せば安ぞ我を以て意となさんや宜しく速に行くべしと元辰乃ち京師に赴く會〻良雄病て死せり年二十三なり明治三十一年七月朝廷其の忠志を追賞して特に從四位を贈らる（甲子殉難士傳、殉難錄稿）

ハラ　モトトキ　原元辰　赤穂四十七士の一人なり總右衞門と稱す赤穂侯淺野長矩に事へて足輕頭となり三百石を食む深秘筐底錄に云く初め近江侯京極氏に仕ふと長矩に從ひて江戸に在り會〻變作る元辰部卒を率ゐて詔使館の什器を收む事倉卒に出づ衆皆な愕錯す元辰從容指麾舟を道三橋に聚めて尸を巡らすに頃刻にして擧はる觀るもの賞す即夜馳せて赤穂に長矩の死を告ぐ父大石良雄に從ひて城中に會議す大野九郎兵衞異議を建つ元辰進みて曰く闔座大石氏の議に服す而して子獨り服せず今日の事何ぞ日を曠くするを得ん子宜しく座を去るべしと聲色俱に厲し大野懼れて起ち荷ふ國に難あれば死して以て之に報ずるは固より其の分なり汝ち宜く勇を奮ひて報ずべし万一節を失はゞ吾れ復た汝を見ず元辰曰く機事密を尚ぶ故に大石氏と相議す至親と雖ども敢て漏泄せず是を以て告げず見の悲む所以は母既に老いて見侍養を終ふる能はざるのみと言ひ訖りて泣く母怒りて曰く忠孝爾ち全きを得ず汝ち君が仇を報ぜんと欲せば安ぞ我を以て意となさんや宜しく速に行くべしと元辰乃ち京師に赴く會〻良雄病て死せり年二十三なり明治三十一年七月朝廷其の忠志を追賞して特に從四位を贈らる（甲子殉難士傳、殉難錄稿）

ハラ　モトトキノ　ハハ　原元辰母　烈婦なり其の氏名を失す赤穂既に滅び元辰未だ國を去らず嘗て書を致して京師に來り謀議せんことを請ふ元辰婦人を以て拒む而して自殺す（赤穂四十七士傳）

ハラヤマツミノ　カミ　原山津見神「カグツチ」

ハリツ　破笠「ヨガハリツヨウ」

ハリツシ　破笠子「カウゲツ」

ハリマ　イナヒ　オホイラツヒメ　播磨稻日大郎姫　景行帝の后なり稚武彦の女、景行帝二年三月立て、皇后と爲す櫛角別王、大碓皇子、小碓皇子を生む五十二年五月薨ず（大日本史）

ハリマ　カウシ　播磨講師「ヱケイホウシ」

ハリマ　カドクニ　播磨角國　播磨の鍛工なり安頼の子寛仁中の人にして殺する時年六十餘（金工便覽）

ハリマナイジ　播磨內侍　伏見帝の掌侍なり後衡の女其の姓氏を詳にせず播磨內侍と稱す伏見帝之に幸し尊彥親王を生む（大日本史）

ハリマ　ホツケウ　播磨法橋　僧なり畫圖を工みにす建武五年法隆寺の太子の傳を修補す其の歿年詳かならず（法隆寺記、續本朝畫史）

ハリヤ　セウミ　針屋紹味　茶人なり堺津の人家藏の茶入圓坐と稱するものあり千利休の弟子にして茶事を以て世に名あり（茶人系傳全集）

ハリヤ　ソウジツ　針屋宗實　茶人なり千利休に學びて茶道を能くす堺津の人（茶人系傳全集）

ハリヤ　ソウシュン　針屋宗春　京師有名の茶人なり半隱齋と號す利休と同時の人なり

ハリヤ　ソウマル　針屋宗丸　茶人なり千利休に學びて茶道を能くせり堺津の人（茶人系傳全集）

ハリヤ　ソウワ　針屋宗和　茶人なり千利休に學びて茶事を能くす堺津の人（茶人系傳全集）

ハルアキ　春明「ナルカハハルアキ」

ハルアキ　春明「カウノハルアキ」

ハルアキラ　治劒　長門の刀匠にして應安年間の人或は云玉德比の人なりと（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ハルアキラ　治劒　長門の刀治二王の流にして慶安年間の人（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ハルエ　ワウ　春枝王　左京の人、忍熊親王の後なり父は仲嗣親王從五位下たり春枝少にして嵯峨帝に仕ふ人となり謙遜にして吏才あり深く佛を好む承和の初め越後介たり政績頗る著る十年從五位下に叙し能登守に任ぜらる田野荒廢して百姓疲弊す春枝心を悉して經理す職に蒞む數年にして民庶歸忌し部內大に安んず仁壽中、中務少輔、正親正を歴て齊衡中從五位上に進み下總守と爲る病を以て任に赴かず隱居して痾を養ふ詔して節祿位祿を給する等は一に見任に准ず三年卒す年五十九子岑王承和中姓を清瀧眞人と賜ふ（大日本史）

ハルカゲ　春蔭　**スズキハルカゲ**」

ハルカゼ　春風　弘安年間の鍛工にして下野に住し又相模に住す或は云春盛の子にして貞治比の人なりと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

ハルカド　春門「ムラタハルカド」

ハルカハ　ゴシチ　春川五七　浮世繪師なり神谷氏蓬洲と號す江戸小石川の人其の師詳ならざれども俳優の似顔を畫きて發行せり又天絲奇遇口八町なるに會し多く繪事を問ふ又家に明の翟雲梓の畫帖一册を藏す又此の法に倣ふ實性疎脫にして規則を守らず酒は一滴口に入れずと雖も能く酒中の趣を知り又た能く酒人と交る詩あり曰く朝出山雲夕宿雲、山雲無ㇾ意我如ㇾ雲、山雲堆裏雲邪我、綱見雲容一政亦雲、天保十年四月二十五日八十一にして卒す時に谷文晁畫名大に振ふ南湖亦聲價あり當時南湖文晁を幷て天下の二老と稱す又た俳句の自讃畫に「花は今芳野はみれど隅田川」（今古雅俗石亭雜談、扶桑畫人傳、鑑墓所一覽）

ハルカハ　シウテフ　春川秀蝶　畫工なり延享年間の人芝愛宕山祇園會の額深川八幡境內の圖の額此の人の筆なり（浮世繪類考別本）

ハルカハ　モロノブ　春川師宣　浮世繪師なり繪本列仙畫傳を畫く寶曆頃の人（浮世繪類考別本）

ハルキ　サンオウ　春木三應　捕花家なり京都小鹽村の人世〻醫を業とす性頗る花卉を愛し邸中の花壇四時花の絕ゆることなかりしと云ふ谷川延林の孫女を娶し緣由を以て晚年花道の傳統を繼ぎ餘閑には人を集めて之を授る貞享四年近隣火を失し不幸にして傳ふる處の古器記錄悉く灰燼に歸し一時古流の記錄全く堙滅せり後漸く昔て門人に授けしものを寫し散逸せるを集めて今日傳ふる處の者あるを得たり享保四年十二月年七十四にして寂す法名立松院賢應宗峯居士と稱す（千羽喜三氏贈）

ハルキ　ナンクワ　春木南華　畫家なり南溟の男名は鱗字は南華通稱は鬳之助號畫翁又た烟波釣徒と號す慶應二年六月十七日歿す（續墓所一覽）

ハルキ　ナンコ　春木南湖　畫家なり名は鯤字は子魚烟霞釣叟と號す通稱は門彌曾て上野國に遊ぶの日途中乍ち數人ありて路を遮る皆な破衣垢裝或は粗或は素稞便輿を携へて迫りて之に乘らしむ南湖思へらく是れ必ず山賊なりと然れども是を避く可らず暫く其の爲す所に任す既にして山林の中に到れば林中に甍を展べ筆硯を連れて畫をかくべき設あり衆皆な頭を垂れて曰く我が翟先生の盛名を聞く久しだれども馬夫奥丁の輩にして迎へ接するの席なく又た潤筆の資なし今斯の如くするは眞に先生の揮寫を冀ふにあるのみと南湖意始めて解く曰く余は元藝に遊ぶもの揮毫何の勞かあらんと轍ち毫を採りて畫を作り衆に與ふ終に馬夫は馬を牽き奥丁は輿を舁ぎて道を送る十餘里其の揮寫の謝をなすと云ふ南湖の畫信州長野四村某之を藏す正に奥丁の爲に林中に揮寫せる圖なり詩も亦た記せり南湖の主雪齋增山侯曾て南湖の爲に漫游の資を與へ以て京阪及長崎に游ばしむ南湖蕉窗堂の師と又清客費四湖に會し多く繪事を問ふ又家に明の翟雲梓の畫帖一册を藏す又此の法に倣ふ實性疎脫にして規則を守らず酒は一滴口に入れずと雖も能く酒中の趣を知り又た能く酒人と交る詩あり曰く朝出山雲夕宿雲、山雲無ㇾ意我如ㇾ雲、山雲堆裏雲邪我、綱見雲容一政亦雲、天保十年四日二十五日八十一にして卒す時に谷文晁畫名大に振ふ南湖亦聲價あり當時南湖文晁を幷て天下の二老と稱す又た俳句の自讃畫に「花は今芳野はみれど隅田川」（今古雅俗石亭雜談、扶桑畫人傳、鑑墓所一覽）

ハルキ　ナンメイ　春木南溟　畫人なり名は秀熙字は敬一後ち名は龍字は子龍と改む南溟は其の號又耕雲流者と號す通稱は卯之助南湖の男、父の畫法を嗣ぎて山水花鳥を能くし時に稱せらる明治十一年十二月十一日歿す年八十四（扶桑畫人傳、續墓所一覽）

ハルキ　ヨシアキ　春木義彰　元奈良某寺の士にして文久三年伴林光平、平岡武夫等が中山侍從を擁して大和に勤王の擧を起せしことを聞き感奮して京攝の間に出で大に四方勤王の志士と交り後鷲尾侍從の志士を率ゐて高野山に據るや義彰は大阪に在て軍資糧食の調達に盡力し戊辰の役には先づ錦旗護衞の任に當り後軍務係兼秘書の職を以て總督の幄幕に參ず維新の後は殆んど全く司法の官に在り累進して判事東京控訴院長に至り三十六年を以て退職となり貴族院議員に任ぜられ從二位勳二等に上る三十七年十二月十七日病を以て逝く

ハルクニ　春國　一に治國に作る山本孫右衛門尉と稱す攝津の刀匠にして寛文年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ハルクニ　治國　鈴木八郎と稱す攝津大阪の刀匠にして文政嘉永年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ハルクニ　治國　攝津の刀匠にして弘化嘉永年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ハルクニ　治國　攝津に住す新刀の鍛工にして八幡北衛治國と號す或は云井上眞改の門人にして惣兵衛と稱し大阪に住す寛文天和年間の人なりと（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ハルクニ　治國　藤原氏上總大掾と稱す肥前の刀匠にして忠國の門人寛文年間の人（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ハルクニ　治國　肥後石貫の刀匠にして天文年間の人（古今鍛冶銘早見出）

ハルコ　ナイシンワウ　治子內親王　後光嚴の皇女なり柳殿內親王と稱す

ハルサト　春鄕「ムラタハルサト」　相州の刀治にして天文年間の人（古今鍛冶銘早見出）

ハルシゲ　春重　備前長船の刀匠にして天文年間の人（古今鍛冶銘早見出）

ハルシゲ　春重　備前長船の刀治にして天文年間の人（古今鍛冶銘早見出）

ハルスケ　春祐　備前長船の刀治にして天文年間の人（古今鍛冶銘早見出）

ハルズミ（ユシタダ）　春澄善繩　字は達本姓は猪名部遲、伊香我色乎命の後なり伊勢員辨郡の人達官の後移りて左京に隸す祖は財麻呂父は豐雄、善繩幼にして明慧、骨格非常なり財麻呂之を奇とし意を加へて撫育し專を傾けて惜む所なし嗣冠に學に入り手卷を釋てず閱覽する所多く口誦す博洽多通識思に妙に明敏人を兼ぬ時の學者能く及ぶ所なし天長の初め及第して俊士に補せらる四年常陸少目と爲り秩俸を以て學費に充つ五年姓を春澄宿禰と賜ひ後朝臣と改め俊士の號を停めて文章得業生に補せらる七年對策す詞義甚だ高し式部省評して之を丙第に處る是の歲春內記闕く夏帝善繩を擢んで少內記に補す尋で大內記に轉じ從五位下を授けらる十年東宮學士と爲る仁明帝位に即くに及び攝津權介を兼ぬ承和中兼但馬介に遷り從五位上に進む皇太子廢せらるゝに及び善繩學士を以て周防權守に左遷せらる十年文章博士に遷り後漢書を大學に講ず解釋流通滯ふる所なし諸生疑を質すもの皆惑を解く得尋で備中介を兼ぬ十四年帝莊子の賁宴を設く是より先き帝莊子を善繩に受く是の日善繩を清涼殿に引き酒を賜ひて弟子の禮を執る嘉祥の初め正五位下を授けられ備中守を兼ぬ刑部大輔に遷る明年詔を奉じて國史を修む三年晉書を讀ず帝親ら受讀す天安元年伊豫守兼爲り二年從四位に進む良觀の初め參議に任ぜられ式部大輔と爲り正四位下に進み播磨權守を兼ぬ又近江守に遷る十一年國史成りて之れを上る十二年讀岐守と爲る疾病あり詔して從三位を授く時に太政大臣冥房直廬に在り朝服を脫し賜て其の身に加ふ時人之を榮とす薨ずる年七十四善繩性周謹愼朴所長を以て人に逃に相輕んじ短長口に絕たず弟子亦門戶を立てゝ常に恬退して門徒を謝遣し終に諧謔の及ぶ所なく人或は云元慶曆應年間の人なりと（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ハルツグ　治繼　備前長船の刀匠にして天文年間の人（古今鍛冶銘早見出）

ハルツグ　玄次　備前長船の刀匠にして應永年間の人或は云延文年間の人なりと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

ハルツグ　玄次　備中青江の刀治にして弘安年間の人或は云次眞の子にして天福弘長年間の人或は善次の子なりと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

ハルツグ　張次　一名眞信備中青江の刀匠にして寶治年間の人或は云但次の子にして建保承久年間の人なりと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

ハルツナ　晴綱　周防二王派の刀匠にして永仁年間の人或は云清長の子にして承元比の人或は一名清光と云と（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

ハルツナ　流綱　甲斐府中の刀治にして利兵衛と稱す享保年間の人（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ハルニハ　春野「ムラタハルノ」

ハルノ　晴信「カノシウセン」

ハルノ　晴信　カノトウエキ　甲斐の刀匠にして天文年間の人（古今鍛冶銘早見出）

ハルノ　晴信

ハルノ　春信　イケダリヤウミン

ハルノ　春信　スズキハルノブ

ハルノ　春信　ガクテイキウサン

ハルノヤ　ウメマロ　春甅舍梅麻呂　江戸の小說家なり天保時代の人、通稱小山平吉後平七と改む號春亭、梅舍、春鳥、梅園等の別號あり墨川亭雪麿の著あり（諸家著述目錄）

ハルツグ　春次　備中の刀匠にして延慶年間の人なり或は云次依の子にして永仁比の人又云文和比の人と（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考）

ハルツグ　春繼　備前長船の刀匠にして天文年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ハルツグ　治次　備中の刀匠にして正平年間の人或は云元慶曆應年間の人なりと（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ハルツグ　治繼　備前長船の刀匠にして天文年間の人（古今鍛冶銘早見出）

ハルツグ　玄次　備前長船の刀匠にして應永年間の人或は云延文年間の人なりと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

ハルツグ　玄次　備中青江の刀治にして弘安年間の人或は云次眞の子にして天福弘長年間の人或は善次の子なりと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

ハルツグ　張次　一名眞信備中青江の刀匠にして寶治年間の人或は云但次の子にして建保承久年間の人なりと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

ハルツナ　晴綱　周防二王派の刀匠にして永仁年間の人或は云清長の子にして承元比の人或は一名清光と云と（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

ハルツナ　流綱　甲斐府中の刀治にして利兵衛と稱す享保年間の人（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ハルハ　サダノブ　春原定信　國學者なり民部の孫字は子成桂陰と號す家傳の神道を奉じ皇典の蘊奧を極め學習院の講師に任ぜらる世に出雲路大和守と稱するこれなり維新の際京都府權大屬に補せられ大學中學の教官に任ず明治十九年十月十五日歿す年七十五洛東田中百萬遍に葬る

ハルバラ　ミンブ　春原民部　國學者なり名は信直八鹽道翁と稱す氏は板垣或は出雲路と稱す京師下御靈社の神主なり人となり朴實にして其師山崎闇齋の說を確信し專ら神道を唱ふ闇齋門の神學の第一と稱す玉木葦齋等皆其門下に出づ元祿十六年三月二十日歿す年五十四洛の成圓寺に葬る

ハルヒト　シンワウ　溫仁親王　光格帝の第三子なり母は新清和院寛政十二年正月生る若宮と稱す三月親王となり四月に薨ず成不動院と號し泉涌寺に葬むる（野史）

ハルヒト　ワウ　治仁王　榮仁親王の長子なり應永十五年十二月加冠す二十四年二月十一日雨下る有近衛中將源長資來り訪ふ偶語少し時ありて治仁中風を發し明日遂に薨ず年三十七父の後を承け未だ數月に滿たず人これを嘆惜す僧絕海號を授けて松座景衍と曰ふ三月葬光院と號す法名を大範衍公と曰ふ（野史）

ハルヒロ　玄弘　古刀の鍛工大和千手院派にして添上郡に住す（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ハルフジ　シャウデン　春富士正傳　京師の人家世〻醬油を販ぐを以て業とす正傳性淨瑠璃曲を好み終に業を鄕ちて其の道に入る寛延寶曆の間江戶に下り平傳節と稱して一時世に行はる正傳初め傳兵衛と稱す正傳と呼ぶは其實醬油を販ぐを以ての故なり（聲曲類纂）

ハルフヂ　サスケ　春藤佐助　小柄、笄の彫師なり京師今出川室町四へ入る北側に住す（裝劍奇賞）

ハルマサ　春政　京師の人、鐔見小兵衛の父なりと云ふ蒔繪の名手にして其の名高し（裝劍奇賞）

ハルマチ　春町「コヒカハハルマチ」

ハルマチ　春滿「カダハルマロ」

ハルマロ　春海「ムラタハルミ」

ハルミ　春水「キタムラシュンスキ」

ハルミ　春道　ムラタハルミチ

ハルミチ　春道　石道氏にして武藏の刀治なり

ハルミチ　ツラキ　春道列樹　新名宿禰の名は信直八鹽道翁と稱す氏は板垣或は出雲路と稱す京師下御靈社の神主なり人となり朴實にして其師山崎闇齋の說を確信し專ら神道を唱ふ闇齋門の神學の第一と稱す玉木葦齋等皆其門下に出づ元祿十六年三月二十日歿す年五十四洛の成圓寺に葬る

ハルミツ　春光「ゴトウセイジヨウ」（六世）　備前長船の刀匠にして延德年間の刀治にして慶長年間の人（古今鍛冶銘早見出）

ハルミツ　春光　十耶左衛門尉と稱す備前長船の刀治にして慶長年間の人（古今鍛冶銘早見出）

ハルミツ　春光　備後の刀治にして應永年後の人（古今鍛冶銘早見出）

ハルミツ　春光　備前長船の刀治にして應永年間の人或は云治守の子にして正長比の人なり或は信守の子なりと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

ハルミツ　治光　次耶兵衛尉と稱す備前長船の刀治にして五世勝光の二子享祿年間の人或は云文龜大永年間の人にして次耶左勝の子春光の父なり又云信光の門人にして春光の父眞治比の人なりと（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考）

二世治光は十耶左衛門尉と稱す次耶兵衛尉治光の子姓は藤原（古今鍛冶銘早見出）

ハルムラ　春村「コニシシュンソン」

ハルムラ　春村「センサウアンハルムラ」

ハルモリ　春盛　下野の刀治にして建長年間の人又相模越後に住す或は云春風の父にして正應建武年間の人或は弘長比の人なりと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

ハルモリ　春盛　越前子代鶴派の刀匠にして寛永年間の人（古今鍛冶銘早見出）

ハルモリ　春盛　平氏にして豐後高田の刀匠嘉吉年間の人或は云長守の門人なりと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

ハルモリ　治守　姓は平豐後高田の刀匠にして文龜年間の人（古今鍛冶銘早見出）

ハルモリ　治守　備前長船の刀匠にして應永年間の人（古今鍛冶銘早見出）

ハルモリ　治盛　姓は平豐後高田の刀匠にして永正天文年間の人或は云長行の門人にして鎭種の子天正比の人又は永祿比の人なりと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考）

ハルヤマ　オトヒコ　春山弟彥　蹈路藩の國學者なり前田夏蔭の門人弘化五年勝麟太耶等に從ひて航海測量の術を學び又高畠眉山に和蘭語學を學ぶ文久二年秋元安民の後任として藩校の教授となる明治前長船の刀治にして天正年間の人（古今鍛冶銘早見出）

ハルミツ　春光　十耶左衛門尉と稱す備前長船の刀治にして慶長年間の人（古今鍛冶銘早見出）

ハルミツ　春光　備前長船の刀匠にして延德年間の人又云治光の子にして明德比の人又云享祿年間の人なりと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

ハルミツ　春光　備前長船の刀匠にして文龜年間の人（古今鍛冶銘早見出）

ハルミツ　春光　新十耶と稱す備前長船の刀治にして享祿年間の人（古今鍛冶銘早見出）

ハルミツ　春光　左衛門尉と稱す備前長船の刀治にして弘治年間の人或は云長船左衛門七耶と稱す天文龜年間の人なりと之を初めの十耶左衛門春光の二世（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ハルミツ　春光　十耶左衛門尉と稱す備前長船の刀治にして元龜年間の人（古今鍛冶銘早見出）

ハルミツ　春光　五耶左衛門尉と稱す備前長船の刀治にして元龜年間の人（古今鍛冶銘早見出）

ハルミツ　春光　孫一耶と稱す備前長船の刀治にして元龜年間の人（古今鍛冶銘早見出）

ハルミツ　春光　左衛門七耶と稱す姓は藤原備前長船の刀治にして天正年間の人（古今鍛冶銘早見出）

ハルミツ　春光　十耶左衛門尉と稱す備前長船の刀治にして慶長年間の人（古今鍛冶銘早見出）

ハルミツ　春光　備前長船の刀匠にして延德年間の人又云治光の子にして明德比の人又云享祿年間の人なりと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

ハルミツ　春光　備前長船の刀匠にして文龜年間の人（古今鍛冶銘早見出）

ハルミツ　春光　新十耶と稱す備前長船の刀治にして享祿年間の人（古今鍛冶銘早見出）

ハルミツ　春光　左衛門尉と稱す備前長船の刀治にして弘治年間の人或は云長船左衛門七耶と稱す天文龜年間の人なりと之を初めの十耶左衛門春光の二世（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ハルミツ　春光　十耶左衛門尉と稱す備前長船の刀治にして慶長年間の人（古今鍛冶銘早見出）

ハルミツ　春光　五耶左衛門尉と稱す備前長船の刀治にして元龜年間の人（古今鍛冶銘早見出）

ハルミツ　春光　孫一耶と稱す備前長船の刀治にして元龜年間の人（古今鍛冶銘早見出）

ハルミツ　春光　左衛門七耶と稱す姓は藤原備

八年大阪師範學校教師を命ぜられ十一年姫路中學校教師を命ぜらる三十二年四月十三日歿す年六十九著す所日本文典あり(矢内正夫氏寄)

ハルユキ 春行 了戒と冒稱す山城の刀匠にして應永年後の人なり(古今鍛冶銘早見出)

ハルユキ 春行 備前長船の鍛工にして天文年間の人なり(古今鍛冶銘早見出)

ハルユキ 春行 波平を冒稱す薩摩の刀匠なり或は云ふ天文年間の人と(古今鍛冶銘早見出)

ハルユキ 治行 藤原氏豐後高田に住す古刀の鍛工なり或は云弘治比の人と(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考)

ハルユキ 治行 薩摩谷山波平派の刀匠にして天文弘治年間の人(古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考)

ハルユキ 治行 一に春行に作る薩摩谷山波平派の刀匠古刀の作者なり或は云正應比の人又云安家の子にして建治弘安年間の人なりと(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考)

ハルヨシ 春善 相摸の刀匠にして天文年間の人なり(古今鍛冶銘早見出)

ハルヨシ 治吉 筑前の刀匠にして秀貞の子至德比の人彫物上手なり(本朝鍛冶考)

ハルヨシ 治吉 肥前平戸の刀治にして應永年間の人或は云三池の一族にして後に左貞秀の門人と爲ると(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考)

ハルワカ 春若 假面工なり德若の甥にして丹波守といふ應永年中の人なり一説に春若太夫といふ假面六作の一なり(假面譜)

ハレウバヨウ 覇陵「スガキハレウ」馬翁「イヂチバヨウ」

ヒ之部

ヒイウビウシャ 飛雄「スズキガコ」微雨舍「ヤライ」

ヒエダアレ 稗田阿禮 天鈿女命の裔なり蘇我蝦夷の亂に古記悉く燼く朝廷諸の舊老を召して口誦を奏せしむ阿禮舍人たり年二十八記憶甚だ強きを以て之を聽かしむ阿禮一たび聽て復忘れず和銅四年に至りて阿禮年六十五朝廷其の卒せんとを恐れ博士太朝臣安麻呂をして阿禮の記憶する所を寫さしむ今の古事記是なり養老四年舍人親王を總戯となし安麻呂及朝臣清人等をして清書せしむ今の日本紀是なり

ヒエノカミ 日吉神 大比叡即ち三輪神及び小比叡即ち地主神(或は曰く國常立尊)を祀る近江國比叡山にあり二十二社の一に列す(古事記に曰く大物主(三輪神)の子大山咋神又の名は山末之大主神近江の日枝山に在すとあり大比叡小比叡は此父子ならん)

ヒオドシリキヤ 緋威力彌 力士なり體軀肥大にして力量人に過ぐ天保七年八月十五日歿す芝二本榎圓眞寺に葬る

ヒガキノウバ 檜垣嫗 筑紫白河の遊女なり歌を善くす太宰大貳藤原興範適〻迷ひて水を乞ふの忘士なり諒は正保繁太郎と稱す土佐國安藝郡羽根村の里正にして元治元年七月清岡道之助等の一擧に加はり遂に捕へられて九月五日同じく奈半利河原に首刎れる年僅に十六明治三十一年七月特旨を以て從五位を贈らる(殉雜錄稿)

ヒガキソウタク 檜垣宗澤 儒者なり業を清郊の門に受く(鑑定便覽)

ヒガキトラヲ 檜垣虎雄 陸軍少兵少佐なり愛媛縣出身にして明治三十七年八月廿四日歩兵第四十四聯隊附として從軍中三十七年八月廿四日旅順要塞盤龍山に於て戰死す戰功に依り勳五等功五級に叙せらる

ヒガキノウバ 檜垣嫗 筑紫白河の遊女なり歌を善くす太宰大貳藤原興範適〻迷ひて水を乞ふの事なりと)巡水を上り且詠じて曰く「年經れば我が黑髪も白河のみづはぐむまで老にける哉」典範之を憐み後ち衣服を贈る歌集に檜垣嫗集あり(平家物語)

ヒカゲヒメ 日影皇女 欽明帝の妃なり宣化帝の女、石姫皇后(欽明帝の皇后)の同母妹なり欽明帝二年三月宮に入り倉皇子を生む(大日本史)

ヒガシイチヂウキン 東一條院「フヂハラタツコ」

ヒガシカウジラウ 東幸次郎 陸軍三等軍醫なり兵庫縣出身にして明治三十七八年日露戰役起るや召集せられて第十師團野戰病院附となり出征し廿八年五月一日清國盛京省「シャーシャンツ」にて病に罹り歸國後三十九年六月廿三日死去す

ヒガシキャウゴクキン 東京極院「フヂハラサダコ」

ヒガシクビ ダジャウダイジン 東久世太政大臣「ミナモトミチヒロ」

ヒガシサンヂウ ウダイジン 東三條右大臣「フヂハラウヂムネ」

ヒガシサンヂウ サダイジン 東三條左大臣「ミナモトツネ」

ヒガシサンヂウノ オトド 東三條大臣「フヂハラカネイヘ」

ヒガシサンヂウキン 東三條院「フヂハラアキコ」

ヒガシサンヂウキン クワンパク 東三條院關白「フヂハラカネイヘ」

ヒガシ シゲヲ 東繁夫 陸軍少兵少尉なり北海道出身にして明治三十七八年日露戰役に於て遼備役より召集を受け第七師團歩兵第二十五聯隊附として戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ヒガシジマ トクザエモン 東島德左衛門 肥前國伊萬里の陶工なり正保年間長崎に赴き支那來舶の總官に學て釉畫彩色の法を得たりしば〳〵試驗して後同國南河原の人柿右衛門(柿右衛門は製陶に巧なる者なり)といふ者と相謀り遂に發明する所あり始めて五彩及び金銀泥を陶器に附着することを得たり支那の錦樣金襴樣の如し世に有田燒といふもの是れなり(工藝志料)

ヒガシ タクシヤ 東澤潟 周防岩國の人名は正純字は崇一、通稱崇一郎天保三年十月生る潟鴻初め二宮錦水に學び後輩學に心醉し後復び儒に歸し遂に王陽明の學を奉ず潟鴻の王陽明學を奉するに至りたるはかつて東遊に當り佐藤一齋の門に入り大橋訥庵と學を論じ吉村秋陽の指導を蒙れるに依るといふ交友に吉村斐山、山田結、莊千里、楠本碩水、並木栗水等あり明治廿四年三月歿す年六十著書には體心錄、覇海飜瀾、儒門證語、傳習錄彙考、近思錄彙考、周易要略、論孟撮說、文章訓蒙、三楠遺規、潟鴻文約其他數種あり子敬治字は順治、正當又南湖の號あり今東京にありて著書及び育英の業に從ふ潟鴻仕途の暇子弟に教授す當時尊王攘夷の論盛んなりしかば亦時事に慨するところあり門人を糾合して必死組を組織す遠近之を聞いて起つもの多し學動稍國憲に違ふものありて遂に桂島に流竄せらる明治維新に至り宥されて歸る後志を仕途に絶ち專ら育英を以て自ら任じ亦國事を謂はざりき

ヒガシニデウキン 東二條院「フヂハラキミコ」

ヒガシバウジャウ カズナガ 東坊城和長 姓は藤原氏參議式部卿秀長の後にして參議大藏卿長清の子なり文明八年二月孤獨を以て穀倉院の學門料を受け十一年四月文章得業生に補せられ十四年十月對策及第す明應三年八月岐翁紹禎に南坊に就きて戒を受け名を宗鳳と稱す五年正月大内記在數の殺さるゝや和長乃ち代て大内記に任ぜらる尋で族人長直、章長、爲學と同く奏狀を上りて敕問を請ふ七年二月紹禎に參禪して道を受け樓竹と號す後ち歴官して權大納言正二位に至り氏長者と爲る子長淳(野史)

ヒガシバウジャウ ナガアツ 東坊城長淳 姓は藤原氏權大納言正二位氏長者和長の子なり永正九年燈燭料學生に補せられ十八年策を獻じ權中納言大藏卿從二位に累進す天文十年任に筑紫に赴き秩滿ちて京師に歸る十六年一月復た九州に赴き明年三月回りて長門の赤馬關を過ぎ暴に病て卒す時に年四十三、子なし權中納言五條爲庸の子爲治を養ひて嗣と爲す(野史)

ヒガシバウジャウ ヒデナガ 東坊城秀長 姓は藤原氏、參議爲長の曾孫治部卿茂長は東坊城の祖とす茂長の二男長綱家を繼ぐ歴任して參議大輔に至る秀長は長綱の長子なり父に繼ぎ參議式部大輔に至り正二位に叙せらる應永十四年を以て辭し十八年八月歿す時に年七十四なり秀長博識を以て世に鳴る其の家乘を迎陽記と曰ふ世に傳はる子長遠(野史)

ヒガシヤマ サダイジン 東山左大臣「トウキンサネヒロ」

ヒガシヤマ テンワウ 東山天皇 名は朝仁、靈元帝の第四子なり母は敬法門院藤原宗子内大臣宗條の女天和三年立ちて皇太子となり四年四月禪を受く時に年十三靈元帝を尊びて太上皇となす四月即位の禮を行ふ元祿十一年九月將軍德川綱吉寬永寺に中堂及び文殊堂を營みて比叡山に擬せんと欲す落成するに至りて天皇親ら瑠璃殿の三字を書して之に賜ふ寶永六年皇太子に讓る是を中御門天皇となす在位二十三年寶永六年崩ず年三十五東山天皇と號す泉涌寺に葬る(野史)

ヒガシヤマドノ 東山殿「アシカガヨシマヘ」

ヒガシヤマドノ 東山殿「フヂハラミチイサ」

ヒガツヨウ 被褐翁「トヨウラヒカツ」

ヒカハミヤウジン 氷川明神 素盞嗚神を祀る鐵河上に居るを以てなり武藏の一の宮にして足立郡大宮にあり日本武尊東征の時之を奉祀す

ヒカミ イラツメ 氷上娘 天武帝の夫人なり内大臣藤原鎌足の女、入りて夫人となり但馬內親王を生む帝の十年正月卒す赤穗に葬る(大日本史)

ヒカミ カハツギ 氷上川繼 鹽燒の次子從四位下に叙せらる延曆元年正月因幡守と爲る其の資大和乙人私かに兵仗を帶びて宮中に濫入す所司捕へて推問す乙人首服して曰く川繼今月十日の夜北門より入て亂を作さんことみ謀る因て臣をして其の叛宇治王を招き以て會期せしむと勅して川繼を召す川繼使至ると聞きて潛かに後門より走る即ち三關を固め大に索むること數日大和葛上郡に捕へらる詔して曰く氷上川繼潛かに亂を謀る事既に發覺す法に據るに極刑に當る其の母不破內親王反逆す近親亦重罪に當る但し鹽燒未だ乾かず刑を論ずるに忍びず川繼は宜く死を免して遠流に處すべし不破內親王並に川繼姉妹を淡路に川繼及び其妻を伊豆三島に流す其他坐せらるゝ者凡そ三十五人後赦に遇ひて歸る大同二年典藥頭に擢んでられ伊豆守に轉ず(大日本史)

ヒカミ シケシマロ 氷上志計志麻呂 鹽燒の長子初め鹽燒不破內親王に尙して志計志麻呂及び川繼を生む事敗るゝに及びて二子母の貴を以て免るゝを得たり景雲三年丹比乙女誣告す縣犬養姉女は內親王と謀りて志計志麻呂を立てんとすと乃ち內親王の屬籍を削りて京外に放ち志計志麻呂を土佐に配す(大日本史)

ヒカミ シホヤキ 氷上鹽燒 一品新田部親王の子なり初め諸王たり天平中從四位下を授けられ正四位下に進み中務卿と爲る事に坐して平城の獄に下り伊豆三島に流され居ること四歲にして召還され明年復爵す寶字元年公卿を議して儲式を議せしむ皆曰く鹽燒當さに立つべしと帝曰く先帝貴むるに無禮を以てす立つべからずと遂に大炊王を立てゝ鼎大子と爲す既にして鹽燒王四位上に進み大藏卿と爲る橘奈良麻呂密かに道祖王、黃文王、安宿王及び鹽燒王を簡び立て以て帝と爲んと謀る事覺れて或は杖死し或は遠流せらる詔して曰く鹽燒王は四王の列に在りと雖も然も謀に會せず亦た告られず唯〻道祖王(鹽燒王の兄)に緣坐し應に遠流に當るべし但し父新田部王は其の心淸明にして朝廷に奉侍す其の門を絶つに忍びず故に罪を免す自今以後宜く忠直を以て朝廷に奉ずべしと二年從三位に進め姓を氷上眞人と賜ふ明年詔して意見を上らしむ鹽燒乃ち奏するあり旨に合ふ禮部信部二卿に累歴して六年參議を拜し美仲麻呂反し鹽燒を奉じて帝と爲す仲麻呂誅に伏し鹽燒も亦斬らる二子あり長は志計志麻呂次は川繼(大日本史)

ヒカルゲンジ ヒカルセウシャウ 光源氏「ミナモトヒカルイヘ」光少將「フヂハラシゲヒキダ アハヂノジョウ」引田淡路掾 京師の人なり木偶を操舞するを以て知らる初め豐臣秀吉の御奏所の侍女於通管て矢刺淨瑠璃姫の事を作り聲者澤角をして之を唱はしむ人學て之を習ふ生佛が平家物語と相類す是に至りて四條東洞院の彫金工某引田を

誘招し木偶を舞はし三弦を鼓して之に和す後陽成帝之を聞き庭に召して之を演ぜしむ因て引田に淡路掾を授けらる傀儡師の世に行はるゝ蓋し此を以て始とす（和漢三才圖會其他諸書）

ヒキダ　キウカウ　匹田九皐　儒者なり名は進庄内酒井侯の臣元文二年十二月歿す（名人忌辰錄）

ヒキダ　クワセン　比喜多戈仙　茶人なり北村道遙の弟子にして茶禮を能くし松齋と號す（茶人系傳全集）

ヒキダ　ゲンタツ　比喜多元達　茶人なり比喜多戈仙の門に入りて茶禮を能くし愈好齋と號す（茶人系傳全集）

ヒキダ　コレマサ　疋田以正　通稱小右衛門神道なり平野神社の祠官某に受く神風記の著あり（群書一覽）

ヒキダ　ショウタウ　疋田松塘　秋田佐竹家の藩士なり諱は定綱後厚綱に改む字は伯杞松塘は其號にして又春風樓、十雪堂とも號す通稱歇ヵ郎、鵬治、八彌、久馬とも云ひ疋田齋定常の嫡子なり故に認名して齋と稱せり幼にして凡ならず長じて器識あり事務に長じ頗る辣腕あり父の職を繼さて執政となり佐竹義和、義厚の二代に歷仕し內治外交共に宜しきを得しめ幕府及外藩との融和を計れるか如き又文化年間北海外寇の時に當り軍務總理として奇功を奏せるか如き當時幕府の士たる額田某と津輕の藩士たる大道寺某と共に天下の三家老を以て稱せらる著書には春風樓吟稿、長堤竹枝、其他若干卷あり天保四年七月卒す年五十五

ヒキダ　ブンゴラウ　疋田文五郎　疋田陰流劍術の祖なり上泉伊勢守に從ひて劍を學び豐臣秀吏に仕ふ一說に曰く文五郎初め小伯と號す上泉の甥なりと其の門に遊ぶもの衆し中に就て山田浮月齋中井新八倩傑の譽一時に鳴る新八晩年禍を寺澤賢高の家に釋き肥前唐津に住せり（武術流祖錄、豪雄百行錄）

ヒキダ　リウタウ　匹田柳塘　秋田藩の執政にして諱は定常字は孝祥通稱は齋柳塘は其號にして又自怡齋詩松館ヵ華とも號す明和二年左竹義敬に出仕し天明元年特に命せられ世子義和の傅となり寛政の始め藩內の銅山衰頽して鑛法絶らざるを慨し率先其事に當り大に銅業の復興を謀れり其他農事に教育に政治に財政に鞠躬盡瘁し一國の憂歎を解めて一身の欣慰となけうる傀儡師の世に行はるゝ蓋し此を以て始とす（和漢三才圖會其他諸書）

ヒキ　ヨシカズ　比企能員　藤四郎と稱す（原注に曰く墨管鈔に能員は阿波の人とあり疑らくは安房の誤りならん今考ふる所なしと）其の世系を詳らかにせず鎌夫掃部允某武藏比企郡の少領と爲る三女あり掃部允既に死す嫗薙髮して尼と爲る世に比企禪尼と稱す能員を養ひて己が子と爲す因て比企氏を冒す禪尼遙かに給糧する二十年頼朝朝ゐ乳養す之を德とす兵を起すに及びて能員常に幕下に在り偕ゝ親近せらる壽永三年源義高の餘黨を信濃に擊つ是歲源範頼に從ひて平家を擊つ頼朝藤原泰衡を擊つに及びて能員宇佐美實政等と別に上野の兵に將として北陸道より越後を經て出羽念種關に出て泰衡の將田河行文秋田致文を斬り略ゝ郡邑を定め遂に頼朝に陸奥に會す明年泰衡の故將大河兼任亂を作す能員東山道の兵に將として擊て之を平らゞ右衛門尉に任ぜられ檢非違使と爲ゝ頼家生るゝに及びて能員の妻を以て乳母と爲す頼朝薨じ頼家立つ能員の女頼家に寵あり若狹局と稱す子一幡を生む建仁中頼家の病篤し政子關西の地頭職を分ちて弟千幡に授く能員憤懣し一騎備役より召集せられ第一師團歩兵第一聯隊附として き急に時政に報ず時政使を遣はし能員を紿きて曰く吾れ佛事を修す請ふ來臨せよと能員謀の泄るゝを知らず將に往かんとす諸子諫て曰く彼に密議あり宜しく輒く往くべからず縱ひ往くとも亦宜しく警備を嚴にすべしと能員曰く我れ若し甲士を從へば衆必らず驚擾して適に嫌疑を招くに足らん況んや彼れ佛事を修す警備何の爲ぞ之を怪まん之を謀る適ゝ政子潛かに之を聽き使を遣はして密かに頼家に告げて將に北條氏を滅さんとす頼家能員を召して之を謀る能員之を紿きて曰く吾れ佛事を修す請ふ來臨せよと能員謀の泄るゝを知らず往く能員曰く我れ若し甲士を從へば衆必らず警備を嚴にすべし稱す竊波の戰に兼光兵三千に將として薩原より平氏の軍を襲ひて之を破る平氏退きて篠原を保つ義仲追ひて安宅に至り遙かに敵營を望み兼光に謂て曰く敵兵幾何ぞ曰く三百に過ぎず其の將誰とかする畠山重能なり義仲曰く是れ關東の精銳汝宜しく先鋒と爲りて之を摧くべしと兼光乃ち兵百五十を簡み魚鱗陣を爲りて直ちに其の陣を衝き敵二百餘を殺し自ら百騎を亡ひて國軍交綏す源行家の義仲に背き石川城に據るや兵五百を率ゐて之を攻て之を拔き首虜七十餘級を獲行家身を擢てゝ走る追ひて紀伊に至る既にして義仲東軍と戰ひて利あらずと聞き俘を放ち兵を斂めて急に京師に還る行きて鳥羽秋山に至り從兵稍ゝ亡げ去る從者纔かに三十騎東軍兼光來ると聞き之を朱雀街道に遮ふ兼光四家に至る兒玉黨源範頼義經に就て兼光の死を宥されんとを請ふ初め法住寺の亂に兼光兵を縱ちて多く公卿宮人を辱しむ故を以て宮人辭を同じくして曰く兼光は義仲の驍將之を活さは必ず後患を貽さんと朝議遂に死に決し義仲及び兼平の首を傳へ京師に徇ふ是に及びて兼光を以て其の後へに從はしめ明日朱雀に斬らる（大日本史）

ヒグチ　キスケ　樋口喜助　陸軍歩兵少尉なり宮城縣出身にして明治三十七八年日露戰役に際し第八師團歩兵第三十二聯隊附として從軍中卅八年三月一日清國盛京省月堡子附近に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ヒグチ　ケイザウ　樋口啓三　陸軍歩兵中尉なり德島縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て後備歩兵第四十三聯隊附として從軍中三十七年十月十二日清國盛京省三塊石山附近に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ヒグチ　ケンザブラウ　樋口謙三郎　陸軍三等軍醫なり群馬縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て隼備役より召集せられ第四軍兵站監部附として從軍中三十八年六月二十八日清國盛京省奉天より鐵嶺に前進の爲め衛生材料梱包輸送の際負傷し歸國療養中三十九年三月二十七日死去す

ヒグチ　ゲンセイ　樋口源清　其藏と稱す筑後上妻郡の人家資富裕にして學を好む其の世々財を納め國用に供するを以て士位に列す寛政七年久留米始めて學校を建つるの議あり源清之を聞き慨然自ら奮ひて其の費を納めんとを請ふ藩侯之を允す明年十二月學校成る命じて明善堂と曰ふ其の費一百八十萬錢皆な源清の納むる所に出づ圖境皆な其の義を稱す不幸にして學校成るの前月を以て病歿す年五十（續近世叢語）

ヒグチ　サイグウ（シンワウ）　樋口齋宮（トシコナイ）　軍歩兵大尉なり「福岡縣出身にして明治三七八年日露戰役に際し第五師團歩兵第二十一聯隊附として從軍中三十七年八月三十一日清國遼陽附近に於て戰死す戰功に依り勳五等功五級に叙せらる

ヒグチ　シウゲツ　樋口舟月　齋師なり大阪島內に住し後ち江戸に移る畫を以て法嗣に叙せらる其の時に根附を彫ることあるに及びて其の技巧妙人を驚歎せしむ（裝飾奇賞）

ヒグチ　ショウエイ　樋口松英　石州流の茶道を學佐美默齋に學びて能くせり後ち昌覺又松阿彌と改む（茶人系傳全集）

ヒグチ　ショウガク　樋口昌覺　石州流の茶人なり初め昌意と號す松英の子一木庵一宗齋の號あり（古今茶人系譜）

ヒグチ　ヂウラウベエ　樋口重郎兵衛　甲州眞庭の人身の丈六尺寛永九年武術上覽の餘齡なり上州眞庭の人身の丈六尺寛永九年武術上覽の時三十九中條五郎兵衛と鬪ふて之に勝つ

ヒグチ　チマタ　樋口千萬太　陸軍歩兵少佐なり長野縣出身にして明治廿七八年日露戰役に於て庶士に列す通稱は喜之助と稱す

ヒグチ　ハンエモン　樋口半右衛門　傳に言ふ狂言作者なり劇場にセリダシを設くるは半右衛門の發明に係ると云ふ（聲曲類纂）

ヒグチ　マサトラ　樋口正虎　劍法家なり信四郎と稱す土佐の人幼にして酷だ武藝を好む年十三試に鳥銃を射て寸的に當り賞賜を受く已に長じて家を其の弟に讓り中村に移住して侯家の卒と爲り俸米四石二口糧を食む此より益ゝ銃及び劍術を研究し並びに師家の印可を得職を奉じて甚だ謹愼族に接して甚だ睦し技を以て後進を教誘して官之を嘉みし擢んで庶士に列す其の劍術に於ける角擊を喜み花法を喜まず論、師家と合はずして歷ゝ之を爭ひ遂に師家の爲に擯斥せらる晚に疾み獲て摹に在ること五年和歌を賦して自ら娛む嘉永元年遂に歿す年七十三（墓表）

ヒグチ・ムネタケ　樋口宗武　和學者なり年間の人なり（古今鑑治銘早見出）

ヒグチ　一葉　樋口一葉　女小說家なり名は夏、德川氏の士則義の七女なり幼より中島歌子に就き國學和歌を學ぶ師に代て弟子を教ふ年十八父を亡ひ家計頗る困む半井桃水に從ひ小說の添創を乞ひ明治廿五年二月始めて關櫻を著はす蓋し生計を助けんが爲なり其の他著はす所の小說濁り江、丈くらべ、われから等あり明治二十九年十一月廿三日歿す年二十五その歌亦觀るべし曰く「閑中雪、長閑にも來啼く軒端の鶯に春を任せて住めるゆかな」「峰殘月、秋霧や外山の峯の朝篝に薄れて殘る有明の月」（一葉全集、半井桃水氏談）

ヒグチ　イツザイ　樋口逸齋　書家なり名は觀之字は子順昌之助と稱す明治十年四月廿一日歿す年六十三（名人忌辰錄）

ヒグチ　イハミノカミ　樋口石見守　樋口流太鼓の祖なり元江州小野澤の郷士なり豐臣秀吉に仕へ（近習頭たり武功あり千石を領す觀世小次郎信光に從て大鼓を善くし紫調楷を許さる諸侯に出入す天正十餘年中に病死す子甚七家康に召され百二十石を賜ふ子孫世々左衛門と稱す（猿樂傳記、石井家譜）

ヒグチ　カネヂ　樋口兼治　陸軍歩兵中尉なり東京府出身にして明治三十七八年日露戰役に於て騎備役より召集せられ第一師團歩兵第一聯隊附として從軍中三十七年十一月二十九日旅順要塞寺見溝西方高地に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ヒグチ　カネミツ　樋口兼光　姓は中原氏信濃權守兼遠の子なり二郎と稱す弟兼平根井幸親樋親忠と俱に義仲に仕て之が爪牙たり世に木曾の四天王と稱す

ヒグチ　イチエフ　樋口一葉　女小說家なり名は夏、德川氏の士則義の七女なり幼より中島歌子に就き國學和歌を學ぶ師に代て弟子を教ふ年十八父を亡ひ家計頗る困む半井桃水に從ひ小說の添創を乞ひ明治廿五年二月始めて關櫻を著はす蓋し生計を助けんが爲なり其の他著はす所の小說濁り江、丈くらべ、われから等あり明治二十九年十一月廿三日歿す年二十五その歌亦觀るべし曰く「閑中雪、長閑にも來啼く軒端の鶯に春を任せて住めるゆかな」「峰殘月、秋霧や外山の峯の朝篝に薄れて殘る有明の月」（一葉全集、半井桃水氏談）

ヒグチ　イツザイ　樋口逸齋　書家なり名は觀之字は子順昌之助と稱す明治十年四月廿一日歿す年六十三（名人忌辰錄）

ヒグチ　イハミノカミ　樋口石見守　樋口流太鼓の祖なり元江州小野澤の郷士なり豐臣秀吉に仕へ（近習頭たり武功あり千石を領す觀世小次郎信光に從て大鼓を善くし紫調楷を許さる諸侯に出入す天正十餘年中に病死す子甚七家康に召され百二十石を賜ふ子孫世々左衛門と稱す（猿樂傳記、石井家譜）

ヒグチ　カネヂ　樋口兼治　陸軍歩兵中尉なり東京府出身にして明治三十七八年日露戰役に於て騎備役より召集せられ第一師團歩兵第一聯隊附として從軍中三十七年十一月二十九日旅順要塞寺見溝西方高地に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ヒグチ　カネミツ　樋口兼光　姓は中原氏信濃權守兼遠の子なり二郎と稱す弟兼平根井幸親樋親忠と俱に義仲に仕て之が爪牙たり世に木曾の四天王と稱す竊波の戰に兼光兵三千に將として篠原より平氏の軍を襲ひて之を破る平氏退きて篠原を保つ義仲追ひて安宅に至り遙かに敵營を望み兼光に謂て曰く敵兵幾何ぞ曰く三百に過ぎず其の將誰とかする畠山重能なり義仲曰く是れ關東の精銳汝宜しく先鋒と爲りて之を摧くべしと兼光乃ち兵百五十を簡み魚鱗陣を爲りて直ちに其の陣を衝き敵二百餘を殺し自ら百騎を亡ひて國軍交綏す源行家の義仲に背き石川城に據るや兵五百を率ゐて之を攻て之を拔き首虜七十餘級を獲行家身を擢てゝ走る追ひて紀伊に至る既にして義仲東軍と戰ひて利あらずと聞き俘を放ち兵を斂めて急に京師に還る行きて鳥羽秋山に至り從兵稍ゝ亡げ去る從者纔かに三十騎東軍兼光來ると聞き之を朱雀街道に遮ふ兼光四家に至る兒玉黨源範頼義經に就て兼光の死を宥されんとを請ふ初め法住寺の亂に兼光兵を縱ちて多く公卿宮人を辱しむ故を以て宮人辭を同じくして曰く兼光は義仲の驍將之を活さは必ず後患を貽さんと朝議遂に死に決し義仲及び兼平の首を傳へ京師に徇ふ是に及びて兼光を以て其の後へに從はしめ明日朱雀に斬らる（大日本史）

ヒグチ　キスケ　樋口喜助　陸軍歩兵少尉なり宮城縣出身にして明治三十七八年日露戰役に際し第八師團歩兵第三十二聯隊附として從軍中卅八年三月一日清國盛京省月堡子附近に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ヒグチ　ケイザウ　樋口啓三　陸軍歩兵中尉なり德島縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て後備歩兵第四十三聯隊附として從軍中三十七年十月十二日清國盛京省三塊石山附近に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ヒグチ　ケンザブラウ　樋口謙三郎　陸軍三等軍醫なり群馬縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て隼備役より召集せられ第四軍兵站監部附として從軍中三十八年六月二十八日清國盛京省奉天より鐵嶺に前進の爲め衛生材料梱包輸送の際負傷し歸國療養中三十九年三月二十七日死去す

ヒグチ　ゲンセイ　樋口源清　其藏と稱す筑後上妻郡の人家資富裕にして學を好む其の世々財を納め國用に供するを以て士位に列す寛政七年久留米始めて學校を建つるの議あり源清之を聞き慨然自ら奮ひて其の費を納めんとを請ふ藩侯之を允す明年十二月學校成る命じて明善堂と曰ふ其の費一百八十萬錢皆な源清の納むる所に出づ圖境皆な其の義を稱す不幸にして學校成るの前月を以て病歿す年五十（續近世叢語）

ヒグチ　サイグウ（シンワウ）　樋口齋宮（トシコナイ）　軍歩兵大尉なり「福岡縣出身にして明治三七八年日露戰役に際し第五師團歩兵第二十一聯隊附として從軍中三十七年八月三十一日清國遼陽附近に於て戰死す戰功に依り勳五等功五級に叙せらる

ヒグチ　シウゲツ　樋口舟月　齋師なり大阪島內に住し後ち江戸に移る畫を以て法嗣に叙せらる其の時に根附を彫ることあるに及びて其の技巧妙人を驚歎せしむ（裝飾奇賞）

ヒグチ　ショウエイ　樋口松英　石州流の茶道を學佐美默齋に學びて能くせり後ち昌覺又松阿彌と改む（茶人系傳全集）

ヒグチ　ショウガク　樋口昌覺　石州流の茶人なり初め昌意と號す松英の子一木庵一宗齋の號あり（古今茶人系譜）

ヒグチ　ヂウラウベエ　樋口重郎兵衛　甲州眞庭の人身の丈六尺寛永九年武術上覽の餘齡なり上州眞庭の人身の丈六尺寛永九年武術上覽の時三十九中條五郎兵衛と鬪ふて之に勝つ

ヒグチ　チマタ　樋口千萬太　陸軍歩兵少佐なり長野縣出身にして明治廿七八年日露戰役に於て庶士に列す通稱は喜之助と稱す

ヒグチ　ハンエモン　樋口半右衛門　傳に言ふ狂言作者なり劇場にセリダシを設くるは半右衛門の發明に係ると云ふ（聲曲類纂）

ヒグチ　マサトラ　樋口正虎　劍法家なり信四郎と稱す土佐の人幼にして酷だ武藝を好む年十三試に鳥銃を射て寸的に當り賞賜を受く已に長じて家を其の弟に讓り中村に移住して侯家の卒と爲り俸米四石二口糧を食む此より益ゝ銃及び劍術を研究し並びに師家の印可を得職を奉じて甚だ謹愼族に接して甚だ睦し技を以て後進を教誘して官之を嘉みし擢んで庶士に列す其の劍術に於ける角擊を喜み花法を喜まず論、師家と合はずして歷ゝ之を爭ひ遂に師家の爲に擯斥せらる晚に疾み獲て摹に在ること五年和歌を賦して自ら娛む嘉永元年遂に歿す年七十三（墓表）

ヒグチ・ムネタケ　樋口宗武　和學者なり通稱主水京都の人國學詠歌を好み製冲の風を慕ふ孫に有職の學に精し（鑒定便覽）

ヒグチ　チカエフ　樋口近江　俳人なり福田風琴子の門人にして江戸五郎兵衛町に住す（俳林小傳）

ヒグラシ　ハチダイフ　日暮八太夫　京都四條河原に淨瑠璃芝居を興行し又說經、說話を善くするを以て當時說經與八郎日暮八太夫と並びて世に稱せらる（聲曲類纂）

ヒクワツヨウ　被褐翁「トヨウラクワイ」

ヒケイサイ　備溪齋「セツシウ」

ヒゲツヂ　鬚繼　亦髮次に作る讖牧の刀匠にして寛文年間の人亦播磨及阿波に住す（古今鍛治銘早見出）

ヒゲツケン　美月軒（初世）「ビセウケン」代々の傳中に在り

ヒゲツケン　コダウ　美月軒古道　美笑流第五世の師なり神官七夕安之丞享保五年四世の門に入り同十八年四月十一日美月軒と號し家元を繼ぐ美月軒の祖なり安永五年十月七日歿す年六十九（美笑軒一茶氏附）

ヒゲノ　ゴザエモン　髭五左衛門　江戸堺町中村勘三郎座の工人なり性粗暴にして常に爭鬪を好み又た賭博に耽ける曾て事を以て江戸を脫し京師に至る居ること數月又た爭鬪を爲し毆數人を殺して江戸に還り潛伏す幾ばくならずして又事を以て上野に逃れ久米吉右衛門に遷る吉右衛門は當時一本木五郎市等と博徒の巨魁を以て其の名地方に聞ゆ因て免るゝを得たり時に藤岡に組布市あり五左衛門出でゝ市に徘徊す偶ゝ博徒數十人路傍に賭場を開て贏輸を爭ふ五左衛門以爲る我れ是の賭錢を奪ひて吉右衛門に與へ以て鄙か舍家に報ひんと乃ち賭場に圍入して爭鬪を挑む一人あり大に其の無情を憤り刀を拔て將に之を斫らんとす五左衛門跳て其腕を捉し首領を搦みて之を地に投ず餘衆之を見て四散す五左衛門乃ち賭錢を奪ひて家に還り悉く之を吉右衛門に致す吉右衛門大に喜て酒を勸めて之に報ふ會ゝ五郎市座に在り共に飲て歡を盡す既にして一人あり後門より來る吉右衛門呼て曰く藤岡の賭

場如何來者曰く亂暴者あり爲めに大に賭場を亂すと此時五左衛門と相面す其の者驚きて曰く貴問の暴行者即ち是奴なりと進み來りて擊つ吉右衛門五郎市も之を援けて突進す五左衛門其の兇を可らざるを度り刀を揮て奮進し接戰すること數十合敵少しく退く五左衛門間に乘じて奔逃一漸くにして明松に至り傍人に問て曰く此の地に博徒の巨魁あるか曰く鷲ノ森に傳右衛門あり能く人を容ると乃ち鷲ノ森に抵り傳右衛門を訪て故を告ぐ傳右衛門慰諭して之を舍藏し直に使を驛に遣て決鬪狀を吉右衛門に贈る吉右衛門大に恐怖して之を以て深く罪を謝す是に於て事遂に解く五左衛門後其の終る所を知らず（日本俠客傳）

ヒゲノ　ムキウ　髭無休　幣間なり頓作口合の上手にして性又義を好む生涯を剃らず故に此の名あり時に助六と云ふ者あり俠客を以て知らる無休助六の爲めに愛顧せられ常に宴に側に侍す助六曾て人と日本堤に相爭ふ無休之を聞き直ちに驅せて助六を助け遂に敵を邵くと云ふ（早見人物故事）

ビケンガヴヨウ　眉間毫翁「タカタケイホ」

ヒコイサセリヒコノ　ミコト　彦五十狹芹彦命　孝靈帝の皇子、母は皇妃倭國香媛なり皇子一の名を吉備津彦命と曰ふ崇神帝の十年九月詔して將軍となし西道に赴かしむ會ゝ武埴安彦反して吾妻田媛と道を分ちて內に向ふ因りて五十狹芹彦を留めて之を討ぜしむ五十狹芹彦吾田媛を大阪に邀へ擊て之を斫り其の餘黨を殲す尋で四道に往きて寒谷を綏撫す六十年七月是より先き武日照命の神寶を祕めて出雲大神宮に在り出雲振根之を掌る是に至て帝之を見んと欲し武諸鵬を遣はして往きて之を求めしむ振根遣ゝ往きて筑紫に在り其の弟飯入根受命神寶を獻ず振根歸りて大に怒り之を殺す是に帝五十狹芹彦及武淳川別を遣はして振根を討たしむ振根誅に伏す初め五十狹芹彦弟稚武彦と共に吉備國を綏撫す後世の人因て吉備津彦神社を備中に建て之を祀る五十狹芹彦に子あり三井根子命と曰ふ景行帝の時葦分國造となれり（大日本史）

ヒコイシ　彦石　面打なり時代詳ならず假面古作八人の一なり（假面譜）

ヒコイチ　彦一　其名國く山城埋忠流の刀匠にして明壽の族四郎に住す寛文年間の人なり（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ヒコイツセノ　ミコト　彦五瀨尊　ウガヤフキアヘズノミコトの長子母は玉依姫父尊崩じて位を嗣ぐ弟カムヤマトイハレヒコノミコト（即神武天皇）と共に議して東北を征す戊午の年河內に至り長髓彦と戰ひ流矢に中る而して尙ほ屈せず既にして紀伊國に至る比ひ遂に創を病みて薨ず（古事記）

ヒコイマスワウ　彦坐王　開化天皇の皇子母は皇妃姪津媛（大日本史）

ヒコクニブク　彦國葺　孝昭帝の皇子天足彦國押人命の三世の孫なり崇神帝の十年武埴安彦其の要吾田媛と與に反を謀る埴安彦山背より、吾田媛大阪より道を分ちて入りて帝京を襲ふ帝彦國葺埴安彦と輪韓河を隔て命じて埴安彦を討たしむ彦國葺埴安彦と輪韓河を隔て軍す埴安彦河に臨みて遙かに彦國葺に謂て曰く汝何故に軍か率ゐて來る曰く汝天に逆ひて無道なり王室を傾けんとす故に王命を奉じて來り討つ埴安彦弓を放て之を射る中らず彦國葺埴安彦の胸を射て之を斃す其の衆潰ゆ斬獲過半なり垂仁の朝大夫となる（大日本史）

ヒコサシリノ　ミコト　彦狹知命　紀伊國の忌部の祖なり天太玉命の臣、日神退窟の時大小の量斤を作り瑞殿を建て笠及び予盾を作りて之を祭る

ヒコザエモン　彦左衛門　京師の木工なり天文二年北條氏綱の爲めに鶴岡八幡宮を造營せし時召して工事をなさしむ當時の名匠なり之を京大工といふ（工藝志料）

ヒゴ　シンシ　肥後進士「タチバナナガヤス」

ウガヤフキアヘズノ　ミコト　彦瀲建鵜茅葺不合尊　彦火々出見尊の子なり父都に還る後母豐玉姫都に來り父に謂て曰く妾の身既に產を將に產せんとすと乃ち急に產舍を設け屋を葺く鵜羽と茅とを以てす未だ了らざるに已に生る故に葺不合と名づく是より先き母尊父尊に告て曰く妾產に臨むとき幸に覗ふなかれと父尊之を怪み竊に覗ふ母尊之を恥ぢ見ず海邊に捨て去る長じて伯母玉依姫を娶り父に謂て位に即く（古事記）

ヒゴ　ニフダウ　肥後入道「タヒラサダヨシ」

ヒゴ　ノブヒロ　肥後信廣　陸軍步兵中尉なり長野縣出身にして明治二十七年日清戰役起るや步兵第十五聯隊第六中隊附として出征中病に罹り十一月三日清國奉天省鼇子窩患者集合所に於て死去す

ヒコベ　ハルナホ　彦部晴直　伊豆守國直入道道光の子なり初め又四郎と稱す後從五位上雅樂頭に叙任す足利義晴より諱の一字を賜はる永祿八年五月十九日三好松永等反し將軍義輝の營を襲ふ晴直將軍に從ひ室町御所に戰ひて死す

ヒコベヱ　彦兵衛　山城の刀匠埋忠吉信な看

ヒコホホデミノ　ミコト　彦火々出見尊　ニニギノミコトの第三子母は吾田鹿津姫なり尊山猟に長ず一日兄ホデリノミコトの釣竿と己の弓矢と相貸して獵す尊一魚を得ず却て釣竿を失ふ兄弓矢を返し且鉤を返さんことを促す尊情を告げ其の鉤を毀て一箕の釣を製し之に償はんと請ふ兄可かず猶故の鉤を貪む尊大に憂ひ海畔に彳む時に鹽土神來りて其の情を問ひ乃ち鉤を得るの方法を告げ小艇を作りて尊を容れ之を潮に泛ず暫くして小島に達す尊乃ち舟を下り井の在る處に到る偶ゝ小婢の水を汲む者に遇ふ共に俱に海神ソダツミノカミの宮に至り其女トヨタマヒメを娶り居ること三年歸らんことを思ふ海神別れに臨みて鉤及滿潮干潮の二瓊を贈る乃ち還りて鉤を兄に返す爾來兄弟和せず傳へ曰く兄屢ゝ暴行を尊に加ふ尊滿潮瓊を出せば水湧て之を溺らす救を乞へば則ち干潮瓊を出して之を救ふ兄終に約して隼人となり世々尊に臣事せんと請ふ尊年五百八十にして高千穗宮に崩ず（古事記）

ヒゴ　ユウキチ　肥後勇吉　陸軍步兵大尉なり鹿兒島縣出身にして明治廿七八年日露戰役に於て步兵第四十七聯隊附として從軍中廿七年十月十二日清國盛京省土門子嶺に於て戰死す戰功に依り勳六等功五

級に叙せらる

ヒゴロノ　マサヒロ　日頃正廣　歌人なり松月庵正徹の門に出づ嘗て歌を詠して曰く「小屋の戶に獨や月の澄ぬらん日頃の独に涙もとめて」と因て人呼びて日頃の正廣と稱す

ヒコヱモン　彦右衛門　其の姓を逸す善く笛を吹くを以て稱を某侯に傳き遂に伶人と爲る性落落伏蕩にして權貴を憚からず故を以て官長の爲めに彈劾せられ未だ幾ばくならずして官を免じ四方に流寓す傳へ云ふ曾て西郊の一窮鄉に卜居す四壁蕭然として蓬蒿人を沒し農夫野人に非ざるよりは未だ曾て相往來せず彦右恬然として其の間に優遊し獨り居ること數月時方に仲秋月色荒涼として風露凄然たり因て其の平生愛する所の笛を出し以て一曲を弄す嘲嘯清透聲林木に震ふ傾耳音を愛する者の如し爾後笛を吹く每に必ず來りて其の側に坐し曲闋ればすなわち乃ち去る此くの如きこと旬餘彦右益ゝ之を奇とす一日戲れに狸に謂て曰く汝音を愛するか果して然らば則ち吾れ汝に吹笛を敎へんか狸欣然として俯伏す敎を請ふ者の如し彦右乃ち心を傾むけて敎導すること旬月にして了はる因て相共に和奏す而して隣人未だ之を知らず一夜彦右獨り笛を弄す曲既に闋りて狸來らず夜半寢に就き幃轉して曉に至る戶外に人あり呼び曰く狸の國に鼎るゝありと彦右走りて之を視る狸則ち死す狸索を帶にして橫笛を掃さむ因て怪みて之を訊ふ其の里人曰く昨夜人の近隣の典舖に入りて笛を盜む者あり家人追躡して之を擊ち遂に其の在る所を失す今にして之を思へば寧ろ此の狸かと彦右惘然として之を圍中に弱むる是より先き一士人の笛を典舖に鬻ぐ者あり狸已に之を知り愛戀して已む能はず以て此の事あるに至る遠近傳聞して皆な其の名手たるを知る後ち某侯復た召して之を祿す初め彦右祿二百石を食む今は則ち三十石に過ぎず侯嘗て伶官を召して大に牧樂を張り彦右をして笛を吹かしむ笛聲低澁して聞く可らず侯大に怒り人をして之を責めしむ彦右對へて曰く臣孺きに高祿を賜はる故に吹笛も亦た之に準ず今は則ち食祿其の半ばに過ぎず臣誣みて其の半音を奏し以て之に答ふるのみと侯大に歎服し轍ち有司に命じて其の薄祿に復せしむ厥の後ち彦右奏する每に笛音期として聊か前日と異なる所なしと其の豪邁自負なる概れ斯の如しと云ふ後ち天壽を以て家に終る（事實文編）

ヒサアキ　シンワウ　久明親王　後深草帝の第六子なり正應二年九月北條貞時惟康親王を廢して久明を迎て鎌倉の主帥とす十月親王となり三品に叙せられ征夷大將軍となる三年十一月北條時輔の子某三浦軻盛と叛す討て之を誅す十一月義春の子義世を殺んことを謀る執へて之を殺す十二月式部卿に任ぜられ一品に進む正安三年執權北條貞時罷め北條師時之に代る三年四月北條宗方北條時村を殺す五月宗方を執へて之を誅す延慶元年北條貞時久明を廢し長子守邦王を奉じ之を主帥とす久明佐竹谷に徙り尋で京に歸る嘉曆三年十月薨ず年五十三（大日本史）

ヒサイヘ　久家　越中宇津流の刀匠にして應永鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ヒサカツ　久勝　美濃赤坂の刀匠後尾張に住す應永年間の人なり或は云三世兼法の子にして天正比の入久云關の族にして尾張に住す明德以降同名二世に逮ぶ相田賀島と稱すと（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ヒサカツ　久勝　肥後の刀匠にして是一の門人安政年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ヒサカハ　キシフ　ケイザン　久川荆山「オホエ」

ヒサカハ　ンポ　ゲンポ　久川玄圃「オホエゲンポ」

ヒサカハ　ランスキ　ランスキ　久川藍水「オホエランスキ」

ヒサカハ　ランデン　久川藍田　名は雜伯祇、一に文學と字し玄蕃と稱す玄圃の子なり

ヒサカ　ヘイタラウ　日坂平太郎　陸軍步兵少尉なり埼玉縣出身にして明治廿七八年日露戰役に際し第一師團步兵第三聯隊附として從軍中廿七年八月廿一日旅順要塞水師營西南方高地に於て戰死す戰功に依り勳六等功六級に叙せらる

ヒサク　ニ　久國　畫人なり掃部助と稱す大永中申眞如堂の繪詞傳三卷を畫く詞書初卷は則ち後柏原院の宸筆にして中卷は青蓮院尊鎭法親王下卷は入道前內大臣魂空前大僧正公助の揮筆なり今尙ほ藏めて眞如堂に在り（續本朝畫史）

ヒサク　ニ　久國　藤次郎と稱す山城粟田口の刀匠久國の子にして虛久の比鍛冶の奉行たり或は云後日向及大隅に住す裡銘に十二神藤次郎と稱す承元二年鍛冶の奉行たり大隅權守に拜し山城鍛冶長者を許さると（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考）

ヒサク　ニ　久國　山城了戒派の刀匠にして貞治年間の人なり或は云了戒の子にして康永比の人或は了戒の二子なりと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

ヒサク　ニ　久國　伯耆檜原の刀匠にして永和年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ヒサク　ニ　久國　備前の刀匠にして元德年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ヒサク　ニ　久國　備前長船の刀匠にして嘉慶年間の人なり或は一名友國と云ふ（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ヒサク　ニ　久國　大隅の刀匠にして山城粟田口藤林の子嘗國に來り住すと（本朝鍛冶考）

ヒサク　ニ　久國　日向の刀匠にして山城粟田口の刀匠藤次郎久國の子弘長弘安年間の人なり（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ヒサク　ニ　久國　藤原姓木村平藏と稱す初め上野守と稱し後大掾に更む土佐高知の刀匠にして寶永中京都に上り金四郎久道の門人となり幾く無く歸國し享保比まで槳を執ると云（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ヒサコ　久子　光殿帝の後宮なり花園帝の皇女、幼にして永陽門院に子として養はる門院薨ずるに及びて興ふるに封邑を以てす後ち宮に入り妃と爲る子とし榮光院後光殿院生るゝに及びて妃に命じて之を子とせしむ建武四年號して徽安門院と曰ふ延文二年出家し

て足と爲り庵を萩原に構へて之れに住す明年四月薨ず（大日本史）

ヒサコ　ナイシンワウ　久子内親王　後深草帝の第二女母は左大臣藤原實雄の女玄輝門院と號す正應四年四月六日内親王となり三宮に准ず永仁二年二月七日永陽門院と號す嘉元二年九月十日出家す法名眞如智後ち眞性智と改む七條院と同名なるに因りてなり貞和二年四月二十五日薨ず年七十四（女院小傳、貴女抄）

ヒササダ　久貞　藤原姓阿部灌兵衛と稱す周防岩國の刀匠にして勝眞の兄元祿年間の人なり（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ヒサザネ　久眞　刀銘にして名は眞鑑鎌田次郎入と稱す武藏川越の藩士鎌田妙の子にして鍛冶を善くす寛政年間の人なり（古今鍛冶備考）

ヒサシ　久　山城三條の刀匠にして宗近の門人寛弘年間の人なり或は云宗近の弟にして長和治安年間の人と（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考）

ヒサシゲ　久重　常陸水戸の刀匠にして貞享年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ヒサシゲ　倚茂「ヲカモトヒサシゲ」

ヒサタカ　久敬　幕府の士川井久行の二子江戸小日向に住し冶刀を能くす弘化元治年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ヒサダ　クニヨシ　久田國義　陸軍歩兵少佐なり愛知縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て歩兵第三聯隊附として從軍中卅八年三月九日清國盛京省田義屯附近に於て戰死す戰功に依り勳四等功五級に叙せらる

ヒサダ　サスケ　久田佐助　日本郵船會社汽船東海丸の船長なり石川縣鳳至郡鵜川村の人明治廿二年東京商船學校を卒業して學識、週齊等の練習船に乘組み二十六年三月實習語期となり同年六月十五日始めて日本郵船會社に入り神戸小樽間を往復せる和歌浦丸に運轉手心得たり爾來各流船の船員を經て三十六年六月十五日より函館青森間定期船東海丸の船長となる同三十六年十月廿六日本船の青森を發して函館に向ふや難風のために露國汽船ブログレッス號と衝突し船の中腹を貫かれたために露國汽船ブログレッス號と衝突し船の共に沈沒の厄に遭ひ佐介も亦船と運命を北清事件にも御用船に乘組て功あり勳五等に叙せられ端寶章を授けらる

ヒサダ　ソウケイ　久田宗溪　茶人なり宗悅の門人、茶禮を能くす掘泉又た礪鑄と號す（茶人系傳全集）

ヒサダ　ソウサ　久田宗佐　茶人なり覺々齋二世原叟と號す宗全の男隨流齋の養子となり其名を繼ぎ又了休と號す紀藩に仕ふ享保十五年六月二十四日歿す年五十三（名人忌辰錄）

ヒサダ　ソウサン　久田宗參　茶人なり宗玄の弟子にして道遠、鵬齋と號す（茶人系傳全集）

ヒサダ　ソウゼン　久田宗全　茶人なり遯屋稱は鞘兵衛、半床庵と號す二世千宗佐の門人なり雛屋宗理の實子にして三世宗佐の實父なり寶永四年五月歿す年六十一（茶事談、名人忌辰錄）

ヒサダ　ソウヤ　久田宗也　茶人なり不及齋と號す宗全の男原叟宗佐の弟延享元年十月歿す年六十四（名人忌辰錄）

ヒサツグ　久次　溟姓山城の刀匠金四郎久道を子元暦承久年間の人なり（本朝鍛冶考）

ヒサツグ　久次　備中青江の刀匠にして威次の子仁治比の人なり或は家久の子なり同名三人と云寛元比の人是を初代と爲し二世は建治比の人三世は文保比の人とす（本朝鍛冶考、古今鍛冶備考）

ヒサツグ　久次　備中青江の刀匠にして家次の子弘安年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ヒサツグ　久次　備中の刀匠にして元德年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ヒサツグ　久次　備後の刀匠にして永德年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ヒサツグ　久次　藤原姓肥前長崎の刀匠にして興右衛門正次の子元祿年間の人なり（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ヒサツグ　久次　垣見瀨兵衛と稱す肥前平戸の刀匠にして正久の弟初め土肥眞了に學び後肥後熊本の藩士松村昌直の門に入る寛政文化年間の人なり（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ヒサツグ　久次　日向の刀匠にして粟田口久國の門葉文明年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ヒサツグ　久繼　伊豫の人にして古刀の鍛工なり或は云文安年間の人なりと又云國久の子にして永享比の人と（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

ヒサツグ　リイチ　久繼理一　海軍少尉なり山口縣出身にして明治三十七八年日露戰役に際し軍艦吉野に乘組み從軍中三十七年五月十五日山東岬角の北方に於て軍艦春日との衝突により吉野沈沒の際戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ヒサトシ　久利　出羽月山派の刀匠にして天文年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ヒサトミ　久富　越中宇津流の刀匠にして永享年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ヒサトミ　ユタカ　久富豐　勤王の志士諱は通融通稱豐長州藩士たり萬延元年十七歲にして出仕し藩主に隨ひ江戸の藩邸に在り文久三年の夏攘夷の詔下り赤間關に於て外船砲擊の事起るを聞き速に辭職の表を捧げ隨せ歸りて奇兵隊に加はる十月河上彌一等に與力し澤宣嘉に從ひ但馬に赴き兵を擧げしが軍利あらずして諸士と共に自刃して死す時に年二十明治三十五年十一月特旨を以て從五位を贈らる（殉難錄稿）

ヒサトミ　ヨジベエ　久富與次兵衛　肥前有田の豪商なり書を善くし點茶を好み一箇風流士なり傍ら陶法に巧なり自から陶器を製す有田村の内に泉山といふ山あり其石を以て釉料を製するに釉水の乾くこと遲きを以て平戸の土石を試用するに甚燥き易く人工を省くこと大なり又五島の土を用ふることを發見し親から磁器の形狀及畫樣を作りこれを各工に授け大に工業上の進歩を助けまた長崎に往來して盛に陶器を外國に輸送し心得たり爾來各流船の船員を經て三十六年六月十五日より函館青森間定期船東海丸の船長となる同三十六年十月廿六日本船の青森を發して函館に向ふ

ヒサノ　カンエモン　久野勘右衛門　本間流の槍術家なり本間次郎兵衛の門人（武術傳）

ヒサノブ　久信　山城の刀匠にして了戒の子正和年間の人なり或は云了戒久信と稱す一名信國正安比の人或は貞和比の人或は嘉元二年に生れ應安七年歿す年七十三と又云了戒の門人にして明德應永年間の人と（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考）

ヒサノブ　壽信「カノキウハク」三代

ヒサノヤスキチ　久野保吉　陸軍歩兵中尉なり愛媛縣出身にして明治三十七八年日露戰役に際し歩兵第二十二聯隊附として從軍中三十七年八月廿四日旅順要塞望台に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ヒサノリ・久則「ハシヅメヒサノリ」

ヒサノリ　久則「チヅカヒサノリ」

ヒサノリ　久則　神崎禮太郎と稱す近江の刀匠にして嘉永年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ヒサノリ　久則　備前直宗流の刀匠にして弘長年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ヒサノリ　久則　備前吉井の刀匠にして嘉吉年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ヒサハラ　イソヂ　久原磯治　陸軍歩兵少尉なり愛媛縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て第十一師團歩兵第四十三聯隊附として從軍中卅八年四月十二日清國盛京省二火羅東方高地に於て戰死す

ヒサヒデ　壽秀「タツケヒサヒデ」

ヒサヒデ　久英「キクガハキウエイ」

ヒサヒト　シンワウ　尙仁親王　後西院帝の第八子なり母は宮人藤原氏寛文十一年十一月生る具宮と稱す延寶三年八月加冠し彈正尹に任ぜらる元祿二年親王となる三年三月加冠し彈正尹に任ぜらる元祿二年八月薨ず時に年十九無量光院と號す尙仁幼より文を學ぶ槊也潛錄爲めに保建大紀を著はして上箋す尙仁起居之を讀みて措かず其薨ずるに及びて人皆之を惜む（野史）

ヒサヒマ　久正　備前長船の刀匠にして應永年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ヒサノ　久方　德川吉宗の側室なり德川宗尹及源三の生母にして谷口正次の女なり享保六年十月卒す凌雲院に葬り深心院と號す

ヒサマツ　キクヤ　久松菊也　肥前長崎の俳人なり龍十郎と稱し九月堂又執中軒と號す鈴木道彥の門人文化年中の人（大家人名錄）

ヒサマツ　シゲカズ　久松重和　土州の藩士久松圓次の三男なり喜代馬と稱す姓は橘氏少うして擊劍を好み藩人淺田某に隨て其の業を受く後ち江戸に遊び千葉氏の門に入り益々練達し歸て淺田氏の印可を受く是に於て一家を爲し揚を自邸に開き其の術を授く來り學ぶ者無慮數百人後ち再び江戸に至り千葉桃井氏等の門に出入し又去て九州を歷遊して歸る藩命じて擊劍を教導せしむ文久二年六月藩主に扈して京に上る幾許もなく命ぜられて三條邸に奉仕す十月朔に隨て東下し十二月京に隨歸す朔徽章の禮服を賜ひ以て其の勞に酬ふ重和感激奮勵す此の月藩主に扈して國に歸る左市郎を殺害するに與るの事發覺し獄中に斬首せらる時に年三十二（南海義烈傳）

ヒサマツ　ショウアン　久松松庵　博物家なり寛政三年家蜂音養記一卷を著はす（日本博物學年表）

ヒサマツ　スケユキ　久松祐之　江戸の和漢學者なり幽篁庵・號す五十助と稱す近世事物考、いささむら竹、清友雜錄等の著あり

ヒサマツ　フウヤウ　久松風陽　尺八の名手なり名は雅五郎後ち濂巖、雁音柱曲あり（尺八家系譜）

ヒサマツ　ライザウ　久松頼三　陸軍歩兵少佐なり大阪府出身にして明治三十七八年日露戰役に於て第八師團歩兵第三十二聯隊附として從軍中卅八年三月七日清國盛京省揚士屯戰鬪の際負傷同十九日遂陽兵站病院に於て死去す戰功に依り勳四等功四級に叙せらる

ヒサマル　ヒサ丸　陸奥宮城の刀匠にして平治年間の人なり或は云文治比の人と（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

ヒサミチ　久道　溟姓來氏初め堀六郎兵衛と稱す後三品氏に改む山城京都の刀匠にして四洞院爽川に住す伊賀守金道より出て寛文元年受領し近江大掾と稱し同年守に更む刀銘十六瓣の菊又は枝菊を刻す元祿比は父子合作多し正德元年歿す年八十五なりと云ふ（古

今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

二世久道は初名久次三品金四郎と稱す法橋榮泉の二子にして初代久道の養子と爲る正德二年受領し近江守と稱す時に五十歳なり刀銘枝菊を刻す時として十六瓣の菊を刻すと云ふ（古今鍛冶備考）

三世久道は二世久道の子享保の初め受領し近江守と稱す元文四年の春德川幕府の命を奉じ江戸に下り若狹正宗の見手柏包永の作を模造し其賞として俸米五口を終生下賜せられ七月歸京す時に年四十一なり寶暦の末歿すと云ふ菊章刀銘祖父に同じ（古今鍛冶備考）

ヒサミチ　久道　藤原姓駿河の刀匠にして正保年間の人後山城に住す（古今鍛冶銘早見出）

ヒサミチ　久道　三品次郎左衛門と稱す伊豫吉田の刀匠本國は山城京都にして三世久道の外孫なり亦江戸にて鍛作する所あり寶政文化年間の人（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ヒサミツ　久光　山城粟田口の刀匠にして久國の門人貞應寛喜年間の人なり（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

ヒサミツ　久光　來氏山城了戒派の刀匠にして永德年間の人なり或は云信久の子にして元應比の人或は一名國久と云正和二年生れ永和元年歿す六十五歳なりと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

ヒサミツ　久光　備前長船の刀匠にして明德應永年間の人なり或は云長光の門人にして文保建武年間の人と（古今鍛冶備考、本朝鍛冶考）

ヒサミツ　久光　備前長船の刀匠にして嘉吉年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ヒサミツ　久光　備前長船の刀匠にして光景の子文明年間の人なり或は云同名數世相承ぐと（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ヒサミツ　久光　備前長船の刀匠にして永正年間の人なり或は云大永天文年間の人と（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ヒサミツ　久光　備前長船の刀匠にして永祿年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ヒサミツ　久光　大隅の刀匠にして粟田口久國の門人應安年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ヒサミツ　ジンタラウ　久光甚太郎　筑前國那珂郡の人なり四郷隆盛の兵を擧ぐるや甚太郎遙に之に應じて同志を平尾村に會し苦圍慨吾と共に大隊を建て、曰く先年佐賀の亂に我徒朝命を奉じて之を追討す佐賀の人恐くは之を含まんと今此事を擧るに方て彼の報ゆる所とならば則ち大事去らん若かず先づ往て其の怒を解き且彼が擧動を試みんには若し事成らば我兵勢方に十倍せんと衆之を可とす自ら佐賀に抵り岡本某等を見て成らざる求めて還りしも能はず退て野芥内野に戰ひ克つ後ち敗れて秋月城に入り遂に追兵の爲めに捕獲せられ斬らると云ふ（西南男士傳）

ビザン　眉山　小說家なり又松甫齋又鹽風軒と號す本姓は廡川氏武州八王子に住す天保時代の人なり

ビザン　眉山「ヤマモトビザン」

ビザン　眉山「カツラセツテン」

ビザン　眉山「サハダビザン」

ビザン　斐山「ヨシムラロクガウ」

ビザン　廩山「タニビザン」

ビサムネ　久宗　備前長船の刀匠にして延慶年間の人なり或は云寛元比の人又云助行の子にして建仁比の人と（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考）

ビサムネ・久宗　備前長船の刀匠にして延慶年間の人なり或は云末則の二子にして弘長文永年間の人と（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ビサムネ　久宗　備前長船の刀匠にして久光の門人文明年間の人なり（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ビサムネ　久宗　備前の刀匠にして明應年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ビサヤマ　シウキヨ　久村周擧「クムラゲ」

ビサモチ　久採　大隅の刀匠にして粟田口久國の派なり貞應年間の人或は云久國の門人又云久吉の子にして弘長文永年間の人又云助仁比の人と（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考）

ビサモト　久元　五郎三郎と稱す山城粟田口の刀匠にして八條猪熊に住す久國の子建暦建保頃の人なり或は云久國の門人にして貞應比の人と（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考）

ビサモト　サヨジ　久本左代二　陸軍歩兵中尉なり岡山縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て躍備役より召集せられ後備歩兵第三十九聯隊附として從軍中三十七年十月九日清國盛京省本溪湖附近に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ビサモリ　久守　備前長船の刀匠にして盛宗の子寛喜比の人なり（本朝鍛冶考）

ビサモリ　久守　平姓豐後高田の人にして古刀の鍛工なり或は云明應年間の人と（古今鍛冶銘早見出）

ビサモリ　久盛　平姓豐後高田の人にして古刀の鍛工なり或は云文安年間の人と或は長守の門人にして永享比の人なりと云ふ（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

ビサヤス　久安　阿波海部の刀匠にして嘉吉年間の人なり或は云文明比の人と又云氏久の子にして康永比の人と（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考）

ビサヤス　久安　波平久安と稱す薩摩の人谷山の一派にして古刀の鍛工なり（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ビサヤス　久保　肥前の人にして古刀の鍛工なり或は云散位の派にして享祿年間の人なりと（古今鍛冶銘早見出）

ビサヤマ　トラヂ　久山虎治　陸軍三等軍醫なり岡山縣出身にして明治廿七八年日清戰役に從軍し第一軍兵站監部に勤務中廿八年三月十七日朝鮮國昌嶺にて病に罹り鎮國同五月十五日廣島陸軍躍備病院にて死去す

ビサユキ　久行　甲斐府中田原の刀匠にして嘉永年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ビサユキ　久行　藤原姓豐後の刀匠にして文龜年間の人なり或は云延德明應比の人と（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ビサユキ　久行　波平を冒稱す薩摩谷山派の刀匠にして長享延德年間の人なり（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ビサユキ　久之　駿河鬼島の刀匠にして嘉永元治年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ビサヨシ　久吉　山城粟田口の刀匠にして承久年間の人或は云大隅の久吉と同人なりと又云久國の門人亦大隅に住す又云久國の子にして承久貞應年間の人二世は大隅に移住すと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考）

ビサヨシ　久吉　山城の刀匠にして久道の門人貞享年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ビサヨシ　久吉　備中青江の刀匠にして嘉元年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ビサヨシ　久吉　日向眞幸の刀匠にして粟田口久吉と稱す久國の裔應永年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ビサヨシ　久吉　大隅の刀匠にして承久比の人京久國の門人蓋し粟田口久吉と同人なるべしと或は云承安元年生れ承久三年歿す五十一歳なり正治二年常國に來る時に年三十なりと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

ビサヨシ　久吉　薩摩の刀匠にして永正大永年間の人なり（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

ビサヨシ　久義　相模の刀匠にして清水宗五郎と稱す天保慶應年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ビサヨシ　久慶　陸奥盛岡の刀匠にして久次の子元文寛延年間の人なり（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ビサヨシ　シンワウ　久嘉親王「ゲウキヨウホウシンワウ」

ビサヨシ　ミチヨ　久吉道雄　陸軍砲兵中尉なり熊本縣出身にして明治廿七八年日露戰役に於て第六師團野戰砲兵第六聯隊附として從軍中廿七年七月廿四日清國盛京省胡家屯戰鬪の際負傷野戰病院へ後送の途中死去す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ヒシガハ　キチベエ（ガハモノブ）　菱川吉兵衛「ヒシガハ　ゲツサン　菱川月山　安房の儒者なり名は在、字は士崇、宗助と稱す秦嶺の義子なり佐倉藩に仕へ（文化十三年八月十日歿す年四十八）博覽一旨小家珍殿等の著あり

ヒシガハ　シンレイ　菱川秦嶺　儒者なり名は實字は大觀、秦嶺は其號、又岡山と號す通稱字門備前赤坂郡小森村の人、少にして岡山に長ず其先世皆な勇武を以て尼子毛利の間に顯はる秦嶺に至りて始め詩書を業とす其の友を取る益を必して一師を常にせず嘗て後藤芝山に學び尾藤二洲と友とし善し記識博該亦た討究する所多し文を爲くるに暢にして法あり大阪に出て、教授す天明中筮仕して堀田侯の儒臣と爲る侯時に大阪に鎖す超えて三年寛政辛亥侯に從て江戸に至り其世子に伴讀す侯封を下総佐倉に食む秦嶺年一たび往て教授す蓋し其の人の學に趨く者日々に衆きは秦嶺の力なり享和三年七月六著ほす所正名緒言、岡山史鈔、在京奇談、東來閑筆、秦嶺館漫筆、秦嶺館文章等あり（秦嶺墓誌、續諸家人物誌）

ヒシガハ　ソウリ　菱川宗理「タハラヤソウリ」

ヒシガハ　トモフサ　菱川友房　大和繪師なり畫法を菱川師宣に學びて能く似たり然れども筆意は師に下れり（扶桑畫人傳）

ヒシガハ　マサノブ　菱川政信　大和繪師なり師宣の長男、吉兵衛と稱す畫法を父に學びて大和繪を能くす後ち染物師に轉ずと（扶桑畫人傳）

ヒシガハ　ムナハチ　菱川六七八　陸軍歩兵少尉なり嚴手縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て第八師團歩兵第廿二聯隊附として從軍中廿八年三月一日清國盛京省月堡子附近に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ヒシガハ　モロシゲ　菱川師重　浮世繪師なり（古山師重を菱親すべし）俗稱太郎兵衛師宣の門人にして四座役者畫多し吉原氏を畫く江戸圖鑑綱目には古山太郎兵衛師重とあり蓋し本姓古山後に菱川を稱せしものか（浮世繪類考別本、菱川系圖）

ヒシガハ　モロナガ　菱川師永　浮世繪師なり師宣の次子俗稱冲之丞（又酒造之丞に作る）畫法を父に學び頗る着色に長ぜり江戸圖鑑綱目には師永を師長に作り冲之丞を作之丞に作る（浮世繪類考別本、菱川系圖、扶桑畫人傳、鑒定便覽）

ヒシガハ　モロノブ　菱川師宣　大和繪の名手なり友竹と號す通稱は吉兵衛、房州保田町在の菱川吉左衛門の男なり世々縫箔師を業とす若年の頃江戸に移住す初め縫箔の上繪の畫より初めて土佐の畫風を好み又狩佐又兵衛の圖ゑ嘉び又兵衛に擬ずて繪の巧手と稱せらる因て畫名に日本繪菱川師宣と記す或は謂ふ當時狩野常信英一蝶等世に盛んなりしかば師宣も之に薫染したりと見え自ら狩野派の筆意ありと正德年間歿す年七十現今遺蹟著名の品は花見之圖、涼劇之圖、花街之圖、四季遊山之圖、船遊之圖、春宵秘戲數卷とす英一蝶が四季繪跋に房州の菱川師宣といふ者江府に出て梓にをこしこそつて風流の目を悅ばしむ此の道予が學ぶ所にあらずといへども若かりし時云々岩佐菱川が上にたゝん事を思ひてはしなき浮名のねざし殘りてはづかしの雅のしげき冒瀆ともなれり云々（嬉遊笑覽、畫乘要略、扶桑畫人傳、鑒定便覽）

ヒシガハ　モロヒラ　菱川師平　浮世繪師なり自ら師宣の子と稱すと雖も詳ならず菱川系圖に此の名なし（浮世繪類考別本、菱川系圖、古畫備考）

ヒシガハ　モロフサ　菱川師房　大和繪師なり師宣の長男、吉兵衛と稱す畫法を父に學びて大和繪を能くす後ち染物師に轉ずと（扶桑畫人傳）

ヒシダ　シゲカズ　菱田榮和　陸軍歩兵少尉なり岐阜縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て第一師團後備歩兵第二十六聯隊附として從軍中廿八年七月三日清國盛京省大沙灘附近に於て病に罹り同十月廿四日八家子舍營病院に於て死去す戰功に依り勳六等功六級に叙せらる

ヒシダ　ショウイチ　菱田鐘一　陸軍歩兵中尉なり愛知縣出身にして明治三十七八年日露戰役に際し第三師團歩兵第三十三聯隊附として從軍中三十七年九月三日清國遼陽附近に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ヒシダ　セイジ　菱田清次　大垣藩の儒者

にして美濃安八郡久瀬川村の人なり皆川淇園に學ぶ學成りて郷に教授す後藩の儒員となり士列に加へらる後藤松陰は此人の養成する所なり（日本教育史資料）

ヒシダ　ナリノブ　菱右衛門の子なり幕府の蒔絵師にして延寶八年父と共に德川家綱の廟に蒔絵せり（幸阿彌系圖）

ヒシダ　ヌヒコ　菱田縫子　江戸の歌人なり荷田民子に從ひて修學し善く歌を詠ず後ち徒を延て教示す寛政中歿す（鑒定便覽）

ヒシダ　フサアキ　菱田房明　德川幕府の御作事方なり丹波と稱す字は諶、房明は其の名、初の名は香後信と改め最後に今の名に改む家世々幕府に仕へて考工官たり房明學を好みて林祭酒整宇に受く又た雨森芳洲、梁田蛻嵓、蹤風湫に從ひて益を請ふ嘗て上書して大阪安治川を浚ひ以て大舶を通じ水逝を便にすべきを言ふ適ゝ事を用ふるものに沮められて果さず江戸物價貴し房明錢錢を鑄て雜行し以て通貨の不足を補はんとす請ふ又た報あらず然れども吳訥の祥刑要覽を校し併せて時弊數事を條記し密に之を上るに頗る採用せらるると云ふ又た密に上書して風俗を勵まし廉耻を勸め媛び襲倉を諸國に置きて飢荒に備ふる等の事を言ふ居ること十餘年房明往日言ふ所のもの悉く其の驗あり老中本多伊賀守加納遠江守以て奇才となし登庸せんと欲す適ゝ故ありて果さず是より先き江戸錢錢盛んに行はる此に至りて大阪の安治川浚渫の功成りて方に大舶を通ず是の時房明を知るものなし故に又房明の嘗て之を上請せしを稱するものなし房明亦敢て言はず房明前後造營を監するに精粹を以てし賞賜を受ると數次班亦常に諸匠師の上に在り然れども考工を以て稱せらるゝを屑しとせず明和三年に歿す年七十長子房行嗣て考工官となり次子龜年（藍田と號す）更に伊東氏を稱す儒を以て顯はる（續近世叢語）

ヒシダ　フササダ　菱田房貞　幕府の蒔絵師なり其右衛門と稱し延寶八年幸阿彌奈良等と共に德川家綱の廟に蒔絵せり（幸阿彌系圖）

ビシン　トウシュン　美信洞春「カノトウシュン」　咲流の挿花家なり松平源十郎と稱す尾州侯の臣にして市ケ谷の藩邸に住す保中の人なり老後藝統を同藩數寄屋詰日比野林阿彌に讓らんとす辭す仍て藩士荒川藏讓る子小四郎其の系を嗣き今に尾州に傳ふ（莊司峯雪氏贈）

ビシュ　キン　披壽院「イウジヨウバウソウシュウ」　美笑庵月指　美笑流挿花第四世の師なり大德寺の僧儀山月指と號す三世に從ひ技を學び四年にして師歿し高弟美雪軒古梅に從ふ古梅之に美雪軒を讓り元祿七年十二月終に美笑軒の號を讓らる月指軒號を辭し庵號を用ふ元文五年八月三日歿す年九十七（美笑軒一茶氏贈）

ビセウケン　イツスキ　美笑軒一水　美笑流挿花第九世の師なり後藤大學と稱す上杉謙信の臣にして日野國白井城に居る五萬石を領す歌を善くし又和歌に通じて佛氏の拈華微笑の語を悟り微笑軒道覺と號す天文十四年三月始めて生花五箇の傳法を建つ謙信の勸に依て微笑を美笑に改號す嘗て玉手の役に從ひ暑熱の日樹蔭ふの際鼓弦花の凋れざるを見て之を摘で携ふる陰に憩ふの際鼓弦の水器を挿み弓弦を以て之を幕柱に掛く謙信所の鼓穀の水器を挿み弓弦を以て之を幕柱に掛く謙信之を覽て「畫見は實に並なき英者かな」の句を賜ふ凱旋の後之を吉例とし當流の規模とし鮑穀等は傳へて美笑軒宗家にあり隱居の後號を門人道霜に讓り分陰齋と號す元和二年六月二十五日歿す年九十六上野群馬郡群馬村法恩寺に葬る（莊司峯雪氏贈、美笑軒一茶氏贈）

ビセウケン　ダウサウ　美笑軒二世道霜「ビセウケン」初世　美笑流挿花第六世なり德川幕府の士堤左兵衛と稱す玉世十一月美笑軒を繼ぐ寛文七年二月十二日歿す年七十八（美笑軒一茶氏贈）

ビセウケン　ダウセキ　美笑軒道昔　美笑流挿花第七世なり德川幕府の士堤左兵衛と稱す玉世美笑軒古道の門に入り明和六年美笑軒となる家元たり寛政三年二月十日歿す年六十一（同上）

ビセウケン　シンセキ　美笑軒心昔　美笑流挿花第七世なり堤左兵衛の子新八郎と稱す又た國學和歌に達す花技を父（六世美笑軒道昔）に學び天明六年美笑軒を讓らる文政八年十二月十三日歿す年六十八（同上）

ビセウケン　チセキ　美笑軒知昔　美笑流挿花第八世なり堤氏新八郎の子

ビセウケン　イチアウ　美笑軒一鶯　美笑流第十世の挿花家なり德川氏の士にして石村文之助と稱す初め美聲軒一鶯と號し後嘉永二年八月美雪軒と改む技頗る達す明治元年二月美笑庵一水の妻美遊軒一鶯及同門の勸に依て美笑軒を繼ぐ赤坂に居るを以て世に赤坂美笑流と云ふ第十世を子石村和（美雪軒一鶯）に讓り分陰齋と號す一鶯再たび歿し一鶯再たび第十一世となる明治廿一年九月十二日歿す年九十四家元絶ゆ美山軒一梅（田田孟辰、第十二世を繼ぎ隱居して笑々軒と號す明治廿四年九世一鶯の門人美雪軒一茶第十三世を繼ぎ美笑軒となる（美笑軒一茶氏贈）

ビセウウヨウ　イツスキ　美笑翁一水（初世）　美笑流別家なり尾張侯の公子にして松平源三郎と稱す美笑軒七世心昔の高弟美秀軒古鶴に從ひ美月軒の號を得後ち嘉永二年美笑翁一水と號す當流の號一の字を用ふるの始なり始めて股込を定め安政二年四月六日歿す年六十七牛込原町經王寺に葬る（同上）

ビセウヨウ　イツスイ　美笑翁一水（二世）　尾州の士にして川澄三五郎と稱す初世一水の門に入り弘化元年美雪軒一茶と號す嘉永二年八月美月軒と改む初世歿後美笑翁となる技に秀で著書亦多し歿する年六十六名古屋勝曼寺に葬る子一覺自ら家元と稱し一京と號す一代にして絶ゆ明治廿二年四月初世一茶の門人美屋軒一曜（莊司峯雪）衆に推されて三世を繼ぎ一水派美笑流を再興す

ビセツケン　ダウサウ　美雪軒道霜（元祖）　美笑軒挿花第二世なり京都の人生方彌六郎と稱

す文祿元年元祖美笑軒に從ひ慶長三年美雪軒となる四年五月元祖隱居して道霜美笑軒を讓らる慶安二年八月十八日歿す年八十八（同上）

ビセツケン　ダウセツ　美雪軒道節（二世）「ビセウケン」三世

ビセツケン　コバイ　美雪軒古梅（三世）　美雪軒第三世なり二世美雪軒の門人なり延寶三年五月號を弟弟子月指に讓る（美笑軒一茶氏贈）

ビセツケン　ゲツシ　美雪軒月指（四世）「ビセウアン」

ビセツケン　ダウセキ　美雪軒道昔（五世「ビセウケン」代々の傳中にあり

ビセツケン　イツサ　美雪軒一茶（六世）「ビセウヨウ」

ビセツケン　イチアウ　美雪軒一鶯（七世）　美笑軒第十世の初の號なり門人山田鎭三郎美英軒一瓢と稱す明治三十二年三月美雪軒一茶と改め第八世を繼ぐ後美笑軒となる（美笑軒一茶氏贈）

ビセキ　チュウナゴン　美石「ナカヤママシ」　備前中納言「ウキダヒデイヘ」

ヒゼンノジョウ　肥前掾「エドヒゼンノジョウ」

ビゼン　フサナリ　備前房成　平四郎と稱す堀川大納言道具の士備前守兼房の子なり膂力衆に超ゆ義經京師に在りし時毎夜當を吹て市中を徘徊す嘗て馬州の人原本武道入道に世尊寺の邊に遇ふ時に武道平家の執頭たるを以て自ら感德を負ひ義經を要して當を吹かしむ醍醐甚し武道の從僕五六輩亦各ゝ酩酊狼藉す義經已を得ず將に事あらんとす房成來りて之を戒諭し還へして義經の前に來りて曰く卿年少し途中或は難あるゝ察し窺に道從すべし今果して此の事あり請ふ君を其の家に送らんと從て其の寓所に至り名を告げて去る後義經仲を道討して京師に入る時に兼房父子を訪ふに兼房既に死し房成浮浪す乃ち之を索め出だして家人とす後攝州一の谷の合戰に鵯越に廻りたる七十騎の一人にして其の功天下に秀づ又入島數度の戰にも義經に從ひて每に功あり義經奥州下向の時も伴りて山伏となりて從ふと云ふ（本朝武功正傳）

ヒダカ　ジュン　日高淳　陸軍歩兵少尉なり愛知縣出身にして明治三十七八年日露戰役に際し第三師團歩兵第六聯隊附として從軍中三十七年八月三十一日清國盛京省首山堡に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ヒダカ　マサヨ　日高正雄　海軍大尉なり鹿兒島縣出身にして明治二十七八年日清戰役に於て旅順口運輸通信部員として從軍中廿八年七月廿日病に罹り大孤山兵站病院に於て死去す

ヒダク　未琢「イシダビタク」

ヒダチ　イラツコ　常陸郎子　天平寶龜の間和歌を善くするを以て世に名あり詠歌は蔵せて萬葉集にあり（萬葉集作者履歴）

ヒダチ　イラツメ　常陸娘　天智帝の妃なり左大臣蘇我赤兄の女山邊皇女を生む（大日本史）

ヒダチバウ　カイソン　常陸坊海存　丹波の人交次知五郎義朝に仕ふ海存幼にして法師となり初め心了と名く人と爲り魁岸奇偉力量倫に超ゆ牛若傅前守兼房の家に在るや海存數ゝ兵を擧げんとす勸む事平氏に聞ゆ平氏捕卒を遣はして牛若を執ふ海存羈災の身を容るゝに地なし乃ち復た逃れて常陸に到り伴りて漂泊し復た鞍馬の本光坊に來り牛若の出家を諫め益ゝ義兵を擧げんとす勸む然れども平氏の搜索嚴急にして身夫となる義經奥州に下るに及び聞きて大に悅び其上由てなり能登守教經舟を矢島の磯に進め三十騎斗と陸に上りて戰ふ時東國の兵蹈躇して進まず海存辨慶と二騎馳せて奮鬪突戰卒に敵兵を走らす其の他武功多し義經暇爽へ渡らんとする時海存預じめ舟を艤し義經と鹿島浦より發し去れりと（本朝武功正傳）

ビダツ　テンウウ　敏達天皇　第三十一代の帝なり名は淳中倉太珠敷欽明の第二子なり母を石姫と曰ふ位に即て都を和州磐余譯田に遷し幸玉宮に在り帝位に在ること十四年壽四十八河州磯長の陵に葬る（大日本史）

ヒダ　ナガスエ　日田永季　豐後日田郡の人なり鬼太夫と稱す本姓は大藏神武帝の時善憧器といふ者あり紀州大藏谷より豐後日田郡に移り戸山に住す大藏谷より出たるを以て孫大藏を以て姓とす白鳳年中に至り其の後裔に妙憧器と云ふものあり後日田鬼藏太夫永弘と改む强力無雙なり背に毛を生ずること一尺二寸後數代を歷て即ち永季に至る永季長け八尺餘膂力絶倫名聲都鄙に聞ゆ延久三年年十六相撲の節會に徵に應じて上洛す此の時出雲に赤奇代の力童あり畿内關東四國を廻歷して技を試みるに能く及ぶものなし此の童亦た徵さる永季遂に伊勢大神宮に祈り神馬七疋を獻ず途次筑前太宰府に至り一人の童女に遇ふ童女永季に謂て曰く今回汝ぢ禁闕に於て古今絶倫の大力者に遭遇すべし其の人と爲り長け常人より矮く總身鐵の如く力得て量る可からず之に勝たんこと人力の能く及ぶ所に非ず然れども幸にして一の乘ずべきものあり其の童の母日本第一の力者を生まんと欲し之を諸神に祈り椎蝶の始より鐵砂を食ふ然れども嘗て炎熱に苦しみ一の甜瓜を食せしが童の頭に留りて方二三寸の肉となれり力を較するに及び乾の方を望むべし吾汝に方便を示さんと言終り去る永季之を奇とし天滿宮に祈りて曰く今回の相撲に勝利を得せしめば日田郡の大肥莊を寄進し其の地に老松明神を祭らんと遂に去りて京師に至り相撲の節會に臨むに彼の童皺手となれり童面色黯黑眼窩巨大にして光彩爛々たり相搏つに及び童の肌堅滑にして捉ふ可からず永季乃ち前の神器を思ひ乾の方を望むに宰府に見し所の童女雲中に現はれ永季に目示し童の額を抑ゆる爲れして之を教ゆ永季乃ち拳を固めて之を擊つに果たして肉身なり鮮血迸出して眼中に入る童之に苦しみ逡巡す永季此の機に乘じ引て高く之を頭上に欲げ一聲力に任せて地上に投れば體軀離斷して四方に飛散す是に於て永季日本第一等力者の勅免ありて日田郡全土を賜はる國に還るに及び佃ち大肥莊を天滿宮に寄進し老松明神を祭ること初め云ふ所の如くす又自像を作り童が手を肩に載せ之を投ずるの狀に擬し毘沙門と名付け高城に安置し其の地に寺を設けて永福傳寺と號す其の後十餘度の相撲に出づるに一たびも敗を取ること

なし雷て領内に叛者あり永季攻て其の門を破り屍を以て百人斗を毆殺す長治元年七月十八日大肥莊薄村に歿す年四十九後其處に寺を建て明星寺と云ふ永季より季平、高家、永平、永宗、永俊、永綱、永信、永基、永貧、永貞、長俊、詮永、永昌、永英、七郎丸相續ぎて世々角力を業とす七郎丸早世して嫡家絶え庶流今に日田に在りと云ふ（古今相撲大全）

ヒダノカミ　コレヒサ　飛驒守惟久　畫人なり曾て後三年軍記の圖を作る人爭ひて之を摹す國中殿する所の甲冑其他器械屋宇門墻等一として詳審ならざるなし後人之を珍寶とす世の古實を唱る者引きて以て當時の考證となす其の世に尊ばるゝ此の如し（古今雅俗石亭畫談）

ヒダ　ハマゴラウ　肥田濱五郎　海軍士官なり天保元年正月伊豆國賀茂郡八幡野村に生れ父を肥田春安といひ母は川村氏なり壯にして江戸に出で伊東玄朴に就て蘭書を學び數年にして西洋學理の大要を知り安政三年六月德川政府の命を以て諸學士と共に長崎に行き荷蘭の本國より招聘したる海軍の教師に就て諸科を傳習するとき蒸汽機關の科を專修したり蓋し我國海軍の濫觴にして當時その學業も出色の名あり安政六年冬幕府軍艦成臨丸を以て遠洋運轉を試みんとし亞米利加へ航海を命じ木村攝津守を艦長勝麟太郎を副とし曩きの長崎傳習の航海學士をして事に當らしめたるは傳習の初より僅に三年半の時なり當時その未熟危險を論ずる者少なからざりしかども傳習の士は奮て自から進み離なく太平洋を渡りてサンフランシスコに達し歸途ハワイ島に寄航し往復半年餘にして歸來したり此航海に肥田は蒸汽方の士官に任じ最も辛勞したりと云ふ爾後も常に海軍に職を奉じ文久元年小形汽船千代田形製造に付き小野友五郎春山弁造の二人は其船體を造り肥田は蒸汽機關を製し開闢以來始て日本國自製の蒸汽船を得たり德川政府に勤仕中は軍艦頭に進みたりしが明治元年王政維新の事ありて明治二年に至る迄德川政府の後なる靜岡藩の公務に從事し同年八月更に明治政府に召されて海軍に奉職し蒸汽機關の取調又は造船の事を執り朝野皆その技倆の老練に服せざるはなし明治四年冬理事官として歐米諸國へ出張を命ぜられ六年四月歸朝この時にも見聞の所得甚だ少なからず且天資敏密にして毛髮の微も等閑に附せず一毫も取らざるは平生の主義にして有形の器械學に巧なると同時に又理財に長じ無形の間に世の信任甚だ重くして其の舊恩顧たる江川太郎左衛門の後嗣その他の大家にても皆顧問を煩はして家道の安を得るものあり又第十五國立銀行及び日本鐵道會社の創立の如きも實にその計畫に出たるもの多しと云ふ明治十五年の冬十一年四月二十日歿す時に年四十（或は四十一に作る）子あり宗心と云ふ元祿十五年三月十五日歿す年七十一孫を勝政と云ふ享保十二年五月十三日歿す曾孫和右衛門玄孫半十郎より庄兵衛嘉兵衛に至り相繼ぎて京都の今出川に居り世々左と稱して業を傳へ世に鳴ると云ふ（野史、實事譯、俳家奇人談）

ヒダ　マサムラ　肥田政叢　水戸藩の老職なり姓は源氏字は箕甫初め莊藏と稱す後助之進と改む高祖下野守政長曾祖政勝和泉と稱す並びに左京大夫北條氏直に事へ共に奮力あり勇敢を以て聞ゆ北條氏の滅後政勝水戸侯に事へて家老兼水戸城代と爲る父政直半兵衛と稱す襲て執政と爲る政叢義公に仕て近侍となる黜公擯んで小姓頭と爲し安致仕するに及び襲て祿千石を給し書院番頭大番頭を歷て大寄合頭兼城代と爲す享保六年成公城代を罷めて家老と爲す從五位下に叙し因幡守に任ぜらる十三年政事を聞くに與かる十九年病みて歿す年五十九政叢醲藉風流にして家道整齊曲を惡み直な好む人片善あれば必ず之を舉ぐ武技に長じて弓銃皆な蘊奥を究む略〻書史に涉り最も蘭を善くす其の政驚に於て精敏人皆な之を稱す（事實文編）

ヒダ　ヤモク　肥田野默　新潟縣出身にして八年日清戰役に於て占領地理事として第三師團法官部に屬し渡清中廿八年一月海城にて病に罹り十二月一日名古屋に於て死去す

「サ」　左「サ」ジンゴラウ　左甚五郎　有名の彫刻家なり姓は源氏字は伊正利と稱す足利氏の裔一子を摩耶山に新るゝ久し四十八歳の頃ひ始て妊娠し甚五郎を產む初の名は刀圖松十三歳父を亡ひ母に從て伏見に往き番匠與平治に憑る甚五郎性彫刻を好み工匠の餘之を樂む類平生の主義にして有形の器械學に非らざれば則ち實性寡欲平生藏書の類を作り業極めて貧窮の際なれども同時に又理財に長じ無形の間に世の信任甚だ重くして其の舊恩顧たる江川太郎左衛門の後嗣その他の大家にても皆顧問を煩はして家道の安を得るものあり來の亂を避て伏見京都に移住し聚樂亭桃山城の承塵欄間及び其の他神社佛閣に彫刻して其名古今に高し寶永十一年四月二十日歿す時に年四十（或は四十一に作る）子あり宗心と云ふ元祿十五年三月十五日歿す年七十一孫を勝政と云ふ享保十二年五月十三日歿す曾孫和右衛門玄孫半十郎より庄兵衛嘉兵衛に至り相繼ぎて京都の今出川に居り世々左と稱して業を傳へ世に鳴ると云ふ（野史、實事譯、俳家奇人談）

ヒダカタ　イラツメ　土方娘子　遠江國城飼郡土方村の人なり天平寶龜の間和歌を善くするを以て知らる詠歌は載せて萬葉集に在り（萬葉集作者考證歷）

ヒダカタ　カタシ　土方拳　陸軍歩兵少尉なり高知縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て豫備役より召集せられ歩兵第四十四聯隊附として從軍中廿七年十月三十日旅順要塞東雞冠山北砲臺東南堡壘附近に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ヒダカタ　カツウヂ　土方雄氏　雄久の長子なり字は木工助叙爵して丹後守と稱す慶長四年父德川家康を殺さんとせるの故を以て共に常陸に謫せらる後ち秀忠に仕へ繼て勢州蔦野に治す大阪の役に從ひて首を獲ること二級子孫相繼ぐ侯たり（野史）

ヒダカタ　カツシゲ　土方雄重　雄久の二子なり慶長庚子の年初て家康に見ゆ十三年父の采邑一萬五千石を割き賜ふ十四年從五位下に叙し摂部頭と稱す大阪軍起る師に從て首を獲ること八級元和八年五千石を岩城に加賜せられ窪田に居る後ち邑を龍登に從さる寛永五年卒す子雄次嗣ぐ河内守と稱す子雄隆嗣ぐ山城守と稱し伊賀守と改む貞享元年七月家事正しからざるに坐して邑除せられ越後村上に子貞辰を伊勢に、孫内匠を八丈島に配せられて家絶ゆ（野史）

ヒヂカタ　カツヒサ　土方雄久　尾張名護屋の人なり姓は源氏大和守頼親の八世秀治始て族を土方と稱す秀治の十三世信治織田信長に屬す弘治元年濃人と戰ひて之れに死す信治の子は則ち雄久時に生れて僅かに二歳小字は彦三郎後ち勘兵衛と稱す十八歳にして織田信雄に仕へ諱字を授けらる是の歳伊賀に戰ひ敵二騎ゝ槍を交へ一刺一馘首二級を獲たり後ち軍に從ひ每に功あり天正十二年信雄秀吉と雖を構ふ老臣岡田重喜は驍勇なり秀吉之を招き誘ふに厚利を以てす重喜之れに從ふ信雄聞きて大に驚き重喜を殺さんと欲し雄久をして之れに任ぜしめ重喜を召す重喜變を慮り刀を帶びて廣間の柱に倚り雄久を顧みて曰く君何に在る對て曰く廢室にあり曰く仄かに聞く將さに臣を戮せんとすと事實ならば則ち足下之れが任たらん雄久曰く何すれぞ其の事あらん然りと雖も若し命あらば則ち我何ぞ敢て辭せんと重喜乃ち揖して廢室に入り信雄に見ゆ信雄曰く我頃ろ手鉞を得たりと乃ち之れを視て重喜曰く重器なりと俯して之れを見る信雄雄久を召す雄久其の期を察し後より刀を拔て重喜を突く重喜亦刀を抽きて斬る雄久力を竭して重喜を倒す額に傷く信雄眉尖刀を把て曰く之れを縱て雄久曰く臣と併殺するも縱てずと信雄重喜を斬る雄久扶けて殿す是の秋成ぎ為行ふ雄久行人となる秀吉雄久に報ゆるに尾州犬山四萬九千石を以てす十八年信雄封を失ふ雄久秀吉四年秋奉行等議して德川家康の秀賴を存問するを俟ち之を城中に殺さんと欲す雄久及大野治長淺野長政之に當る事漏る十月雄久を常陸に治長を結城に放ち淺野長政を幽居す他日雄久人に語りて曰く初め藤堂高虎と內府を玄關に迎ふ內府睨視して曰く這奴と我他を視る支體麻痺して刀を把るに堪へずと慶長庚子の秋家康東下して上杉景勝を討つ途に石田三成亂を作すと聞き命じて兵を四に旋へさしめ雄久の罪を赦し其の前田利長と姻ある を以て之を加賀に遣はし利長を勸めて兵を發して越前を扼せしむ既にして利長兵を率て發す小松の城主丹羽長重拒ぎ過む故を以て利長雄久を賞せんとす雄久を家康に見ゆ家康將に雄久を賞せんとす或人之を拒みて曰く雄久嘗て君を犯さんと謀る罪尤も重し然るに宥恕して死を減じ今又た采邑を賜ふ恐らくは過賞ならんと家康曰く梁れ先きに犯すことを謀るは私の爲めにするにあらずして其の主の意に從ふなり古人語あり舊惡を愆はずと何ぞ深く咎むるに足らん孤の爲めに命を傳へて北陸を鎖平し利長又軍に從て先驅す貧なかるべからずと乃ち伊勢の田一萬石を賜ふ慶長七年正月從五位下に叙し河內守と稱す九月下總の田五千石を加賜す十三年十一月卒す年五十八法名功運建忠、子雄氏、雄重（野史、日本外史）

ヒヂカタ　タウレイ　土方稻嶺　因幡侯の畫員なり名は廣邦、稻嶺は其の號、潛の大夫某の男なり性畫を好み宋紫石を師として醫法を修め大いに其の妙所を得る後ち畫を以て因幡侯に仕ふ設色の花鳥を巧みにす時人之を稱す（扶桑畫人傳、鑒定便覽、畫乘要略）

ヒヂカタ　トシザウ　土方歲三　武州多摩郡石田村の人なり頗る氣慨あり文久三年同里の人近藤勇と得たり壓の柱に將軍に京師に入り信雄に見ゆ信雄曰く我頃ろ手鉞を得たりと乃ち之れを視て重喜曰く期を察し後より刀を拔て重喜を突く重喜亦刀を抽きて斬る雄久力を竭して重喜を倒す額に傷く信雄眉尖刀を把て曰く之れを縱て雄久曰く臣と併殺するも縱てずと信雄重喜を斬る雄久扶けて殿す是の秋成ぎ為行ふ雄久行人となる秀吉雄久に報ゆるに尾州犬山四萬九千石を以てす十八年信雄封を失ふ雄久秀吉四年秋奉行等議して德川家康の秀賴を存問するを俟ち之を城中に殺さんと欲す雄久及大野治長淺野長政之に當る事漏る十月雄久を常陸に治長を結城に放ち淺野長政を幽居す他日雄久人に語りて曰く初め藤堂高虎と內府を玄關に迎ふ內府睨視して曰く這奴と我他を視る支體麻痺して刀を把るに堪へずと慶長庚子の秋家康東下して上杉景勝を討つ途に石田三成亂を作すと聞き命じて兵を四に旋へさしめ雄久の罪を赦し其の前田利長と姻ある を以て之を加賀に遣はし利長を勸めて兵を發して越前を扼せしむ既にして利長兵を率て發す小松の城主丹羽長重拒ぎ過む故を以て利長雄久を賞せんとす雄久を家康に見ゆ家康將に雄久を賞せんとす或人之を拒みて曰く雄久嘗て君を犯さんと謀る罪尤も重し然るに宥恕

ヒツカタ　カツヒサ　土方雄久　尾張名護屋の人なり姓は源氏大和守頼親の八世秀治始て族を土方と稱す秀治の十三世信治織田信長に屬す弘治元年濃人と戰ひて之れに死す信治の子は則ち雄久時に生れて僅かに二歳小字は彦三郎後ち勘兵衛と稱す十八歳にして織田信雄に仕へ諱字を授けらる是の歳伊賀に戰ひ敵二騎ゝ槍を交へ一刺一馘首二級を獲たり後ち軍に從ひ每に功あり天正十二年信雄秀吉と雖を構ふ老臣岡田重喜は驍勇なり秀吉之を招き誘ふに厚利を以てす重喜之れに從ふ信雄聞きて大に驚き重喜を殺さんと欲し雄久をして之れに任ぜしめ重喜を召す重喜變を慮り刀を帶びて廣間の柱に倚り雄久を顧みて曰く君何に在る對て曰く廢室にあり曰く仄かに聞く將さに臣を戮せんとすと事實ならば則ち足下之れが任たらん雄久曰く何すれぞ其の事あらん然りと雖も若し命あらば則ち我何ぞ敢て辭せんと重喜乃ち揖して廢室に入り信雄に見ゆ信雄曰く我頃ろ手鉞を得たりと乃ち之れを視て重喜曰く重器なりと俯して之れを見る信雄雄久を召す雄久其の期を察し後より刀を拔て重喜を突く重喜亦刀を抽きて斬る雄久力を竭して重喜を倒す額に傷く信雄眉尖刀を把て曰く之れを縱て雄久曰く臣と併殺するも縱てずと信雄重喜を斬る雄久扶けて殿す是の秋成ぎ為行ふ雄久行人となる秀吉雄久に報ゆるに尾州犬山四萬九千石を以てす十八年信雄封を失ふ雄久秀吉四年秋奉行等議して德川家康の秀賴を存問するを俟ち之を城中に殺さんと欲す雄久及大野治長淺野長政之に當る事漏る十月雄久を常陸に治長を結城に放ち淺野長政を幽居す他日雄久人に語りて曰く初め藤堂高虎と內府を玄關に迎ふ內府睨視して曰く這奴と我他を視る支體麻痺して刀を把るに堪へずと慶長庚子の秋家康東下して上杉景勝を討つ途に石田三成亂を作すと聞き命じて兵を四に旋へさしめ雄久の罪を赦し其の前田利長と姻ある を以て之を加賀に遣はし利長を勸めて兵を發して越前を扼せしむ既にして利長兵を率て發す小松の城主丹羽長重拒ぎ過む故を以て利長雄久を賞せんとす雄久を家康に見ゆ家康將に雄久を賞せんとす或人之を拒みて曰く雄久嘗て君を犯さんと謀る罪尤も重し然るに宥恕

ヒツカタ　ヒツカン　筆海堂「マサキセイシン」
ヒツカン　イツキヒツカン　必簡
ヒツサイ　ヨホチマサトキ　悠齋
ヒツダイ　ヒラノヒツダイ　必大
ヒツダイ　クレホクテイ　必大
ヒツタン　筆端　俳人なり後ち改賈と改む超波の門人江戸境町に住す（俳林小傳）
ヒツチクサイ　筆竹齋「ソウリウ」
ヒツトウ　必東「センヒツトウ」
ヒツポウ　セイメイ　筆峰生明「カノタンイウ」
ヒツム　必夢　越前の僧なり貞享四年近江國唐崎在に住める老翁が二十五菩薩引接の畫像を出し之が由來緣起を考證せんことを請へるに任せ和漢の史書を涉獵して全鼓吹の書六卷を著せり以て其博學の沙門なりしを徵すべし（二十ヵ菩薩引接鼓吹）
ヒデ　秀　備前長船の刀匠にして曆仁年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）
ヒデオキ　秀興　薩摩の刀匠奥和泉守忠重を看館に入り擊ちて官軍を敗る武揚等の軍皆な至る官軍守を棄て〻逃る十一月純彰義三と兵を率ゐて先鋒と爲り松前城を攻めて之を拔く二年四月官軍大擊して海陸より並び進む我兵連戰して皆な敗る五月義三武揚等と退きて五稜郭に入り復た壓て出でゝ戰ふ殺傷過當負決せず既にして海軍皆な敗れ兵漸盡とく殲く官軍勝に乘じ進みて五稜郭に拠まり萬銃齊く發す震ふこと轟雷の如し十一日義三馬に乘り鞭を執り疾呼して戰を督す忽ち銃丸あり腹を洞し馬より墮ちて死す初め榎本武揚の函館に據るや上書して北邊を鎮し外侮を禦がんと欲す義三慨然として人に謂りて曰く吾れ亟藤勇と俱に死せざるものは一たび故主の寃を雪がんと欲する耳今は則ち已みなん萬一敎に遵ふとも何の面目ありてか勇に地下に見えんと死する時年三十五歳三人と盛り短小蒼白にして眼光人を射る其の函館に在る諸將士皆な歡呼醉飽或は聲色に溺る〻者あり義三獨り蔬食自ら甘しとし婦人を近づけずして曰く此れ何等の時節ぞ歡呼醉飽に忍びんやと（譚海）

ヒデオキ 秀發 土佐の刀匠にして馬淵源助と稱す嘉永年間の人なり(古今鍛冶銘早見出)

ヒデカゲ 秀景 備前長船の刀匠にして景則の二子永仁比の人なり(本朝鍛冶考)

ヒデカゲ 秀景 備前長船の刀匠にして近景の子貞和延文年間の人なり或は云ふ天永永久年間の人と(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考)

ヒデカゲ 秀景 備前長船の刀匠にして應永嘉吉年間の人なり(古今鍛冶銘早見出)

ヒデカゲ 秀景 平姓備前長船の刀匠にして文安年間の人なり或は云嘉吉文明年間の人又云秀眞の二子にして長享比の人と(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考)

ヒデカゲ 秀景 備前長船の刀匠にして應仁年間の人なり(古今鍛冶銘早見出)

ヒデカゲ 秀景 備後三原の刀匠にして應永年間の人なり(古今鍛冶銘早見出)

ヒデカズ 秀一 長岡氏慶應年間の刀匠なり(古今鍛冶銘早見出)

ヒデカズ 秀一「カマダガンショウ」

ヒデカズ 英一「オホモリヒデカズ」

ヒデカツ 秀勝 川部義八郎と稱す秋元氏の家士にして刀匠水心子の四世慶應年間の人なり(古今鍛冶銘早見出)

ヒデカネ 秀包 備前の刀匠にして永包の二子永承天喜年間の人なり或は云ふ長暦又は文治比の人と(本朝鍛冶考、古今鍛冶備考)

ヒデカネ 秀包 備前の刀匠にして應永年間の人なり或は云長船の派にして亦備中に居る明德應永年間の人又云長船小反秀次の子にして永正比の人と(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考)

ヒデカネ 秀包 備中の刀匠にして國秀の子明德比の人なり(本朝鍛冶考)

ヒデカネ 秀包 備中の刀匠にして正長年間の人なり或は云片山一文字派の刀匠にして景重の子永享年間の人と(古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考)

ヒデクニ 秀國 陸奥會津の刀匠松軒の孫にして鐵砲鍛冶備前の人なり(古今鍛冶銘早見出)

ヒデクニ 秀國 陸奥會津の刀匠角元與み者よて弘化元治年間の人なり(古今鍛冶銘早見出)

ヒデコ ナイシンワウ イシナイシンワウ 榮子內親王「エ

ヒデサダ 秀貞 河內の刀匠にして元德曆應年間の人なり(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考)

ヒデサダ 秀貞 美作の刀匠にして實經の子正應年間の人なり或は云赤出雲に住す又云忠貞の子にして文明德比の人なり或は建武比の人本國備前なりと(古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考)

ヒデサダ 秀貞 備前の刀匠にして建武比の人なり(古今鍛冶銘早見出)

ヒデサダ 秀貞 備前の刀匠にして永和年間の人なり或は云長船の派にして應永比の人又云長船小反秀近の子にして永享比の人と(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考)

ヒデサダ 秀貞 筑前の刀匠にして貞秀の子延文比の人なり(本朝鍛冶考)

ヒデサダ 秀貞 豐後の刀匠にして寛永比の人なり(古今鍛冶銘早見出)

ヒデサダ 秀貞 肥前の刀匠にして應永年間の人或は云明德比の人にして平戸左の派なり亦筑前に住すと(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考)

ヒデサダ シンワウ 榮貞親王 雍元帝の第十七子なり母は宮人少納言晁正德五年三月生る悅宮と稱す享保三年十一月知恩院の附弟となり四年五月知恩院を繼ぐ十一年六月將軍德川吉宗の猶子となる十二年正月親王となる三月知恩院に入り剃髮して名み尊胤と改む尊統入道親王の弟子となり戒を大僧正了鑑に受く十五年九月二品に叙し元文四年十二月薨ず年二十五最勝光院、鷹蓮社深譽と號す一心院に葬る天保九年十月一品を追贈す(野史、大乘院門跡傳)

ヒデザネ 秀眞 備前の刀匠にして永和年間の人なり或は云秀眞の子にして永享比の人と(古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考)

ヒデシゲ 秀重 備前の刀匠にして秀景の子大治保延年間の人なり(古今鍛冶銘早見出)

ヒデシゲ 秀重 備前長船の刀匠にして永享年間の人なり(古今鍛冶銘早見出)

ヒデシゲ 秀重 備後長房流の刀匠にして永享長祿年間の人なり或は云長房三原の一派にして享德比の人又云法華一乘の流にして國吉の子長祿比の人と(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考)

ヒデシゲ 秀茂 見龍子と號す陸奥仙臺の刀匠にして武藏江戸水心子正秀の門人寛政年間の人なり(古今鍛冶銘早見出)

ヒデスケ 秀助 備前長船の刀匠にして康應永年間の人なり或は云氏利の子なりと(古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考)

ヒデスケ 秀祐 藤原姓山城の刀匠來の一派にして正慶年間の人なり(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考)

ヒデタフ 秀任 松尾氏安藝の藩士にして冶刀を能くす元治年間の人なり(古今鍛冶銘早見出)

ヒデチカ 秀近 備前長船の刀匠にして延文年間の人なり或は云光秀の門人にして貞治比の人又云秀光の二子にして應永比の人或は貞和比なりと(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考)

ヒデチカ 英親「タテベサウテウ」

ヒデツグ 秀次「シノキヒデツグ」

ヒデツグ 秀次 來氏山城の刀匠にして國秀の子延文貞治年間の人或は云延慶五年生れ貞治六年歿す年五十八なりと又云鎌倉來の派にして建武比の人なりと(古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考)

ヒデツグ 秀次 備前長船の刀匠にして貞治應安年間の人なり或は云秀眞の子にして長享比の人或は應永比の人にして秀光の子なりと(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考)

ヒデツグ 秀次 左衛門尉と稱す備中萬壽莊の刀匠にして嘉元正和間の人なり或は云青江の一派にして

て次郎左衛門尉と稱すと又云次秀の子にして貞應比の人或は忠次の子にして弘長比の人と(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考)

ヒデツグ 秀次 備中の刀匠にして永享年間の人なり(古今鍛冶銘早見出)

ヒデツグ 秀次 備後三原派の刀匠にして應安年間の人なり或は云行吉の子にして永和比の人又は秀重の子にして文明比の人と(古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考)

ヒデツグ 秀次 五阿彌と號す備後尾道の刀匠にして永正大永年間の人なり或は云安久庄に住す葦山の一派にして明德比の人二世秀次は文安比の人なりと(古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考)

ヒデツグ 秀次 豐後杵綱の刀匠にして明德年間の人なり或は云久安に住すと(古今鍛冶銘早見出)二世秀次は文安年間の人豐後に住す(古今鍛冶銘早見出)

ヒデツグ 秀次 波平秀次と稱す薩摩谷山派の刀匠にして延德年間の人なり(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考)

ヒデツナ 秀綱 美作の刀匠にして本國備前秀貞の子寛元年間の人なり(古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考)

ヒデツナ 秀綱 備前の人にして古刀の鍛工なり或は云應安年間の人なりと又云長船の派にして應安明德年間の人亦秀繩に作る又云畠田の流にして家秀の子正和比の人なりと(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考)

ヒデツナ 秀綱 備前長船小反の刀匠にして秀貞の子文明比の人なり(本朝鍛冶考)

ヒデツナ 秀綱 備前の刀匠にして應永年間の人なり(古今鍛冶銘早見出)

ヒデツネ 秀恒 備前の刀匠にして建武比の人なり(古今鍛冶銘早見出)

ヒデツネ 秀恒 備前の刀匠にして應仁年間の人なり(古今鍛冶銘早見出)

ヒデツラ 秀貫 藤澤清助と稱す越後新潟の刀匠にして元治年間の人なり(古今鍛冶銘早見出)

ヒデトキ 秀辰 藤原姓通稱權兵衛山城守と稱す美濃廳得印派の刀匠にして攝津大阪に住す寛永萬治年間の人なり或は初め肥後守と稱すと云ふ(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考)

ヒデトシ 秀利 來氏山城の刀匠にして貞和年間の人なり(古今鍛冶銘早見出)

ヒデトシ 秀利 備前長船の刀匠にして延文年間の人なり或は云秀光の子にして應永比の人或は貞和比に同名の者ありと(古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考)

ヒデトシ 秀利 備中青江の刀匠にして正和年間の人なり(古今鍛冶銘早見出)

ヒデトシ 秀俊「フサトシ」

ヒデトラ 秀虎 五十嵐金三郎と稱す出羽庄內の刀匠にして水心子正秀の門人文化年間の人なり(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考)

ヒデナガ 秀長 伊豆北條の刀匠にして永享年間の人なり(古今鍛冶銘早見出)

ヒデナガ 秀長 奥田幹右衛門と稱す石見出石の刀匠にして安政元治年間の人なり(古今鍛冶銘早見出)

ヒデノブ 秀信 前田柳太郎と稱す土佐の刀匠にして嘉永年間の人なり(古今鍛冶銘早見出)

ヒデノブ 秀延 山城の刀匠にして建武比の人なり(古今鍛冶銘早見出)

ヒデノブ 秀延 古刀の鍛工にして年代住地詳ならず或は備前にして弘長比の人とし或は播磨の人とす(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考)

ヒデノブ 秀延 備前の人にして古刀の鍛工なり或は云弘安比の人なりと(古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考)

ヒデノブ 秀延 藤原姓豉志度莊の刀匠にして光宗の子文保年間の人なり或は云建長比の人又は行利の子にして永仁比の人或は弘安比の人なりと(古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考)

ヒデノブ 英信「カノイセン」

ヒデノブ 秀信「カノヒデノブ」

ヒデノブ 秀信「カノソイウ」

ヒデノブ 秀信「カノギヨクエン」

ヒデノミヤ 英宮「ユキコニヨワウ」

ヒデノミヤ 英宮「セイインホウシンワウ」

ヒデノミヤ 英宮「フクコナイシンワウ」

ヒデノミヤ 秀宮「ナホヒトシンワウ」

ヒデノリ 秀則 出雲の刀匠にして應永比の人なり或は云則貞の子なりと又云永則の子にして備前吉井の秀則と同人なりと(本朝鍛冶考)

ヒデノリ 秀則 備前長船の刀匠にして應永年間の人なり(古今鍛冶銘早見出)

ヒデノリ 秀則 備前の刀匠にして永享年間の人なり(古今鍛冶銘早見出)

ヒデノリ 秀則 備前吉井の刀匠にして享德年間の人なり亦出雲石見にても所作ありと云或は云永則の門人にして應永比の人なりと(古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考)

ヒデノリ 壽軌 彫工なり江戸に住し雲梯堂と號す岩洞に獅子など殊に美麗にして鮮潔なり赤銅に至りては地金好きみ以て色鈴虫粧なり(劒劍奇賞)

ヒデヒト シンワウ 榮仁親王「エイジンシンワウ」

ヒデヒラ 秀平 備前長船の刀匠にして應永年間の人なり或は云嘉吉比の人又云行正の門人にして正長比の人と(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考)

ヒデヒロ 秀廣 村上幸吉と稱す出羽庄內の刀匠にして水心子正秀の門人文化年間の人なり(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考)

ヒデヒロ 秀弘 備前長船の刀匠にして永和年間の人なり(古今鍛冶銘早見出)

ヒデマサ 秀正 備前の刀匠にして建武比の人なり或は云菅恒の二子にして正治建仁年間の人と(古

今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

ヒデマサ 秀正 備前の刀匠にして應永年間の人なり或は云長船左衛門尉と稱す又云近景の門人にして應安比の人と（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考）

ヒデマサ 秀正 備前長船の刀匠にして秀綱の子文龜比の人なりと（本朝鍛冶考）

ヒデマサ 秀政「カノヒデマサ」

ヒデマサ 英昌「オホモリヒデマサ」

ヒデミチ 秀道 山城の刀匠にして久道の門人寛文年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ヒデミチ 秀道 常陸の刀匠にして市毛主税と稱す文政年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ヒデミチ 秀道 播磨丹調の刀治にして門原玄蕃と稱す元治年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ヒデミツ 秀光 淡路守と稱す出羽秋田の人にして新刀の鍛工なり（古今鍛冶銘早見出）

ヒデミツ 秀光 備前長船の刀匠にして延元永和年間の人なり或は云建武比の人と又云基光の子にして延文嘉慶年間の人と（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考）

ヒデミツ 秀光 備前長船の刀匠にして守助の門人至德比の人なり（本朝鍛冶考）

ヒデミツ 秀光 左衛門尉と稱す備前長船の刀匠にして至德應永年間の人なり或は云應安應永年間の人又云信光の門人にして貞治比の人と（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考）

ヒデミツ 秀光 備前長船の刀匠にして永祿年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ヒデムネ 秀宗 石見の刀匠にして天文年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ヒデムネ 秀宗 備前の人にして古刀の鍛工なり或は云赤隆奥舞草に住す明德年間の人と（古今鍛冶銘早見出）

ヒデムネ 秀宗 木下源八郎と稱す豐前中津の刀匠にして嘉永年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ヒデモト 秀元 彫工なり小柄に俱利迦羅龍、十疋獅子等を彫刻せり（裝劍奇賞）

ヒデモリ 秀守 備前の刀匠にして康安年間の人なり或は云福岡一文字派景秀の子にして延文貞治年間の人と（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

ヒデモリ 秀守 豐後高田の刀匠にして永祿年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ヒデモリ 秀盛 平姓豐後高田の刀匠にして天文年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ヒデヤス 秀安 出羽の刀匠にして我里馬の子永承比の人又は貞應比の人と又云天福比の人にして亦出羽に居ると（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考）

ヒデヤス 秀安 備中荏原の刀匠にして文龜永正年間の人なり（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ヒデヤス 秀康 上野沼田の刀匠にして寛永年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ヒデユキ 秀行 薩原姓江戸木挽町に住す友秀の門人にして元治年間の刀匠なり（古今鍛冶銘早見出）

ヒデユキ 秀行 備前長船の刀匠にして應永年間の人なり或は云文安文明年間の人と（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ヒデユキ 秀行 五阿彌と號す備後尾道の刀匠にして大永年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ヒデユキ 秀行 讃岐志度莊の人にして古刀の鍛工なり或は云藤原姓にして秀延の族正應年間の人と（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考）

ヒデユキ 秀行 讃岐の刀匠にして元祿年間の人なり（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ヒデユキ 秀行 備前長船の刀匠にして寶德年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ヒデユキ 秀幸 備前長船の刀匠にして古刀の鍛工なり（古今鍛冶銘早見出）

ヒデユキ 秀隨 彫工なり江戸に住し短隨風の肉合彫を善くす（裝劍奇賞）

ヒデヨ 秀世 田村詳平と稱し氷心子と號す江戸麻布今里の刀匠にして文政嘉永年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ヒデヨシ 秀吉 京師の刀匠にして齋秀の門人安政元治年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ヒデヨシ 秀吉 豐後の刀匠にして亦日向に住す文明年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ヒデヨシ 秀吉 薩摩谷山の刀匠にして行吉の子寛喜比の人なり（本朝鍛冶考）

ヒデヨシ 秀吉 波平を冒稱す薩摩谷山の刀匠にして文和年間の人なり或は云貞和比の人と又云亦日向に居ると（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考）

ヒデヨシ 秀吉 波平を冒稱す薩摩の刀匠にして應仁年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ヒデヨシ 秀能 山城了戒派の刀匠にして正長永享年間の人なり或は云豐後に移ると又云豐後了戒能直の子にして了戒秀能と稱す應安比の人或は應永正長年間の人なりと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考）

ヒデヨシ シンワウ 秀良親王 嵯峨天皇の皇子母は橘氏天長九年三品に叙ぜらる沒官の書一千六百九十三卷を賜ふ仁明帝の時又沒書四百八十餘卷を賜ふ蓋し橘奈良麻呂の責なり官なり官に累れて上野守となり一品に進む寛平七年正月年七十九にして薨ず（大日本史）

ヒデヨシノ 秀吉五奉行 石田三成、大谷吉隆、長束正家、增田長盛、安國寺惠瓊なり

ビトウ スキチク 尾藤水竹 江戸の儒者なり名は稽高字は希大弦庵又た水竹と號す二洲の長子なり水竹人と爲り豪邁にして自家生産を事とせず赤貧洗ふが如し而して遊寓寄食の徒常に十數人あり其の少長學殖二州に及ばざるも卓識洪量は之に過ぐと安政甲寅十二月十四日を以て歿す（湖山欄詩屏風）

ビトウ トモサダ 尾藤知定（知重或は光房又た知宣に作る）初字は甚右衛門後ち左衛門尉と稱す（逸史に左衛門佐に作る）豐臣秀吉に仕て功を累ぬ天正十四年秀吉知定の勇を愛し讃岐を以て之に封す十五年秀吉薩を征す知定兵三千を率ゐ羽柴秀長に從ひて日向に入る初め知定の封を受くるや兵革連歲相繼ぎ去年の貢皆缺乏し今年の租猶未だ發せず是を以て軍資調せ

ず更に神田佛田を檢し以て資糧に充つ且庸賦を農商に課す薩人夜來り宮照繼潤の陣を斫る諸部人を中軍に驅す秀長赴き救はんと欲す知定固く執て可かず之を扼す天明耳川を涉る知定復之を止む繼潤矢丸を知定に乞ふ復肯ぜず秀吉怒り知定の封を奪ひ免じて庶人と爲す（按ずるに清正記に云ふ天正十六年四月朔秀吉知定を大阪に召して其封を沒收すと）知定は石田三成の舅たり三成に懲て敕されんことを請ふ三成爲に請て曰く臣舅知定罪を被りて放逐せらる故に恨を懷き叛を謀る臣舅婿を以て懲ふ實に忍びざる所なり然れども親姻を以て洪恩に換ふる能はずと秀吉大に怒り知定を誅せんとす三成竊に告げて脫せしむ知定大に驚き奔りて北條氏に仕ふ秀吉三成の忠誠にして親姻を省みざるを以て寵遇益々渥し人皆其の舅を賣るを惡む十八年北條氏滅ぶ知定佐久間安次兄弟嘗て北條氏に懲り其の亡ぶるに及て敕に遇ふと聞き自ら謂らく柴田勝家の興黨と雖ども敕に遇ひて祿邑を賜はるを得我嘗て秀吉微々の日に仕ふ寄さるゝや必せりと乃ち髮を削り衣を染めて秀吉の東行を酒匂川邊に候ふ秀吉乃ち之を認め左右に問ふ曰く尾藤なり秀吉勃然として曰く安次兄弟の北條氏に從ふは共に義に赴くものなり知定先きに躍を犯す若し敕を得んと欲せば屈勉して潛に先驅に從はゞ則ち可なり而して孤に對し弓を引き城陷るに迨びて出降る惜むべきの甚しきなりと乃ち捕卒に命じて捕へしめ身自ら之を誅す小笠原貞慶亦た知定を扶けしに坐し其の邑松本を奪はる知定子あり某字は金助細川忠興に仕へ邑三千石を食む其の子金右衛門從ひて島原の賊を攻め平塚重近と肉薄して登り血戰す賊金右の口を刺す終に瘡る（野史）

ビトウ ニシウ 尾藤二洲 德川幕府の儒官なり名は孝肇字は志尹、二洲は其の號、一に約山と號す通稱瓦佐伊藤川江村の人父舟を操る業とす二洲幼にして足疾あり大阪に來り片山北海に受け所謂る復古學を講習す是の時安藝の頼春水亦た武友たり二洲と相善し洛閩の書を得て之を喜ぶ乃ち二洲に勸めて之を讀ましむ二洲亦甚だ之を嘉みし以て正學となし相ひ共に斯に從事す又中井竹山の兄弟と親しみ善し寛政中德川幕府召して昌平黌の教官となし俸二百石を賜ふ其の足疾あるを以て特に官舍を昌平黌の境内に賜ふ後ち第を豐岐阪に賜ひて老を養はしむ二洲人と爲り恬淡簡易文は歸震川を愛し詩は陶柳を愛す老に及びて又白傅を喜ぶ又た東儒名分を濟亂するを憎み詳に和漢名稱の當否を辨ず文化十年歿す年六十九輒山陽嘗て其の著素餐錄を評して曰く識悟超詣、明の薛劾二氏の下に在らずと著はす所素餐錄の外正學揮掌、稱謂私言、靜寄餘筆、冬讀書餘、中庸闡解、易係齋義、論孟講旨、學庸寄旨、屢學指要、文章一隅、靜寄錄著、靜寄軒文集あり（續近世叢語、事實文編、續諸家人物志）

ビトク 未得「イシダビトク」

ビトシアン サルンド 日歲庵猿人 狂歌師なり初め智惠猿人と號し本所桂連の例者たり姓永來氏にして通稱新左衛門といふ最初日本橋釘店に住し積問屋を業とせしが故ありて後に本所番場に移り住み諸侯への金銀用達を業とし生業富裕なり而して年十八人を松下に會し各詩歌あり三井寺門主圓滿院常尊第一たり其の餘之に繼ぐ題して松蔭錄と云ふ是日氏を改め一松と稱す青蓮院尊朝法親王記を作りて之を賜ふ載て扶桑拾葉集にあり雜齋の曾孫名は拙忠字は伯道後名を拙字を十竹と改め昔櫻子又夜雨村と號す通稱又之進儒を以て水戸義公に仕ふ（書畫得聞）

ビトツヤナギ カゲン 一柳嘉言 大阪の和學者なり吉葛廬と號し七郎と稱す村田春門の子なり新紅塵集の著あり

ビトツヤナギ キホウ 一柳龜峰 名は壽愷字は悌甫通稱吉之進後に胖右衛門と改む龜峰は其號伊藤小松藩士なり文化元年六月十八日生る文政辛巳中小姓に除し天保甲午齋庸仕を致し祿を襲き馬廻に遷り幾くも無く參政に擢任せらる弘化丙午藩侯の駿府を衛るに當り家老職を攝して從ふ安政甲寅江戸に祗役す是より先き既に疾を獲其江戸に在るや慨然目に瀛を而して猶力めて事を視る平日の如し侯特に命して家に歸り養はしむ途江州草津驛に至り遂に卒す實に安政二年二月七日年を得る五十二龜峰幼にして聰慧屹として成人の如し稍長して學を好み經學の志あり樂を近藤篤山に受く又江戸に遊び昌平黌に學ふ年あり旁ら武技を好み最も書札に巧みなり其楷行二體の如きは筆力の遒健

ビトツバシ 秀政 一橋家（ヒトツバシムネタダ）の子孫なり一橋家と云ふ

ビトツバシ トヨチヨ 一橋豐千代「トクガハイヘナリ」

ビトツバシ ハルナリ 一橋治濟 宗尹の三子なり父の後を繼ぎ從三位に叙し左近衛權中將に任じ民部卿を兼ね從一位に累遷し大臣に准ず文政十年任じ民部卿を兼ね從一位に累遷し大臣に准ず文政十年贈り復た太政大臣を贈らる長子家齊入て正統を承ぐ次是より先き既に疾を獲其江戸に在るや慨然目に瀛を而して猶力めて事を視る平日の如し侯特に命して家に歸り養はしむ途江州草津驛に至り遂に卒す實に安政二年二月七日年を得る五十二龜峰幼にして聰慧屹として成人の如し稍長して學を好み經學の志あり樂を近藤篤山に受く又江戸に遊び昌平黌に學ふ年あり旁ら武技を好み最も書札に巧みなり其楷行二體の如きは筆力の遒健

ビトツバシ ムネタダ 一橋宗尹 將軍吉宗の第四子にして家重の季弟也母は阿久方谷口氏享保六年閏七月生る初字は小五郎一橋家と號す甘年九月元服す吉宗諱字を賜ひ從三位に叙し刑部卿に任じ左近衛權中將を兼ね族德川を稱す寛保元年十一月一橋館に徙る延享二年十一月參議に任ず三年九月和泉播磨甲斐武藏下總下野等の田十萬石を以て采邑となす明和元年十二月廿二日薨ず年四十四法名冬嚴性遠覺了院と號す權中納言を贈る長子を重昌と曰ふ左近衛權少將宗知の後を承ぎ左近衛權少將に任じ越前守を兼ぬ次を重富と曰ふ重昌の後を承け正四位下權中將に至り越前守を兼ぬ次を治之と曰ふ出て〻黑田氏を繼ぎ侍從に任じ筑前守を兼ぬ治濟嗣て立つ（野史）

ビトツマツ ザツサイ 一松雜齋 近江高島郡の人なり名は直諒、左兵衛と稱す雜齋は其の號、本氏は淡海、新庄駿河守直頼の弟なり天正元年八月大風雨唐崎の松倒る相傳ふ此松は天智帝の植うる所と雜齋之を歎き繼植せんとして松を四方に求め十八年比叡山に形容古松の如きを得植て地を穿て寶珠を得たり明尊第一たり其の餘之に繼ぐ題して松蔭錄と云ふ是日氏を改め一松と稱す青蓮院尊朝法親王記を作りて之を賜ふ載て扶桑拾葉集にあり雜齋の曾孫名は拙忠字は伯道後名を拙字を十竹と改め昔櫻子又夜雨村と號す通稱又之進儒を以て水戸義公に仕ふ（書畫得聞）

ビトツヤナギ カゲン 一柳嘉言 大阪の和學者なり吉葛廬と號し七郎と稱す村田春門の子なり新紅塵集の著あり

ビトツヤナギ キホウ 一柳龜峰 名は壽愷字は悌甫通稱吉之進後に胖右衛門と改む龜峰は其號伊藤小松藩士なり文化元年六月十八日生る文政辛巳中小姓に除し天保甲午齋庸仕を致し祿を襲き馬廻に遷り幾くも無く參政に擢任せらる弘化丙午藩侯の駿府を衛るに當り家老職を攝して從ふ安政甲寅江戸に祗役す是より先き既に疾を獲其江戸に在るや慨然目に瀛を而して猶力めて事を視る平日の如し侯特に命して家に歸り養はしむ途江州草津驛に至り遂に卒す實に安政二年二月七日年を得る五十二龜峰幼にして聰慧屹として成人の如し稍長して學を好み經學の志あり樂を近藤篤山に受く又江戸に遊び昌平黌に學ふ年あり旁ら武技を好み最も書札に巧みなり其楷行二體の如きは筆力の遒健

氣品の神儁殊に妙城に遊す資性忠鑒正毅人に接する寛にして感あり事を作す敏捷にして精緻善政となる二十年職を授け農を勸め文教を崇ひ武技を奬し治績大に擧る其間災荒頻て至り或は邊警急を告げ國家頗る多事なるに際するも胸中成竹あり計畫料理其宜しきを得從容迫らす線々餘裕あり就中訟を聽き獄を斷するが如きは最も其長する所にして老吏も難ども能く及ふものなし初め小松藩鄰藩と界を爭ひ數十年斷へず龜峰首として之を治め親ら鄰藩の有司と會議熈酬して寛に鄰交を修め故の如くならしむ藩侯厚く之れを賞す平生韓魏公の人と爲りを慕ひ毎に其の冒を擧げて之れを誦せりといふ

ヒトツヤナギ　ゲンベエ　一柳源兵衛　藝侯に仕へて大扈從たり貞享元年役に江戸に赴く家貧にして行を治する能はず其の族余吾彌一兵衛爲めに之を資く行くこと日あり中江玄齋と云ふもの源兵を送り並びに余吾及び散樂工中村市之進を招く酒醴にして余吾源兵に戲れて曰く聒々する勿れ汝の役に赴て汝の力に賴るに非ざる也と一坐相目す源兵心に之を怒り乃ち盃を余吾に屬して膝を促がし之に近きて曰く嚮の一語僕以て答ふるを莫し請ふ此を以て答へんと語未だ畢らざるに刀を抜きて其の額を擊つ血坐に洒ぐ余吾亦其佩刀を抜く刀未だ室を離れざるに斃る源兵曰く彼れ未だ其の刀を抜かざるに及びて之を斃すは不可なりと乃ち余吾の刀を引き自ら其の肩に傷つけて曰く而して後ち彼れ我と鬨つながら其の道を得たりと中江源兵に謂て曰く此くの如し子の罪は固より宜しく然るべきのみ源兵坐に復し將に自刎せんとし顧みて中村に謂て曰く爾吾家に往き之を吾妻に告げんことを煩はす且我が爲めに之に語りて曰く吾れ將に自刎せんとす女其の裝を治して之を中江氏に致せと中村往くを肯んぜず源兵之を强ゆ乃ち往て其の家に至り刺を通じて入る源兵の妻奥氏人をして燭を執らしめて出づ中村故を告ぐ奥氏顏色自若として徐ろに問て曰く其人今日の事能く其の志を遂げて士人の所爲に愧ぢざる乎曰く然り奥氏曰く可なり其人更に託する所あらざる乎中村乃ち其の意を致す奥氏曰く此くあるべしと乃ち裝を具して之を致す源兵狀を具して以聞す官、吏を遣して此に赴む遂に中江氏に自刎す奥氏寡居して其の父母に寄る父母其の少にして子なきを憫み爲に再嫁を議す肯ぜず則ち陰かに族を集めて議す請定まりて奥氏なして知らしめず其の納幣の日に及びて乃ち之を告ぐ奥氏竊かに室に入る一家其の久しくして出ざるを怪しみ其の室を窺へは則ち自屠して死す乃ち大に駭く是に於て遂に其の夫に合葬し以て其志を成す（事實文編）

ヒトツヤナギ　チフル　一柳千古　江戸の歌人なり八町堀に住や字萬蹕山と號し又章堂と曰ふ千蔭門にして最も詠歌を善くし又た文章を巧みにす文政中歿す（鑑定便覽）

ヒトツヤナギ　テウアン　一柳蝶庵　名は直泰後直卿と稱し晩年に賴德と改む小字を內記と云ふ蝶庵は其號なり又嵯齋と號す一柳監物直盛の玄孫なり祖考藏人直賴伊豫國周布郡居二郡の中一萬石を食み周布郡小松に治す考を直治と曰ふ寛文六年八月小松に封を襲き從五位下に叙し因幡守に任生る寶永二年四月封を襲る正德二年女院清岡寮相をして江蒙る正德二年女院清岡寮相をして江戸に使せしむるや幕府の命を受け接待の事に當る享保元年十月四日江戸の私邸に薨す年五十有九其絕命の詞に曰く人生多情蝴蝶夢、覺來即復未生初、江戸大崎山壽昌寺に葬る法諡して故因州刺史蝶庵祖覺居士と曰ふ蝶庵仁故を以て家臣恩に懷き邑民惠に感て經史を研鑽し詩歌を嘯し又畫に巧なり殊に筆札に於て深く其蘊奥を極む草書は其最も長する所にして筆勢遒勁氣韻生動書を鑑する者其筆蹟を探漁に非ず必ず唐人能書家の手に成觀て皆是れ邦人の揮洒に非りしものならんと曰ふと云蝶庵祈願する所あり千個の額字を書し木に彫らしめ之を各地の寺社に奉納せり其存するもの今尙ほ多し

ヒトツヤナギ　トウエン　一柳蝶庵　名は直卿と稱し晩年に賴德と改む小字を內記と云ふ蝶庵は其號なり又嵯齋と號す一柳監物直盛の玄孫なり祖考藏人直賴伊豫國周布郡居二郡の中一萬石を食み周布郡小松に治す考を直治と曰ふ寛文六年八月小松に封を襲き從五位下に叙し因幡守に任生る寶永二年四月封を襲る正德二年女院清岡寮相をして江戸に使せしむるや幕府の命を受け接待の事に當る享保元年十月四日江戸の私邸に薨す年五十有九其絕命の詞に曰く人生多情蝴蝶夢、覺來即復未生初、江戸大崎山壽昌寺に葬る法諡して故因州刺史蝶庵祖覺居士と曰ふ蝶庵仁故を以て家臣恩に懷き邑民惠に感て經史を研鑽し詩歌を嘯し又畫に巧なり殊に筆札に於て深く其蘊奥を極む草書は其最も長する所にして筆勢遒勁氣韻生動書を鑑する者其筆蹟を探漁に非ず必ず唐人能書家の手に成觀て皆是れ邦人の揮洒に非りしものならんと曰ふと云蝶庵祈願する所あり千個の額字を書し木に彫らしめ之を各地の寺社に奉納せり其存するもの今尙ほ多し

ヒトツヤナギ　ノブタカ　一柳宣高　本は直泰後直卿と稱し晩年に賴德と改む小字を內記と云ふ蝶庵は其號なり又嵯齋と號す一柳監物直盛の玄孫なり祖考藏人直賴伊豫國周布郡居二郡の中一萬石を食み周布郡小松に治す考を直治と曰ふ寛文六年八月小松に封を襲き從五位下に叙し因幡守に任生る寶永二年四月封を襲る正德二年女院清岡寮相をして江戸に使せしむるや幕府の命を受け接待の事に當る享保元年十月四日江戸の私邸に薨す年五十有九其絕命の詞に曰く人生多情蝴蝶夢、覺來即復未生初、江戸大崎山壽昌寺に葬る法諡して故因州刺史蝶庵祖覺居士と曰ふ蝶庵仁故を以て家臣恩に懷き邑民惠に感て經史を研鑽し詩歌を嘯し又畫に巧なり殊に筆札に於て深く其蘊奥を極む草書は其最も長する所にして筆勢遒勁氣韻生動書を鑑する者其筆蹟を探漁に非ず必ず唐人能書家の手に成觀て皆是れ邦人の揮洒に非りしものならんと曰ふと云蝶庵祈願する所あり千個の額字を書し木に彫らしめ之を各地の寺社に奉納せり其存するもの今尙ほ多し

ヒトツヤナギ　チフル　一柳千古　江戸の歌人なり八町堀に住や字萬蹕山と號し又章堂と曰ふ千蔭門にして最も詠歌を善くし又た文章を巧みにす文政中歿す（鑑定便覽）

ヒトツヤナギ　テウアン　一柳蝶庵　名は直泰後直卿と稱し晩年に賴德と改む小字を內記と云ふ蝶庵は其號なり又嵯齋と號す一柳監物直盛の玄孫なり祖考藏人直賴伊豫國周布郡居二郡の中一萬石を食み周布郡小松に治す考を直治と曰ふ寛文六年八月小松に封を襲き從五位下に叙し因幡守に任生る寶永二年四月封を襲る正德二年女院清岡寮相をして江戸に使せしむるや幕府の命を受け接待の事に當る享保元年十月四日江戸の私邸に薨す年五十有九其絕命の詞に曰く人生多情蝴蝶夢、覺來即復未生初、江戸大崎山壽昌寺に葬る法諡して故因州刺史蝶庵祖覺居士と曰ふ蝶庵仁故を以て家臣恩に懷き邑民惠に感て經史を研鑽し詩歌を嘯し又畫に巧なり殊に筆札に於て深く其蘊奥を極む草書は其最も長する所にして筆勢遒勁氣韻生動書を鑑する者其筆蹟を探漁に非ず必ず唐人能書家の手に成觀て皆是れ邦人の揮洒に非りしものならんと曰ふと云蝶庵祈願する所あり千個の額字を書し木に彫らしめ之を各地の寺社に奉納せり其存するもの今尙ほ多し

ヒトツヤナギ　ナホオキ　一柳直興　伊豫西條の城主直盛の孫にして直重の子なり直重小字は入道從五位下に叙し丹後守と稱す父に繼て西條城に居り邑三萬石を食む直重卒して直興嗣き叙爵せられて監物と稱し自ら二萬五千石を領す他の五千石を割て直照に與ふ寛文五年命を受て禁宮を修造し事成るの日私かに邑に還りて遷幸の期に會せず且邑民を虐げ淫逸度なく家事正しからず依て七月邑を除かれ金澤に謫せられ家亡ぶ（野史）

ヒトツヤナギ　ナホスエ　一柳直末　一柳宣高の孫、河野通直の支族なり美濃の人父直高又右衛門と稱す直末初字を市介と曰ふ世々土岐氏に屬す土岐氏亡びて後信長及び秀吉に屬し黃幌七人に列す所謂大彌金右衛門、一柳彌惣右衛門、尾藤知定、神子中左衛門、小野清二郎、一柳直末是なり天正十二年秀吉織田信雄と矛盾す直末不破源六を美濃竹鼻城に攻めて之を陷る秀吉賞して竹鼻城を賜ひ食邑三萬石を食む尋で從五位下に叙し伊豆守と稱す十八年關白秀吉小田原を征伐す直末諸將と山中城を攻む拔けず直末奮て曰く今日唯く殊死あるのみ遂に戰死す羽柴秀次に隸し出て胄襲を結び其の餘を絕ち直に前て接戰す擢ふ所拔群す軍勢大に振ふ會く銃丸に中て斃る從者八人皆な先を爭ひて死す黑田孝高狀を具して良聞す秀吉時方に鑿す箸を投じ嘯を吐き歎じて曰く惜哉小田原城と雖も彼れに換ふべからずと之が爲めに怡ばざること數日實に天正十八年三月二十九日なり弟直盛代りて兵を率ゐ赴き攻めて疾戰終に城を拔く秀吉直盛を以て其の祀を繼がしむと云ふ（野史）

ヒトツヤナギ　ナホイヘ　一柳直家　伊豫四條の城主一柳直盛の次子なり小字は彈門慶長十年江戸に來りて賀に擬す十四年從五位下に叙し美作守に任ず寛永十二年播磨の田五千石を頒ちて之を領す父直盛卒するに及び其の播磨、伊豫の遺邑二萬三千六百石を加へ幕府に請ひて城を伊豫川上の地に築かんと欲して果さず寛永十九年五月卒す子なし先に小出吉親の二男直次を養ひて子と爲す未だ聞せずして卒ず故に其の三分の二を割ちる直次を以て其の後と爲す直次の子孫世々播磨の田を食み小野に居る世々侯籍に列す（野史）

ヒトツヤナギ　ナホイヘ　一柳直家　伊豫四條の城主一柳直盛の次子なり小字は彈門慶長十年江戸に來りて賀に擬す十四年從五位下に叙し美作守に任ず寛永十二年播磨の田五千石を頒ちて之を領す父直盛卒するに及び其の播磨、伊豫の遺邑二萬三千六百石を加へ幕府に請ひて城を伊豫川上の地に築かんと欲して果さず寛永十九年五月卒す子なし先に小出吉親の二男直次を養ひて子と爲す未だ聞せずして卒ず故に其の三分の二を割ちる直次を以て其の後と爲す直次の子孫世々播磨の田を食み小野に居る世々侯籍に列す（野史）

ヒトツヤナギ　トモヨシ　一柳友善　金は直泰後直卿と稱し晩年に賴德と改む小字を內記と云ふ蝶庵は其號なり又嵯齋と號す一柳監物直盛の玄孫なり祖考藏人直賴伊豫國周布郡居二郡の中一萬石を食み周布郡小松に治す考を直治と曰ふ寛文六年八月小松に封を襲き從五位下に叙し因幡守に任生る寶永二年四月封を襲る正德二年女院清岡寮相をして江戸に使せしむるや幕府の命を受け接待の事に當る享保元年十月四日江戸の私邸に薨す年五十有九其絕命の詞に曰く人生多情蝴蝶夢、覺來即復未生初、江戸大崎山壽昌寺に葬る法諡して故因州刺史蝶庵祖覺居士と曰ふ蝶庵仁故を以て家臣恩に懷き邑民惠に感て經史を研鑽し詩歌を嘯し又畫に巧なり殊に筆札に於て深く其蘊奥を極む草書は其最も長する所にして筆勢遒勁氣韻生動書を鑑する者其筆蹟を探漁に非ず必ず唐人能書家の手に成觀て皆是れ邦人の揮洒に非りしものならんと曰ふと云蝶庵祈願する所あり千個の額字を書し木に彫らしめ之を各地の寺社に奉納せり其存するもの今尙ほ多し

ヒトツヤナギ　トモヨシ　一柳友善（二代）　金工なり伊左衛門と稱す水戶曲尺手町に住し後ち江戸東叡山の近邊に移り辻正親を師として裝劍彫工を能くせり（裝劍奇賞）

ヒトツヤナギ　ナホモリ　一柳直盛　竹鼻城主直末の弟なり初字は四郎右衛門、天正十二年直末秀吉に從て小田原を征し山中城を攻て戰死す直盛秀吉の命を受け兄に代て家を繼ぎ封を尾張黑田城に徙す食祿舊に依る十九年十一月從五位下に叙し監物と稱す次年正月祿一萬石を加賜す慶長庚子の亂起るや家康に東征に從はんと欲し七月居城を發し山道を歷て高崎に到り井伊直政に謁して旨を請ふ家康其の志を賞し貞宗の刀を賜ひ小山に從ひ八日命を裏けて居城に還る石田三成書を送りて諭招す直盛怒り應へずして清須に赴き福島正則等と齊議す是より先き織田秀信岐阜城を守りて東軍を拒ぐ是に於て福島正則池田輝政攻て城の腹背に出づ直盛淺野左京大夫と其の別堡を攻む城險にして百餘人み斬る餘兵城に走る城中驚擾秀信遂に降を乞ふ井伊直政等命を受て長松の處守を群議す本多忠勝曰く能く戍に任ずる者は唯く直盛のみと是に於て直盛往て長松を襲ふ直盛嘗て士卒に命じて疑はしき者を捕へしむ乃ち其の人を擄へて大垣の計を劫問す家康犬山に到るに及び直盛赴き謁す十一月封を伊勢神戶城に轉じ祿一萬石千石を加へ併て五萬石を食む十年二男直家を江戶に遣して質子に擬す秀忠其の志を嘉みし月俸八十四口を賜ふ大阪の兵起るに及び直盛師に從ひて首四十級を得寛永十三年六月邑一萬八千六百石を加賜し封を伊豫の西條城に徙す此の年八月封に就て途に疾に嬰り大阪城に卒す年七十二法名心空思齋多質院と號す三子あり直重、直家、直賴（野史）

ヒトツヤナギ　ナホヨリ　一柳直賴　一柳直盛の第三子なり父卒するの後其の遺邑伊豫の田一萬石を頒ちて小松に居る從五位下に叙し蔵人と稱す子孫相傳へて世々侯たり（野史）

ヒトツヤナギ　ノブタカ　一柳宣高　本伊豫の人河野通直の子なり大永中通直卒し家襲ふ宣高美濃に移りて厚見郡中野を領し守護土岐氏に屬す太郎左衛門と稱す後ち刑部大輔となる或時土岐氏宣高に謂て曰く刑案と名族吾倫にあらず一坐の譚みなし難し宣高頓首して曰く臣實は河野氏なり宗義へ族を稱するは愚中の愚なり庶幾くは氏族を賜ふを得んと土岐氏固辭す宣高强て請ひて止まず土岐氏一日廟を賜ふ宣高招に應じて赴き復た姓氏を請ふ土岐氏庭前の四水を眺め民數百襲笠を被り道上に候するを望見し卒を遣はして之を問はしめて曰く何物の村民ぞ敢て相君の馬前を冒かす衆對て曰く犬山の民訴ふる所ありて來ると乘叱して曰く小民無禮なり何ぞ退かざると衆從はず乘扇を把て卒を麾く卒皆刄を震はし叫喊之に驚す衆大に駭きて奔潰す成瀨之を如何ともする能はず乃ち其の爲す所を聽る才功遂に成る川磨き五十步可り長さ七八里名けて新川と曰ふ爾來數十年濃の害は菖の如くにして尾獨りと云ふ乘後ち果官して參政に至り國政を與かり聞く藤千石を食む重れて國學を設くるの日細井平洲と力を協して學規を定む尋て大司農を兼れ命を受けて農府を改革す凡そ事を執る壹に清心を以て事を省る天明甲辰年歛し食乏し富民風化して貧窶を賑濟す自から巡視して賞を四方に行ふ明年大に年あり侯喜びて周れく農夫を賞し特に乘に黃金及び時服を賜ふ幾ばくもなく病を以て骸骨を乞ひ瓊邑翁と號して隱居す四年復た世子の大傅と爲り奮々輔弼す後ち致仕して寛政九年二月二日歿す年六十九（續諸家人物志、名人忌辰錄、墓記）

ヒトツヤナギ　クワクザン　人見鶴山「ヒトミイウゲン」

ヒトツヤナギ　シウスケ　人見周助「センリウ」

ヒトツヤナギ　ダウセツ　人見道設「ヒトミボウサイ」

ヒトツヤナギ　トウネイ　人見藤寧、秋田佐竹家の藩士なり字は子安通稱常治主鈴字右衛門後に但見と改む蕉雨齋、長流、鰐翁、看山樓、江嶽人、黑甜病瘦ともに皆其號なり博覽强記常に羽陰の舊記の沒せんことを憂へ孜々として其集録に努め現今其貢ふ所尠少ならず著書頗る多く黑甜瑣語二十卷、蕉雨齋吟稿二卷、羽陰風雅二卷、蕉雨齋叢書九帙、井窓夜話三卷、羽陰詩稿二卷、臥遊十記四卷、蝸叢錄五卷、蘚錄五卷、野路の花二卷、風花餘瀋紀行四種（春の路草夏の木草秋の田草冬の枯草）等あり文化元年五月卒す年四十四

ヒトミ　ハクキ　人見伯毅　儒者なり名は伯毅、字は元德、友元の伸子詩名一時に高し（鑒定便覽）

ヒトミ　ヘイタイ　人見平惠　江戸の醫師なり名は信玄字は子直幼名は熊吉文化三年四月二十九日歿す本所本法寺中本妙寺に葬る（江戸名家墓所一覽）

ヒトミ　ヘイリャウ　人見平良　江戸の醫師なり名は正字は子順寛政十年六月二十三日歿す本所本法寺中本妙院に葬る（江戸名家墓所一覽）

ヒトミ　ボウサイ　人見懋齋　水戸藩の儒士なり通稱は又左衛門名は傳字は士傳、懋齋は其の號、初め剃髮して道設と稱す卜幽の姪なり本姓は藤田氏卜幽子なし養て子とし其の家を繼がしむ林鵞峯及び朱舜水に從て儒を學ぶ懋齋幹事の才あり上書して曰く史館修撰の事衆議紛紜決せず絲毫を置かんことを請ふと義公之れを可として曰く然らば學術言行ともに其の任に當らんものを投票すべし寡人亦之れに與からんと之を開き看るに君臣共に懋齋を選擧せり是に於て始めて總裁を置き懋齋を以て之れに充つ時に天和三年なり後寺社奉行に轉ず蓋し義公淫祠新寺を毀ち破戒の僧に命じ薙髮せしめんとす故に此の命ある大に見る所あるなり元祿九年九月二十三日歿す相州鎌倉扇谷に葬むる詩文集に井々堂稿あり（菩薩得開、墓誌、鑒定便覽）

ヒトミ　ボクイウケン　人見卜幽軒　儒者なり名は壹字は道生、卜幽軒は其の號、別に白貫園の號あり又林塘庵と稱す丹波の人なり本姓は小野自ら脩卜幽軒家貧なるを以て常に傭書して義父を養ふ二十歳に及びて自ら其の業の淑からざるを歎じ舊然として始て讀書を學び藏書の人に依り借りて手寫し寫して之を讀み日夜怠ることなく寢食を忘るゝに至る既にして柏原氏殁す乃ち其の本姓に復す是に於て嘗得庵に就て學び林羅山に從ふ遂に鄉里の爲めに稱せられ書生簽を負ふ者門に盈つ時に後水尾帝詔して宋朝類苑を官板に鐫ぜしめ卜幽軒に命じて訓點を加へしむ既にして成りて之を獻じ即ち一部を賜はる鷹司左大臣學を好みて卜幽軒を招き其の講義を受く近衛關白鷹山公及び下冷泉羽林譚玄厚く之を遇す其の他當朝の縉紳貴顯にして學を嗜むの人卜幽軒に就く者少からず寛永戊辰始めて江戸に來游し水戸威公に仕へて侍講となる是れ江戸に於る儒者の始めなり幕府諸家の系譜を纂集せる時に卜幽軒其の編著に參與す今の寛永系圖是れなり又林春齋本朝通鑑を修せし時卜幽軒既に衰晩の年なりしが日々國史館に至り之を校讀する一字淵さずと云ふ其の七十の賀筵に義公其の廬に至り鳩杖以下の諸品を賜ひ諸文人と詩を賦して之を祝せり後眼ゑ患て退き幾くもなく寛文十年七月八日病みて歿す年七十二著す所の書に五經童子問答、莊子口義棧航、林塘集、東見記あり其の餘記文雜錄甚だ多し遺文殘稿の如きは堆々として笥に滿つと云ふ（人見卜幽軒傳、菩薩得開、續諸家人物志）

ヒトミ　ヨネザウ　人見米三　陸軍少兵少尉なり京都府出身にして明治三十七八年日露戰役に於て第十師團後備步兵第二十聯隊附として從軍中三十七年十月十六日清國盛京南沙河戰鬪の際負傷同二十五日遼陽兵站病院に於て死去す

ヒトヤス・シンワウ　人康親王　仁明天皇の皇子光孝天皇の同母弟なり四品に叙し彈正尹に任ぜらる法名法性、山科宮、又北野親王と號す貞觀十四年五月五日薨ず（皇胤紹運錄）

ヒナキ　雛龜　桃江園と號す狂歌師なり畑木氏俗稱は津國屋藤四郎京橋山城河岸に住む世に津藤と稱す華奢風流を好む書を星池翁に學び師と伯仲の評あり又俳諧を嗜み俳名を仙鳩と云ひ狂歌は初代彌生庵の社中にて桃江園と號す後に源僧（ミナモト改め別に鶴の門又は一鱗堂と云へり後稱したる桃の本の號を名乘りて桃の本ノヤマモト）と改む別にて桃江園と號す

ヒナダ　チヒロ　雛田千尋　女子教育家なり越後國加茂の產にして勤王家雛田松溪の孫なり幼にして一家離散の不幸に際會し弟作樂と相携へて上京す女子高等師範學校を卒業の後大阪高等女學校に教鞭を執りしが女子大學の創立せらるゝや入りて其教授兼舍監となり令聞あり人の結婚を勸むるあるも之を斥け終生獨身を以て教育事業に眞瘁せんとの決心固かりしが明治四十一年九月廿一日病を以て鄉里に逝く年四十一

ヒナタ　バイザン　日向梅山　狩野家風の畫を善くす會津の人名は忠字は子信俗稱衛士幼より會津侯に仕へ祿五百石を領す和漢の書に通じ又書に工なり侯嘗て靈舟の畫屏を愛し之を座側に置き梅山をして寫さしむ畫法雄勢原圖に彷彿たり觀る者感嘆せざるはなし人あり張子房を繪かんとを請ふ作らずして曰く我未だ子房の服飾を詳にせず苟も儒生と呼ばれ之を畫く時は人或は證を取らん我の敢てせざる所なり晚年致仕して髮を削り逍遙自適世を終ふ文化年中の人（畫家人名辭書）

ヒナツ　シゲヨシ　日夏重能　天道流の劍客にして江州荒神山の城主京極高賢の子なり喜左衛門と稱す重能幼より刀槍の術に精しく兼ねて書を善くす嘗て江戸の人齋藤牛之助に從ひ天道流の槍法を以て其の妙奧に達す後ち豐臣秀頼に仕へて慶長冬夏の役に武功を顯はす後江州に歸る寛文三年九月十八日歿す年七十二（事實文編、武術流派錄）

ヒナツ　ヨシタダ　日夏能忠　天道流の劍客なり彌助と稱す重能の子、幼より刀槍の術を好み父の傳を承けて其の精妙を得兼ねて加古正眞に就て其の術を研精す貞享三年六月二十九日丹州黑岡に歿す年六十二（事實文編、武術流派錄）

ヒナメシノ　ワウシ　日並知皇子「クサカベワウジ」

ヒナヤ　リフホ　雛屋立圃　俳諧師なり又書畫を能くす野々口氏、名は親重、松齋と號し俗稱を紅屋庄右衛門（一に次郎左衛門一に市兵衛又た宗左衛門に作る）と曰ふ丹州保津の人京師に出で、雛人形を製ぐ因て呼びて雛屋と曰ふと和歌を烏丸光廣に書を尊朝親王に學び兼ねて又た俳諧に巧にして貞德門の二客と稱せらる畫は土佐氏或は謂ふ狩野氏の門に出づと寛文九年九月病て歿す年七十一醒世翁曰く立圃は專ら浮世繪を畫けり醫師中川喜雲作の草雙紙の挿畫は多く立圃の手に成ると又許六が歷代滑稽傳に雛屋立圃は貞德門人にして撰集數多あり又畫をよくす京童と云ふ名所記圖書あり云々竹齋の畫も亦た立圃なりと著す所の書、はなひ草、德萬歲、花月千句、あだ花、歸花、明鏡、独中記、鵲鷺千句、碁打千句、河舟、みこの舞万句、若楓、小町語、暮紫集、老鳥千句、すり火打、ふほし箱、片輪車、覗はいかい、詞よせ、大岩、空つぶて、江戸紫、こきりこ、つづ

ら折、雜談集、句あり曰く「海棠かいやさやうにはなしの花」（類考追考、俳林小傳、續本朝畫史）

ヒネノ　キャウスイ　日根野鏡水　高知藩の儒者にして名は弘亨、初の名は弘亨、字は大炯通稱惠右衛門、後修平と改む弘祥の子なり高知藩の士にして初め大扈從となり後擢られて教授館の學頭となる其學常の師なく最も詩に長じ江戸に官遊して菊池五山、大窪詩佛、佐藤一齋等を師友とす五山其詩を評して當時四國の名家古賀穀堂、柴野碧海等の及ばざる所となす輯山陽また之を四國の巨擘となせり安政元年歿す著述四書國字解、詩集あり（日本教育史資料）

ヒネノ　タイザン　日根對山（一に日根野に作る）文人畫家なり名は盛長字は小年、和泉堺の人京都に居り畫名高く詩人星富海屋等と友たり性豪放にして酒を嗜む曾て雪ふるの日島津久光の宴席にあり毫も怖れ憚るの意なく身を横さまにして醉ふて放歌す席上劉玄濤が雪中に孔明を訪ふの圖を畫く氣韻頗る奇妙一座驚嘆す歌人景常なるものあり興に乘じ一首を其の上に題す對山忽ち眼を瞋らして曰く汝何ぞ我畫を汚すや汝が歌我畫に題するの筆に非ずと罵りて止まず人の宥に依て僅かに解くと云ふ明治二年三月十三日歿す年ヵ十七、洛東黑谷山中に葬る（平安墓所集、畫家人名詳傳）

ヒネノ　タカヨシ　日根野高吉　弘就の子なり天正中從五位下に叙せられ織部正と稱す十八年豐臣秀吉に小田原に從ひ八月信濃高島城を賜ひ邑二万八千石を食む秀吉薨ずるに及びて德川家康に仕ふ慶長庚子夏六月卒す子吉朝（野史）

ヒネノ　ヒロナリ　日根野弘就　美濃の人なり姓は藤原氏、祖は景盛、五郎左衛門と稱す父は某九郎左衛門と稱す世々美濃に住す弘就備中守と稱し齋藤道三に隱す天文十一年土岐頼芸を大桑城に護ふ後義龍龍興に歷仕す永祿六年氏家友國、稻葉長通、伊賀範俊等叛し織田信長に通じて內應を約す弘就謂へらく信長來り伐たば則ち龍興死を免れずと乃ち人を小谷に遣はして救を淺井長政に乞ふ長政壁惑す弘就盟書を送る長政意を決す八月信長稻葉山城を攻む弘就龍興に請ひて先鋒となり兵を路に伏せ津田信成村井盛持を擊ちて大に之を破る信長兵を收む弘就亦戰を能め兵を收む龍興の國を去るや弘就及び弟彌次右衛門漂客と爲り往て長政に遯る天正元年淺井七郎を下野寨に殺し去りて虎御前山に赴き遂に信長に歸す八月信長上洛の時興越陣に在りゝ聞き意、秀吉に從ひて先登し力戰して氏宗行隆の士宮川但馬と戰ひて共に死す信長之れを聞き兄弟赴き見て悲泣し其の死を生虜に問ふ答て曰く龍興敗死するに迨び集人苦諫且つ弘就の貳心を懷くを恨みて慚悔殊に甚だしと兄弟涙を攬ひて曰く惜いかな其の心若し三旬の前に發せば則ち此の極に至らずと乃ち其の首を乞ひて厚く歛す長浜の戰ひに秀吉に屬して兄弟兵二千を領し二重堀柴を守る後ち剃髮して治部刑法印と稱す慶長七年五月卒す法名空見（野史）

ヒネノ　ヨシトモ　日根野吉朋（德川記に吉晃に作る）高吉の子なり初字を德太郎と曰ふ慶長庚子の亂に年甫めて十三德川家康に小山行營に從ひ命を受けて上田城に備ふ是の冬從五位下に叙せられ織部正と稱す慶長六年下野壬生城に徙り邑一万五千石を食む（中興盛衰記に慶長十六年故あり祿を減ぜられて壬生に徙る作る）大阪冬夏の役に從ひて首七級を獲寛永十一年五千石を加賜し府內城に徙る萬治元年（藩翰譜に明暦二年とあり）三月卒す年七十一法名月峯淨螢、淨松院と號す子なし律に依り邑を除かる（野史）

ヒネノ　アリノリ　日野有範　右中辨有信の四男皇太后宮權大進たるを以て三室戸の大進と稱す見眞大師の實父なり

ヒノ　アリミツ　日野有光　父資教に嗣ぎ顯職を歷て權大納言從一位に至る應永三十二年官を辭し薙髮して祐光と稱す嘉吉三年七月南朝の遺臣兵を擧げて皇統を恢復せんとを謀る有光密かに之に應じ九月神器を奉ひ神璽を奉じて叡山に登り小倉皇子の子空因に南兵三百餘名と與に急に禁闕を犯して國の子式部大輔左中辨從三位に至る文章博士たり又佛道を信じ山城國宇治郡日野村法界寺藥師堂を建立す永承六年二月十五日出家し法名を素舜といふ延久二年九月空因自殺し有光も亦之に死す其の子資親連座して九條の高倉に斬らる（野史）

ヒノ　ウチミツ　日野內光　大永十年二月柳本宗雄丹波に兵を擧げて藥師寺兄弟を山碕城に攻めて之を拔き三好左衛門及び弟政長等と軍を合せて官軍と大に桂川に戰ふ細川道永赤松等と往きて之を援ふ內光は道永の從父弟なり亦俱に從軍して戰ひ軍敗れて戰死す年三十九（野史）

ヒノオミノ　ミコト「ミコト」　日臣命「ミチオミノ　カネミツ」

ヒノ　カネミツ　日野兼光「フチハラカネミツ」

ヒノキエン　ウメアキ　檜園梅明　狂歌師なり姓は田中俗稱小島屋重兵衛と云ふ江戸馬喰町の商家に生る幼時より文事を好み後臥龍園椿麿の門に入りて狂歌を學び春友亭門住と號す後ち長谷川町に住みて業餘深く斯道を究め遂に一家をなして檜園梅明と改め檜側の棟梁たり名流の門人多し其の詠出する所の歌は幽玄體を好みて自ら天保調と唱へ一派を起すまた月並會を催して數多の集冊を出版したり安政六年十一月九日年六十七にして歿す深川御船藏前町淨土宗四光寺に葬る（古今狂歌人物誌）

ヒノ　クニミツ　日野邦光「フヂハラクニミツ」

ヒノクマ　イホノシタ　シロシメス、イリヌノ　ミヤニ　テンワウ　檜隈盧入野宮御宇天皇「センクワテンワウ」

ヒノ　シゲミツ　日野重光　其姉妹並に將軍足利義滿及び義持に配偶し外戚の故を以て大に家門を隆興し權勢甚だ振へり應仁二年三月薨ず年四十四（野史）

ヒノ　スケアキ　日野資明「フヂハラスケアキ」

ヒノ　スケトモ　日野資朝「フヂハラスケトモ」

ヒノ　スケナリ　日野資業　從二位參議有國の子式部大輔左中辨從三位に至る文章博士たり又佛道を信じ山城國宇治郡日野村法界寺藥師堂を建立す永承六年二月十五日出家し法名を素舜といふ延久二年九

月二十四日薨ず年八十三

ヒノスケヒデ　日野資秀　柳原光愛の五男なり、一旦北小路隨光の養子となりしも明治十六年離縁となり更に日野資宗の養子となり十七年伯爵を授けられ明宮勤務仰付けらる二十一年明宮御用掛となり同時に英國に留學を命ぜられ二十七年歸朝して東宮侍從となりしも二十八年之を辭し後貴族院議員に當選す三十六年十一月二十三日病を以て逝く年四十一病危篤に臨み特旨を以て位一級を進め正三位に叙せらる

ヒノテルスケ　日野輝資　天正元年七月將軍義昭兵を起して織田信長を討ち輝資等をして三條第を守らしむ輝資軍遂に敗れて信長に降る後ち信長東大寺の文庫を開きて蘭奢待香木を伐り〻時輝資勅を奉じて之れに花も慶長十二年五月薙髪して唯心と號す性雅を好み茶道を千利休に學びて能くす家に屠蘇茶入及び廣東帛を藏む其名世に高し十六年六月六十三にして卒す（野史）

ヒノトヨミツ　日野豐光　姓は藤原氏、權大納言資康の子にして烏丸光康に於て曾祖父たり權中納言に任ぜられ院執權及び檢非違使別當を兼れ應永二十七年十月故なくして武家の爲めに幽せらる後ち遂に出家して名を祐通と稱す永享元年二月薨ず時に年二十二特命あり應永三十年落飾以前の日次を以て權大納言を追贈す之を烏丸氏の祖と爲す（野史）

ヒノミヤヒノヤギハヤヲノカミ　火宮「タカコ」　火之夜藝速男神　伊奘那岐尊の第十八子なり一名火之炫毘古神又は火之迦具土神と曰ふ火を司る傳（曰ふ此の神生るる時母尊陰を焦し病みて歿す父の尊怒りて此の神を斬る刀尖の血迸りて磯に濺ぐ化して神となる即イハサクノカミ及びネサクノカミ及イハツ〻ノチノカミ是なり鏑より滴る血亦神と化す即ミカハヤビノカミ及びヒハヤビノカミ及びタケミカヅチノカミ是なり又柄より滴る血亦神と化す即クラヲカミノカミ及びクラミツハノカミ是なり其頭より生る〻神をマサカヤマツミノカミと曰ひ胸に生る〻神をオクヤマヅミノカミと曰ひ陰より生る〻神をクラヤマヅミノカミと曰ひ左の手にシギヤマツミノカミを生む右の手にハヤマツミノカミを生む左の足にハラヤマツミノカミを生む右の足にトヤマツミノカミを生ずと（古事記）

ヒノヌノオトド　ソウヅ　檜尾僧都「ジツエ」　枇杷大臣「フヂハラナカヒラ」

ヒハク　未白「サカキビハク」

ヒハクヨウ　未陌「サクラダビハク」

ヒハクヨウサイキン　未白翁「タカタビハク」

ヒハノサダイジン　琵琶齋院「テイシ」　枇杷左大臣「フヂハラナカヒラ」

ヒハスヒメ　日葉酢媛　垂仁帝の后なり丹波道主王の長女、垂仁帝狹穗姫皇后の言を納れ十五年二月を以て后及び四妹を召して宮に入れ八月日葉酢媛立て皇后と爲り三妹并に妃となる獨り竹野媛醜なり遣はして家に歸らしむ竹野媛意甚だ愧づ行きて葛野に至り自ら奥より墮ちて死す因て其の地を名けて蹴國と曰ふ三十二年七月皇后崩ず是より先き帝人を以て殉死せしむるを禁ず此に至りて土物を作りて代殉す時に建眞利根命石棺を獻ず挾木之寺間陵に葬る皇后五十瓊敷彦命、景行帝、大中姫命、大中津日子命、倭姫命、難城瓊入彦命を生む（大日本史）

ヒハダイナゴン　枇杷大納言「ミナモトノブミツ」

ヒハツヨウチュウナゴン　枇杷中納言「フヂハラアツタダ」

ヒハドノキサキ　彼髪翁「カウヅキケイエキ」

ヒハヤビノカミ　枇杷殿「フヂハラカズコ」　煤速日神　カクツチノカミの子となす（日本紀）

ヒビオトキチ　日比乙吉　愛知縣縣出身にして陸軍借上船金城丸に乘組み三十八年八月二十二日周防灘航行中外國船パラロング號と衝突の際溺死す

ヒビジャウケイ　日比常慶　權十郎と稱す狩野派の畫人にして狩野安信の門人也（扶桑畫人傳）

ヒビジャウシン　日比常眞　狩野派の畫人なり狩野安信に學びて法橋に叙せらる（扶桑畫人傳）

ヒビトウコ　日比東湖　江戸の儒者なり平蔵と稱す文化十年九月三日歿す市ヶ谷上寺町長龍寺に葬る（江戸名家墓所一覽）

ヒビノエイキチ　日比野鋭吉　陸軍歩兵中尉なり岐阜縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て國民兵士官として歩兵第五十二聯隊附として從軍中卅八年十月二日清國盛京省安平港にて病に罹り自宅療養中卅九年三月十二日病死す

ヒビノマンジラウ　日比野萬次郎　陸軍砲兵大尉なり岐阜縣出身にして明治卅七八年日露戰役に於て第三師團野戰砲兵第三聯隊附として從軍中卅七年九月三日清國遼陽附近戰鬪の際負傷同日四八里庄第三師團第一野戰病院に於て死去す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ヒビムネタダ　日比宗忠　後宇多天皇の弘安年間の面打なり越中國日氷に住す一説に法華宗の僧なりといふ假面十作の一なりと（假面譜）

ヒビヤヒコエモン　日比谷彦右衛門　陸軍砲兵中尉なり神奈川縣出身にして明治卅七八年日露戰役に際し肇備役より召集せられ第一機關砲隊附として從軍中卅八年三月十日清國盛京省ウンガンワン村附近に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ヒフクモンキン　美福門院「フヂハラトクコ」

ヒムカノカミナガヒメ　日向髪長媛　仁德帝の妃なり諸縣君牛諸井の女、初め應神帝の時に人あり奏して曰く日向國に女子あり髪長媛と名く國色無雙と應神帝使を遣し召して之を桑津邑に居く仁德帝時に太子たり其美を見て之を悅ぶ應神帝其意を知り以て之に賜はんと欲す一日後宮に宴一髪長媛を召し席に侍せしめ指して帝に示し默を以て意を諭す帝大に悅びて答歌す既に髪長媛を得寵幸殊に渥し大草香皇子纛稜皇后を生む（大日本史）

ビンシンサイ　敏慎齋「キノシタジュンアン」

ヒンスキ　品水「キタムラタウスキ」

ヒントウ　品騰　禪僧なり傳翁と號す備後の人兒島氏に出づ幼にして俗を出て毎に生死を以て自ら策勵す十八にして南牧翁に圓通寺に謁す翁之を器とし鍛錬を加ふ翁に從ひ普門寺に住す一夜月の蔗花に映ずるを見て惺悟し偈を呈して善と稱せらる印記を受く辭し去て紛里に還る檀越法悅寺を築て居らしむ圓通寺席を虛うす諸山騰を舉ぐ四方玄學の徒群聚す將軍足利義尙田莊を寄せて僧籍を賁く延德四年正月六日逝す年六十九（洞上聯燈錄）

ヒンラクサイシンザウ　貧樂齋「シヤウケイ」　氷室新藏　陸軍歩兵大尉なり栃木縣出身にして明治卅七八年日露戰役に際し歩兵第四十三聯隊附として從軍中卅七年八月八日清國盛京省小孤山に於て戰死す戰功に依り勳五等功五級に叙せらる

ヒムロトヨナガ　氷室豐長　尾張の和學者なり椿園と號し兵治と稱す後に兵庫と云ふ實は松井氏桂園の門人なり文久元年歿す年八十桂花餘香、芳野日記、須磨日記等の著あり

ビメウ　微妙　舞妓なり本と良家の子、鎌倉に儒寓す時に源頼家比企能員の家に寓す能員微妙をして歌舞せしむ態度絕妙觀る者歎稱す能員頼家に白して曰く舞女は本と京都の人なり事を幕府に訴へんと欲す願くは公親ら之を問へと頼家其故を問ふ微妙潸然として淚を下し泣て曰く亂きに建久中姿の父右兵衛尉爲成謫に因て罪を獲蝦夷に竄せらる母も亦憂を以て終る姿時に七歲旁ら親戚の憐顧すべきなし年稍〻長ずるに及びて鈗慕益〻切なり而して父の消息を聞くに緣なし故に曉拔を幕府に執る願くは哀恤を賜へと頼家惻然滿堂酸鼻す頼家の母政子深く其の孝志を感じ即ち使を陸奥に遣して爲めに之を搜訪す至れば則ち父既に配所に歿す微妙之を聞き慟哭して幾んど絕す遂に薙髪して尼と爲り更に持遵と名づく政子特に之を憐み居宅を授けて厚く撫存す（大日本史）

ビメウコウ　微妙公「マヘタトシツネ」

ヒメコソノヤシロ　比賣語曾社　大阪と豐前國前郡とにあり任那の人都怒我阿羅斯等嘗て牛を失ふ村人之を屠て食ふ阿羅斯等償を求む村人其の求る所を問ふ曰く村社の神を得んと乃ち一白石を得て還る白石美麗の少女に化す遂に東に去る阿羅斯等之を逐ふて日本越前角鹿の笥飯浦に來る少女は即ち比賣語曾の神なり（筆仁紀）

ビメタタライスズヒメ　媛蹈鞴五十鈴姫　神武帝の后なり事代主命の長女母を玉櫛姫（一名夜陀多良媛）と曰ふ（初の名は富登多々羅伊須々岐姫と曰ふと云へるは誤なるべし何となれば媛蹈鞴は母の名の勢夜陀多良に取り五十鈴は地名に取りたるなればなり）庚申歲八月神武帝正妃を立てんとし廣く華胄に求む大久保命奏するに后の國色を以てす爲に媒して九月納れて正妃と爲す帝即位の元年正月皇后と爲す彦井耳命、神八井耳命、綏靖帝を生む綏靖帝位に即尊び皇太后と曰ふ（大日本史）

ヒメノミチトシ　姫野通俊　陸軍二等軍醫なり愛媛縣出身にして明治卅七八年日露戰役に際し豫備役を以て歩兵第廿二聯隊附として從軍中卅七年八月十九日清國盛京省大孤山附近に於て病に罹り同九月廿五日龍頭戰地定立病院に於て死去す

ヒヤウブ　兵部　肥後國田買の刀匠にして天正年間の人なり（古今鑑治銘早見出）

ヒヤウエノジョウ　兵衛尉　大和當麻國行を看よ

ヒヤウエノナイシ　兵衛内侍「ウヒヤウエノツボネ」

ヒヤクアン　百庵「シュクワウヒヤクアン」

ヒヤクカ　百可　俳人なり京都祇園円小路に居て蹴を嗣ぐ明治廿二年六月十三日歿ず（三森松江氏寄）

ヒヤクキ　百龜「トミカハフサノブ」

ヒヤクキ　百龜「コマツヤヒヤクキ」

ヒヤクワクヱン　百鶴園「キイン」

ヒヤクサイ　百濟「ワタナベヒヤクサイ」

ヒヤクシダウ　百齋「マキボクセン」

ヒヤクジュケン　百壽軒「タナカハウシン」

ヒヤクセツ　百拙　畫僧なり名は元養百拙は其字、釣雪、元稼、莽庵と號す洛西泉谷海雲山法藏寺の開基なり京師の人初め黃蘗に入りて僧となる近衛家熙歸依して常に屢〻對話す遂に一字を開かしむ詩歌茶事及び畫を能くす蘭の圖多し寛延二年二月三日叙す年八十三破草鞋、釣雪問稿、莽庵文集、西山晚草等あり（扶桑畫人傳、鑒定便覽）

ヒヤクセン　百仙「イナダヒヤクセン」

ヒヤクセン　百川「イヒダヒヤクセン」

ヒヤクセンダウ　百川「サカキヒヤクセン」

ヒヤクタ　百太　江戸の俳人なり通稱を加賀屋長兵衛と稱す百太と號す

ヒヤクダウ　百堂「タナベヒヤクダウ」

ヒヤクネン　百年　仙臺の俳人なり清光院法印と稱す修驗者なり（萬家人名錄）

ヒヤクフクダウ　百福堂　美濃の畫家なり佐々木氏美濃の人篆刻を能くし萬年と號す曾て山水中畫塔八万を作る因て八万行者と號す（鑒定便覽）

ヒヤクフチドウジ　百不知童子「ジウン」

ヒヤクホウ　百峯「ヤナガハセイガン」

ヒヤクマン　百萬「ヲグリヒヤクマン」

ヒヤクライ　百懶「ギヲンシヤウレン」

ヒヤクリ　百里「タカノヒヤクリ」

ヒヤクレンシ　白蓮子「カノタンイウ」

ヒヤナギサンシウ　日柳三舟　讃岐國高松の人名は政愿三舟は其號なり又碧山草堂小孤山一草亭等の人名は政愿三舟は其號なり大阪に移住し府の學務課長となる詩文書畫篆刻筆等に通ず官を辭し後北桃谷に實業學校を興して子弟を敎養し涙華文會を創めて敎科書の出版に從事せられしが學制の改革に及び其業を廢せり明治三十六年七月二十三日肺患を以て死す年六十同倍野墓地に葬る

ヒヤマタンサイ　樋山坦齋　鑒定家なり名は義愼字は德忠盤松軒と號す天保十三年九月十六日歿す年六十九（名人忌辰錄）

ヒヨウクワ　氷花　俳諧師なり風雪の門人句あり曰く「尼寺のすあたますごき涼み哉」（俳林小傳）

ヒヨウケイ　氷計「ナガサハロセツ」

ヒヨウコ　氷固「マツモトヒヨウコ」

ビライ　眉來「キタガハゲンバク」

ヒライ　飛來一閑　支那の西湖飛來峯下の人なり朝聲齋と號し又金剛山人蘚々子と號す寛永年間菩珥養寛等と共に歸化して京都に來り飛來も亦氏となす性風雅にして茶事を嗜み點茶家元伯宗旦等と交ぜり傍ら種々の漆器を製す每器の底に飛或は閑の一字を誌す其の製或は糕の面に紙を覆ひて之を螫りたるあり或は紙糕にして漆せしものあり世これを一閑張といふ晩年大德寺の清嚴和尚に醫依し禪學を修め傍ら書畫を善くす明暦三年十一月廿日歿す年八十紫野大德寺中高桐院に葬る子孫笹屋才兵衛と稱し世々京都出水油小路四へ入町に住せり（工藝志料、古畫備考、漆工傳統記、工藝鏡、繪師傳）

ヒライヅミ　オニツラ　平泉鬼貫　俳人なり興憲右衛門と云ひ又三郎兵衛と稱す或は曰く本姓は加藤井氏改めて上島とす鬼貫と號す攝津伊丹の人家醸酒を業として萬金を巢ぬ松江維舟に從て俳諧に長じ又小說を嗜しみ著はす所數種あり恒に產業を事とせず故を以て數歲にして家產蕩盡して一錢だも留めず乃ち去りて郡山侯の賤卒と爲り短衣草履奔走して役を執る人其の俳諧を善くするを知らず既にして苦に堪へず俳歌一首を壁に題して逃れ去る浪華に至りて赤貧洗ふが如く人の爲めに按摩して日に數錢を得以て自ら給す妻一女を生みて死す與憲鏢困して自殺せんと欲す女泣きて之を止む適ゝ友人路過と云ふ者の過ぎるに會し大ひに憫みて爲めに之を贖はす元文三年八月二日歿す年七十八歲未だ幾ばくならずして名大に著はれ其名を冒して諸州に遊歷し以て厚貲を獲る者あるに至ると自休庵樗花翁佛見馬樂堂の別號あり（俳諧奇人談、譚海）

ヒライハ　センザン　平巖仙山　加州侯の儒官なり名は桂字は仙桂、字を以て通稱と爲す仙山は其號又其の居る處を忘筌と號す一柳研覽顏齋は皆其の別號京都東山の人加州侯に仕へて祿三百石を食む仙山經史百家の書に涉獵す侯游獵する每に從ひ行きて詩を作らしむ仙山乃ち筆を下し讀々數十言立ち所に成る侯嘗に還るに迨び仙山詩藁を帙け數十首を上る侯喜色あり仙山人と爲り恬靜自ら養ひ閨閤以て華名を鬻ぐを欲せず夙に隱遁の志あり故を以て公事有らざれば門を杜ぢ書を讀む寛文十二年（一に十三年に作る）遂に致仕して故郷東山に歸隱す侯憫を垂れて二十口を賜ひ隱栖の糧を扶く著す所忘筌寮鑒桐集六卷あり（燕臺風雅）

ヒライハ　チカヨシ　平岩親吉　親重の子にして小字を七之助と稱す姓は物部氏、三河の人なり德川家康幼にして駿府に在るや親吉亦幼童為以て常に左右に近侍す長ずるに及びて武器度量あり且仁愛寬厚にして世子信康の傅となる武田氏亡び甲斐の目代と爲る時に前亡の遺類未だ平らがず國人騷擾たり親吉乃ち新附を撫綏し諸民を愛育し一州戚なり平らぐ天正十三年親吉眞田昌幸か沼田城に攻め利あらずして郤く六年四月從五位下に叙せられ主計頭と稱す十八年諸將と與に岩槻城を攻め又築井城を攻めて之を下だす是秋上野の廐橋城に封ぜられ邑三萬石を食む（藩翰譜に一萬石に作る）慶長庚子の亂親吉小山の軍に從ひ廐橋城に在りて山東軍國の事を監す慶長八年公子義直甲斐國に封ぜらるる親吉之れが傅となり府中の田六萬石（逸史に十萬石に作る）を領し城墓を修築す十二年夏義直尾張に轉封せらるゝに及び親吉亦尾張犬山城に徙り邑十萬石を食み義直に代りて國事を執る而して十六年十二月卒するに作る）法名道萬石を以て公事には即ち簪早あり私事には即ち貴賤なしと稱す暇あれば儒書を繙く幾くもなく秀才の名藩中に聞え天狗小僧の名あり是に於て藩命じて藥園附の賤吏となし實地に就て藥草を知らしむ初て名を改めて平賀源内と稱す居ること五年歲猶ほ弱冠一日自ら請ふ吾れ此藩の重臣眞田宇右衛門に事へて茶坊主となる時に休蹤と稱す暇あれば儒書を繙く幾くもなく秀才の名藩中に聞え天狗小僧の名あり是に於て藩命じて藥園附の賤吏となし實地に就て藥草を知らしむ初て名を改めて平賀源内と稱す居ること五年歲猶ほ弱冠一日自ら請ふ吾れ此藩を辭して親吉子なだし、家康の子秀忠因りて親吉終に臨み自ら義直の傅たり親吉子なし終に其の祀を絕つと云ふ（野史）

ヒライハ　ヒデエ　平岩親吉　親重の子にして小字を七之助と稱す姓は物部氏、三河の人なり德川家康幼にして駿府に在るや親吉亦幼童為以て常に左右に近侍す長ずるに及びて武器度量あり且仁愛寬厚にして世子信康の傅となる武田氏亡び甲斐の目代と爲る時に前亡の遺類未だ平らがず國人騷擾たり親吉乃ち新附を撫綏し諸民を愛育し一州戚なり平らぐ天正十三年親吉眞田昌幸か沼田城に攻め利あらずして郤く六年四月從五位下に叙せられ主計頭と稱す十八年諸將と與に岩槻城を攻め又築井城を攻めて之を下だす是秋上野の廐橋城に封ぜられ邑三萬石を食む（藩翰譜に一萬石に作る）慶長庚子の亂親吉小山の軍に從ひ廐橋城に在りて山東軍國の事を監す慶長八年公子義直甲斐國に封ぜらるる親吉之れが傅となり府中の田六萬石（逸史に十萬石に作る）を領し城墓を修築す十二年夏義直尾張に轉封せらるゝに及び親吉亦尾張犬山城に徙り邑十萬石を食み義直に代りて國事を執る而して十六年十二月卒するに作る）法名道萬石を以て公事には即ち簪早あり私事には即ち貴賤なしと

に非ず凡そ國に守護を置くは緩急に備へんが爲めなり吾子賊の爲めに破らるゝは豈に平素警備なく居守厥の職を失ふに非ずや賞罰我が權衡に在り豈に希求すべけんやと遂に之を賞せず後源義經に從ひて平氏を西海に擊ち功を以て相摸守に任ぜらる後駿河武藏守を經て修理權大夫に叙し院昇殿を聽され正四位下に至る子惟信（大日本史）

ヒラガ シャウザブラウ 平賀正三郎 陸軍歩兵中佐なり島根縣出身にして明治廿七八年日露戰役に際し少佐を以て第七師團歩兵第二十五聯隊附として從軍中廿七年十二月五日旅順要塞二〇三高地に於て戰死す戰功に依り中佐に昇任じ勳四等功四級に叙せらる

ヒラガ セウザイ 平賀蕉齋 安藝の儒者なり名は廉藏字は子英、白山集の著あり

ヒラカタ ヘイザウ 平方兵三 陸軍歩兵中尉なり佐賀縣出身にして明治廿七八年日露戰役に際し第十師團歩兵第二十聯隊附として從軍中廿七年九月三日清國遼陽附近に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ヒラガ チュウナン 平賀中南 安藝の儒者なり名は晉氏、字は房父、惣右衛門と稱す周易洗心解（尙書海本辨說、周官集義、周官名物考、禮記纂義等の著あり溟花に居る松平伊豆侯稱して好古先生と云ふ

ヒラガ トウガン 平賀東嵒 京都の儒者なり名は季忍字は君成號二郎と稱す安藝の人天保九年二月廿六日歿す年八十九京都東山黑谷に葬る（平安墓所集）

ヒラガ トモマサ 平賀朝雅 義信の子なり武藏守右衛門權佐に任ぜられ正五位上に至る北條時政の女婿たり建仁三年實朝命じて京師を警衛せしむ又西國の家人に命じて遷番して京師に到り朝雅に隸せしむ元久元年平基度平盛時等兵を伊賀伊勢に率ゐて守護皆藤經俊を襲ふ實朝朝雅をして兵に將として之を討たしむ朝雅美濃路より伊勢に入り基度を富田に擊ちて之を斬り進みて安濃、多氣の壘を破り直に伊賀に赴て盛時を六箇壘に攻め數日にして之れに克つ其の黨魁若栗五郎伊勢を橫行して惡を數所に築く朝雅復た軍を伊勢に回へし連攻してみな之を殄し五郎を關小野に斬る二國遂に平定す實朝功を賞して伊勢守護に補す朝雅京師に在り畠山重忠の子重保と飲み事に因て爭鬪す朝雅の母牧氏に惡す牧氏驕悍素と嗣心を懷き時政と謀りて重忠父子を殺し遂に實朝を殺して將軍と爲さんとす事發覺す是に於て北條義時等首議して左京の將士を以て朝雅を討ましむ朝雅挾む固て時政と隙を怨怒す乃ち之を妻の母牧氏に告ぐ朝雅驚も遽色なし復た坐して子石を收め奮に納れて徐ろに奏して曰く關東の使至りて將に臣を誅せんとす事幾んど迫る臣逆ゝ所なし請ふ朝を退かんと乃ち朝雅を立てゝ將軍とし義時等首議して左京の將士を以て朝雅を討ましむ